

一般国道42号松阪・多気バイパス建設地内発掘調査報告Ⅰ

明気窯跡群・大日山古墳群

甘糟遺跡・巢護遺跡

1 9 9 5 ・ 3

三重県埋蔵文化財センター



明気高跡群全景（東から）



明気1・2号窯（東から）



明氣 1 号窆 燒成部北側壁面断面



明氣 2 号窆 焚口部断面

## 序

一般国道42号松阪・多気バイパスは、松阪市東部の古井町から多気町仁田に至る、全長約12キロの路線で、現在の国道42号線の混雑緩和とバイパス周辺の地域開発に寄与することを目的に計画されました。

ところがこの計画路線内には、私たち祖先の歴史【埋蔵文化財（遺跡）】がたくさん残っていることがわかりました。言うまでもなく、これら埋蔵文化財は地域固有の歴史遺産として、私たち祖先の生活の一端を知る唯一の手掛かりとなるもので、一度破壊してしまうと二度と復元できなくなってしまうかけがえのないものです。

三重県教育委員会では、これら埋蔵文化財の保護と道路建設との調和をはかるため、建設省など関係機関と協議を重ねてきました。その結果、バイパスの建設工事によって、どうしても保存のできない遺跡については、発掘調査記録を残すことになりました。

発掘調査は用地買収の後、工事着工に先立って平成2年度から開始されました。バイパスの早期開通をめざす櫛田川兩岸の地区は多くの遺跡が密集するところでもありました。この地区では、平成6年度までの4年間を費やし、9遺跡約3万㎡を発掘調査いたしました。この中には、鴻ノ木遺跡のように縄文時代早期前半の竪穴住居や炉跡を多数発見、完形になる押型土器が出土するなど、全国的に注目される発見もあり、多大の成果をあげることができました。

今回報告するのは、この内の明気窯跡群、大日山古墳群、甘糟遺跡、巢護遺跡の4遺跡で、松阪・多気バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書の第1分冊にあたります。今後、順次報告書を刊行していく予定です。これらの遺跡は調査後に工事が進められ、今ではその姿を見ることはできませんが、この調査報告書が各遺跡の姿を記録した唯一のものとして、古代史研究はもとより地域文化の理解と向上の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、事業の推進にあたっては建設省中部地方建設局紀勢国道工事事務所、社団法人中部建設協会、松阪市教育委員会、多気町教育委員会をはじめとする関係機関各位、地元の方々などからご理解、ご協力をいただきましたことに厚くお礼申し上げます。

平成7年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 川村政敬

# 例 言

1. 本書は、三重県教育委員会が建設省中部地方建設局から委託を受けて実施した、一般国道42号松阪・多気バイパス建設予定地内に所在する埋蔵文化財発掘調査事業のうち、平成5・6年度に整理・報告書作成業務を実施した、明気窯跡群・人日山古墳群・甘糟遺跡・果護遺跡（多気郡桑里遺構）の発掘調査報告書である。
2. 現地発掘調査および整理・報告書作成にかかる費用は、建設省中部地方建設局の全額負担による。
3. 本書に掲載した各遺跡の概要については、すでに当センター発行の『一般国道42号松阪・多気バイパス埋蔵文化財発掘調査概報』II・III・IV・Vおよび『国道42号バイパス 松阪・多気 発掘調査だより』No.3・5・6・7・9で紹介しているが、本書の記述をもって最終報告とする。なお、多気郡桑里遺構については、調査を実施した地区の小字名をとって果護遺跡と改めた。
4. 写真図版に使用した航空写真の一部は、建設省紀勢国道工事事務所より提供を受けたものである。
5. 本書に使用した地図は、建設省紀勢国道工事事務所作成の松阪・多気バイパス平面図（1：1,000）をもとに作成したほか、建設省国土地理院発行の地形図（1：25,000）、多気町作成の都市計画図（1：2,500）を使用した。
6. 本書の執筆の分担については目次に示したほか文末にも記した。編集・校正を田村が行い、伊藤克幸が全体を校閲した。本書に掲載した遺構写真は田村、野原、東、西村、宇河が、遺物写真は田村、東、西村、が撮影した。
7. 本報告書には広岡公夫、二辻利一の両氏から玉稿を賜った。
8. 本書で報告した各遺跡の記録類および出土遺物は三重県埋蔵文化財センターが保管している。
9. 発掘調査および報告書作成にあたっては、下記の諸氏からご指導・ご援助をいただいた。記して謝意を表する。なお、所属と敬称は省略させていただいた。

赤塚次郎	泉 沢良	一瀬和夫	伊藤正人	岩瀬彰利	岩中淳之	大下 明	岡田 登
奥 義次	門陣代司	加納 実	河瀬信幸	久保勝正	定森秀夫	柴垣 勇	壇原 徹
千葉 豊	富井 真	外山秀一	中里 守	楢崎彰一	成瀬正和	西田尚史	西田泰民
西山要一	野口哲也	八貫 晋	服部信博	広岡公夫	福田 昭	福田哲也	藤沢良祐
望月精司	二辻利一	矢野健一	山田邦和				

10. スキャニングによるデータ取り込みのため若干のひずみが生じています。  
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

# 凡 例

- 調査区の位置は、国土座標第VI系を基準とし、図面上の方位は座標北を用いた。  
なお、真北は座標北のN 0° 18' 44" W、磁北は座標北のN 6° 48' 44" Wである。
- 発掘調査および整理作業は、『埋蔵文化財の調査・整理・保管に関する基本マニュアル』（三重県埋蔵文化財センター 1993）に基づき実施した。本報告書で使用した遺構表示略記号は下記のとおりである。

SH 堅穴住居	SB 掘立柱建物	SA 堀	SX 墓
SZ 性格不明遺構	SD 溝	SE 井戸	SK 土坑
Pit ビット			

- 本報告書に掲載した実測図の縮尺は、原則として下記のとおりである。当該箇所のキャプションに記した。
 

1) 地形図	1:50,000, 1:25,000	3) 遺物実測図	
遺跡地形図	1:5,000	土器	原則として1:4 ただし拓影は1:3
調査区位置図	1:2,000	石器	原則として2:3
- 遺構実測図
 

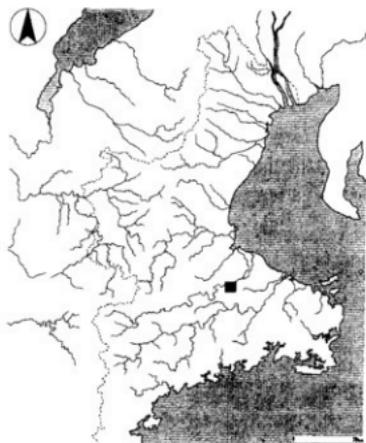
遺構平面図	1:200
遺構実測図	1:20, 1:50, 1:100
- 本報告書では、土層および遺物の色調について、小山・竹原編『新版標準土色帖』（9版1989）を使用した。
- 本報告書に掲載した遺物写真の縮尺は概ね1:3 もしくは1:2である。
- 本報告書では、用語の漢字表記を次のように統一した。

どこう……………その性格が墓と認められるものについては「土塚」「墓塚」とし、それ以外のものは「土坑」とした。

わん……………「碗」「埴」「椀」があるが、「椀」を用いた。

つき……………「坏」「杯」があるが、「杯」を用いた。

なべ……………「埴」「鍋」があるが、「鍋」を用いた。



# 目 次

I. 前 言	(田村陽一)	
1. 調査に至る経過		1
2. 調査の体制		5
3. 現地調査の方法		6
II. 位置と環境	(西村修久)	
1. 位置について		9
2. 歴史的環境		9
III. 明気窯跡群		
1. はじめに	(宇河雅之)	17
2. 遺構の分布概要	( 〃 )	21
3. 明気1号窯	( 〃 )	22
4. 明気2号窯	( 〃 )	37
5. 明気3号窯	( 〃 )	48
6. 明気4号窯	( 〃 )	56
7. 明気5号窯	( 〃 )	58
8. その他の遺構	( 〃 )	65
9. 明気窯跡群の考古地磁気測定	(広岡公夫・田中彰子)	74
10. 明気窯跡群および明気古墳群出土須恵器の蛍光X線分析	(三辻利一)	83
11. 明気窯跡群および周辺の遺跡出土須恵器の蛍光X線分析	( 〃 )	101
12. 結語	(宇河雅之)	107
遺物観察表		117
写真図版		145
IV. 大日山古墳群	(西村修久)	
1. 周辺の古墳		199
2. 2号墳		202
3. 3号墳		207
4. 4号墳		209
5. 結語		211
遺物観察表		213
写真図版		215
V. 甘糟遺跡	(田村陽一)	
1. はじめに		223
2. 遺構		224
3. 遺物		225
4. 結語		227
遺物観察表		228
写真図版		230
VI. 巣護遺跡		
1. はじめに	(田村陽一)	233
2. 調査の結果 A地区	(東 良樹)	234
A地区遺物観察表		238
調査の結果 B地区	(田村陽一)	240
3. 結語	( 〃 )	247
B地区遺物観察表		249
写真図版		252
報告書抄録		262

◆ 表紙カット ヘラ記号を有する須恵器(明気窯跡群出土)

# 挿 図 目 次

I. 前言	
第1図 路線・工区・遺跡位置図	2
II. 位置と環境	
第2図 遺跡位置図	12
III. 明気窯跡群	
第3図 遺跡地形図	18
第4図 調査区位置図	19
第5図 地区割図	20
第6図 窯跡群分布図	20
第7図 尾根上の遺構	21
第8図 調査区平面図	23・24
第9図 1・2号窯実測図	25
第10図 1号窯断面図	26
第11図 1号窯窯体床面及び灰原出土遺物実測図	31
第12図 1号窯窯体床面及び灰原出土遺物実測図	32
第13図 1号窯窯体床面及び灰原出土遺物実測図	33
第14図 1号窯窯体床面及び灰原出土遺物実測図	34
第15図 1号窯窯体床面及び灰原出土遺物実測図	35
第16図 1号窯窯体床面及び灰原出土遺物実測図	36
第17図 1号窯窯体内堆積土中出土遺物実測図	36
第18図 2号窯実測図	38
第19図 2号窯断面図	40
第20図 2号窯灰原断面図	41・42
第21図 2号窯窯体床面及び灰原出土遺物実測図	45
第22図 2号窯窯体床面及び灰原出土遺物実測図	46
第23図 2号窯窯体内堆積土中出土遺物実測図	47
第24図 3号窯整地層出土遺物実測図	49
第25図 3号窯灰原出土遺物実測図	50
第26図 3号窯灰原出土遺物実測図	51
第27図 3号窯灰原出土遺物実測図	52
第28図 3号窯灰原出土遺物実測図	53
第29図 3号窯灰原出土遺物実測図	54
第30図 3号窯灰原出土遺物実測図及び拓影	55
第31図 4号窯窯体床面出土遺物実測図	56
第32図 4号窯実測図	57
第33図 5号窯実測図	59
第34図 5号窯窯体床面及び灰原出土遺物実測図	61
第35図 5号窯窯体床面及び灰原出土遺物実測図	62
第36図 5号窯窯体床面及び灰原出土遺物実測図 拓影	63
第37図 5号窯窯体床面及び灰原出土遺物断面実 測図・拓影	64
第38図 落ち込み1出土遺物実測図	66
第39図 落ち込み2出土遺物実測図	67
第40図 落ち込み3出土遺物実測図	68
第41図 遺構出土遺物実測図	69
第42図 包含層(第1地区)出土遺物実測図	70
第43図 包含層(第2地区)出土遺物実測図	71
第44図 包含層(第3地区)出土遺物実測図	72
第45図 へら記号拓影	73
第46図 西南日本の考古地磁気永年変化と明気古 窯跡群の考古地磁気測定結果	78
第47図 明気1・2号窯出土須恵器のRb-Sr分布図	87
第48図 明気1・2号窯出土須恵器のK-Ca分布図	87
第49図 明気4・5号窯出土須恵器のRb-Sr分布図	87
第50図 明気4・5号窯出土須恵器のK-Ca分布図	87
第51図 明気1・2号群と明気4・5号群との相互識別	87
第52図 明気3号窯灰原出土須恵器のRb-Sr 分布図	88
第53図 明気3号窯灰原出土須恵器のK-Ca 分布図	88
第54図 明気1・2号群と明気3号群との相互識別	88
第55図 中尾窯出土須恵器のRb-Sr分布図	88
第56図 中尾窯出土須恵器のK-Ca分布図	88
第57図 根後2号窯出土須恵器のRb-Sr分布図	89
第58図 根後2号窯出土須恵器のK-Ca分布図	89
第59図 大仏八端1号窯出土須恵器のRb-Sr 分布図	89
第60図 大仏八端1号窯出土須恵器のK-Ca 分布図	89
第61図 根後群と大仏八端群の相互識別	89
第62図 明気古墳群出土須恵器のRb-Sr分布図	90
第63図 明気古墳群出土須恵器のK-Ca分布図	90
第64図 河田C-18号墳出土須恵器のRb-Sr 分布図	90
第65図 河田C-18号墳出土須恵器のK-Ca 分布図	90
第66図 上ノ垣外遺跡出土須恵器のRb-Sr分布図	90
第67図 上ノ垣外遺跡出土須恵器のK-Ca分布図	90
第68図 昼河古墳群出土須恵器のRb-Sr 分布図	91
第69図 昼河古墳群出土須恵器のK-Ca 分布図	91
第70図 明気窯出土須恵器のRb-Sr分布図	103
第71図 明気窯出土須恵器のK-Ca分布図	103
第72図 Na因子の比較	103
第73図 明気窯群周辺の遺跡出土須恵器のRb-Sr 分布図	104
第74図 明気窯群周辺の遺跡出土須恵器のK-Ca 分布図	104
第75図 大日山2号墳出土須恵器のRb-Sr 分布図	104
第76図 大日山2号墳出土須恵器のK-Ca 分布図	104
第77図 大日山3号墳出土須恵器のRb-Sr 分布図	104
第78図 大日山3号墳出土須恵器のK-Ca 分布図	104
第79図 大日山尾根北掘出土須恵器のRb-Sr 分布図	105
第80図 大日山尾根北掘出土須恵器のK-Ca 分布図	105
第81図 杯身・蓋分類図	114
第82図 壺分類図	115
第83図 杯身・蓋法量分布図	116
IV. 大日山古墳群	
第84図 大日山古墳群周辺の古墳	201
第85図 遺跡地形図	202
第86図 古墳分布図	203
第87図 調査区地形断面図	204
第88図 2号墳墳丘断面図	205
第89図 2号墳出土遺物実測図・拓影	206
第90図 3号墳主体部実測図	207
第91図 3号墳出土遺物実測図・拓影	208
第92図 4号墳出土遺物実測図	209
第93図 尾根北斜面採集遺物実測図・拓影	209
第94図 4号墳主体部実測図	210
V. 甘糟遺跡	
第95図 遺跡地形図	223
第96図 調査区位置図	224
第97図 出土遺物実測図	226
VI. 泉藤遺跡	
第98図 調査区位置図	233
第99図 A地区平面図	235
第100図 A地区出土遺物実測図	236
第101図 A地区出土縄文土器実測図・拓影	236
第102図 A地区出土遺物実測図・拓影	237
第103図 B地区平面図	241
第104図 B地区出土遺物実測図・拓影	242
第105図 B地区出土遺物実測図・拓影	243
第106図 B地区出土遺物実測図・拓影	244
第107図 B地区出土遺物実測図・拓影	245

# 図 版 目 次

## 明気窯跡群

P.L. 1	調査後全景	145
P.L. 2	調査前近景、調査前全景	146
P.L. 3	3～5号窯調査前全景、 調査後遠景	147
P.L. 4	1・2号窯全景	148
P.L. 5	1号窯	149
P.L. 6	1・2号窯全景、1号窯焼成部遺物 出土状況	150
P.L. 7	1号窯焼成部堆積土層断面、1号窯 焚口	151
P.L. 8	1号窯煙道付近と溝、1号窯焼成部 北側壁のビット	152
P.L. 9	1号窯焼成部断面、1号窯断ち割り 状況	153
P.L. 10	1号窯焼成部天井部断面、1号窯焼 成部床面～北側壁断面	154
P.L. 11	2号窯全景、焚口部埋積土断面	155
P.L. 12	2号窯焼成部遺物出土状況	156
P.L. 13	2号窯	157
P.L. 14	2号窯焼成部遺物出土状況	158
P.L. 15	2号窯灰原断面、2号窯焚口部	159
P.L. 16	2号窯焼成部側壁のスサ入り粘土貼 り付け状況	160
P.L. 17	2号窯と溝、同上断面	161
P.L. 18	2号窯煙道付近の溝と断面、2号窯 焚口部断面	162
P.L. 19	1・2号窯灰原調査風景、2号窯焚 口部北側壁断面	163
P.L. 20	1号窯灰原調査風景、調査後全景	164
P.L. 21	3号窯灰原検出状況、第2次調査区 (3・4・5号窯)全景	165
P.L. 22	3号窯前庭部、作業風景	166
P.L. 23	4号窯全景、作業風景	167
P.L. 24	5号窯全景	168
P.L. 25	5号窯焼成部焼台と断面、焼台	169
P.L. 26	SK16、SD4断面	170
P.L. 27	SH6・SK7、SK7	171
P.L. 28	1・2号窯間地山直上の遺物出土 状況、熱残留磁気測定サンプリング 作業(5号窯)	172
P.L. 29	出土遺物	173
P.L. 30	出土遺物	174
P.L. 31	出土遺物	175
P.L. 32	出土遺物	176
P.L. 33	出土遺物	177
P.L. 34	出土遺物	178

P.L. 35	出土遺物	179
P.L. 36	出土遺物	180
P.L. 37	出土遺物	181
P.L. 38	出土遺物	182
P.L. 39	出土遺物	183
P.L. 40	出土遺物	184
P.L. 41	出土遺物	185
P.L. 42	出土遺物	186
P.L. 43	出土遺物	187
P.L. 44	出土遺物	188
P.L. 45	出土遺物	189
P.L. 46	出土遺物	190
P.L. 47	出土遺物	191
P.L. 48	出土遺物	192
P.L. 49	出土遺物	193
P.L. 50	出土遺物	194
P.L. 51	出土遺物	195
P.L. 52	出土遺物	196
P.L. 53	出土遺物	197

## 大日山古墳群

P.L. 1	調査前遠景	215
P.L. 2	調査前近景	216
P.L. 3	調査後遠景、調査後全景	217
P.L. 4	2号墳、2号墳墳丘盛土断面と 溝状遺構	218
P.L. 5	3号墳主体部	219
P.L. 6	4号墳主体部	220
P.L. 7	出土遺物	221
P.L. 8	出土遺物	222

## 甘糟遺跡

P.L. 1	遺跡近景、低位段丘部近景	230
P.L. 2	出土遺物	231
P.L. 3	出土遺物	232

## 渠邊遺跡

P.L. 1	調査前全景、調査後全景	252
P.L. 2	B地区全景	253
P.L. 3	A地区出土遺物	254
P.L. 4	A地区出土遺物	255
P.L. 5	A地区出土遺物	256
P.L. 6	B地区出土遺物	257
P.L. 7	B地区出土遺物	258
P.L. 8	B地区出土遺物	259
P.L. 9	B地区出土遺物	260
P.L. 10	B地区出土遺物	261

# 目 次

## I. 前 言

第1表	遺跡概況	3
第2表	調査経過および予定	4
第3表	現地説明会開催一覧	7
第4表	発掘調査遺跡一覧	8

## II. 位置と環境

第5-1表	遺跡一覧表	13
第5-2表	遺跡一覧表	14

## III. 明気窯跡群

第6表	明気1号窯・上層床のNRMの磁化測定結果	77
第7表	明気1号窯・上層床の500e消磁後の磁化測定結果	77
第8表	明気1号窯・下層床のNRMの磁化測定結果	77
第9表	明気1号窯・下層床の500e消磁後の磁化測定結果	77
第10表	明気2号窯・上層床のNRMの磁化測定結果	77
第11表	明気2号窯・上層床の500e消磁後の磁化測定結果	77
第12表	明気2号窯・下層床のNRMの磁化測定結果	79
第13表	明気2号窯・下層床の500e消磁後の磁化測定結果	79
第14表	明気4号窯のNRMの磁化測定結果	79
第15表	明気4号窯の500e消磁後の磁化測定結果	80
第16表	明気5号窯のNRMの磁化測定結果	80
第17表	明気5号窯の500e消磁後の磁化測定結果	81
第18表	明気古窯跡群の考古地磁気測定結果	82
第19-1表	三重県内窯跡出土須恵器の分析値	91
第19-2表	三重県内窯跡出土須恵器の分析値	92
第19-3表	三重県内窯跡出土須恵器の分析値	93
第19-4表	三重県内窯跡出土須恵器の分析値	94
第19-5表	三重県内窯跡出土須恵器の分析値	95
第19-6表	三重県内窯跡出土須恵器の分析値	96
第19-7表	三重県内窯跡出土須恵器の分析値	97
第19-8表	三重県内窯跡出土須恵器の分析値	98
第20-1表	三重県内古墳等出土須恵器の分析データ	99
第20-2表	三重県内古墳等出土須恵器の分析データ	100
第21-1表	明気窯群および周辺遺跡出土須恵器の分析値	105

第21-2表	明気窯群および周辺遺跡出土須恵器の分析値	106
第22表	出土地別、器種別ヘラ記号一覧	110
第23-1表	遺物観察表	117
第23-2表	遺物観察表	118
第23-3表	遺物観察表	119
第23-4表	遺物観察表	120
第23-5表	遺物観察表	121
第23-6表	遺物観察表	122
第23-7表	遺物観察表	123
第23-8表	遺物観察表	124
第23-9表	遺物観察表	125
第23-10表	遺物観察表	126
第23-11表	遺物観察表	127
第23-12表	遺物観察表	128
第23-13表	遺物観察表	129
第23-14表	遺物観察表	130
第23-15表	遺物観察表	131
第23-16表	遺物観察表	132
第23-17表	遺物観察表	133
第23-18表	遺物観察表	134
第23-19表	遺物観察表	135
第23-20表	遺物観察表	136
第23-21表	遺物観察表	137
第23-22表	遺物観察表	138
第23-23表	遺物観察表	139
第23-24表	遺物観察表	140
第23-25表	遺物観察表	141
第23-26表	遺物観察表	142
第23-27表	遺物観察表	143
第23-28表	遺物観察表	144

## IV. 大日山古墳群

第24表	大日山古墳群周辺の古墳	200
第25-1表	遺物観察表	213
第25-2表	遺物観察表	214

## V. 甘糟遺跡

第26-1表	遺物観察表	228
第26-2表	遺物観察表	229

## VI. 巢塚遺跡

第27-1表	A地区出土遺物観察表	238
第27-2表	A地区出土遺物観察表	239
第28表	三重県出土の石帯一覧	239
第29-1表	B地区出土遺物観察表	249
第29-2表	B地区出土遺物観察表	250
第29-3表	B地区出土遺物観察表	251

# I. 前 言

## 1. 調査に至る経過

三重県松阪市は南北に細長い伊勢平野の中南部に位置する、人口約11万人を擁する近世城下町を母体とする都市である。近年、中南勢地方の中核都市として目ざましい発展を遂げつつあり、高速道路の開通や工業団地、住宅団地の造成など、各種の開発が盛んに行われている。

古くは都と伊勢神宮を結ぶ伊勢街道と、熊野街道の交差する交通の要所として重要な位置を占め、現在でも三重県南部の東紀州地域や南勢地域への幹線道路の交点に位置することには変わりはない。

### バイパスの建設計画

一般国道42号は和歌山県和歌山市を起点とし、紀伊半島沿岸の諸都市を連絡し、三重県津市に至る幹線道路である。東紀州方面から松阪市への入口にあたる柳田川に架かる両郡橋付近は、道路幅員が狭いため慢性的な交通渋滞に悩まされている。また、松阪市内も幹線道路の市街地集中のため、激しい交通渋滞が繰り返されており、交通環境が極度に悪化している。

これらの状況を抜本的に解消する方策として、多気郡多気町仁田から松阪市吉井町に至る延長11.9kmの、松阪市街地の環状機能も併せ持ち、さらに周辺の土地利用の拡大・工業開発の促進等、地域の活性化をも期待する一般国道42号松阪・多気バイパスが計画されたのである。

計画路線は第1図のように、9・10・11・12の4つの工区に分けられている。9工区は多気町仁田～松阪市中万町の3.1km、10工区は松阪市中万町～同市八太町の1.4km、11工区は松阪市八太町～上川町の5.0km、12工区は松阪市上川町～吉井町の2.4kmである。

バイパス建設事業は昭和59（1984）年5月4日に11・12工区が、昭和62（1987）年2月3日に都市計画決定がなされた。昭和62年度中に9工区は事業化

され、翌63（1988）年度には用地買収に着手、平成元（1989）年度には、10～12工区も事業化され用地買収も開始された。

### 埋蔵文化財の保護協議

一方、この道路建設事業にかかる埋蔵文化財保護についての調整・協議は、昭和63年11月に建設省中部地方建設局紀勢国道工事事務所から、9工区の埋蔵文化財の有無について三重県教育委員会に照会があった。これを受けて、県教育委員会文化課では分布調査を実施、9工区（3.1km）内に9カ所、面積にして38,250㎡の埋蔵文化財が存在することが判明した。この結果をもとに紀勢国道工事事務所と第1回の協議を行い、事業の全体計画の説明を受けた。文化課からは、全面が遺跡とした場合の調査期間、調査経費、必要調査員数等の概略資料を提示した。この段階では用地買収も進んでおらず、平成元年度中の発掘調査はあり得ないと判断した。そして、昭和63年12月2日付け教文第1684号で、正式に分布調査結果を紀勢国道工事事務所長あてに通知した。この時点で10～12工区の計画図面が追加提示され、予定路線内の埋蔵文化財の有無について、分布調査依頼があった。

なお、建設省から出される文化財保護法57条3による文化庁への通知はこの間に行われている。

平成元年3月から4月にかけて、10～12工区（8.8km）内の埋蔵文化財分布調査を、新設の三重県埋蔵文化財センターで実施した。その結果5カ所、29,300㎡の埋蔵文化財の存在を確認し、平成元年5月9日付け教理第72号で紀勢国道工事事務所長あてに通知した。

このような経緯を経て、7月には第2回目の協議を行った。当センターから分布調査の結果並びに各遺跡の状況等の説明を、建設省からは用地買収状況の説明が行われた。そして、建設省側から平成2年



第1図 路線、工区、遺跡位置図 (1:50,000) (国土地理院 松阪・国東山 1:25,000)

番号	遺跡名	所在地	確認面積㎡	現状	種類	時代	概 要	工区
1	明気塚跡群	多気町相可字明気	2,000	山林	散布地 墓跡	古墳	平成4～5年度調査。須恵器5基、竪穴住居等を確認。	9
2	明気古墳群	多気町相可字明気	900	山林	古墳	古墳	平成3年度多気町教委試験で7号墳確認。協議の結果、多気町教委が調査を実施。	
3	甘糟遺跡	多気町荒崎字甘糟	2,650	畑	散布地 水田	中世	平成3年度試掘調査。後世の開墾等で削平され本調査除外地となる。	
4	菓濃遺跡	多気町荒崎字菓濃	7,500	水田	散布地	古墳～中世	平成5年度調査。旧称【多気郡奈良遺蹟】。明確な奈良遺蹟は確認できず。	11
5	上ノ畑外遺跡	多気町荒崎字上ノ畑外	6,000	畑	散布地 墓跡	縄文 古墳～中世	平成5～6年度調査。縄文～中世の遺構・遺物を検出。	
6	新徳寺遺跡	多気町相可字新徳寺	2,400	畑 水田	散布地	縄文・中世	平成6年度第1次調査。縄文時代後期前葉の竪穴住居や土坑を多数確認。同時代の遺物多量に出土。	
7	湯ノ木遺跡	松阪市射和町字湯ノ木・水引橋・久保田	11,200	水田 宅地	墓跡	縄文 古墳～中世	平成2～6年度調査。縄文時代早期、弥生、古墳、奈良～平安時代の墓跡、墓跡等を確認。	12
8	朱中遺跡	松阪市射和町字朱中	5,200	水田	墓跡	縄文 古墳～中世	平成3年度調査。奈良～平安時代の墓跡確認。	
9	朱中古墳	松阪市射和町字朱中	400	山林	古墳	古墳	平成2年度試掘調査。後世の開墾等により墳形等不明。須恵器形跡、壺片、円筒地輪片が出土。	
10	中野前遺跡	松阪市上川町字中野前・八王子	4,200	水田	散布地	中世	平成6年度試掘調査。遺構は確認できず。遺物は客土からのため、本調査に至らず。	11 工 区
11	甘子遺跡	松阪市上川町字甘子	3,700	水田	散布地	中世	平成7年度調査。ピット、溝などを検出。仕場整備事業時にかなり削平か。	
12	畑町遺跡	松阪市朝田町字畑町・平田・善吉	9,200	水田	散布地	弥生～中世	平成6年度調査。弥生～古墳時代の遺構を多数確認。銅器形土製品などの遺物が多量に出土。	12 工 区
13	御堂山遺跡	松阪市西野々町字御堂山	8,100	水田	散布地	奈良～中世	平成4年度試掘調査。遺構・遺物ともに確認できず、本調査除外地となる。	
14	山ノ花遺跡	松阪市古井町字山ノ花	4,100	水田	散布地	中世	平成7年度調査。遺構密度が薄く、遺跡の縁辺部か。	
15	大日山古墳群	多気町荒崎字大日山	600	山林	古墳	古墳	平成5年度工事中発見。直径約20m、高さ約2mの円墳。玉体部なし。他に丘陵斜面に玉体部2基。	9 工 区

第1表 遺跡概況

度から試掘調査を、3年度から本格的な調査を開始してほしい旨の要望が出された。

8月には当センターから、試掘調査の面積とその具体的方法について建設省に提示したが、しばらく進展はみられなかった。

年が改まった平成2（1990）年2月13日に第3回目の協議が行われた。この協議では9工区の用地買収状況が主課題となり、この場で建設省より再度、平成2年度からの発掘調査開始の要請があった。これを受けて、3月に当センターと建設省の間で全体計画や調査体制などの具体的な最終協議を行い、さし迫った期間と予算枠の中で、平成2年度から部分的に発掘調査を開始することを決定した。これによって、当面は第9工区の現地発掘調査のみを対象にし、2年度は試掘調査として2,000㎡と本調査を2,000㎡の計4,000㎡を発掘調査することとし、調査担当職

員を2名あてることが決まった。

以上のような経過を経て、平成2年度には当センター管理指導課内に2名の松阪・多気バイパス担当職員を配置し、事業地内の発掘調査を開始するに至った。

#### 発掘調査事業の開始

平成2年度に入って本格的な発掘調査事業に着手をした。

建設省から受託する調査事業として、すでに昭和59（1984）年度から国道1号龜山バイパスの、昭和63（1988）年度から国道23号中勢道路の埋蔵文化財発掘調査が実施されてきており、調査体制などについては先行する二者と同様の方式をとることになった。（調査体制については後述する）

平成2年4月1日付けで三重県知事と建設省中部地方建設局長との間で業務委託協定が結ばれ、同時

に前二者と(社)中部建設協会理事長を交えた三者による業務分担協定も締結した。また、三重県知事と建設省中部地方建設局長との間で平成2年度の業務委託契約書を取り交わし、いよいよ現地発掘調査の幕が開いた。

なお、6月には松阪市中万町の県道脇バイパス用地内に仮設プレハブを建設し、『一般国道42号松阪・多気バイパス埋蔵文化財発掘調査整理所』として以後の日常的な調査活動の基地とした。この仮設プレハブは遺物整理作業などの日常業務遂行には狭いなど種々の問題があり、平成3(1991)年9月に廃止し、同市射和町の鴻ノ木遺跡第2次調査地跡地に、9工区全体の調査で出土する遺物量や、必要人員などを考慮した規模の新プレハブを建設した。

#### 発掘調査の期間

すでに述べてきたように、計画されたバイパスは9～12工区というように全体が4つの工区に分けられており、全体の具体的計画や用地買収などにつ

て、不確定要素が大きいまま発掘調査に入らねばならなかったことから、建設省との二者協定や、(社)中部建設協会を交えた三者協定などについても、中途で見直しや変更が必要となった。つまり、当初の協定では事業の対象を、とりあえず第9工区の現地発掘調査のみに限定してスタートしたため、後の工事計画や用地買収の進展等に伴って新たに発掘調査が必要になった11・12工区については協定を変更せざるを得なくなった。そのため、平成5(1993)年4月1日付けで建設省との二者協定を変更した。その結果、現地発掘調査は松阪・多気バイパスの全区間を対象に平成9(1997)年度まで実施し、並行して出土遺物の整理・報告書作成を平成5年度から同10(1998)年度まで実施することになった。

この協定変更に伴って、建設省・三重県教育委員会・(社)中部建設協会の三者による業務分担に関する協定書の変更、および建設省・(社)中部建設協会の二者による協定変更も同時に行われている。

工区	No	遺跡名	調査対象面積(m <sup>2</sup> )			調査面積(m <sup>2</sup> )										備考				
			確認面積	5.4.1協定	7.3.31現在	2	3	4	5	6	7	8	9	10						
9工区	1	明気古墳群	2,000	2,900	2,900			縦	1,500	1,400	横上									
	2	明気古墳群	900	0	0														平成4年度多気町教委調査	
	3	甘糟遺跡	2,650	0	0			縦			横上								試掘調査のみ	
	4	兼盛遺跡	7,500	2,300	2,300			縦			2,300	横上							旧称 多気郡桑原遺跡	
	5	上ノ畑外遺跡	6,000	5,000	5,000			縦	1,950	3,050	縦	縦	縦	縦						
	6	新徳寺遺跡	2,400	(2,400)	1,600						1,100	縦		500	横上					
	7	鴻ノ木遺跡	11,200	13,800	12,360			縦	1,500	3,500	縦	1,300							遺構・遺物多数のため整理に3ヵ年	
	8	兼中遺跡	5,200	5,200	5,200			縦	4,900			横上								
	9	兼中古墳	400	0	0			縦											試掘調査のみ	
11工区	10	中野前遺跡	4,200	4,200	0						縦								平成6年1月工事中発見	
	11	甘子遺跡	3,700	3,700	1,600						縦	1,600							試掘調査のみ 旧称 石津遺跡	
	12	堀町遺跡	9,200	9,200	9,700					縦	3,000	3,100	3,600						旧称 東牛込遺跡	
12工区	13	飯堂山遺跡	8,100	0	0				縦										試掘調査のみ	
	14	山ノ花遺跡	4,100	4,100	1,300						縦	1,300								
範囲確認調査						622	1,052	850	452	496	96	—								
調査面積合計						1,500 ※ 850	5,360 ※ 900	5,000 ※2,321	11,450 ※2,312	9,450 ※ 397	6,000	4,100								
合計			68,150	52,800	42,760	2,122 ※ 850	6,312 ※ 900	5,850 ※2,321	11,902 ※2,312	9,946 ※ 397	6,096	4,100							※は下層面積	
調査担当職員数						2 0 2	2 0 0	2 0 2	4 1 5	3 2 5	2 3 5	2 3 3	2 5 3	0 3 3						

第2表 調査経過および予定 (範…範囲確認調査 報…報告書作成 ※は下層面積)

## 2. 調査の体制

昭和61(1986)年度以降に一般国道1号亀山バイパスで、昭和63年度からの一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査事業で採用された、いわゆる三者体制を当該事業でも採り入れた。すなわち、三重県教育委員会(受託者)は建設省(委託者)と調査に関する委託契約を結ぶ一方、建設省(委託者)は外郭団体である(社)中部建設協会(受託者)と現場作業に係る作業員の任用や労務管理、各種機材の手配等といった土工部門に関する委託契約を結ぶ。そして、国・県・協会の三者間の協力関係を明らかにするため三者で協定を結ぶことで、当該事業を推進しようという方法である。

この三者体制については、【三重県埋蔵文化財発掘調査報告100-4『山城遺跡・北瀬古遺跡』三重県埋蔵文化財センター 1994・3, pp.2~15】に詳しいので、それを参照されたい。

### 調査の体制

調査は三重県埋蔵文化財センターが担当した。平成2年度は現地調査担当が管理指導課内におかれたが、3年度以降は調査第二課第二係として独立し、当該事業の調査に専念することになった。

平成5年度からは現地調査と並行して報告書作成も開始した。報告書作成は基本的にひとつの遺跡について2年間で整理・報告する形をとり、初年度に遺物整理を行い2年度で報告書の編集・印刷・刊行を行うことにした。平成5年度は1名、同6年度は2名の職員が、第1分冊(明気窯跡群、甘糟遺跡、集瀬遺跡、大日山古墳群)の整理・報告書作成作業を担当した。

また、平成5年度からは「県教育委員会・市町村教育委員会職員人事交流実施要綱」に基づいて、松阪市および多気町両教育委員会から各1名、計2名の職員の派遣を受け、調査体制の強化、充実をはかった。以下は平成2年度から6年度の調査体制である。

### 【平成2年度】

三重県埋蔵文化財センター

所長 中林昭一

次長 森下和光

次長兼

調査第二課長 山澤義貴

主査 新田 洋

管理指導課主事 河瀬信幸

主事 小林 秀

総務課長 青木真一

総務課主事 堀内念伸、寺前秀紀

### 【平成3年度】

所長 中林昭一

次長 東谷 勇

次長兼

管理指導課長 山澤義貴

調査第二課長 新田 洋

主査 田中喜久雄

技師 野原宏司

総務課長 青木真一

総務課主事 堀内念伸、寺前秀紀

### 【平成4年度】

所長 久保富子

次長 東谷 勇

次長 山澤義貴

調査第二課長 新田 洋

主査 駒田利治

第二係長 田村陽一

主事 宇河雅之

調査補助員 河角龍典(立命館大学生)

瀬野弥知世(皇學館大学生)

塚田幸子(皇學館大学生)

奥 明子(松阪女子高校生)

高谷典子(松阪女子高校生)

総務課長 小柳 清

総務課主事 堀内念伸、寺前秀紀

【平成5年度】

所長	久保富子
次長	若林祥男
次長	山澤義貴
主幹兼	
調査第二課長	伊藤克幸
主査	倉田直純
第二係長	田村陽一
主事	東 良樹
主事	宇河雅之
主事	西村修久（多気町より派遣）
主事	小浜 学（松阪市より派遣）
調査補助員	瀬野弥知世（皇學館大学生） 塚田幸子（皇學館大学生）
総務課長	小柳 清
総務課主事	伊藤直樹、寺前秀紀

【平成6年度】

所長	川村政敬
次長	若林祥男
次長	山澤義貴

主幹兼

調査第二課長	伊藤克幸
主査兼第二係長	田村陽一
主事	東 良樹
主事	宇河雅之
主事	西村修久（多気町より派遣）
主事	小浜 学（松阪市より派遣）
調査補助員	瀬野弥知世（皇學館大学生） 塚田幸子（皇學館大学生）
総務課長	小柳 清
総務課主事	伊藤直樹、橋川 功

以上のはか室内整理員として、各種調査記録類の整理や出土遺物の整理、実測などで以下の方々の補助を得た。

谷久保美知代	白石みよ子	山分 孝子
中里 輝子	中村 敬子	広瀬 則代
山路 艶子	廣田 洋子	服部美奈子
協業 輝美		

### 3. 現地調査の方法

調査の対象となる遺跡には、縄文時代から中・近世にわたる集落遺跡や墓地跡、古墳群や須恵器窯跡群など多種多様なものがあった。そのため、統一的な調査方法をとることは不可能であり、各遺跡の性格に応じた調査方法を適宜採用した。ここでは、原則的な調査方法について示しておきたい。

#### 地区割

バイパス計画路線は9工区および11・12工区においてはほぼ南北方向をとるため、4m方眼で設定する地区杭は、各遺跡ごとに適切な道路中心杭2点を結ぶ延長方向に、北から南へ数字を、これと直交する方向には西から東へアルファベットを与え、各グリッドの北西の杭をそのグリッドの名称とした。

なお、今回の調査では100m単位で設定する大地区は設定しなかった。

#### 遺構カード

遺構カードは原則として4m×4mのグリッドご

とに作成する。略図は遺構検出後、掘り下げまでに記入することとし、遺構の重複関係、埋土の色調・状態等を明示することにした。

遺構番号はビットについては各グリッドごとに通し番号を付し、土坑、溝、竪穴住居跡などについては遺跡ごとの通し番号をつけることとした。

また、遺構を掘削した場合は、掘削の完了日と出土遺物についても、遺構カードに記入することとした。

#### 遺構略測図

遺構カードが記入されたら、掘立柱建物の検討を行うなどのため、その日内に100分の1の遺構略測図を作成する。

#### 写真撮影

遺構等の写真撮影は、原則として6×7cm版（モノクロ、カラーポジ）および35mm版（モノクロ、カラーポジ）を使用する。このほか全景や特殊遺構な

どについては、4×5インチ版（モノクロ、カラーボジ）もあわせて使用する。また、報道依頼関係に使用するカラーネガ（35mm版）も、必要に応じて使用した。

使用したカメラは、アサヒペンタックス6×7、ニコンFE2、ウィスタSP（4×5インチ版）である。

また、遺物の写真撮影にはマミヤRZ67を使用した。

#### 遺構実測

道路工事計画に関する杭はすべて国土座標に基づいている。そのため、将来予想される隣接地での発掘調査との関連が把握できるように、遺構実測は国土座標に基づいて行った。当地域は第6座標系に属する。

遺構実測は現地調査期間の短縮のため、空中写真測量を原則としつつ、遺り方実測も随時実施した。また、各遺構の遺物出土状況図など詳細な実測図はすべて手書きで行った。

なお、遺構実測図には地区杭も表示するようにした。

#### 公開・普及

現地発掘調査が終了し、遺構実測も終了もしくはほぼ終わる段階で、一般地域住民を対象に調査成果の公開と、埋蔵文化財に対する認識を深めてもらうことを目的として、可能な限り現地説明会を実施することにした。

なお、現地説明会の時には説明資料として『国道42号バイパス 松阪・多気発掘調査だより』を刊行している。

遺 跡 名	説明会開催年月日	参加人員
明気1・2号窯	平成5年2月13日	150
明気3～5号窯	平成5年7月31日	150
果 護 遺 跡	平成5年12月4日	140

第3表 現地説明会開催一覧



現地説明会（明気窯跡群）

番号	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積 (㎡)	担当者
1	明気菓跡群	多気町相可字明気	平成4 (1992) 年8月28日～9月30日 (試掘) * 10月18日～平成5 (1993) 年2月28日	530 1,500 1,400 計 2,430	田村謙一・宇河濱之 田村陽一・宇河濱之 宇河濱之・西村修久
			平成5 (1993) 年4月19日～10月29日 *平成4年6月17日～6月25日予備調査 (遺気探査)		
2	明気古墳群	多気町相可字明気			多気町教育委員会 西村修久・中里 守
3	9 甘樺遺跡	多気町荒崎字甘樺	平成3 (1991) 年8月26日～10月11日 (試掘)	144 計 144	田中喜久雄・野原宏司
4	菓遺跡	多気町荒崎字菓遺	平成3 (1991) 年8月26日～10月11日 (試掘) 平成5 (1993) 年8月23日～平成6 (1994) 年1月27日 *遺跡名を変更、旧遺跡名は【多気郡果祖遺構】	908 2,300 計 3,208	田中喜久雄・野原宏司 西村修久・東 良樹
5	上ノ畑外遺跡	多気町荒崎字上ノ畑外はか	平成2 (1990) 年7月23日～9月12日 (試掘) 平成5 (1993) 年1月28日～2月1日 (試掘) 平成5 (1993) 年8月23日～平成6 (1994) 年1月27日 平成6 (1994) 年4月18日～8月31日	68 96 1,950 *112 3,050 *64 計 5,164 *176	河瀬伸幸 田村陽一・宇河濱之 西村修久 東 良樹・下平康弘
6	新徳寺遺跡	多気町相可字新徳寺	平成5 (1993) 年7月9日～7月12日 (試掘) 平成6 (1994) 年5月23日～8月24日 *平成8年度第2次調査予定	96 1,100 *333 計 1,196 *333	宇河濱之 小浜 学・西村修久
7	滝ノ木遺跡	松阪市射和町字滝ノ木・水引橋・久保田はか	平成2 (1990) 年7月23日～9月12日 (試掘) 平成2 (1990) 年10月11日～平成3 (1991) 年3月19日 平成3 (1991) 年4月23日～5月31日 平成4 (1992) 年5月11日～8月31日 平成5 (1993) 年4月19日～8月29日 平成5 (1993) 年8月23日～平成6 (1994) 年3月31日 平成6 (1994) 年8月23日～平成7 (1995) 年1月25日	272 1,500 *850 460 3,500 *2,321 3,600 *400 2,200 *1,800 1,300 計12,832 *5,371	河瀬伸幸 河瀬伸幸・小浜 秀 田中喜久雄・野原宏司 宇河濱之・田村陽一 東 良樹・小浜 学 小浜 学・田村陽一 下平康弘・田村陽一
8	栄中遺跡	松阪市射和町字栄中	平成2 (1990) 年7月23日～9月12日 (試掘) 平成3 (1991) 年6月1日～8月24日 平成3 (1991) 年10月14日～平成4 (1992) 年3月13日 平成6 (1994) 年9月5日～9月22日	184 2,300 2,500 *900 計 5,484 *900	河瀬伸幸 田中喜久雄・野原宏司 田中喜久雄・野原宏司 東 良樹
9	栄中古墳	松阪市射和町字栄中	平成2 (1990) 年7月23日～9月12日 (試掘) 平成5 (1993) 年6月25日～8月20日	98 1,000 計 1,098	河瀬伸幸 西村修久
10	11 中野前遺跡	松阪市上川町字中野前・八王子	平成6 (1994) 年9月26日～10月5日 (試掘) *遺跡名を変更、旧遺跡名は【石津遺跡】	176	東 良樹
11	11 区 甘子遺跡	松阪市上川町字甘子はか	平成6 (1994) 年10月6日～10月14日 (試掘) 平成7年度本調査予定 *遺跡名を変更、旧遺跡名は【東平込遺跡】	144	東 良樹
12	12 廻町遺跡	松阪市藪田町字廻町・黄宮はか	平成5 (1993) 年7月19日～7月23日 (試掘) 平成6 (1994) 年8月26日～平成7 (1995) 年2月20日 平成7年度第2次調査、平成8年度第3次調査予定	356 3,000	宇河濱之 小浜 学
13	13 工 御堂山遺跡	松阪市西野々町字御堂山	平成5 (1993) 年1月26日～1月27日 (試掘)	224	宇河濱之
14	14 区 山ノ花遺跡	松阪市古井町字山ノ花	平成6 (1994) 年10月17日～10月20日 (試掘) 平成7年度本調査予定	176	東 良樹
15	9 大日山古墳群	多気町荒崎字大日山	平成6 (1994) 年4月7日～6月10日	600	西村修久・小浜 学

第4表 発掘調査遺跡一覧 (調査面積欄の\*印は下層調査面積)

## II. 位置と環境

### 1. 位置について

国道42号線松阪・多気バイパスの第9工区は、松阪市中万町と多気町仁田を弓状に結ぶ3.1kmのルートである。その間、柳田川を横断することになるが、同時に、両岸の段丘、そして段丘を見下ろす低丘陵も横切ることになる。そのルート上は、適度の水、適度の平地、適度の山林というように、人々が生活するには条件の良好な場所であったようで、様々な遺跡が存在する地域である。

奈良県境の高見山に源をもつ柳田川は、何回かの屈曲を重ねながら、東方向へと流れる。最初は山間を鋭く切るように流れるが、次第に兩岸の段丘面を広げ、当バイパスが横切る付近ではまさしく中流域の様相である。しかし、そこから2.5kmほど東方で丘陵地東端の神山にぶつかり、伊勢平野へと流れ出して下流域となる。そのポイントはまた、多気町側から佐奈川が、松阪市側から孫川が合流する所でもある。さらに、以前は柳田川の本流であったともされる敏川を分流する地点でもある。

### 2. 歴史的環境

以下、柳田川が中流から下流に流れを変えようかという当松阪・多気バイパス第9工区建設予定地域を中心にして、周辺の歴史を概観してみたい。

#### <先土器時代>

柳田川流域における人々の足跡は、古くは、先土器時代にまで遡る。それは、主にナイフ形石器の存在で確認される。当バイパス路線の付近では、柳田川左岸、松阪市中万町の上寺遺跡(52)でチャート製のナイフ形石器が発掘調査時に出土しているし、柳田川に注ぐ佐奈川の流域では、上世古遺跡(136)で採集されている。しかし、数量としてはいずれも1点のみで、遺跡の規模は小さい。対して、柳田川とは南におよそ7～8km離れて並行するように流れる宮川の流域には、当時の拠点的な遺跡ともされる大規模な出張遺跡が存在し、遺跡数も柳田川流域より

が多い。柳田川と宮川の間の外城田川流域には、踏査で数点のナイフが表採された平林遺跡(100)や三川遺跡(92)が所在し、大規模な遺跡と小規模な遺跡の中間的な規模を想定させる。

他に、先土器時代の遺物として、古墳群の調査の際に、多気町東谷C遺跡(河田古墳群)(82)で男女倉型の木葉形尖頭器が出土している。また、先土器時代の末期の細石刃が、上村池B遺跡(91)で表採されている。

#### <縄文時代>

やがて人々は、土器作りを学習し、土器を生活の中で活用し始める。その初期の時期、すなわち縄文時代草創期の土器として確実視されるものは、県内では今のところ見つかっていない。しかし、多気町坂倉遺跡(98)出土の土器片の中には、草創期末葉に位置付けられる可能性をもつものが見受けられる。一方、この時期の代表的な石器である神子柴型石斧・有舌尖頭器・木葉形尖頭器などの出土は、柳田川中流域にも点々とみられる。例えば、近畿自動車道が柳田川を横切る松阪側の段丘に上ノ広遺跡・王子広遺跡が所在し、この時期の石器がまとまって出土する。さらに、10kmほど下流の多気町側中位段丘上には牟山遺跡(70)が知られる。多気町佐奈川の流域では、フケ遺跡(107)で神子柴型石斧が、そして上タコリ遺跡(60)で完形の有舌尖頭器が単独ではあるが出土している。全国レベルでは土器の使用が確立される時期、柳田川の中流域では、まだ土器の使用が一般的ではなかったのか、それとも単に見つからないだけなのか、とにかく現段階では、当時はまだまだ石器のみの生活だったといえるようである。

しかし、縄文時代も早期になると、土器もさかんに活用されるようである。柳田川流域での早期押型文土器の出土は県内でも目立つところである。当バイパス路線内の鴻ノ木遺跡(7)をはじめ、同じ段丘に並ぶ鐘突(53)・上寺・射原垣内(48)の各遺跡や対岸の牟山・坂倉両遺跡での、わりあい狭い範囲での出土は、当時の人々の生活の拠点地域を推測させる。

もっとも、押型土器の型式を考慮すると、これらの遺跡の盛衰に時間的な差があり、その点について奥義次氏は、坂倉→鐘突→鴻ノ木→射原垣内→上寺・牟山という順序を示されている<sup>⑥</sup>。また、鴻ノ木遺跡や坂倉遺跡では伊跡や円形土坑も検出され、遺構のうちでも縄文時代早期を今日に伝えている。

次の縄文時代前期は、全系的に確認遺跡数が少なくなる。櫛田川の流域でもその傾向には変わりなく、前述の早期の遺跡群が、そのまま前期にまで発展を続ける様相は見られない。しかし一方では、勢和村のアカリ遺跡など少数ながら安定した遺跡もみられる。

縄文時代中期は、遺跡数が増加し、また出土する土器は、関東系・瀬戸内系・北陸系・東海系などのものが入り交じり、活発な地域間交流がうかがえる時期である。後半になると、地方色を加味した土器も出現するようになる。ところが、個々の遺跡の規模を見ると、小さく不安定なものが多い。櫛田川流域にも中期の土器の出土・採集地は点々と有るが、いずれも少量の土器片で、例えば田中畑遺跡(101)では、中期の土器は次期の土器に混じって数片出土しているにすぎない。また、多気町ナゴサ遺跡(112)のように、大きな川筋から少しはずれた小さな尾根に立地する遺跡もみられる。以後の時期も含めて、このような、時期による遺跡数・遺跡規模の変化は、縄文社会の構造の変化によるものなのか、単に現在の調査の限界によるものなのか、興味深いところである。

やがて、沈線と磨消縄文で特徴づけられる瀬戸内系の中津式土器が登場し、縄文時代後期が始まる。福田K2式の時期を経て、北白川上層式などの西日本系の縁帯土器が盛行する後期前葉にはまた、関東系の堀之内式の土器もよく見かける。この時期、櫛田川中流域ではその流れに沿って、勢和村宮切、松阪市王子広、多気町新徳寺(6)、松阪市射原垣内などの各遺跡が形成される。これらの遺跡は、出土土器の型式にほとんど差がなく、同時期にそれぞれの地区で集落を形成していたとも考えられる。石錘の出土が多くなり、人々は川岸に集まり、漁も始めたようである。

後期後葉になると遺跡数が減ってしまい反面、櫛

田川流域では勢和村新神馬場遺跡、宮川流域では伊勢市佐八藤波遺跡など、現在でも多数の遺物が表探できる密度の濃い遺跡がみられるようになる。櫛田川と宮川の間、外城田川の流域に所在する多気町森在川浦遺跡(114)もこの後期後葉から末葉にかけて繁栄した遺跡である。そして、つぎの晩期にまで続く様相を示す。

晩期の遺跡は、あまり目だったものは見当たらないが、当バイパス付近では下宮前A遺跡(54)や射原垣内遺跡に土器の断片がみられる。また、櫛田川が沖積地に流れ出る地点の松阪市関浄寺遺跡(36)でも土器が確認されている。

#### <弥生時代>

弥生時代になっても人々はやはり、櫛田川の段丘を好んだようである。上寺遺跡や鐘突遺跡では弥生前期の土器が出土し、また、鐘突遺跡では円形の堅穴住居も検出された。この、松阪市射和町・中万町における櫛田川から松阪丘陵の裾部にかけての段丘は、以後、古墳時代も奈良・平安時代も、中世においても、延々と人々の生活・居住に適した場所として活用されてきたことが、幾度かの発掘調査で確かめられてきている。

一方、櫛田川の右岸では、明和町神前山古墳群所在地で前期の甕や壺が出土している。そして、櫛田川をさかのぼると、近畿自動車道建設に関わって調査された花ノ木遺跡が中期の遺跡として存在する。堅穴住居と四隅の切れる方形周溝墓が検出され、東海系の縄文を施した土器が出土している。また、県立相可高校のグラウンド一帯(55)では、後期から古墳時代前期にかけての土器が昭和30年代の工事に伴って出土している。中流域の段丘上に、小規模なムラが形成されたのではないだろうか。

逆に川を下り沖積地が広がる畿川の流域に出ると、明和町金剛坂遺跡(74)・寺垣内遺跡(75)・宍富跡古里地区(73)・北野遺跡など、中期から後期にかけて大集落が営まれている。広い沖積地を背景に、大きなムラが形成されていったのであろう。同様の大集落の様相は、松阪市の草山遺跡(26)にも見られる。社会が広い範囲で組織化され、古墳を作り出す時期への準備が進んでいる現れといえよう。

さて、弥生時代の祭器として銅鐸の存在は良く知

られるところであるが、多気町四正田の丘陵裾(71)でも出土したといわれる<sup>9)</sup>。銅鐸のものが行方不明になっていることが残念である。

#### <古墳時代>

古墳時代は、主に古墳の分布で概観してみたい。

古墳時代前期の4世紀後半、古墳はまず松阪市街地に近い金剛川の流域に築かれる。久保古墳(27)、高田2号墳(30)、茶臼山古墳がそれである。また、わかっている出土品が少なく決定的な事はいえないものの、裾部で検出された円筒埴輪から坊山1号墳(29)もこの時期の古墳と考えられている。特に、久保・茶臼山の両墳は直径50mを越える規模で、三角縁神獣鏡をもつことが注目される。

5世紀になると、金剛川左岸(阪内川右岸)に宝塚1号墳(23)が築造される。この全長95mの前方後円墳は、大きさ、墳形ともまさしく首長墓の様相を示す。一方、榊田川の右岸、多気町、明和町、玉城町にまたがる玉城丘陵にも5世紀になると古墳が出現する。辺長49×38mの方形で、滑石製小型丸底壘と半円透孔のある円筒埴輪が出土している権現山2号墳(88)がそれである。

5世紀後半には、宝塚1号墳の北隣に同2号墳が、金剛川流域には大塚山古墳が築かれる。そして玉城丘陵では高塚1号・大塚1号・神前山1号(83・81・79)の各帆立貝式古墳が築造される。

以上のような4～5世紀にかけての古墳の様相、そしてそこからうかがい知れる社会状況については、下村登良男氏の論考があるので参照されたい<sup>10)</sup>。

6世紀になると、全国的にそうであるように、榊田川流域でもやはり群集墳の形成が始まる。特に玉城丘陵には、7世紀にかけて400を越える古墳が造営されている。榊田川と佐奈川に挟まれた丘陵地にも明気・立岡山・黒田山(2・67・62)などの古墳群がみられ、榊田川左岸の松阪丘陵縁辺部にも尾だけ・中万大谷・やつで(49・44・41)等の古墳群が存在する。河川流域の広い生産基盤を背景に、古墳造営の可能な集団が多数存在していたわけである。これら群集墳の個々の古墳については、墳形のうえからは円墳と方墳に大別でき、両者を比較した場合方墳は概して新しい感がある。また、埋葬施設については主に木棺直葬と横穴式石室であるが、多気町

内の榊田川と佐奈川に挟まれた丘陵上の古墳には横穴式石室は現在のところ見られず、その採用については造営集団による片寄りがあるようである。

古墳の造営は7世紀中頃まで続くようで、多気町で発掘調査された女山4号墳(89)や森出7号墳(120)はその終末の時期の古墳である。

ところで、6世紀末ごろからはこの地域でも須恵器窯の操業がみられる。榊田川以北では根後・分れ谷窯跡(25・33)が、以南では中尾・明気などの窯跡(69・1)が今日にそれを伝えるが、明気古墳群の付近には蜜柑園造成時に窯跡らしきものがあつたとも聞く。特に榊田川の右岸地域は、現在知られる窯跡以上の規模の須恵器生産地であつたようだ。

このように、古墳造営や須恵器窯の操業をみると、この地域が古墳時代末、政治的・経済的・技術的に安定充実し、賑わいをみせていたように思える。しかし、当時の集落跡は当バイパス付近では今のところ見つからない。段丘の微高地にある現在の集落と重なるのかもしれないが、今後の発見が期待される。ともあれ、この社会的エネルギーは以後の榊田川流域の歴史に引き継がれる。

#### <奈良・平安時代>

須恵器窯は、7世紀後半、外城田川沿いで操業されるようになる。原・市寄窯跡群(126・127)は7世紀後半から8世紀前半にかけての計14基の窯跡であり、製品の供給地として「斎宮」をも想定できるようである<sup>11)</sup>。

仏教の広まりに従い、8世紀には寺院の建立もなされた。松阪市では丹生寺廃寺や御麻生園廃寺、大雷寺廃寺(35)、多気町では釈尊廃寺、達鹿瀬廃寺(134)、四神田廃寺(佐奈山廃寺)(106)などで古瓦の出土を見る。同時に、瓦窯の存在もまた注目される。近畿自動車道の建設に伴い発掘調査された多気町牧瓦窯跡群は、8基の窯からなり、8世紀の初頭から中葉ごろにかけて操業していたと考えられる。4・8号窯で焼かれた瓦と丹生寺廃寺・御麻生園廃寺で出土している瓦が同范であり、生産地と供給先の関係が明かとなっている。また、同様に、西谷遺跡(橋ヶ池瓦窯)(133)と達鹿瀬廃寺・四神田廃寺の関係も考察されている。なお、瓦片が採集され、現在四神田廃寺としている遺跡については、瓦窯跡



第2図 遺跡位置図 (1:50,000)

No	遺跡名	主な遺構・遺物	備考	No	遺跡名	主な遺構・遺物	備考
1	明気窯跡群	須恵器窯5基	R42バイパス 関連	42	長谷古墳	円墳、石室	
2	明気古墳群	古墳12基	〃	43	片田古墳		痕跡墳
3	甘糟遺跡	中世土師・陶器片	〃	44	中万大谷古墳群	円墳7基、3号墳横穴式石室	
4	築港遺跡 (多気郡桑原)	平安末～鎌倉土器、石帯	〃	45	舟天宮古墳	横穴式石室	
5	上ノ巨外遺跡	縄文～鎌倉土器、大珠	〃	46	神山城跡	台状地、堀切	
6	新徳寺遺跡	縄文後期の竪穴住居・土器	〃	47	八の坪遺跡	土師器	
7	雫ノ木遺跡	縄文早期伊跡、竪穴。押型文	〃	48	射原垣内遺跡	縄文弥生古墳竪穴、家町竪立 押型文土器、石斧、古式土師	S54度 発掘調査
8	朱中遺跡	奈良～平安土器・竪立・竪穴	〃	49	尾だけ古墳群	円墳7基、5号墳須恵器杯身	
9	朱中古墳	樽形埴片	〃	50	岡山古墳	円墳	
10	石津遺跡	山茶碗・天目茶碗等埴片	〃	51	戸笠遺跡	弥生土器片、山茶碗片	S54度 発掘調査
11	東牛込遺跡	山茶碗、近世陶器等	〃	52	上寺遺跡	弥生古墳奈良竪穴住居、ナイフ、 押型文	S55度 発掘調査
15	大日山古墳群	古墳4基	〃	53	鎌突遺跡	弥生奈良竪穴住居、押型文土器	S55度 発掘調査
21	池田遺跡	石鏡・石匙・磨製石斧		54	下宮前A・B遺跡	石鏡・縄文土器片・須恵器片・ 土師器片	
22	長住野遺跡	ナイフ		55	校庭遺跡	台付礎等	
23	宝塚古墳群	1号前方後円墳 全長95m。 2号竪立式 径60m。		56	九十九戸遺跡	ササカイト片、山茶碗片	
24	上 <sup>↑</sup> 出 <sup>↑</sup> 遺跡	方形周溝、方墳、家型埴輪 ナイフ、石鏡、石匙	S41度 発掘調査	57	松木元遺跡	ササカイト片、山茶碗片	
25	根後窯址	1～3号窯、6～7C須恵		58	中万前遺跡	ササカイト片、須恵器片	
26	草山遺跡	方形周溝墓、弥生竪穴・竪立、 奈良～中世遺跡	S57～S59度 発掘調査	59	藪ノ下遺跡	ササカイト片、須恵器片	
27	久保古墳	径52.5、高6m円墳		60	上タコリ遺跡	有舌尖頭器	
28	権現山古墳群	円墳4基		61	高寺遺跡	石鏡、須恵器片	
29	坊山古墳群	円墳3基、1号墳 径40m・神 整説・円筒埴輪棺。	1号S60度 発掘調査	62	黒田山古墳群	古墳15基、石鏡	
30	高田古墳群	円墳3基、2号墳 径27m・銅 鏡・石鏡、円筒埴輪棺。		63	富ノ谷古墳群	円墳2基	
31	糞田寺廃寺	軒丸・軒平瓦		64	石山古墳群	円墳6基	
32	分れ谷遺跡	縄文土器片(中期後半～後期初 頭)。		65	石塚谷古墳	円墳。銀象眼鉄刀	H3度 発掘調査
33	分れ谷窯	窯壁一部露呈		66	倉懸古墳群	円墳2基	H4度 発掘調査
34	西野々古墳群	前方後円墳1基、円墳11基		67	立岡山遺跡群	円墳4基。中世墓群。	H3度 発掘調査
35	大富寺廃寺	軒丸・軒平瓦		68	中尾古墳群	円墳2基	
36	関浄寺遺跡	大溝、古墳竪穴、奈～平竪立	S62度 発掘調査	69	中尾窯跡	須恵器窯	S50 発掘調査
37	天王山古墳群	円墳10基。 円筒埴輪・人物埴輪、須恵器		70	牟山遺跡	尖頭器、石斧、押型文土器	S38度 発掘調査
38	西谷古墳群	円墳3基		71	50銅鐸出土地	S19年に銅鐸が出土したという	
39	山崎古墳群		S59度 発掘調査	72	狐谷古墳群	須恵器(杯身・線等)のスケッ チが残るのみ	
40	山浜遺跡	伊勢型銅、井戸	S53度 発掘調査	73	青宮跡	官衙跡の他に方形周溝墓等	国史跡
41	やつて古墳群	円墳3基、3号墳横穴式石室		74	金剛坂遺跡	縄文土器、方形周溝墓、竪穴住 居	S44・59・60 発掘調査

第5-1 遺跡一覧表

No.	遺跡名	主な遺構・遺物	備考	No.	遺跡名	主な遺構・遺物	備考
75	寺垣内遺跡	パレス堂、方形周溝墓、竪穴住居	S60・61度 発掘調査	108	サンダ遺跡	ナイフ	
76	神殿遺跡	方形周溝墓、竪穴住居、独鈷石	S60・61度 発掘調査	109	矢田城跡	土塁、台状地	
77	川原口遺跡	竪穴住居、土器焼成坑	S61度 発掘調査	110	向野遺跡	舟底形石器	
78	コドノA・B遺跡	ナイフ、有舌・木葉尖頭器、石鏃		111	南山西窯跡群	須恵器窯2基。飛鳥以降	
79	神前山古墳群	1号帆立貝、西文将神像鏡 特殊鏃、埴輪、弥生土器	S47度 発掘調査	112	ナゴツ遺跡	押雲形尖頭器、石斧、縄文中期 土器	
80	天王山古墳群	6号前方後円墳。19号 径52m 円墳。		113	ニツ山遺跡	木葉形尖頭器片、石剣片	
81	大塚古墳群	1号帆立貝式、埴輪		114	森荘川原遺跡	石鏃、石斧、土偶片、縄文後期 土器	H元・6度 発掘調査
82	河田古墳群	総数100基 現在までに52基が発掘調査済	S48・49・50・57・ 60・H2発掘	115	林中窯跡	須恵器片	
83	高塚古墳群	1号帆立貝式、埴輪		116	長安寺窯跡群	須恵器窯2基。飛鳥以降	
84	上村池古墳群	横穴式石室も多い		117	南ノ山窯跡		
85	ユブミ古墳群	2号前方後円墳		118	北の山B・C窯跡	須恵器	
86	富宮池古墳群	12号前方後円墳		119	北の山A窯跡	須恵器	
87	朝久田古墳群	円墳・方墳計24基		120	森出古墳群	7号方墳・木棺直葬・須恵長頸 壺等	S49度 7号発掘調査
88	権現山古墳群	方墳2基。2号から石製小型壺、 埴輪。		121	笠木館跡	多形連続形式、土器、空堀	S50～S51 測量調査
89	女山古墳群	4号方墳、木棺直葬。須恵器	S47度 発掘調査	122	中村ノ内窯跡		
90	坂倉古墳群	円墳4基		123	ぼりぞ山古墳群	円墳19基	
91	上村池B遺跡	細石刃		124	山神城跡	堀切、土塁、土橋	H2度 発掘調査
92	三川遺跡	ナイフ		125	泉貫窯跡	須恵器窯。10c前半	H2度 発掘調査
93	マイラ遺跡	石鏃		126	原黒窯跡群	須恵器窯11基。飛鳥以降	S38度10・11 号発掘調査
94	畑ノ田遺跡	有舌尖頭器		127	市寄窯跡群	須恵器窯3基。7c末～8c	
95	東栗遺跡	掘立柱建物。須恵円蓋鏡 緑釉風字鏡、「中臣」蓋書土器	S53 発掘調査	128	ハム谷窯跡群		
96	カウツデン遺跡	掘立柱建物、土馬、青巾 1中万丁蓋書土器	S54度 発掘調査	129	池ノ谷窯跡群	須恵器窯3基。古墳・奈良ころ。	
97	多気遺跡	石鏃		130	コノハタ遺跡	木葉形尖頭器	
98	坂倉遺跡	縄文早期伊鉢・土瓦。 押雲文土器、尖頭器、耳飾	S49度 発掘調査	131	ナゴ遺跡	石鏃、石匙、石斧	
99	長迫間A・B遺跡	掘立柱建物。須恵器、土師器	S47度 発掘調査	132	牛ハツマA・B遺跡	押雲文土器、有孔石製品	H元度 発掘調査
100	平林遺跡	ナイフ、木葉形尖頭器		133	西谷遺跡 (新ヶ池瓦窯)	軒丸・軒平瓦	
101	田中廻り遺跡	縄文後期土器	S52度 発掘調査	134	相楽瀬崎寺	軒丸・軒平瓦	
102	五佐奈遺跡	井戸、青巾	S52度 発掘調査	135	五桂池遺跡群	石鏃、石匙、石斧	
103	西山城跡	土塁、堀。伊勢型鍋	H6度 発掘調査	136	上世古遺跡	ナイフ	
104	片倉氏館跡	山茶碗等	H6度 試掘	137	近長谷城跡	堀切、平地	
105	ミノコ遺跡	井戸、石組遺構。伊勢型鍋	S59度 発掘調査	138	近長谷寺	十一面観音、資財橋	
106	四神田鹿寺	軒丸・軒平瓦		139	日向遺跡	ナイフ、木葉形尖頭器	
107	フケ遺跡	石斧、縄文早期土器		140	佐奈木銅鉱山跡	9ヵ所の坑口。S18年探鉱。	H元度2基の 坑口測量調査

第5-2 遺跡一覧表

ではないかという見方もある。

ところで、櫛田川中流から下流にかけては、飯野・多気両郡に施行された条里制の地割りがみられるところである。条は北から南に区画され、多気町津田地区あたりは多気郡の第十六条となる。里は、西から東へ数えられ、現在残る三疋田、四疋田という地名は、里数を冠するものであることはよく知られている。しかし、当地域の条里地割りは、地域全体がひとつの碁盤目で区切られるのではなく、場所によって地割りの方向性をやや異にするようである。そのことが一つの特徴ともいえ、耕地が徐々に整備された証しともいわれている。

9世紀の始め、この水田地域の一部は荘園として京都東寺に寄進された。川合荘、大國荘と称され、東寺にとっては重要な寺領であった。しかし、多気・飯野の両郡は度会部とともに古来より神三郡といわれ、伊勢神宮支配の土地でもあった。東寺と神宮とのめめごとも少なからずあったようで、10・11世紀の記録に見られる。また、多気町内にあった成願寺(はっきりした所在地は不明)と東寺の紛争の記録も残る。当時の土地支配の複雑性を垣間見ることができるといえよう。

一方、仁和元(885)年、多気町長谷の山腹に近長谷寺(138)が建立される。在地の豪族飯高諸氏による創建である。本尊の木造十一面観音立像は平安後期の作とされ、国指定重要文化財となっている。同じく国の重文指定をうけている資財候には、寄進者として藤原、橘、中臣などの貴族階級、敗、磯部、伊勢などの地方豪族と思われる人々、齋王齋子をはじめ齋宮に関わる人々、神宮の官職を持つ人々などの名が見え、中央や近隣地域との結び付きの一端が示される。

また、古代における様相の一部は発掘調査からもうかがえる。多気町河田の東裏遺跡(95)やカウジデ遺跡(96)、五佐奈遺跡(102)では奈良～平安時代ごろの土器や祭祀遺物(斎串・土馬)が出土し、掘立柱建物が検出されている。中でも、緑釉の風字硯や「中臣」と墨書された椀の出土には、この地域では一般的でない何か特別な意味合いを感じる。中央からの役人がいたのであろうか、荘園経営に関する「事務所」があったのであろうか？ また、カウジ

デ遺跡から出土した皿や椀の「中万」という墨書は、櫛田川を挟んだ松阪側の集落名である中万との関わり、同時に大國荘との関わりで興味深い。発掘調査報告書によると、中万の人々による出作の可能性も指摘されているようである。

#### <鎌倉時代以降>

武士が台頭した時代、北畠氏の支配下にあったこの地には、山城跡も所々にみられる。玉城町の田丸城の支城として重要な位置をしめた神山城(46)、外宮神御会家行が根拠地を置いたといわれる近長谷城(137)などである。また、多気町笠木の舌状台地には笠木館跡(121)が確認されている。この館跡は東西500m・南北400mの規模をもち、土塁や堀で区画された郭を連ねる構造のものである。この館の西南約1.5kmの山頂には矢田城跡(109)が所在し、山城と館の有機的な関連がうかがわれる。

神山城の北東の平地では、石積み井戸や掘立柱建物を検出し天目茶碗や土器器鍋・羽釜を多数出土した山添遺跡(40)が調査されており、また、射原垣内遺跡でも室町時代を主体とした集落跡が調査により明かとなった。多気町側では、矢田城の南西の東の平地で鎌倉～室町時代にかけての遺跡であるミゾコ遺跡(105)が発掘調査されている。これら発掘調査された遺跡及びその周辺の水田・畑の他に、三疋田や四疋田の水田地、荒跡や兄国の自然堤防上など、各所に鎌倉～室町期のもと思われる土器器細片が散布している。現在の地表とほとんど変わらないところで中世の人々も生活していたのであろう。集落などは、現在のものと多分に重なっているのではないだろうか。

#### <水銀について>

ところで、勢和村丹生を中心として採取された水銀については、少し付記しておかなければならないであろう。8世紀末成立の『続日本紀』には、文武天皇二(698)年や和銅六(713)年に伊勢国からの朱砂(辰砂)・水銀の献上の記述が見られる。伊勢の地に、丹生のほかにまとまった水銀鉱山が知られていない以上、これらの記述の水銀(辰砂)は丹生のもともて差支えないと思われる。奈良時代中頃の東大寺の盧舎那仏造営に際しては、大量の水銀が使用されているが、これも丹生産のものであろうこと

が定説となっている。平安時代後期に成立した『今昔物語集』にも伊勢國の水銀に關係する話がみられ、当時丹生の水銀鉱はよく知られたものであったようだ。中世には全国唯一の水銀産が組織されていたことが知られている。そして、丹生から櫛田川筋に約8km下流の射和の地には、水銀を原料として白粉を生産する産業が興り、江戸時代を通しての射和の繁栄につながる。

これら文献に現れるはるか以前にも、辰砂は赤彩の原料として利用されている。縄文時代後期の松阪市王子広遺跡や多気町森荘川浦遺跡からは朱彩された土器が出土しているのである。勢和村の池の谷遺跡では、縄文晩期の朱彩土器とともに、辰砂原石も出土している。

中央構造線に沿って存在する辰砂の鉱脈は、当地域に長い間“特産物”を供給し続けたのである。

(西村修久)

〔参考文献〕

- 1 『多気町史 通史』多気町 1992
- 2 『松阪市史 第二巻 資料編 考古』松阪市 1978
- 3 奥義次「多気町内の遺跡めぐり①～⑨」『広報たき』連載 1974～1976
- 4 『三重県多気郡明和町遺跡地区 明和町 1988
- 5 『第12回三重県埋蔵文化財展 三重の縄文時代』三重県埋蔵文化財センター 1992
- 6 『ふびと 34 一多気地域地域調査報告一』三重大学歴史研究会 1978
- 7 三重大学泉始古代史部会「玉城丘陵上の古墳群について」『ふびと 36』三重大学歴史教室・同研究会 1979
- 8 『三重の中世城館』三重県教育委員会 1977
- 9 『三重県埋蔵文化財センター研究紀要 第2号』三重県埋蔵文化財センター 1993
- 10 『東大寺要報』『続々群書撰 第11巻』所収
- 11 下村登良男「南勢地方の大形古墳」『八重田古墳群発掘調査報告書』松阪市教育委員会 1983
- 12 宇河雅之・奥野弥知世・塚田幸子「市寄遺跡群出土の須恵器について」『Mie history vol.7』三重歴史文化研究会 1994
- 13 河北秀実「西谷遺跡(裾ヶ池瓦窯)・康麗願勝寺・四神田庵寺採集瓦の同胎関係と想定される供給パターン」『Mie history vol.7』三重歴史文化研究会 1994
- 14 倉田康夫「伊勢湖西岸地域における桑里制の歴史地理学的考察」『桑里制と荘園』東京堂出版 1976
- 15 下村登良男・奥義次「上寺遺跡発掘調査報告書」松阪市教育委員会 1981
- 16 下村登良男・奥義次『籾久遺跡発掘調査報告書』松阪市教育委員会 1981
- 17 『射野内遺跡発掘調査概報』松阪市教育委員会 1980
- 18 新田洋「山添遺跡発掘調査報告書」三重県教育委員会 1979
- 19 『新神馬場遺跡発掘調査報告書』三重県立津高専学校地産部 1972
- 20 下村登良男『大飯堂瓦器KK三重県埋蔵文化財発掘調査報告書』

〔註〕

- ① (参考文獻1)
- ② 『伝銅産出地』として、多気町の指定文化財となっている。1944(昭和19)年秋、流水文銅師が出土したとのことであるが、写真・図等も残されていない。
- ③ (参考文獻11)
- ④ (参考文獻12)
- ⑤ (参考文獻13)
- ⑥ (参考文獻14)

- 多気町教育委員会 1974
- 21 吉木康夫「河田古墳群発掘調査報告1」多気町教育委員会 1974
- 22 下村登良男『河田古墳群発掘調査報告Ⅱ』多気町教育委員会 1986
- 23 川村輝夫他『河田古墳群発掘調査報告Ⅳ』多気町教育委員会 1983
- 24 三ッ木貞夫・谷本鏡次「多気郡多気町カウジゲン遺跡」『昭和54年度鳥羽国営歴史事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1980
- 25 増田安生『ミヅノ遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会 1985
- 26 『近畿自動車道(久居～勢和)埋蔵文化財発掘調査報告 第一分冊1』三重県教育委員会 1989・・・上ノ広遺跡・花ノ木遺跡・後岡山北遺跡・鞍馬寺遺跡・下村A遺跡 他
- 27 『近畿自動車道(久居～勢和)埋蔵文化財発掘調査報告 第一分冊2』三重県教育委員会 1989・・・牧瓦窯跡群・銀系中世墓群
- 28 『近畿自動車道(勢和～伊勢)埋蔵文化財発掘調査報告 第一分冊1』三重県埋蔵文化財センター 1992・・・佐奈水銀鉱山跡・牛バヤマA遺跡・牛バヤマB遺跡
- 29 『近畿自動車道(勢和～伊勢)埋蔵文化財発掘調査報告 第一分冊2』三重県埋蔵文化財センター 1992・・・泉瓦窯跡・山神遺跡
- 30 三ッ木貞夫・森田尚也『出張遺跡調査報告書』大台町出張遺跡調査会 1979
- 31 「多気ニュータウン埋蔵文化財ニュース」多気町教育委員会 1991 [各戸配布資料]
- 32 「多気町遺跡ニュース」多気町教育委員会 1992 [現地説明会資料]
- ・その他、『三重県埋蔵文化財年報』三重県教育委員会(昭和63年度まで)及び『三重県埋蔵文化財センター年報』三重県埋蔵文化財センター(平成元年度以降)、関係各市町村の『遺跡台帳』を参考にした。

### III. 明気窯跡群

#### 1. はじめに

##### 明気窯跡群の位置と立地

明気窯跡群は、櫛田川の中流域において発達していた河岸段丘が徐々に衰退し、沖積平野へと移行する付近の南側丘陵に位置している。浅間丘陵（北部）と称されるこの広大な丘陵は、櫛田川とその支流の佐奈川に挟まれた標高40～50mの中位段丘面で、中央構造線に対し直行する幾筋もの谷底平野と、その開析により生じた尾根筋で構成されている。

浅間丘陵の地質は、主として傾家花崗岩類・片麻岩類の分布域に属し、特に明気窯跡群付近は、花崗

閃緑岩風化土が基盤となっている。

以上の地理的条件下において、窯跡群は多気町役場から見て北東方向に派生する尾根の東側斜面に立地している。窯跡群の面する谷は、多気中学校付近に開口する、比較的大規模の小さな谷底平野の最深部にあたる。

行政区画上は多気郡多気町相可字明気に属している。

##### 窯跡群の分布

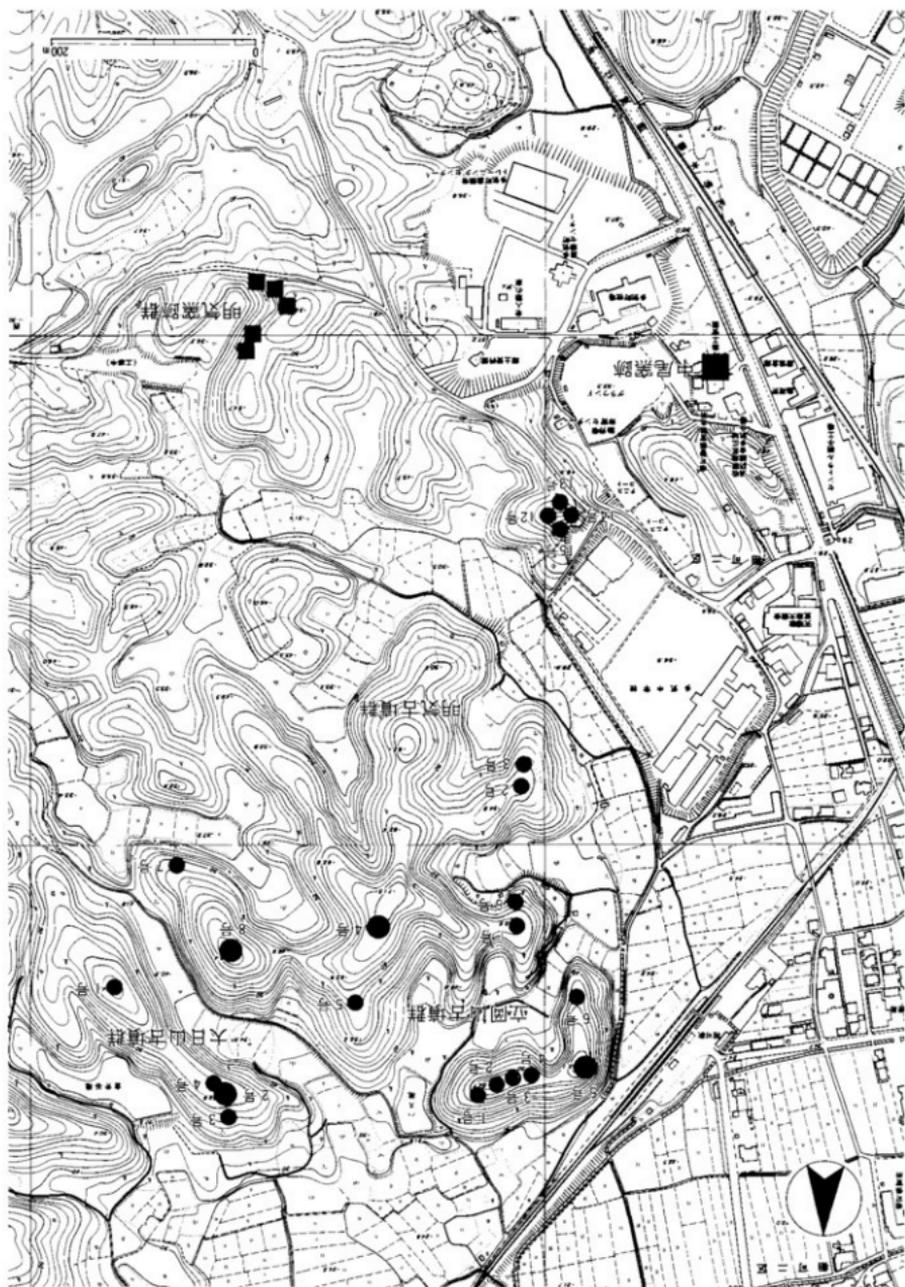
伊勢湾西岸域における須恵器の窯跡数は、未調査のものも含め、総基数は130余基にのぼる。なかでも徳居窯跡群は、鈴鹿市から安芸郡河芸町・津市にまたがる最大の窯跡群であり、38基の存在が知られている。この窯跡群は近接する種生窯跡群（2基）・岸岡山窯跡群（2基）と共に、伊勢湾西岸域北部の内核を成していたと考えられる。

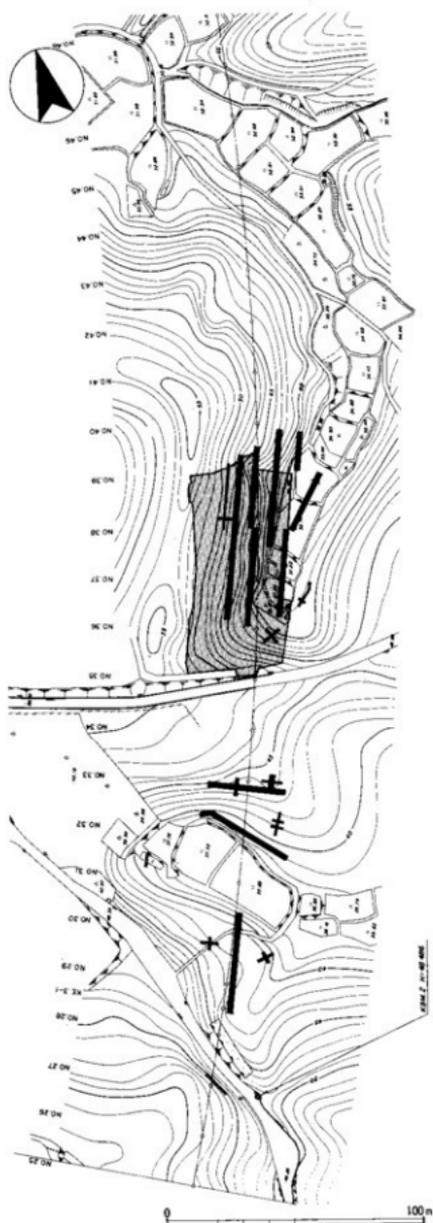
一方、伊勢湾西岸域南部においては、度会郡玉城町の原窯跡群（10基）を東端に、多気郡多気町東部に至る約4km四方において、13群35基（総じて外城田窯跡群と呼称）の分布が確認されている。西端の明気窯跡群と近接する中尾窯跡（1基）を含め県下第2の集中地域と言える。

##### 窯跡群の年代

県下における須恵器窯の出現は、5世紀後半代とされており、北勢域の種生1号窯と中勢域の久居2・4号窯がそれに該当する。その後6世紀代を経て7世紀に至り窯の基数は爆発的に増加する。そして8世紀に入りその数は減少傾向となる。こういった様相は伊勢湾西岸北部・南部の両域において一様に見

られるのであるが、9世紀以降のものについては葛明窯跡や七和窯跡群、12世紀代の岡山3・5号窯など北部域に限り存続するようである。ただ、度会郡玉城町の泉貢窯跡は、その操業が10世紀代にまで下ると考えられ、南勢地域においても、小規模ながら続けられる窯業生産が窺われる。





第4図 調査区位置図(1:2,000)

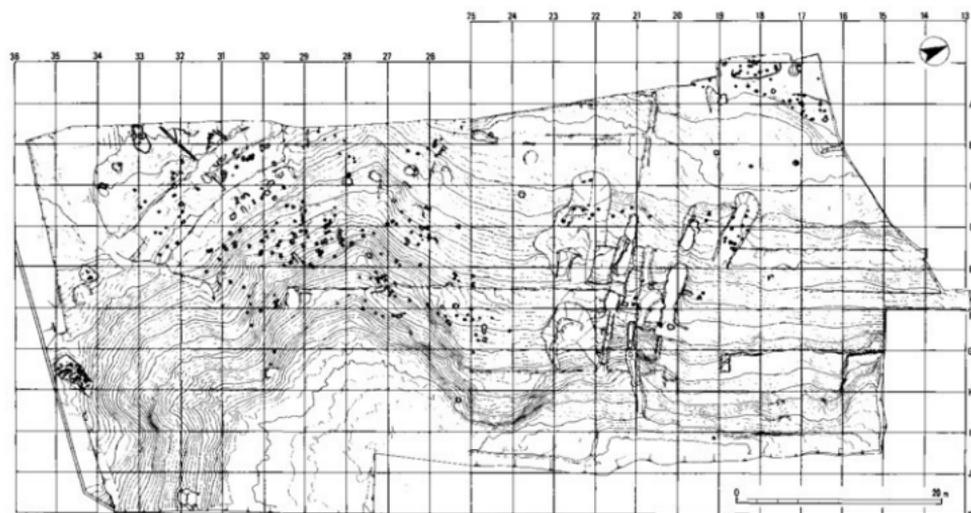
また外城田窯跡群を中心とする南部域の須恵器窯の出現は、従来7世紀初頭の明気窯跡群・中尾窯跡に求められてきた。しかし多気郡多気町森荘の外城田小学校には「北ノ山出土」と注記された焼け歪みのある6世紀後半代の杯身が保管されており、南部における窯の操業開始時期を若干引き上げる必要があるかもしれない。

### 古墳の分布

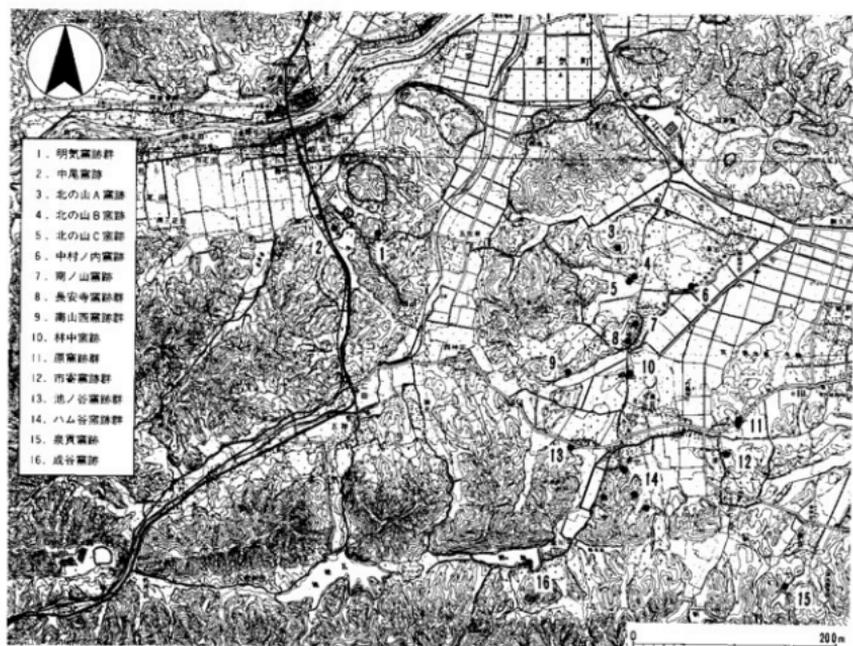
外城田窯跡群の存在する浅間丘陵・玉城丘陵は、後期古墳の群集についても県下屈指の規模を誇る。(第6図)窯跡の存在は、この地域がこれら群集墳への埋納(供献)土器の生産地として機能していた可能性を窺わせるものであり、実際に明気窯跡群については、河田古墳群(B・C支群)及び明気古墳群への供給がそのヘラ記号により明らかとなっている。

また丘陵上における古墳と窯の分布状況を対比すると、古墳群と窯跡が明瞭にその分布域を分けていることがわかる。玉城丘陵においては約250基存在する古墳の大半が、丘陵北部(JR参宮線以東)に位置しているのに対し、窯跡は丘陵南部に分布し、更に両者の混在は見られない。古墳と窯跡が接近する浅間丘陵についても、両者の分布は谷筋等により基本的に隔絶している。地質的に両者の立地は同じであり分布域の設定は意図的なものと推察し、その要素としては、

- ①集団における墓域と生産域の設定が行われた
  - ②工人集団の作業圏(生活圏を含む可能性もある)の隔絶
- が考えられよう。



第5図 地区割図 (1:400)



第6図 窯跡群・古墳群等分布図 (1:50,000)

## 2. 遺構の分布概要

### 須恵器窯

明瓦窯跡群は、全5基の須恵器窯で構成されており、北行する尾根の東～南東側斜面において、主軸を谷中央に向けながら、幅約140m、標高44.5m～56.1m間に分布している。この斜面は、調査前における尾根頂部と谷水田との標高差が約18mあり、最大斜度は約30度を測る。また窯の構築位置は、斜面下の谷水田と比較して、最も低い1号窯前庭部が約7m、最も高い位置に構築されたと考えられる3号窯の前庭部とが約15mの標高差を持っている。

5基の窯は、同一の尾根及び斜面に存在しており後述するが時期的に大差は認められない。ただ斜面内に於ける微地形や窯体構築位置の違い等からグループングが可能である。グループの構成は調査区のは

ば中央に開析する浅い谷筋により、北側の1・2窯と南側の3・4・5号窯に大別できる。ただ3号窯については灰原のみの調査で窯体は調査区外に存在していると推測され、その全容は判然としない。しかし、明らかに窯体の位置が4・5号窯とは異なっており、3号窯を独立させるグループ構成も考える必要がある。調査区北側のグループ(1・2号窯)は、非常に接近した相互関係にあり、二基一対の操業を行っていたと考える。この観点にたてば、調査区南側の4・5号窯についても、ほぼ主軸を同方向に向けて、両者の主軸間が8m弱と接近している点から、ここにおいても二基一対の操業体制をしていた可能性は大きいと言える。

### 落ち込み

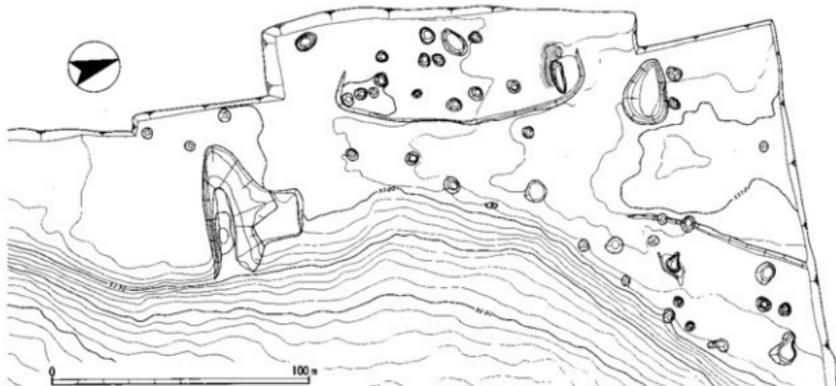
調査区北側の1・2号窯を中心とするグループには、斜面を人為的に大きく切り込んだと考えられる落ち込み状の遺構が存在している。1・2号窯を扶

むように位置しており、1号窯の北側に1基、2号窯の南側に2基がそれぞれ配置されている。

### 尾根上の遺構

また窯の分布する尾根の頂部で、竪穴住居が1棟検出された。出土遺物から窯の操業と密接な関係に

ある遺構と考えられ、工房あるいはそれに準じる遺構の可能性はある。



第7図 尾根上の遺構 (1:100)

### 3. 明気1号窯

#### 遺 構

##### (1) 窯体構造

前庭部 標高約44m付近に位置する前庭部は、著しく範囲が狭く、平坦面は焚口から約1.5m程度で急激な斜面へと移行している。面積としては約2㎡で、斜面下の水田面とは、約7mの標高差がある。

前庭部には、大小2個1対のPit (Pit 5・6及びPit 7・8) が2ヵ所で検出された。これらは窯体との距離に若干差があるものの、窯壁の延長線上に位置する点で共通している。Pit 5は直径32cm、深さ27cmで、接続するPit 6は直径20cm、深さ16cmを測る。Pit 7は焚口から約90cmの距離をもち存在し、幅33cm、深さは31cmである。Pit 8は10cmの距離をもってPit 7の窯体側に位置し、直径21cm、深さ20cmを有する。これらのPitは壁面がほぼ直立する点で類似し、後述するPit 1・2とは明らかに異なる。またPit 5・7は、やや窯体方向に斜傾する穴である点が指摘できる。堆積土はいずれも灰原層と同じ黒褐色土層の単層で、須恵器片も出土している。

焚口 窯壁間は最大で1.62m、床面上で1.34mを測り、壁面は約0.52m残存する。壁面の傾斜は極僅かの外反する傾斜を持っているが、ほぼ直立していると言っても過言ではない。

焚口における壁面は、表面が明赤褐色(5YR5/8)に被熱しているものの硬化(酸化還元)には至っていない。

窯体の先端部、窯壁が屈曲し前庭部側に外反する部分に2ヵ所のピットが存在する。焚口より窯体に向かって左側のPit 1は、直径40~50cm、深さ18~30cmを測り、歪な楕円形をしている。また壁を若干切り込む様に掘られており、壁面に接する何らかの設置物が立っていた可能性が窺われる。

Pit 2は直径60~70cm、深さは40cmでやや不整形な楕円形をしている。Pit 1に比べやや大きく、焚口幅のほぼ半分を占めるほどの規模を有する。またPit 1が壁に接していたのに対し、Pit 2は壁との間に10~15cm程度の間隔が存在する。

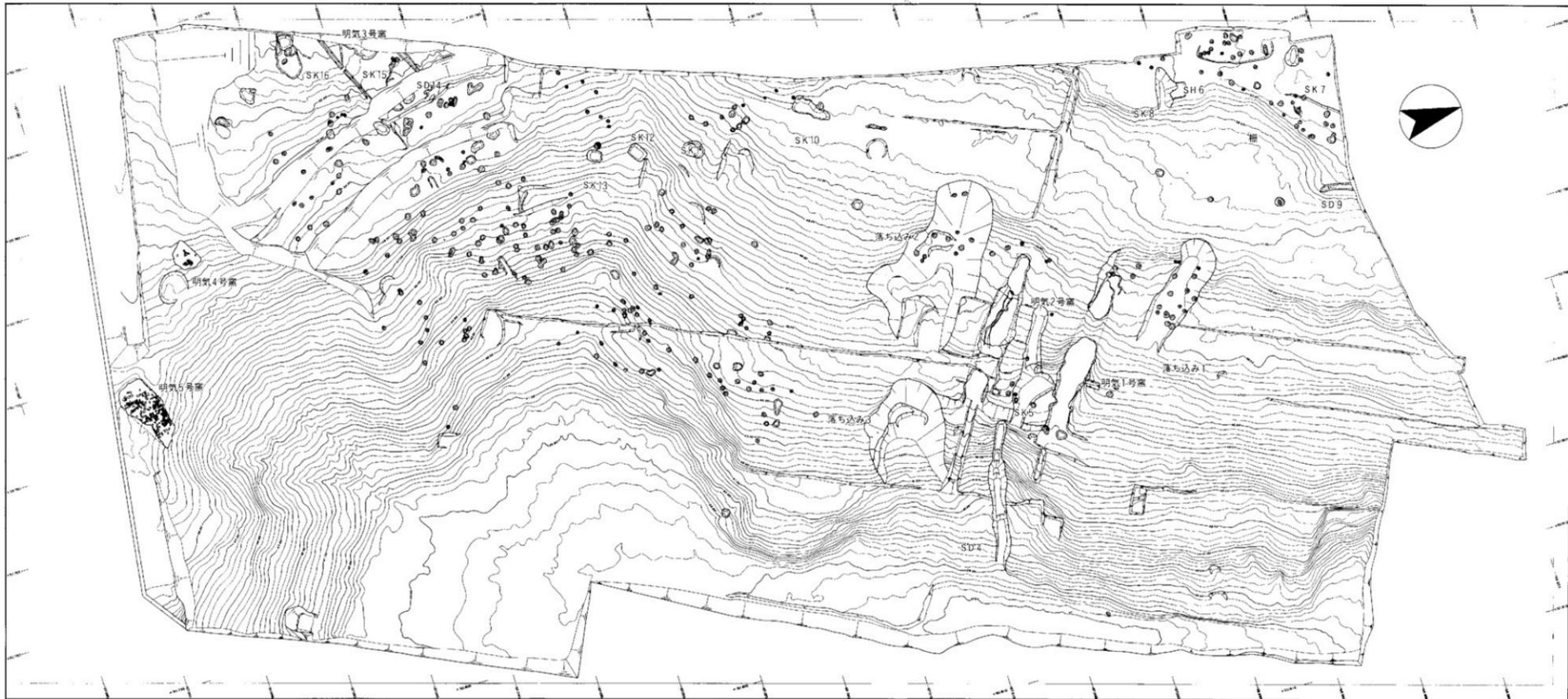
燃焼部 天井部は残存せず、燃焼部内にも天井の崩落焼土は認められなかった。窯壁の残りは良好で、床面から約60cmの立ち上がりを見せている。焚口部と同様に窯壁の角度はほぼ直立であり、被熱は酸化還元で達しているものの層としては薄い。また全面ではないが、部分的に塵入り粘土を施している箇所も認められた。焼土の層序は、窯体の内側より3層確認できるが、床面に近づくに従って衰微し、床面のレベルに至って終息している。

燃焼部と焼成部の境は、焚口よりほぼ一定の幅で構築されてきた窯体の壁間が著しく狭くなる部分にもとめられる。この窯体幅が狭まる位置の直前に左右一対のPitが存在する。焚口方向から見て左側のPit 3は壁を半円形に切り込む形で掘られており、底は床面まで達していた。Pitの径は、最も幅の広い壁面部で50cm、壁面ラインから外側に25cm、深さは67cmである。Pitの底は直径約13cmを測り、逆円錐台形を呈している。

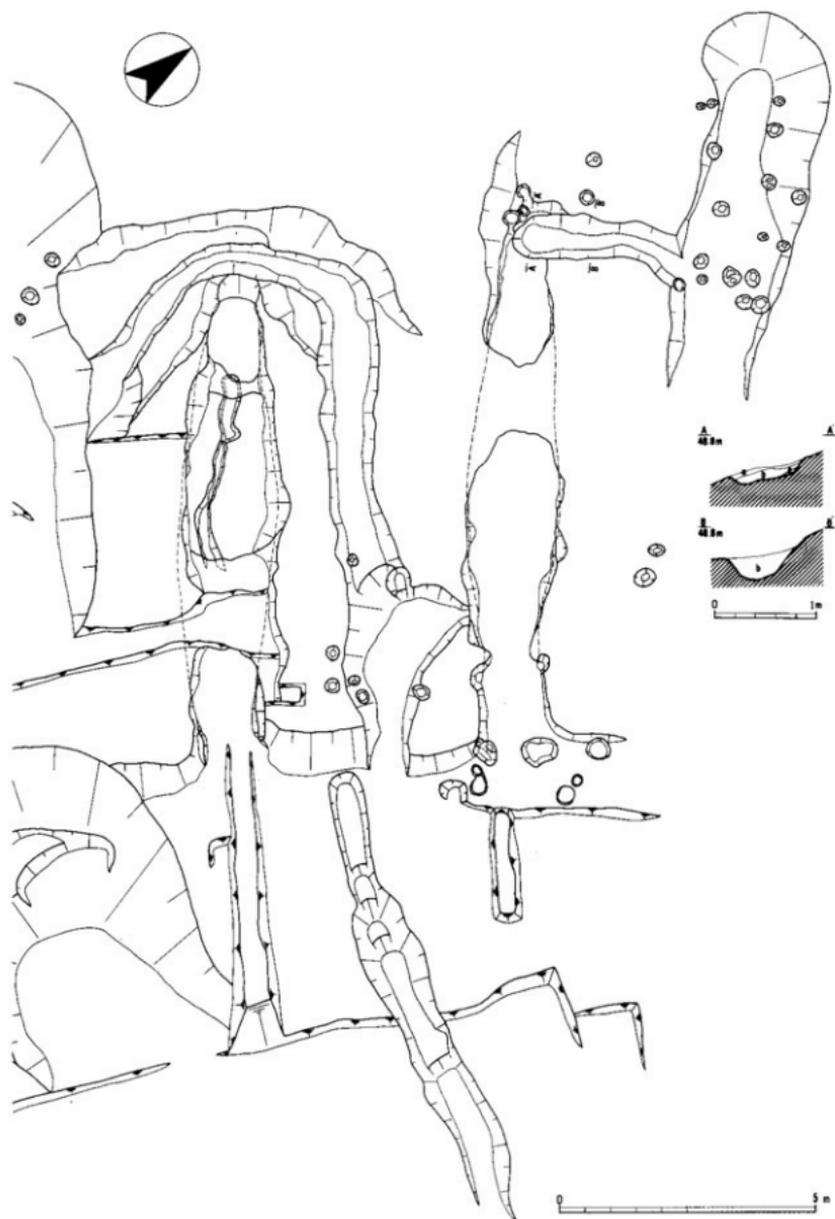
右側の壁に存在するPit 4は、直径20~35cm、深さ77cmを測り、床面にまで達する底は20cmの直径を持つ。規模はPit 3に比べ全体的に小さく、円柱形を呈するが、壁面への切り込みは深い。

またPit 3・4について、両者ともPitの内面が比熱していない点で共通する。また壁を切り込み設置するPitの形態は、焚口部におけるPit 1とも類似している。

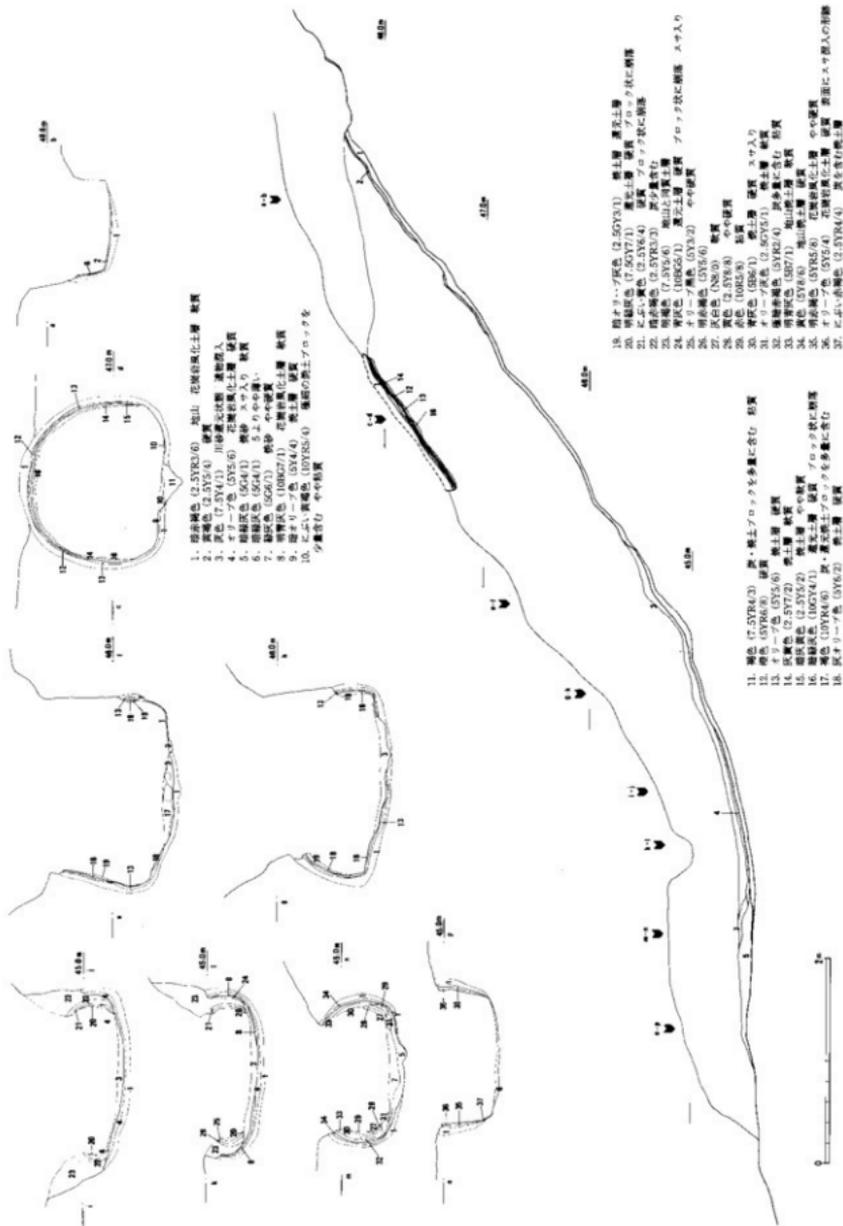
燃焼部内の窯体幅は、残存壁の上面(最大幅)で1.32m、床面においては1.16mである。床面には、Pit 3・4付近から炭を含んだ緑灰色・暗緑灰色(5G6/1及び5G4/1)の砂が堆積し、焚口付近から従って、灰層(灰褐色 5YR4/2)が顕著になる。砂は酸化還元状態を経ているものの硬化はしていない。灰層も最大で5cmの炭化材や焼土ブロックを多量に含むが、被熱による硬化は認められない。燃焼部の構築は、地山(花崗岩風化土)を掘りくぼめるもので、床面位置は、後述する明気2号窯の燃焼部床面とは



第 8 图 調査区平面図 (1:200)



第9图 1·2号窟实测图 (1:100)



1. 埋没跡色 (2.5YR3.0) 地山 花崗岩風化土層 敷瓦
2. 灰褐色 (2.5Y5.4) 砂質 敷瓦
3. 灰色 (7.5Y4.1) 川砂層状砂層 埋没物入
4. 赤褐色 (5Y5.0) 花崗岩風化土層 埋没瓦
5. 赤褐色 (5Y5.0) 川砂層状砂層 敷瓦
6. 埋没跡色 (5Y4.1) 土より中層瓦
7. 埋没跡色 (5Y6.1) 砂砂 中層埋没瓦
8. 埋没跡色 (10B2.7) 花崗岩風化土層 敷瓦
9. 埋没跡色 (5Y5.0) 川砂層状砂層 敷瓦
10. 土より灰褐色 (10Y5.0) 埋没跡の赤土・ブロンズ片  
少量含む 中層敷瓦

11. 埋没 (7.5YR4.0) 赤・赤土・ブロンズを多量に含む 砂質
12. 赤褐色 (5Y5.0) 砂質 赤土層 敷瓦
13. 赤褐色 (5Y5.0) 赤土層 敷瓦
14. 灰褐色 (2.5Y7.2) 赤土層 敷瓦
15. 埋没跡色 (2.5Y5.2) 赤土層 中層敷瓦
16. 埋没跡色 (5Y5.0) 赤土層 敷瓦
17. 埋没 (10Y4.0) 砂・埋没跡を多量に含む
18. 灰褐色 (5Y5.0) 赤土層 敷瓦

19. 埋没・ブロンズ片色 (2.5YR3.0) 赤土層 敷瓦 赤土層
20. 埋没跡色 (7.5Y7.1) 赤土層 埋没跡 赤土層に敷瓦
21. 土より灰褐色 (2.5Y6.4) 砂質 赤土層に敷瓦
22. 埋没跡色 (2.5YR3.0) 赤土層 敷瓦
23. 埋没跡色 (5Y5.0) 赤土層 敷瓦
24. 埋没 (10B2.0) 赤土層 敷瓦 赤土層に敷瓦 赤土層入り
25. 赤褐色 (5Y3.2) 赤土層 敷瓦
26. 埋没跡色 (5Y5.0) 赤土層 敷瓦
27. 埋没 (5Y5.0) 赤土層 敷瓦
28. 赤褐色 (2.5Y8.0) 赤土層 敷瓦
29. 赤褐色 (10B3.8) 赤土層 敷瓦
30. 赤褐色 (5B6.1) 赤土層 敷瓦 赤土層入り
31. 埋没跡色 (5Y5.0) 赤土層 敷瓦
32. 埋没跡色 (5Y4.1) 赤土層 敷瓦
33. 埋没跡色 (10B7.1) 地山 赤土層 敷瓦
34. 赤褐色 (5Y6.0) 地山 赤土層 敷瓦
35. 埋没跡色 (5Y5.0) 花崗岩風化土層 敷瓦
36. 埋没跡色 (5Y5.0) 花崗岩風化土層 敷瓦
37. 土より赤褐色 (2.5Y5.4) 灰を含む埋没跡

第10図 1号案断面図 (1:50)

ほぼ同じ標高を有している。

**第1次焼成部** 窯体の載ち割り調査を実施した段階で、検出していた窯壁の外側にもう一面の窯壁が存在することが判った。この窯壁をもって形成されていた焼成部を、その操業順序をに基づき「第1次焼成部」として報告する。

焼成部の範囲は、燃焼部において窯壁の狭まりが認められる部位から始まり、後述する「窯体に直行する溝」までの約7.7m間を比定する。平面形態に見る窯体幅は一律ではなく、燃焼部から急激な広がりを見せる焼成部は、ほぼ中央で最大幅1.82mを測ったのち次第にその幅を狭め、煙道付近においては0.92mとなる。

床面は比較的平坦な範囲（傾斜10～20度）と急傾斜を有する部分（最大傾斜38度）に大別できる。平坦域は、酸化還元を経た砂の設置範囲とほぼ対応するとともに、遺物の分布範囲とも符合している。砂層は焼成部の先端から始まり、床面約4.7mにおいて、やや中央部の堆積が厚いものの、均一的な広がりを見せる。砂量は約0.21m<sup>3</sup>、テソバコにして約8箱分に相当する。砂層下は地山（花崗岩風化土）で被熱は基本的に酸化還元層（オリブ 5Y5/6）・暗赤褐色層（2.5YR3/6）の2層におよぶ。ただ酸化還元層の広がり、焼成部先端から2m弱が顕著であるものの、窯体中央部で次第に見られなくなり、暗赤褐色層の露呈部も存在する。

急傾斜域は、先述の砂の設置範囲より煙道側にあたり、残存する天井部もこの範囲に属する。床面には砂層は存在せず、被熱は酸化還元層（暗オリブ 5Y4/4）・暗赤褐色層（10Y3/6）の層層を呈する。ただ天井残存部の床面については、被熱が著しく弱い。酸化還元が成されている床面は、窯壁の立ち上がり付近のみで、窯体中央では僅かに暗赤色（10Y3/6）を呈する被熱層が確認できる程度である。

燃焼部から煙道に構造が変化する付近は、一律の被熱層を有しており、床面も酸化還元状態（黄褐 2.5Y5/4）と化している。床面は地山を掘り込んだ状態をそのまま用いたと考えられるが、この付近においても砂は全く検出していない。

また特異な点としては、床面において、被熱を受けず不均整な半円形を呈する部分が存在することが

あげられる。傾斜に対しほぼ水平に列ぐり取られるこの床面は、直径15～30cm、深さ5～15cmを測る。

窯壁は地山（花崗岩風化土）の掘抜きにより形成されており、焼成部全体において酸化還元が認められる。薬入り粘土による補修も焼成部内全域で成されているものの、その厚みは薄く、最大でも5cm程度である。窯壁の外側に対する熱伝導は、地山の還元層（暗赤色 10R3/6）までで考えるならば約10cmであり、床面よりも厚いものの、天井部に対しては凡そ3分の2程度である。

左右両窯壁は、床面から穏やかな弧を描きながら立ち上がり、載ち割り断面で「馬蹄形」を呈している。窯壁は焼成部の燃焼部側において著しく残存量が少ない。これは床面が酸化還元状態にある範囲とはほぼ一致している。窯壁の残存する立ち上がりが比較的良好となるのは、焼成部口から2mほど煙道側に入った所からである。最大幅を測る箇所（第3載ち割り）において1m程度残存する窯壁は、床面より弧を描き立ち上がった後、直線的に延びる。この窯壁の傾斜からすると、天井はかなりの比高を持っていたと考えられる。天井残存部における窯体幅（最大）と天井高を比較した場合、その比率は5：4である。

窯壁は、煙道付近に至って床面から若干直立きみになる。残存高も20～30cmと少なく、上部構造は判然としない。ただ第1載ち割りによると、地山（花崗岩風化土）の被熱層のうち、暗赤褐色（2.5YR3/6）を呈する酸化層が、曲線を描く様に内反しながら終息していることが判る。これは煙道付近においても地山をくり抜いた窯体構造であった可能性を示唆するものと言えよう。

窯体中央より煙道側において1.38m（水平距離）残存する天井は、35～38度の傾斜角をもち、床面と並行に存在する。天井は焼成部において大半を失っているものの、残存する窯壁の傾斜から考え、地山くり抜き式の構造を持っていたと思われる。またこの残存する天井には、花崗岩の岩脈が横断しており地下式による構築と断言できる。

**第2次焼成部** 前項の第1次焼成部内側に構築されたもので、残存する窯壁は高さ25～45cmを測る。第1次焼成部において、窯壁が2層確認できる範囲

は、燃焼部との境から煙道側に約2mの範囲にとどまる。これは床面の酸化還元が著しい範囲と合致する。また床面については、第2次面を設定せず、第1次床面上から窯壁を構築している。これは先述の、床面における酸化還元層が、他の部位に比べ顕著である因子として位置付けられよう。

第1次窯壁と第2次窯壁との間隔は、10～20cm程度存在し、焼土層のうち、最外層にあたる酸化層と第1次窯壁の酸化還元層との間には、5～8cmの非被熱（不変色）層が存在する。明褐色（7.5Y5/6）を呈するこの層は、地山と酷似するが、やや軟質である点を留意しておく。またこの層中において遺物は検出されなかった。

**煙道及び煙出し** 地下式の構築方法をもって掘り抜かれた焼成部は、煙道付近にいたってその床面のレベルを表土近くに上げてくる。この付近の窯構造は判然とせず、煙出しにいたってはその構造を裏付けるものさえ皆無である。

ただ煙道付近には、窯体に対し直交するSD17が存在し、また床面の酸化還元もこの溝までであることから、窯体としての上限をこの溝にもとめ、そこに何らかの煙出しが設けられていたと考えられる。

#### (2) 灰原

灰原は焼成部内から始まり、斜面下方へと延びるが、その大半は窯体主軸より北側で認められ東西4m×南北6m（水平距離）の広がりを持つ。また分布範囲は標高42mから45.2mにあたり、最上端部は、燃焼部窯壁の北側斜面に位置する。これは燃焼部床面と約70cmの高低差を有する。

前庭部から主軸方向に延びる灰原層は、標高45.2m付近でその姿を消し、斜面下方においても、SD4内において若干層位を確認した以外は検出できなかった。調査前の地形において、この付近はやや切り立った崖を呈しており、過去に灰原層も含め崩落した可能性が考えられる。

#### (3) SD18と被熱面

SD18は全長3.10mで、溝の端は、窯体と落ち込み1に接続している。窯体と接する部分は幅0.83m、深さ0.05～0.20mで、溝の中ほど（B-B'）では幅0.8m、深さ0.23～0.44mをそれぞれ測る。溝は窯体主軸と直交（主軸に対し90度北偏）し、窯体よ

り約1.8m付近で、やや谷方向に屈曲しながら落ち込み1に接合している。溝の堆積土は窯体に接する付近で3層（第9図）、B-B'間においては1層（第9図）認められた。窯体付近の3層は、上層から赤褐色（2.5YR4/6）・灰褐色（7.5YR5/2）・暗赤褐色（10R3/2）で構成されている。第2層の灰褐色（7.5YR5/2）土層において細粒の炭と若干の須恵器片が検出された他は遺物の出土はなく、第1・2層は酸化状態に被熱していた。溝の中ほどのB-B'間における堆積土は、先述の第2層（灰褐色・7.5YR5/2）のみで、炭と若干の須恵器片が出土した。

溝は、窯体と接する部分のうち煙出しと相対する面が被熱（にぶい赤橙・2.5YR4/6）し、酸化状態を呈する。しかし、これはほぼ窯体幅のみの様相で、溝の底面及び窯体側についてはその限りではない。

煙道付近において、窯体の左右の地形は0.5mの標高差を持っている。これは地下式の窯体において煙出しを開きさせるにあたり、煙出部の上方（西側）から北側の斜面を切り込んだことに起因すると考えられる。煙出付近より斜面上方に約2m延びるこの切り込みは、SD18を取り巻くように被熱しており、酸化状態を呈する。酸化の程度は、窯体の主軸より南側（窯体に向かって左側）が著しい。またこの付近にはPitが3ヶ所存在するが、いずれにおいても付近が酸化しているのに対し、内面は被熱していないことから、何らかの構造物が存在した可能性が考えられる。

#### (4) 落ち込み1

1号窯の北側に位置し、その開口方向を1号窯の窯体主軸とはほぼ同じにする落ち込み1は、1・2号窯の斜面上方に広がる平坦面から、標高差2.8mの急斜面を深く切り込み造られている。全長は7.6m、最大幅は2.2mで、遺構内の最低レベルは、1号窯の残存する天井部とはほぼ同じである。堆積土の層序は、斜面上方より進める包含層掘削の方法上、急斜面を切り込んだ部分について確認することができなかった。しかし、やや平坦化する標高49.5m付近からは、灰褐色土（7.5YR5/2）の堆積が認められ、細粒の炭・焼土ブロックと共に多量の須恵器が出土した。

また落ち込み1内の底及び法面には、14ヶ所のPitが存在する。直径18～40cm、深さ11～58cmで配置に規則性は認められない。なお堆積土は、溝・落ち込み1の堆積土と同じで、全てではないが、1号窯と同時期の須恵器片も出土している。

#### (5) SK5

1号窯焼成部の南側は、斜面が大きく削られるように落ち込み、従って南側窯壁は著しく残存が少な

い。この人為的な地形改変は、後述する2号窯に付属するSD17を切り込む形で存在し、さらにSK5を形成している。SK5の一端は焼成部において最も窯壁の残存が少ない箇所と接続し、SK5の底との比高は10cmに満たない。

堆積土は灰褐色(7.5YR4/2)の単層で炭と少量の焼土ブロックを含む。また同層からは多数の須恵器片が出土している。

## 遺物

明気1号窯の遺物は、床面において認められたものは極少数で、大半は灰原出土のものである。遺物について床面と灰原を比較した場合、特に形式差等は認められないと判断し、一括して実測図の掲載を行った。個々の遺物出土位置は、出土遺物観察表を参照されたい。

また、杯類と壺・甕類に関しては、結語において分類方法の大観を行った。

#### 杯蓋(1～48)

いわゆる古墳時代タイプの杯蓋である。明気1号窯において出土した杯蓋は、全てこのタイプであり、天井部に調整を一切施さない「ヘラ切り不調整」の特徴をもつ。

#### 杯蓋A1a類(1)

口径がやや大きめで、稜が残る。明気1号窯においては、最も古い様相を示す。口縁端部においても内側に向かい斜傾する面を持つ。口辺部における、内側に屈曲する特徴は、明気窯跡群の在地色と考えられる。天井部はヘラ切り不調整である。

#### 杯蓋A1b類(2～8)

口径がやや大きめで、器高が低い、扁平な特徴を持つ。杯A1a類で見た稜は姿を消す。口辺部は、内向する屈曲を見せ、口縁端部の処理は丸みを持つ

#### 杯蓋A1c類(9～24)

口径は若干小さくなが、器高が高い特徴をもつ。口辺部の内向する屈曲も顕著で、なかには外面からの強い横撫を施したものも見られる。

天井部の処理は、ヘラ切り不調整であるが、ヘラ切りの際、その工具のあてかたの違いによって生じたと考えられる突出が残る。内向する口辺部と共に明気1・2号窯の特徴と言える。

#### 杯蓋A1d類(25～39)

基本的に杯蓋A1c類の様相を示すが、天井部は平坦な面を持ち、突出は顕著ではない。口辺部の内向する屈曲は依然大きい。

#### 杯蓋A1e類(40)

天井部が平坦である特徴は持つものの、口径が小さく、口辺部端部の屈曲が見られない。

#### 杯蓋A2a類(41・42)

口辺部の屈曲がなく、天井部から口縁部にかけて段を持たない畿内的な特徴を示す杯A2類の内、口径に対し器高の低い、扁平なものを指す。出土量は極少量である。

#### 杯蓋A2b類(43・48)

扁平な杯蓋A2a類に対し器高を持ち、より丸みを帯びたものを指す。A1類に対し、法量の縮小化が見られる。

#### 杯身(49～96)

古墳時代タイプの杯身である。杯蓋と同様に明気1号窯において出土した杯身は、全てこのタイプである。底部はヘラ切り後に一切調整を施さない「ヘラ切り不調整」である。杯蓋と同様に、底部の平坦化及び突出といった在地色が目立つ。

杯身体部の均一化しない厚みに対し、「立ち上がり」部は、シャープな作りを見せている。

#### 杯身A1a類(49～53)

口径が比較的大きく、扁平な作りをしている。杯蓋A1a類とセット関係になる杯身と考えられ、明気窯跡群においては、古い様相を呈する。

#### 杯身A1b類(54～59)

杯身A1a類に対し、口径の縮小化が見られ、体

部から底部にかけて、やや丸みを持つ。底部はヘラ切り不調整である。

杯身A1c類 (60~69)

底部が平坦化し、比較的器高を持つものを指す。

例外も存在するが、受部から立ち上がりにかけては、シャープなものが多い。

杯身A1d類 (70~74)

口径に対し器高が低い、扁平なものである。立ち上がりがやや内向し、受部の形骸化が見られる。

杯身A1e類 (75~86)

底部が扁平で、しかも突出する傾向にあるものを指す。これらは杯蓋A1c類と同様に、ヘラ切りの際に工具のあてる角度により生じたものとする。明気1・2号窯にて顕著に見られる様相である。

杯身A1f類 (87~89)

底部は平坦で、やや小型化する傾向にあるものである。

杯身A2a類 (90~91)

口縁部から底部にかけて厚みが均一で、全体的に丸みを持つ畿内の様相を見せるものの内、特に口径が大きいものを示す。

杯身A2b類 (90~91)

杯身A2a類と同様に畿内の様相を見せるもののうち、小型化したものを指す。

短頸壺蓋 (97~102) 天井部にヘラ削りを施し全体的に丁寧な作りを見せる。(97)は「N」状のヘラ記号を持つ、(100)には「一」のヘラ記号が付される。また天井部だけを残すように、円形に打ち欠かされている。

碗 (103~109) 体部に並行する2本の沈線を施す。底部を中心にヘラ削りによる調整がなされる(107)には「+」状のヘラ記号がある。

杯 (110) 本個体一点のみの出土である。底部はクロ削りのち撫での調整が施されている。丁寧な作りから、碗類と同様に金属器の模倣を基本とするものと考えられる。

高杯 (111~117) 高杯は、2段透かしものがあるが、既に透かしの形骸化は始まっており、透かしが工具による切り込みだけで表現されているもの(115)や透かしを施さないもの(116)も個体

数は少ないが含まれている。(117)は土師質のもので、脚部は存在しない。

線 (118~122) 頸部の基部は細く、口縁部は大きくラップ状に広がる。頸部は先端で外反し、その後口縁部に向かい内反する傾向がある。頸部先端の口辺部基部にみられる段は、それを有するものと無いものがある。(122)は、底部をヘラ削りし、「N」字状のヘラ記号を施す。

罎 (123~124) 頸部を見ない器種である。一見碗のようにも見えるが、口縁端部を僅かに外反させ、底部はヘラ削りを施す。

小型短頸壺 (125~126) 口縁部は直立し、体部に2本の沈線を持つものもある。

捏鉢 (127~128) 体部に2本の沈線が巡る。底部に細く穿孔(貫通してはいない)した(127)と2本の沈線以外にカキ目を施したものがある。

蓋 (130) 用途は不明確であるが、中尾窯跡においても類似する出土例がある。

提瓶・平瓶 (131~132) 提瓶は体部にカキ目はなく、退化した把手が僅かに残る。

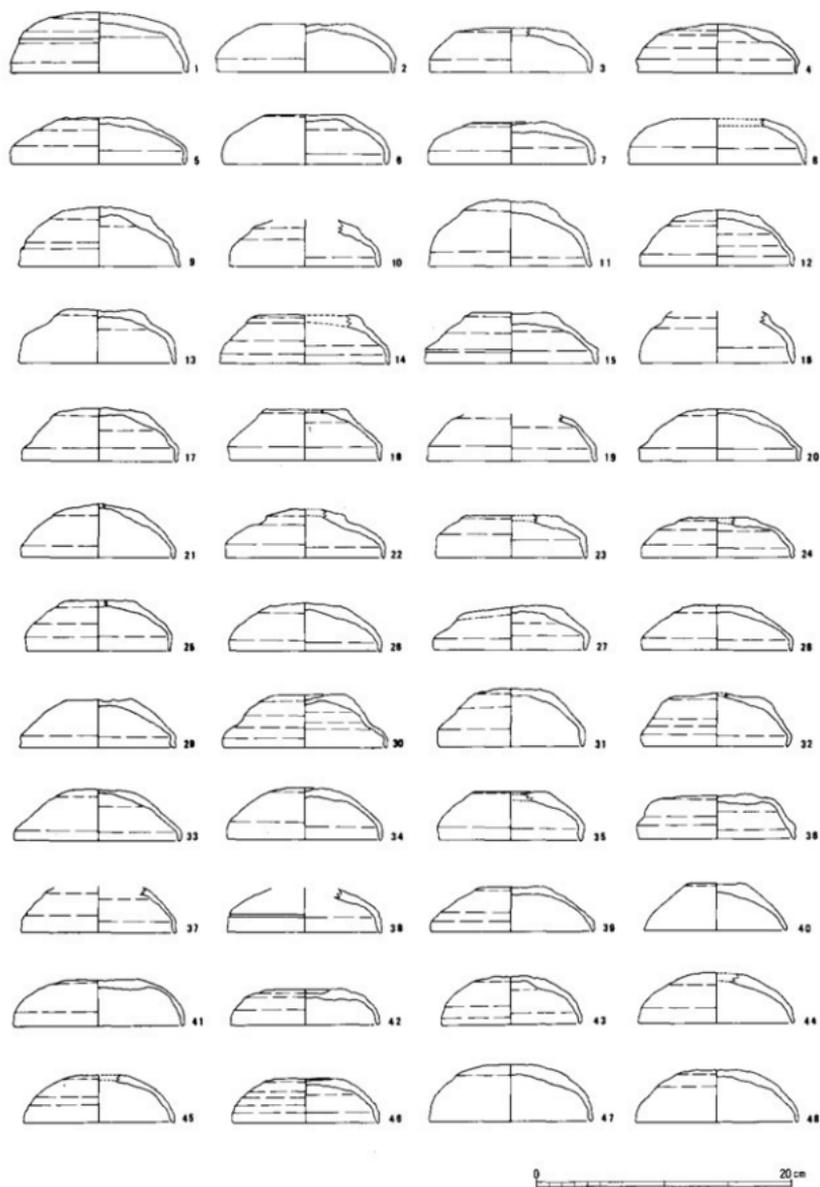
脚部 (133~135) 方形の3方透かしを持つもの(135)と、端部を内面にて斜めに処理し、裾部に1~2本の段を設ける(133~134)がある。これらは(140)等の壺の脚となる可能性がある。

甕 (136~137) 土師器であるが、灰原から出土している。体部外面を上下2段にわけ縦横両方向の撫でを施す。

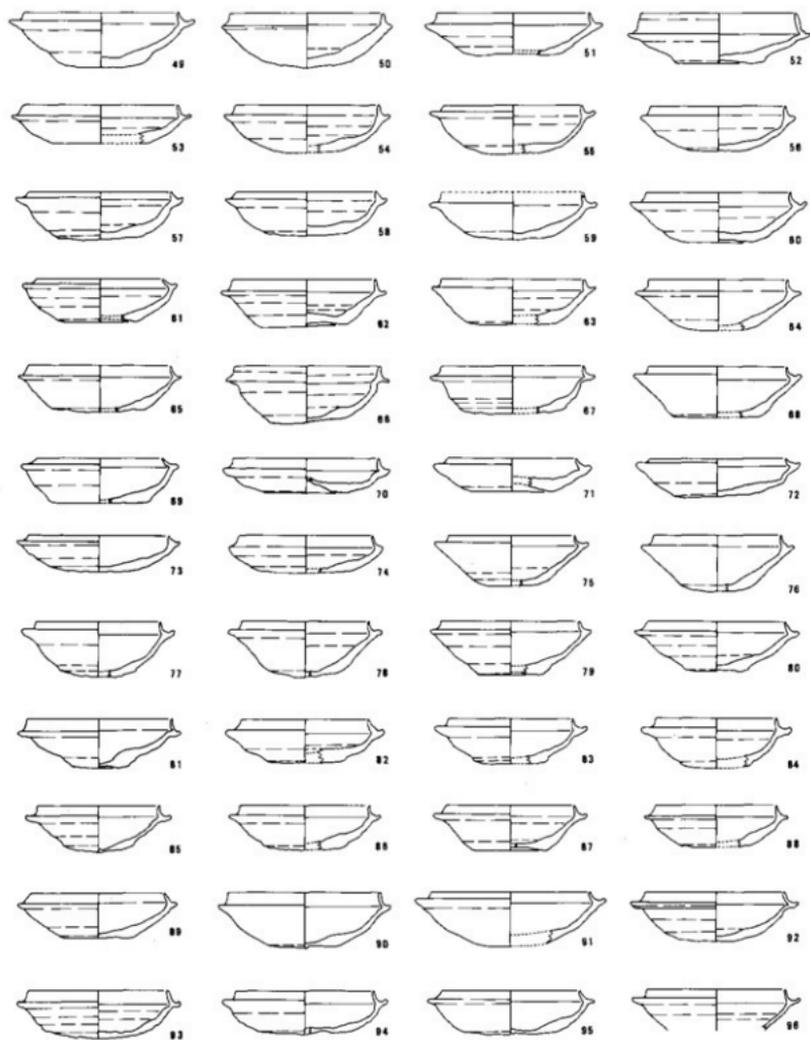
壺 (138~140~141) 体部に2本の沈線を巡らせ、その間に工具による縦方向の圧痕を施す。(135)等の脚部が存在する可能性がある。

小型甕 (142~151) 口縁部において、断面形が僅かに三角形の突出を見せる(142~144)がある。また、幅をもち肥厚化した帯状の口縁部を持ち、内面または外面に強い横撫を施す(145~150)も見られる。(151)は、肥厚する口縁端部は見られなくなるが、断面形が長方形を呈する帯状の口縁部を意識した調整の残る(151)もある。

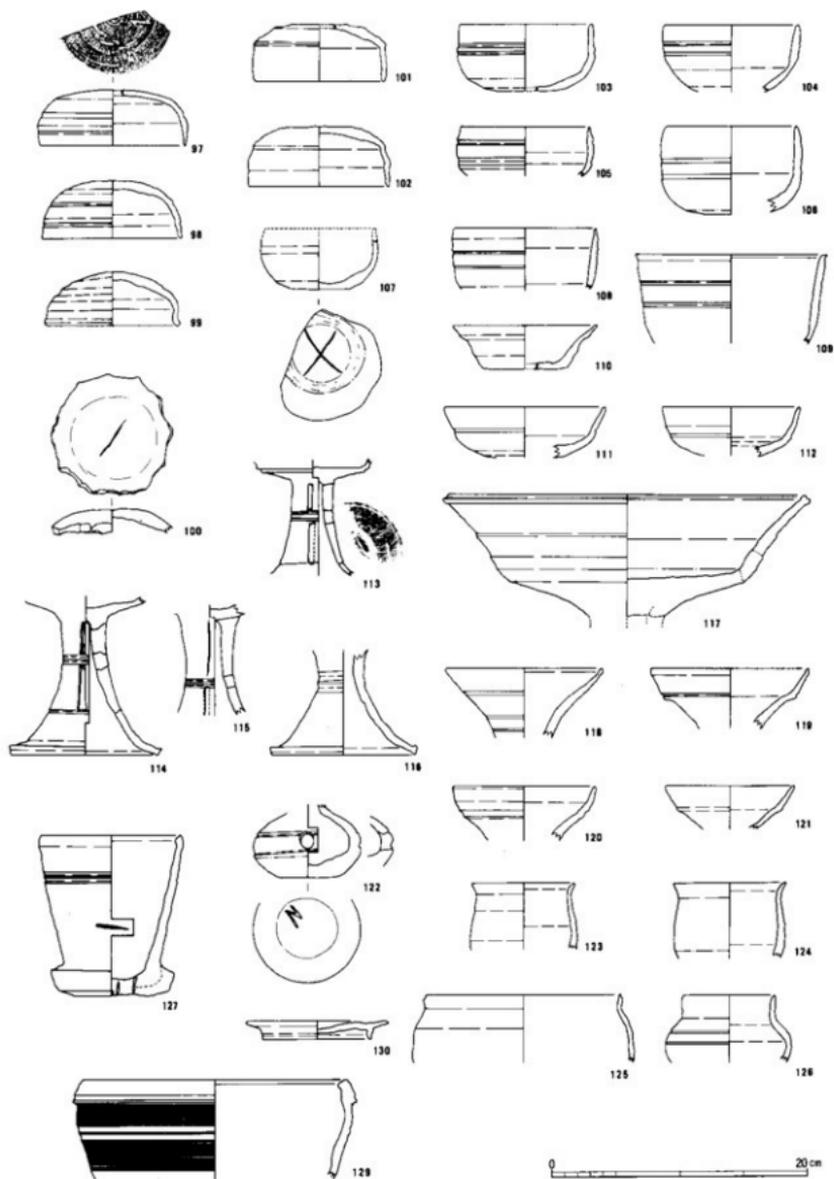
大型甕 (152~158) 全般的に装飾過多な傾向が見られる。数本単位で区分された頸部には、波状文をはじめ、櫛状工具による縦位の施文がなされ、両者が重複して付けられるケースもある。



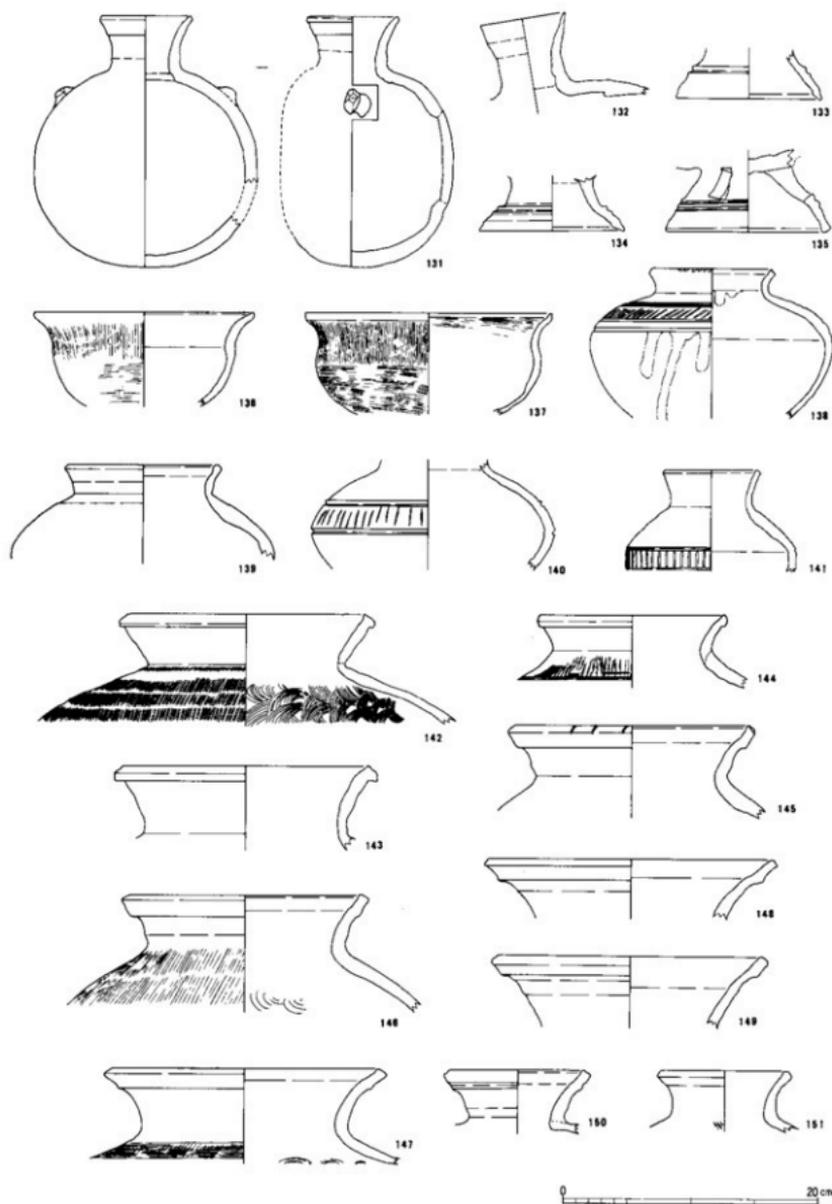
第11図 1号窯 窯体床面及び灰原出土遺物実測図 (1:4)



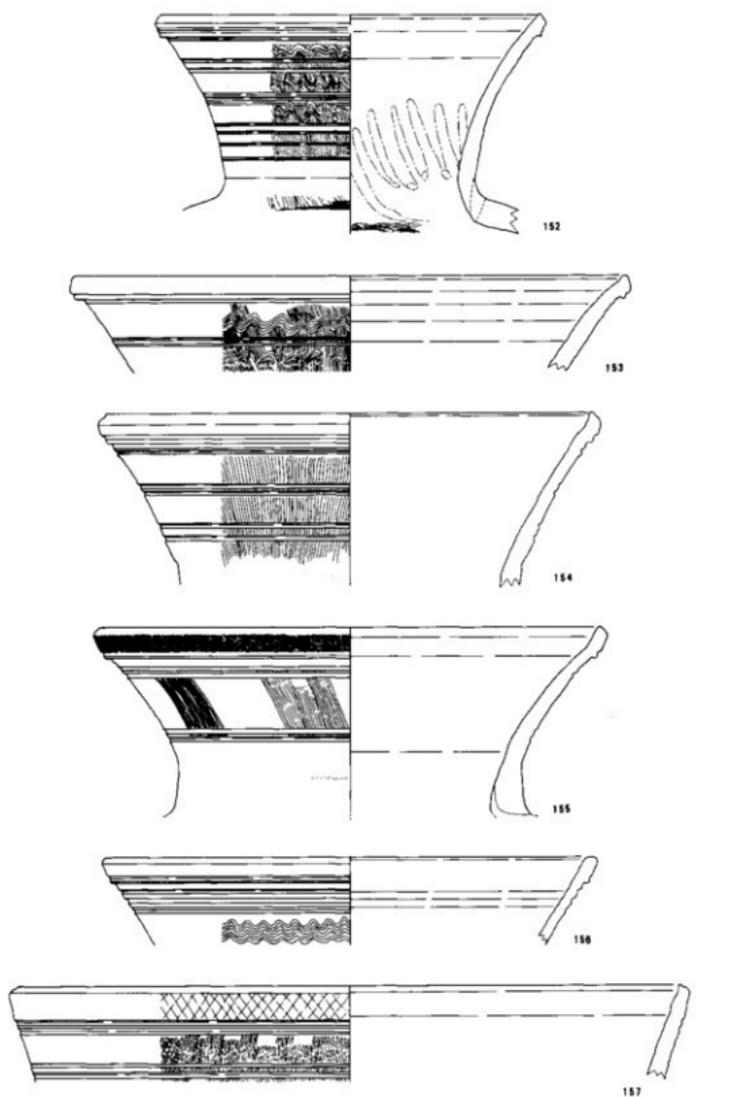
第12図 1号窯 窯体床面及び灰原出土遺物実測図 (1:4)



第13图 1号窟 窟体床面及び灰原出土遺物実測図(1:4)



第14图 1号案 窠体床面及び灰原出土遺物実測図(1:4)



第15図 1号窯 窯体床面及び灰原出土遺物実測図 (1:4)

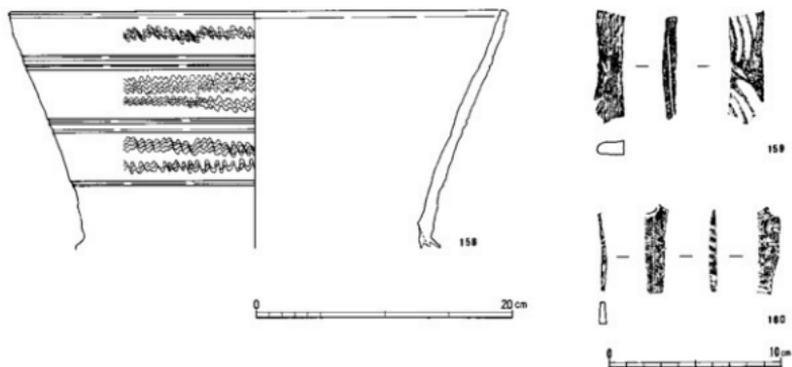
(152・153) は、口縁部の断面形が、僅かに三角形状の形態を残す。また、沈線によって断面三角形状の凸線の表現も残る。

口縁部が肥厚化し、断面形が長方形を呈するもの(154~156)においても、断面三角形状の凸線は沈線によって表現されている。口縁端部内面には、横方向の強い無で認められる。

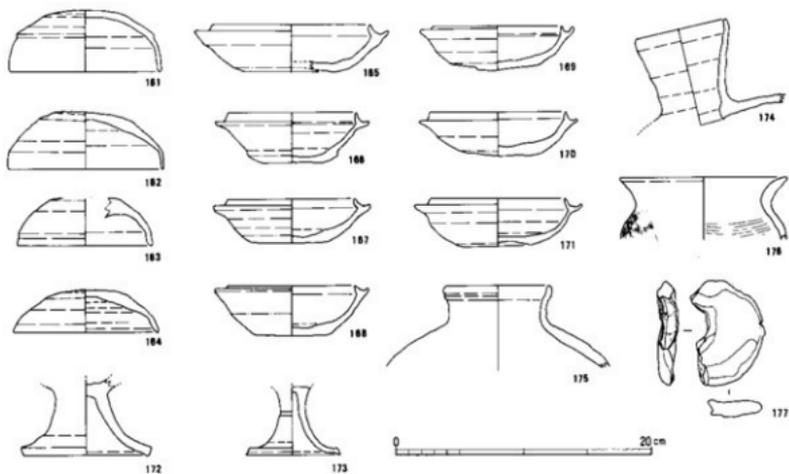
(157・158) については、口縁端部の肥厚する帯部は見られなくなり、強い横無による、口縁端部

の内・外反も認められない。但し、依然として裝飾過多な傾向は存在し、弱い沈線で表現された口縁端部の帯部に斜格子文を施す(157)の例もある。

その他の遺物(159・160) 壺などにおいて、体部と頸部の接合の際、その直径の違いから生じる不要な部分をヘラで切り落としたものと考えられる。製品の中に入り須恵器化したと思われるが、壺の体部内面において軸着したものは、一例もなく若干疑問も残る。



第16図 1号案 窯体床面及び灰原出土遺物実測図(1:4 但し 159・160は1:3)



第17図 1号案 窯体内堆積土中出土遺物実測図(1:4)

## 4. 明気2号窯

### 遺 構

#### (1) 窯体構造

前庭部 標高44m付近に位置し、斜面を掘り込み形成する前庭部は、1号窯と同様に著しく狭い。焚口部から前庭部の斜面側端までは1.3mで、窯体主軸に対する横幅は、最も広い部分で1.4mである。

また前庭部から南東側は急斜面になっており、谷水田との標高差は7mを測る。

焚口 焚口における窯壁は、41~48cm残存し、床面から外側への傾斜を見せる。焚口幅は最大で1.4m、床面上で1.0mを測る。燃焼部から延びる窯壁は、焚口にて左右に大きく屈曲し、前庭部側に外反する。ただし被熱している範囲は、屈曲する手前までで、前庭部側はその範囲に含まれない。

被熱域は、左右の壁を比較した場合、その長さや度合いに若干の差が認められる。南壁は北壁に対し50cmほど長く、その部分は酸化状態を呈し、酸化還元には至っていない。

北壁については、燃焼部から著しい酸化還元を呈する壁が延びるが、焚口付近において急激な終息を見せる。この被熱域の先端には、極わずかであるが壁を切り込む痕跡が残っており、何らかの設置物が存在した可能性がある。また、この痕跡から前庭部にかけては、全く被熱しておらず、窯壁において酸化還元化する範囲が、酸化状態の部分を介さず、この痕跡を境として認められなくなる。

燃焼部 天井は残存しなかったが、燃焼部内には天井のものと考えられる削落焼土が認められた。

窯壁は床面より0.7~1.0m残存し、南壁に比べ北壁の残存が良好である。構築当初における窯壁は、花崗岩風化土層(地山)のみで形成されており、窯体表面は酸化還元状態に達する。また酸化状態にある被熱層(暗赤色10R3/6)は、酸化還元面から最大で11cm壁中に及んでいる。この窯壁は僅かに弧を描き内反するものの、大局的には、「直立」を念頭においた構築がなされたと考えられる。

壱入り粘土により繰り返された補修は、窯体幅を

狭めると同時に、窯壁を内反させる様相をも呈している。この補修は焚口先端部から認められ、徐々に内反の度合いを強くし、焚口から1.2m程で、残存する天井部の窯壁に移行する。厚みは約14cm(残存する部分)で、酸化還元や硬化の違いから、3ないし4回の補修数が認められる。

燃焼部の幅は、最大(補修粘土層は含まず)で1.6m、床面付近で1.3mを測る。

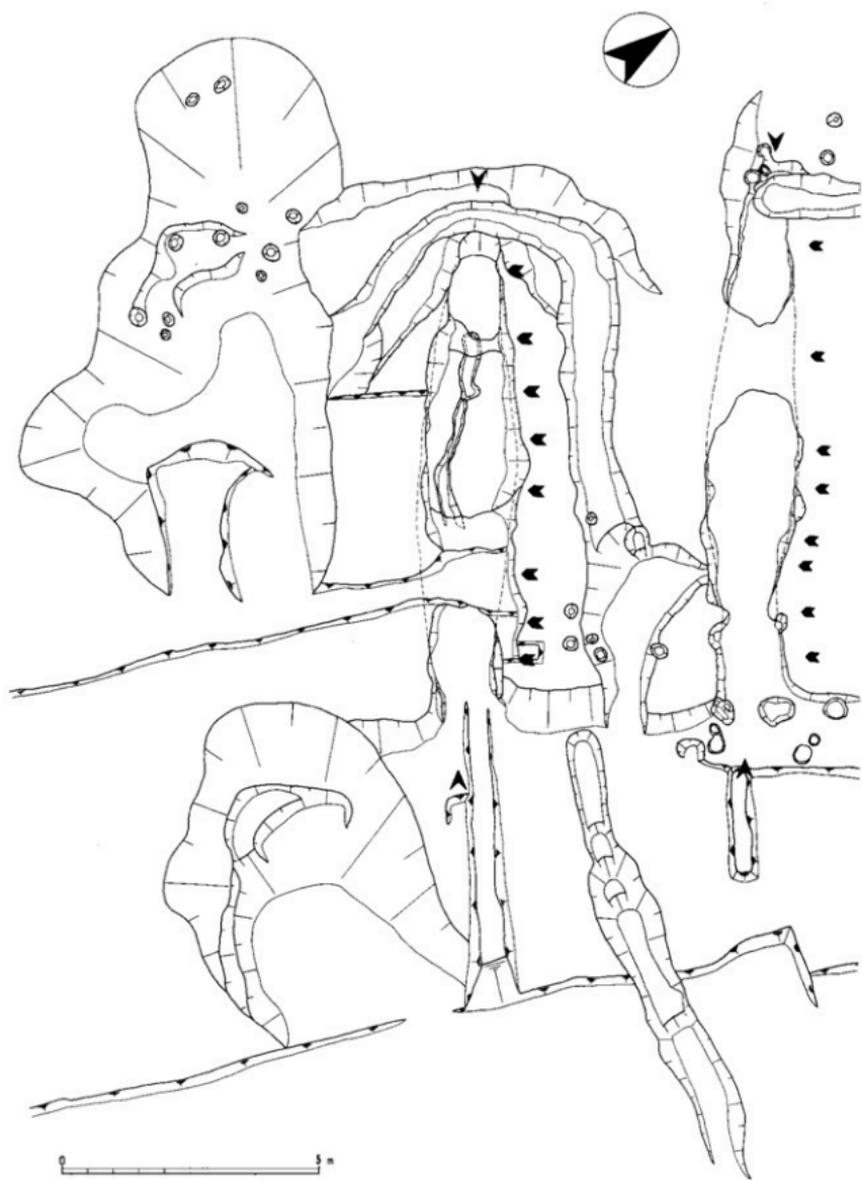
床面は地山により形成されているが、中央部を掘り込んだ浅い溝状の遺構が存在する。これは残存する天井部の燃焼部側端より徐々に始まり、焚口より約1m燃焼部側まで延びる。ここは構築中すでに埋まっていたと考えられ、堆積土により平坦化し、さらに被熱が認められ、層序は3層に大別が可能である。第1層は浅黄色(7.5Y7/3)を呈する砂層で、ほぼ酸化還元に達し、硬化している。第2層も還元状態に硬化する青灰色(10BG5/1)の砂層で、2cm以下の炭・焼土ブロックを多量に含んでいる。第3層は灰の堆積で、黒色(10YR2/1)の砂質土をベースに1cm以下の炭・焼土ブロックが多量に含まれている。

堆積土(第1~3層)の厚さは、最大で21cmを測る。堆積土により形成される床面は、焚口側で若干の盛り上がり認められるものの、主軸及び主軸直線の両方において、ほぼ平坦な面を形成している。

各層より出土する遺物は、須臾器の小片が中心であるが、時期に大きな差は認められない。

第3層以下は地山(花崗岩風化土層)となるが、被熱する床面は、燃焼部においては認められない。ただ、天井残存部に近づくにつれ、床面の窯壁側で徐々に被熱層がその範囲を増す傾向が認められる。

天井残存部 焼成部のほぼ先端を形成していると考えられる天井部は、水平距離にして1.5m残存する。載り割りで観察する窯体の断面形は、均整のとれたアールを描く。窯体に対し左斜上から右斜下に向けて花崗岩の岩脈が通過し、地山を穿って構築さ



第18图 2号藨实测图 (1:100)

れた窯体構造が認められる。

焼土層は床面と同様に、酸化還元層・酸化層の順で被熱しているが、多量の粘土を用いた補修層が認められた。補修粘土層は、凡そ3層認められるが、酸化還元層は均一で、層位は明瞭なものではない。

補修粘土の張り付けは、左右両窯壁ともに、床面きわから始まり、徐々に肥厚化しながら天井部にいたる、「半月」状を呈し、構築当初の天井高（約1.2 m）を0.76 mにまで低くしている。

補修粘土と地山（花崗岩風化石）との間には、花崗岩の酸化還元層も認められ、補修以前に焼成（単に地山をくり抜いた状態での焼成）が行われたことが裏付けられる。

焼成部 燃焼部と焼成部を区画するものとして、明瞭なものは存在しない。ただ床面の被熱及び窯体の幅・高からおおよそその位置は設定可能である。

燃焼部における浅い溝状遺構の底は、先述のとおり被熱していない。残存する地山被熱域の先端は、焚口より2.7 mの地点に求めることができ、残存する天井部の燃焼部側先端とほぼ合致する。天井についても、この被熱域の先端付近から急激にその斜度を上げ、水平値に対し最大で34度の傾斜を持つ。同位置での床面傾斜は約10度である。従って、焼成部の先端（起点）は、床面における酸化還元層が出現（残存）し、幅・高ともに最も狭められた部分（天井部の斜面側付近）に求めることができよう。

焼成部において、窯体の幅が最も拡大するのは、焚口先端から4.5～5.5 mの地点（第4～5 載ち割り断面）で約1.7～1.8 mの幅をもつ。天井は既に失われていたが、付近は窯体が最も深く掘り込まれる部位にあたり、遺構検出面から床面までの比高は2 mを測る。また、窯体北壁は、南壁に比べ傾斜角が異なる傾向（第5 載ち割り断面）が認められる。これは、南壁が弧を描きながら内反するのに対し、北壁の傾斜は直立に近く、不自然な様相を呈する。補修粘土についても、先述の天井残存部から北壁にかけて厚くのび、その広がりは上方についても認められた。左右窯壁の傾斜角の相違は、第5 載ち割り付近のみの特徴で、他の箇所では、ほぼ対称的な曲線を描く。

焼成室内における焼成回数は、3回以上認められ

最大5回を数える可能性もある。これは薬入り粘土の張り付けによる補修層の被熱差から判断する。

まずは、窯体構築直後の焼成（空焚きも含む）後、窯壁の傾斜角度を変えたとみられる補修が行われる。さらにその補修した窯壁を切断し、塗り込むように施された次層が存在する。これは完全に酸化還元化しているが、3層の分層が可能である。第4 載ち割り断面で確認できるように、これらの粘土の張り付けは、単なる部分的な補修ではなく、窯体内堆積の縮小、或いは窯壁傾斜角の修正との見方ができる。

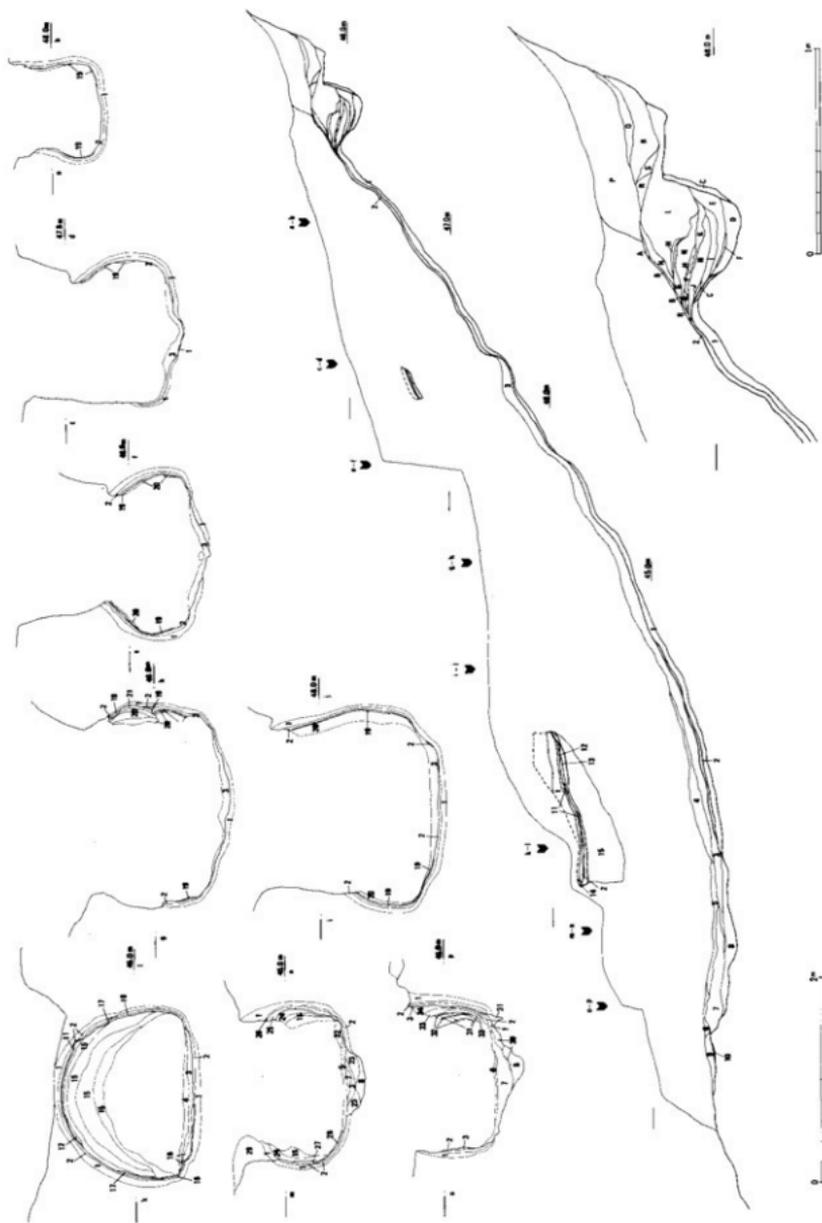
窯壁の傾斜角度の大幅な修正は、焼成部先端の天井残存部から始まるが、焚口から約6 m付近にて終焉する。それ以後も薬入り粘土を用いた補修は若干見受けられたが、窯体中央付近のような厚いものではなかった。ほぼ窯体中央で最大幅を測った窯体幅は、その後、煙道に向けて徐々に幅を狭め、煙道手前において幅は0.85 mにまで縮小する。焼成部の最末端における窯体の断面形（第1 載ち割り）は、他とは異なり、窯壁があまり内反を見せない「逆馬蹄形」を呈する。既に天井部は失われているが、煙道にむけて特異な構造を有していたと考えられる。

また付近は、窯体の遺構検出面から0.8 mの深さしか有しておらず、地山くり抜き構造が終わり、煙道部に移行する「半地下式」状態の構造であったことが窺われる。

焼成室の床面は川砂で覆われ、酸化還元化し青灰色（10BG5/1）を呈し、硬化する。砂の設置は、燃焼部から第2 載ち割り付近（焚口先端から7.5 m）まで認められる。砂は窯体中軸上で最も厚く、15 cmを測る部分もある。床面はおおよそ20度の傾斜をもつが、全般的に厚さは均一であり、特に斜面下方の砂量が多いというものでもない。これは還元化により砂が硬化し、動きが抑制されたこととみることができよう。

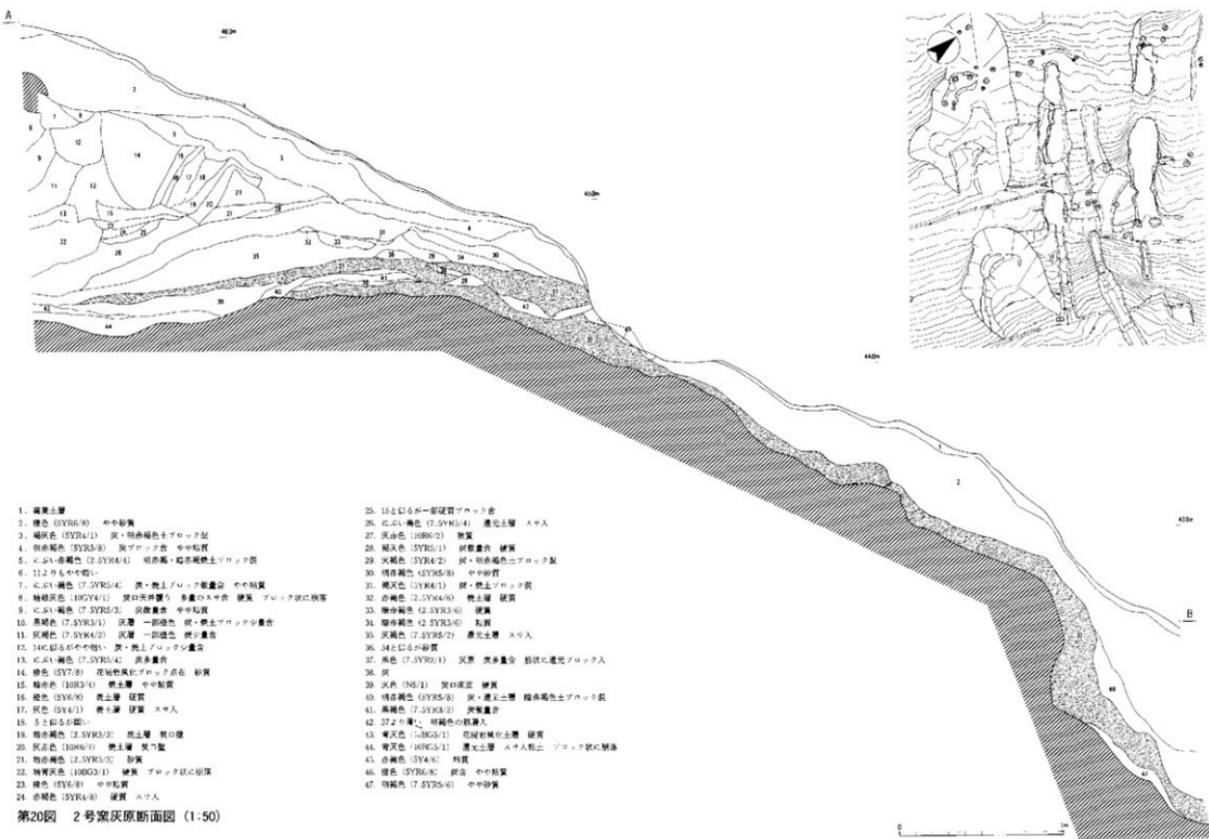
焼成部の内、上方の3分の1については砂の設置はみとめられなかった。床面は地山の花崗岩風化石が酸化還元化し、硬化を見せていた。

床面には硬化した砂を切るかたちで、「溝」が存在した。これは、窯体上方の砂の先端付近から始まり、残存する天井部下まで延びていた。雨水によるものとするのが妥当と思われるが、埋土が崩落し



第19图 2号墓断面图 (1:50)

1. 礫赤色 (12R3/4) 地山 花崗岩風化土層 礫多量 中砂質
2. グロウプ色 (5Y5/4) 花崗岩風化土層 礫質
3. 赤褐色 (10R5/2) 灰・黄土層 灰・礫土ブロック多量 中砂質 硬地塊
4. オリーブ灰色 (2.5GY5/4) 砂質土層 礫物混
5. 灰褐色 (7.5Y7/3) 砂・礫質
6. 暗灰色 (10B5/1) 黄土土層 礫質
7. 緑灰色 (4G3/0) 砂・灰・礫土ブロック多量 中砂質
8. 灰色 (10Y2/2) 灰層 灰・礫土ブロック多量 中砂質
9. 暗赤褐色 (5YR5/0) 灰・礫土ブロック 中砂質
10. 暗赤褐色 (5YR3/0) 中砂質 礫物混
11. 灰白色 (10Y8/2) 花崗岩風化土層 地山
12. 暗紫灰色 (10BG4/1) 花崗岩風化土層の還元土 礫質
13. 紫灰色 (5BG5/1) 花崗岩風化土層の還元土 礫質
14. 灰色 (10Y7/1) 還元土層
15. 暗紫灰色 (10BG3/1) 還元土層 礫質 スス入
16. 灰白色 (5Y7/2) 砂 還元土層 中砂質 礫物混
17. 灰白色 (7.5Y7/1) 礫質 還元土層の可能性も
18. 灰白色 (5N3/0) 花崗岩風化土層 礫質
19. 暗灰色 (5N3/0) 還元土層 礫質 スス入 礫物混
20. 暗灰色 (5N3/0) 還元土層 礫質 スス入
21. 暗赤褐色 (5YR4/1) 還元土層 スス入
22. 褐色 (10Y2/1) 灰層 礫含
23. 暗灰色 (5N3/0) 砂 礫物の灰・礫土ブロック多量 中砂質
24. 灰色 (7.5Y5/1) 還元土層 スス入
25. 灰白色 (7.5Y4/2) 礫物が還元前の状態で還元土 礫質
26. 礫物の熟土層
27. 緑灰色 (10GY5/2) 地山 花崗岩風化土層 還元土 礫質
28. 暗赤褐色 (7.5Y7/1) 地山 花崗岩風化土層 還元土 中砂質
29. 暗赤褐色 (5YR5/0) 灰・礫土ブロック 中砂質
30. 灰白色 (10Y8/2) 灰・礫土ブロック 中砂質
31. 赤褐色 (10R5/0) 還元土層 スス入
32. 暗赤褐色 (5YR4/1) 還元土層 スス入
33. 高褐色 (10YR5/0) スス入
34. 灰白色 (5Y8/4) 礫質 礫物混



1. 黄赤土層
2. 褐色 (5YR5/0) 中砂質
3. 暗灰色 (5YR4/1) 灰・暗赤褐色土ブロック混
4. 暗赤褐色 (5YR5/0) 灰・ブロック 中砂質
5. 灰白色 (10Y8/2) 礫物混
6. 11.9 (中砂質)
7. 灰白色 (7.5YR5/4) 灰・礫土ブロック多量 中砂質
8. 暗赤褐色 (10GY4/1) 灰口赤黄 礫質
9. 灰白色 (7.5YR5/2) 灰層 礫物混 中砂質
10. 暗灰色 (7.5YR3/1) 灰層 一部暗色 礫土ブロック多量
11. 灰褐色 (7.5YR4/2) 灰層 一部暗色 礫少量
12. 14C (砂とやわい) 灰・礫土ブロック多量
13. 灰白色 (7.5YR5/4) 灰多量
14. 暗色 (5Y7/0) 花崗岩風化土層の還元土 砂質
15. 暗赤色 (10R3/3) 礫土層 中砂質
16. 褐色 (5Y6/0) 礫土層 礫質
17. 灰色 (5Y4/1) 礫土層 礫質 スス入
18. 5.5 (中砂質)
19. 暗赤褐色 (2.5YR3/2) 礫土層 礫物混
20. 灰白色 (10B6/0) 礫土層 灰口混
21. 暗赤褐色 (5YR4/0) 礫土層 礫物混
22. 暗紫灰色 (10BG3/1) 礫質
23. 暗灰色 (5YR5/0) 中砂質
24. 暗赤褐色 (5YR4/0) 礫質 スス入
25. 16と17の中間硬質ブロック
26. 灰白色 (7.5YR5/4) 還元土層 スス入
27. 灰白色 (10R6/2) 礫質
28. 暗灰色 (5YR5/0) 灰・ブロック 中砂質
29. 赤褐色 (5YR3/2) 灰・暗赤褐色土ブロック混
30. 暗赤褐色 (5YR5/0) 中砂質
31. 暗灰色 (5YR4/1) 灰・礫土ブロック混
32. 暗褐色 (10GY4/0) 灰口赤黄 礫質
33. 暗赤褐色 (2.5YR3/0) 礫質
34. 暗赤褐色 (2.5YR3/0) 礫質
35. 暗褐色 (7.5YR5/2) 還元土層 スス入
36. 34と16の砂質
37. 褐色 (7.5YR5/1) 灰層 灰多量 礫物の還元土層
38. 暗色 (5Y7/0) 花崗岩風化土層の還元土 砂質
39. 暗赤色 (10R3/3) 礫土層 中砂質
40. 褐色 (5Y6/0) 礫土層 礫質
41. 暗褐色 (7.5YR3/0) 礫物混
42. 2.2 (中砂質) 暗褐色の礫層
43. 暗灰色 (10BG3/1) 花崗岩風化土層 礫質
44. 暗灰色 (10R3/3) 還元土層 スス入
45. 暗褐色 (5Y4/0) 礫質
46. 褐色 (5YR5/0) 中砂質
47. 暗褐色 (7.5YR5/0) 中砂質

第19図に对应

第20図 2号案灰原断面図 (1:50)

た酸化還元土（補修の薬入り粘土）であったこと、また溝内に遺物の流入が認められたことなどから、窯の廃絶後の早い時期で天井の崩落以前に形成されたと思われる。

#### 煙道部

焼成部と煙道部を画するものは、何ら存在せず、煙道部付近の構造は不明である。ただ煙道部については、常に構造が変化していたと考えられる。これは、窯体を取り囲む溝の存在と密接な関係があったと考えられ、次項において述べるものとする。

#### 窯体外周溝（SD17）

明気2号窯は、構築当初において、窯体を取り囲むように「逆U字形」の溝を配していた。この溝は幅0.5～1.2m、深さ0.15～1.2mで、窯体北側が南側に比べ深く掘り込まれている。北側の溝先端は、1・2号窯間のSK5につながっている。SK5と溝との落差は約1mである。

南側の溝は、北側に比べ浅い。先端は落ち込み2につながり、落ち込み2の最深部との比高は1.5m

を測る。

溝は、窯体の主軸上で煙道と接していた。煙道末端の窯体床面と外周溝底部との比高は約0.3mで、溝の窯体側壁面とその相対する壁面が幅約0.7mにわたり被熱（酸化焙）していた。

また、溝には徐々に土が堆積し、しかも堆積土の上面が被熱（酸化焙）している。このような状況の繰り返しが4層認められる。溝内の堆積土の増加に伴い、窯体の床面も延び、最終段階においては水平距離にして約0.5mの延長をみている。この延長部の床面についても、焼成部上方の床面と同様に、酸化還元化しているが、堆積土が還元化した範囲については、色調に明瞭な違いが認められる。

堆積土は、純粋に堆積したと考えられる混入物のない層と、焼土ブロック及び炭化物を含む層が存在した。

遺物については、北及び南側の溝においては若干出土しているが、窯体主軸上の付近については出土していない。

## 遺物

明気2号窯の遺物は、窯体床面・灰原ともに遺物は少量で、明気1号窯と同様、特に形式差は認められなかったため、一括して実測図を掲載し分類を行った。個々の遺物の特徴及び出土位置等は、出土遺物観察表を参照されたい。

#### 杯蓋（178～205）

明気1号窯と2基一対の操業を行っていたと考えられる2号窯は、出土する遺物からも、ほぼ同時期に操業していたと考えられる。但し、明気1号窯において、最も古い様相を呈する杯蓋A1aが、この2号窯では出土していない。したがって、若干操業時期を1号窯よりも遅らせる見方も可能かも知れない。

#### 杯蓋A1b類（178～180）

口径に対し器高が低く、扁平な特徴をもつ。個体数としては少量で、この傾向は1号窯でも同様である。

#### 杯蓋A1c類（181～189）

器高がやや高くなり、口辺部の内向する屈曲も顕著で、外面からの強い横撫でが施される例もある。

天井部の調整は、明気1号窯同様にヘラ切り不調整である。ヘラ切りの際、工具の当て方の違いにより生じたと考えられる底部の突出は、確かに存在するものの、1号窯ほど顕著ではない。

#### 杯蓋A1d類（190～205）

天井部の突出は顕著ではないが、ヘラ切り不調整の平坦な面を持つ。口辺部の屈曲は依然として著しい。明気2号窯においては、最も出土例が多い。

#### 杯身（206～225）

明気1号窯と同じように、出土する杯身は、全て古墳時代タイプのものである。底部にヘラ削りは全く認められず、全てヘラ切り不調整である。多少の例外もあるが、厚さが均一でない体部に比べ、「立ち上がり」部は作りがシャープである。

#### 杯身A1a類（206～208）

口径が比較的大きく、扁平な作りである。

#### 杯身A1b類（209～213）

若干ではあるが、口径の縮小化が見られ、体部から底部にかけて、やや丸みを持つ。

杯身A 1 c 類 (214)

底部が平坦で、器高もやや高くなる。

杯身A 1 d 類 (215)

口径に対し、器高が低い、扁平なものである。明気1号窯同様に、このd類の立ち上がりは、短く、しかも内反す傾向が顕著であり、受部についても形骸化が見られる。

杯身A 1 e 類 (216~222)

杯身A 1 d 類と同じように扁平な底部を持つが、突出する傾向が加わる。

杯身A 1 f 類 (223・224)

底部は平坦であるが、口径が小さいものを指す。

杯身A 2 c 類 (225)

口縁端部から底部までの厚みが均一で、全体的にまるみを持つ畿内的な様相をみせるものの内、小型化したものを指す。

高杯 (226~233) 全て無蓋の高杯である。杯部は口縁端部から2/3ほどの部分で稜を持ち屈曲する。口径が15cmを上回るもの(226~230)と12cm程度のもの(231・232)がある。後者は、杯部に2本の沈線を施し、体部の屈曲も直立ぎみである。

高杯脚部 (234) 脚部は中央付近で稜を持ち、やや外向きの広がりを経て終息する。裾端部は内側方向に斜傾し、内面にも弱い稜がある。

短頸壺蓋 (235) 口辺部は残存しないが、天井部には回転ヘラ削りがなされ、「N」字状のヘラ記号が施される。

壺 (236・237) 体部に2本の沈線を巡らせ、文様帯を作るが、櫛状工具による縦方向の圧痕が付く(236)と無文の(237)がある。

短頸壺 (238) 小型の短頸壺で、頸部は直立し、口縁端部は内・外反せず丸くおさまられている。小型無頸壺 (239) 残存部が少なく、器形は判然としない。

提瓶 (240) 体部にカキ目は施されていない。把手は形骸化が進んでいるが、先端が屈曲する点で古い様相を引いていると言える。口辺部外面には沈線が入り、内面には「一」のヘラ記号が付される。

小型甕 (241) 口縁端部は、断面が三角形状

を呈する形態を残し、外向きに斜傾する面を持つ。また、口縁端部の内面には強い横撫でが施される。

提瓶 (242) 体部にはカキ目が施される。把手は形骸化し、両肩にボタン状の粘土の張り付けが存在するだけである。頸部には、接近する2本の沈線が巡る。

器種不明須恵器 (243・244) 甕の体部片に見えるが、ヘラによって切断され、面取りが施されている。外面の叩きと内面の青海波文は、切断以前から存在していた。甕の製作途中において、器種の変更を行ったと考えられる。

窯体内堆積土 出土遺物 (245~253)

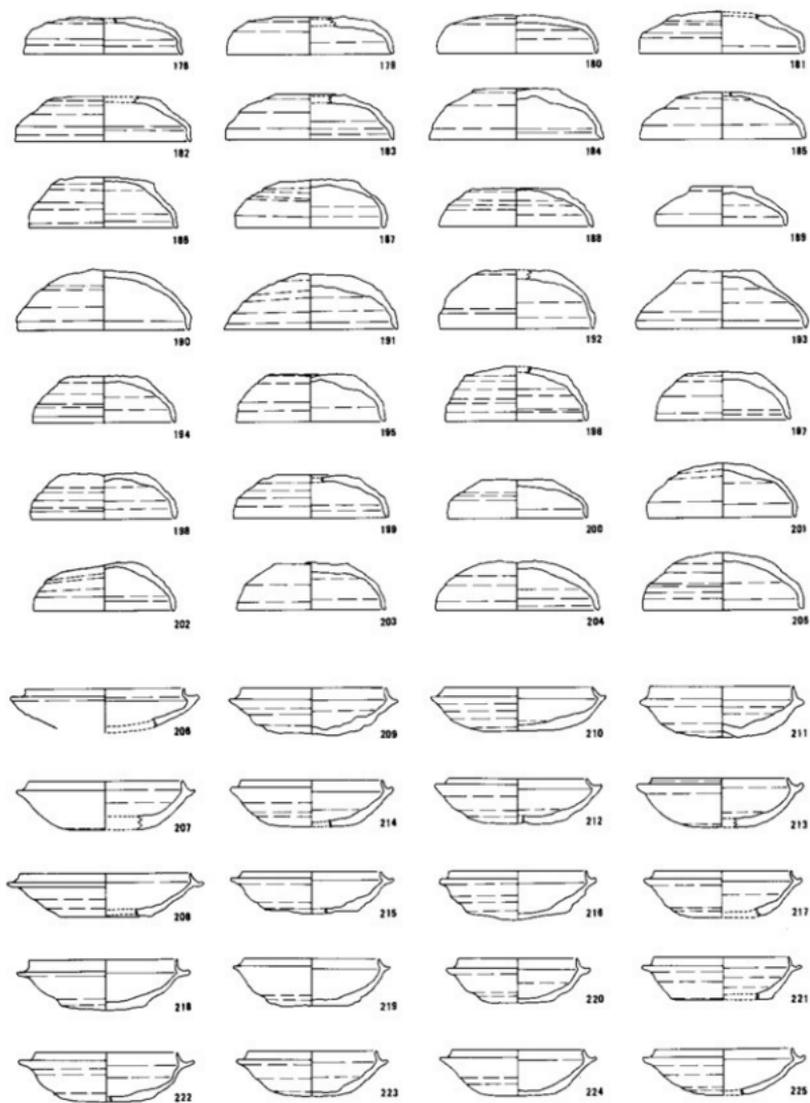
杯身 (245~248) は、杯身A 1 e 類の (245・247) をはじめ、杯身A 1 c 類の (246)、また杯身A 1 f 類の (248) がある。

碗 (249) は、体部に沈線を1本のみ巡らせるもので、底部は丁寧な回転ヘラ削りによる調整がなされている。内面の調整は、ロクロ撫でによる。

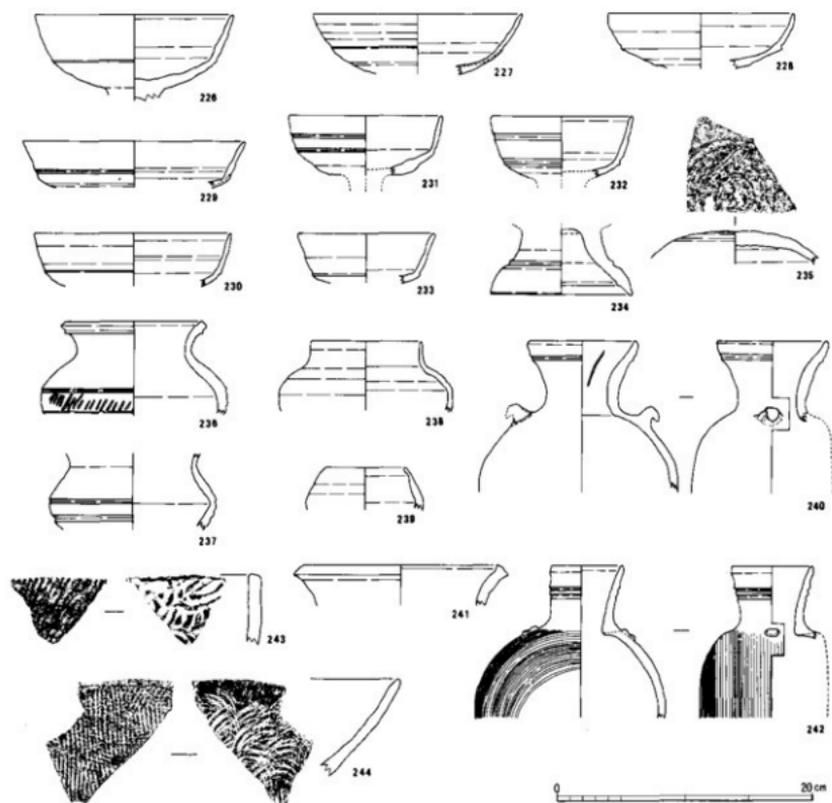
高杯 (250) は、杯部の口縁端部から2/3程度の位置に沈線を持ち、そこから、やや直立ぎみに口辺部を立ち上がらせている。口径は13.5cmと、1・2号窯の高杯においては、小型のものに属する

碗 (251) 体部は全体的に「下膨れ」の様相を呈し、一種独特の形態をなす。底部は撫でにより調整され、「N」字状のヘラ記号が付されている。体部には、2本の並行する沈線が巡り、その間に円形の孔を開けている。

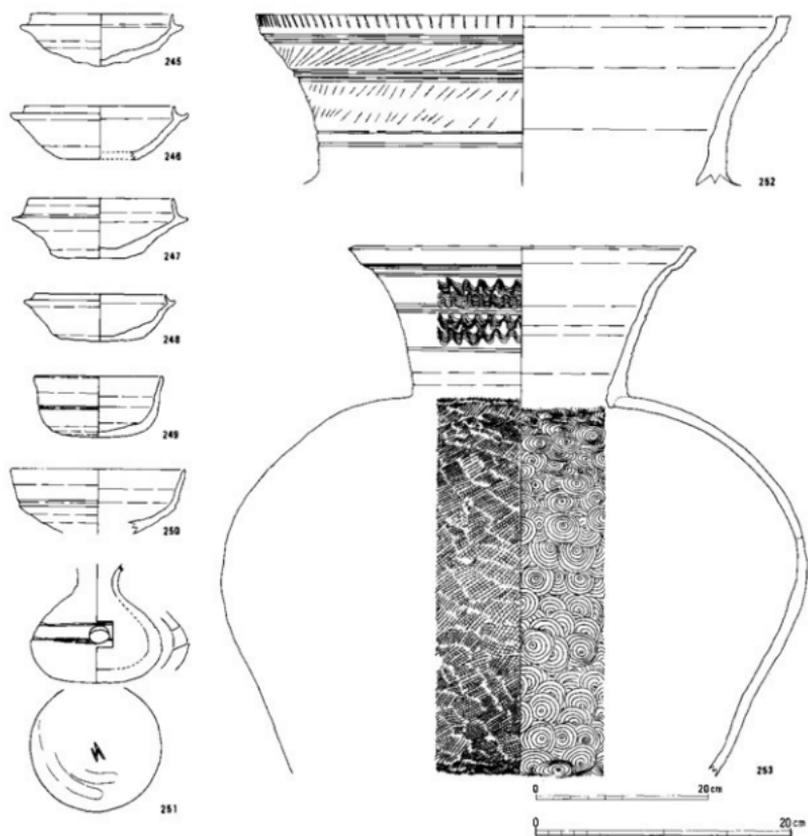
甕 (252・256) 口縁端部の肥厚化はあまり顕著ではないが、断面形は長方形をなし、沈線による断面三角形の凸線の名残は依然として表現が残る。口縁部内面には強い横撫でが施されている。また、外面には、文様帯が2本単位の沈線により区分されている。文様は、櫛状工具による斜方向の圧痕が付された(252)と、2本の波状文が巡る(253)がある。(253)は、2号窯の煙道付近に一括投棄されていたもので、出土位置から、窯体の廃絶後ある程度の年月を経て捨てられたものと考えられる。口径約40cm、体部最大径68cmで、今回の調査において最大の出土遺物である。



第21図 2号窯 窯体床面及び灰原出土遺物実測図 (1:4)



第22図 2号窯 窯体床面及び灰原出土遺物実測図 (1:4)



第23图 2号窟 窟体内堆积土中出土遺物实测图 (1:4 但し 253は1:6)

## 5. 明気3号窯

### 遺 構

明気3号窯は、調査区外に存在し、今回は灰原のみの調査となった。窯体は標高56.1mの尾根頂部付近に立地すると考えられ、現況では桧の植林がなされている。この尾根頂部の西側は、すでに民間開発により、大きく土取りがなされているが、本調査区との間隔は11m程度しかない。民間開発側の断面に窯体及び灰原層等は認められず、窯体はこの11m間に存在しているものと考えられる。

#### 灰 原

付近は植林地として土地利用がなされ、斜面を階段状にカットした土地が造られている。この造皮により灰原は2ヵ所で大きく切断され、それは造成断面において確認できた。

3号窯灰原の発端は、調査区内において最も標高を有しており、標高は54mを測る。調査区西壁に見られる灰原断面は、約5mの幅を持ち、そこから斜面を下方に向かい扇状の広がりを見せていた。

灰原の範囲は、発端の5m幅を基準に斜面下方へ

約30m、幅約17mの広がりをもつ。

基本層序は、表土下に明褐色土（花崗岩風化土・7.5YR5/8）が約0.5m堆積し、以下灰赤色軟粘質土、暗赤灰色土の灰原層、整地土層、旧表土と続く。

また灰原層は、斜面下方に向かりにしたがい、色調が薄くなっていく。基本的にこれは、くすんだ黄褐色軟粘質土とし、灰原と同等の扱いをした。

#### 整地層

尾根頂部付近の比較的平坦な土地は、明褐色軟粘質土（7.5YR5/6）による整地がなされていた。この層は、炭や焼土ブロック（～4cm）の混在するもので、遺物も含まれていた。調査区西壁から広がりをもち、第2断面においては幅7m、厚さは0.7mある。第3断面においても、その存在は確認でき、9m幅に、厚さ0.2～0.4m認められた。頂部平坦面においては、この層を切り込む形でS D14、S K15が検出されている。

### 遺 物

明気3号窯は灰原のみの調査で、窯体内の遺物は一切検出していない。

また、灰原は2層に分層できたが、時期差が認められるのではなく異なる層位で出土した遺物が接合するケースが多々見られた。

杯身・杯蓋については、いわゆる古墳時代タイプのもの、蓋に返りをもつものが併存し、その変遷を考える上で有効な資料となった。明気3号窯における小型化した古墳時代タイプの杯身・杯蓋をB類、蓋に返りを持ち、杯身に立ち上がりを持たないものをC類として、以下分類を試みたい。

杯蓋B類（254～277）

杯蓋B 1 a類（254～255）

口径に対し器高が低く、扁平な形態を持つ。口辺部には強い屈曲が見える。天井部の調整は、ヘラ切り不調整で、内面はロクロ撫でが施されている。

杯蓋B 1 b類（256～257）

や器高が高く、天井部の平坦面が目立つ。また口辺部における著しい屈曲は、強い在地色を示している。天井部外面はヘラ切り不調整で、内面は不定方向の撫でによる調整がなされる。体部及び口縁部の調整はロクロ撫でによる。

杯蓋B 2 a類（258～267）

全体的に丸みを帯び、畿内の様相を見せる。ただし、口辺部の屈曲については一部残存する。

杯蓋B 2 b類（268～277）

全体的に丸みを帯び、体部の厚みも均一で、畿内の様相を色濃く示している。口辺部の処理も屈曲することなく、なだらかに傾斜し、丸みをもって終息する。

杯身（278～291）

杯蓋B類とセット関係になる、小型化した杯身B

類が中心に出土している。しかし、前段階の杯身A 1 c 類 (278・279) の共伴もあり、過渡期にある窯の多様性が窺われる。

#### 杯身B 1 a 類 (280~284)

小型化が進み、受部の形骸化も著しい。立ち上がり部は、受部から僅かに出る程度で、摘まみのない「蓋」と言っても過言ではない程の作りである。しかし、底部はヘラ切り不調整で、杯身の範疇は越えられないようである。

#### 杯身B 1 b 類 (285~291)

受部の形骸化は頂点を極め、立ち上がり部は、受部と同じ高さしか立たず、中には、下回るものさえ存在する。

#### 杯蓋C 類 (292~343)

杯蓋C 類においては、返りがつば部よりも下方に出るものをI 類、返りがつば部よりも下方に出ないものをII 類とし、更に、返りはつば部より下方に出るものの、平坦な天井部が80度程度屈曲し、返り部に移行するIII 類に分類した。また、a・b・c を用い細部に関する分類をも試みた。

杯蓋C 類は、全て天井部に回転ヘラ削りを施す。つば部付近には、横撫でが見られ、内面もクロコ撫での調整が行われている。

#### 杯蓋C I a 類 (292~296)

体部の厚みは比較的均一で、やや丸みを帯びた傾斜をなす。

#### 杯蓋C I b 類 (297~307)

体部は厚く偏平である。つば部は、下方ではなく横方向へその先端を向ける。

#### 杯蓋C I c 類 (308~321)

杯蓋C I b 類と同様に、体部は厚く偏平であるが、つば部は、下方への傾斜をもって終息する。(308・309) は、摘まみが偏平なボタン状を呈し、他の擬宝珠状のものと異なる。セット関係になる器種に違いがある可能性も捨てきれない。

#### 杯蓋C II a 類 (322~331)

杯蓋C II 類の中で、比較的偏平なものを指す。

#### 杯蓋C II b 類 (332~336)

山笠状の体部を持つ。天井部からの傾斜は、つば

部直前にやや角度を変え、つば部は横方向にその先端を向ける。

#### 杯蓋C II c 類 (337・338)

口径はやや小さく、山笠状を呈する。

#### 杯蓋C III 類 (339~343)

天井部には、回転ヘラ削りによる調整がなされ、屈曲した端部付近は、横方向の強い撫でにより調整される。つば部・返りともにシャープな作りを見せる。

#### 杯身C 類 (344~359)

#### 杯身C I a 類 (344~347)

口径が最も小さく、8 cm を下回る。底部はヘラ切り不調整で、体部はクロコ撫で、底部内面は乱撫で・一定方向の撫でが認められる。

#### 杯身C I b 類 (348~354)

調整及び口縁端部の処理については、杯身C I a 類と同様であるが、口径がやや大きく8 cm を上回るものである。

#### 杯身C I c 類 (355~357)

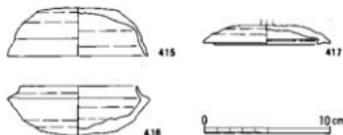
体部の傾斜がやや弱くなり、底部径に対し口径が広がりみせる。

#### 杯身C II 類 (358~359)

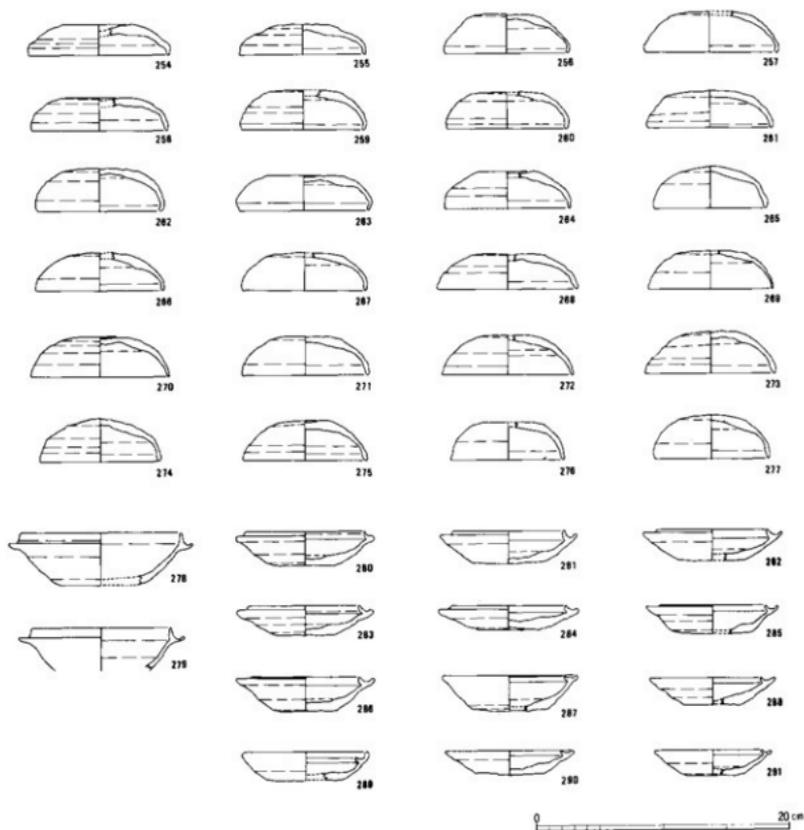
器形はやや偏平で、口縁端部が体部から直立して終息する特徴を持つ。

#### 小型甕 (380~390)

口縁部において、断面形が僅かに三角形を呈する(380)がある。(383・384)において、吉相を示す三角形の断面は、その形を崩し、長方形を呈し始める。(381・382・385・386)は、口縁部の断面形が、長方形に肥厚化し、端部に帯部を形成する。(387)は、長方形の肥厚化した部分が見られなくなるものの、帯部は沈線によって形骸化しながらも残っている。(388・389・390)は、肥厚化した帯



第24図 3号窯整地層出土遺物実測図 (1:4)



第25図 3号窯灰原出土遺物実測図(1:4)

部が見られなくなると共に、頸部が大きく角度をもって屈曲する。

大型甕(391~400)

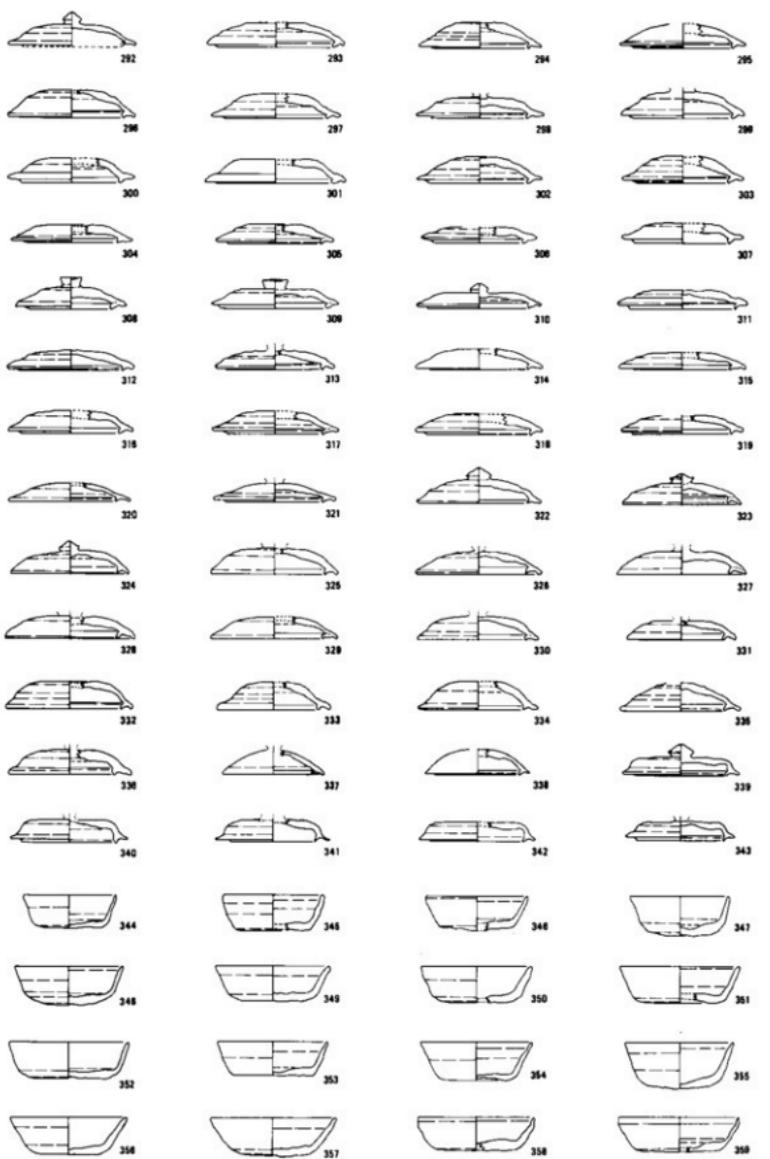
大型甕は、明気1・2号窯と同様に、装飾過多な傾向にあり、沈線により区分された頸部には、波状文をはじめ、櫛状工具による縦方向の施文が見られる。(391~393)断面が三角形状をなす口縁部は端部に強い撫で調整を施し、内面に凸線を作る。

(394・395)は、三角形状をなす断面が、やや退化する傾向にある。(396)は、口縁部の断面形が長方形を呈し、肥厚化した帯部を作る。(397・398)

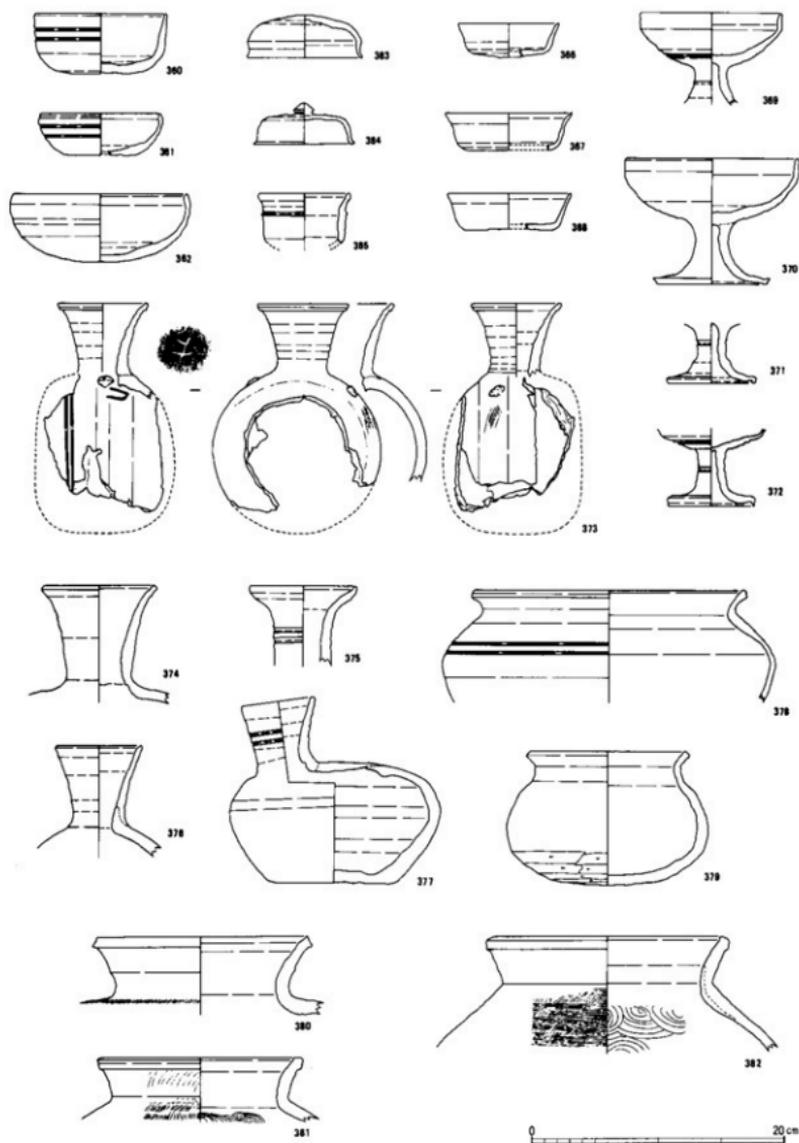
は、口縁端部の肥厚部は顯著で無くなるが、端部内面に強い横撫でを施し、沈線で区画する無文帯を持つ。(399・400)口縁端部の肥厚部はなくなるが、端部外面に施された沈線にその名残を見ることが出来る。

その他の遺物

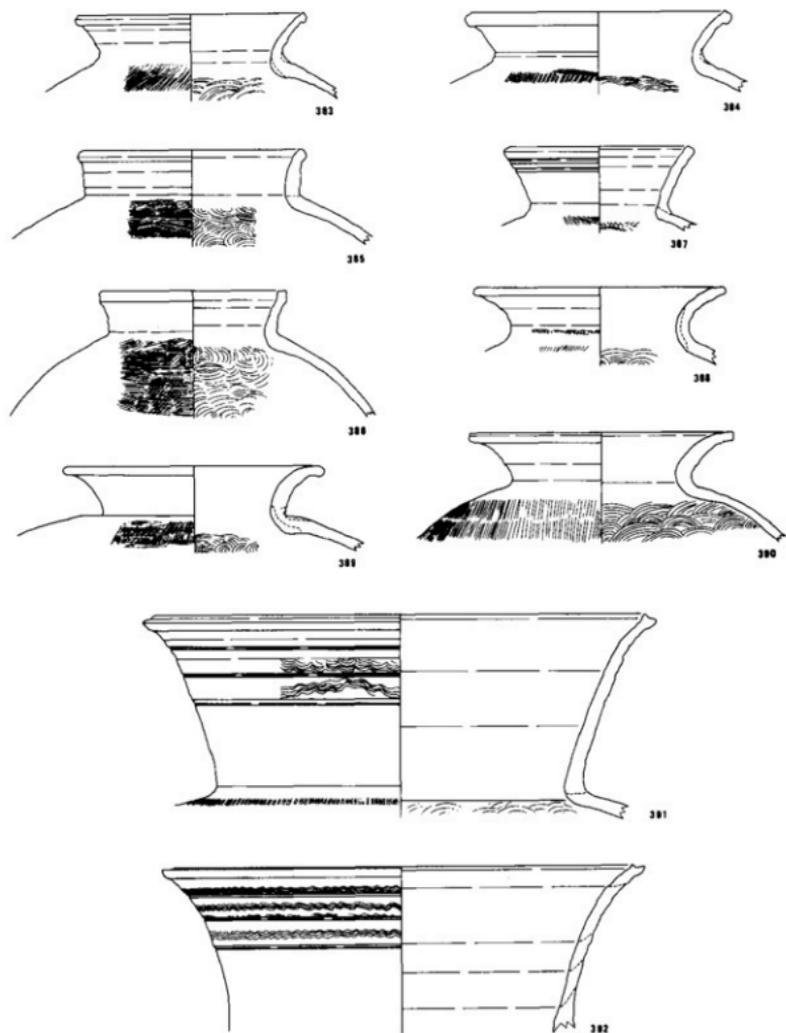
(406)は、内外面に叩きを施す。陶棺の可能性もある。(407)は甕の体部片であるが、粘土の接合部に青海波文を施し、粘土どうしの接着を促進している。(408~414)は甕の頸口切断片である。



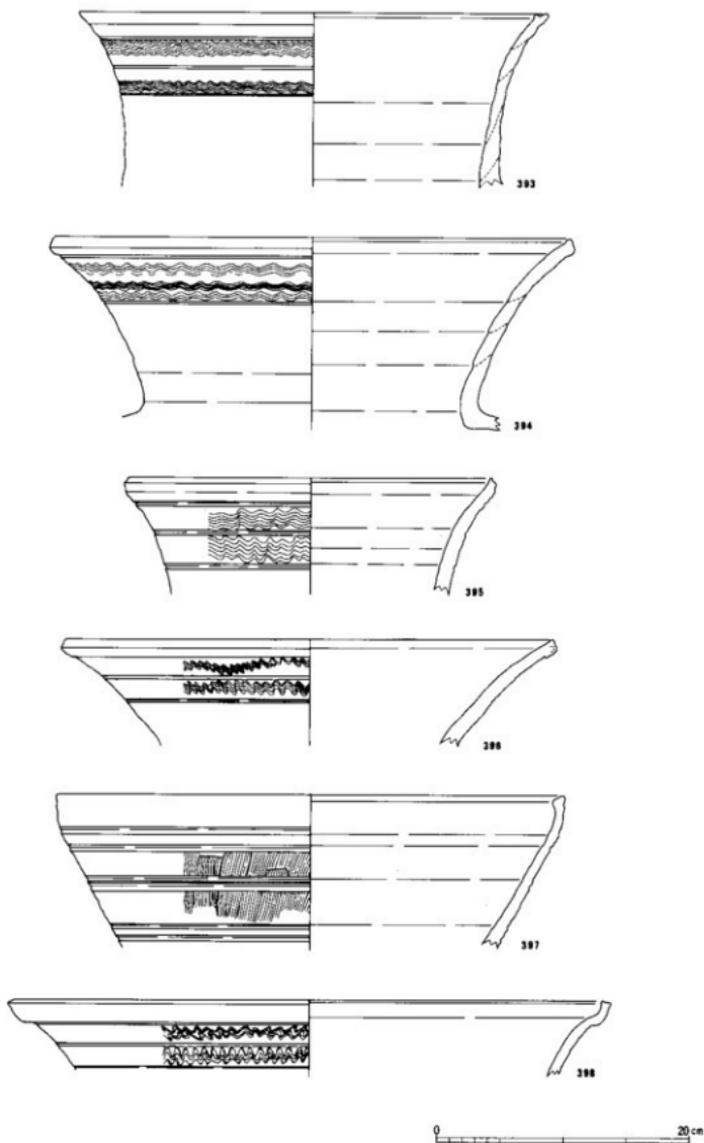
第26图 3号窑灰原出土遗物实测图(1:4)



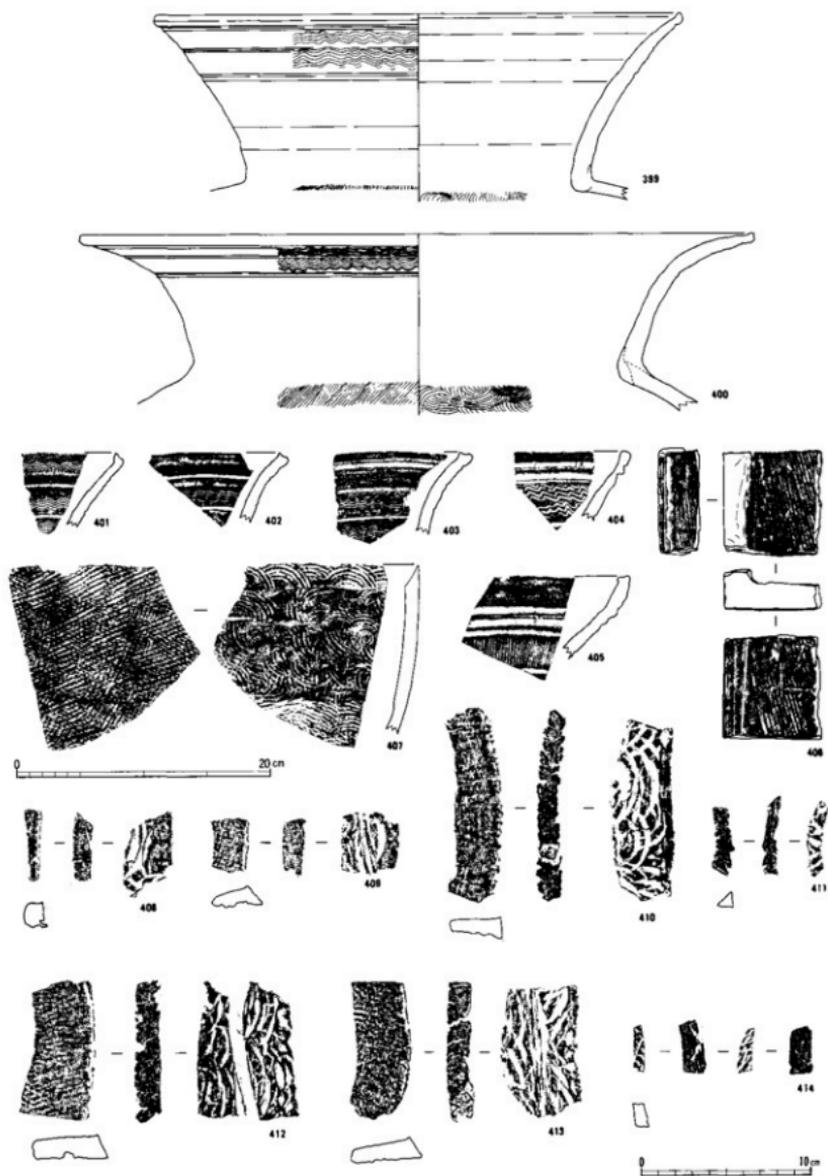
第27图 3号窯灰原出土遺物実測図(1:4)



第28图 3号窯灰原出土遺物実測図 (1:4)



第29图 3号窑灰原出土遗物实测图(1:4)



第30図 3号窯灰原出土遺物実測図及び拓影 (1:4 但し 408~414は1:3)

## 6. 明気4号窯

### 遺 構

明気3号窯灰原の南側、谷筋の最深部には最大幅10m、標高差10mの窪地が斜面にそって存在する。これは、地滑りによって生じた地形変化に起因すると思われる。明気4号窯は、この地滑りによって全壊したと考えられ、わずかに焼成部床面を東西1.8m、南北1.3m残すのみとなっている。

残存する窯体は、1・2号窯同様、床面に川砂が敷かれている。砂中からは、甕体部片・杯身とともに、焼台に使用されたと思われる河原石（チャート系）が出土した。この事からも、残存する部分は焼成部と考えられる。

床面の傾斜角度は、水平値に対し約20度である。床面に敷かれた川砂は酸化還元状態にあるが、砂層

下の地山（花崗岩風化土）の被熱程度は比較的弱く、硬化はあまり見られなかった。床面焼土層の層序は、第1層明青灰色砂（10BG7/1）、第2層黄色硬質土（5Y8/6）、第3層赤褐色軟質土（2.5YR5/8）で、第2・3層が地山に対応する。

床面北側には窯壁の立ち上がりの残存が5cm程度認められる。これは、第3層赤褐色軟質土が主であり、部分的に第2層黄色硬質土も認められた。

窯体の主軸方向はN60°Sで、残存する窯体の標高は49.6mである。

地滑りにて生じた窪地の下方は、水田として利用されていたが、窯体の残骸及び灰原の2次堆積は認められなかった。

### 遺 物

明気4号窯の遺物は、杯身が3点出土した他は、同一個体と思われる甕の体部片が少量ある。

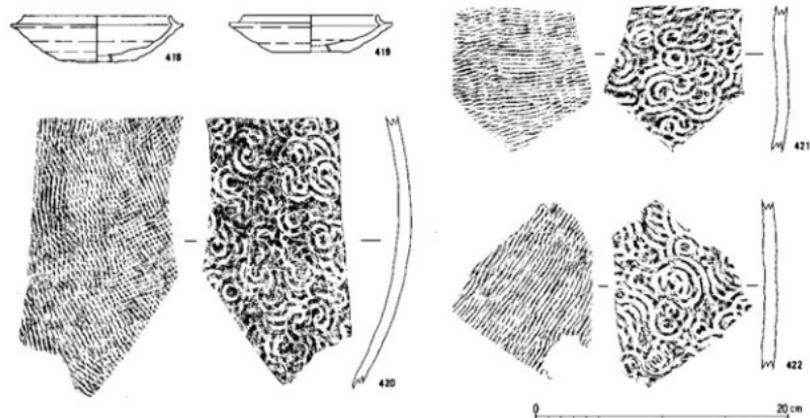
杯身（418・419）

（418）は杯身A1c類に、（419）は杯身A1d類に分類できる。（419）の立ち上がりは、粘土の

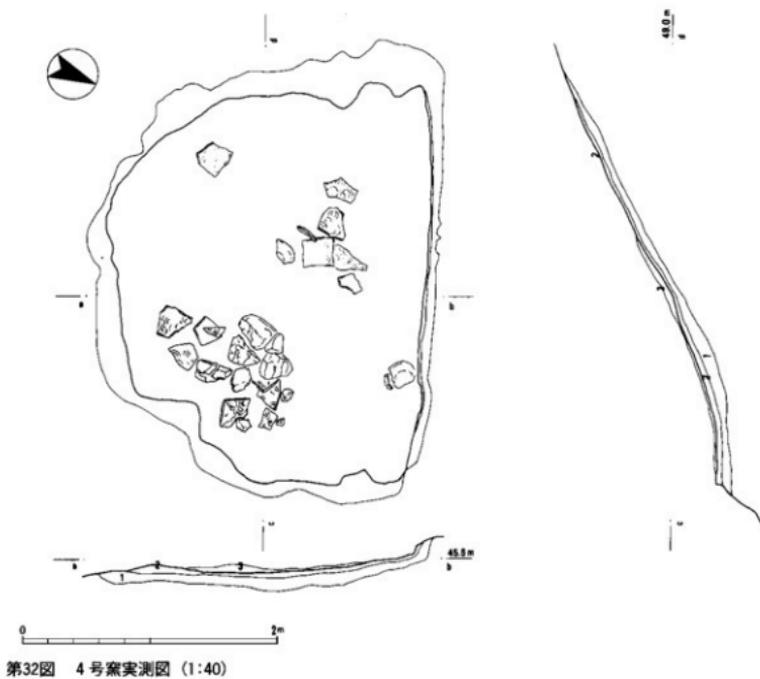
張り付けによる可能性がある。

甕体部片（420～422）

外面は平行叩きを、内面は青海波文を施す。その他、焼台として利用されたと考えられる被熱した河原石も出土している。



第31図 4号窯 窯体床面出土遺物実測図（1:4）



## 7. 明気5号窯

### 遺 構

#### (1) 窯体構造

##### 前庭部・焚口部

本調査区の南端、窯跡群の位置する谷筋の最深处に立地する。調査区南側の町道敷設工事に伴い、窯体の中央より煙道側半分が失われるとともに、道路と同レベルの削平も受けていた。また、明気4号窯に全壊をもたらせた地滑りは、明気5号窯の先端にも影響を及ぼし、前庭部・焚口を消失させている。

##### 燃焼部

僅かではあるが存在が認められた燃焼部は、残存する窯体規模全長4.76mの内、谷側の0.75mを占めていた。幅は1.4mで、壁の立ち上がりは、南側が弧を描き内反するのに対し、北側は比較的直線を呈する。

燃焼部と、続く焼成部を画するものはないが、床面堆積土の差異により、概ねその範囲を把握することができる。燃焼部には黒色土(10YR1.7/1)の灰層を上層とし、以下暗灰黄色硬質土(2.5Y5/2)、灰オリブ硬質土(7.5Y4/2)の被熱層、暗褐色焼土・炭ブロック混在土(10YR3/3)の堆積が認められた。被熱層は灰層が高温を受けて硬化したものと考えられ、酸化還元状態に近い。

##### 焼成部

焼成部は残存する窯体の大半を占め、水平距離で3.95m、最大幅は2.14mである。床面は、燃焼部側ではほぼ水平を呈するが、次第に斜度を強くし、最大20°の傾斜を持つ。

窯壁は最大で0.8m残存し、燃焼部に近い南壁で大きく弧を描き内反する部分が残る。被熱層は、窯体内側から順に暗オリブ灰還元土(2.5GY3/1)、黄灰色硬質土(2.5Y6/1)、黄褐色硬質土(2.5Y5/6)、暗赤色軟質土(10YR5/6)の4層に分層できる。

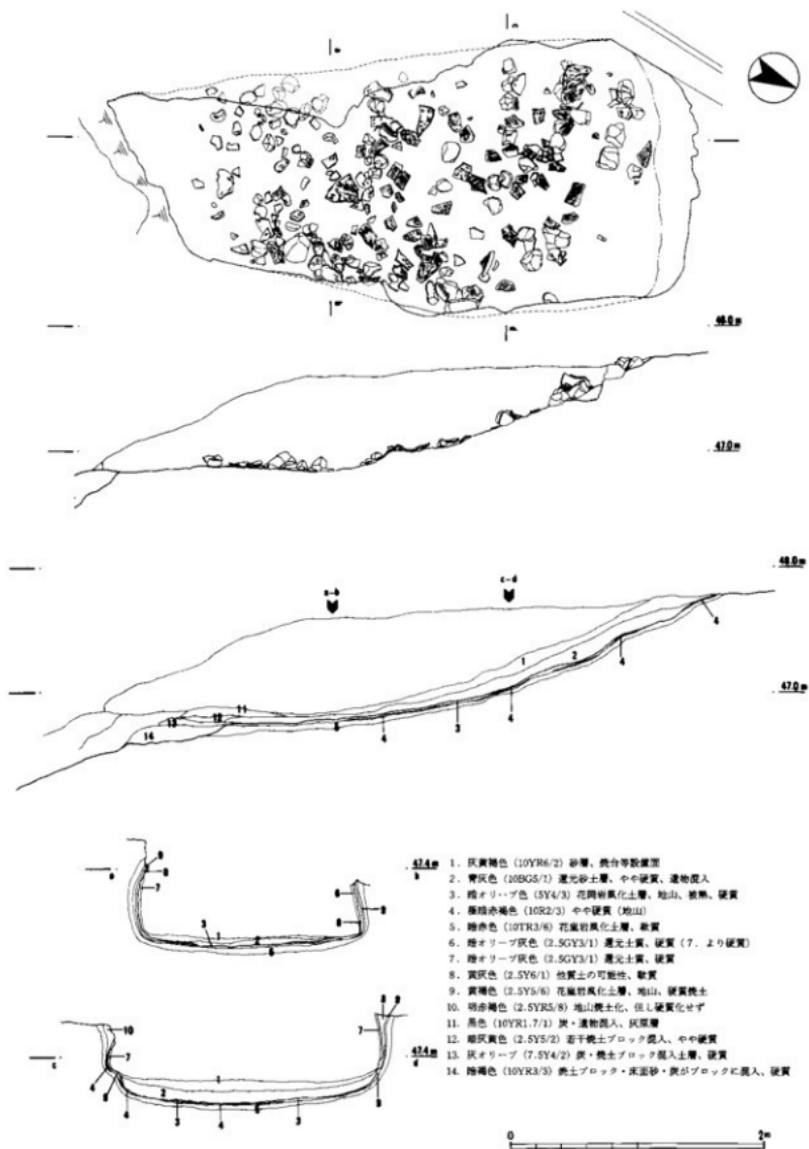
床面には川砂が厚く敷きつめられ、20cmに及ぶ箇所もあった。砂の敷設は水平面に対し斜面側が厚い特徴を持つ。床面の被熱層序は、灰黄褐色砂(10YR6/2)・青灰色砂(10BG5/1)の酸化還元層、暗オリブ灰硬質土(5Y4/3)、暗赤色軟質土(10Y3/6)の酸化焰層からなる。砂層以下は地山(花崗岩風化土)である。

被熱第1層目の灰黄褐色砂(10YR6/2)層上には、窯の体部片を中心に遺物の散乱が見られた。遺物の詳細については後述するとして、ここで焼き台(置き台)について触れておきたい。焼き台は、直径15~20cmの河原石や粘土塊で、ほぼ元位置を保った状態で検出された。これらは3個体程度で一つのまとまりを形成しており、その配置は窯体の主軸に対し直交する形で、少なくとも3~5グループが3列並んでいたと考えられる。また、こういった焼き台の中には、窯の体部片を利用し、焼成物の安定を図ったと思われるものもある。

#### (2) 灰原

前庭部・焚口部がともに消失していたように、灰原についても大半が地滑りにより姿を消していた。しかし、明気5号窯の残存する窯体から約7m東に離れた斜面には部分的に灰原の残存が認められた。

灰原は、灰褐色軟粘質土(5YR4/2)と黒褐色軟粘質土(5YR3/1)に分層できたが時期差は認められず相互の出土遺物が接合する場合が多々あった。灰原の分布範囲は西限を地滑り、北限を斜面下方として広がりを見せる。東側へは徐々に薄くなりながら延び、調査区外へと続く。また、南端は町道際に求められるが、これは明気5号窯の削平面とはほぼ同レベルであり、焚口よりも灰原の方が比高を有したと考えられる。同様の例は、明気1号窯においても認められ興味深い。



第33図 5号竈実測図 (1:40)

## 遺物

明気5号窯は、明気1・2号窯窯期の遺物と、3号窯並行期の遺物が共存して出土している。

窯体床面出土遺物（423・431・460・463）

杯蓋（423・424）

口縁端部の屈曲に代表される、在地的な要素は残るものの、全体的な様相は畿内の要素を充分に取り入れている。

杯身（425・426）

ともに立ち上がり部の形骸化は著しいが、口径の差は、伝統的な1・2号窯期の手法を残している。

小型杯（427）・碗（428・429）

小型杯はいわゆるミニチュア土器と考えられるもので、ロクロは使用していない。碗は両者ともに酸化還元はしておらず、赤褐色を呈する。（428）は精巧な作りしており、底部の調整は静止ヘラ削りである。

捏鉢（430・431）

ともに底部のみの残存で、焼成についても還元状態には至っていない。底部の外面は、特に調整もなく、小孔の穿孔も存在しない。

平瓶（460・463・464）

灰原出土の（464）のみにボタン状の粘土の張り付けが認められる。また、この平瓶のみへラ削りが施されている。灰原層と窯体床面の時期差を考えると興味深い。（460・461）には体部に2本の沈線が巡る。ほとんどのものが、焼成途中で破裂したらしく、破片となってから酸化還元したと判断できるものもあった。

灰原出土遺物（432～459）

古墳時代タイプの杯蓋と杯身（432～439）

畿内の要素が感じられる点で共通する杯蓋であるが、明気1・2号窯期（434）のもの、3号窯期（432・433）のものが混在している。この傾向は杯身においても言え、明気1・2号窯期の（435～438）と明気3号窯期の（439）がそれである。

返りを持つ杯蓋と受部のない杯身（440～447）

天井部にカキ目を施す杯蓋は、返りを持つ杯蓋の中でも古い様相を示すと考えられ、生産する土器の変遷を考えるうえで有効な資料となった。

高杯（448～455）

（448～451）は杯部のみの出土で、稜をもって体部は角度を強め立ち上がる。口縁端部の処理は、シャープな作りの（448・449）と丸みを帯びて終息する（450・451）がある。高杯脚部は、明気1・2号窯期の長脚2段透かしは姿を消し、全て短脚のものとなる。但し、透かしを入れる伝統は根強く（455）においては、上下2段に入れる透かしを、90度ずらして施している。

小型短頸壺（456・457）

（456）は無文であるが、（457）は体部に2本の沈線を巡らし、その間に櫛状工具による縦方向の圧痕をつけている。

平瓶（458・459）

（458）は底部に、いわゆる「カメ板」の痕跡が残る。特に明気5号窯は、平瓶の出土が多かったが、痕跡が認められたのは、本遺物一点のみであった。

大型甕（465～470・472～474）

口縁部における断面形が長方形を呈し、口縁端部内面からの強い横撫でにより、やや外反する帯部が存在する（465・467・470・473・474）は、頸部を数本の沈線により区画し文様帯を作る。文様については、波状文の他に櫛状工具による縦方向の施文がある。

（466・469）は、口縁部断面形が長方形を呈し肥厚化した帯部には、凸線の名残が残る。

（468・472）肥厚化した口縁端部の帯部は姿を消し、口縁端部形成の手法は形骸化を見せる。しかし、口縁端部は2本の沈線にて区画され名残をとどめる。

小型甕（471）

口縁端部の肥厚化や凸線の施入などの装飾性は一切無く、端部は丸く処理されている。

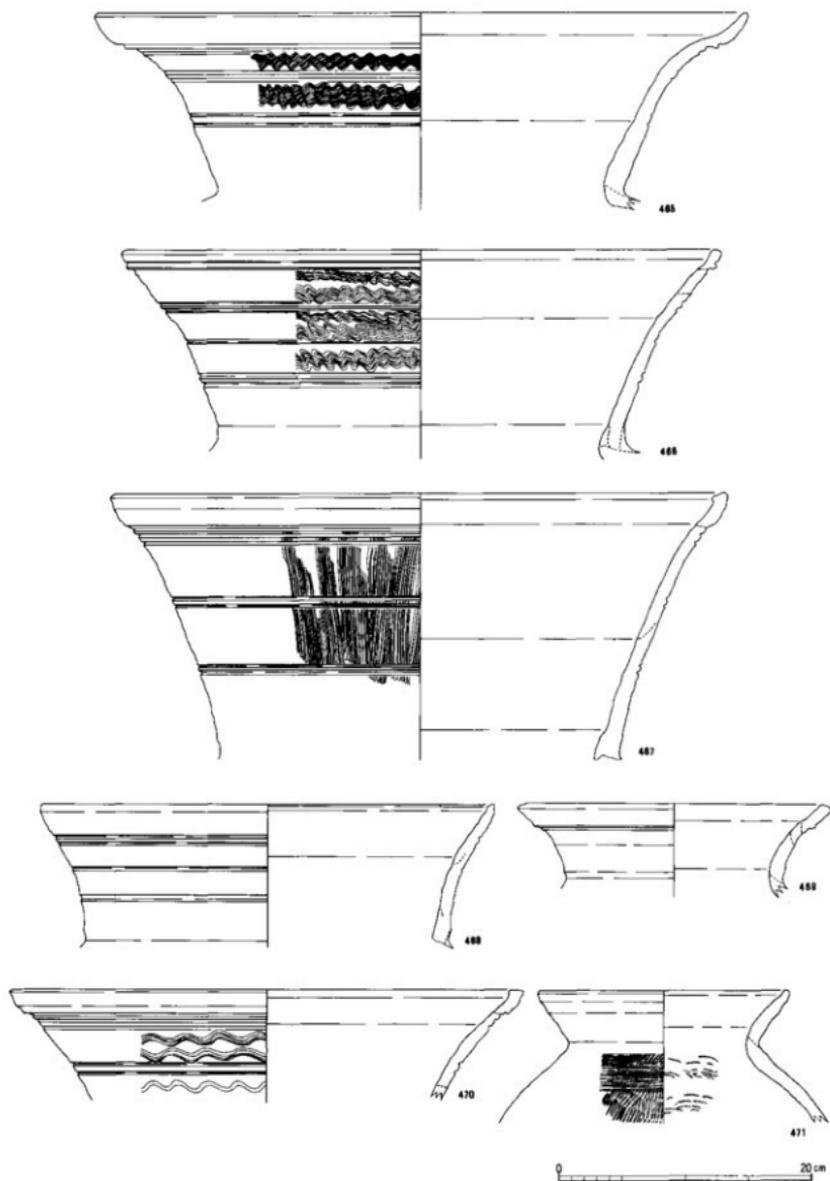
甕体部片（475～482）

（475）は破断面に青海波文が施されているが、粘土の接着性を良くするために、接合箇所に打たれた青海波文が、ポジティブに反映されたものと解釈する。このケースは他にも多く見受けられた。体部片は、外面が並行叩き、内面は青海波文が施されている。

頸口切断片（483～495）

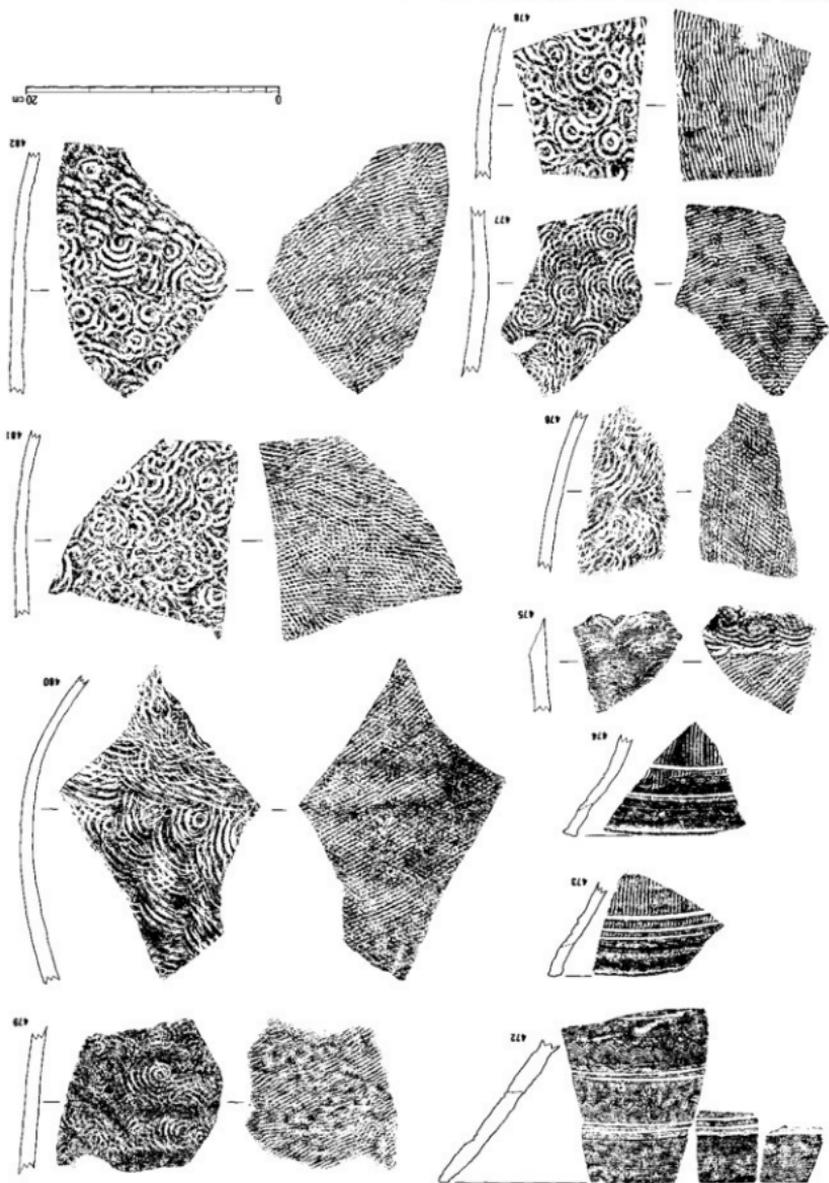
5号窯にて最も多く出土している。

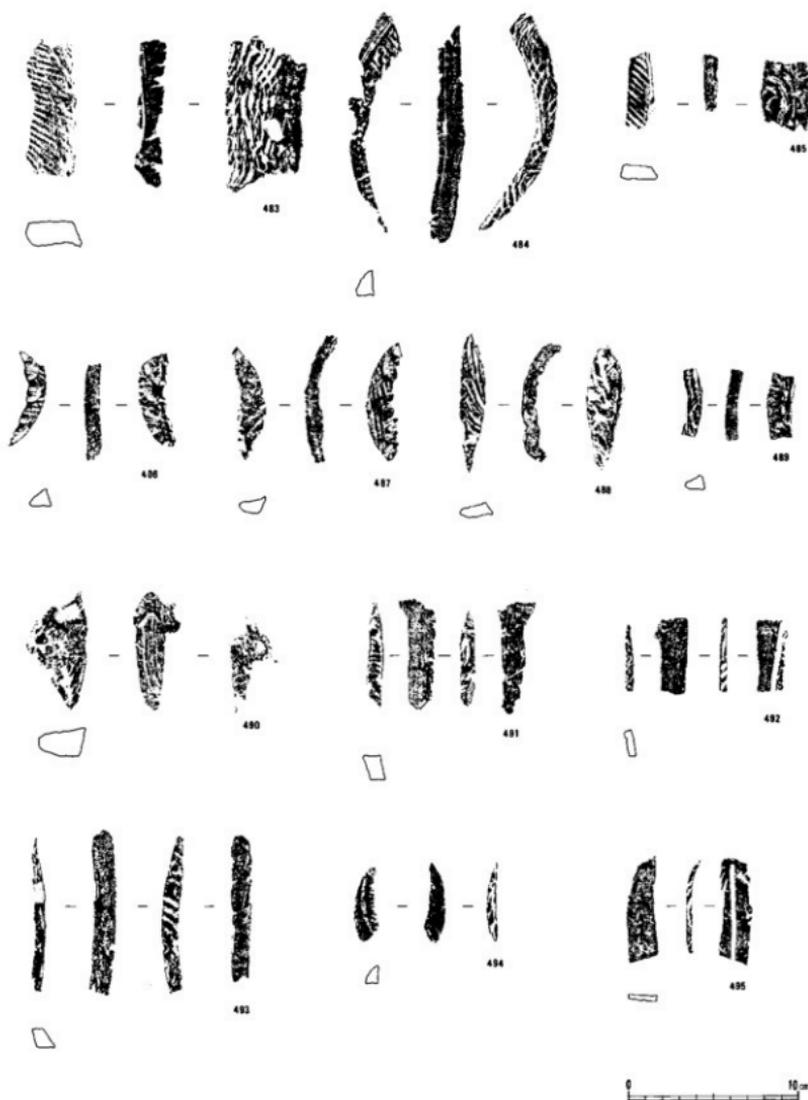




第35図 5号窯 窯体床面及び灰原出土遺物実測図 (1:4)

第36图 5号室 聚体床面及び反原出土遺物断面実測図・拓影 (1:4)





第37图 5号窟 窯体床面及び反原出土遺物断面実測図・拓影 (1:3)

## 8. その他の遺構

### (1) 尾根上の遺構群

窯体が構築された尾根の頂上部には、多くの遺構が存在する。これらは、総合的に見て工跡の可能性を持つものである。

SH6 尾根頂部に存在するが、西側は土砂崩れにより原形を止めない。明瞭な南北辺が4.7m、床面に粘土を貼った痕跡はなく、検出面からの深さは0.1mである。北東隅に被熱（酸化焰）した部分が認められるが、甕の存在は断言できない。またこの付近からは、大甕の体部片が多数出土している。

床面には多数の柱穴が存在するが、セット関係にあるものは把握できなかった。また、ロクロビットも認められなかった。平面プランでは、1棟の竪穴住居しか確認できなかったが、ほぼ同位置での建て替えが行われた可能性は充分に考えられる。

SK7 SH6の北側に隣接して存在する。長軸は1.3m、深さは0.35mの楕円形で、2個のPitを伴う。埋土に多量の淡黄灰色粘土を含んでいたことから粘土ビットである可能性が高い。また、この土坑からは、明気1・2号窯並行期の高杯（No568）が出土している。

SK8 竪穴住居の立地する部分は、明気1・2号窯の上方に広がる平坦面より、1.2m程の比高を持つ。これは人為的なもので、平坦面を構築する際に生じた段と思われ、この段を切る形でSK8が存在している。この遺構の性格は判然としないが、その位置から、尾根頂部と作業場を結ぶ階段として利用されていた可能性がある。また、後述するSD9や櫛と共に尾根頂部を区画するものであったとも考えられる。

SD9 調査区北端の傾斜面に位置する。尾根筋と同方向に延びるこの溝は、作業場と考えられる平坦面手前で途切れている。SK8と共に竪穴住居を含む尾根頂上域を区画する溝と思われる。

櫛 前述の通り、尾根上の平坦面と竪穴住居を含む尾根頂上域には、比高1.2m程の段が存在している。この段の縁辺、SK8とSD9を結ぶラインには、多数のビットが点在している。これらは、等間

隔に並ぶものではないが、一種の櫛列が存在したものと考えられる。

SK10 尾根上の平坦面南端に位置する。長軸2.4m、短軸1.0mの歪な長楕円形をなし、深さは0.5mである。性格は不明であるが、明気1・2号窯併行期の須器杯蓋（No569）が出土している。

### (2) 谷筋の土坑とビット群

SK11~13 明気1・2号窯と3・4・5号窯を画する弱い谷筋に存在する。他の土坑が楕円または歪な長楕円形であるのに対し、比較的正方形を意識したものとなっている。概ね長辺1.1m、短辺0.8m、深さは0.8mである。堆積土から須器片が出土しており窯の操業時期のものと思われる。

3号窯の東側斜面には200ヶ所近くのビットが存在する。これらの埋土は、灰原層と同質で須器片が出土するものが多かった。企画性を持った配列等は認められず、SK11~13と共に性格は判然としな

### (3) 明気3号窯に付属する遺構群

SD14 明気3号窯前庭部の整地層を掘り込み作られた幅0.35m、深さ0.15mの溝である。後世の開墾により先端は確認できないが、溝の方向が斜面の方向と一致するため、排水溝など、窯体に付随あるいは関係するものと考えられる。

SK15 SD14と同じく明気3号窯前庭部の整地層を掘り込み形で設けられている。検出した部分は極僅か、大半は調査区外に存在するものと思われる。土坑の深さは0.1mと浅いが、埋土は暗赤灰色土（灰原層）で、焼土ブロック・炭を多量に含んでいた。この部分は、灰原の堆積が最も厚い箇所でもあり、窯体の中軸線上にあたりとされる。

SK16 明気3号窯の前庭部南西に位置しており調査区外に延びている。規模は現状において、長軸2.8m、短軸1.5m、深さ0.4mである。底近くから甕の頸口部（No570・571）が出土している。先述のSK15を窯体の中軸と考えた場合、SK16は明気2号窯における外周溝と似た位置関係となる。従って土坑ではなく、溝である可能性も考えておく必要が

ある。

#### (4) 落ち込み1～3

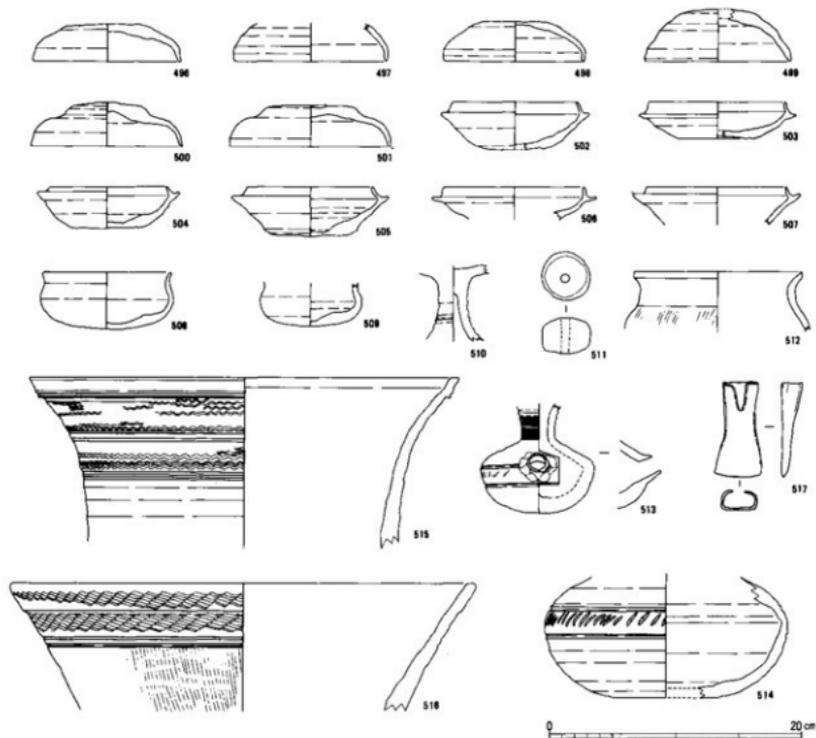
落ち込み1については、すでに明気1号窯にて述べているので割愛する。落ち込み2・3は、明気2号窯の南側にあって、窯体と並行する窪地である。2号窯を取り囲む外周溝の先端がこの落ち込み2につながっている。

明気2号窯は、斜面の弱い「張り出し」の北側に構築されているが、落ち込み2・3の存在は、2号窯の南側に空間を造り、窯体を「張り出し」から独立させることに役立っている。斜面をつたって流れる雨水を、窯体を避けて下方へ流すためのものであった可能性がある。また並びはしないが、落ち込み1・2に見られる多くの点在するピットから、尾根上の作業場とを結ぶ足場が組まれていた可能性もある。

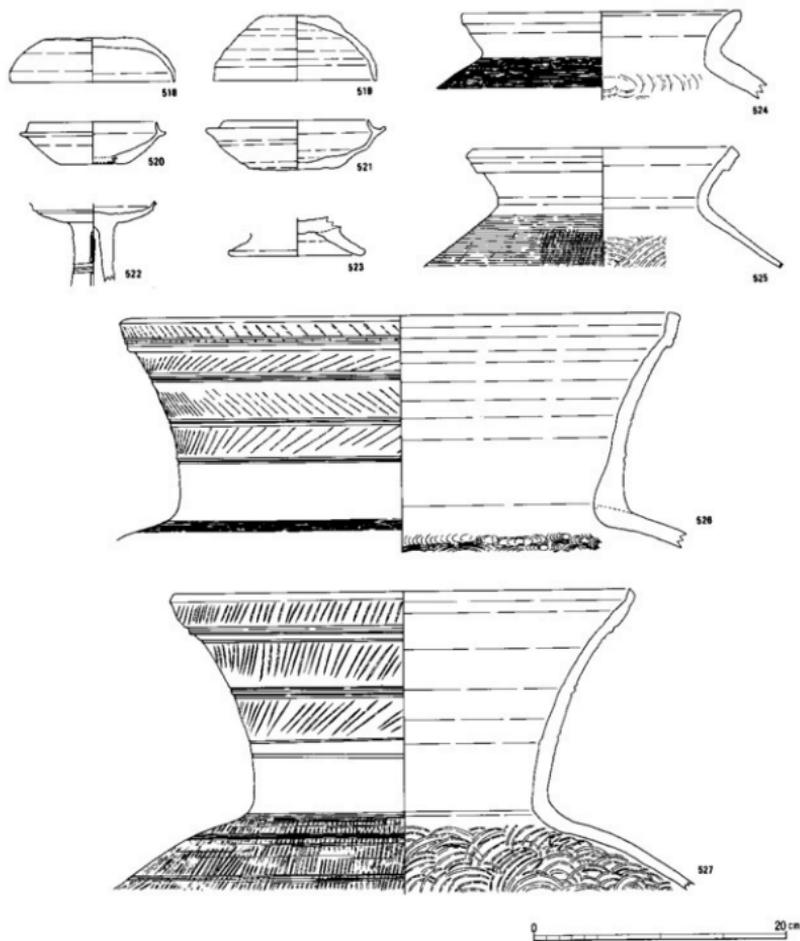
いずれにしても、2号窯の立地と密接な関係を持って人為的に造られたものである点に誤りはないと思われる。

落ち込みからの出土遺物は、窯の体部片を中心とし多量に認められた。落ち込み3については、2号窯からの灰原の進入が主たる堆積層を成していた。

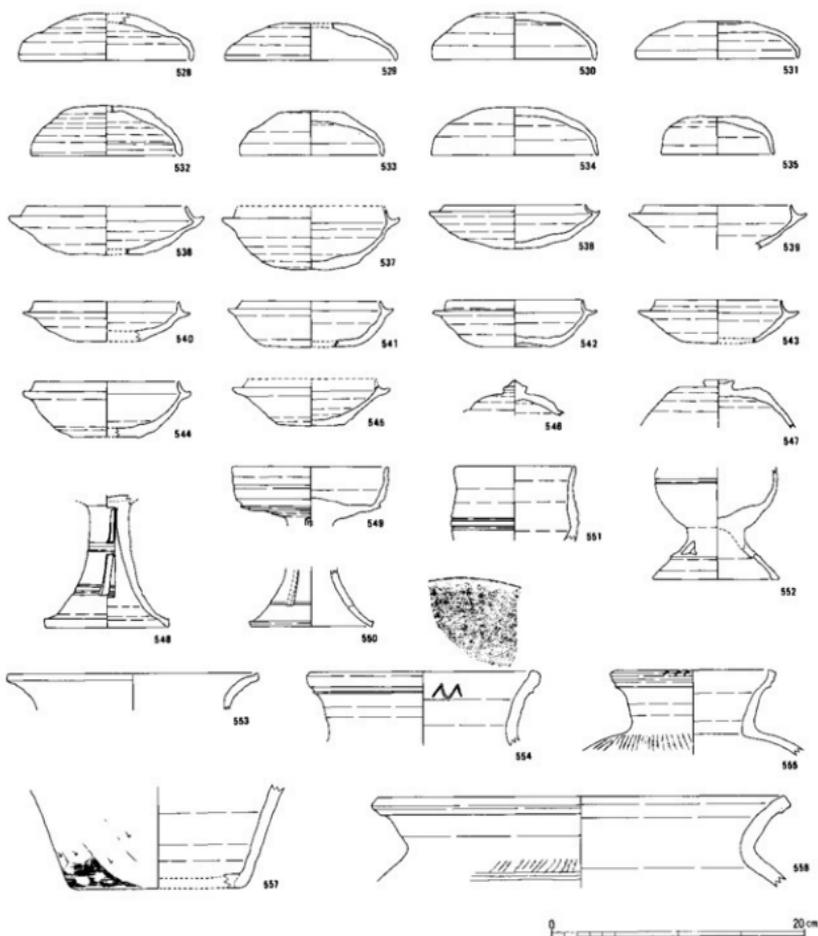
一方、落ち込み1・2についても、多量の遺物の出土を見た。しかし両者の位置は、焚口より高い位置にあり、窯出しに際する灰のかきだし等によって不良品が混入したものではない。堆積土に焼土ブロック・炭の混入は認められたが灰層は存在しなかった。従ってこの落ち込みは、窯出し後の製品を良品と不良品に選別したのち、不良品を投棄した場所との見方もできよう。



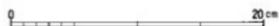
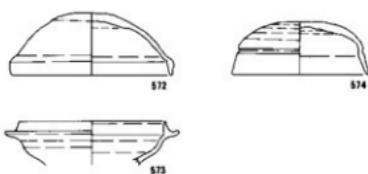
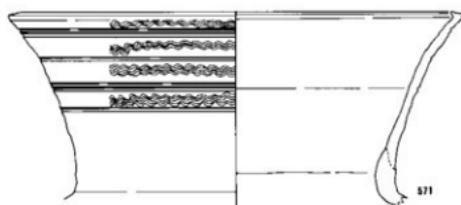
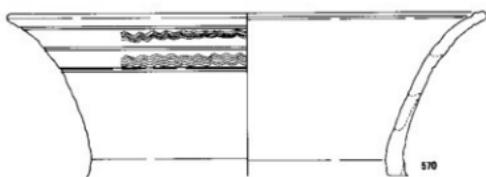
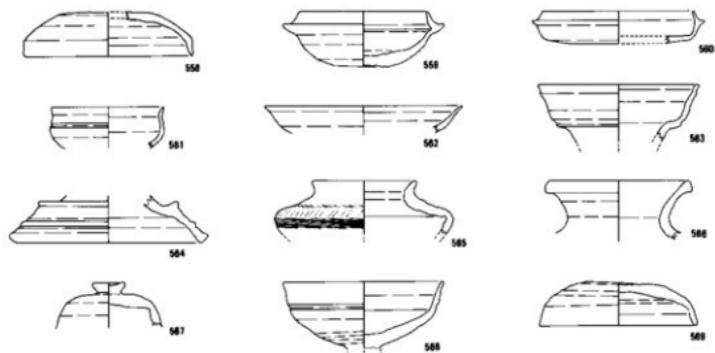
第38図 落ち込み1 出土遺物実測図 (1:4)



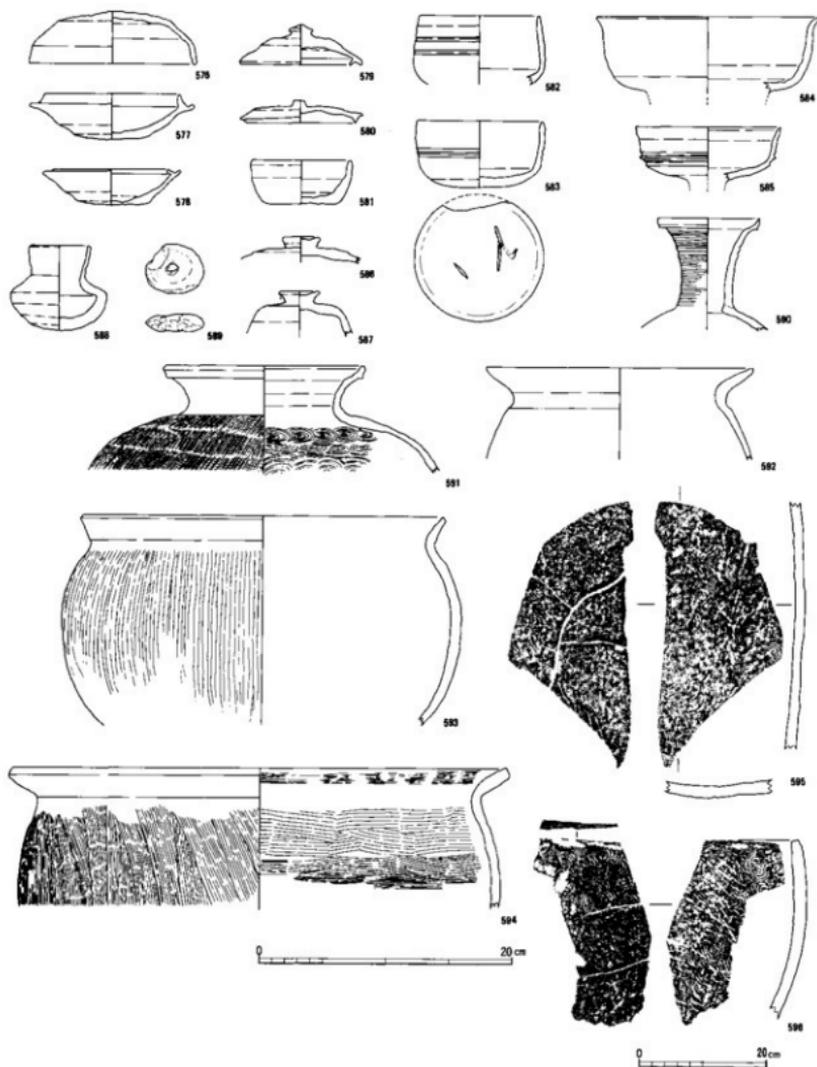
第39図 落ち込み2 出土遺物実測図 (1:4)



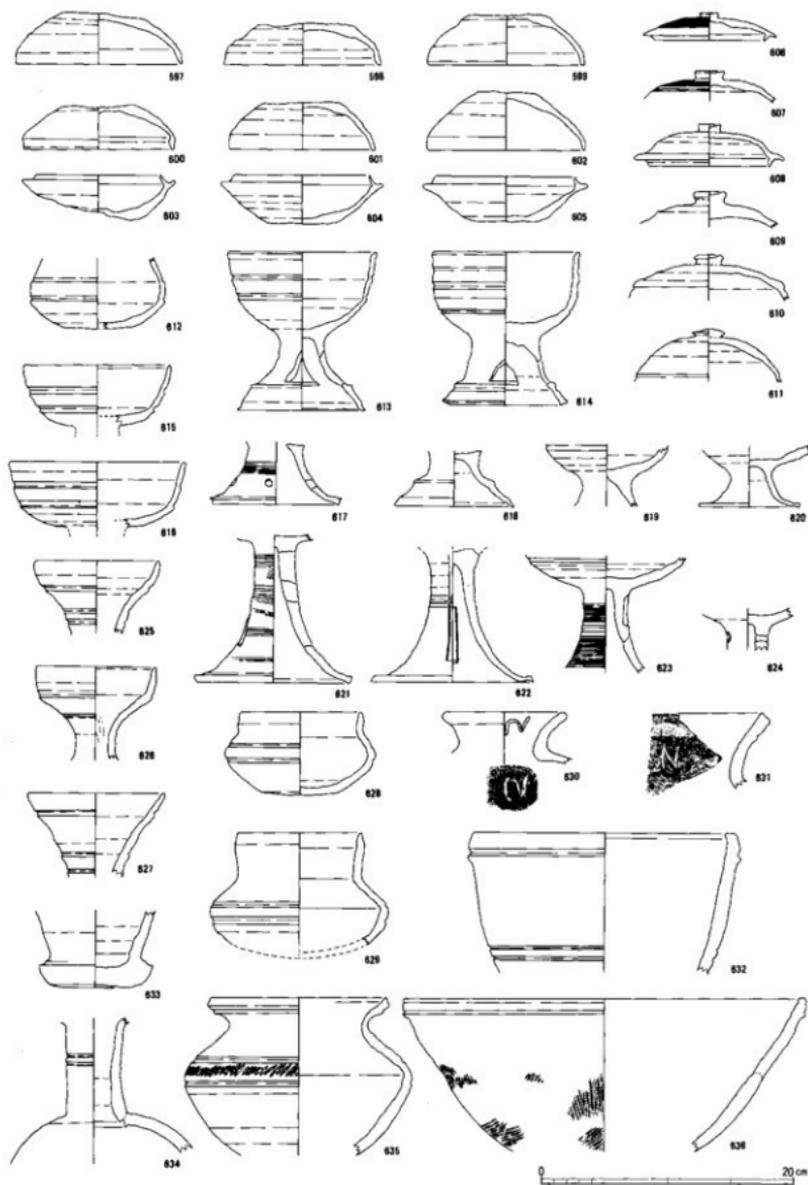
第40図 落ち込み3 出土遺物実測図 (1:4)



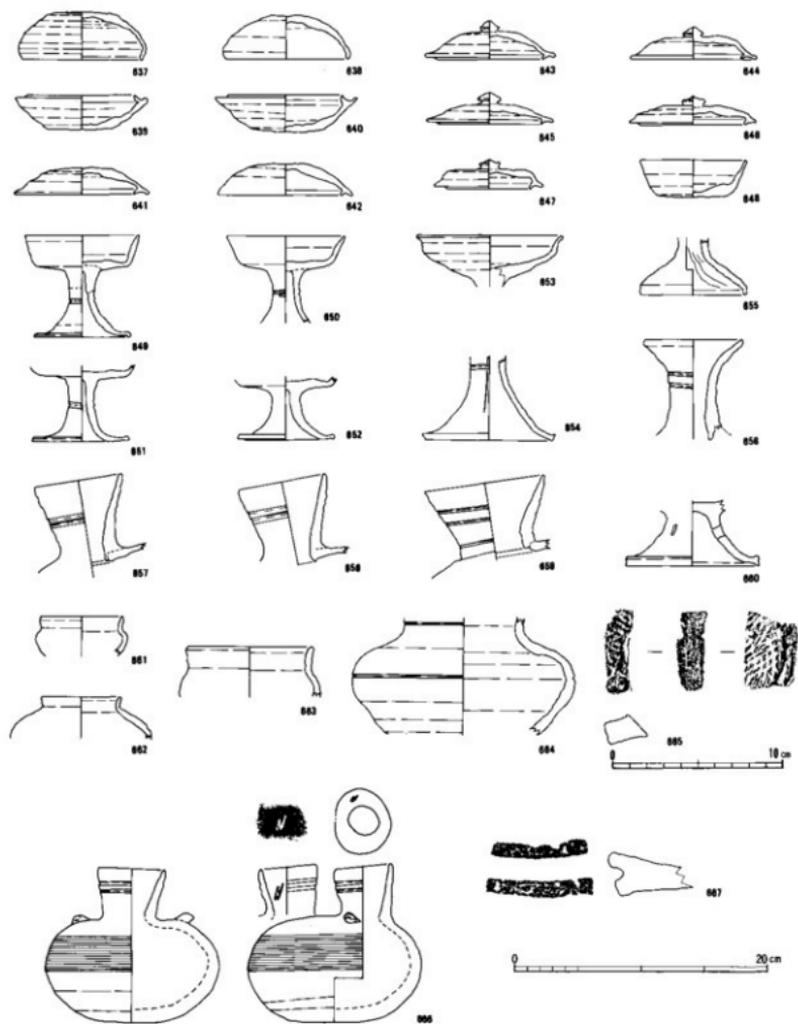
第41圖 遺構出土遺物実測図 (1:4)



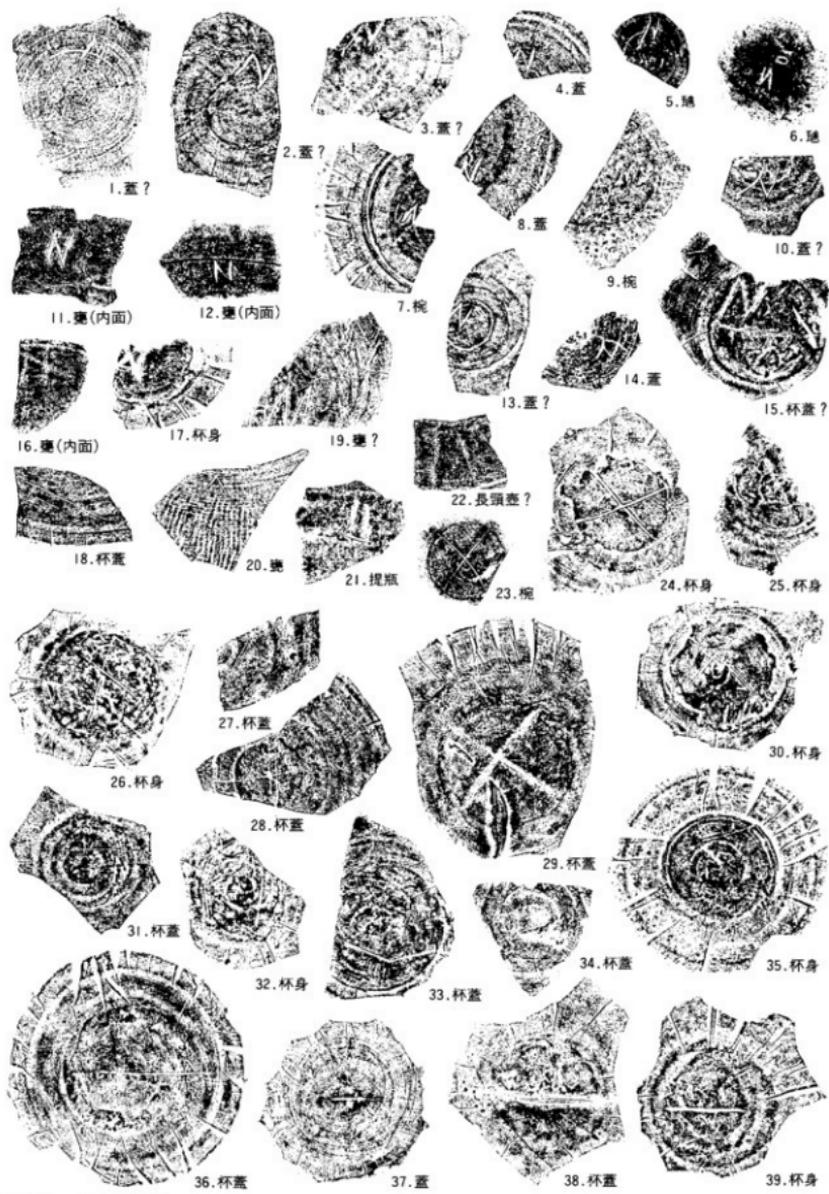
第42图 包含层(第1地区)出土遗物实测图(576~594:1:4, 595~596:1:8)



第43图 包含层(第2地区)出土遗物实测图(1:4)



第44図 包含層（第3地区）出土遺物実測図（1:4 但し 665は1:3）



第45図 ヘラ記号拓影

## 9. 明気窯跡群の考古地磁気測定

富山大学理学部地球科学教室

広岡 公夫、田中 彰子

はじめに

土の中には、磁石になることができる磁性鉱物が数%含まれている。これらの鉱物は、鉄の酸化物、あるいは、鉄の代わりにチタンが少量置き代わったものの酸化物である。それらは、磁鉄鉱( $Fe_3O_4$ )、赤鉄鉱(べんがら、 $Fe_2O_3$ )およびチタン磁鉄鉱( $Fe_3O_4 \sim Fe_2TiO_4$ )と呼ばれる鉱物である。これらの磁性鉱物を加熱すると、ある温度に達すると磁石になる性質(磁性)を失ってしまう。この温度をキュリー点という。この特性は可逆的なもので、キュリー点以上の高温で磁性を失った状態から、冷えて温度が下がってくると、キュリー点を通過した瞬間から、再び磁化を持ち、磁石になることができるようになる。このときに磁場が作用していると、その磁場の方向に磁化される。このようにして獲得された磁化が熱残留磁化である。磁鉄鉱のキュリー点は578℃、赤鉄鉱のそれは670℃、チタン磁鉄鉱では、チタンの含有量によって異なるが、最高はチタン含有量なしの磁鉄鉱のキュリー点と同じで、チタンが増えるにつれて低くなる。通常は、540～560℃のものが多い。

窯跡や炉跡のような焼土遺構では、それらが使用されていた当時に作用していた地球磁場(地磁気)の中でキュリー点以上の高温から冷却されているので、その時の地磁気の方向の熱残留磁化をもつことになる。何度も焼成が繰り返行われると、焼成の度ごとに、温度が上がれば前に獲得した残留磁化は消え、冷却の過程で新たに磁化し直しているの、最終焼成のときに獲得した残留磁化が後世に残ることになる。したがって、操業期間が非常に長い窯跡のような場合には、窯使用の最盛期ではなく、生産が衰えていても、その最終焼成のときの地磁気を記録しているのである。何度も修復され床が何枚も重なっているものでは、それぞれの床が焼かれ、温度がキュリー点近くまで上がった時の地磁気を記憶している。遺跡に残されているこのような焼土の残留磁化を測定すると、昔の地磁気を知ることができ

る。色々な時代の遺跡焼土を調べると過去の地磁気の変動の様子が分かる。このような研究を考古地磁気学という。

三重県内の古窯の考古地磁気学的測定は、久居3号、池ノ谷2号、原5号の各窯跡(Kawai et al., 1965)、西大鐘、岡山1、4号の各窯跡(Hirooka, 1971)、牧瓦窯跡群(広岡他、1989)、西ヶ谷古窯(広岡他、1992a)、泉黄窯跡(広岡他、1992b)などでなされている。

### 地磁気永年変化

地磁気(地球磁場)の方向は、場所ごとに少しずつ異なっていて、現在の日本を例にとると、伏角は、九州の南端で44°、九州北部から瀬戸内・関西・東海・関東南部にかけては48°、山形・宮城北部で52°、稚内では59°と緯度が高くなるにつれて深くなる。偏角はもっと複雑な分布をしているが、緯度が高くなるにつれて、西偏が大きくなる傾向がある。九州南端では西偏5.5°、九州北部から四国・紀伊半島・関東南部にかけて西偏6.5°、新潟北部・山形・宮城にかけてでは、西偏7.5°、稚内では西偏10°となっている。

このような空間的に異なる分布をしている地球磁場は、変化の速度は遅いが、時間的にも変化しているのである。数十年や百年くらいの期間をとると、結構大きな変化となる。このようなゆっくりした地磁気の変化を地磁気永年変化という。

日本で地磁気を継続的に観測し始めたのは明治16年で、そのときの東京の偏角は西偏4°03'であった(Imamiti, 1956)。東京の少し北にある柿岡での現在の偏角は西偏6°50'であるから、百年で2.8°変化したことになる。偏角と伏角の両方の記録があるのは上記の観測記録が一番古いもので、それより前の時代には伏角の観測記録が無い。

地磁気の直接観測が始まるより前の時代について、遺跡焼土の残留磁化の測定などから考古地磁気学的に求められた地磁気の変動(永年変化)を考古地磁

気永年変化という。日本では、東海地方から九州北部に至る西南日本各地の遺跡の考古地磁気学的測定によって、過去2000年間の考古地磁気永年変化曲線が得られている(Hirooka, 1971; 広岡, 1977)。この永年変化曲線が正しく日本の地磁気の変動を表しているとなると、遺跡焼土の磁化方向を測って、それが曲線の永年変化のどの時代の地磁気の方角を向いているか見ることによって、焼土が焼かれた年代を推定することができる。

### 試料の採取

考古地磁気測定の最大の目的は、焼土の残留磁化方向を正確に求めることであるから、試料としては、よく焼けて窯使用当時の地磁気の方角を忠実に記憶している部分を選ばなければならない。窯壁は最終焼成後に内側に倒れ込んでいる場合が多く、また、焚口や窯尻、煙道部などでは焼成中に磁場に歪みが生じるらしく、正しい過去の地磁気の記録でないことがある(Hirooka, 1971)ので、窯中央部の中軸線沿いの床面から試料を採ることが肝要である。試料採取の詳細は、明和町北野遺跡の報告(広岡他, 1994)に述べてあるので、それを参照頂ければ幸いである。

明気窯跡群での考古地磁気測定試料の採取は、発掘調査の進み具合に応じて1、2号窯と4、5号窯というふうに二度に分けて行った。

1号窯と2号窯では床が二重になっていたの、それぞれの床から試料を採取した。1号窯上層床から9個(試料番号SMI 41~49)、同下層床から9個(SMI 50~58)、2号窯上層床から9個(SMI 61~69)、同下層床から11個(SMI 70~80)、4号窯では23個(SMI 91~113)、5号窯では35個(SMI 121~155)の総計96個の定方位試料を採取した。

### 残留磁化の測定結果

残留磁化の測定は、リングコア型スピナー磁気計(夏原技研製 SMM-85型)を用いて行った。また、磁化の安定性を吟味し、不安定成分を除去するために全試料について50 Oe (5 mT)の交流消磁を行った。残留磁化の測定方法、交流消磁、測定結果の統計処理法などについても、上記の報告(広岡他、

1994)に詳しい説明がなされている。

個々の試料の残留磁化測定の結果(偏角、伏角、磁化強度)は第5~16表に示されている。1号窯上層床、同下層床、2号窯上層床、同下層床、4号窯、5号窯のそれぞれについての自然残留磁化(NRM)の測定結果は、第6、8、10、12、14、16表に、50 Oe消磁後の磁化測定の結果は第7、9、11、13、15、17表にある。

フィッシャーの統計法(Fisher, 1953)を用いて求めた各遺構ごとの平均偏角(D)、平均伏角(I)、フィッシャーの95%レベルの信頼角( $\alpha_{95}$ )、フィッシャーの精度係数(K)は、統計計算の際に用いた試料の個数(N)とともに第18表に示してある。これらが考古地磁気データとなる。この表から、1号窯の上・下層床、2号窯の上層床、および4号窯では、消磁をしたことによって、NRMのときより磁化方向のまとまりが悪くなっていることが分かる。これに対して、2号窯下層床と5号窯では、消磁によってまとまりが良くなっている。まとまりの良い方を考古地磁気データとして採用した。

### 考古地磁気推定年代

過去2000年間の西南日本の考古地磁気永年変化曲線(広岡, 1977)に、第18表中の考古地磁気データとして採用した結果の平均偏角、平均伏角、 $\alpha_{95}$ を記入したものが第46図である。それぞれの窯の平均磁化方向を示す黒丸が永年変化曲線のどの年代のところにあるかで年代の推定がなされ、 $\alpha_{95}$ の円内に含まれる永年変化曲線の線分の長さが年代幅(誤差)を与える。1号窯上層床は $\alpha_{95}$ が大きいので年代幅も大きくなる。

この永年変化曲線が、昔の地磁気の方角を忠実に表しているという前提にたつて、考古地磁気推定年代を求めると、

1号窯上層床	A.D. 650年	+ 80年
		- 60年
1号窯下層床	A.D. 645年	± 15年
2号窯上層床	A.D. 630年	± 20年
2号窯下層床	A.D. 595年	± 10年
4号窯	A.D. 650年	± 10年
5号窯	A.D. 655年	± 20年

となる。

〔引用文献〕

Fisher, R. A. (1953) Dispersion on a sphere, Proc. Roy. Soc. London, A, vol. 217, 295-305.

Hirooka, K. (1971) Archaeomagnetic study for the past 2,000 years in southwest Japan, Mem. Fac. Sci., Kyoto Univ., Ser. Geol. Mineral., vol. 38, 167-207.

広岡公夫 (1977) 考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向, 第四紀研究, vol. 15, 200-203.

広岡公夫, 吉村勝之, 味喜大介 (1980) 枚瓦窯跡群の考古地磁気測定, 「近畿自動車道 (久居～勢和) 埋蔵文化財発掘調査報告」, 第1分冊, 2, 139-144.

広岡公夫, 田中豊, 森定尚 (1991) 北野遺跡土器器體成坑群の考古地磁気測定, 「平成2年度奈良基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告」, 第2分冊, 三重県埋蔵文化財調査報告 94-2, 三重県埋蔵文化財センター, 21-26.

広岡公夫, 田中豊, 森定尚 (1992a) 西ヶ谷古窯の考古地磁気測定, 「西ヶ谷古窯跡群, 一県道四日市鈴鹿環状線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」, 四日市市遺跡調査会文化財調査報告書第4, 四日市市遺跡調査会, 41-44.

広岡公夫, 田中豊, 森定尚 (1992b) 泉貫窯跡の考古地磁気測定, 「近畿自動車道 (勢和～伊勢) 埋蔵文化財発掘調査報告」, 第2分冊, 三重県埋蔵文化財調査報告 101-2, 三重県埋蔵文化財センター, 43-46.

広岡公夫, 黒塚秀夫, 田中彰子 (1994) 北野遺跡の考古地磁気測定, 「北野遺跡」三重県埋蔵文化財センター (印刷中)

Imamiti, S. (1956) Secular variation of the magnetic declination, Mem. Kakioka Magnetic Observatory, vol. 7, 49-55.

Kawai, N., K. Hirooka, S. Sasajima, K. Yaskawa, H. Ito and S. Kume (1965) Archaeomagnetic studies in southwestern Japan, Ann. Geophys., t. 21, 574-578.

第6表 明気1号窯・上層床のNRMの磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ( $\times 10^4$ emu/g)
SMI 41	-7.7	63.7	30.6
42	-3.0	60.8	9.12
43	-12.4	52.6	25.2
44	-9.0	58.3	7.17
45	-17.2	54.6	8.14
* 46	107.9	-57.0	0.368
47	-23.6	56.0	7.86
* 48	-8.7	44.6	6.78
49	-15.0	60.2	7.87

\*：統計計算の際に除外したもの。

第7表 明気1号窯・上層床の500e消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ( $\times 10^4$ emu/g)
SMI 41	-5.7	63.1	29.0
42	-1.1	61.5	8.42
43	-11.9	52.0	24.6
44	-10.7	58.5	7.04
45	-17.0	53.6	7.87
* 46	119.0	-58.4	0.366
47	-25.4	55.9	7.78
* 48	-10.6	44.4	6.60
49	-15.0	60.7	7.93

\*：統計計算の際に除外したもの。

第8表 明気1号窯・下層床のNRMの磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ( $\times 10^4$ emu/g)
*SMI 50	-6.2	59.6	2.05
51	-11.6	58.9	3.96
* 52	-21.7	62.1	11.9
53	-15.3	62.7	5.45
54	-15.5	60.0	8.68
55	-16.6	60.0	8.02
56	-15.3	59.1	8.01
57	-17.3	60.6	12.0
58	-16.3	59.9	7.01

\*：統計計算の際に除外したもの。

第9表 明気1号窯・下層床の500e消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ( $\times 10^4$ emu/g)
*SMI 50	-6.5	59.3	1.93
51	-11.4	58.4	3.85
* 52	-22.5	62.3	11.7
53	-15.6	62.3	5.39
54	-15.7	60.1	8.64
55	-17.6	59.5	8.00
56	-14.9	59.5	7.99
57	-17.2	61.2	12.0
58	-16.3	60.3	6.92

\*：統計計算の際に除外したもの。

第10表 明気2号窯・上層床のNRMの磁化測定結果

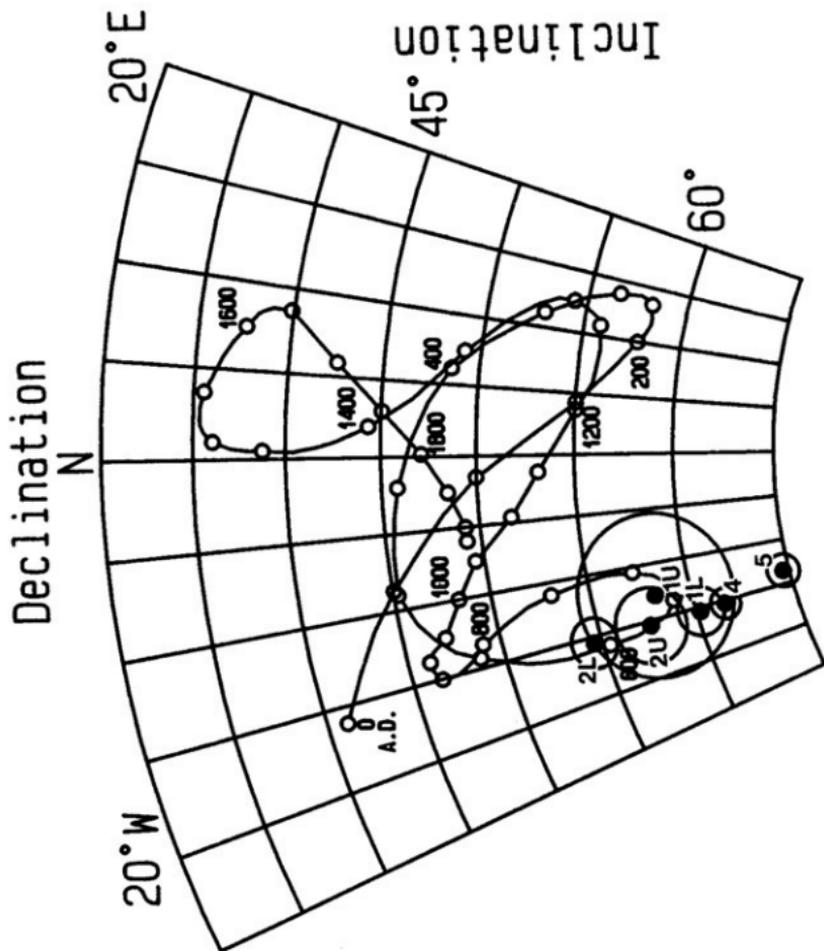
試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ( $\times 10^4$ emu/g)
SMI 61	-19.0	58.9	5.09
* 62	-2.0	55.7	36.3
63	-21.0	57.2	4.59
64	-13.9	58.6	2.09
* 65	-13.5	47.1	1.12
66	-16.8	55.1	21.6
67	-10.2	58.0	2.98
68	-11.7	57.8	4.67
69	-15.3	57.1	5.24

\*：統計計算の際に除外したもの。

第11表 明気2号窯・上層床の500e消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ( $\times 10^4$ emu/g)
SMI 61	-19.2	58.1	4.94
* 62	-1.5	55.6	35.4
63	-20.4	57.0	4.49
64	-13.1	58.0	2.01
* 65	-14.4	45.8	1.05
66	-15.8	54.4	21.1
67	-9.0	56.9	2.84
68	-10.9	57.3	4.57
69	-15.6	58.9	5.04

\*：統計計算の際に除外したもの。



第46図 西南日本の考古地磁気永年変化（広岡、1977）と明気窯跡群の考古地磁気測定結果

- |                  |                  |
|------------------|------------------|
| 1U: 1号窯上層床、      | 1L: 1号窯下層床、      |
| 2U: 2号窯上層床、      | 2L: 2号窯下層床、      |
| 4: 4号窯、          | 5: 5号窯、          |
| Declination: 偏角、 | Inclination: 伏角、 |

第12表 明気2号案・下層床のNRMの磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ( $\times 10^4$ emu/g)
*SMI 70	-6.4	50.4	2.54
* 71	-14.9	46.4	0.980
72	-14.4	54.7	4.08
* 73	-20.5	53.7	4.75
* 74	-4.6	48.6	8.52
75	-13.8	56.5	5.71
76	-16.0	54.4	5.71
77	-15.5	54.8	3.73
78	-14.0	52.4	6.70
79	-15.4	57.0	7.70
80	-14.4	54.2	6.31

\* : 統計計算の際に除外したもの。

第13表 明気2号案・下層床の500e消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ( $\times 10^4$ emu/g)
*SMI 70	-5.2	50.4	1.85
* 71	-12.5	46.4	0.792
72	-15.2	54.4	4.00
73	-19.9	53.7	4.69
* 74	-4.7	47.5	8.31
75	-13.9	56.4	5.75
76	-16.6	54.1	5.63
77	-14.7	54.6	3.59
78	-13.6	52.8	6.61
79	-15.9	56.5	7.55
80	-14.6	54.3	6.27

\* : 統計計算の際に除外したもの。

第14表 明気4号案のNRMの磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ( $\times 10^4$ emu/g)
SIM 91	-19.6	62.1	2.20
* 92	-27.7	65.6	5.09
93	-16.9	61.9	2.23
94	-18.5	61.8	2.13
95	-17.4	62.1	1.98
96	-16.3	64.2	7.75
97	-15.0	59.2	3.56
98	-11.8	60.5	2.05
99	-11.4	64.4	6.76
100	-14.7	60.7	4.70
101	-16.1	58.5	2.97
102	-13.5	63.5	4.54
103	-11.4	61.9	4.36
104	-14.2	61.9	4.36
105	-13.1	59.7	3.33
106	-16.0	64.6	2.71
107	-15.5	61.7	3.18
108	-14.1	60.5	4.00
109	-15.2	59.9	1.83
110	-17.4	60.0	2.79
111	-16.8	60.8	1.90
112	-16.9	61.7	3.86
113	-15.6	61.3	2.48

\* : 統計計算の際に除外したもの。

第15表 明気4号窯の500e消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ( $\times 10^4$ emu/g)	
SMI 91	-31.0	64.0	2.15	
*	92	-44.6	66.2	5.00
93	-28.0	64.5	2.17	
94	-30.9	63.9	2.06	
95	-26.7	63.4	1.90	
96	-23.2	65.9	7.56	
97	-23.2	62.1	3.40	
98	-19.6	63.4	1.99	
99	-21.0	66.4	6.52	
100	-20.6	63.4	4.56	
101	-22.7	61.4	2.87	
102	-25.4	65.3	4.13	
103	-17.2	62.5	4.17	
104	-20.0	62.6	4.09	
105	-21.4	60.6	3.12	
106	-21.2	66.6	2.58	
107	-23.0	63.9	2.89	
108	-18.9	61.3	3.83	
109	-22.6	62.7	1.72	
110	-25.1	64.0	2.56	
111	-25.7	62.4	1.80	
112	-20.9	64.7	3.68	
113	-20.6	64.2	2.30	

\* : 統計計算の際に除外したもの。

第16表 明気5号窯のNRMの磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ( $\times 10^4$ emu/g)
SMI 121	-15.9	59.4	2.30
122	-11.3	60.4	2.83
123	-10.9	58.8	2.45
124	-12.4	61.3	3.74
125	-16.1	59.8	3.45
126	-15.3	60.4	2.45
127	-15.0	65.5	2.73
128	-15.3	62.8	2.67
129	-10.9	62.4	3.82
130	-13.9	63.0	1.95
131	-19.4	60.4	4.56
132	-12.1	61.7	3.67
133	-14.0	62.5	4.32
134	-8.2	63.2	5.63
135	-6.9	62.8	4.88
136	-17.6	63.2	2.94
137	-21.5	65.2	2.02
138	-16.4	64.4	2.53
139	-15.3	65.8	4.67
140	-15.1	66.3	3.91
141	-14.6	65.9	4.72
142	-9.6	66.1	4.47
143	-10.7	66.0	29.7
144	-7.7	66.8	22.4
145	-8.5	66.1	17.8
146	-17.4	64.1	1.65
147	-13.0	63.1	2.29
148	-14.3	64.2	4.01
149	-12.0	64.1	2.39
150	-12.1	63.4	3.42
151	-11.5	64.5	4.01
152	-8.7	65.2	15.6
153	-7.4	66.7	10.9
154	-8.0	64.6	6.05
155	-12.0	68.3	10.9

第17表 明気5号窯の50 Oe 消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ( $\times 10^4$ emu/g)
SMI 121	-16.9	61.3	2.34
122	-12.9	61.5	2.76
123	-13.3	60.9	2.38
124	-12.7	62.2	3.74
125	-17.4	60.8	3.47
126	-15.8	61.6	2.49
127	-16.1	66.6	2.77
128	-14.8	63.8	2.68
129	-11.9	63.0	3.85
130	-16.9	63.8	1.97
131	-19.7	61.3	4.67
132	-13.1	63.0	3.73
133	-13.6	63.4	4.35
134	-8.4	64.1	5.63
135	-7.6	63.3	4.88
136	-21.1	64.9	2.96
137	-23.2	65.9	2.04
138	-16.6	66.2	2.57
139	-16.0	66.6	4.64
140	-14.6	67.2	3.91
141	-13.9	66.8	4.69
142	-9.6	67.1	4.47
143	-11.4	66.0	29.3
144	-8.3	66.8	22.3
145	-9.0	66.4	17.5
146	-18.1	66.0	1.64
147	-12.8	65.4	2.27
148	-13.2	66.2	3.96
149	-11.4	66.0	2.38
150	-10.3	64.8	3.38
151	-13.4	66.2	3.91
152	-8.3	64.9	15.5
153	-9.2	67.0	10.7
154	-9.7	65.0	6.03
155	-12.5	68.2	10.6

第18表 明気窯跡群の考古地磁気測定結果

窯跡名	N	D (° E)	I (°)	$\alpha_{95}$ (°)	K	平均磁化強度 ( $\times 10^4$ emu/g)
明気1号窯 上層床						
NRM	7	-12.9	58.2	3.93	236.9	13.7
( 50 0e	7	-12.8	58.1	4.39	190.1	13.2 )
明気1号窯 下層床						
NRM	7	-15.4	60.2	1.16	2692.1	7.59
( 50 0e	7	-15.5	60.2	1.22	2448.0	7.54 )
明気2号窯 上層床						
( NRM	7	-15.4	57.6	1.80	1124.4	6.61 )
50 0e	7	-14.8	57.3	1.99	921.2	6.43
明気2号窯 下層床						
NRM	7	-14.8	54.9	1.19	2558.0	5.71 )
( 50 0e	8	-15.5	54.6	1.18	2191.1	5.51
明気4号窯						
NRM	22	-15.3	61.5	0.74	1748.7	3.44
( 50 0e	22	-23.1	63.6	0.87	1264.9	3.28 )
明気5号窯						
( NRM	35	-12.9	63.7	0.85	818.7	5.94 )
50 0e	35	-13.5	64.7	0.80	925.5	5.90

N：試料個数、D：平均偏角、I：平均伏角、 $\alpha_{95}$ ：フィッシャーの信頼角、

K：フィッシャーの精度係数。

( ) は年代推定のための考古地磁気データとして採用しなかったものを示す。

## 10. 明気窯跡群および明気古墳群出土須恵器の蛍光X線分析

奈良教育大学 三辻 利一

### 1) はじめに

日本列島の土台を形成する岩石は花崗岩類である。全国各地の花崗岩類を分析した結果、K、Ca、Rb、Srの4元素が有効に地域差を示すことが判明した。すべての元素は岩石中に単独では存在しない。化合物を作って存在する。岩石中の化合物のことを我々は鉱物と呼んでいる。岩石は鉱物の集合体である。

花崗岩類中の主成分鉱物は長石類、石英、雲母類、角閃石類である。当然、主成分元素KとCaはこれら主成分鉱物中に含有される。その主成分鉱物こそ、長石類である。長石類はいくつかの長石族から成り立っている。主な長石族はカリ長石、斜長石、正長石である。Kはカリ長石に、Caは斜長石に、そして、Naは主として正長石中に含まれるものと思われる。一方、微量元素RbとSrはどの鉱物中に含まれるかは直接、検出する方法はない。しかし、間接的に知る方法はある。それは主成分元素との相関性を知ることによって手掛かりが得られる。全国の花崗岩類について相関性を求めたところ、微量元素Rbは主成分元素Kと相関係数が0.8程度の、高い正の相関性をもつことがわかった。同様に、微量元素Srは主成分元素Caと良好な正の相関性をもつこともわかった。このことはRbはカリ長石中に、また、Srは斜長石中に存在することを示している。

このような関係は窯跡出土須恵器にもみられる。そして、須恵器窯の後背地が花崗岩類で形成される場合には、ほとんどの場合、須恵器の化学特性は花崗岩類の化学特性によく対応する。このことは須恵器の素材粘土中に含まれるK、Ca、Rb、Sr、は一次岩石である花崗岩類中の長石類に由来することを示唆している。このような考え方から、K、Ca、Rb、Sr、を長石系因子と名付ける。他方、Fe、Mg、Ti、などは雲母、角閃石などの有色鉱物系因子と名付けられる。

筆者が窯跡出土須恵器の相互識別にK、Ca、Rb、Sr因子をセットにして使用するのには以上のような考え方があるからである。そして、実際、これら長

石系因子は実に有効に、各地の窯跡出土須恵器の地域差を表示することが判明した。

このような地域差が整理されれば、古墳出土須恵器の元素分析のデータを窯跡に結び付けることによって、その産地を推定することができる。

以上が須恵器産地推定法の基本的な考え方である。もう一つ、重要な問題がある。窯跡からは大量の須恵器片が出土するし、花崗岩類にいたっては一山全体、または、一つの半島全体が花崗岩類からなり立っている。当然、これらを全て、分析する訳にはいかない。それは不可能である。このような場合には、自然科学分野では確率論に基づく、抜きとり検査の考え方をもち出す。すなわち、工場で生産した、全ての製品を破壊して検査する訳にはいかないので、一部の製品を抜きとって検査し、全体の製品の特性を推計する訳である。同様に、同一花崗岩帯の何ヶ所から試料を採集して分析し、その岩帯の花崗岩の化学特性を推計するのである。また、一基の窯跡または一つの窯跡群から一定数量の試料片を採集して分析し、その窯跡または窯跡群から出土する須恵器の化学特性を推計するのである。

以上が古代土器の産地推定法に確率論が導入される理由である。

こうして、産地推定法は地球化学理論と確率論の組み合わせの上に成り立つことが理解できる。

本報告では明気窯群、中尾窯、根後2号窯、大仏八端1号窯出土須恵器の化学特性を明らかにし、その相互識別の結果を報告するとともに、その供給先とみられる明気古墳群、河田古墳群、上ノ垣外遺跡、さらには、昼河A-2号墳出土須恵器の蛍光X線分析の結果について報告する。

### 2) 分析方法

従来どおり、須恵器小片の表面を研磨して、灰塵等の付着物を除去したのち、100メッシュ以下に粉碎した。粉末試料は高圧をかけてプレスし、内径20mm、厚さ3~5mmの錠剤試料にして蛍光X線分析を行っ

た。

窯間の相互識別には定性的にはRb-Sr分布図とK-Ca分布図を使用した。定量的にはマハラノビスの汎距離の2乗値を計算し、2群間判別分析を適用した。また、古墳出土須恵器の産地推定にはHotellingの $T^2$ 検定を活用した。これらの統計計算にはパソコンが利用された。

### 3) 分析結果

表18には窯跡出土須恵器の分析値が示されている。全分析値は同時に測定した岩石標準試料JG-1による標準化値で表示されている。

はじめに、図47、48には明気1、2号窯の須恵器のRb-Sr分布図とK-Ca分布図を示す。よくまとまって分布しており、明気1号窯と明気2号窯の須恵器の相互識別は困難であることを示している。他方、図49、50には、明気4、5号窯の須恵器のRb-Sr分布図とK-Ca分布図を示してある。明気3号窯と明気4号窯の須恵器胎土も類似していることを示している。これらの図においては、両群の須恵器のほとんどを包含するようにして、明気1、2号群領域と明気4、5号群領域を示してある。これらの領域は定量的に境界を示している訳ではないが、領域を比較する上には十分役に立つ。図47~50を比較すると、明気1、2号窯の須恵器には明気4、5号窯の須恵器に比べて、K、Rb量がやや多く、Ca、Sr量も多いことがわかる。さらに重要な点はこれらの図から、明気1、2号窯は明気4、5号窯から、これらの因子を使って相互識別される可能性が示唆されている点である。そこで、両群間の2群間判別分析を試みた。その結果は図51に示されている。両軸をとった $D^2(1)$ と $D^2(4)$ はそれぞれ、明気1、2号群、明気4、5号群の重心からのマハラノビスの汎距離の2乗値である。各群の境界を決定するために、5%の危険率をかけたHotellingの $T^2$ 検定が行われた。その結果、明気1、2号群の境界は $D^2(1) \leq 10$ であり、また、明気4、5号群の境界は $D^2(4) \leq 10$ であることがわかる。実際、図51をみると、この領域にそれぞれ両群の試料のほとんどが分布していることがわかる。両群の試料が完全に分離するためには、互いに相手群が遠く離れる

ことが必要である。仮に、この条件を $D^2$ (相手群) $>10$ とおくと、 $D^2(1, 2号群) \leq 10$ 、 $D^2(4, 5号群) >10$ は理想的な明気1、2号群領域となり、 $D^2(4, 5号群) \leq 10$ 、 $D^2(1, 2号群) >10$ は理想的な明気4、5号群領域となる。実際に、このような理想的な分布する例もかなりあるが、多くの場合、一部の試料は $D^2(A群) \leq 10$ 、 $D^2(B群) \leq 10$ の重複領域に分布する。この領域はどういう意味をもつ領域であるかという、2群間判別において、両群への帰属条件を満足する領域である。つまり、両群の試料の大半がこの領域に混在するということは、両群の化学特性が類似しており、相互識別が困難であることを意味する。実際に、同一窯群の中から、任意に2つの窯をとり出して2群間判別を行う場合、このような分布になる場合が多い。ところが、明気窯群では図51に示すように、一部の試料が重複領域に分布するだけで、大部分の試料はそれぞれ理想的1、2号群領域と理想的4、5号群領域に分かれて分布し、十分、相互識別ができることを示している。

図52には明気3号窯灰原から出土した須恵器のRb-Sr分布図を示す。かなりばらついて分布しており、そのうち半数は明気4、5号領域に分布する。図53にはK-Ca分布図を示す。この図でも一部は明気4、5号領域に分布するが、大部分はCa量が少なく、両領域をずれて分布する。このことから、明気3号窯の須恵器は明気1、2号群や明気4、5号群から相互識別できる可能性をもつことがわかる。

そこで、明気3号群と明気1、2号群の2群間判別の結果を図54に示す。明気3号群の須恵器試料の大部分は重複領域に分布するものの、相手の明気1、2号群の試料のほとんどが理想的な明気1、2号群領域に分布するため、両者の相互識別は十分可能であることがわかる。同様に、Rb-Sr、K-Caの両分布図から予想されるように、明気3号群と明気4、5号群の相互識別も不完全ではあるが、可能であることがわかった。

図55、56には中尾窯の須恵器のRb-Sr分布図、K-Ca分布図を示す。いずれも、かなりばらついて分布しているが、明気1、2号群領域や明気4、5号群領域には一部が分布するにすぎない。これら

の母集団とは部分的に相互識別は可能である。

図57、58には、根後2号窯の須恵器のRb-Sr、K-Ca分布図を示す。明気3号窯や中尾窯の須恵器に比べて、かなりまとまって分布している。そして、いずれの図においても、明気1、2号群領域や明気4、5号群領域から大部分の試料がずれて分布することがわかる。両群からの2群間判別の結果、十分相互識別されていることが判明した。

図59、60には大仏八端1号窯の須恵器のRb-Sr、K-Ca分布図を示す。この窯の試料の大半は明気1、2号群領域や明気4、5号群領域に重なって分布する。したがって、これら両群との相互識別は困難である。

大仏八端1号窯と根後2号窯の相互識別の例を図61に示しておく。重複領域に分布する試料は多いものの、相互識別はある程度はできることを示している。

以上にみてきたように、明気窯群周辺の窯跡出土須恵器の化学特性は必ずしも単純ではない。K、Ca、Rb、Srの4因子で明気1、2号群と明気4、5号群が、また、根後1号群と明気1、2号群、明気4、5号群が相互識別できたり、その他、根後1号群の須恵器にはNa量が少なく、Na因子で他の窯から相互識別できたり、また、明気4、5号群の須恵器にはFe量が多く、Fe因子でも明気1、2号群の須恵器とは異なったりする。このような化学特性の違いは後背地の地質の複雑さに起因するものと推測される。このことは窯ごとに素材粘土の採集地も異なることを示唆している。

後背地の地質が単純な地域の窯群の場合、同一窯群内の窯間の相互識別が困難であるのが普通である。猿投窯群や岐阜県各務原市の稲田山窯群などがその例である。それに比べて、明気窯群周辺では須恵器の化学特性は均一ではなく、相互識別ができる場合もあることを今回の分析データは示している。逆に、この特異性を活用すれば、古墳出土須恵器が明気窯群周辺のどの窯の製品であるかがわかることになる。次に、古墳出土須恵器の胎土分析の結果について説明する。

表19には、古墳出土須恵器の分析データをまとめてある。なお、この表には明気1、2号群、3号群、

4、5号群からのマハラノビスの汎距離の二乗値も示されている。5%の危険率をかけたHotellingの $T^2$ 検定で母集団の境界は $D^2(X) \leq 10$  ( $X$ は母集団名)であるから、もし、古墳出土須恵器の中に、窯群、( $X$ )で作られた須恵器が含まれておれば、当然 $D^2(X) \leq 10$ の条件を満足する。つまり、 $D^2(X) \leq 10$ は古墳出土須恵器にとって窯群、( $X$ )への帰属条件ということになる。このように帰属条件は決められたものの、 $D^2(X) = 12 \sim 11$ の距離にある試料も( $X$ )母集団への帰属を否定できないので、可能性はあるということで、(?)符号を付して産地推定しておいた。推定結果はRb-Sr分布図とK-Ca分布図で再確認してみた。

明気1号墳のNo1、2の試料は時期的にも対応する明気1、2号群と明気4、5号群には対応しない。このことは図62のRb-Sr分布図と図63のK-Ca分布図からも理解される。No1、2は産地不明となった。No2はCa、Fe、Naが少い点を考慮に入れると、猿投窯群の製品である可能性が高い。No1は不明である。

明気3号墳のNo3の長頸壺には「N」というヘラ記号がある。このヘラ記号は明気1、2号窯群の須恵器の特徴のようである。予想どおり、 $D^2$ (明気1、2号群) = 6.5であり、明気1、2号群産と推定された。考古学的推定と胎土分析による産地推定が合致した例である。図62、63でも、No3は明気1、2号群領域に分布している。明気6号墳のNo5の試料も明気1、2号群の製品である可能性が高い。これに対して、明気6号墳の他の須恵器、No4、6、7、8、9、10は明気4、5号群産である可能性が高い。そのことは図62、63からも理解される。

河田C-18号墳のNo11、12の須恵器は明気1、2号群産と推定された。図64、65にRb-Sr分布図とK-Ca分布図を示してあるが、2点とも明気4、5号群領域よりも、明気1、2号群領域によく対応していることがわかる。

上ノ垣外遺跡出土須恵器のRb-Sr分布図を図66に、また、K-Ca分布図を図67に示す。No19、22、24の3点を除く他の試料はいずれも、明気1、2号群領域によく対応していることがわかる。表19でも、

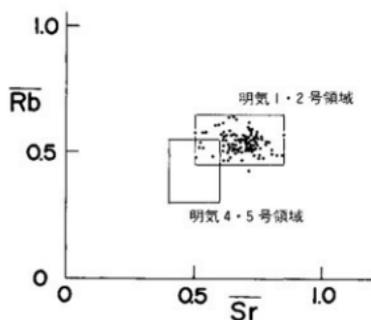
No19、22、24の3点を除いてすべて、明気1、2号群への帰属条件を満足している。

No19、24は表19では明気3号群と推定されている。Na因子でも、その方がよく合う。No22は明気窯群の製品ではない。猿投窯群産の可能性もあるが、Fe量が多く、この点で猿投群産の可能性についても疑問をもつ。産地不明としておく方が無難である。

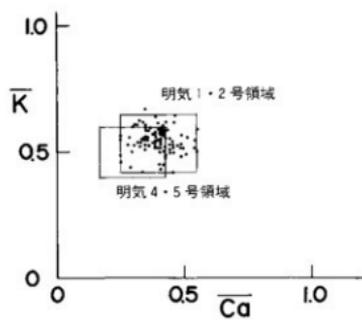
このようにして、明気窯群周辺に在る古墳出土須恵器の多くは明気窯群の製品であることが胎土分析によっても立証された。しかし、外部地域からの搬入品とみられる須恵器も、ごく少数ではあるが存在

することも確認された。さらに、ヘラ記号を目印とした考古学的な産地推定と胎土分析による産地推定がよく一致した結果を与えた点も、きわめて注目すべき点である。

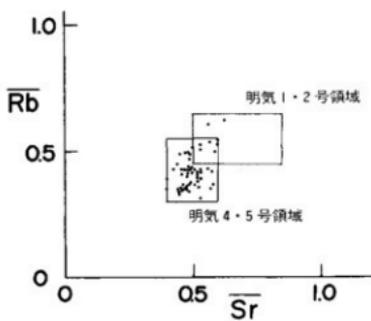
最後に、曇河古墳群出土須恵器のRb-Sr分布図を図68に、また、K-Ca分布図を図69に示す。明気窯群の領域に対応するものは少ないことがわかる。Ca、Sr量が少ない点で猿投群の須恵器に類似するが、Fe量が少し多い点で、逆に、猿投窯群産とするのに疑問が生じる。三河地域の須恵器はこれ程、Ca、Sr量は少なくないので、その可能性は少ない。やはり、目下のところ産地不明としておくはかない。



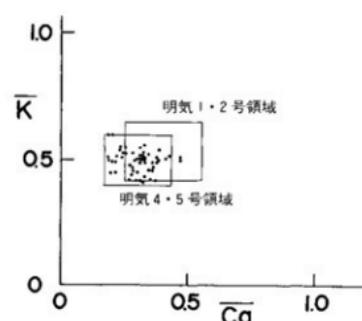
第47図 明気1・2号窯出土須恵器のRb-Sr分布図



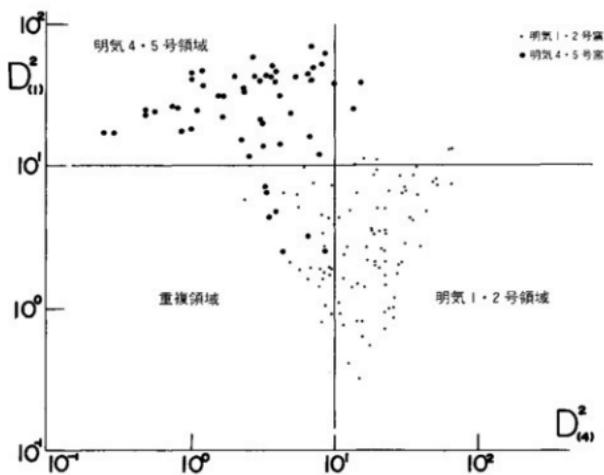
第48図 明気1・2号窯出土須恵器のK-Ca分布図



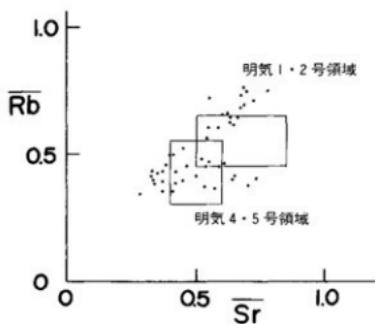
第49図 明気4・5号窯出土須恵器のRb-Sr分布図



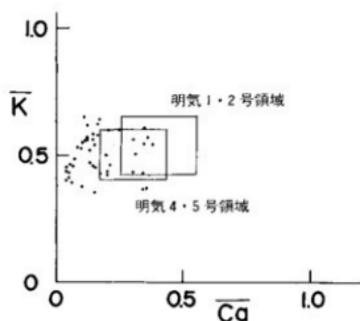
第50図 明気4・5号窯出土須恵器のK-Ca分布図



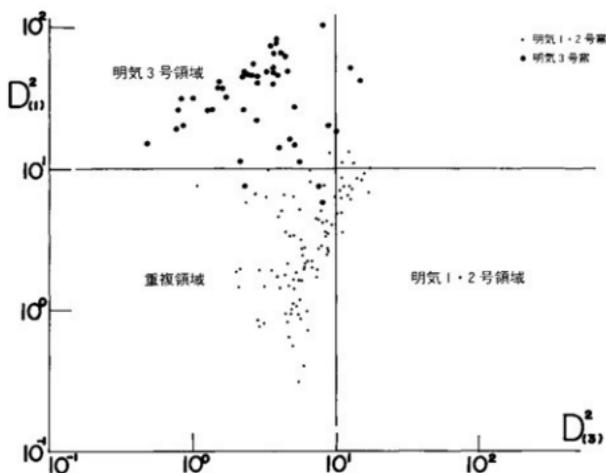
第51図 明気1・2号群と明気4・5号群との相互識別 (K, Ca, Rb, Sr因子使用)



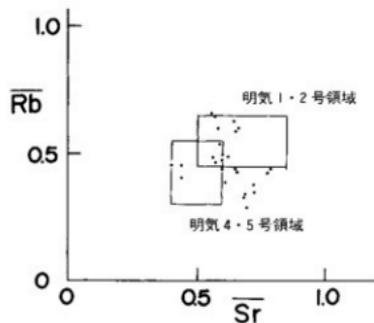
第52図 明気3号窯灰原出土須恵器のRb-Sr分布図



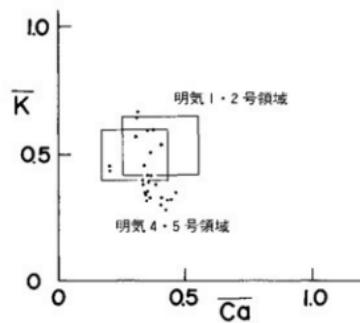
第53図 明気3号窯灰原出土須恵器のK-Ca分布図



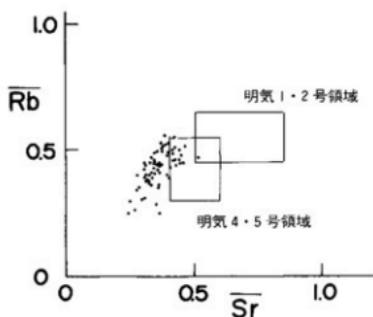
第54図 明気1・2号群と明気3号群との相互識別 (K, Ca, Rb, Sr因子使用)



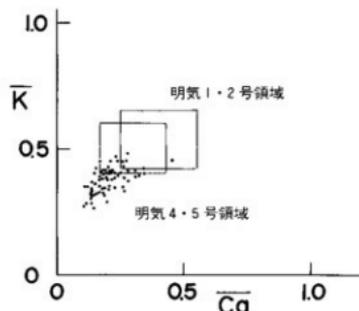
第55図 中尾窯出土須恵器のRb-Sr分布図



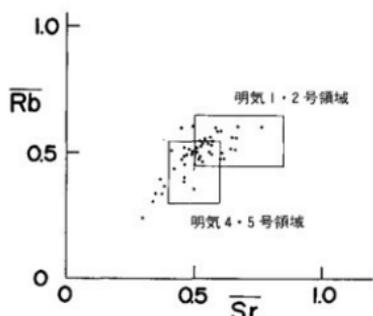
第56図 中尾窯出土須恵器のK-Ca分布図



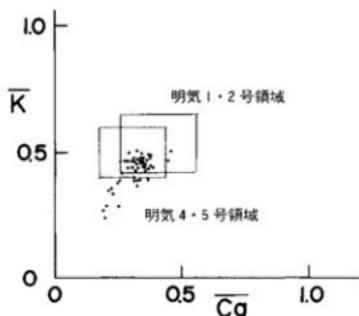
第57図 根後2号窟出土須恵器のRb-Sr分布図



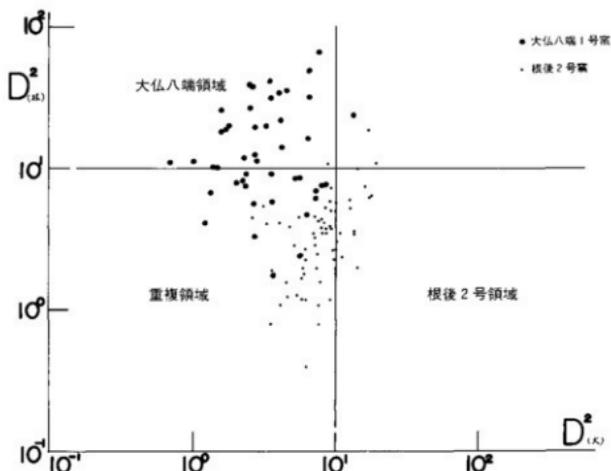
第58図 根後2号窟出土須恵器のK-Ca分布図



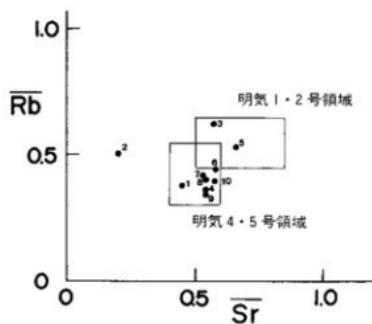
第59図 大仏八端1号窟出土須恵器のRb-Sr分布図



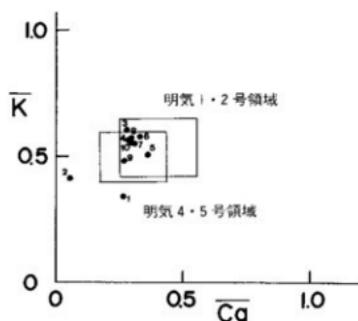
第60図 大仏八端1号窟出土須恵器のK-Ca分布図



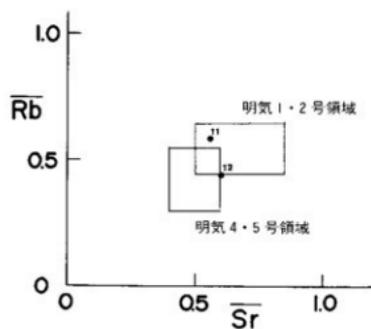
第61図 根後群と大仏八端群の相互識別 (K, Ca, Rb, Sr因子使用)



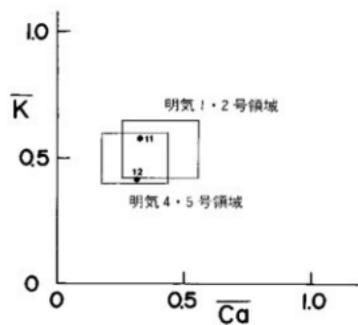
第62図 明気古墳群出土須恵器のRb-Sr分布図



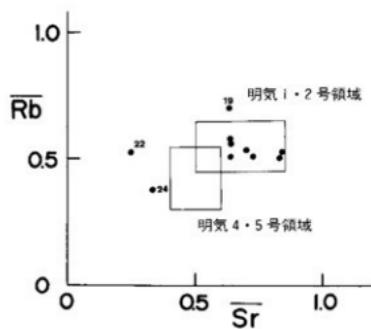
第63図 明気古墳群出土須恵器のK-Ca分布図



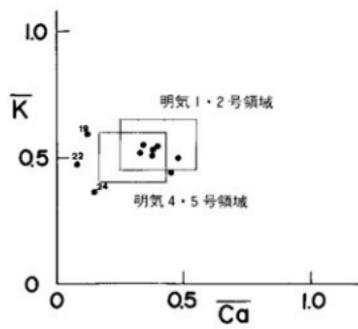
第64図 河田C-18号墳出土須恵器のRb-Sr分布図



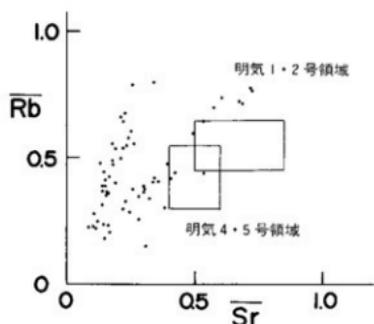
第65図 河田C-18号墳出土須恵器のK-Ca分布図



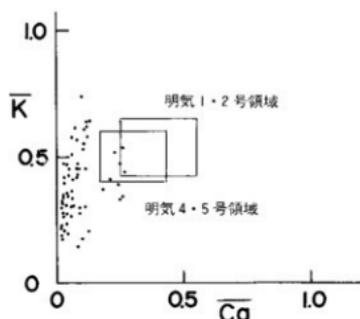
第66図 上ノ垣外遺跡出土須恵器のRb-Sr分布図



第67図 上ノ垣外遺跡出土須恵器のK-Ca分布図



第68図 昼河古墳群墳出土須恵器のRb-Sr分布図



第69図 昼河古墳群墳出土須恵器のK-Ca分布図

遺跡名	分析番号	試料番号	種類	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
中尾齋	5-2380	No.103	須恵器	0.301	0.403	1.71	0.335	0.691	0.191
"	2381	104	"	0.338	0.361	1.53	0.441	0.651	0.226
"	2382	105	"	0.506	0.355	1.61	0.596	0.579	0.298
"	2383	106	"	0.648	0.312	1.86	0.652	0.566	0.446
"	2384	107	"	0.320	0.426	1.66	0.384	0.721	0.200
"	2385	108	"	0.422	0.354	1.65	0.504	0.603	0.288
"	2386	109	"	0.328	0.404	1.67	0.350	0.730	0.204
"	2387	110	"	0.283	0.419	1.83	0.289	0.696	0.198
"	2388	111	"	0.317	0.352	1.62	0.392	0.611	0.201
"	2389	112	"	0.541	0.399	1.70	0.589	0.650	0.334
"	2390	113	"	0.354	0.458	1.54	0.440	0.792	0.239
"	2391	114	"	0.432	0.174	2.16	0.448	0.379	0.178
"	2392	115	"	0.321	0.438	1.80	0.335	0.692	0.204
"	2393	116	"	0.347	0.338	1.58	0.441	0.602	0.215
"	2394	117	"	0.418	0.362	1.60	0.539	0.588	0.267
"	2395	118	"	0.603	0.348	1.78	0.634	0.637	0.376
"	2396	119	"	0.397	0.327	1.48	0.486	0.564	0.202
"	2397	120	"	0.606	0.372	1.80	0.604	0.656	0.379
"	2398	121	"	0.388	0.354	1.57	0.476	0.599	0.251
"	2399	122	"	0.383	0.376	1.57	0.485	0.622	0.249
"	2400	123	"	0.339	0.267	2.46	0.336	0.386	0.061
"	2401	124	"	0.668	0.309	1.82	0.657	0.554	0.396
"	2402	125	"	0.383	0.333	1.68	0.474	0.567	0.177
"	2403	126	"	0.437	0.192	2.20	0.455	0.399	0.185
"	2404	127	"	0.465	0.338	2.19	0.411	0.439	0.267
"	2405	128	"	0.347	0.444	1.56	0.432	0.775	0.212
"	2406	129	"	0.350	0.345	1.66	0.426	0.555	0.198
"	2407	130	"	0.462	0.199	1.85	0.455	0.438	0.213
"	2408	131	"	0.469	0.232	2.18	0.501	0.467	0.266
"	2409	132	"	0.448	0.362	1.60	0.541	0.586	0.265

第19-1表 三重県内窯跡出土須恵器の分析値

遺跡名	分析番号	試料番号	種別	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
明 苑 1 号	5-2290	No 1	須 恵 器	0.532	0.485	1.96	0.539	0.794	0.430
"	2281	2	"	0.450	0.412	1.54	0.477	0.769	0.249
"	2282	3	"	0.479	0.492	1.71	0.492	0.842	0.392
"	2283	4	"	0.422	0.337	1.67	0.482	0.644	0.298
"	2284	5	"	0.598	0.406	2.22	0.630	0.662	0.385
"	2285	6	"	0.613	0.421	2.22	0.554	0.689	0.442
"	2286	7	"	0.533	0.354	2.25	0.524	0.637	0.391
"	2287	8	"	0.593	0.423	2.13	0.551	0.720	0.412
"	2288	9	"	0.408	0.170	2.16	0.459	0.374	0.155
"	2289	10	"	0.550	0.251	2.33	0.561	0.612	0.217
"	2290	11	"	0.641	0.385	1.97	0.616	0.708	0.442
"	2291	12	"	0.536	0.330	2.29	0.564	0.637	0.328
"	2292	13	"	0.525	0.276	2.16	0.575	0.500	0.270
"	2293	14	"	0.597	0.301	1.74	0.611	0.594	0.387
"	2294	15	"	0.592	0.435	2.03	0.561	0.734	0.469
"	2295	16	"	0.509	0.345	2.03	0.503	0.627	0.310
"	2296	17	"	0.618	0.344	1.94	0.623	0.613	0.332
"	2297	18	"	0.455	0.252	2.10	0.482	0.504	0.261
"	2298	19	"	0.442	0.291	2.05	0.518	0.527	0.240
"	2299	20	"	0.621	0.398	2.06	0.641	0.650	0.330
"	2300	21	"	0.586	0.345	2.40	0.555	0.606	0.395
"	2301	22	"	0.550	0.390	1.72	0.594	0.724	0.400
"	2302	23	"	0.604	0.346	2.28	0.554	0.621	0.427
"	2303	24	"	0.538	0.316	2.18	0.533	0.614	0.277
"	2304	25	"	0.528	0.333	2.18	0.527	0.632	0.337
"	2305	26	"	0.534	0.391	2.00	0.571	0.763	0.403
"	2306	27	"	0.569	0.386	2.05	0.571	0.686	0.372
"	2307	28	"	0.496	0.297	2.17	0.539	0.524	0.288
"	2308	29	"	0.532	0.307	2.31	0.493	0.574	0.317
"	2309	30	"	0.555	0.248	1.81	0.577	0.536	0.328
"	2310	31	"	0.449	0.416	1.50	0.494	0.817	0.291
"	2311	32	"	0.588	0.401	1.86	0.581	0.737	0.427
"	2312	33	"	0.560	0.429	1.62	0.540	0.776	0.248
"	2313	34	"	0.551	0.362	2.07	0.554	0.686	0.393
"	2314	35	"	0.611	0.306	1.95	0.583	0.609	0.417
"	2315	36	"	0.620	0.432	2.06	0.578	0.721	0.483
"	2316	37	"	0.677	0.346	2.56	0.569	0.602	0.424
"	2317	38	"	0.430	0.411	1.46	0.505	0.803	0.271
"	2318	39	"	0.562	0.355	1.84	0.531	0.650	0.394
"	2319	40	"	0.585	0.414	2.13	0.590	0.715	0.408
"	2320	41	"	0.560	0.293	2.11	0.581	0.528	0.287
"	2321	42	"	0.546	0.357	2.11	0.551	0.664	0.355
"	2322	43	"	0.517	0.397	2.45	0.472	0.606	0.233
"	2323	44	"	0.607	0.353	1.84	0.566	0.651	0.399
"	2324	45	"	0.557	0.345	2.21	0.536	0.584	0.332
"	2325	46	"	0.543	0.380	1.85	0.517	0.676	0.442
"	2326	47	"	0.491	0.250	2.16	0.517	0.523	0.290
"	2327	48	"	0.606	0.312	2.09	0.607	0.582	0.407
"	2328	49	"	0.602	0.410	2.15	0.538	0.699	0.439
"	2329	50	"	0.577	0.389	1.67	0.597	0.712	0.367

第19-2表 三重県内窯跡出土須恵器の分析値

遺跡名	分析番号	試料番号	種別	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
明気2号竈	2330	No 51	須恵器	0.530	0.464	2.12	0.528	0.728	0.316
"	2331	52	"	0.492	0.429	1.87	0.519	0.702	0.225
"	2332	53	"	0.565	0.408	1.89	0.556	0.708	0.415
"	2333	54	"	0.566	0.393	1.93	0.553	0.697	0.371
"	2334	55	"	0.550	0.549	1.96	0.543	0.782	0.283
"	2335	56	"	0.494	0.509	1.90	0.521	0.723	0.224
"	2336	57	"	0.526	0.452	1.73	0.541	0.737	0.318
"	2337	58	"	0.562	0.447	1.90	0.548	0.731	0.392
"	2338	59	"	0.516	0.433	2.29	0.497	0.656	0.292
"	2339	60	"	0.498	0.432	1.91	0.512	0.708	0.228
"	2340	61	"	0.412	0.448	1.49	0.488	0.750	0.280
"	2341	62	"	0.588	0.559	1.73	0.571	0.846	0.302
"	2342	63	"	0.502	0.461	1.93	0.488	0.734	0.276
"	2343	64	"	0.580	0.414	2.32	0.511	0.652	0.381
"	2344	65	"	0.523	0.457	1.93	0.516	0.736	0.321
"	2345	66	"	0.557	0.412	1.93	0.545	0.668	0.336
"	2346	67	"	0.539	0.459	2.04	0.509	0.691	0.294
"	2347	68	"	0.501	0.447	1.85	0.510	0.724	0.268
"	2348	69	"	0.520	0.505	1.90	0.518	0.751	0.298
"	2349	70	"	0.601	0.369	1.94	0.565	0.659	0.366
"	2350	71	"	0.622	0.465	2.19	0.567	0.720	0.485
"	2351	72	"	0.528	0.371	2.12	0.526	0.604	0.219
"	2352	73	"	0.517	0.545	2.02	0.492	0.796	0.301
"	2353	74	"	0.523	0.486	2.02	0.524	0.712	0.281
"	2354	75	"	0.571	0.410	1.99	0.556	0.692	0.298
"	2355	76	"	0.509	0.434	2.22	0.504	0.678	0.303
"	2356	77	"	0.566	0.485	2.23	0.529	0.724	0.360
"	2357	78	"	0.565	0.385	2.28	0.522	0.641	0.386
"	2358	79	"	0.561	0.523	2.14	0.558	0.743	0.371
"	2359	80	"	0.554	0.337	1.61	0.573	0.620	0.349
"	2360	81	"	0.516	0.389	2.13	0.474	0.634	0.296
"	2361	82	"	0.500	0.434	1.75	0.535	0.738	0.331
"	2362	83	"	0.653	0.467	2.04	0.553	0.726	0.471
"	2363	84	"	0.496	0.411	1.88	0.470	0.685	0.328
"	2364	85	"	0.554	0.351	1.95	0.526	0.650	0.331
"	2365	86	"	0.537	0.406	1.87	0.514	0.658	0.337
"	2366	87	"	0.634	0.332	1.63	0.640	0.626	0.381
"	2367	88	"	0.499	0.391	1.72	0.510	0.671	0.188
"	2368	89	"	0.583	0.360	1.73	0.575	0.643	0.339
"	2369	90	"	0.481	0.431	1.89	0.510	0.717	0.268
"	2370	91	"	0.416	0.464	2.24	0.413	0.714	0.309
"	2371	92	"	0.533	0.484	2.06	0.520	0.701	0.283
"	2372	93	"	0.577	0.413	1.83	0.535	0.713	0.473
"	2373	94	"	0.503	0.557	2.39	0.493	0.754	0.269
"	2374	95	"	0.520	0.503	2.03	0.545	0.767	0.371
"	2375	96	"	0.547	0.394	2.27	0.523	0.639	0.292
"	2376	97	"	0.541	0.408	2.20	0.514	0.657	0.335
"	2377	98	"	0.589	0.526	2.17	0.574	0.741	0.372
"	2378	99	銚台	0.750	0.214	1.42	0.537	1.17	0.511
"	2379	100	"	0.812	2.60	2.35	0.639	1.25	0.593

第19-3表 三重県内窯跡出土須恵器の分析値

遺 跡 名	分析番号	試料番号	種 類	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
明瓦3号窯灰原	6-632	No155	杯フタ	0.618	0.159	1.78	0.650	0.599	0.210
"	633	156	"	0.527	0.080	1.24	0.604	0.551	0.182
"	634	157	"	0.406	0.048	1.45	0.386	0.327	0.065
"	635	158	"	0.431	0.052	1.41	0.421	0.345	0.079
"	636	159	"	0.402	0.038	1.40	0.413	0.325	0.071
"	637	150	"	0.550	0.145	1.88	0.604	0.584	0.231
"	638	161	"	0.544	0.148	2.01	0.556	0.538	0.202
"	639	162	"	0.503	0.204	3.00	0.381	0.419	0.183
"	640	163	"	0.392	0.059	1.76	0.336	0.284	0.050
"	641	164	坏身	0.459	0.059	1.33	0.453	0.377	0.086
"	642	165	"	0.540	0.342	2.93	0.369	0.533	0.166
"	643	166	"	0.472	0.127	2.18	0.393	0.372	0.103
"	645	167	"	0.354	0.150	1.38	0.351	0.370	0.076
"	646	168	"	0.572	0.123	1.32	0.732	0.674	0.255
"	645	169	"	0.353	0.151	1.55	0.354	0.413	0.086
"	647	170	"	0.522	0.133	2.17	0.434	0.415	0.131
"	648	171	"	0.476	0.070	1.24	0.486	0.414	0.099
"	649	172	"	0.558	0.135	1.18	0.661	0.618	0.223
"	650	173	坏フタ	0.424	0.204	1.16	0.409	0.498	0.128
"	651	174	"	0.432	0.038	1.46	0.430	0.332	0.063
"	652	175	"	0.433	0.177	1.22	0.451	0.460	0.135
"	653	176	"	0.600	0.245	1.34	0.705	0.716	0.234
"	654	177	"	0.455	0.213	1.24	0.471	0.548	0.152
"	655	178	"	0.194	0.116	2.02	0.168	0.267	0.042
"	656	179	"	0.579	0.161	1.93	0.717	0.554	0.215
"	657	180	"	0.430	0.198	1.31	0.392	0.451	0.074
"	658	181	"	0.362	0.343	1.31	0.402	0.636	0.182
"	659	182	坏身	0.533	0.096	1.62	0.517	0.454	0.155
"	660	183	"	0.325	0.304	1.43	0.357	0.574	0.151
"	661	184	"	0.659	0.107	1.03	0.737	0.162	0.189
"	662	185	"	0.360	0.349	1.35	0.414	0.648	0.182
"	663	186	高杯	0.555	0.113	1.98	0.680	0.671	0.281
"	664	187	"	0.602	0.195	1.87	0.620	0.632	0.254
"	665	188	"	0.640	0.169	1.25	0.761	0.676	0.235
"	666	189	"	0.433	0.338	1.87	0.452	0.589	0.176
"	667	190	カメ	0.545	0.100	1.50	0.640	0.629	0.236
"	668	191	"	0.464	0.058	1.44	0.487	0.395	0.108
"	669	192	"	0.574	0.355	1.86	0.614	0.644	0.402
"	670	193	"	0.454	0.038	1.58	0.434	0.371	0.066
"	671	194	"	0.556	0.300	2.55	0.476	0.518	0.313
"	672	195	"	0.614	0.346	1.78	0.642	0.660	0.385
"	673	196	"	0.585	0.141	1.19	0.748	0.775	0.298
"	674	197	"	0.494	0.310	2.81	0.450	0.542	0.259
"	675	198	"	0.537	0.381	2.76	0.455	0.608	0.333
"	676	199	"	0.615	0.118	1.16	0.747	0.691	0.259
"	677	200	フタ	0.568	0.121	1.56	0.694	0.677	0.265
"	678	201	埴瓶	0.350	0.520	2.08	0.395	0.735	0.224
"	679	202	"	0.329	0.470	1.94	0.371	0.696	0.244
"	680	203	フタ	0.183	0.222	1.99	0.232	0.430	0.099
"	681	204	横瓶	0.369	0.102	1.25	0.377	0.342	0.064

第19-4表 三重県内窯跡出土須恵器の分析値

遺跡名	分析番号	試料番号	種類	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
明気4号窯床面	6-682	No205	坏身	0.491	0.196	3.65	0.353	0.400	0.144
"	683	206	"	0.420	0.265	2.73	0.347	0.451	0.157
"	684	207	"	0.436	0.276	2.64	0.365	0.471	0.173
"	685	208	杯フタ	0.506	0.177	2.81	0.426	0.511	0.148
"	686	209	高坏	0.548	0.230	2.16	0.432	0.561	0.221
"	687	210	カヌ	0.537	0.232	2.90	0.496	0.479	0.216
"	288	211	"	0.498	0.185	2.81	0.494	0.490	0.190
明気5号床面	689	212	播鉢	0.512	0.237	3.78	0.391	0.399	0.177
"	690	213	カヌ	0.532	0.284	2.14	0.530	0.528	0.335
"	691	214	"	0.486	0.210	2.86	0.467	0.492	0.207
"	692	215	"	0.522	0.311	2.60	0.495	0.593	0.286
"	693	216	"	0.457	0.283	2.57	0.428	0.461	0.239
"	694	217	"	0.558	0.329	2.61	0.525	0.600	0.287
"	695	218	"	0.505	0.466	3.43	0.371	0.578	0.259
"	696	219	"	0.508	0.308	2.65	0.442	0.501	0.285
"	697	220	"	0.501	0.294	2.83	0.423	0.475	0.292
"	698	221	"	0.498	0.326	3.04	0.414	0.481	0.295
"	699	222	"	0.491	0.313	2.45	0.429	0.518	0.271
"	700	223	杯フタ	0.488	0.329	2.88	0.405	0.522	0.282
"	701	224	"	0.526	0.251	3.38	0.427	0.432	0.188
"	702	225	"	0.517	0.224	3.38	0.453	0.440	0.181
"	703	226	"	0.507	0.375	3.35	0.394	0.532	0.278
"	704	227	"	0.452	0.295	4.09	0.325	0.446	0.189
"	705	228	坏身	0.602	0.197	1.98	0.612	0.563	0.158
"	706	229	平瓶	0.626	0.873	3.42	0.429	0.916	0.279
"	707	230	カヌ	0.551	0.313	2.30	0.514	0.526	0.361
"	708	231	"	0.496	0.288	2.11	0.418	0.528	0.332
"	709	232	"	0.522	0.343	2.00	0.553	0.601	0.358
"	710	233	"	0.500	0.321	2.84	0.439	0.492	0.317
"	711	234	"	0.487	0.360	3.44	0.369	0.491	0.250
"	712	235	"	0.512	0.316	1.97	0.541	0.572	0.357
"	713	236	"	0.546	0.252	2.91	0.524	0.499	0.243
"	714	237	"	0.503	0.381	3.41	0.370	0.510	0.272
"	715	238	"	0.642	0.143	1.57	0.795	0.519	0.235
"	716	239	"	0.472	0.356	3.46	0.356	0.478	0.238
"	717	240	罌瓶	0.533	0.236	3.29	0.487	0.453	0.210
"	718	241	坏身	0.602	0.178	1.88	0.625	0.626	0.157
明気5号窯床原	719	242	罌瓶	0.497	0.473	3.54	0.354	0.568	0.337
"	720	243	坏身	0.526	0.320	3.40	0.404	0.475	0.268
"	721	244	"	0.520	0.426	4.39	0.341	0.486	0.286
"	722	245	カヌ	0.421	0.368	3.37	0.307	0.534	0.236
"	723	246	"	0.505	0.413	3.64	0.355	0.520	0.302
"	724	247	"	0.411	0.316	3.36	0.336	0.447	0.229
"	725	248	"	0.473	0.277	2.56	0.433	0.492	0.272
"	726	249	"	0.540	0.381	3.50	0.402	0.482	0.282
"	727	250	"	0.421	0.292	2.22	0.422	0.515	0.247
"	728	251	"	0.515	0.317	2.96	0.422	0.499	0.267
"	729	252	"	0.450	0.206	3.17	0.381	0.419	0.229
"	730	253	"	0.479	0.275	2.82	0.412	0.460	0.274
"	731	254	"	0.510	0.326	3.04	0.425	0.483	0.273

第19-5表 三重県内窯跡出土須恵器の分析値

遺跡名	分析番号	試料番号	種類	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
明気5号竈沃原	6-732	No255	坏身	0.445	0.189	1.42	0.429	0.468	0.090
"	733	256	高坏	0.498	0.382	3.44	0.391	0.533	0.278
"	734	257	力メ	0.424	0.346	3.24	0.349	0.483	0.253
"	735	258	"	0.463	0.355	3.49	0.350	0.474	0.233
"	736	259	"	0.426	0.329	3.20	0.351	0.461	0.252
"	737	260	"	0.459	0.348	3.59	0.372	0.478	0.228
"	738	261	"	0.415	0.310	3.20	0.345	0.456	0.242
大仏八端1号竈	6-868	No391	坏身	0.396	0.323	1.82	0.482	0.609	0.191
"	869	392	"	0.394	0.360	1.74	0.474	0.533	0.359
"	870	393	"	0.292	0.250	2.86	0.310	0.342	0.179
"	871	394	"	0.291	0.196	1.49	0.395	0.365	0.097
"	872	395	"	0.477	0.308	1.26	0.553	0.566	0.209
"	873	396	"	0.465	0.307	1.52	0.593	0.594	0.194
"	874	397	"	0.441	0.353	2.18	0.494	0.521	0.253
"	875	398	"	0.460	0.316	1.99	0.479	0.451	0.401
"	876	399	"	0.471	0.339	2.35	0.503	0.486	0.294
"	877	400	"	0.274	0.185	1.70	0.342	0.373	0.086
"	878	401	"	0.486	0.374	1.73	0.496	0.565	0.261
"	879	402	"	0.441	0.376	1.87	0.524	0.658	0.218
"	880	403	"	0.472	0.332	1.53	0.588	0.604	0.217
"	881	404	"	0.422	0.261	1.51	0.519	0.479	0.154
"	882	405	"	0.443	0.302	1.53	0.571	0.558	0.199
"	883	406	"	0.477	0.341	1.97	0.536	0.531	0.269
"	884	407	"	0.449	0.345	2.05	0.483	0.612	0.202
"	885	408	"	0.497	0.285	1.80	0.606	0.485	0.169
"	886	409	"	0.477	0.342	2.03	0.511	0.514	0.268
"	887	410	"	0.505	0.449	1.41	0.609	0.761	0.203
"	888	411	坏身	0.470	0.303	1.66	0.509	0.558	0.211
"	889	412	"	0.484	0.370	1.88	0.549	0.539	0.345
"	890	413	"	0.509	0.316	2.32	0.534	0.456	0.281
"	891	414	"	0.474	0.326	1.64	0.597	0.580	0.237
"	892	415	"	0.244	0.198	2.71	0.250	0.296	0.149
"	893	416	"	0.392	0.246	1.39	0.500	0.472	0.136
"	894	417	"	0.386	0.308	1.68	0.499	0.605	0.190
"	895	418	"	0.469	0.444	2.03	0.518	0.642	0.396
"	896	419	"	0.361	0.221	1.63	0.444	0.418	0.112
"	897	420	"	0.450	0.366	1.93	0.541	0.549	0.268
"	898	421	"	0.501	0.335	2.01	0.542	0.525	0.217
"	899	422	"	0.439	0.361	1.33	0.612	0.674	0.232
"	900	423	"	0.468	0.269	2.14	0.605	0.454	0.141
"	901	424	"	0.457	0.331	2.00	0.492	0.522	0.254
"	902	425	坏フタ	0.440	0.277	2.30	0.485	0.456	0.206
"	903	426	"	0.450	0.353	1.53	0.572	0.647	0.246
"	904	427	"	0.472	0.249	1.34	0.545	0.523	0.220
"	905	428	力メ	0.368	0.322	1.66	0.391	0.464	0.385
"	906	429	"	0.342	0.220	1.84	0.368	0.376	0.320
"	907	430	"	0.428	0.351	1.80	0.456	0.495	0.432
"	908	431	"	0.393	0.330	1.92	0.458	0.464	0.305
"	909	432	"	0.444	0.317	2.21	0.358	0.498	0.205
"	910	433	"	0.346	0.207	1.85	0.341	0.353	0.285

第19-6表 三重県内竈跡出土須恵器の分析値

遺跡名	分析番号	試料番号	種類	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
大仏八段1号窯	6-911	No434	カメ	0.377	0.241	2.37	0.518	0.410	0.144
"	912	435	"	0.403	0.310	1.75	0.404	0.463	0.338
"	913	436	"	0.471	0.358	1.48	0.570	0.656	0.234
"	914	437	"	0.467	0.281	1.61	0.540	0.565	0.150
"	915	438	横瓶?	0.490	0.365	1.93	0.554	0.541	0.342
"	916	439	カメ?	0.444	0.322	1.86	0.521	0.514	0.234
"	917	440	短頸壺	0.448	0.335	2.21	0.511	0.494	0.288
根後2号窯	6-802	No325	坏フタ?	0.386	0.284	3.08	0.476	0.393	0.115
"	803	326	"	0.337	0.229	3.09	0.449	0.358	0.092
"	804	327	"	0.267	0.105	2.94	0.249	0.244	0.038
"	805	328	カメ	0.324	0.136	2.26	0.346	0.281	0.056
"	806	329	坏フタ?	0.351	0.170	1.99	0.406	0.336	0.100
"	807	330	"?	0.321	0.153	2.22	0.349	0.362	0.044
"	808	331	"?	0.279	0.142	3.39	0.263	0.257	0.038
"	809	332	"	0.304	0.136	2.83	0.336	0.273	0.064
"	810	333	"	0.395	0.172	2.29	0.452	0.340	0.087
"	811	334	"	0.395	0.194	2.43	0.391	0.404	0.124
"	812	335	坏身	0.331	0.142	1.91	0.382	0.320	0.086
"	813	336	"	0.319	0.154	1.86	0.411	0.357	0.092
"	814	337	"	0.416	0.150	1.78	0.447	0.337	0.091
"	815	338	"	0.387	0.170	2.36	0.432	0.340	0.079
"	816	339	"	0.447	0.239	2.82	0.458	0.420	0.162
"	817	340	"	0.345	0.109	1.87	0.441	0.360	0.106
"	818	341	"	0.410	0.222	3.14	0.439	0.353	0.124
"	819	342	"	0.403	0.204	2.39	0.399	0.392	0.130
"	820	343	"	0.371	0.141	1.94	0.463	0.344	0.113
"	821	344	"	0.390	0.323	3.55	0.462	0.415	0.186
"	822	345	高坏	0.414	0.282	2.93	0.508	0.424	0.144
"	823	346	"	0.395	0.148	2.52	0.439	0.312	0.075
"	824	347	"	0.399	0.183	3.39	0.451	0.297	0.084
"	825	348	カメ	0.405	0.215	3.02	0.505	0.367	0.106
"	826	349	"	0.380	0.226	2.03	0.450	0.440	0.137
"	827	350	横瓶	0.409	0.177	2.19	0.421	0.350	0.090
"	828	351	カメ	0.377	0.215	3.00	0.487	0.344	0.098
"	829	352	"	0.351	0.214	3.12	0.438	0.364	0.094
"	830	353	"	0.424	0.259	2.84	0.525	0.392	0.116
"	831	354	"	0.375	0.197	3.31	0.348	0.360	0.102
"	832	355	"	0.452	0.174	2.47	0.495	0.348	0.105
"	833	356	"	0.424	0.204	2.71	0.434	0.404	0.142
"	834	357	"	0.403	0.216	1.94	0.462	0.435	0.160
"	835	358	"	0.392	0.244	2.92	0.498	0.374	0.111
"	836	359	カメ	0.382	0.204	1.98	0.436	0.423	0.135
"	837	360	"	0.421	0.339	3.38	0.499	0.436	0.195
"	838	361	坏フタ	0.387	0.277	2.89	0.499	0.407	0.112
"	839	362	"	0.338	0.211	3.41	0.363	0.329	0.088
"	840	363	"?	0.310	0.188	3.54	0.387	0.305	0.060
"	841	364	坏身?	0.335	0.180	3.27	0.396	0.312	0.070
"	842	365	坏フタ?	0.259	0.148	2.36	0.250	0.359	0.059
"	843	366	"?	0.375	0.179	3.20	0.399	0.268	0.083
"	844	367	"?	0.329	0.173	3.20	0.396	0.318	0.076

第19-7表 三重県内窯跡出土須器の分析値

遺跡名	分析番号	試料番号	種類	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
根後2号窯	6-845	No368	坏フタ?	0.471	0.234	2.78	0.557	0.377	0.113
"	846	369	"?	0.279	0.124	2.36	0.296	0.287	0.054
"	847	370	"?	0.324	0.184	2.88	0.392	0.334	0.069
"	848	371	"?	0.402	0.251	3.36	0.486	0.390	0.118
"	849	372	"?	0.347	0.124	2.14	0.371	0.321	0.086
"	850	373	"?	0.343	0.160	3.92	0.286	0.241	0.039
"	851	374	坏身	0.290	0.199	3.38	0.383	0.309	0.084
"	852	375	"	0.445	0.275	2.25	0.534	0.390	0.130
"	853	376	高坏	0.419	0.306	3.08	0.523	0.464	0.129
"	854	377	"	0.455	0.259	2.57	0.547	0.415	0.119
"	855	378	方片	0.452	0.207	2.51	0.526	0.365	0.101
"	856	379	"	0.479	0.277	3.09	0.513	0.366	0.132
"	857	380	"	0.452	0.449	2.79	0.471	0.516	0.159
"	858	381	"	0.376	0.165	2.58	0.429	0.304	0.091
"	859	382	"	0.305	0.135	1.97	0.376	0.313	0.122
"	860	383	"	0.390	0.314	3.51	0.486	0.409	0.161
"	861	384	"	0.403	0.337	3.94	0.479	0.440	0.185
"	862	385	不明	0.344	0.137	1.80	0.409	0.333	0.110
"	863	386	方片	0.396	0.230	1.97	0.449	0.451	0.145
"	864	387	"	0.328	0.265	4.35	0.280	0.352	0.104
"	865	388	"?	0.363	0.150	2.90	0.308	0.301	0.051
"	866	389	"?	0.337	0.179	2.68	0.474	0.326	0.074
"	867	390	"	0.410	0.190	3.10	0.454	0.325	0.092

第19-8表 三重県内窯跡出土須恵器の分析値

遺跡名	分析番号	試料番号・種類	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	伊 (ppm)	伊 (ppm)	伊 (ppm)	指定産地	
明気1号墳	5-2410	棺外 坏身 No1	0.343	0.284	2.44	0.381	0.446	0.144	32	8.2	21	不明	
"	2411	棺内 "	No2	0.418	0.051	1.91	0.495	0.199	0.076	54	47	77	不明
明気3号墳	5-2412	棺内 長頸壺	へ記号有 No3	0.613	0.275	1.63	0.627	0.565	0.399	6.5	9.5	11	明 1・2 群
明気6号墳	5-2413	棺跡 坏フタ	No4	0.559	0.291	2.80	0.365	0.543	0.270	66	23	12	明気4・ 5群(注)
"	2414	棺外 高坏	5	0.508	0.362	1.65	0.527	0.556	0.361	0.91	2.6	12	明気群
"	2415	棺跡 坏身	6	0.581	0.330	2.63	0.443	0.680	0.280	27	11	11	明 4・5 群
"	2416	" "	7	0.562	0.296	2.70	0.420	0.532	0.277	34	9.9	8.0	"
"	2417	" "	8	0.557	0.291	2.77	0.397	0.541	0.296	45	14	12	"
"	2418	" "	9	0.480	0.259	2.43	0.361	0.537	0.293	47	11	12	"
"	2419	" "	10	0.569	0.286	2.84	0.404	0.557	0.304	47	18	12	"
河田C-18号墳	5-2420	坏身	11	0.581	0.321	2.04	0.588	0.558	0.397	4.5	12	9.9	明 1・2 群
"	2421	" "	12	0.411	0.313	1.78	0.442	0.605	0.277	10	1.9	19	"
上ノ垣外	5-2422	No16 須	0.441	0.451	1.46	0.497	0.828	0.312	10	10	70	明気群	
"	2423	17 "	0.510	0.378	1.67	0.561	0.635	0.369	4.4	8.3	15	明 1・2 群	
"	2424	19 "	0.588	0.118	1.60	0.704	0.626	0.193	53	2.4	20	明 3 群	
"	2425	21 "	0.543	0.396	1.79	0.526	0.699	0.367	0.90	4.4	17	明 1・2 群	
"	2426	22 "	0.468	0.084	2.26	0.533	0.252	0.112	40	41	61	不明	
"	2427	23 "	0.497	0.461	1.55	0.521	0.837	0.280	6.7	10	60	明 1・2 群	
"	2428	24 "	0.361	0.154	1.98	0.383	0.333	0.162	44	10	25	不明	
"	2429	25 "	0.525	0.383	1.76	0.509	0.721	0.299	4.0	5.8	24	明 1・2 群	
"	2430	26 "	0.517	0.329	1.92	0.507	0.643	0.251	3.3	2.1	10	明気群	
"	2431	27 "	0.548	0.344	1.77	0.573	0.640	0.367	1.7	4.1	9.9	"	

遺跡名	分析番号	試料番号	種類	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
昼河A-2号墳	6-739	No262	杯フタ	0.639	0.134	1.35	0.770	0.717	0.284
"	740	263	"	0.423	0.052	3.28	0.478	0.130	0.074
"	741	264	鉢	0.348	0.041	2.25	0.428	0.165	0.079
"	742	265	短頸壺	0.465	0.080	3.19	0.410	0.359	0.224
"	743	266	"	0.298	0.067	1.89	0.302	0.382	0.160
"	744	267	杯フタ	0.566	0.082	2.98	0.614	0.249	0.246
"	745	268	杯身	0.511	0.059	3.29	0.484	0.181	0.176
"	746	269	"	0.446	0.094	2.35	0.423	0.405	0.180
"	747	270	ハソウ	0.289	0.095	1.20	0.382	0.305	0.115
"	748	271	坏身	0.415	0.082	2.18	0.442	0.527	0.170
"	749	272	坏フタ	0.637	0.124	1.41	0.781	0.701	0.281
"	750	273	坏身	0.453	0.047	2.41	0.539	0.194	0.091
"	751	274	台付長頸壺	0.475	0.031	2.55	0.665	0.207	0.068
"	752	275	坏身	0.608	0.111	1.46	0.722	0.681	0.286
"	753	276	短頸壺	0.445	0.078	3.60	0.437	0.422	0.212
"	754	277	坏身	0.454	0.115	1.74	0.577	0.235	0.074
昼河A-1号墳	755	278	無蓋高坏	0.412	0.065	3.45	0.538	0.217	0.094
"	756	279	三連壺	0.345	0.028	3.42	0.394	0.153	0.051
"	757	280	有蓋高坏蓋	0.173	0.107	3.15	0.210	0.171	0.048
"	758	281	"	0.385	0.030	1.91	0.478	0.387	0.050
"	759	282	"	0.141	0.091	3.44	0.183	0.148	0.057
"	760	283	杯フタ	0.328	0.045	2.11	0.292	0.237	0.055

第20-1表 三重県内古墳等出土須器の分析データ

遺跡名	分析番号	試料番号	種類	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
昼河A-1号墳	6-761	284	坏身	0.306	0.025	2.18	0.369	0.299	0.044
"	762	285	有蓋高坏蓋	0.575	0.062	2.22	0.700	0.568	0.209
"	763	286	"	0.612	0.067	2.16	0.738	0.598	0.209
"	764	287	高坏胴部	0.267	0.090	2.57	0.413	0.335	0.062
"	765	288	台付長頸甕	0.302	0.116	1.53	0.416	0.338	0.102
昼河A-4号墳	766	289	坏身	0.200	0.125	3.15	0.150	0.307	0.040
昼河B-5号墳	767	290	ハソウ	0.515	0.226	4.14	0.648	0.526	0.150
"	768	291	坏フタ	0.328	0.249	4.10	0.348	0.282	0.116
"	769	292	坏身	0.340	0.260	4.04	0.341	0.320	0.112
"	770	293	"	0.439	0.272	4.61	0.259	0.283	0.132
昼河B-7号墳	771	294	ハソウ	0.416	0.087	2.24	0.553	0.230	0.125
"	772	295	坏身	0.410	0.208	5.48	0.399	0.193	0.078
"	773	296	坏フタ	0.473	0.248	4.96	0.561	0.260	0.107
"	774	297	"	0.228	0.043	2.70	0.315	0.143	0.053
"	775	298	坏身	0.368	0.183	3.34	0.329	0.231	0.129
"	776	299	坏フタ	0.389	0.240	3.42	0.388	0.300	0.179
"	777	300	坏身	0.258	0.031	2.73	0.345	0.156	0.082
"	778	301	"	0.273	0.034	2.75	0.359	0.157	0.083
昼河C-11号墳	779	302	台付長頸甕	0.580	0.122	1.13	0.726	0.673	0.249
昼河C-12号墳	780	303	横瓶	0.620	0.115	1.68	0.800	0.335	0.213
"	781	304	坏身	0.198	0.035	2.35	0.250	0.132	0.043
"	782	305	"	0.211	0.020	2.26	0.225	0.114	0.020
"	783	306	坏フタ	0.328	0.065	2.04	0.376	0.263	0.068
"	784	307	坏身	0.266	0.044	2.37	0.234	0.113	0.062
"	785	308	"	0.301	0.071	2.08	0.300	0.221	0.080
"	786	309	"	0.469	0.043	2.50	0.556	0.176	0.101
昼河C-13号墳	787	310	高坏	0.190	0.048	3.07	0.230	0.157	0.029
"	788	311	坏フタ	0.302	0.038	2.85	0.366	0.139	0.034
"	789	312	短頸甕	0.286	0.021	2.22	0.410	0.149	0.037
昼河C-14号墳	790	313	横瓶	0.737	0.095	1.84	0.789	0.247	0.241
"	791	314	坏フタ	0.539	0.105	2.37	0.679	0.219	0.246
"	792	315	平瓶	0.415	0.030	1.53	0.502	0.206	0.064
"	793	316	坏身	0.534	0.105	2.84	0.653	0.215	0.220
"	794	317	"	0.221	0.023	1.15	0.392	0.139	0.039
"	795	318	坏フタ	0.312	0.025	1.80	0.445	0.145	0.045
昼河C-15号墳	796	319	平瓶	0.184	0.021	2.74	0.280	0.112	0.022
"	797	320	坏身	0.360	0.062	2.94	0.364	0.158	0.103
"	798	321	"	0.258	0.060	3.91	0.243	0.145	0.058
"	799	322	短頸甕	0.342	0.031	1.56	0.493	0.175	0.054
"	800	323	坏身	0.166	0.025	2.45	0.234	0.098	0.028
昼河C-17号墳	801	324	カノ	0.535	0.261	1.50	0.595	0.494	0.415

第20-2表 三重県内古墳等出土須恵器の分析データ

## 11. 明気窯跡群および、その周辺の遺跡出土須恵器の蛍光X線分析

奈良教育大学 三辻 利一

### 1. はじめに

主成分元素K、Ca、を含有する主要造岩鉱物は長石類である。Kはカリ長石、Caは斜長石中に含まれていると考えられている。他方、岩石中に含まれる微量元素Rb、Srはそれぞれ、主成分元素K、Caと正の相関性をもつことが実験データから確かめられている。したがって、Rbは主成分元素Kとともにカリ長石中に、また、Srは主成分元素Caとともに斜長石中に存在するものと考えられる。微量元素Rb、Srの主成分元素K、Caに対する関係は粘土や土器についても成り立つことも実験データで示されている。したがって、岩石が風化して粘土を生成する段階でも、微量元素Rb、Srは主成分元素K、Caとともに挙動していることを示している。

一方、花崗岩類の分析データから、主成分元素のKと逆相関の関係をもっており、同様に微量元素RbとSrも逆相関の関係をもつことが示されている。このことはカリ長石と斜長石は逆相関状に分布していることを示す。カリ長石に対して、斜長石の風化が速いため、粘土ではこの関係は若干、くずれる。しかし、母岩の特性が消失するほどくずれることはない。

このようなことから、須恵器の素材粘土は花崗岩類などの岩石が山中でそのまま風化して生成した残留粘土であろうと推定されている。岩石の破砕体が河川によって流され、海底で堆積した、所謂、漂積粘土ではないと考えられている。このような考え方を支持する根拠は母岩のもつ化学特性と、その岩体上にある窯跡から出土した須恵器の化学特性が類似することが上げられる。このことは同時に、須恵器の素材粘土は外部地域から運ばれるものではなく、在地産であることを意味する。

以上のようなデータや考察から、K、Ca、Rb、Srの4因子がとくに有効に須恵器の地域差を示す理由が理解できる。

岩石中の主成分元素Naはソーダ長石中に存在すると考えられる。Naも地域差を示す因子ではある

が、ソーダ長石の風化が速く、粘土中に残存するNaの量は少ない。そのため、前記4因子はど有効に地域差を示さない。

Feも岩石、粘土中の主成分元素であるが、単独の鉱物中に存在する訳ではない。黒雲母、角閃石、輝石などの鉱物中に共通して含まれる元素である。そのため、上記の4因子はど有効に地域差を表示しない。

Siに至ってはすべての鉱物中に含まれている。このような元素は地域差を示さないので、土器の産地推定法の開発研究では役に立たない。

以上のことから、K、Ca、Rb、Srの4因子が須恵器の産地推定の研究によく使われる理由が理解される。本項でも、これらの4因子を中心にデータ解析を進める。

### 2. 分析結果

今回分析した試料の分析値は表20にまとめられている。すべての分析値は岩石標準試料JG-1による標準化値で示されている。このような表示方法をとるのは、微量元素Rb、Srを主成分元素K、Caとほぼ同格にとり扱うためである。通常の表示法では微量元素をppmで、また、主成分元素を%で表示する。この場合、分析値を使って微量元素と主成分元素を比較することは困難である。化学特性からみて地域差を知る上には、「比較」ということは非常に重要である。分布図を作成するにしても、多変量解析を行うにしても、根拠にあるのは化学特性（主成分元素も、微量元素も含めて）の比較である。したがって、主成分元素も微量元素もほぼ同格で比較できる表示方法をとることは重要である。そして、その場合には基準になる標準試料に如何なる試料を選択するかが非常に重要な問題となる。筆者はこの研究を始めた当初から、何のためらいもなく、最良の標準試料としてJG-1を選択した。この選択がこの研究が今日に至るまで大きく前進してきた最大の理由である。

表20の分析値から分布図を作成し、データ解説した結果を以下に説明する。

図70には今回分析した明気窯出土須恵器のRb-Sr分布図を示す。前回分析したデータに基づいて明気1・2号窯領域と明気4・5号窯領域を示してあるこれらの領域は定性的にしか領界を示さないが、領域間の比較をする上には、直截的で見易いという点で威力を発揮する。明気1・2号窯と明気4・5号窯はそんなに離れてはいないが、前者は7世紀代初め後者は7世紀代中葉と操業年代は異なる。したがって、素材粘土の採掘場所は明らかに異なっている訳である。

明気窯群のうち、1号窯の製品の中には、「N」とか「一」などのヘラ記号をもつものが多数見つけられており、考古学的にも1号窯の製品であることを知る目印しになる。今回分析した試料は明気1号窯のもの、採集段階でわかるものと、その区別が不十分で明気窯群の試料として採集されたものもあるが、いずれも、明気1・2号窯領域に分布しており、明気1・2号窯の製品とみられる。4・5号窯の製品は含まれていない。また、今回分析した試料にはすべて、ヘラ記号があり、この点でも、分析データと一致する。

この結果は当然、K-Ca分布図でも一致するはずである。図71には今回分析した明気窯群の試料のK-Ca分布図を示す。いずれの試料も明気1・2号窯領域によく対応していることがわかる。

図72には、Na因子を比較してある。この図には前回分析した明気1・2号窯の試料と明気4・5号窯の試料の分析値を比較してある。明らかに、明気4・5号窯の製品にはNa量が少ない傾向があることを示している。Na因子でも両者の胎土は異なることがわかる。そして、今回分析した明気窯群の須恵器のNa量をみると、これまた、明らかに明気1・2号窯の領域に対応することがわかる。この結果、ヘラ記号をもつ須恵器胎土はすべて、明気1・2号窯の製品であることが胎土分析から言えそうである。なお、胎土分析では明気1・2号窯の製品の相互識別は困難である。同じ粘土を素材として使っていた可能性もある。

次に、明気窯群周辺の古墳等から出土した須恵器

の分析結果について説明する。

図73にはRb-Sr分布図を示す。上ノ垣外遺跡出土の2点の須恵器のうち、No151は明気1・2号窯領域に分布する。このことは図74に示すK-Ca分布図でも確認される。さらに、図72のNa因子でも確認される。したがって、No151は明気1・2号窯の製品と推定される。No151は「N」字のヘラ記号も持っており。考古学的にも胎土分析の結果が許容される他方、No152は「N」字のヘラ記号をもつにもかかわらず、どの因子でも明気1・2号窯領域には対応しない。むしろ、明気4・5号窯の製品に近い化学特性をもつ。その産地は不明としておく。

同様にして、河田古墳群出土の須恵器のうち、No486は全因子で明気1・2号窯領域に対応し、明気1・2号窯の製品と推定される。これに対して、「X」のヘラ記号をもつNo484、485は明気1・2号窯の製品ではない。さらに注目すべき点は両方とも「X」のヘラ記号をもっているにもかかわらず、No484とNo485の胎土は異なる点である。No484とNo485はそれぞれ、別々の窯で焼成された須恵器である可能性が高い。このうち、No484の胎土はぴったり一致する訳ではないが、明気4・5号窯の須恵器に近い化学特性をもつ。

次に、多気中学校造成地から出土したNo482(「N」ヘラ記号をもつ)とNo483(「V」ヘラ記号をもつ)とは全因子明気1・2号窯領域に対応しており明気1・2号窯の製品であると推定される。

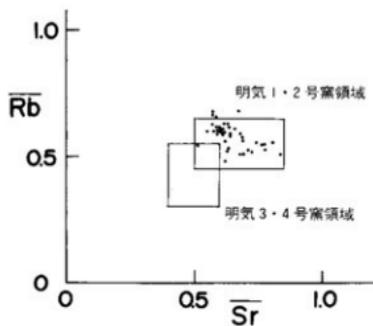
次に、大日山古墳群出土須恵器の分析データについて説明する。2号墳出土須恵器のRb-Sr分布図を図75に、K-Ca分布図を図76に示す。No487は明気1・2号窯の製品と推定されるが、他の須恵器は明気1・2号窯の製品ではない。図75でこのうちの3点が明気4・5号窯領域に分布するが、K-Ca分布図では対応しない。したがって、これら6点の須恵器は明気4・5号窯の製品ともいえない。これら6点は同じ胎土をもつとみられ、上ノ垣外遺跡出土のNo152の須恵器胎土もこれらと類似している。その産地は不明である。

3号墳(大日山古墳群)出土須恵器のRb-Sr分布図は図77に、K-Ca分布図は図78に示されている。No494は明気1・2号窯の製品、No495は明気4・

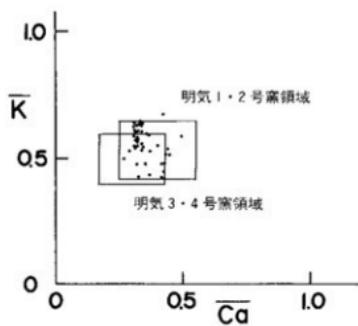
5号窯の製品とみられる。No494には「×」のヘラ記号がある。他の3点は明気窯群の製品ではなく、外部地域からの搬入品である可能性をもつ。

図79、80には大日山尾根北裾から出土した5点の

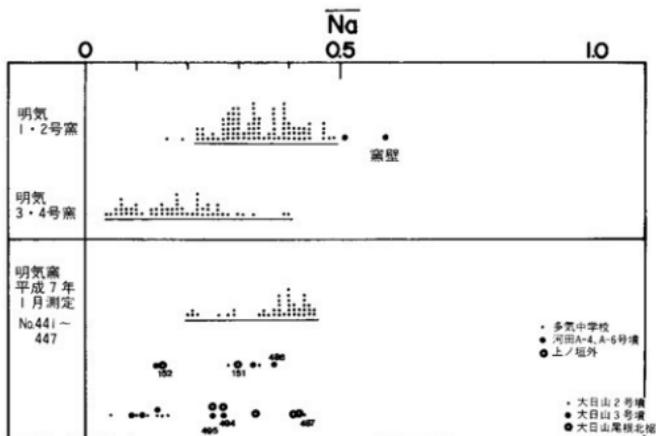
須恵器のRb-Sr分布図とK-Ca分布図を示してあるこれらの分布図と図72のNa因子より、これら5点の試料は全因子で明気1・2号窯領域に対応しており明気1・2号窯の製品と推定される。



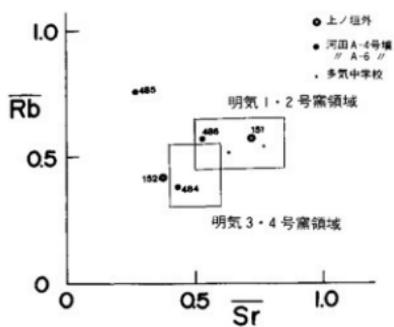
第70図 明気窯出土須恵器 (No441~481) の Rb-Sr分布図 H 7. 1月測定



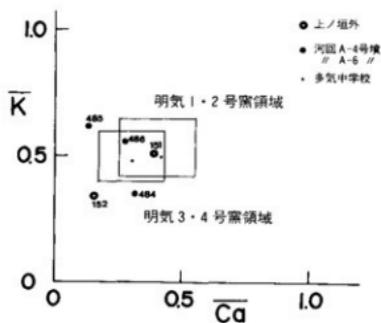
第71図 明気窯出土須恵器 (No441~481) の K-Ca分布図 H 7. 1月測定



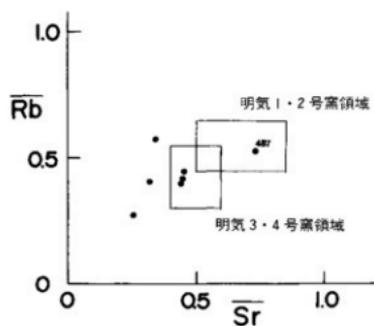
第72図 Na因子の比較



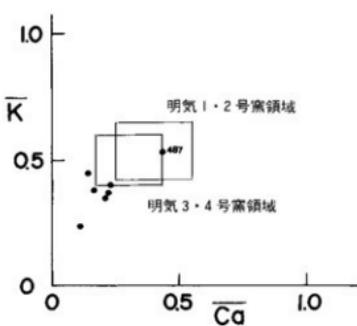
第73図 明気窯群周辺の遺跡出土須恵器のRb-Sr分布図



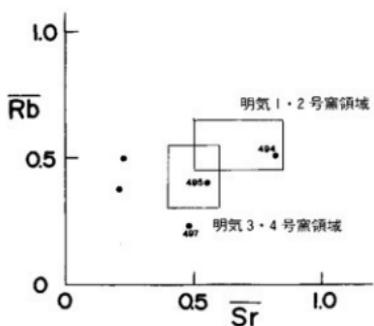
第74図 明気窯群周辺の遺跡出土須恵器のK-Ca分布図



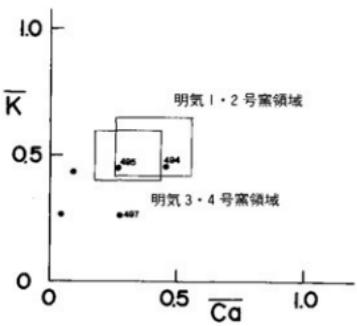
第75図 大日山2号墳出土須恵器のRb-Sr分布図



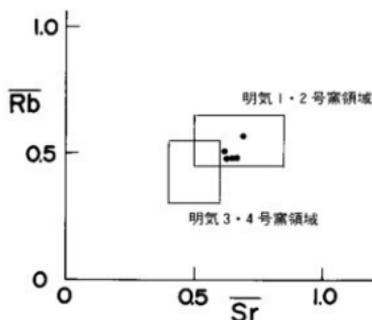
第76図 大日山2号墳出土須恵器のK-Ca分布図



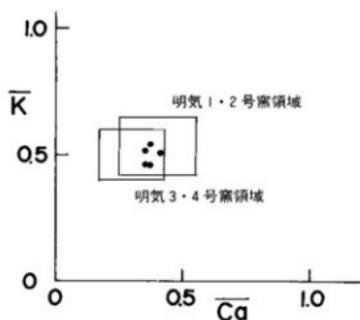
第77図 大日山3号墳出土須恵器のRb-Sr分布図



第78図 大日山3号墳出土須恵器のK-Ca分布図



第79図 大日山尾根北裾出土須恵器のRb-Sr分布図



第80図 大日山尾根北裾出土須恵器のK-Ca分布図

遺跡名	分析番号	試料番号	器種	ヘラ記号	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	備考
上ノ垣外	7-405	No 151	甗	「N」	0.512	0.386	1.79	0.570	0.718	0.296	再測定 No24
〃	7-406	152	〃	「N」	0.340	0.153	2.05	0.418	0.315	0.146	再測定 No25
明気1号窯	7-407	No 441	甗	「N」	0.483	0.347	2.24	0.520	0.627	0.279	
明気窯群	7-408	442	〃	「N」	0.630	0.306	2.27	0.683	0.572	0.383	
〃	7-409	443	広口壺	「N」	0.562	0.339	2.08	0.615	0.604	0.380	
明気1号窯	7-410	444	坏フタ	「N」	0.592	0.493	1.98	0.564	0.808	0.412	
明気窯群	7-411	445	坏身	「N」	0.533	0.369	1.98	0.570	0.687	0.367	
〃	7-412	446	碗	「N」	0.524	0.453	1.89	0.547	0.767	0.379	
〃	7-413	447	坏身	「N」	0.608	0.343	1.86	0.614	0.660	0.431	
〃	7-414	448	〃	「N」	0.540	0.444	1.99	0.552	0.769	0.446	
〃	7-415	449	碗	「N」	0.517	0.430	1.79	0.562	0.738	0.425	
〃	7-416	450	坏フタ	「N」	0.479	0.317	1.88	0.481	0.621	0.379	
明気1号窯	7-417	451	坏身	「N」	0.496	0.272	1.99	0.546	0.511	0.289	
明気窯群	7-418	452	〃	「X」	0.580	0.323	1.88	0.587	0.641	0.437	
〃	7-419	453	坏フタ	「X」	0.645	0.340	2.25	0.615	0.635	0.425	
〃	7-420	454	〃	「X」	0.654	0.337	2.22	0.634	0.628	0.426	
〃	7-421	455	坏身	「X」	0.576	0.317	1.94	0.606	0.610	0.415	
〃	7-422	456	〃	「X」	0.425	0.424	1.57	0.529	0.784	0.258	
〃	7-423	457	〃	「X」	0.618	0.306	1.91	0.603	0.615	0.402	
〃	7-424	458	坏フタ	「X」	0.529	0.282	2.05	0.650	0.548	0.213	
〃	7-425	459	甗	「X」	0.553	0.321	1.76	0.592	0.617	0.389	
〃	7-426	460	坏身	「X」	0.567	0.321	2.08	0.594	0.585	0.368	
〃	7-427	461	〃	「X」	0.560	0.396	1.80	0.573	0.694	0.435	
明気1号窯	7-428	462	坏フタ	「X」	0.546	0.321	2.00	0.563	0.621	0.346	
明気窯群	7-429	463	坏身	「X」	0.579	0.322	2.15	0.598	0.576	0.397	
〃	7-430	464	〃	「X」	0.586	0.313	1.88	0.602	0.604	0.423	
〃	7-431	465	坏フタ	「X」	0.636	0.341	2.37	0.595	0.607	0.446	
〃	7-432	466	〃	「X」	0.637	0.330	2.07	0.623	0.592	0.360	

表21-1 明気窯群および周辺遺跡出土須恵器の分析値

遺 跡 名	分析番号	試料番号	器 種	ヘツ記号	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	備 考
明 気 1 号 窯	7-433	No.467	杯	「-」	0.596	0.359	2.22	0.587	0.644	0.427	
〃	7-434	468	杯身	「-」	0.650	0.309	2.27	0.673	0.570	0.396	
明 気 窯 群	7-435	469	杯フタ	「-」	0.476	0.431	1.81	0.528	0.710	0.204	
〃	7-436	470	〃	「-」	0.553	0.312	1.81	0.627	0.571	0.346	
〃	7-437	471	杯	「-」	0.446	0.425	1.49	0.511	0.837	0.293	
〃	7-438	472	杯身	「-」	0.610	0.308	1.80	0.634	0.615	0.413	
〃	7-439	473	〃	「-」	0.478	0.422	1.87	0.517	0.727	0.404	
〃	7-440	474	〃	「-」	0.435	0.374	1.70	0.514	0.687	0.215	
〃	7-441	475	杯フタ	「-」	0.545	0.337	1.76	0.609	0.609	0.336	
明 気 1 号 窯	7-442	476	杯身	「-」	0.676	0.418	2.50	0.687	0.668	0.407	
〃	7-443	477	杯フタ	「-」	0.427	0.355	1.74	0.511	0.682	0.207	
〃	7-444	478	〃	「-」	0.599	0.366	2.04	0.590	0.678	0.435	
明 気 窯 群	7-445	479	杯身	「-」	0.540	0.343	2.24	0.527	0.635	0.384	
明 気 1 号 窯	7-446	480	杯フタ	「-」	0.609	0.334	2.06	0.599	0.587	0.400	
明 気 窯 群	7-447	481	杯身	「-」	0.642	0.319	2.01	0.646	0.580	0.399	
多気中学校造成地	7-448	482	甕	「N」	0.478	0.229	1.75	0.523	0.631	0.275	
〃	7-449	483	高杯	「V」	0.502	0.408	1.66	0.541	0.768	0.342	
河田A-4号墳	7-450	484	杯身	「X」	0.349	0.306	3.34	0.378	0.429	0.138	
〃	7-451	485	甕	「X」	0.618	0.127	2.36	0.758	0.270	0.333	
河田A-6号墳	7-452	486	杯身		0.557	0.274	2.32	0.571	0.528	0.370	
大日山2号墳	7-453	487	〃		0.528	0.426	1.95	0.533	0.725	0.434	
〃	7-454	488	高杯		0.242	0.111	2.85	0.271	0.262	0.053	
〃	7-455	489	広口壺		0.380	0.165	2.49	0.408	0.323	0.099	
〃	7-456	490	甕		0.446	0.143	1.60	0.583	0.342	0.120	
〃	7-457	491	カヌ		0.347	0.211	2.37	0.416	0.448	0.144	
〃	7-458	492	〃		0.398	0.232	2.50	0.449	0.457	0.162	
〃	7-459	493	〃		0.370	0.220	2.60	0.404	0.437	0.154	
大日山3号墳	7-460	494	杯身	「X」	0.450	0.447	1.54	0.509	0.821	0.272	
〃	7-461	495	広口壺		0.447	0.262	2.81	0.396	0.549	0.247	
〃	7-462	496	杯フタ		0.436	0.087	2.92	0.499	0.233	0.141	
〃	7-463	497	杯身		0.264	0.271	2.79	0.225	0.477	0.089	
〃	7-464	498	甕		0.274	0.043	2.74	0.384	0.212	0.113	
大日山尾根北塚	7-465	499	杯フタ		0.458	0.367	1.98	0.481	0.646	0.252	
〃	7-466	500	杯身		0.539	0.369	1.65	0.566	0.688	0.406	
〃	7-467	501	甕	「N」	0.463	0.366	2.09	0.475	0.640	0.266	
〃	7-468	502	壺		0.505	0.408	2.03	0.483	0.670	0.330	
〃	7-469	503	杯身	「-」	0.524	0.349	2.02	0.510	0.618	0.419	

表21-2 明気窯群および周辺遺跡出土須恵器の分析値

## 12. 結 語

明気窯跡群は全5基から構成される窯跡群で、操業時期は7世紀初頭から中葉に至る半世紀程度と考えられる。

生産する土器の器種構成に偏りはなく、杯身・杯蓋を中心に多種多彩な器種が焼成されていた。供給先は、付近の古墳群が中心と考えられ、土器に付された特色のあるへう記号から、特定も可能である。

以下、窯体及び出土土器について、問題点を提議し、若干の考察を加えていくこととする。

### 1. 窯体構造

#### (1) 焚口付近の Pit 群

明気1号窯においては、窯体の密閉作業に関する施設と考えられるPitが検出されている。これは前庭部において、焚口両壁の延長上に歪められている。

Pitの底には凹凸が認められ、その歪な円形を呈することなどから、「石」の設置が考えられる。これはある程度の高さを持った「立柱石」であったと考えられ、窯体密閉の際に基礎的な役割を果たした可能性がある。

また、燃焼部両壁には半円柱形・逆円錐台形のPit(壁面の切り込み)が存在する。ただし、切り込みの内面が被熱していない点からすると、焼土壁を切断してこのPitが設置されたか、或いは構築段階においてすでに何らかの設置物が存在した可能性がある。窯体構築段階において、すでに設置物が存在したのであれば、それは燃焼部という立地を考え「木製柱」とは考え難く、耐火性という観点から「石」と想定するのが妥当と思われる。また、操業途中において、焼土壁を切断し設置を行った可能性もあるが、この場合についてもやはり耐火性のない「木製柱」は適当ではないと考える。

ところで、この壁面のPitは燃焼部と焼成部とを区画する場所に存在している。また、このPitを境として窯体は縮小化がなされている。これらの点から考え、ある時期窯体は規模の縮小化がなされ、その中心的構造の変化は、焼成部幅の縮小化と焚口の移動にあった。その際、かつて焚口に立っていた閉

窯の基礎となる「立柱石」は、燃焼部へと移動し、新たな焚口を形成したと考える。

焚口における「石」の設置例は、あまり報告がないが、多気郡多気町牧の牧1号瓦窯に認められる。また、石の存在自体は不明であるが、四日市市の岡山1号窯にて、明気1号窯と類似する箇所にPitが存在する。同報文において、このPitに対する詳細な記述はない。しかし、断面図によると深さは検出面より約0.7mと、かなり深いものであったことが窺われ、その関連性が注目される。

明気1号窯前庭部には、立柱石の痕跡の他に数箇所のPitが存在する。これらは立柱石のPitと同様に、灰原層と同質の埋土を有し、須恵器片も出土している。設置目的は判然としないが、これも窯体の密閉作業にかかわる可能性がある。三重県上野市の御墓山窯跡群においても、前庭部に小規模なPit群の存在が認められ、関連性が注目される。

焚口・前庭部におけるPit群の存在は、明気1号窯に関してのみ存在し、近接する明気2号窯については見られない。同時期で、しかもほぼ同規模を有する窯体において、構造上の差異が認められ、特筆すべき点の一つと言えよう。

#### (2) 窯体の形態と構築方法

窯体の形態は、急傾斜面を利用した「地山くり抜き式」で、窯体天井部の大半が地山を用いる「地下式」に該当する。

これは、残存する天井部に花崗岩の岩脈が通している点から実証できる。また、天井部の崩壊した部分についても、残存する窯壁の先端と遺構検出面との比高がかなり認められ、「半地下式」の窯体を構築するのは物理的に不可能といえる。

ただ、焚口及び煙道付近については、若干構造を異にし、「半地下式」を採用していたと思われる。これは、焼成後の「窯出し」作業時において、常に破壊される部分であったと言え、明気1・2号窯においては、焚口付近の窯壁が直立している点からも言及が可能である。煙道についても、遺構検出面と

さほど比高を有さず、被熱した床面が存在することなどから、焼成及び蒸出し時において、その都度構築・排除を繰り返した部分が存在したと考えられる。

明気窯跡群の西約400mに存在した中尾窯跡は、明気1・2号窯を若干逆上る時期の操業と考えられる。報文において言及はなされていないものの、窯体構造については「半地下式」であったと考えられる。中尾窯跡の立地は明気窯跡群同様に、丘陵斜面中腹である。また窯体の構築された地質も共通していることから、時期及び立地条件の類似する窯において、構造上大きな差異が存在する点は非常に興味深い。

明気3・4・5号窯については、調査区外もしくは半・全壊状態での検出となったため、構築方法については判断としない。ただ、明気3号窯は前庭部において、明気1・2号窯では見られなかった整地層（焼土ブロック及び炭化物混入）が存在する。これは、造り替えに際して撤去した天井部との見方もでき、従って「半地下式」であった可能性も充分に考えられる。明気5号窯は、天井部の削平を受けており、また整地層及び焼土ブロック等の混入が認められる堆積層の存在も認められなかった。わずかに残った窯壁から天井部への曲線部分についても、他質土による形成ではなく、地山そのものを用いていた。従って明気5号窯については地山くり抜き「地下式」と位置づける。

後述するが、明気3・5号窯はその出土遺物からほぼ同時期の操業と思われる。同じ時期・土質の窯において、窯体の構築方法に根本的な違いが存在する可能性があり注目される。

### (3) 窯体に付属する溝—外周溝—（S D17・18）

明気1・2号窯は、煙道から延びる溝を有している。この溝は窯によってその長さや深さ、そして延長方向に違いがあるものの、機能的には同様の役割を果たしていたと考えられる。

県内において、窯体に付属する溝を有する窯は、調査例が寡少である点も手伝い、非常に少ない。報文による紹介は、今回の明気1・2号窯の2例が初現となるが、過去の調査事例においてその存在を窺

わせる遺構は既に検出されていた。四日市市岡山6号窯がそれである。岡山6号窯は、煙道からさらに斜面上方に延びるの溝（長さ約3m・幅約0.4m）を持つ特異な窯であったが、その溝を切るかたちで窯体左側に延びると考えられる溝をも有していた。残念ながら緊急発掘であったため、溝の全容は明らかにはされなかったが、窯体主軸に対し直交するこの溝は、特に明気1号窯のタイプと類似すると言える。岡山6号窯の操業は、TK43平行期と報告されており、明気窯跡群の操業期をやや逆上る時期である。

同様の溝を持つ窯は、県外にて多数の事例が報告されているが、従来は、京都府の準上り瓦窯に代表されるような「排水溝」との解釈がなされてきた。

望月精司氏は、この溝について全国的な集成と詳細な研究を試みられ、「送風・作業溝」との見解を示されている。これは、谷から吹き上げる風を煙道から送り込むことにより、窯体から煙道を通して外に排出される熱を封じこめ、酸化還元焼成を促進させる効果をねらったものとされた。また氏は、その送風溝について、煙道からの蒸出しや煙道形成のための作業用通路も兼ねていたと考えられた。氏による「送風・作業溝」との認定基準は、①蒸出しは奥壁を持たず、窯幅を狭めただけで開口、②蒸出しの床面レベルと連続して溝が掘り込まれ、その溝は蒸出し口と直交又はそれに近い形で連結、窯の主軸線上にある溝の壁は酸化色に被熱、③溝は蒸出し口から丘陵斜面下方へとカーブしながら延びる、の3点である。

明気窯跡群の場合、1号窯についてははげその条件を満たしているといえる。しかし、2号窯に関しては、①・③及び②の溝壁の被熱について条件を満たしているものの、溝の底と蒸出し床面とは比高があり、若干の形態に差異が存在している。残存する煙道部と溝の底とは、約20cmの差がある。これらの観点からすれば、明気2号窯の外周溝は、一種特異な形状をもつものとして位置づけおく必要があるだろう。

いずれにせよ、窯体主軸上において溝の壁面は確かに被熱している。焼土等を含まない、地山と同質土の堆積層と酸化焙層の互層は、最低でも4回以上

の焼成回数を物語っている。これは、溝が掘り返されることなく、焼成がくり返されたことにはかならず、「溝」が溝としての機能を低下させていくことにも特に差し支えなかったと言えよう。つまり、「溝」の存在は、窯体の構築当初は別とし、以後の操業にはあまり重要な位置を占めなかった可能性が考えられるのである。

## 2. 窯体の立地

前項で述べた窯体構造をもつ窯跡群は、急斜面の中腹及び頂部に立地している。また、1・2号窯については、窯体の前庭部が狭く、斜面側は特に急傾を呈している。これは、谷から吹き上げる風を最大限に利用しようとした構築方法と考える。(現実には窯体内での調査は、吹き抜ける風とそれによる砂埃にしばしば悩まされた。)

また、窯跡の位置する丘陵は、幾つかの尾根筋とそこから派生する支派で構成されているが、現在付近の集落を結ぶ旧道は、これらの尾根上を通るものが多い。この傾向を窯の操業当時からものと仮定すると、尾根頂部に立地する3号窯の存在や尾根上の堅穴住居、作業場的な平坦面など、一見すると不可解な遺構配置についても理解できそうである。

## 3. 生産須恵器の供給地の推定

### (1) 杯身・杯蓋の特徴にみる供給地

明気1・2号窯にて生産された杯身・杯蓋は、その調整技法において特徴的な様相を呈する。一般的に底部・天井部は、ヘラ切り後何回調整を施さず、回転台から切り離したままで完成品として扱われている。いわゆる「ヘラ切り不調整」であるが、それらの内、多くのものに、底部及び天井部が突出するものが認められる。これは、ロクロ回転台からの切り離しの際に、ヘラを回転台と平行に入れることにより生じた厚みと考えられ、外面の突出に対し内面の傾斜が一律であることから言及できよう。

ところで、このような特徴を持つ杯身・杯蓋は、周辺の古墳群出土の遺物に見ることができ。近接する明気古墳群の1・3・6号墳<sup>①</sup>他、多くは北東約3kmの河田古墳群<sup>②</sup>において認められる。河田古墳群は、未調査部分も含め円墳及び方墳の約90基から構

成されている。構築時期も6世紀末から7世紀前半期に集中しており、明気窯跡群の消長と期を同じくしている。

### (2) ヘラ記号の存在とその消長

ヘラ記号は、全ての窯体及び灰原で認められているわけではなく、ほぼ明気1・2号窯に限定されるようである。明気1・2号窯と操業時期を同じくする明気4号窯は、ほぼ全壊し遺物も寡少であったため全容は掴めない。しかし、明気3号窯灰原や明気5号窯の窯体・灰原においては、数点の例外を除きヘラ記号の出土はほとんどなかった。また、包含層においても、明気1・2号窯と3・4・5号窯を画する弱い谷筋を境として、ヘラ記号の付された須恵器の出土が著しく減少した。このヘラ記号の有無は、窯体の操業時期とも合致している。つまり、甌宝珠つまみを有する、いわゆる杯身・杯蓋の逆転が生じる時期を経てヘラ記号が消滅しているのである。

### (3) ヘラ記号の種類と特徴

#### ① 杯身・杯蓋のヘラ記号

杯身・杯蓋におけるヘラ記号は、身と蓋に共通するもので、いずれかに固定され用いられたものではないようである。しかし、杯身・杯蓋に付されたヘラ記号は、そのほとんどが「一」「×」のいずれかであり、専ら杯身・杯蓋に用いられている。「一」「×」の記号は、一点の例外を除いて他は、底部及び天井部外面に施されている。明気1・2号窯期を中心とする出土遺物の内、個体として確認できる杯身・杯蓋は、包含層を含め419点出土している。そのうちヘラ記号を有するものは全体の13.4%を占めている。

#### ② 「N」字状のヘラ記号

「N」字状のヘラ記号は、甕・平瓶・横瓶・甕・短頸壺蓋においてみられる。付される位置は、甕・平瓶・横瓶については頸部内面、甕は底部外面、短頸壺蓋は天井部外面とほぼ所定の位置が定まっていたようである。甕・平瓶・横瓶におけるヘラ記号の例は、各1点ずつと非常に稀であるが、短頸壺蓋の場合は複数の例がみられ、頻度はやや多くなると言えそうである。

③ その他のヘラ記号

数量的には寡少であるが、「-」「×」「N」の他にもヘラ記号は存在する。高杯の「W」字状、甕の「M」・「V」字状をはじめ、提瓶の「U」・「|」などがある。出土例が少なく言明はできないけれども、これらの記号は特定器種に偏在するものではないと考えられる。

出土地	記号					
明気1号窯	×	-	N	W		
明気2号窯	×	-	N			
明気3号窯	U	V				
明気4号窯						
明気5号窯						
落ち込み1~3	×	-	M			
包含層	×	-	N	=		

記号	身・蓋	高碗	高杯	壺	提壺	平瓶	横瓶
-	●				●	●	
×	●	●					
N			●	●	●	●	●
W		●					
M				●			
V				●			
U						●	

第22表 出土地別、器種別ヘラ記号一覧

(3) ヘラ記号にみる供給地

杯身・杯蓋において顕著に見られる「-」「×」をはじめ、甕や短頸壺などに見られる「N」字状の記号は、近接する古墳群を中心に出土例が報告されている。

ヘラ記号の出土した遺跡は、明気窯跡群を中心に4km圏内の榊田川右岸流域に点在している。

最も近接するのは、明気窯跡群を含む浅間丘陵上にある明気古墳群で、1号墳主体部から「N」を施した広口壺が出土している。また、同丘陵上の大日山古墳群の所在する尾根裾からは「N」字状ヘラ記号を施した甕が出土し、現在の多気中学校造成時に出土したと伝えられる須恵器にも、「V」字状のヘラ記号を持つ高杯がある。河田古墳群は、直線距離にして4kmほど下流にあたる、約100基からなる群集墳である。ここからも杯身・杯蓋の「-」「×」をはじめ、甕・横瓶などに「N」字状ヘラ記号が多数見られる。

また、「N」字状のヘラ記号は、古墳以外からも出土している。大日山古墳群を見上げる上ノ垣外遺跡の溝から出土した甕がそれである。

現在の所、杯身・杯蓋に限定される「-」「×」のヘラ記号をはじめ、「N」字状のものは、明気1・2号窯特有のものであり、他に例を見ない。従って、供給先はこのヘラ記号をもつ製品の出土をもってほぼ認定できよう。勿論、ヘラ記号をもって、供給地決定の根拠とすることに関しては、ヘラ記号の用途が不明確である以上、危険であると異論はない。しかし、三辻利一氏の蛍光X線による胎土分析により、消費地における特徴的なヘラ記号(杯身・杯蓋に限定される「-」「×」、及び「N」字状ヘラ記号)について、明気1・2号窯産の領域に含まれることが実証されている。

榊田川流域の古墳群は、明気古墳群の立地する浅間丘陵を境として、上流にはほとんど存在しなくなる。これは窯跡についても同様であり、上流域においては、時期の異なる窯跡も知られていない。したがって、明気窯跡群からの供給は、榊田川を遡ることではなく、当地から下流域と限定できそうである。

ただし今日までに、榊田川左岸において、明気1・2号窯産のものと考えられる須恵器は出土していな

い。もっとも、調査例が寡少である点は、充分考慮しなければならないが、右岸の出土量に比べるとその違いは大きいのである。

その原因として考えられるのが、柳田川を介して異なる「郡域」である。明気窯跡群の存在する柳田川右岸は旧多気郡に、左岸は旧飯野郡に当たる。その様な観点からすれば、近年論じられている「一部一窯」体制が、当地でも存在した可能性があり注目される。

また、視点を東に転じると、ここにおいても地域を画するラインが見えてくる。明気窯跡群を含めた南伊勢地域の窯跡群は、地域を大観し「外城田窯跡群」と呼称されている。しかし、明気・中尾窯跡の一群と、池ノ谷をはじめ原・市寄窯跡群とは、1km以上の隔絶がある。明気窯跡群が製品の搬出に相可川・柳田川を用いたと考えるとき、後者は外城田川を利用していたとすべきである。外城田川は、旧多気郡と旧度会郡の郡界と考えられており、窯跡の群集に「郡域」が関与していた可能性がある。

#### 4. 出土遺物

全5基から構成される明気窯跡群は、出土遺物からおよそ2窯期に分けられる。明気1・2号窯及び4号窯が該当する窯期と明気3・5号窯の時期である。便宜上、前者をMG I期、後者をMG II期として以下の項目に従い述べるものとする。

##### (1) 器種構成と技法上の特徴

###### ① MG I期

いわゆる古墳時代タイプの杯身・杯蓋を中心に操業が行われていたと考えられるが、冒頭でも述べたとおり、器種に偏在はない。製品のバリエーションという点では、多種多様な須恵器生産が行われ、全国的な傾向と合致している。

杯蓋は、全体的に天井部が突出・平坦化する傾向が見られる。これは「ヘラ切り不調整」によるものと考えられる。また、蓋の稜は無く、端部がやや内向する傾向が強い。

杯身の「立ち上がり」は、かなり形骸化が進んでいるが、体部の粗雑な調整に比べ、シャープな作りを見せている。底部は、杯蓋の天井部同様に平坦な

面を持つものが多く、また突出しているものも少ない。杯身の場合も底部は「ヘラ切り不調整」で「ヘラ削り」による調整は皆無である。

また、「返り」を持つ杯蓋及び「立ち上がり」を持たない杯身の出現は未だない。

ただし、金属器の模倣と考えられる碗は多数出土している。この碗は、体部に2本の沈線をもつ。また台を持つものと、そうでないものが認められ、有台のものについては三方の「三角透かし」を施す点で共通している。

高杯は、無蓋のものが中心で、有蓋高杯は全く出土していない。脚は二段透かしを施すものが中心であるが、ヘラ状工具で切り込みを入れただけのものも含まれ、形骸化の一途をたどっていると言える。種少数であるが、「透かし」を持たない短脚の高杯も出現している。

壺・甕類は、バリエーションが多く、特に甕に関しては、かなり裝飾過多と言える。

甕の場合、口縁端部に肥厚化した帯部を有す点は共通した特徴で、口縁から頸部を数条の沈線により区画し、文様帯を作っている。施される文様は、(a)波状文、(b)柳状工具による縦方向の施文、(c)柳状工具の先端部による斜め方向の瓦痕などがあり、中には(b)を施したのち(a)の波状文を巡らすものもある。

###### ② MG II期

古墳時代タイプの杯身・杯蓋と「返り」を持つ杯蓋及び「立ち上がり」を持たない杯身が共存する窯期である。MG I期と同様に器種の偏在はなく、バリエーションに富んだ器種構成を持つ。

古墳時代タイプの杯身・杯蓋は、MG I期の特徴である天井部・底部における「ヘラ切り不調整」を色濃く残し、また、口縁端部が内側に屈曲する点についても変化はない。

ただし、全体的に小ぶりになり、杯身に関しては「立ち上がり」の著しい退化が見られる。

また、さらに特徴的な点は、杯蓋のうち約半数が天井部を丸く仕上げ、口縁端部も屈曲せず丸くおさめる様相を示していることである。これはMG I期においては、ほとんど見られなかった傾向で、在地色を上回る畿内色の大きな流入が窺われる。

「返り」を持つ杯蓋及び「立ち上がり」を持たない杯身は、かなり小型化している。全国的に見て小ぶりが主流な時期とは言え、極端であることは口径の平均値が示すところである(第83図参照)。

杯蓋の「摘まみ」については、いわゆる「擬宝珠」状のものと、有蓋高杯の蓋部摘まみに代表される扁平なものに大別できる。両者は付される蓋自体の特徴で分類した場合、混在することになる。しかし単なるバリエーションの差異ではなく、器種などの使用先が異なる可能性もある。

碗は、MG I 期同様に多数存在するが、加えて鉢の登場も見る。一方、匙は姿を消す。

高杯は小型化し短脚のものとなるが、短脚であるにも関わらず「透かし」を施す例も存在する。

壺は、裝飾過多であり、沈線で区画された文様帯と波状文を中心とする施文は、MG I 期と特に変化はない。しかし、口縁端部の帯部は明瞭に残るものの肥厚化は顕著でなくなる。そういった傾向は、壺の口縁端部においても見受けられる。

## (2) 操業の変遷と消長

明気窯跡群に近接する中尾窯跡は、出土する杯身・杯蓋に「ヘラ削り」が残るとの報告があり、明気1・2号窯よりやや遅る、6世紀末頃の操業と考える。その後、明気1・2号窯がほぼ同時に操業を開始したと思われる。2基の窯間には、特に時期差を感じさせる特徴はなく、むしろ二基一対の操業体制であった可能性も強い。これをMG I 期とする。

明気5号窯は、MG I 期の特徴を持つ古墳時代タイプの杯身・杯蓋を有する反面、天井部に掻き目を施す「摘まみを持つ杯蓋」の生産も行っていった。

この共伴関係は、後述する明気3号窯より若干先行する操業を示唆するものとの見方もできる。しかし天井部に掻き目を施す蓋は2点のみの出土で、他の器種構成は明気3号窯と特に差異はない。したがって明気3・5号窯を、明気1・2号窯に続く時期と位置づけMG II期とする。MG I 期は7世紀初頭頃、II期は7世紀半ばまでと比定する。

I 期の操業が停止した後、尾根上の堅穴住居及び広場は、その作業場的な役割を担っていたと考えられる。なぜなら尾根上付近の包含層に限って、I・

II期の遺物が混在し出土しているのである。これはI・II期を通じ、尾根上に窯業を介した人の往来があったことを示すものである。また明気2号窯は、廃絶したのち、窯体内への流入土が運道付近にまで達した段階で、壺片の投棄を受けている。投棄された壺が、I・II期のいずれのものであるか判断するのは困難であるが、少なくとも操業を停止した窯体に土が堆積する年月の間、尾根上における生産活動は継続していたと言える。

明気窯跡群の発掘調査は、生産地と供給地が明確になった例として、大きな成果を得た。しかし、一方でヘラ記号の存在の意味や窯体を取り囲む溝の存在など、新たな問いかけも生まれてきた。

我々にとって、最も見慣れたものでありながら、最もその生産体制の知られていない土器。

——今後調査・研究が進み、新たな成果が得られることを願って止みません。(宇河雅之)

## 註

- ① 田中喜久雄・川北秀実・野原宏司「牧瓦窯跡群『近畿自動車道(久居～勢和)環状文化財発掘調査報告 第一分冊2』三重県教育委員会 1989
- ② 山沢義典「岡山古窯址群第1号窯」四日市市教育委員会 1966
- ③ 上野市教育委員会の笠井繁二氏に御教示頂いた。
- ④ 小玉道明・山沢義典「岡山古窯址群発掘調査報告」四日市市教育委員会 1971
- ⑤ 『車上り瓦窯跡発掘調査報告』宇治市教育委員会 1983
- ⑥ 藤月精司「須恵器製造から見た7世紀の前期一特に南加賀古窯跡群の様相を中心として」『北陸古代土器研究』第3号 北陸古代土器研究会 1993
- ⑦ 多気町教育委員会の御厚意により見せさせて頂いた。
- ⑧ 下村登良男「河田古墳群発掘調査報告田」多気町教育委員会 1986
- ⑨ 本報告 所収
- ⑩ 多気町教育委員会の御厚意により見せさせて頂いた。
- ⑪ ⑧に同じ
- ⑫ 田村謙一「上ノ垣外遺跡」『平成2年度農業基盤整備事業地壇環文化財調査報告 第一分冊』三重県環文化財センター 1991
- ⑬ 宇野隆夫「一部一窯体制について」『北陸古代土器研究』第4号 北陸古代土器研究会 1994
- ⑭ 三重県遺跡台帳
- ⑮ 山沢義典「度会郡玉城町原6号・同7号発掘調査」『ふびと』22号 三重県大学歴史研究会 1964
- ⑯ 宇河雅之・藤野弥知世・堀田幸子「市寄窯跡群出土の須恵器について」『Mie history』vol7 三重県歴史文化研究会 1994
- ⑰ ⑧に同じ
- ⑱ 田辺昭三「陶器古窯址群1」平安学園考古学クラブ 1966 及び、山田邦和「飛鳥・白鳳時代須恵器研究の長巻」『古代文化』第40巻第6号 1988 を参考にした。

## 遺物の分類

### 杯類分類

杯の分類は、各器種において、その器形の特徴別にA・B・C…と大別した。A・B類については、在地色の強い様相と畿内的な特徴を示すものに区別ができるため、それぞれ1・2との細分類をおこない、さらに細部形態の差異によってa・b・cの分類をした。

また、C類については器形の特徴の差異によってI・II・IIIの細分類をおこない、細部形態の差異によりa・b・cの分類を試みた。

A類 いわゆる古墳時代タイプの杯であり、蓋は返りを持たず、身に受部が存在するものを指す。いわゆる杯Hである。主として明気1・2・4号窯で生産されたもので、当窯跡群においては古い様相を呈する。

杯身・杯蓋ともにヘラ切りにより、ロクロ上からの切り離しを行っている。切り離し後の調整は、稀に若干の撫でを施すものや、粗い櫛状工具をあてた痕跡が認められるものもあるが、そのほとんどは、調整を行っていない。本報文においては、「ヘラ切り不調整」との表現を用いた。

また、口縁部の形態・天井部及び底部の様相・口徑指数等の差異で、更なる分類を行った。

B類 A類と同様に蓋は返りを持たず、身に受部が存在するものをさすが、A類に比べ口徑が著しく小さい。

杯身底部及び杯蓋天井部ともにロクロからの切り離し後は、ヘラ切り不調整である。

また、口縁部の形態・天井部及び底部の様相等の差異で、更なる分類を行った。

C類 杯身に受部がなく、杯蓋に返りをもつ。杯身・杯蓋ともに比較的小ぶりであり、粗雑な作りが目立つ。

蓋に付くつまみは、いわゆる宝珠形を呈するものが中心であるが、中には中窪みの扁平なつまみをもつものも認められた。

つまみを持つ蓋は、天井部にロクロ削りを施している。明気5号窯においては、天井部の調整にカキ目を用いているものも見受けられる。

杯身は、底部の調整がヘラ切り不調整のものが一般的である。個体数としては少ないが、ヘラ切り後に簡単なロクロ削りを施したものも存在する。

### 甕類分類

甕は、口径差によって大・小型に大別できる。口径が15～20cmのものを小型甕とし、30～50cmをはかるものを大型甕とした。甕の口径は頸部の高さに比例し、概して小型甕は、大型甕より頸部の外反が強い傾向を有する。

分類は、口縁端部の肥厚化の有無及びその中間的要素をもつものを対象とし、A・B・Cを用い行った。また、口縁端部をはじめとする細部形態の差異によってI・II・III…と分類し、更に調整の強さ等に基づきa・b・cの細分を行った。

#### 大型甕

A類 口縁端部に強い横ナデが施され、断面三角形の突出や、肥厚化した帯部を有するもの。

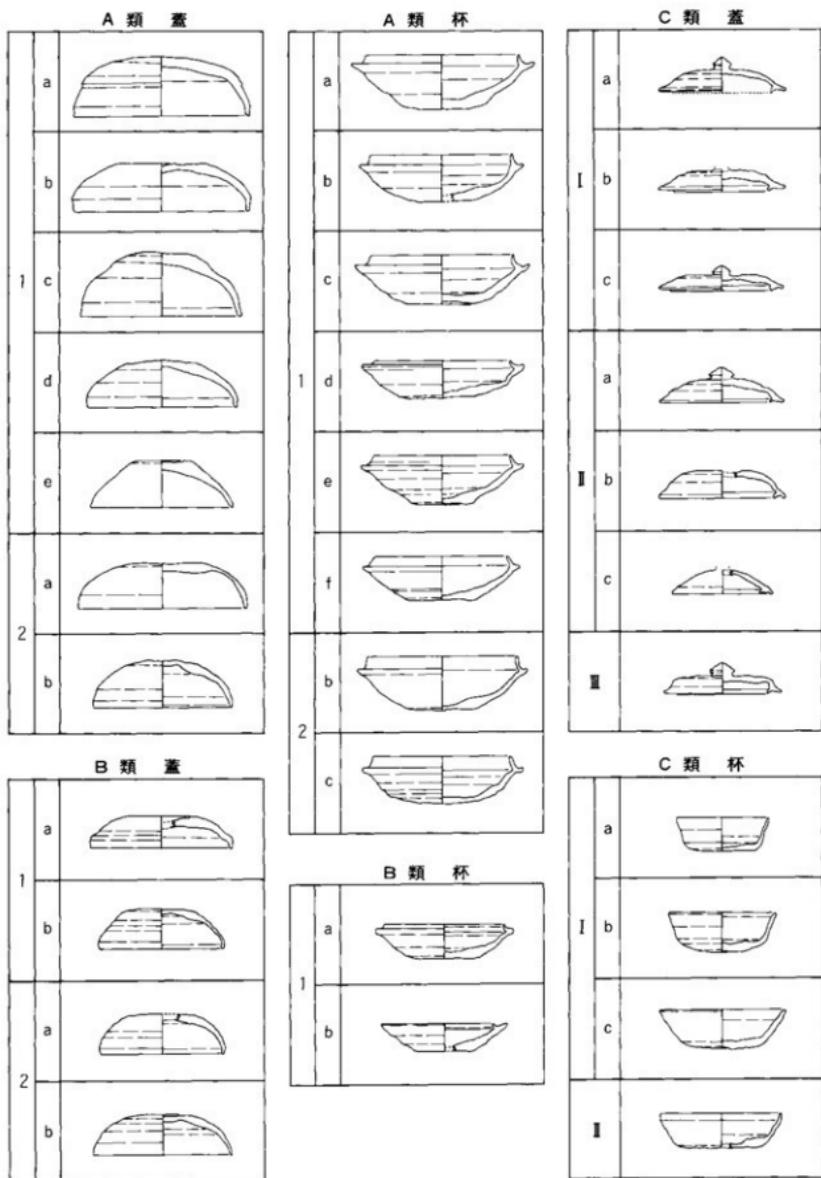
B類 口縁端部の肥厚化は顕著ではなく、沈線で区画される無文帯が存在する。また、この無文帯を大きく外反させるものも見られる。

C類 口縁端部の肥厚化は見られなくなる。従来の肥厚化は、端部の沈線にその名残を見ることができると。

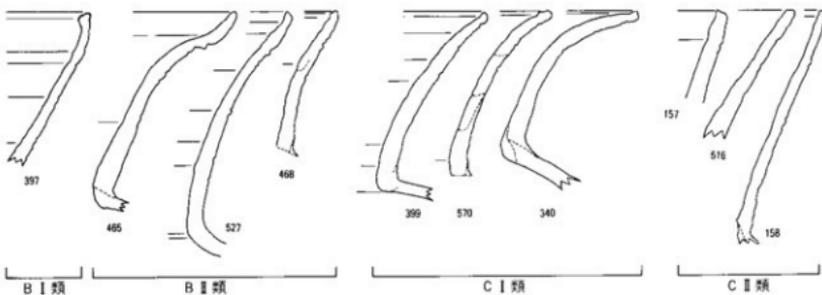
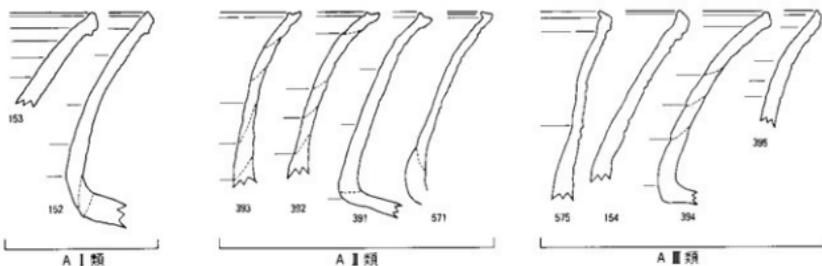
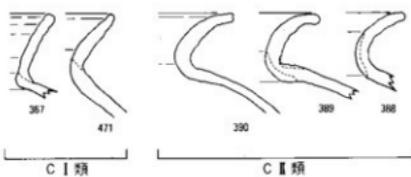
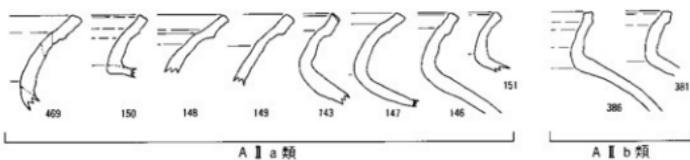
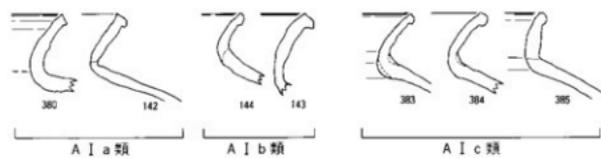
#### 小型甕

A類 口縁端部の肥厚化（端部外側の下方向への突出も含む）が見られるもの。

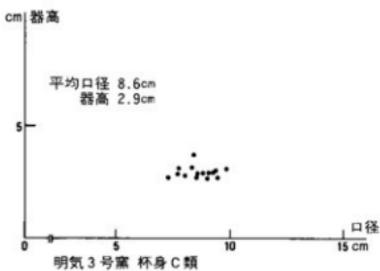
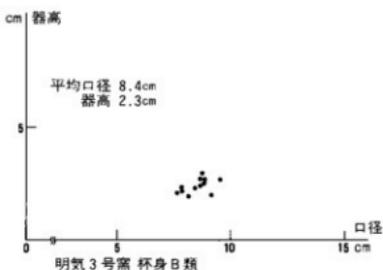
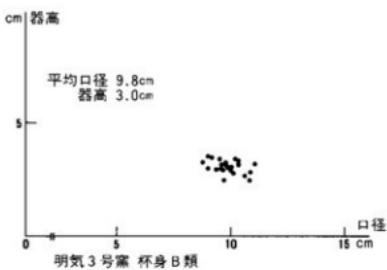
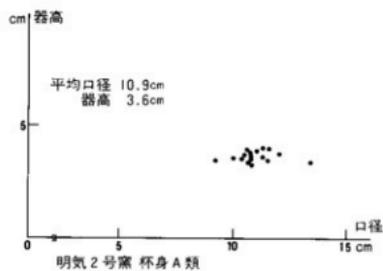
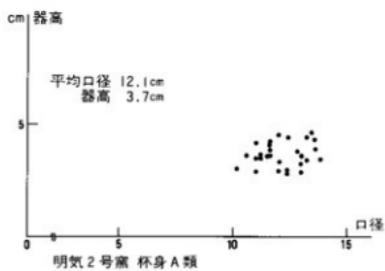
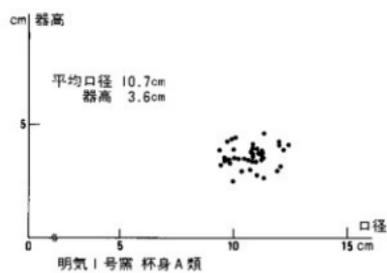
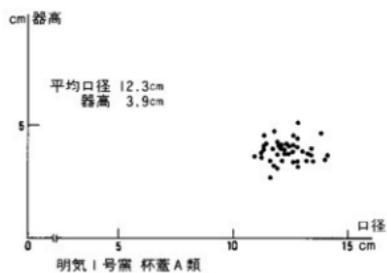
C類 肥厚化は見られず、端部の処理もやや丸みを帯びている。



第81圖 杯身・蓋分類圖



第82図 變分類圖



第83圖 杯身・蓋法量分布圖

No.	発掘 No.	器 種	出土位 置	位置 標	法量 (cm)	調整技法の特徴	色 調	胎 土	焼 成	残 存	備 考
01	-01	須恵器 杯 蓋	1号溝 F19 灰床(海褐色)		口径: 13.8 器高: 4.7	天井部外蓋へり切りのちナデ、天井部 内蓋不定方向のナデ、体部・口縁部 クロコナデ	(外) 黄灰SP5B/1 (内) 灰白S5B/1	細砂粒多量	良	口縁部: 1/8 体部: 1/8 天井部: 1/4	天井部に別 録付着
01	-02	須恵器 杯 蓋	1号溝 E20 灰床上		口径: 14.1 器高: 3.8	天井部外蓋へり切りのちナデ、天井部 内蓋不調整・調整不明確、体部・口 縁部クロコナデ	(外) 灰白S5Y7/1 (内) 灰白S5Y7/1	細砂粒多量	不良	口縁部: 1/4 体部: 1/4 天井部: 1/2	
01	-03	須恵器 杯 蓋	1号溝 E20 灰床内蓋口縁たもわり トレンチ		口径: 12.6 器高: 3.5	天井部外蓋へり切りのちナデ 体部・口縁部クロコナデ	(外) 洗黄煙10YR8/4 (内) 洗黄煙10YR8/4	細砂粒少量	不良	口縁部: 1/4 体部: 1/4 天井部: 1/2	天井部内蓋 にへり記号 工具痕あり
01	-04	須恵器 杯 蓋	1号溝 F19 灰床上		口径: 12.6 器高: 3.9	天井部外蓋へり切り未調整 体部・口縁部クロコナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白N8/0	細砂粒多量	良	口縁部: 横一部 体部: 天井部: 充存	
01	-05	須恵器 杯 蓋	1号溝 F19 灰床上		口径: 13.5 器高: 3.7	天井部外蓋へり切りのち若干のナデ 体部・口縁部クロコナデ	(外) 灰5Y6/1 (内) 灰白S5Y6/1	細砂粒多量	良	1/4	天井部内蓋 にへり記号 「+」
01	-06	須恵器 杯 蓋	1号溝 G19 灰床 黒褐色土層		口径: 13.0 器高: 3.9	天井部外蓋へり切り未調整 体部・口縁部クロコナデ	(外) 灰白2.5Y8/2 (内) 灰白2.5Y8/2	細砂粒多量	やや不良	口縁部: 1/4 天井部: 1/2	
01	-07	須恵器 杯 蓋	1号溝 G19 灰床 黒褐色土層		口径: 12.8 器高: 3.25	天井部外蓋へり切り未調整、天井部内 蓋不定方向のナデ、体部・口縁部クロ コナデ	(外) 灰10Y5/1 (内) 灰7.5Y6/1	細砂粒少量	良	口縁部: 1/4 天井部: 1/2	天井外蓋に へり記号 「+」口縁部 本大
02	-02	須恵器 杯 蓋	1号溝 F19 灰床上 褐色土層		口径: 14.0 器高: 3.55	体部・口縁部クロコナデ	(外) 灰N7/0 (内) 洗黄2.5Y7/3	細砂粒少量	良	口縁部: 1/4	口縁部大 体部若干欠 け
02	-03	須恵器 杯 蓋	1号溝 E20 灰床体取直上?		口径: 12.6 器高: 4.6	天井外蓋へり切り未調整 体部・口縁部クロコナデ	(外) 明ナリーブ灰 2.5GY7/1 (内) 灰白N8/0	細砂粒多量	良	口縁部: 1/6 天井部: 充存	天井部内蓋 に新痕あり
02	-04	須恵器 杯 蓋	1号溝 G19 灰床 No.		口径: 10.8	天井部外蓋へり切り未調整 体部・口縁部クロコナデ	(外) 灰白2.5Y7/1 (内) 灰白S5Y6/1	細砂粒少量	不良	口縁部: 1/2 天井部: 1/8	
02	-05	須恵器 杯 蓋	1号溝 F20 灰口NS アヤ下 黒色土層上層		口径: 12.8 器高: 3.2	天井部外蓋へり切りのちナデ、天井部 内蓋不明確により調整不明確、体部・口 縁部クロコナデ	(外) 洗黄2.5Y8/4 (内) 明7.5Y6/6	細砂粒多量	不良	口縁部: 3/4 天井部: 充存	天井部内蓋 にへり記号 「+」
02	-01	須恵器 杯 蓋	1号溝 G19 灰床 黒褐色土層		口径: 11.9 器高: 4.35	天井部外蓋へり切りのちナデ、天井部内蓋 不定方向ナデ、体部・口縁部クロコナ デ	(外) 灰白2.5Y7/1 (内) 灰白N7/0	細砂粒多量	良	口縁部: 1/4 天井部: 1/2	体部に要み あり
03	-02	須恵器 杯 蓋	1号溝 F19 灰床上		口径: 12.3 器高: 4.2	天井部外蓋へり切り未調整 体部・口縁部クロコナデ	(外) 黄灰S5B/1 (内) 黄灰S5B/1	砂 粒 少 量	良	口縁部: 1/2 天井部: 充存	天井部内蓋 に工具痕多 く有り
03	-03	須恵器 杯 蓋	1号溝 G20 灰床 黒色土層		口径: 13.2 器高: 3.8	天井部外蓋へり切りのちナデ、天井部内 蓋一方方向ナデ、体部・口縁部クロコ ナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N6/0	細砂粒少量	良	1/8	
03	-04	須恵器 杯 蓋	1号溝 F19 灰床上		口径: 13.4 器高: 4.0	天井部外 へり切りのちナデ、天井部 内蓋不定方向ナデ、体部・口縁部クロ コナデ	(外) 灰10Y6/1 (内) 灰10Y6/1	細砂粒多量	良	口縁部: 1/4 天井部: 充存	
03	-05	須恵器 杯 蓋	1号溝 F19 灰床		口径: 12.0	天井部外蓋へり切りのちナデ 体部・口縁部クロコナデ	(外) 灰白N5/0 (内) 灰白S5Y7/2	細砂粒少量	良	口縁部: 横一部 天井部: 1/6	
03	-06	須恵器 杯 蓋	1号溝 G19 灰床 黒色土層		口径: 12.0 器高: 4.1	天井部外蓋へり切りのち若干のナデ 天井部内蓋不定方向ナデ 体部・口縁部クロコナデ	(外) 灰白N6/0 (内) 灰白N7/0	細砂粒多量	良	口縁部: 2/3 天井部: 充存	口縁部要み あり
03	-07	須恵器 杯 蓋	1号溝 F19 灰床 黒色土層		口径: 11.7 器高: 4.0	天井部外蓋へり切りのち若干のナデ 体部・口縁部クロコナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N6/0	細砂粒少量	良	1/3	
04	-01	須恵器 杯 蓋	1号溝 G20 灰床		口径: 13.4	天井部外蓋へり切りのち若干のナデ 体部・口縁部クロコナデ	(外) 灰白S5Y7/1 (内) 灰G2.5Y8/2	細砂粒少量	良	口縁部: 1/4 体部: 横一部 天井部: 横一部	体部外蓋に 自然痕の残 り
04	-02	須恵器 杯 蓋	1号溝 F19 灰床		口径: 12.4 器高: 4.1	天井部外蓋へり切り未調整 天井部内蓋不定方向ナデ、体部・口縁 部クロコナデ	(外) 灰白N6/0 (内) 灰白N7/0	細砂粒多量	良	口縁部: 1/4 天井部: 1/3	体部内蓋に 砂の残存
04	-03	須恵器 杯 蓋	1号溝 G19 灰床 褐色土層		口径: 12.1 器高: 4.2	天井部外蓋へり切りのちナデ、天井部 内蓋一方方向ナデ、体部・口縁部クロ コナデ	(外) 灰白10Y7/1 (内) 灰白S5Y6/1	細砂粒多量	やや不良	口縁部: 1/4 天井部: 1/2	体部内蓋に 錆きよみ 天井部外蓋に 工具痕
04	-04	須恵器 杯 蓋	1号溝 E19 灰床上		口径: 12.4 器高: 3.8	天井部外蓋へり切りのちナデ、天井部 内蓋不定方向ナデ、体部・口縁部クロ コナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N6/0	細砂粒少量	良	口縁部: 1/4 天井部: 1/3	天井部内蓋 に粘土塊付 着
04	-05	須恵器 杯 蓋	1号溝 F20 灰口(NS+アヤ中)		口径: 11.7 器高: 3.3	天井部外蓋へり切りのちナデ、天井部 内蓋不定方向ナデ、体部・口縁部クロ コナデ	(外) 黄灰S5G5/1 (内) 黄灰S5Y6/2	細砂粒少量	良	1/4	口縁部に少 し要みあり
04	-06	須恵器 杯 蓋	1号溝 F19 灰床		口径: 11.9 器高: 3.2	天井部外蓋へり切りのちナデ、天井部 内蓋一方方向ナデ、体部・口縁部クロ コナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰5Y6/1	細砂粒少量	良	口縁部: 1/8 天井部: 1/6	

第23-1表 遺物観察表

No.	発掘 Sn	器種	出土位 置	量 機	法量 (cm)	調整技法の特徴	色 調	胎 土	焼 成	現 存	備 考
25	004-07	底蓋型 杯 蓋	1号坑 G19 灰赤 暗褐色土層		口径: 11.3 器高: 4.0	天井部外蓋へり切り不調整、天井部内 部不定方向ナゲ、体部・口縁部ロコ ナゲ	(外) 灰7.5Y6/1 (内) 灰7.5Y6/1	細砂粒多量	良	1/3	天井内蓋工 具痕あり
26	004-08	底蓋型 杯 蓋	1号坑 G19 灰赤 No27		口径: 11.8 器高: 4.8	天井部外蓋へり切りのちナゲ、天井部 内蓋一方方向ナゲ、体部・口縁部ロコ ナゲ	(外) 灰5Y6/1 (内) 灰黄緑5YR8/3	細砂粒多量	やや不良	口縁部: 1/4 天井部: 1/2	
27	005-01	底蓋型 杯 蓋	1号坑 E20 灰赤		口径: 13.2 器高: 3.5	天井部外蓋へり切りのちナゲ、天井部 内蓋一方方向ナゲ、体部・口縁部ロコ ナゲ	(外) 青灰5D6/1 (内) 青灰5D5/1	細砂粒多量	良	口縁部: 1/3 天井部: 3/4	天井部内蓋に 板状工具 痕あり
28	005-02	底蓋型 杯 蓋	1号坑 G19 灰赤下層		口径: 11.6 器高: 3.5	天井部外蓋へり切り不調整、天井部内 部不定方向ナゲ、体部・口縁部ロコ ナゲ	(内) 灰白N7/0 (内) 灰白5Y7/1	細砂粒多量	良	1/4	口縁部の一 部に凹凸あ り
29	005-03	底蓋型 杯 蓋	1号坑 F19 灰赤、下層→灰赤土 層褐色土層(地上上層)		口径: 12.2 器高: 3.8	天井部外蓋へり切り不調整、天井部内 部不定方向ナゲ、体部・口縁部ロコ ナゲ	(外) 黄トリーブ灰 5GY7/1 (内) 黄トリーブ灰 5GY7/1	細砂粒多量	良	口縁部: 1/4 天井部: 1/2	
30	005-04	底蓋型 杯 蓋	1号坑 G19 灰赤 暗褐色土層		口径: 12.6 器高: 4.2	天井部外蓋へり切り不調整 体部・口縁部ロコナゲ	(外) 灰N6/0 (内) 灰白N7/0	細砂粒少量	良	口縁部: 1/8 天井部: 充存	
31	005-05	底蓋型 杯 蓋	1号坑 F19 灰赤土層褐色土		口径: 11.3 器高: 4.6	天井部外蓋へり切り不調整、天井部内 部不定方向ナゲ、体部・口縁部ロコ ナゲ	(内) 青灰5D6/1 (内) 青灰5D6/1	細砂粒多量	良	口縁部: 1/4 天井部: 充存	口縁部の一 部に凹凸あ り
32	005-06	底蓋型 杯 蓋	1号坑 G20 灰赤 黒色土層		口径: 11.4 器高: 4.2	天井部外蓋へり切りのちナゲ、天井部 内蓋一方方向ナゲ、体部・口縁部ロコ ナゲ	(外) 灰黄2.5Y7/2 (内) 灰黄2.5Y7/2	細砂粒多量	良	口縁部: 1/6 天井部: 1/4	天井部内蓋に 工具痕あり
33	005-07	底蓋型 杯 蓋	1号坑 F19 灰赤下層		口径: 12.8 器高: 4.1	天井部外蓋へり切り不調整 天井部内蓋不定方向ナゲ 体部・口縁部ロコナゲ	(外) 灰5Y6/1 (内) 灰白5Y1/1	細砂粒多量	良	口縁部: 充存	
34	006-01	底蓋型 杯 蓋	1号坑 G20 灰赤 暗褐色土層		口径: 12.0 器高: 4.05	天井部外蓋へり切り不調整、天井部内 部不定方向ナゲ、体部・口縁部ロコ ナゲ	(外) 灰黄2.5Y7/2 (内) 灰黄2.5Y7/2	細砂粒少量	良	口縁部: 1/4 天井部: 1/3	天井部内蓋に へり切 り→1/3
35	006-02	底蓋型 杯 蓋	1号坑 H19 灰赤		口径: 11.2 器高: 3.8	天井部外蓋へり切りのちナゲ 体部・口縁部ロコナゲ	(外) 灰白5Y7/1 (内) 灰黄2.5Y7/2	細砂粒少量	良	口縁部: 1/6 天井部: 1/4	体部内蓋 まぶくれ多 し
36	006-03	底蓋型 杯 蓋	1号坑 G20 灰赤 暗褐色土層		口径: 12.1 器高: 3.5	天井部外蓋へり切り不調整 天井部内蓋不定方向ナゲ 体部・口縁部ロコナゲ	(外) 灰白N6/0 (内) 灰白N8/0	細砂粒少量	良	口縁部: ほぼ充存 天井部: 1/2	天井部内蓋に 自然焼付
37	006-04	底蓋型 杯 蓋	1号坑 G19 灰赤 黒色土層		口径: 12.0	天井部外蓋へり切りのちナゲ、天井部 内蓋不定方向ナゲ 体部・口縁部ロコナゲ	(外) 灰白5Y7/1 (内) 灰白5Y7/1	細砂粒多量	良	口縁部: 1/6 体部: 1/3 天井部: 僅一部	
38	006-05	底蓋型 杯 蓋	1号坑 F20 灰赤 黒色土層		口径: 12.1	天井部外蓋へり切りのちナゲ 天井部内蓋不定方向ナゲ 体部・口縁部ロコナゲ	(外) 灰白N7/0 (内) 黄緑灰7.5GY 7/1	細砂粒少量	良	口縁部: 1/4 天井部: 1/3	口縁部上部に 花崗岩片一 枚入る
39	006-06	底蓋型 杯 蓋	1号坑 F19 灰赤 明褐色土層		口径: 12.8 器高: 3.5	天井部外蓋へり切りのち若干のナゲ 天井部内蓋不定方向ナゲ 体部・口縁部ロコナゲ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N6/0	細砂粒少量	良	口縁部: 1/3 天井部: 1/2	口縁部の一 部に凹凸あ り
40	006-07	底蓋型 杯 蓋	1号坑 G19 灰赤 黒褐色土層		口径: 11.2 器高: 3.7	天井部外蓋へり切り不調整 天井部内蓋一方方向ナゲ 体部・口縁部ロコナゲ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N5/0	細砂粒多量	良	口縁部: 1/3 天井部: 1/2	
41	007-01	底蓋型 杯 蓋	1号坑 G19 灰赤 黒褐色土層		口径: 13.4 器高: 3.75	天井部外蓋へり切りのちナゲ 天井部内蓋一方方向ナゲ 体部・口縁部ロコナゲ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N6/0	細砂粒少量	良	口縁部: 1/2 天井部: 充存	天井部外蓋に へり切 り→1/3あり
42	007-02	底蓋型 杯 蓋	1号坑 G19 灰赤 黒色土層		口径: 11.6 器高: 2.8	天井部外蓋へり切り不調整 天井部内蓋不定方向ナゲ 体部・口縁部ロコナゲ	(外) 灰5Y5/1 (内) 黄灰7.5GY6/1	細砂粒多量	良	口縁部: 1/8 天井部: 僅一部	
43	007-03	底蓋型 杯 蓋	1号坑 G19 灰赤 No4		口径: 10.9 器高: 3.7	天井部外蓋へり切り不調整 体部・口縁部ロコナゲ	(外) 黄灰5G5/1 (内) 黄灰10G5/1	細砂粒多量	良	口縁部: 1/2 天井部: 3/4	天井部内蓋に へり切 り→1/3あり
44	007-04	底蓋型 杯 蓋	1号坑 灰赤 層NSアマ 黒色土 層F20		口径: 12.2	天井部外蓋へり切り不調整 天井部内蓋一方方向ナゲ 体部・口縁部ロコナゲ	(外) 黄緑灰7.5YR 7/2 (内) 灰5Y6/1	細砂粒多量	良	口縁部: 1/6 天井部: 3/4	
45	007-05	底蓋型 杯 蓋	1号坑 灰赤 F19		口径: 11.8 器高: 3.7	天井部外蓋へり切りのちナゲ 天井部内蓋一方方向ナゲ 体部・口縁部ロコナゲ	(外) オリーブ灰 2.5GY6/1 (内) 灰5Y6/1	細砂粒多量	良	口縁部: 1/3 天井部: 僅一部	体部外蓋に 割傷付存
46	007-06	底蓋型 杯 蓋	1号坑 灰赤土層 褐色土層		口径: 11.6 器高: 3.5	天井部外蓋へり切りのちナゲ 天井部内蓋一方方向ナゲ 体部・口縁部ロコナゲ	(外) 灰5.5Y6/1 (内) 灰5Y6/1	細砂粒多量	良	1/4	
47	007-07	底蓋型 杯 蓋	1号坑 灰赤下層 中央アマ、褐色土層 G19		口径: 12.8 器高: 4.5	天井部外蓋へり切り不調整 天井部内蓋不定方向ナゲ 体部・口縁部ロコナゲ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰黄2.5Y7/2	細砂粒少量	良	口縁部: 僅一部 天井部: 1/2	天井部内蓋に へり切 り→1/3あり
48	007-08	底蓋型 杯 蓋	1号坑 暗褐色土層 F19→20		口径: 11.3 器高: 4.1	天井部外蓋へり切りのちナゲ 天井部内蓋一方方向ナゲ 体部・口縁部ロコナゲ	(外) 青灰5D6/1 (内) 青灰5D6/1	細砂粒多量	やや不良	口縁部: 1/8 天井部: 1/3	

第23-2表 遺物観察表

No	発掘 No	器種	出土位 置	量重 (cm)	調整技法の特徴	色 調	胎 土	焼 成	残 存	備 考
49	008-01	深鉢形 杯 身	1号窯 灰原土層 G19	口径：12.0 受部径：14.0 器高：4.3	底部外面へ切り込み若干のナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N5/0 (内) 灰N6/0	細砂粒少含	良	口縁部：1/3 底部：3/4	底部内面に 焼きよけあり
50	008-02	深鉢形 杯 身	1号窯 灰原土層 G20	口径：13.0 受部径：13.0 器高：4.2	底部外面へ切り込みナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰黄2.5Y7/3 (内) 灰白N7/0	微砂粒少含	良	口縁部：1/8 底部：1/4	底部内面に 「一」記号あり
51	008-03	深鉢形 杯 身	1号窯 灰原土層 暗褐色土層 F19	口径：12.0 受部径：13.0 器高：3.7	底部外面へ切り込みナデ、体部外面 一部へナデ、底部内面一方ナデ 口縁部ロクロナデ	(外) オリーブ灰 2.5GY6/1 (内) オリーブ灰 2.5GY6/1	微砂粒多含	良	口縁部：1/4 底部：1/3	
52	008-04	深鉢形 杯 身	1号窯 灰原土層 褐色土層 F19	口径：12.2 受部径：14.4 器高：3.9	底部外面へ切り込みナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰Y4/1 (内) 灰N5/0	微砂粒少含	良	口縁部：僅一部 底部：1/4	受部に別個 体の杯蓋の 一部付着
53	008-05	深鉢形 杯 身	1号窯 灰原土層	口径：11.9 受部径：13.0 器高：3.0	底部外面へ切り込みナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰白N7/0	細砂粒少含	良	口縁部：1/6 底部：1/4 底面：僅一部	受部に別個 体の杯蓋の 一部付着
54	008-06	深鉢形 杯 身	1号窯 灰原土層 暗褐色土層 G20	口径：11.2 受部径：13.0 器高：3.7	底部外面へ切り込み若干のナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	微砂粒少含	良	1/3	底部面に 焼きよけ 込みあり
55	008-07	深鉢形 杯 身	1号窯 灰原土層 暗褐色土層 G20	口径：10.8 受部径：12.9 器高：3.8	底部外面へ切り込みナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白N8/0	微砂粒少含 (僅少)	良	1/3	底部内面に 自然付着
56	009-01	深鉢形 杯 身	1号窯 灰原土層 暗褐色土層 F19	口径：10.6 受部径：12.2 器高：3.5	底部外面へ切り込みナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰SY4/1 (内) 灰N5/0	微砂粒少含	良	口縁部：1/6 受部：1/4 底部：1/3	底部外面に 工具痕あり
57	009-02	深鉢形 杯 身	1号窯 灰原土層 暗褐色土層 G19	口径：11.1 受部径：12.9 器高：3.75	底部外面へ切り込みナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N8/0 (内) 灰N6/0	微砂粒多含	良	ほぼ完存	底部外面に へ「記号 一」
58	009-03	深鉢形 杯 身	1号窯 灰原土層 F19	口径：10.9 受部径：12.6 器高：3.4	底部外面へ切り込みナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰N6/0	微砂粒多含	良	口縁部：1/5 受部：1/4 底部：1/3	底部外面に 工具痕あり
59	009-04	深鉢形 杯 身	1号窯 灰原土層 暗褐色土層 G19	受部径：13.0	底部外面へ切り込みナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰黄2.5Y7/2 (内) 灰黄2.5Y7/2	微砂粒多含	やや不具	1/4	
60	009-05	深鉢形 杯 身	1号窯 灰原土層 暗褐色土層 G20	口径：11.2 受部径：13.8 器高：3.9	底部外面へ切り込み若干のナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N8/0	微砂粒少含	良	口縁部：僅一部 受部：僅一部 底部：1/2	底部外面に 自然付着
61	009-06	深鉢形 杯 身	1号窯 灰原土層 F19	口径：9.8 受部径：12.0 器高：3.4	底部外面へ切り込みナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	砂粒少含	やや不具	1/3	口縁部に 焼きよけあり
62	009-07	深鉢形 杯 身	1号窯 灰原土層 褐色土層 F19	口径：11.2 受部径：12.9 器高：3.8	底部外面へ切り込みナデ、体部外面 一部へナデ、底部内面不定方向ナデ 口縁部ロクロナデ	(外) 灰黄2.5Y7/4 (内) 灰白2.5Y7/1	細砂粒多含	良	口縁部：3/4 受部：3/4 底面：ほぼ完存	底部外面に 別個体の 一部付着
63	009-08	深鉢形 杯 身	1号窯 灰原土層	口径：11.2 受部径：12.8 器高：3.5	底部外面へ切り込みナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰白N7/0	微砂粒少含	良	口縁部：1/5 底部：1/3	底部外面に 工具痕あり
64	010-01	深鉢形 杯 身	1号窯 灰原土層 黒色土層 G20	口径：11.0 受部径：13.0	底部外面へ切り込みナデ 底部内面一方ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰黄2.5Y7/2 (内) 灰白2.5Y7/1	細砂粒少含	良	口縁部：1/6 底部：1/4	
65	010-02	深鉢形 杯 身	1号窯 灰原土層 黒色土層 G19	口径：11.2 受部径：12.8	底部外面へ切り込みナデ 底部内面一方ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白黄 10YR7/3 (内) 灰N7/0	細砂粒多含	良	口縁部：1/8 底部：1/2	底部外面に 自然付着
66	010-03	深鉢形 杯 身	1号窯 灰原土層 黒色土層 G19	口径：11.3 受部径：12.7 器高：4.7	底部外面へ切り込みナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 黄褐色10YR8/3 (内) 灰白10YR7/1	微砂粒少含	良	口縁部：1/2 受部：ほぼ完存 底面：ほぼ完存	受部に別個 体の杯蓋の 一部付着
67	010-04	深鉢形 杯 身	1号窯 灰原土層 F19	口径：11.2 受部径：12.9 器高：3.7	底部外面へ切り込みナデ 底部内面自然付着により不明瞭 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白黄 10YR7/3 (内) 灰白黄 2.5Y6/3	砂粒多含	やや不具	口縁部：1/6 底部：1/4	全体の自然 付着
68	010-05	深鉢形 杯 身	1号窯 灰原土層 H19	口径：10.8 受部径：13.2	底部外面へ切り込みナデ 底部内面一方ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰7.5Y6/1 (内) 灰7.5Y6/1	細砂粒多含	良	1/4	
69	010-06	深鉢形 杯 身	1号窯 灰原土層 黒色土層 F20	口径：9.6 受部径：12.4 器高：3.5	底部外面へ切り込みナデ 底部内面一方ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N6/0	微砂粒多含	不具	口縁部：1/3 底部：1/2	底部外面に 工具痕あり
70	010-07	深鉢形 杯 身	1号窯 灰原土層	口径：11.3 受部径：12.9 器高：2.7	底部外面へ切り込みナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N6/0	細砂粒少含	良	口縁部：1/3 底面：1/2	底部外面に へ「記号 一」
71	010-08	深鉢形 杯 身	1号窯 灰原土層 暗褐色土層 E20	口径：10.0 受部径：12.4 器高：2.6	底部外面へ切り込みナデ 底部内面一方ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白5Y7/2 (内) 灰白N7/0	微砂粒多含	良	1/2	口縁部と底 面に焼きよ けあり
72	010-09	深鉢形 杯 身	1号窯 灰原土層 黒色土層 F20	口径：10.7 受部径：12.9 器高：3.0	底部外面へ切り込みナデ 底部内面一方ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 黄褐色10YR8/3 (内) 黄褐色10YR8/3	微砂粒少含	不具	口縁部：ごく一部 受部：1/2 底面：ほぼ完存	底部面に 焼きよけ 込みあり

第23-3表 遺物観察表

No.	発掘 No.	器種	出土位 置	量重 (cm)	調整技法の特徴	色 調	胎 土	焼 成	残 存	備 考
73	011-01	瓦甍部 杯 身	1号窯 7号土層断面No12 E20	口径：11.0 受部径：12.0 器高：2.8	底部外面ヘリ切りのちナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白2.5V7/1 (内) 灰白N7/0	細砂粒少含	良	口縁部：ごく一部 受部：ほとんど欠 底面：1/3	底部外面に 工具痕あり
74	011-02	瓦甍部 杯 身	1号窯 7号土層断面No12 F19	口径：10.4 受部径：12.0 器高：3.0	底部外面ヘリ切りのちナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白5V7/1 (内) 灰白2.5V7/1	細砂粒少含	良	口縁部： 母とど欠 受部：1/4 底面：1/4	
75	011-03	瓦甍部 杯 身	1号窯 7号土層断面No12 G19	口径：10.0 受部径：12.0 器高：3.55	底部外面ヘリ切りのちナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰5V6/1	細砂粒多含	良	口縁部：1/6 受部：1/4 底面：1/4	
76	011-04	瓦甍部 杯 身	1号窯 灰土層 黒色土層 G19	口径：10.0 受部径：11.9 器高：4.45	底部外面ヘリ切りのちナデ 底部内面自然輪付着により不明瞭 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 黄黒2.5V7/3 (内) 灰黒2.5V7/2	細砂粒多含	良	1/4	全体的に自 然輪付着
77	011-05	瓦甍部 杯 身	1号窯 灰土層 黒色土層 F19	口径：9.7 受部径：12.0 器高：4.3	底部外面ヘリ切りのちナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) ぐい・黄 2.5V6/3 (内) 灰5V6/1	細砂粒多含	不良	口縁部：ごく一部 受部：1/4 底面：1/3	底部外面に 自然輪付着
78	011-06	瓦甍部 杯 身	1号窯 灰土層 黒褐色土層 G19	口径：9.9 受部径：11.7 器高：4.4	底部外面ヘリ切りのちナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰黒2.5V6/2 (内) 灰黒2.5V7/2	細砂粒多含	良	1/4	底部外面に 工具痕あり
79	001-07	瓦甍部 杯 身	1号窯 灰土層 F19	口径：10.8 受部径：12.0 器高：4.2	底部外面ヘリ切りのちナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 雜オリーブ灰 2.5V4/1 (内) オリーブ灰 2.5V5/1	微砂粒多含	良	1/4	口縁部の一 部に凸みあ り
80	011-08	瓦甍部 杯 身	1号窯 灰土層 黒色土層 G19	口径：10.8 受部径：12.0 器高：3.9	底部外面ヘリ切りのちナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰7.5V6/1～ 7/1 (内) 灰7.5V6/1～ 7/1	微砂粒少含	良	1/2	
81	011-09	瓦甍部 杯 身	1号窯 灰土層 H19	口径：11.2 受部径：12.0 器高：3.8	底部外面ヘリ切りのちナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 浅黄5V7/3 (内) 灰黒1.5V7/2	微砂粒少含	やや不良	口縁部：ごく一部 受部：1/4 底面：1/4	受部に別部 係の群着の 一部付着
82	011-10	瓦甍部 杯 身	1号窯 築体内灰焼土 (花崗岩フラクタル)面上 の砂の中(トレンチの ちまわり)E20	口径：9.8 受部径：12.4 器高：3.4	底部外面ヘリ切りのちナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白5V6/1 (内) 灰白5V6/1	微砂粒多含	やや不良	1/4	底部外面に キズ7あり
83	012-01	瓦甍部 杯 身	1号窯 灰土層 F19	口径：9.8 受部径：12.0 器高：3.5	底部外面ヘリ切りのちナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 浅黄緑10VXR/3 (内) 灰白N7/0	細砂粒多含	やや不良	口縁部：1/6 底面：1/4	底部外面に 自然輪付着
84	012-02	瓦甍部 杯 身	1号窯 灰土層 黒色土層 F19	口径：9.4 受部径：11.8	底部外面ヘリ切りのちナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) ぐい・黄緑 10VX/3 (内) 灰N6/0	細砂粒多含	良	口縁部：1/4 底面：ごく一部	底部外面に 自然輪付着
85	013-03	瓦甍部 杯 身	1号窯 灰土層 黒褐色土層 G19	口径：9.6 受部径：11.4 器高：3.6	底部外面ヘリ切りのちナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N6/0	砂 粒 少 含	不良	口縁部：1/6 底面：1/3	底部外面に 自然輪付着
86	011-04	瓦甍部 杯 身	1号窯 灰土層 黒色土層 F19	口径：10.2 受部径：11.9	底部外面ヘリ切りのちナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰黒2.5V7/2 (内) 灰白2.5V7/1	砂 粒 多 含	不良	1/4	底部内面に 凸みぶくれ あり
87	012-05	瓦甍部 杯 身	1号窯 灰土層 緑褐色土層 G19	口径：10.0 受部径：12.0 器高：3.55	底部外面ヘリ切りのちナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 黄灰色10BG5/1 (内) 黄灰色10BG5/1	微砂粒少含	良	口縁部：1/8 底面：1/2	底部外面に 工具痕あり
88	012-06	瓦甍部 杯 身	1号窯 灰土層 褐色土層 F19	口径：9.4 受部径：11.3	底部外面ヘリ切りのちナデ 底部内面一方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰黒1.5V7/2 (内) 灰5V6/1	細砂粒少含	良	口縁部：1/4 底面：ごく一部	
89	012-07	瓦甍部 杯 身	1号窯 灰土層 褐色土層 F19	口径：10.4 受部径：12.4 器高：3.5	底部外面ヘリ切りのちナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N6/0	細砂粒多含	良	口縁部：1/4 底面：1/2	底部外面に 工具痕あり
90	012-08	瓦甍部 杯 身	1号窯 灰土層 黒色土層 G19	口径：12.0 受部径：13.5 器高：4.3	底部外面ヘリ切りのちナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白2.5V8/1 (内) 黄黒10V.5V7/6	微砂粒多含	良	口縁部：1/4 受部：1/3 底面：3/4	底部内面に 凸みぶくれ あり
91	012-09	瓦甍部 杯 身	1号窯 灰土層 緑褐色土層 G20	口径：12.4 受部径：14.9	底部外面ヘリ切りのちナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰黒1.5V7/2 (内) 灰白2.5V7/1	微砂粒少含	良	1/4	底部外面に 自然輪付着
92	012-10	瓦甍部 杯 身	1号窯 灰土層 黒色土層 G19	口径：10.8 受部径：13.2 器高：3.8	底部外面ヘリ切りのちナデ、底部外面 の一部ラケナリ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰5V6/1 (内) 灰5V6/1	微砂粒少含	良	口縁部：ごく一部 受部：1/2 底面：3/4	
93	013-01	瓦甍部 杯 身	1号窯 緑褐色土層 G19	口径：10.8 受部径：12.9 器高：3.7	底部外面ヘリ切りのちナデ 底部内面一方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白5V7/1 (内) 黄黒5V8/3	細砂粒多含	良	完全	
94	013-02	瓦甍部 杯 身	1号窯 灰土層 黒色土層 G19	口径：10.8 受部径：13.0 器高：3.4	底部外面ヘリ切りのちナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) ぐい・黄緑 10VX7/3 (内) 黄灰2.5V6/1	微砂粒多含	良	1/4	底部内面に 打ち込み痕 あり
95	013-03	瓦甍部 杯 身	1号窯 灰土層 黒色土層 G19	口径：10.8 受部径：13.0 器高：3.4	底部外面ヘリ切りのちナデ 底部内面自然輪付着により不明瞭 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰7.5V5/3 (内) オリーブ黄 6/4	細砂粒多含	良	1/2	底部内面に 自然輪付着
96	013-04	瓦甍部 杯 身	1号窯 灰土層 F19	口径：10.9 受部径：13.2	体部・口縁部ロクロナデ	(外) 浅黄5V7/3 (内) 灰白5V7/1	細砂粒多含	良	口縁部：1/3 受部：1/3 底面：ごく一部	底部外面に 自然輪付着

第23-4表 遺物観察表

No	登録 No	器種	出土位置 と 位置	法量 (cm)	調整技法の特徴	色 調	胎 土	焼 成	残 存	備 考
97	013-05	須恵器 杯 蓋	1号窯 灰土 黒色土層	口径：11.3 器高：4.4	天部外周口コロヘツ削り 天部内面不定方向ナデ 体部・口縁部口コロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N8/0	細砂粒多量	良	1/3	天部内面に ヘツ記号 「N」あり
98	013-06	須恵器 杯 蓋	1号窯 灰土 黒色土層	口径：10.9 器高：4.5	天部外周口コロヘツ削り 天部内面不定方向ナデ 体部・口縁部口コロナデ	(外) 灰7.5Y6/1 (内) 灰N6/0	細砂粒多量	良	口縁部：1/6 天部：1/4	天部内面に ヘツ記号 「N」あり
99	013-07	須恵器 杯 蓋	1号窯 灰土 黒色土層	口径：10.1 器高：4.3	天部外周口コロヘツ削り 天部内面不定方向ナデ 体部・口縁部口コロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰黄緑：5YR 8/3	細砂粒多量	良	口縁部：2/3 天部：ほぼ完全	
100	013-08	須恵器 蓋	1号窯 灰土 E20		天部外周口コロヘツ削り 天部内面一方向ナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	細砂粒多量	良	口縁部：全欠 天部：完全	天部内面に ヘツ記号 「一」あり
101	014-01	須恵器 杯 蓋	1号窯 灰土 黒褐色土層	口径：10.0 器高：4.5	天部外周へツ削りのちナデ 体部・口縁部口コロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	細砂粒多量	良	1/6	
102	014-02	須恵器 杯 蓋	1号窯 灰土 灰黄(灰)黄上	口径：10.9 器高：4.7	天部外周口コロヘツ削りのちナデ 天部内面不定方向ナデ 体部・口縁部口コロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	砂粒少量	良	口縁部：ごく一部 天部：1/2	天部内面に 焼きぶくれ あり
103	014-03	須恵器 瓶	1号窯 焼褐色土層	口径：10.3 器高：5.3	底部外面磨凸へツ削り 体部・口縁部口コロナデ	(外) 灰5Y6/1 (内) 灰ぶい・黄緑 10YR7/4	細砂粒多量	良	1/8	
104	014-04	須恵器 瓶	1号窯 灰土 焼褐色土層	口径：10.8	底部内面不定方向ナデ 体部外面口コロヘツ削り 口縁部口コロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N6/0	細砂粒多量	良	口縁部：1/2	底部外周に ヘツ記号 「一」あり
105	014-05	須恵器 杯 蓋	1号窯 灰土 E19	口径：10.0	天部外周口コロヘツ削り 体部・口縁部口コロナデ	(外) 灰赤5R6.5/1 (内) 灰赤5R6/1	細砂粒多量	良	1/6	口縁部に歪 みあり
106	014-06	須恵器 瓶	1号窯 灰土 焼褐色土層	口径：10.4	底部外周口コロヘツ削り(一部のちナデ) 天部内面不定方向ナデ 体部・口縁部口コロナデ	(外) 灰白10YR7/1 (内) 灰白2.5YR/2	細砂粒少量	良	口縁部：1/4	底部内面に 焼きぶくれ あり
107	014-07	須恵器 瓶	1号窯 灰土 E20		底部外周口コロヘツ削り 体部・口縁部口コロナデ	(外) 灰白2.5YR/2 (内) 灰白10YR8/2	細砂粒多量	良	底部：4/5	底部外周に ヘツ記号 「×」あり
108	015-01	須恵器 瓶	1号窯 物灰 明褐色土層	口径：11.0	体部・口縁部口コロナデ	(外) 灰5Y5/1 (内) 灰ぶい・黄 2.5Y6/3	細砂粒多量	良	1/8	
109	015-02	須恵器 高 杯	1号窯 灰土 黄上層	口径：15.0	体部外面口コロ削り 口縁部口コロナデ	(外) 灰白2.5Y7/1 (内) 灰黄2.5Y7/2	細砂粒多量	良	口縁部：1/4	
110	015-03	須恵器 杯	1号窯 灰土 黒色土層	口径：11.2 器高：3.4	底部内面口コロ削りのちナデ 底部内面ナデ 体部・口縁部口コロナデ	(外) 灰5Y6/1 (内) 灰5Y6/1	細砂粒多量	やや不良	口縁部：ごく一部 底部：1/4	
111	015-04	須恵器 高 杯	1号窯 灰土 灰黄上	口径：12.6	底部外面口コロヘツ削り 体部・口縁部口コロナデ	(外) 灰白2.5YR/1 (内) 灰白2.5YR/1	細砂粒多量	やや不良	1/3	割傷強く 調整不徹底
112	015-05	須恵器 高 杯	1号窯 灰土 黒色土層	口径：10.6	底部外面口コロ削りのちナデ 体部・口縁部口コロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N6/0	細砂粒多量	良	1/4	
113	015-06	須恵器 高 杯	1号窯 灰土 黒色土層	杯底径：8.0	脚部口コロナデ 杯部の底部内面不定方向ナデ	(外) 灰白2.5Y7/0 (内) 灰白N7/0	細砂粒多量	良	杯部：2/3	杯部外周に ヘツ記号 「N」あり
114	015-07	須恵器 高 杯	1号窯 トレンチ G19	口径：12.1	脚部口コロナデ 杯部の底部内面不定方向ナデ	(外) 灰白5Y7/1 (内) 灰白5Y7/1	細砂粒多量	良	杯部：1/4 脚部：3/4	二枚カシ (上)は完成 せず
115	016-01	須恵器 高 杯	1号窯 灰土 E19		脚部口コロナデ	(外) 灰黄2.5Y7/2 (内) 灰黄2.5Y7/2	細砂粒少量	良	基部：完全	
116	016-02	須恵器 高 杯	1号窯 灰土 黄上	口径：11.3	脚部口コロナデ	(外) 灰N7/0 (内) 灰N7/0	細砂粒多量	不良	底部：ほぼ完全	
117	016-03	須恵器 高 杯	1号窯 物灰 明褐色土層	口径：28.0	底部内面ナデ 底部外面・体部・口縁部口コロナデ	(外) 灰黄2.5Y7/3 (内) 灰黄2.5Y7/3	細砂粒多量	不良	口縁部：1/4 底部：ほぼ完全	調整不良の ため表面の 黄化黒しい
118	016-04	須恵器 瓶	1号窯 灰土 黒色土層	口径：12.3	口縁部口コロナデ	(外) 灰5Y6/1 (内) 灰5Y6/1	細砂粒多量	良	口縁部：1/3	
119	016-05	須恵器 瓶	1号窯 灰土 黒色土層	口径：12.4	口縁部口コロナデ	(外) 灰白2.5Y7/1 (内) 灰黄2.5Y7/2	細砂粒多量	良	口縁部：1/6	
120	016-06	須恵器 瓶	1号窯 灰土 黒色土層	口径：11.1	口縁部口コロナデ	(外) 灰5Y6/1 (内) 灰5Y6/1	細砂粒多量	良	口縁部：1/2	

第23-5表 遺物観察表

No	登録 No	器種	出土位置 遺構	法量 (cm)	調整技法の特徴	色 調	胎 土	焼 成	残 存	備 考
111	016-07	須恵器 瓶	1号窯 灰黒色土層 E20	口径：10.1	口縁部ロクロナデ	(外) 灰黄2.5Y7/3 (内) 灰黄2.5Y7/3	細砂粒少含	良	口縁部：2/3	
112	016-08	須恵器 瓶	1号窯 灰黒色土層 F19	体部最大径：8.4	底面・体部外面ロクロヘラナズリ 体部内面ロクロナデ	(外) 黄オリーブ灰 2.5Y4/1 (内) 灰白N7/0	細砂粒多含	良	体部：完存 底面：完存	裏面外面に ヘラ 記号 「N」あり
113	016-09	須恵器 鉢・か	1号窯 灰黒色土層 F19	口径：8.0	体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰黄2.5Y7/2 (内) 灰黄2.5Y7/2	細砂粒多含	やや不良	口縁部：1/8	全体的に自然 胎行書
114	017-01	須恵器 鉢・か	1号窯 灰黒色土層(包) G18	口径：8.8	体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白黄緑 10YR7/2 (内) 灰白5Y7/1	細砂粒多含	良	口縁部：1/4	口縁部外面に 自然胎行書
115	017-02	須恵器 知照堂	1号窯 灰黒色土層 F19	口径：15.2	体部外面ホコ目調整 体部内面・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N6/0	砂粒少含	良	口縁部：1/10	
116	017-03	須恵器 知照堂	1号窯 灰黒色土層 F19	口径：7.2	体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰5Y6/1 (内) 灰5Y6/1	砂粒少含	良	1/4	
117	017-04	須恵器 深 鉢	1号窯 灰黒色土層 G19	口径：10.8 底径：8.6 器高：12.6	体部・口縁部ロクロナデ。底面外面ヘ ラ削りのちナデ。一部ロクロヘラ削り 底面内面不定方向ナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N8/0	細砂粒少含	良	1/2	体部外面に ヘラ 記号 「一」あり
118										
119	017-05	須恵器 深 鉢	1号窯 灰黒色土層 F19	口径：20.7	体部内面ホコ目調整 体部内面・口縁部ロクロナデ	(外) 黄黄灰5Y6/7 (内) 黄黄灰5Y6/7	細砂粒少含	良	1/2	
120	017-06	須恵器 蓋	1号窯 灰黒色土層 モン・アワセ南	口径：8.5 器高：1.4	天弁部外面ロクロヘラ削り、天弁部内 面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N6/0 (内) 灰白N6/0	細砂粒少含	良	1/4	
121	018-01	須恵器 深 鉢	1号窯 灰黒色土層 G19	口径：7.0 器高：19.7	口縁部・体部内面・底面ロクロナデ 体部(背面)内面ロクロヘラナズリ 体部(側面)内面指押し調整	(外) 灰白5Y7/1 (内) 灰5Y6/1	細砂粒少含	不良	体部：2/3	頸部形成後 に穿孔し、 口縁部外注
122	018-02	須恵器 平 鉢	1号窯 灰黒色土層 F19	口径：6.7	口縁部ロクロナデ 体部外面ホコ目調整 体部内面不定方向ナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白N8/0	細砂粒多含	良	体部(背面)：1/4	頸部外面に ヘラ 記号 「J」あり
123	018-03	須恵器 高 杯	1号窯 灰黒色土層 F19	口径：11.4	胴部ロクロナデ	(外) 灰黄2.5Y7/3 (内) 灰5Y6/1	細砂粒少含	良	1/4	胴部外面に 自然胎行書
124	018-04	須恵器 高 杯	1号窯 黒色土黄緑NS7灰 F19	口径：11.4	胴部ロクロナデ	(外) 灰5Y6/1 (内) 灰5Y6/1	細砂粒多含	良	1/2	
125	018-05	須恵器 高 杯	1号窯 灰黒色土層 F19	口径：12.7	胴部ロクロナデ 体部(裏面)内面不定方向ナデ	(外) 灰黄2.5Y8/3 (内) 灰白2.5Y7/1	細砂粒多含	良	胴部：3/4 体部：2/3	三方メッキ
126	019-01	土師器 鉢	1号窯 灰黒色土層 F19	口径：17.0	口縁部ロクロナデ 体部外面(上部)タテ方向ハケ目、(下 部)ヨコ方向ハケ目	(外) 黄黄灰10YR7/6 (内) 黄黄灰10YR7/6	細砂粒多含	良	1/8	全体的に磨 練痕し不 規則
127	019-02	土師器 鉢	1号窯 灰黒色土層 F19	口径：19.2	口縁部ロクロナデ 体部外面(上部)タテ方向ハケ目、(下 部)ヨコ方向ハケ目	(外) 灰白黄緑 10YR7/4 (内) 灰白黄緑 10YR7/4	細砂粒多含	良	1/8	全体的に磨 練痕し不 規則
128	019-03	須恵器 知照堂	1号窯 緑褐色土層 G20	口径：9.2	口縁部・体部(上部)ロクロナデ 体部(下部)外面ロクロヘラ削り	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	細砂粒少含	やや不良	1/3	体部外面に 磨き削れ と胎行書
129	019-04	須恵器 知照堂	1号窯 灰黒色土層 G19	口径：11.6	口縁部・体部ロクロナデ	(外) 灰黄2.5Y8/3 (内) 灰黄2.5Y8/3	細砂粒多含	良	1/6	体部内面に 別個体付着
140	019-05	須恵器 知照堂	1号窯 灰黒色土層 F19	体部最大径：19.0	体部ロクロナデ	(外) 灰黄2.5Y8/3 (内) 灰白2.5Y7/1	細砂粒少含	良	1/2	体部外注に クシによる 刺突あり
141	020-01	須恵器 知照堂	1号窯 灰黒色土層 F19	口径：7.0	口縁部・体部ロクロナデ	(外) 黄緑2.5Y8/3 (内) 灰黄2.5Y7/2	細砂粒多含	良	口縁部：1/4 体部：1/2	頸部(上部) の裏まわり あり
142	020-02	須恵器 蓋	1号窯 灰黒色土層 F19	口径：18.2	口縁部ロクロナデ 体部外面平行タタキのち専次メリ消し 体部内面黄緑指押し	(外) 灰白7.5Y7/1 (内) 灰白7.5Y7/1	細砂粒多含	良	口縁部：3/4 体部：1/2	口縁部にホ ス、工具 痕あり
143	020-03	須恵器 蓋	1号窯 灰黒色土層 F19	口径：19.0	口縁部ロクロナデ	(外) 灰5Y6/1 (内) 灰黄2.5Y7/3	細砂粒少含	やや不良	口縁部：1/2	口縁部に磨 きぶくれ多 い
144	020-04	須恵器 蓋	1号窯 灰黒色土層 G19	口径：14.4	口縁部ロクロナデ 体部外面平行タタキのち専次メリ消し 体部内面黄緑指押し	(外) 灰白黄緑 10YR7/3 (内) 灰黄2.5Y8/3	細砂粒多含	不良	口縁部：1/4 体部：1/3	体部内面に 刺突痕あり

第23-6表 遺物観察表

No.	登録 No.	器種	出土位 置	法量 (cm)	調整技法の特徴	色 調	胎 土	焼 成	残 存	備 考
145	021 -01	灰地 受	1号窯 天蓋下層 G19	口径: 18.0	口縁部・底部ロクロナデ	(外) 灰白5Y8/2 (内) 灰白5Y8/2	細砂粒多量	不良	1/6	口縁部内面に ヘラキザ 1あり
146	021 -02	灰地 受	1号窯 天蓋下層 G19	口径: 18.3	口縁部ロクロナデ 底部内面平行タナキ 体部内面磨削タナキ	(外) 灰黄2.5Y8/3 (内) 灰黄2.5Y8/3	細砂粒多量	不良	1/2	全体の調整 が難しく 調整不図
147	021 -03	灰地 受	1号窯 (東)天蓋直上	口径: 20.8	口縁部外面ハツ状工具による調整、口 縁部内面ロクロナデ、体部外面平行タ ナキ及びヘラキザ目調整、体部内面磨削 タナキのみ造成より滑シ	(外) 灰白10YR7/1 (内) 灰白10YR8/1	細砂粒多量	やや不良	1/4	全体の自然 磨削あり
148	021 -04	灰地 受	1号窯 天蓋直上 F19	口径: 22.3	口縁部ロクロナデ	(外) オリーブ灰 2.5GY8/1 (内) オリーブ灰 2.5GY8/1	細砂粒多量	良	1/8	
149	021 -05	灰地 受	1号窯 天蓋直上	口径: 20.4	口縁部ロクロナデ	(外) 灰N5/0 (内) 灰黄2.5Y7/2	砂粒少量	良	1/6	
150	022 -01	灰地 磨	1号窯 天蓋下層 F19	口径: 10.4	口縁部ロクロナデ	(外) 灰白10YR7/1 (内) 灰白10YR8/1	細砂粒少量	良	1/4	
151	022 -02	灰地 磨	1号窯 天蓋 黒褐色土層 G20	口径: 9.6	口縁部ロクロナデ 体部外面平行タナキ	(外) 灰白10YR7/0 (内) 灰白10YR7/0	細砂粒多量	良	口縁部: 1/2 体部: 2/1	全体的に自然 磨削あり
152	022 -03	灰地 磨	1号窯 天蓋No18	口径: 29.65	口縁部・口縁部内面ロクロナデ 口縁部外面ホヤ目調整、底部外面平行 タナキのみ造成より滑シ、底部内面磨 削タナキ	(外) 黄黄緑10YR8/3 (内) 土ふく黄緑 10YR7/3	細砂粒多量	やや不良	口縁部: 1/4 底部: 1/6	口縁部内面に 磨削痕あり
153	023 -01	灰地 磨	1号窯 天蓋	口径: 43.2	口縁部・口縁部内面ロクロナデ 口縁部外面ホヤ目調整	(外) 灰N5/0 (内) 灰5Y5/1	細砂粒多量	良	口縁部: 1/10	
154	023 -02	灰地 磨	1号窯 天蓋 黒褐色土層 G19	口径: 38.0	口縁部・口縁部内面ロクロナデ 口縁部外面ホヤ目調整	(外) 黄黄緑10YR8/3 (内) 黄黄緑10YR8/3	細砂粒少量	やや不良	1/3	
155	024 -01	灰地 磨	1号窯 天蓋下層 褐色土層 G19	口径: 49.3	口縁部内面ロクロナデ 口縁部外面(上部)ホヤ目調整、(下部) ナデ	(外) 灰N4/1 (内) 灰N4/1	細砂粒多量	良	1/2	口縁部内面 磨削が少 しあり
156	024 -02	灰地 磨	1号窯 天蓋内埋戻土中 E19	口径: 38.2	口縁部ロクロナデ	(外) 灰N5/0 (内) 灰7.5Y5/1	細砂粒少量	やや不良	1/10	
157	025 -01	灰地 磨	1号窯 天蓋 黒褐色土層 F19	口径: 52.2	口縁部内面ロクロナデ	(外) 灰黄2.5Y8/1 (内) 灰黄2.5Y8/2	細砂粒多量	良	1/6	口縁部に磨 きぶくれ あり
158	025 -02	灰地 磨	1号窯 天蓋No19-18-19-20-23 G19	口径: 38.2	口縁部内面ロクロナデ	(外) 灰N4/0 (内) 灰N5/0	細砂粒多量	良	口縁部: はげ次 底部: 1/4	口縁部内面 に打ち次 ぎ痕多く あり
159	025 -03	灰地 磨	1号窯 天蓋 F20		外面ナデ 内面磨削タナキ	灰白N7/0	細砂粒多量	良		
160	025 -04	灰地 磨	1号窯 天蓋直上 F19		外面ヘラキザ 内面磨削タナキ	灰白N7/0	細砂粒多量	良		
161	026 -01	灰地 磨	1号窯 埋戻土 E19	口径: 11.8 器高: 4.8	天蓋外面のクロコケズリ 天蓋内面自然磨削付着により調整不明 口縁部ロクロナデ	(外) 灰白2.5Y7/1 (内) 土ふく黄緑2.5Y 6/4	細砂粒多量	良	1/3	天蓋外面 にへら 「一」あり
162	026 -02	灰地 磨	1号窯 埋戻土 E20	口径: 12.2 器高: 4.55	天蓋外面へら削り不調整 天蓋内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	細砂粒多量	良	口縁部: 2/1 天蓋部: はげ付	
163	026 -03	灰地 磨	1号窯 天蓋埋戻土センター ア北へり F20	口径: 10.5	天蓋外面へら削りのちナデ 天蓋内面ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰7.5Y6/1	細砂粒多量	良	1/4	
164	026 -04	灰地 磨	1号窯 天蓋内埋戻土中 E20	口径: 11.2 器高: 3.4	天蓋外面へら削りのちナデ 天蓋内面一部ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰黄10YR8/2 (内) 灰5Y5/1	砂粒少量	良	口縁部: 1/3 天蓋部: 3/4	
165	026 -05	灰地 磨	1号窯 土層No①②より埋 戻土 E20	口径: 12.2 受部径: 15.0 器高: 3.7	底部外面へら削りのちナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰7.5Y6/1 (内) 灰7.5Y6/1	細砂粒少量	やや不良	1/4	口縁部に磨 みあり
166	026 -06	灰地 磨	1号窯 埋土 E19	口径: 10.0 受部径: 12.0 器高: 4.0	底部外面へら削りのちナデ 底部内面一方ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白2.5Y8/1 (内) 灰白2.5Y8/1	細砂粒多量	良	口縁部: 1/6 底部: 1/4	
167	026 -07	灰地 磨	1号窯 埋土 E20	口径: 10.0 受部径: 12.2 器高: 3.4	底部外面へら削りのちナデ、一部クロ コケズリあり 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白2.5Y8/2 (内) 灰白2.5Y8/2	細砂粒多量	不良	2/3	焼成不良の ため磨削 しい
168	026 -08	灰地 磨	1号窯 天蓋内埋戻土中 天蓋直下層下F19- 25	口径: 10.0 受部径: 12.0 器高: 3.9	底部外面へら削りのちナデ 底部内面一方ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 黄黄緑7.5YR 8/3 (内) 黄黄緑7.5YR 8/3	細砂粒少量	不良	1/2	底部外面に へら削り かと思 えら

第23-7表 遺物観察表

No	群集 No	器種	出土位置 遺構	法量 (cm)	調整技法の特徴	色 調	胎 土	焼 成	残 存	備 考
169	027-01	灰褐色 杯 甕	1号窯 埋土 E20	口径：10.1 実径：12.4 器高：3.5	底部外面へ切り欠調整 天井部内面不定方向ナゲ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 黄沢2.5Y6/1 (内) 黄沢2.5Y6/0	細砂粒少含	良	2/3	底部外面に クラ傷あり
170	027-02	灰褐色 杯 甕	1号窯 埋土 E20	口径：10.5 実径：12.4 器高：3.5	底部内面へ切り欠ナゲ 底部内面不定方向ナゲ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白10YR7/1 (内) 灰白10YR7/1	細砂粒少含	良	口縁部：1/2 底部：ほぼ完全	底部内面に 焼きぶくれ 多くあり
171	027-03	灰褐色 杯 甕	1号窯 竈体内埋土中 (天井有り部下)E19~ E20	口径：10.6 実径：13.4 器高：3.8	底部外面へ切り欠調整 底部内面不定方向ナゲ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白2.5Y6/1	細砂粒少含	良	1/4	底部歪み大
172	027-04	灰褐色 高 杯	1号窯 埋土 E19	胴径：9.8	胴部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N6/0	細砂粒多含	良	1/3	竈体内面に 割線付着
173	027-05	灰褐色 高 杯	1号窯 竈体内埋土中 (天井有り部下)	胴径：7.3	胴部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	細砂粒多含	良	3/4	
174	027-06	灰褐色 平 鉢	1号窯 埋土 E20	口径：7.2	口縁部ロクロナデ 竈体内面ナメのちナゲ	(外) 灰白2.5Y7/1 (内) 灰白2.5Y7/1	細砂粒多含	良	口縁部：1/2 底部：1/5	
175	027-07	灰褐色 平 鉢	1号窯 土層断面No19 E19	口径：8.0	口縁部・体部内面ロクロナデ 体部内面へタ工具によるナゲ	(外) 灰白5Y8/2 (内) 灰白5Y8/2	細砂粒多含	不良	1/4	
176	027-08	土紅 鉢	1号窯 竈体内埋土中 下層(灰床近く) 鉢体 センターナゲ E20	口径：13.1	口縁部ヨコナゲ 体部外面ナゲ方向ハケ目 体部内面ヨコ方向ハケ目	(外) 黄沢黄10YR5/4 (内) 黄沢黄10YR5/4	細砂粒多含	良	1/6	
177	027-09	土紅 高足 カ	1号窯 埋土中 E19	最大径：8.2	未調整	(外) 黄沢黄7.5YR 8/4 (内) 黄沢黄7.5YR 8/4	細砂粒少含	良	1/2	
178	028-01	灰褐色 杯 甕	2号窯 灰(砂)No15 E21	口径：12.4 器高：2.9	天井部へ切り欠調整 天井部内面ナゲ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白5Y7/1 (内) 灰白N7/0	細砂粒少含	良	1/4	
179	028-02	灰褐色 杯 甕	2号窯 竈体内埋土直上 E21	口径：13.0 器高：2.95	天井部へ切り欠調整 天井部内面一方方向ナゲ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N6/0	細砂粒多含	良	1/6	
180	028-03	灰褐色 杯 甕	2号窯 灰土中惣体床近く E21	口径：12.4 器高：3.0	天井部外面へ切り欠調整 天井部内面不定方向ナゲ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N5/0 (内) 灰N6/0	細砂粒多含	良	1/3	
181	028-04	灰褐色 杯 甕	2号窯 灰黄砂土 No34	口径：13.0	天井部外面へ切り欠調整 天井部内面不定方向ナゲ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N6/0	砂 粒 多 含	良	2/3	口縁部に釉 薬残あり
182	028-05	灰褐色 杯 甕	2号窯 灰(砂)No10 E21	口径：13.8 器高：3.5	天井部外面へ切り欠調整 天井部内面不定方向ナゲ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	細砂粒多含	良	1/4	
183	028-06	灰褐色 杯 甕	2号窯 灰黄砂中焼り割り	口径：13.2 器高：3.5	天井部外面へ切り欠調整 天井部内面不定方向ナゲ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰白2.5Y7/1	細砂粒少含	良	1/4	
184	028-07	灰褐色 杯 甕	2号窯 黄灰色土層(ほぼ床面 E21)	口径：13.6 器高：4.0	天井部外面へ切り欠調整 天井部内面不定方向ナゲ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰5Y5/1	細砂粒多含	良	口縁部：1/2 天井部：ほぼ完全	天井部外面 に工具傷。 口縁部に歪 みあり
185	028-08	灰褐色 杯 甕	2号窯 黄口部床面黄土・灰プ ロウナゲ	口径：13.0 器高：3.7	天井部外面自然割付着により調整不明 天井部内面不定方向ナゲ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰5Y6/1 (内) 黄沢2.5Y6/1	細砂粒多含	良	口縁部：ごく一部 天井部：1/4	体部内面に 焼きぶくれ あり
186	028-09	灰褐色 杯 甕	2号窯 灰(砂)No6 E21	口径：11.6 器高：4.0	天井部外面へ切り欠調整 天井部内面不定方向ナゲ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N5/0 (内) 灰N6/0	砂 粒 多 含	良	ほぼ完全	
187	028-10	灰褐色 杯 甕	2号窯 竈体内埋土 E21	口径：11.5 器高：3.7	天井部外面へ切り欠調整 天井部内面不定方向ナゲ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N6/0	細砂粒少含	良	口縁部：1/4 天井部：1/2	
188	028-11	灰褐色 杯 甕	2号窯 灰黄砂口実アゼ敷内上	口径：12.0 器高：3.0	天井部外面へ切り欠調整 天井部内面自然割付着により調整不明 口縁部ロクロナデ	(外) 灰白5Y7/1 (内) 黄沢黄5Y8/4	砂 粒 多 含	良	1/4	口縁部に焼き ぶくれあり
189	028-12	灰褐色 杯 甕	2号窯 黄口上層 黄灰色土層 黄土段り土 E21	口径：10.1 器高：3.1	天井部外面へ切り欠調整 天井部内面不定方向ナゲ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	細砂粒少含	良	1/6	天井部外面 自然割付着
190	028-01	灰褐色 杯 甕	2号窯 竈体内埋土中	口径：13.4 器高：4.7	天井部内面へ切り欠調整 天井部内面一方方向ナゲ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白5Y7/1 (内) 灰白N7/0	細砂粒少含	良	1/2	天井部内面に 焼りすく 付着
191	028-02	灰褐色 杯 甕	2号窯 灰(砂)No2 E21	口径：13.6 器高：4.4	天井部外面へ切り欠調整。一部ロク ロウナゲ。天井部内面一方方向ナゲ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N5/0 (内) 灰N6/0	細砂粒多含	良	口縁部：1/3 天井部：ほぼ完全	口の歪まりが 特徴
192	028-03	灰褐色 杯 甕	2号窯 埋土中(惣体部)床近 くE21	口径：12.0 器高：4.6	天井部外面へ切り欠調整 天井部内面不定方向ナゲ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰白10YR7/1	細砂粒少含	良	口縁部：1/3 天井部：1/2	天井部外面に へり記号 「一」あり

第23-8表 遺物観察表

No	発掘 No	器 種	出土位置 遺	法量 (cm)	調整技法の特徴	色 調	胎 土	焼 成	残 存	備 考
193	028 -04	灰黒胎 杯 蓋	2号窯 東 氏家農土灰層中層り	口径：13.2 器高：4.5	天井部内面へう切りのち若干ナデ 天井部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白SY8/1 (内) 灰白SY7/1	微砂粒少含	不良	1/3	
194	029 -05	灰黒胎 杯 蓋	2号窯 灰黒(砂)No4 E21	口径：11.2 器高：3.7	天井部内面へう切りの不調整 天井部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰黒N6/0 (内) 灰黒N6/0	微砂粒多含	良	口縁部：1/3 天井部：1/2	天井部外面に 工具痕あり
195	029 -06	灰黒胎 杯 蓋	2号窯 灰黒(砂)中層り	口径：11.6 器高：3.7	天井部外内面へう切りのちナデ 天井部内面ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰黒N6/0 (内) 灰黒N7/0	細砂粒多含	良	1/3	
196	029 -07	灰黒胎 杯 蓋	2号窯 灰黒(砂)No13 D21	口径：11.0 器高：4.25	天井部内面へう切りのちナデ 天井部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰黒N5/0 (内) 灰黒N6/0	細砂粒多含	良	1/4	天井部外面に 自然動付層
197	029 -08	灰黒胎 杯 蓋	2号窯 灰口障灰土(灰に近い) E21	口径：10.6 器高：3.7	天井部内面へう切りの不調整 天井部内面ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰黒N6/0 (内) 灰黒N6/0	細砂粒多含	良	2/3	
198	029 -09	灰黒胎 杯 蓋	2号窯 灰口 黒色土層 E20	口径：11.2 器高：3.6	天井部外内面へう切りの不調整 天井部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 褐灰7.5YR5/1 (内) 褐灰7.5YR6/1	微砂粒多含	やや不良	1/3	
199	029 -10	灰黒胎 杯 蓋	2号窯 灰黒(砂) No31 E21	口径：12.0 器高：3.4	天井部外内面へう切りのちナデ 天井部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 褐灰10YR5/1 (内) 灰黒N6/0	細砂粒多含	良	1/3	天井部外面に 自然動付層
200	029 -11	灰黒胎 杯 蓋	2号窯 灰黒内 No2 D21	口径：11.0 器高：3.0	天井部外内面へう切りのちナデ 天井部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白黄 10YR7/2 (内) 灰白N7/0	細砂粒多含	良	口縁部：1/2 天井部：1/4	天井部外面に 自然動付層
201	030 -01	灰黒胎 杯 蓋	2号窯 灰黒 センターアヤ面 F21	口径：11.6 器高：4.3	天井部外内面へう切りの不調整 天井部内面一方ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白D.5Y7/1	微砂粒少含	良	口縁部：1/4 天井部：完形	
202	030 -02	灰黒胎 杯 蓋	2号窯 灰黒 レンチン黒色土層 F21	口径：11.0 器高：3.55	天井部外内面へう切りの不調整 天井部内面一方ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 赤灰7.5B5/1	細砂粒多含	やや不良	口縁部：1/2 天井部：完形	
203	030 -03	灰黒胎 杯 蓋	2号窯 灰黒 F21	口径：11.6 器高：3.7	天井部外内面へう切りの不調整 天井部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白10YR7/1 (内) 灰黒N7/0	砂 粒 多 含	良	口縁部：ほぼ欠 天井部：1/2	天井部外面に 粉の跡あり 付層
204	030 -04	灰黒胎 杯 蓋	2号窯 灰黒(砂)No8 E21	口径：12.8 器高：3.9	天井部外内面へう切りの不調整 天井部内面ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰黒N6/0 (内) 灰白N7/0	細砂粒少含	やや不良	1/6	天井部外面に 焼きぶくれ あり
205	030 -05	灰黒胎 杯 蓋	2号窯 灰口 黒色土層 E20	口径：12.4 器高：4.5	天井部外内面へう切りのちナデ 天井部内面一方ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰赤黄10YR6/2 (内) 灰赤黄10YR6/2	細砂粒多含	良	1/2	体部外面に 自然動付層
206	030 -06	灰黒胎 杯 蓋	2号窯 灰黒(砂)中層り	口径：12.5 受部径：14.8	口縁部・体部ロクロナデ	(外) 褐灰7.5YR6/1 (内) 褐灰7.5YR6/1	細砂粒多含	良	1/6	
207	030 -07	灰黒胎 杯 蓋	2号窯 灰黒(包)準灰層 F21	口径：12.0 受部径：14.6 器高：3.8	底部外内面へう切りのちナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰黒N6/0 (内) 灰黒N6/0	微砂粒多含	良	口縁部：1/8 底部：1/4	底部外面に 自然動付層
208	030 -08	灰黒胎 杯 蓋	2号窯 灰黒 F21	口径：13.4 受部径：15.4 器高：3.4	底部外内面へう切りのちナデ 底部内面ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白10YR7/1 (内) 灰黒N6/0	砂 粒 多 含	良	口縁部：1/3 天井部：ごく一部	
209	030 -09	灰黒胎 杯 蓋	2号窯 灰黒(砂)No17 D21	口径：11.3 受部径：12.8 器高：3.6	底部外内面へう切りの不調整 底部内面一方ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰黒N6/0 (内) 灰白SY7/1	微砂粒多含	やや不良	3/4	底部外面に 焼きぶくれ 多くあり
210	030 -10	灰黒胎 杯 蓋	2号窯 灰黒土層 灰口上部 灰土灰口土 E21	口径：11.5 受部径：13.8 器高：3.5	底部外内面へう切りの不調整 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰黒N6/0 (内) 灰黒N6/0	細砂粒多含	良	1/2	
211	030 -11	灰黒胎 杯 蓋	2号窯 灰黒(砂)中層り	口径：11.3 受部径：12.9 器高：4.0	底部外内面へう切りのちナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 褐灰5YR6/1 (内) 褐灰5YR6/1	細砂粒多含	良	1/2	天井部に焼 きぶくれと ひずみあり
212	030 -12	灰黒胎 杯 蓋	2号窯 灰黒 F21	口径：10.8 受部径：12.9 器高：3.6	底部外内面へう切りのちナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 褐灰7.5YR6/1 (内) 灰白黄7.5YR 7/3	微砂粒少含	良	1/3	天井部外面に 工具痕あり
213	031 -01	灰黒胎 杯 蓋	2号窯 灰黒 E21	口径：10.6 受部径：12.8 器高：3.9	底部外内面へう切りの不調整 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰黒N5/0 (内) ナリーブ灰 2.5Y5/1	微砂粒多含	良	口縁部：ごく一部 受部：1/4 底部：1/4	
214	031 -02	灰黒胎 杯 蓋	2号窯 灰黒(土) D21	口径：10.8 受部径：12.7 器高：3.6	底部外内面へう切りのちナデ 底部内面一方ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 黄灰SP96/1 (内) 黄灰SP96/1	微砂粒少含	良	1/2	
215	031 -03	灰黒胎 杯 蓋	2号窯 灰口障灰土(灰土プロ ット中)	口径：10.8 受部径：12.6 器高：3.3	底部外内面へう切りのちナデ 底部内面一方ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰SY6/1 (内) 黄灰2.5Y6/1	細砂粒多含	良	1/3	受部の一部 に粉の跡ま りてい る
216	031 -04	灰黒胎 杯 蓋	2号窯 灰黒No18 D21	口径：10.8 受部径：12.3 器高：3.85	底部外内面へう切りのちナデ 底部内面一方ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰黒N5/0 (内) 灰黒N5/0	微砂粒少含	良	1/2	

第23-9表 遺物観察表

No	発掘 No	器種	出土位置 遺構	法量 (cm)	調整技法の特徴	色 調	胎 土	焼 成	残 存	備 考
217	031-05	灰被器 杯 身	2号窯 灰直上 E21	口径：10.8 受部径：12.4	底部外面へ切り込みナデ 底面内面ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) BN6/0 (内) KN6/0	細砂粒少々	良	1/4	
218	031-06	灰被器 杯 身	2号窯 灰口灰直上 E21	口径：11.6 受部径：13.5 器高：4.0	底部外面へ切り込み調整 底面内面一方ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 緑灰10YR6/1 (内) 緑灰10YR6/1	細砂粒少々	良	口縁部：1/6 底面：劣存	体部に焼き 変みによる 亀裂あり
219	031-07	灰被器 杯 身	2号窯 灰被器跡	口径：10.5 受部径：12.1 器高：3.7	底部外面へ切り込みナデ 底面内面自然輪付着により調整不明	(外) KN6/0 (内) 灰黄緑10YR6/2	細砂粒多量	良	口縁部：1/2 底面：劣存	底面に砂の 固まり付着
220	031-08	灰被器 杯 身	2号窯 灰口上部 黒灰色土層 黄土層より土 E21	口径：9.2 受部径：11.3 器高：3.5	底部外面へ切り込みナデ 底面内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) KN6/0 (内) 灰白N7/0	細砂粒多量	良	1/4	
221	031-09	灰被器 杯 身	2号窯 灰黄緑アゼよりはずし	口径：10.7 受部径：12.4 器高：3.4	底部外面へ切り込みナデ 底面内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) KN6/0 (内) KN6/0	細砂粒多量	良	1/4	口縁部・受 部の先端は ほぼとんど 欠
222	031-10	灰被器 杯 身	2号窯 灰体灰直上	口径：11.0 受部径：12.4 器高：3.9	底部外面へ切り込み調整 底面内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) オリーブ灰 2.5GY6/1 (内) オリーブ灰 2.5GY6/1	細砂粒少々	良	口縁部：1/6 底面：1/4	
223	031-11	灰被器 灰体灰直上	2号窯 灰体灰直上	口径：10.0 受部径：11.4 器高：3.6	底部外面へ切り込み調整 底面内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) BN5/0 (内) KN6/0	細砂粒多量	良	口縁部：1/3 底面：1/2	体部外面に 自然輪付着
224	031-12	灰被器 杯 身	2号窯 灰体灰直上 (天井残存下)	口径：10.4 受部径：12.2 器高：3.6	底部外面へ切り込み調整 底面内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) BN5/0 (内) KN5/0	細砂粒多量	良	1/2	
225	031-13	灰被器 杯 身	2号窯 灰体内N1 E21	口径：10.8 受部径：12.8	底部外面へ切り込み調整 底面内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) にびい黄緑 10YR7/2 (内) 灰白N7/0	細砂粒少々	良	口縁部：1/3 底面：1/2	口縁部・体 部に焼き変 みあり
226	032-01	灰被器 高 杯	2号窯 灰直上(砂)30 E21	口径：15.4	杯部の口縁部・体部ロクロナデ 底面内面不定方向ナデ	(外) 灰白10YR7/1 (内) 灰白2.5YR7/1	細砂粒少々	良	3/4	
227	032-02	灰被器 高 杯	2号窯 灰直上 E21→F21	口径：16.2	杯部の口縁部・体部ロクロナデ 底面内面不定方向ナデ	(外) 灰白N7/1 (内) KN6/1	細砂粒少々	良	1/6	
228	032-03	灰被器 高 杯	2号窯 灰直上 F21	口径：14.5	杯部の口縁部・体部ロクロナデ 底面内面不定方向ナデ	(外) KN6/0 (内) KN6/0	細砂粒少々	良	1/8	
229	032-04	灰被器 高 杯	2号窯 灰直上 センターアゼ北 F21	口径：17.2	杯部の口縁部・体部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) KN6/0	細砂粒少々	良	1/10	
230	032-05	灰被器 高 杯	2号窯 灰直上 センターアゼ南	口径：15.3	杯部の口縁部・体部ロクロナデ	(外) 暗オリーブ灰 2.5GY7/1 (内) 灰白2.5GY8/1	細砂粒多量	良	1/4	
231	032-06	灰被器 高 杯	2号窯 灰口灰直上 F21	口径：12.0	杯部の口縁部・体部ロクロナデ 底面内面ナデ	(外) KN6/0 (内) KN6/0	細砂粒多量	良	口縁部：ごく一部 底面：1/3	全体的に自 然輪付着 砂粒多
232	032-07	灰被器 高 杯	2号窯 1センチ内アゼ灰層 (灰黄先焼) G22	口径：11.0	杯部の口縁部・体部ロクロナデ 底部外面ロクロへ割りナ 底面内面ナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白2.5YR/1	細砂粒少々	やや不良	1/3	
233	032-08	灰被器 高 杯	2号窯 灰口(灰直上) E21	口径：10.6	杯部の口縁部・体部ロクロナデ 底部外面ロクロへ割りナ 底面内面ナデ	(外) 灰N5/0 (内) KN6/0	細砂粒少々	良	1/2	内面に自然 輪付着
234	032-09	灰被器 高 杯	2号窯 灰直上 F21	口径：11.2	器部内・外面共にロクロナデ	(外) にびい黄緑 6Y (内) 灰白2.5YR/1	細砂粒多量	良	1/4	二方スキャン あり
235	032-10	灰被器 蓋	2号窯 灰直上 F21		天井部外面ロクロへクズリ 天井部内面不定方向ナデ 体部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰黄緑10YR6/2	細砂粒多量	やや不良	天井部：3/4 体部：ごく一部	天井部外面 にへり記号 「B」
236	033-01	灰被器 如瓶蓋	2号窯 灰直上 F21	口径：10.0	口縁部・外面ロクロナデ	(外) KN6/0 (内) KN6/0	細砂粒少々	良	口縁部：1/2 体部：1/8	体部外面外 面に自然輪 付着
237	033-02	灰被器 如瓶蓋	2号窯 灰黄緑割包 F21	体部最大径： 13.0	体部内・外面ロクロナデ	(外) KN6/0 (内) 灰白N8/0	細砂粒多量	良	1/3	体部外面に 亀裂と焼き 変の固まり 付着
238	033-03	灰被器 如瓶蓋	2号窯 灰直上 センターアゼ北 F21	口径：8.7	口縁部・体部ロクロナデ	(外) にびい黄緑 10YR7/2 (内) 灰黄緑10YR8/3	細砂粒多量	良	1/6	外面全体に 自然輪付着
239	033-04	灰被器 小 杯	2号窯 灰直上 センターアゼ北 F21	口径：6.2	口縁部・体部ロクロナデ	(外) 灰白5Y7/1 (内) 灰白5Y7/1	細砂粒少々	良	1/3	
240	033-05	灰被器 浅 甕	2号窯 灰直上 E21	口径：8.4	口縁部・体部内面ロクロナデ 体部外面ナデ・口縁部一部に残る	(外) 灰N5/0 (内) KN6/0	細砂粒多量	良	口縁部：劣存 体部：2/3	口縁部内面 にへり記号 「C」

第23-10表 遺物観察表

No	発掘 地	器種	出土位置 遺構	法量 (cm)	調整技法の特徴	色 調	胎土	焼成	残 存	備考
241	033 -06	須恵器 煎豆	2号窯 とりあげNo20 D21	口径: 15.2	口縁部クロコナデ	(外) 灰白5Y7/1 (内) 灰白7.5Y7/1	磁砂粒多量	やや不良	1/3	
242	033 -07	須恵器 浅 鉢	2号窯 灰赤・緑土(東西) 灰赤層直上 F21	口径: 5.5	口縁部・底部内面クロコナデ 体部外面カキ目調整	(外) 灰白6Y7/1 (内) 灰黄2.5Y7/2	磁砂粒少量	良	1/2	
243	034 -01	須恵器	2号窯 灰赤層(包) 準灰層 F21		外面切きのち黄ナデ 口縁部カキ目調整 内面黄褐色タタキ	(外) 灰白N7.0 (内) 灰白N7.0	磁砂粒多量	良		
244	034 -02	須恵器	2号窯 灰赤層(包) 準灰層 F21		外面平行タタキ 口縁部カキ目調整 内面黄褐色タタキ	(外) 灰白5Y7/1 (内) 黄灰SRP5/1	磁砂粒少量	良		
245	034 -03	須恵器 杯 鉢	2号窯 灰赤層土中(青灰色土層) 仕付け床面D21	口径: 10.8 受胎径: 12.7 器高: 4.05	底面外面へう切り不調整 底面内面不定方向ナデ 体部・口縁部クロコナデ	(外) 灰N6.0 (内) 灰N6.0	磁砂粒多量	良	口縁部: 1/2 底部: ほぼ完存	底部外面に 黄口縁部付 着(黄口縁部 著)
246	034 -04	須恵器 杯 鉢	2号窯 灰口1層アザヒかか った杯身片 F21	口径: 11.7 受胎径: 13.9	底面外面へう切り不調整 底面内面不定方向ナデ 体部・口縁部クロコナデ	(外) 黄灰2.5Y7/2 (内) 黄灰2.5Y7/2	磁砂粒多量	良	1/4	
247	034 -05	須恵器 杯 鉢	2号窯 灰体内埋土 E21	口径: 11.2 受胎径: 13.7 器高: 4.75	底面外面へう切り不調整 底面内面不定方向ナデ 体部・口縁部クロコナデ	(外) 黄灰2.5Y7/3 (内) 灰白N7.0	磁砂粒少量	良	口縁部: 1/4 受胎: 1/2 底面: 完存	体部外面に 自然焼付着
248	034 -06	須恵器 杯 鉢	2号窯 15層 灰口アザヒ F21	口径: 10.2 受胎径: 11.8 器高: 3.7	底面外面へう切り不調整 底面内面自然焼付着のため調整不明瞭	(外) 灰N6.0 (内) 灰白N6.0 H9R6-4	磁砂粒多量	良	ほぼ完存	内面全体に 砂の遺り付 着付着
249	034 -07	須恵器 煎 鉢	2号窯 灰体内埋土中 D21	口径: 10.0 器高: 4.8	口縁部・体部クロコナデ 底面外面クロコナデ削り 底面内面不定方向ナデ	(外) 灰白N7.0 (内) 灰白N7.0	磁砂粒少量	良	ほぼ完存	体部外面に 自然焼付着
250	034 -08	須恵器 杯 鉢	2号窯 灰体内埋土中 D21	口径: 13.5	口縁部・体部クロコナデ	(外) 黄灰10YR6/1 (内) 黄灰10YR6/1	磁砂粒少量	良	1/2	
251	034 -09	須恵器 煎 鉢	2号窯 灰体内埋土中 (上層) E21	口径最大径: 10.2	体部クロコナデ 底面内面不定方向ナデと板状工具によ り調整可	(外) 灰白7.5Y7/1 (内) 灰白7.5Y7/1	磁砂粒多量	良	完存	底部外面に へう 記号 「N」あり
252	035 -01	須恵器 變 鉢	2号窯 灰体内埋土中央アザヒ南 側焼付天井上層 D21 H22	口径: 42.0	口縁部クロコナデ	(外) 灰白N8.0 (内) 灰白N8.0	磁砂粒多量	良	1/8	口縁部外面に 準灰口縁部 による割欠
253	036 -01	須恵器 杯 鉢	2号窯 白(前面)・緑土・青ち こ土 C21	口径: 30.4	口縁部クロコナデ 体部外面平行タタキ 体部内面黄褐色タタキ	(外) 灰N4.0 (内) 灰白N8.0	磁砂粒少量	良	3/4	
254	037 -01	須恵器 杯 鉢	3号窯 灰赤・緑赤灰色土層 B32	口径: 10.8 器高: 2.5	天部外面へう切り不調整 天部内面不定方向ナデ 体部・口縁部クロコナデ	(外) 灰10Y4/3 (内) 灰白N6.0	磁砂粒多量	良	1/2残	天井部に割 欠体付着
255	037 -02	須恵器 杯 鉢	3号窯 灰赤・緑赤灰色土層 B32	口径: 9.7 器高: 2.45	天部外面へう切り不調整 天部内面不定方向ナデ 体部・口縁部クロコナデ	(外) 灰白N8.0 (内) 灰白N8.0	磁砂粒少量	良	口縁部: 1/4残 体部: 1/4残 天井部: ほぼ完存	
256	037 -03	須恵器 杯 鉢	3号窯 灰赤・緑赤灰色土層 第2段テラス C31	口径: 9.8 器高: 3.2	天部外面不定方向ナデ 天部内面不定方向ナデ 体部外側・口縁部クロコナデ、体部内 面不定方向ナデ	(外) 灰白N7.0 (内) 灰白N7.0	磁砂粒少量	良	口縁部: 1/4残 体部: 1/4残 天井部: ほぼ完存 が割欠	天井部に割 欠体の一 部が割欠
257	037 -04	須恵器 杯 鉢	3号窯 灰赤・緑赤灰色土層 黄・緑土 A30	口径: 10.3 器高: 3.3	天部外面不定方向ナデ 天部内面不定方向ナデ 体部・口縁部クロコナデ	(外) 灰N6.0 (内) 灰白N7.0	磁砂粒少量	良	口縁部: 1/2残 体部: 1/2残 天井部: 1/3残	
258	037 -05	須恵器 杯 鉢	3号窯 灰赤・緑赤灰色土層 B32	口径: 10.6 器高: 2.05	天部外面不定方向ナデ 天部内面不定方向ナデ 体部・口縁部クロコナデ	(外) 灰白N7.0 (内) 灰白10Y7/1	磁砂粒少量	良	口縁部: 1/6残 体部: 1/6残 天井部: 1/4残	口縁部→体 部外側に 自然焼
259	037 -06	須恵器 杯 鉢	3号窯 灰赤・緑赤灰色土層 B32	口径: 9.6 器高: 3.15	天部外面不定方向ナデ 天部内面不定方向ナデ 体部・口縁部クロコナデ	(外) 灰白2.5Y8/1 (内) 灰10Y6/1	磁砂粒少量	良	口縁部: 1/12残 体部: 1/4残 天井部: ほとんど欠	
260	037 -07	須恵器 杯 鉢	3号窯 灰赤・緑赤灰色土層 第2段テラス C31	口径: 9.4 器高: 2.95	天部外面不定方向ナデ 天部内面不定方向ナデ 体部・口縁部クロコナデ	(外) 灰白5Y7/1 (内) 黄灰2.5Y6/1	磁砂粒少量	良	1/4残	
261	037 -08	須恵器 杯 鉢	3号窯 灰赤・緑赤灰色土層 B30	口径: 9.7 器高: 2.30	天部外面へう切り 天部内面不定方向ナデ 体部・口縁部クロコナデ	(外) 灰N5.0 (内) 灰N5.0	磁砂粒少量	良	ほぼ完存	
262	037 -09	須恵器 杯 鉢	3号窯 灰赤・緑赤灰色土層 B32	口径: 9.5 器高: 3.4	天部外面へう切り 天部内面不定方向ナデ 体部・口縁部クロコナデ	(外) 灰白N8.0 (内) 灰N6.0	磁砂粒少量	良	1/2残	外面に黄口 縁部付着
263	037 -10	須恵器 杯 鉢	3号窯 テニ球土 すんた黄褐色土層 D27	口径: 10.1 器高: 2.8	天部外面へう切り不調整 天部内面不定方向ナデ 体部・口縁部クロコナデ	(外) 黄灰2.5Y7/2 (内) 灰白2.5Y7/1	磁砂粒少量	良	1/2残	
264	037 -11	須恵器 杯 鉢	3号窯 灰赤・緑赤灰色土層 第2段テラス B30	口径: 10.0 器高: 2.95	天部外面不定方向ナデ 天部内面不定方向ナデ 体部・口縁部クロコナデ	(外) 灰白N6.0 (内) 灰白N8.0	磁砂粒少量	良	1/4残	

第23-11表 遺物観察表

No	発掘 No	器種	出土位置 遺構	量重 (cm)	調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存	備考
265	037-12	灰黒磁 杯 蓋	3号窯 すんた黄褐色土層 D09	口径: 8.8 器高: 3.3	天井部外面へ切り不調整 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N5/0 (内) 灰白N7/0	細砂粒少食	良	1/4機	天井部に口 縁部の口縁 部が残存
266	037-13	灰黒磁 杯 蓋	3号窯 灰黒・緑赤灰色土層 B32	口径: 9.9 器高: 5.05	天井部外面へ切り不調整 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰7.5Y6/1 (内) 灰10Y6/1	細砂粒少食	良	1/8機	
267	037-14	灰黒磁 杯 蓋	3号窯 灰黒・緑赤灰色土層 B31	口径: 9.6 器高: 3.0	天井部外面へ切り不調整 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰白N8/0	細砂粒少食	良	口縁部: 1/4機 体部: 1/4機 天井部: 1/2機	
268	038-01	灰黒磁 杯 蓋	3号窯 灰黒・緑赤灰 土層2段ナクス C31	口径: 10.9 器高: 2.8	天井部外面不定方向のナデ 天井部内面・体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰5Y6/1 (内) 灰5Y6/1	細砂粒少食	良	1/8機	
269	038-02	灰黒磁 杯 蓋	3号窯 灰黒・緑赤灰色土層 B31	口径: 10.0 器高: 3.0	天井部外面不定方向のナデ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰白N8/0	細砂粒少食	良	1/4機	
270	038-03	灰黒磁 杯 蓋	3号窯 灰黒 灰赤色土層	口径: 11.0 器高: 3.2	天井部外面不定方向のナデ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰白N8/0	砂粒少食	良	口縁部: 1/4機 体部: 1/2機 天井部: 1/4機	
271	038-04	灰黒磁 杯 蓋	3号窯 灰黒・緑赤灰色土層 2段ナクス B29	口径: 9.8 器高: 3.1	天井部外面不定方向のナデ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	砂粒少食	良	口縁部: 1/2機 体部: 1/2機 天井部: 完全	外面に自然 彫刻点
272	038-05	灰黒磁 杯 蓋	3号窯 灰黒 緑赤灰色土層 B32	口径: 10.3 器高: 3.15	天井部外面へ切り不調整 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白10Y7/1 (内) 緑灰10Y8/1	砂粒少食	良	口縁部: 1/8機 体部: 1/8機 天井部: 1/4機	外面に全面 に自然彫刻 点あり
273	038-06	灰黒磁 杯 蓋	3号窯 灰黒・緑赤灰色土層 B31	口径: 10.2 器高: 3.4	天井部外面不定方向のナデ 天井部内面・体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白N7/0	砂粒少食	良	口縁部: 3/4機 体部: 3/4機 天井部: 完全	
274	038-07	灰黒磁 杯 蓋	3号窯 灰黒・緑赤灰色土層 B32	口径: 9.2 器高: 3.45	天井部外面へ切り不調整 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/6 (内) 灰白N7/6	砂粒少食	良	口縁部: 1/8機 体部: 1/4機 天井部: 完全	外面に全面 に自然彫刻点
275	038-08	灰黒磁 杯 蓋	3号窯 灰黒・緑赤灰色土層 B32	口径: 9.6 器高: 3.15	天井部外面不定方向のナデ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白5Y7/1 (内) 灰白5Y7/1	砂粒少食	良	口縁部: 1/2機 体部: 3/4機 天井部: 完全	
276	038-09	灰黒磁 杯 蓋	3号窯 灰黒・緑赤灰色土層 A31	口径: 9.0 器高: 3.0	天井部外面へ切り不調整 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N8/0	粗砂粒多食	良	1/4機	
277	038-10	灰黒磁 杯 蓋	3号窯 すんた黄褐色土層 D09	口径: 9.0 器高: 3.5	天井部外面へ切り不調整 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 黄緑灰7.5YR 7/1 (内) 灰白.5YR8/1	粗砂粒少食	良	口縁部・体部: ごく一部の片機 天井部: 完全	
278	038-11	灰黒磁 杯 身	3号窯 灰黒・緑赤灰色土層 B32	口径: 12.4 受部径: 14.5 器高: 4.2	底部外面不定方向のナデ 底部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白N7/0	粗砂粒少食	良	口縁部・受部・体 部: 1/4機 底部はごく一部の 片機	
279	038-12	灰黒磁 杯 身	3号窯 灰黒・緑赤灰色土層 2段ナクス C31	口径: 11.0 受部径: 13.1	体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白N6/0	砂粒少食	良	口縁部: 1/4機 体部: 1/4機	
280	039-01	灰黒磁 杯 身	3号窯 灰黒・緑赤灰色土層 B32	口径: 9.5 受部径: 10.9 器高: 2.7	底部外面へ切り不調整 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰10Y5/1 (内) 黄灰5B6/1	砂粒少食	良	口縁部・受部: 1/8機 体部・底部: ほぼ完全	外面に自然 彫刻点
281	039-02	灰黒磁 杯 身	3号窯 灰黒・緑赤灰色土層 B32	口径: 8.8 受部径: 10.7 器高: 2.65	底部外面へ切り不調整 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 黄灰5B6/1 (内) 灰白10Y7/1	粗砂粒多食 細砂粒多食	良	ほぼ完全	受部に粘土 のガスが付着
282	039-03	灰黒磁 杯 身	3号窯 灰黒・緑赤灰色土層 2段ナクス C31	口径: 8.8 受部径: 11.0 器高: 2.5	底部外面不定方向のナデ 底部内面・体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白N7/0	粗砂粒少食	良	1/2機	
283	039-04	灰黒磁 杯 身	3号窯 灰黒・緑赤灰色土層 A31	口径: 8.65 受部径: 10.8 器高: 2.4	底部外面へ切り不調整 底部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白5Y7/1	砂粒少食	良	1/4機	
284	039-05	灰黒磁 杯 身	3号窯 灰黒 緑赤灰色土層 B32	口径: 9.1 受部径: 10.85 器高: 1.95	底部外面へ切り不調整 底部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白N6/0	砂粒少食	良	3/8機	外面に大部分 に自然彫刻 点付着
285	039-06	灰黒磁 杯 身	3号窯 灰黒・緑赤灰色土層 B32	口径: 8.4 受部径: 10.4 器高: 2.3	底部外面不定方向のナデ 底部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰M6/0 (内) 灰N5/0	砂粒少食	良	口縁部: 1/16機 受部: 1/4機 体部・底部: 1/4機	
286	039-07	灰黒磁 杯 身	3号窯 灰黒・緑赤灰色土層 B30	口径: 8.6 受部径: 11.0 器高: 2.7	底部外面へ切り不調整 底部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白5Y8/2 (内) 灰N6/0	砂粒少食	中々良	口縁部・受部・体 部: 1/2機 底部: 2/3機	外面に自然 彫刻点
287	039-08	灰黒磁 杯 身	3号窯 灰黒 C-D00	口径: 8.7 受部径: 10.4 器高: 2.95	底部外面へ切り不調整 底部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 黄灰2.5Y9/3 (内) 黄灰2.5Y9/1	砂粒少食	良	口縁部・受部・体 部: 1/8機 底部: 1/3機	外面に自然 彫刻点
288	039-09	灰黒磁 杯 身	3号窯 灰赤土上・緑赤灰色土 層の上 A30	口径: 7.8 受部径: 10.0 器高: 2.2	底部外面へ切り不調整 底部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	粗砂粒少食	良	口縁部・受部・体 部: 1/8機 底部: ごく一部の片機	

第23-12表 遺物観察表

No.	発掘 No.	図 号	出土位 置 説 明	法 量 (cm)	調 整 技 法 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	残 存	備 考
289	039-10	Ⅲ	3号窯 灰赤・緑赤灰色土層 B31	口径:7.8 受部径:10.0 器高:2.25	底部外面へ切り不調整 底部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N6/0	砂粒少 尠	良	口縁部:1/6残 受部:1/2残 体部:既焼 1/8残	
290	039-11	Ⅲ	3号窯 灰赤・緑赤灰色土層 A30	口径:8.1 受部径:9.9 器高:1.91	底部外面へ切り不調整 底部内面一定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白S7/2 (内) 灰白S2.5Y6/1	細砂粒多尠 砂粒少 尠	良	片状存在	外面に自然 焼点存在
291	039-12	Ⅲ	3号窯 灰赤・緑赤灰色土層 数2ケラス C31	口径:7.6 受部径:9.1 器高:2.1	底部外面へ切り不調整 底部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白S5/6 (内) 灰白N7/0	砂粒少 尠	良	口縁部:受部: 体部:1/4残 底面:1/3残	
292	040-01	Ⅲ	3号窯 緑赤灰色土層 灰赤 B32	口径:10.0 かえり径:1.4 つまみ高:1.0	天井部外面ロクロヘラケズリ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白N7/0	細砂粒多尠	良	1/12残	
293	040-02	Ⅲ	3号窯 灰赤・緑赤灰色土層 B31	口径:10.8 かえり径:9.2 器高:2.0	天井部外面へ切り不調整 天井部内面、体部・口縁部ロクロナデ	(外) 焼灰N3/0 (内) 灰白N8/0	砂粒少 尠	良	口縁部・かえり: 体部:1/4残 天井部:1/2残	
294	040-03	Ⅲ	3号窯 緑赤灰色土層 A30	口径:9.65 かえり径:7.6 器高:2.1	天井部外面へ切り不調整 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白S7/1 (内) 灰白N8/0	砂粒少 尠	良	口縁部・かえり: 体部・天井部: 1/8残	内外両面全体 に自然焼点 存在
295	040-04	Ⅲ	3号窯 灰赤・赤灰色土層 A31	口径:10.0 かえり径:7.8 器高:2.0	天井部～体部外面ロクロヘラケズリ 天井部内面、口縁部ロクロナデ	(外) 灰白S7.5Y7/1 (内) 灰白S7.5Y8/1	砂粒少 尠	やや不良	口縁部・かえり: 体部:1/6残	焼きぶくれ あり
296	040-05	Ⅲ	3号窯 灰赤・緑赤灰色土層 B32	口径:10.0 かえり径:8.2 器高:2.2	天井部外面へ切り不調整 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 焼灰S.5Y8/3 (内) 灰赤S.2.5Y6/1	砂粒少 尠	良	1/6残	外面に自然 焼点存在
297	040-06	Ⅲ	3号窯 灰赤土層(ト レット) A32	口径:10.2 かえり径:8.0 器高:2.0	天井部～体部一定方向のナデ 天井部内面体部・口縁部ロクロナデ	(外) 焼灰F10B7/1 (内) 焼灰F10B7/1	砂粒少 尠	良	1/2残	
298	040-07	Ⅲ	3号窯 灰赤前蓋 C30-D30	口径:10.0 かえり径:7.4	天井部外面ロクロヘラケズリ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白S2.5Y7/1 (内) 灰白S2.5Y7/1	砂粒少 尠 黒い粒存在	良	1/3残	
299	040-08	Ⅲ	3号窯 灰赤(トレット)灰赤色 土層 A32	口径:9.7 かえり径:7.8 器高:2.0	天井部外面ロクロヘラケズリ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白S5/1 (内) 灰白S5/1	砂粒少 尠	良	1/2残	
300	040-09	Ⅲ	3号窯 灰赤・灰赤色土層 A31	口径:10.0 かえり径:7.7	天井部外面ロクロヘラケズリ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白S2.5Y8/1 (内) 灰白S2.5Y8/1	砂粒少 尠	不良	口縁部・かえり: 体部:1/4残	外面に自然 焼点存在
301	040-10	Ⅲ	3号窯 灰赤・緑赤灰色土層 B32	口径:11.0 かえり径:9.1 器高:1.9	天井部外面ロクロヘラケズリ 天井部内面、体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰S.5Y6/1 (内) 灰白N8/0	砂粒少 尠	良	口縁部・かえり: 体部:1/4残 天井部:1/3残	歪みあり 外面に自然 焼点存在
302	040-11	Ⅲ	3号窯 灰赤・灰赤色土層 灰口先残部	口径:9.8 かえり径:7.5 器高:2.1	天井部外面ロクロヘラケズリ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	砂粒少 尠	不良	1/6残	
303	040-12	Ⅲ	3号窯 灰赤土層上。緑赤灰色土 層の上 A30	口径:9.6 かえり径:7.2 器高:2.15	天井部～体部上方外面ロクロヘラケズリ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	細砂粒少 尠	良	1/6残	
304	040-13	Ⅲ	3号窯 灰赤・灰赤色土層 A31	口径:9.6 かえり径:7.2 器高:1.4	天井部外面ロクロヘラケズリ 天井部内面、体部内面不定方向のナデ 体部外面・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N8/1 (内) 灰白N8/1	砂粒少 尠	良	1/2残	
305	040-14	Ⅲ	3号窯 灰赤・灰赤色土層 A31	口径:9.2 かえり径:7.3 器高:1.55	天井部外面ロクロヘラケズリ 天井部内面、体部内面不定方向のナデ 体部外面・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白S7/1 (内) 灰白N7/0	砂粒多 尠	良	1/2残	外面に自然 焼点存在
306	040-15	Ⅲ	3号窯 灰赤・灰赤色土層 灰口先残部	口径:9.1 かえり径:7.0 器高:1.3	天井部外面ロクロヘラケズリ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白S7.5Y7/1 (内) 灰白S7.5Y7/1	砂粒少 尠	不良	2/3残	焼きぶくれ あり
307	041-01	Ⅲ	3号窯 灰赤・灰赤色土層 トレット A32	口径:9.6 かえり径:7.4	天井部外面ロクロヘラケズリ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白S7/1 (内) 灰白N8/0	砂粒少 尠	不良	口縁部・かえり: 体部:1/4残	
308	041-02	Ⅲ	3号窯 灰赤・灰赤色土層 A31	口径:8.7 つまみ径:1.46 かえり径:7.4 器高:2.0	天井部外面ロクロヘラケズリのち不定 方向のナデ 天井部内面底面、体部・口縁部ロ クロナデ	(外) 灰白S.5Y8/1 (内) 灰白S.2.5Y8/1	砂粒少 尠	やや不良	1/2残	内面に黒炭 あり
309	041-03	Ⅲ	3号窯 灰赤・灰赤色土層 A31	口径:10.0 つまみ径:1.8 かえり径:7.9 器高:2.0	天井部外面ロクロヘラケズリ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白S7/1 (内) 灰白S7/1	砂粒少 尠	不良	口縁部・かえり: 体部・天井部: 1/8残	
310	041-04	Ⅲ	3号窯 灰赤・緑赤灰色土層 B32	口径:9.9 つまみ径:1.4 かえり径:7.9 器高:2.0	天井部外面ロクロヘラケズリ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 焼灰S.5Y7/3 (内) 灰白S5/6	砂粒少 尠	良	1/3残	焼灰焼つま みに自然 焼点がある
311	041-05	Ⅲ	3号窯 灰赤・緑赤灰色土層 B30	口径:10.2 かえり径:8.25 器高:1.55	天井部外面ロクロヘラケズリ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白N8/6	砂粒少 尠	良	1/4残	
312	041-06	Ⅲ	3号窯 灰赤・灰赤色土層 A31	口径:10.0 かえり径:8.2 器高:1.6	天井部外面ロクロヘラケズリ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	砂粒少 尠	良	1/4残	

第23-13表 遺物観察表

No.	発掘 No.	容器 種別	出土位置 位置	法量 (cm)	調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存	備考
313	041-07	須恵部 杯蓋	3号窯 灰赤・灰赤土層 A31	口径：9.4 かえり径：7.5	天井部外周口クロハラケズリ 天井部内面一定方向のナデ 体部・口縁部口ロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白N8/0	砂粒少含	良	1/6残	
314	041-08	須恵部 杯蓋	3号窯 灰赤・灰赤土層 B32	口径：10.0 かえり径：7.8 器高：1.65	天井部外周口クロハラケズリ 天井部内面一定方向のナデ 体部・口縁部口ロナデ	(外) 灰白0.5Y7/1 (内) 灰白N7/0	砂粒少含	良	口縁部・かえり・ 体部：1/4残 天井部：1/3残	外周に1.5 cmの粘土塊 あり
315	041-09	須恵部 杯蓋	3号窯 灰赤・暗赤灰色土層 第二段ナラス C31	口径：10.0 かえり径：7.6 器高：1.4	天井部外周口クロハラケズリ 天井部内面一定方向のナデ 体部・口縁部口ロナデ	(外) 灰5Y6/1 (内) 灰5Y6/1	砂粒少含	不良	口縁部・かえり・ 体部：1/4残 天井部：1/3残	
316	041-10	須恵部 杯蓋	3号窯 灰赤・暗赤灰色土層 A31	口径：9.8 かえり径：7.7 器高：1.8	天井部外周口クロハラケズリ 体部・口縁部口ロナデ	(外) 灰白0.5Y8/1 (内) 灰白0.5Y8/1	砂粒少含	不良	1/3残	
317	041-11	須恵部 杯蓋	3号窯 灰赤・暗赤灰色土層 第二段ナラス C31	口径：10.0 かえり径：7.5 器高：1.5	天井部外周口クロハラケズリ 天井部内面一定方向のナデ 体部・口縁部口ロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白2.5Y6/2	砂粒少含	やや不良	1/6残	
318	041-12	須恵部 杯蓋	3号窯 灰赤・東海アゼ A31	口径：10.0 かえり径：8.1 器高：1.65	天井部・体部上方外周口クロハラケズリ 体部・口縁部口ロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白N8/0	砂粒少含	良	口縁部・かえり・ 体部：1/4残	
319	041-13	須恵部 杯蓋	3号窯 灰赤・灰赤土層 A31	口径：9.5 かえり径：7.8 器高：1.5	天井部外周口クロハラケズリ 天井部内面一定方向のナデ 体部・口縁部口ロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白10Y8/1	砂粒少含	良	1/3残	
320	041-14	須恵部 杯蓋	3号窯 灰赤土層 直上 A31	口径：9.6 かえり径：7.4 器高：1.5	天井部外周口クロハラケズリ 天井部内面一定方向のナデ 体部・口縁部口ロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白10Y8/1	砂粒少含	良	口縁部：1/16残 かえり・体部：1/3残 天井部：1/3残	
321	041-15	須恵部 杯蓋	3号窯 灰赤・浅黄・褐色土層 B32	口径：9.6 かえり径：7.6	天井部外周口クロハラケズリ 天井部内面一定方向のナデ 体部・口縁部口ロナデ	(外) 灰白0.5Y7/1 (内) 灰白0.5Y7/1	細砂粒少含	不良	1/6残	
322	042-01	須恵部 杯蓋	3号窯 灰赤・暗赤灰色土層 B32	口径：9.8 ツツム高：2.6 かえり径：7.6 器高：1.85 ツツム高：1.9	天井部外周口クロハラケズリ 天井部内面一定方向のナデ 体部・口縁部口ロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	砂粒少含	良	口縁部：1/16残 かえり・体部：1/3残 天井部：1/3残	
323	042-02	須恵部 杯蓋	3号窯 灰赤・暗赤灰色土層 B30	口径：9.2 ツツム高：1.8 かえり径：7.2 器高：1.5 ツツム高：0.8	天井部外周口クロハラケズリ 天井部内面一定方向のナデ 体部・口縁部口ロナデ	(外) 灰白0.5Y8/1 (内) 灰白0.5Y7/1	砂粒少含	やや不良	1/3残	
324	042-03	須恵部 杯蓋	3号窯 灰赤・暗赤灰色土層 B32	口径：9.7 ツツム高：1.6 かえり径：7.4 器高：1.45 ツツム高：0.75	天井部・体部外周口クロハラケズリ 天井部内面一定方向のナデ 体部内面・口縁部口ロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N6/0	砂粒少含	良	ほぼ完全	
325	042-04	須恵部 杯蓋	3号窯 灰赤・暗赤灰色土層 D00	口径：10.0 かえり径：8.0	天井部外周口クロハラケズリ 天井部内面一定方向のナデ 体部・口縁部口ロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N8/0	砂粒少含	良	1/2残	
326	042-05	須恵部 杯蓋	3号窯 灰赤・暗赤灰色土層 第二段ナラス D30	口径：10.0 かえり径：7.4	天井部・体部外周口クロハラケズリ 天井部内面一定方向のナデ 体部内面・口縁部口ロナデ	(外) 灰白2.5Y8/3 (内) 黄灰0.5Y6/1	砂粒少含	良	口縁部・かえり・ 体部：1/2残 天井部：ほぼ完全	外周全体に 薄く自然釉 あり
327	042-06	須恵部 杯蓋	3号窯 灰赤・灰赤土層 A31	口径：10.2 かえり径：7.5	天井部外周口クロハラケズリ、内面不 定方向のナデ、体部外周口クロハラケズリ 体部内面・口縁部口ロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白N8/0	砂粒少含	やや不良	1/2残	
328	042-07	須恵部 杯蓋	3号窯 灰赤・暗赤褐色土層 (下層)	口径：10.2 かえり径：7.4	天井部外周口クロハラケズリ 天井部内面一定方向のナデ 体部・口縁部口ロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白N8/0	砂粒少含	やや不良	1/2残	
329	042-08	須恵部 杯蓋	3号窯 灰赤・暗赤灰色土層 B32	口径：10.0 かえり径：7.5	天井部外周口クロハラケズリ 天井部内面一定方向のナデ 体部・口縁部口ロナデ	(外) 灰白0.5Y8/1 (内) 灰0.5Y6/1	砂粒少含	やや不良	1/3残	
330	042-09	須恵部 杯蓋	3号窯 灰赤・暗赤灰色土層 A31	口径：9.6 かえり径：7.6	天井部外周口クロハラケズリ 天井部内面一定方向のナデ 体部・口縁部口ロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白N8/0	砂粒少含	やや不良	1/6残	
331	042-10	須恵部 杯蓋	3号窯 灰赤土層・直上 A31	口径：8.6 かえり径：6.6	天井部外周口クロハラケズリ 天井部内面一定方向のナデ 体部・口縁部口ロナデ	(外) 灰0.5Y6/1 (内) 灰白10Y8/1	砂粒少含	やや不良	口縁部・かえり・ 体部：1/4残 天井部：1/3残	
332	042-11	須恵部 杯蓋	3号窯 灰赤・暗赤灰色土層 第二段ナラス C31	口径：10.0 かえり径：8.2 器高：2.2	天井部外周口クロハラケズリ 天井部内面一定方向のナデ 体部・口縁部口ロナデ	(外) 灰白0.5Y7/1 (内) 灰白N7/0	細砂粒少含	良	口縁部・かえり・ 体部：1/4残 天井部：1/3残	外周全体に 自然釉を かぶる
333	042-12	須恵部 杯蓋	3号窯 灰赤・暗赤灰色土層 溝中より A31	口径：9.0 かえり径：7.0 器高：2.2	天井部外周口クロハラケズリ 天井部内面一定方向のナデ 体部・口縁部口ロナデ	(外) 灰白0.5Y7/1 (内) 灰白N8/0	細砂粒少含	良	1/6残	外周の大部分 に自然釉 をかぶる
334	042-13	須恵部 杯蓋	3号窯 灰赤・暗赤灰色土層 B32	口径：9.4 かえり径：7.2 器高：2.25	天井部外周口クロハラケズリ 天井部内面一定方向のナデ 体部・口縁部口ロナデ	(外) 灰白2.5Y8/1 (内) 灰白N8/0	砂粒少含	不良	1/3残	磨けつれ あり
335	042-14	須恵部 杯蓋	3号窯 灰赤・灰赤土層 トレンチ A32	口径：9.5 かえり径：6.9 器高：2.25	天井部外周口クロハラケズリ 天井部内面一定方向のナデ 体部・口縁部口ロナデ	(外) 灰5Y6/1 (内) 灰5Y6/1	砂粒少含	良	1/3残	外周に自然 釉点を かぶる
336	042-15	須恵部 杯蓋	3号窯 灰赤・暗赤灰色土層 第二段ナラス C31	口径：9.7 かえり径：7.0	天井部外周口クロハラケズリ 天井部内面一定方向のナデ 体部・口縁部口ロナデ	(外) 灰10Y6/1 (内) 灰白0.5Y7/1	砂粒少含	良	1/4残	

第23-14表 遺物観察表

No.	発掘 No.	容器 種別	出土位置 要領	法量 (cm)	調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存	備考
337	043-01	須恵器 杯 蓋	3号窯 灰黒・暗赤灰色土層 第二段テラス B09	口径: 8.0 かえり径: 6.0	天井部外面口コロヘラケズリ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部口コロナデ	(外) 灰白10Y7/1 (内) 灰白10Y7/1	砂粒 少々	良	1/3残	
338	043-02	須恵器 杯 蓋	3号窯 灰黒・灰赤色土層 A31	口径: 8.2 かえり径: 6.4	天井部外面口コロヘラケズリ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部口コロナデ	(外) 灰白10Y7/1 (内) 灰白N8/0	砂粒 少々	良	1/2残	
339	043-03	須恵器 杯 蓋	3号窯 灰黒・暗赤褐色土層 B31	口径: 9.2 つちム高: 2.6 器高: 1.7 つちム高: 1.0	天井部外面口コロヘラケズリ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部口コロナデ	(外) 灰7.5Y5/1 (内) 灰白5Y8/2	砂粒 少々	良	口縁部: 1/6残 体部: 1/6残 天井部: 1/4残	
340	043-04	須恵器 杯 蓋	3号窯 灰黒・灰赤色土層 A31	口径: 9.2 かえり径: 7.2	天井部外面口コロヘラケズリ 天井部内面一定方向のナデ 体部・口縁部口コロナデ	(外) 灰白5Y8/2 10Y7/2 (内) 灰白2.5Y7/1	砂粒 少々	良	1/3残	
341	043-05	須恵器 杯 蓋	3号窯 灰黒・暗赤灰色土層 A30	口径: 9.0 かえり径: 6.8	天井部外面口コロヘラケズリ 天井部内面・体部・口縁部口コロナデ	(外) 灰白10Y7/1 (内) 灰白5Y8/2	細砂粒 少々 砂粒 少々	良	口縁部: 4ヶ所 体部: 1/12残 天井部: 1/2残	裏まぶくれあり
342	043-06	須恵器 杯 蓋	3号窯 灰黒・灰赤色土層 トレンチ A52	口径: 9.1 かえり径: 7.3	天井部外面口コロヘラケズリ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部口コロナデ	(外) 灰白5Y7/2 (内) 灰白5Y7/2	砂粒 少々	不良	口縁部: 1/4残 体部: 1/4残 天井部: 1/6残	
343	043-07	須恵器 杯 蓋	3号窯 灰黒・暗赤灰色土層 A30	口径: 8.6 かえり径: 6.8	天井部外面口コロヘラケズリ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部口コロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰黒2.5Y7/3	砂粒 少々	良	1/2残	
344	043-08	須恵器 杯 身	3号窯 灰黒・灰赤色土層 A31	口径: 7.5 器高: 2.7	底部外面ヘリ切り不調整 底部内面一定方向のナデ 体部内面一定方向のナデ、体 部内面・口縁部口コロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白N6/0	細砂粒 少々	不良	1/2残	
345	043-09	須恵器 杯 身	3号窯 灰黒・灰赤色土層 焚口残部	口径: 7.7 器高: 2.80	底部外面不定方向のナデ 底部内面一定方向のナデ 体部・口縁部口コロナデ	(外) 灰7.5Y5/1 (内) 灰白5Y5/8-1	砂粒 少々	やや不良	口縁部: 1/4残 体部: 1/8残	底部外面に ヘリ記号 「J」か
346	043-10	須恵器 杯 身	3号窯 灰黒・灰赤色土層 B32	口径: 8.0 器高: 2.8	底部外面ヘリ切り不調整 底部内面不定方向のナデ 体部・口縁部口コロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N6/0N	砂粒 少々	良	口縁部: 1/8残 体部: 1/2残 底部: 1/4残	
347	043-11	須恵器 杯 身	3号窯 灰黒・暗赤土層 E26	口径: 7.7 器高: 3.15	底部外面不定方向のナデ 底部内面不定方向のナデ 体部・口縁部口コロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	細砂粒 少々	良	口縁部: 1/2残 体部: 1/4残 底部: 3/4残	
348	043-12	須恵器 杯 身	3号窯 灰黒・暗赤灰色土層 B30+31	口径: 8.3 器高: 3.2	底部外面ヘリ切り不調整 底部内面不定方向のナデ 体部・口縁部口コロナデ	(外) 灰黒2.5Y6/1 (内) 灰黒1.5Y6/1	細砂粒 少々	良	口縁部: 1/4残 体部: 1/4残 底部: 1/2残	
349	043-13	須恵器 杯 身	3号窯 灰黒・東西アズ A31	口径: 8.8 器高: 2.9	底部外面ヘリ切り不調整 底部内面・体部・口縁部口コロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N8/0	砂粒 少々	不良	1/8残	
350	043-14	須恵器 杯 身	3号窯 灰黒・東西アズ A31	口径: 8.6 器高: 2.9	底部外面ヘリ切り不調整 底部内面一定方向のナデ 体部・口縁部口コロナデ	(外) 灰白5Y7/1 (内) 灰白5Y7/1	微砂粒 少々 細砂粒 少々	やや不良	口縁部: 5/8残 体部: 5/8残 底部: 1/2残	
351	043-15	須恵器 杯 蓋	3号窯 灰黒・灰赤色土層 焚口丸残部	口径: 9.2 器高: 2.95	底部外面不定方向のナデ 底部内面一定方向のナデ 体部・口縁部口コロナデ	(外) 灰白2.5Y7/1 (内) 灰白2.5Y7/1	微砂粒 少々	良	口縁部: 1/4残 体部: 1/12残 底部: 1/8残	
352	044-01	須恵器 杯 身	3号窯 灰黒・暗赤灰色土層 B30-31	口径: 9.3 器高: 2.95	底部外面一定方向のナデ 底部内面一定方向のナデ 体部・口縁部口コロナデ	(外) 灰白2.5Y7/1 (内) 灰白2.5Y7/1	細砂粒 少々	良	口縁部: 1/12残 体部: 1/12残 底部: 1/4残	
353	044-02	須恵器 杯 身	3号窯 灰黒・暗赤灰色土層 B32	口径: 8.5 器高: 12.7	底部外面不定方向のナデ 底部内面一定方向のナデ 体部・口縁部口コロナデ	(外) 灰白5Y8/2 (内) 灰黒2.5Y5/1	砂粒 少々	良	口縁部: 1/6残 体部: 1/4残 底部: 1/3残	
354	044-03	須恵器 杯 身	3号窯 かすんだ黄褐色土層 D29	口径: 8.5 器高: 2.9	底部外面不定方向のナデ 底部内面一定方向のナデ 体部・口縁部口コロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰N6/0	砂粒 少々	良	口縁部: 1/3残 体部: 1/3残 底部: ほぼ完全	
355	044-04	須恵器 杯 身	3号窯 灰黒・暗赤灰色土層 A31	口径: 8.4 器高: 3.7	底部外面ヘリ切り不調整 底部内面・体部・口縁部口コロナデ	(外) 灰10Y6/1 (内) 灰白2.5Y7/1	微砂粒 少々 細砂粒 少々	やや不良	1/3残	
356	044-05	須恵器 杯 身	3号窯 灰黒・灰赤色土層 A31	口径: 9.1 器高: 2.95	底部外面ヘリ切り不調整 底部内面一定方向のナデ 体部・口縁部口コロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白2.5Y8/2	砂粒 少々	不良	1/3残	
357	044-06	須恵器 杯 身	3号窯 灰黒・灰赤色土層 A31	口径: 9.8 器高: 3.1	底部外面ヘリ切り不調整 底部内面不定方向のナデ 体部・口縁部口コロナデ	(外) 灰黒2.5YR7/2 (内) 灰黒2.5YR7/2	細砂粒 少々 砂粒 少々	やや不良	口縁部: 1/3残 体部: 1/3残 底部: ほぼ完全	
358	044-07	須恵器 杯 身	3号窯 灰黒 C-D30	口径: 9.0 器高: 2.65	底部外面不定方向のナデ 底部内面・体部・口縁部口コロナデ	(外) 灰白2.5Y8/1 (内) 灰白2.5Y8/1	細砂粒 少々	良	1/8残	
359	044-08	須恵器 杯 身	3号窯 灰黒・暗赤灰色土層 A31	口径: 9.4 器高: 2.7	底部外面不定方向のナデ 底部内面・体部・口縁部口コロナデ	(外) 灰白5Y8/2 (内) 灰白5Y8/2 10Y7/2	砂粒 少々	良	1/4残	
360	044-09	須恵器 杯 身	3号窯 灰黒・暗赤灰色土層 C29	口径: 10.2 器高: 4.8	底部外面口コロヘラケズリ 底部内面・体部・口縁部口コロナデ	(外) 灰黒2.5Y6/2 (内) 灰黒2.5Y6/2	砂粒 少々	良	口縁部: 1/8残 体部: 1/4残 底部: 1/4残	

第23-15 遺物観察表

No.	発掘 年	器種	出土位置 遺構	法量 (cm)	調整技法の特徴	色 調	胎 土	焼 成	残 存	備 考
361	04-10	灰赤胎 丸	3号窯 灰赤・暗赤灰色土層 A31	口径：19.4 器高：13.35	底部内面一定方向のナゲ 底部内面不定方向のナゲ 体部・口縁部口クロナゲ	(外) 灰白2.5Y8/1 (内) 灰白2.5Y7/1	砂粒少含	良	口縁部：1/4残 体部：1/4残 底部：1/4残	
362	044-11	灰赤胎 丸	3号窯 灰赤・暗赤灰色土層 B31	口径：13.6 器高：5.4	底部内面口クロヘラケズリ 底部内面一定方向のナゲ 体部内面下方口クロヘラケズリ、体部 外面上方・内面・口縁部口クロナゲ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N8/0	砂粒少含	良	口縁部：1/4残 体部：1/4残 底部：1/2残	
363	045-01	3号窯 灰赤・灰赤色土層 (暗赤灰色土層直上) B32	口径：19.0 器高：13.4	天井外面不定方向のナゲ 天井内面不定方向のナゲ 体部・口縁部口クロナゲ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	砂粒多含	良	ほぼ完全(口縁部 若干欠ける)		
364	045-02	3号窯 灰赤・暗赤灰色土層 B31	口径：17.9 つらみ高さ1.0 器高：3.3 つらみ径1.6	天井外面口クロヘラケズリ 天井内面一定方向のナゲ 体部・口縁部口クロナゲ	(外) 灰白2.5Y7/1 (内) 灰白2.5Y7/1	細砂粒少含	良	3/4残		
365	045-03	3号窯 灰赤・灰赤色土層 A31	口径：17.0	体部・口縁部口クロナゲ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	微砂粒少含	良	口縁部：1/8残 体部：1/3残		
366	045-04	3号窯 灰赤・暗赤灰色土層 B32	口径：18.0	底部外面不定方向のナゲ 底部内面不定方向のナゲ 体部・口縁部口クロナゲ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N5/0	細砂粒少含	良	1/4残		
367	045-05	3号窯 灰赤・灰赤色土層 B32	口径：10.0 器高：3.0	体部・口縁部口クロナゲ	(外) 灰オリーブ 5Y8/2 (内) 灰白5Y7/2	細砂粒多含	良	口縁部：1/3残 体部：1/3残	内面及び 自然胎あり	
368	045-06	3号窯 くすんだ黄褐色土層 D29	口径：19.7 器高：2.9	底部外面不定方向のナゲ 底部内面不定方向のナゲ 体部・口縁部口クロナゲ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰N8/0	微砂粒少含	良	口縁部：1/8残 体部：1/8残 底部：1/3残		
369	045-07	3号窯 くすんだ黄褐色 土層 E30	口径：11.0	杯部口縁部・体部外面・口縁部口クロ ナゲ 体部内面・底部内面不定方向のナゲ 底部内面口クロナゲ	(外) 灰白5Y8/1 (内) 灰白5Y8/1	細砂粒少含	不良	杯部口縁部：1/2残 杯部体部：1/2残 杯部底部：1/2残 注：底面 ほぼ完全	胴部内面に 縦溝あり	
370	045-08	3号窯 クマ焼土・くすんだ 黄褐色土層 D27	口径：13.6 口径：8.6 口径：10.05	杯部底面・体部・口縁部口クロナゲ 胴部内面口クロナゲ	(外) 灰白5Y8/1 (内) 灰白5Y8/1	細砂粒多含	良	杯部口縁部体部：1/2残 底面：ほぼ完全 胴部：1/2残		
371	045-09	3号窯 灰赤・暗赤灰色土層 B32	口径：16.7	胴部内面口クロナゲ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白5Y7/1	砂粒少含	良	胴部：1/4残	全体に自然胎 あり。胴部内 面にクマ焼土 の残存あり	
372	045-10	3号窯 くすんだ黄褐色土層 金網 埋め直し層上 D29	口径：16.7	杯部底面外面口クロナゲ、内面不定方 向の口クロナゲ 杯部外面口クロナゲ	(外) 灰白7.5Y7/1 (内) 灰白5Y7/1	細砂粒多含 砂粒少含	良	杯部：底部のみ残 杯部体部：完全 杯部内面に 縦溝あり	内面及び 自然胎あり	
373	046-01	3号窯 くすんだ黄褐色土層 G29	口径：16.6 体部最大径：13.4	口縁部・体部口クロナゲ 体部外面の筋溝に一部カキメあり	(外) 灰白5Y7/1 (内) 灰白5Y7/1N	砂粒少含	不良	口縁部：1/2残 杯部底面：1/2残	外面に自然胎 あり。口縁部 にヒラケ状 ものこりあり	
374	047-01	3号窯 くすんだ黄褐色土層 D29	口径：18.6	口縁部口クロナゲ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰N6/0	砂粒少含	良	口縁部のみほぼ完 全(ただし口縁部 を一文欠く)		
375	047-02	3号窯 くすんだ黄褐色土層 D29	口径：18.3	口縁部口クロナゲ	(外) 灰白10Y7/1 (内) 灰白N7/0	細砂粒少含	良	口縁部：2/3残	外面に自然胎 あり	
376	047-03	3号窯 くすんだ黄褐色土層 G29	口径：16.6	口縁部口クロナゲ 体部口クロナゲ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白N7/0	砂粒少含	良	口縁部：1/4残 胴部：ごく一部のみ残	口縁部内面 に自然胎あり	
377	047-04	3号窯 灰赤・黄褐色土層 (緑色土層直上) B32	口径：15.6 体部最大径：16.6 口径：18.2 器高：14.8	口縁部口クロナゲ 底部外面土層不定方向のナゲ 底部内面下部口クロナゲ 底部内面不定方向のナゲ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N7/0	砂粒少含	やや不良	ほぼ完全	口縁部と体 部の接合部 に部分的な 欠けあり	
378	047-05	3号窯 落ち込み F22	口径：21.6 体部最大径：26.5	口縁部口クロナゲ 体部外面土層不定方向のナゲ 体部外面下部口クロヘラケズリ 体部内面口クロナゲ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白N8/0	微砂粒少含	やや不良	口縁部・体部：こ くおすかに残		
379	048-01	3号窯 くすんだ黄褐色土層 G29	口径：12.3 体部最大径：13.9 器高：10.7	口縁部口クロナゲ・体部外面土層・中位 口クロナゲ・体部下位口クロヘラケズ リ・底部外面口クロヘラケズリ・底部 内面不定方向のナゲ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N8/0	細砂粒少含	不良	口縁部：1/8残 体部：1/2残 底部：1/2残		
380	048-02	3号窯 くすんだ黄褐色土層 D30	口径：16.5	口縁部口クロナゲ・胴部と体部の接合 部筋土より付け残ナゲ 胴部内面平行タテカメ・胴部内面筋溝残 タテカメ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白N8/0	砂粒多含	良	口縁部：1/3残		
381	048-03	3号窯 灰赤・暗赤灰色土層 B32	口径：15.8	口縁部口クロナゲ 胴部外面平行タテカメ後カキメ 胴部内面筋溝残タテカメ	(外) 灰白7.5Y7/1 (内) 灰白7.5Y7/1	砂粒少含	不良	口縁部：1/6残		
382	048-04	3号窯 くすんだ黄褐色 土層 E30	口径：18.0	口縁部口クロナゲ・胴部と体部の接合 部筋土より付け残ナゲ 胴部外面平行タテカメ後カキメ・内面筋 溝残タテカメ	(外) 灰白2.5Y7/1 (内) 灰白2.5Y7/1	砂粒多含	良	口縁部：1/4残 胴部：おすかに残	外面に自然胎 あり	
383	048-01	3号窯 クマ焼土・くすんだ 黄褐色土層・D27	口径：17.7	口縁部口クロナゲ・胴部と体部の接合 部筋土より付け残ナゲ 胴部外面平行タテカメ・胴部内面筋溝残 タテカメ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白5Y7/2	砂粒少含	良	口縁部：1/2残 胴部：一部ののみ残		
384	049-02	3号窯 くすんだ黄褐色土層 D29	口径：20.2	口縁部口クロナゲ・胴部と体部の接合 部筋土より付け残ナゲ 胴部外面平行タテカメのちヨコナゲ、内 面筋溝残タテカメ	(外) 灰白2.5Y7/2 (内) 灰白2.5Y7/2	砂粒少含	良	口縁部：1/6残		

第23-16 遺物観察表

No.	登録 No.	器 種	出土位 置	法量 (cm)	調整技法の特徴	色 調	胎 土	焼 成	残 存	備 考
385	049-03	須恵器 甕	3号窯 灰赤・暗赤褐色土層 B31	口径: 17.1	口縁部クロコナデ。胴部と体部の接合部粘土はり付け様ナデ 肩部外面平行タタキカキメ、内面青褐色タタキ	(外) 灰白7.5Y7/1 (内) 灰白7.5Y7/1	凝砂粒少	良	口縁部: 1/2塊 肩部: 一部のみ残	
386	049-04	須恵器 甕	3号窯 灰赤・暗赤褐色土層 新2段テラス C31	口径: 14.5	口縁部クロコナデ。胴部と体部の接合部粘土はり付け様ナデ 肩部外面平行タタキカキメ、内面青褐色タタキ	(外) 灰白2.5Y8/2 (内) 灰白N8/0	凝砂粒少	良	口縁部: 1/8塊 肩部: 1/8塊	外面に自然動行書
387	050-01	須恵器 甕	3号窯 灰赤・くすんだ黄褐色土層 新2段テラス D32	口径: 14.2	口縁部クロコナデ。胴部と体部の接合部粘土はり付け様ナデ 肩部外面平行タタキ、肩部内面青褐色タタキ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N6/0	凝砂粒少	良	口縁部: 1/2塊	
388	050-02	須恵器 甕	3号窯 くすんだ黄褐色土層 D29	口径: 19.4	口縁部クロコナデ。胴部外面にタタキの工具痕あり。胴部と体部の接合部粘土はり付け様ナデ。肩部外面平行タタキ、肩部内面青褐色タタキ	(外) 明青灰10BG7/1 (内) 明青灰10BG7/1	凝砂粒少	良	口縁部: 1/4塊	口縁部内面、肩部内面に自然動行あり
389	050-03	須恵器 甕	3号窯 灰赤・くすんだ黄褐色土層 新2段テラス D32	口径: 20.0	口縁部クロコナデ。胴部と体部の接合部粘土はり付け様ナデ 肩部外面平行タタキ、肩部内面青褐色タタキ	(外) 灰黄7.5YR5/2 (内) 灰白・黄褐色10R3/4	凝砂粒少	やや不良	口縁部: 1/2塊 肩部: 1/4塊	
390	050-04	須恵器 甕	3号窯 くすんだ黄褐色土層 D30	口径: 21.0	口縁部クロコナデ。胴部と体部の接合部粘土はり付け様ナデ 肩部外面平行タタキ内面青褐色タタキ	(外) 灰黄緑10YR8/4 (内) 灰白・黄褐色10YR7/4	凝砂粒多	良	口縁部: 1/2塊 肩部: 1/4塊	
391	051-01	須恵器 甕	3号窯 くすんだ黄褐色土層 D29	口径: 38.6	口縁部クロコナデ。胴部と体部の接合部粘土はり付け様ナデ 肩部外面平行タタキ、肩部内面青褐色タタキ	(外) 灰白2.5GY8/1 (内) 灰白2.5GY8/1	凝砂粒少	良	口縁部: 1/8塊 (ただし口縁部はほぼ一部のみ残)	
392	051-02	須恵器 甕	3号窯 灰山土・くすんだ黄褐色土層 D29	口径: 38.0	口縁部クロコナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白N8/0	凝砂粒少	良	口縁部: 1/8塊	
393	052-01	須恵器 甕	3号窯 灰山土・くすんだ黄褐色土層 D29	口径: 37.0	口縁部クロコナデ	(外) 灰黄2.5Y8/3 (内) 灰白2.5Y8/2	凝砂粒少	良	口縁部: 1/8塊	
394	053-01	須恵器 甕	3号窯 Pw 18 D29	口径: 40.8	口縁部クロコナデ 胴部と体部の接合部粘土はり付け様ナデ	(外) 赤灰10R5/6 (内) 赤灰10R5/1	凝砂粒少	不良	口縁部: 1/4塊	
395	054-01	須恵器 甕	3号窯 灰赤・くすんだ黄褐色土層 新2段テラス D32	口径: 28.6	口縁部クロコナデ	(外) 橙ナリーブ灰2.5GY3/1 (内) 灰白2.5Y7/1	凝砂粒少	やや不良	口縁部: 1/6塊	
396	054-02	須恵器 甕	3号窯 くすんだ黄褐色土層 E29	口径: 38.5	口縁部クロコナデ	(外) 灰白10YR7/1 (内) 灰白10YR7/1	凝砂粒多	良	口縁部: 1/12塊 (ただし口縁部はほぼ1/6塊)	外面に自然動行書
397	055-01	須恵器 甕	3号窯 くすんだ黄褐色土層 D29	口径: 40.0	口縁部クロコナデ後面にタタキ	(外) 青灰5B5/1 (内) 青灰5BG/6	凝砂粒少	良	口縁部: 1/12塊 (ただし口縁部はほぼ1/6塊)	
398	055-02	須恵器 甕	3号窯 くすんだ黄褐色土層 G29	口径: 47.0	口縁部クロコナデ	(外) 灰白5Y8/1 (内) 灰白5Y8/2	凝砂粒少	良	口縁部: 1/18塊	
399	056-01	須恵器 甕	3号窯 くすんだ黄褐色土層 D29	口径: 41.4	口縁部クロコナデ。胴部と体部の接合部粘土はり付け様ナデ 肩部外面平行タタキ、肩部内面青褐色タタキ	(外) 灰7.5Y6/1 (内) 灰白N7/0	凝砂粒少	やや不良	口縁部: 1/4塊	
400	057-01	須恵器 甕	3号窯 くすんだ黄褐色土層 D29	口径: 53.6	口縁部クロコナデ。胴部と体部の接合部粘土はり付け様ナデ 肩部外面平行タタキ、肩部内面青褐色タタキ	(外) 灰黄7.5YR5/2 (内) 灰黄7.5YR5/2	凝砂粒少	やや不良	口縁部: 1/8塊	
401	058-01	須恵器 甕	3号窯 くすんだ黄褐色土層 C29		口縁部クロコナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白N8/0	凝砂粒多	良	口縁小片	
402	058-02	須恵器 甕	3号窯 くすんだ黄褐色土層 C29		口縁部クロコナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	凝砂粒少	良	口縁小片	
403	058-03	須恵器 甕	3号窯 くすんだ黄褐色土層 C29		口縁部クロコナデ	(外) 灰白5Y7/1 (内) 灰白10Y5/1	凝砂粒少	良	口縁小片	
404	058-04	須恵器 甕	3号窯 クニ造土・くすんだ黄褐色土層 D37		口縁部クロコナデ	(外) 黄灰5D6/1 (内) 黄灰5D6/1	凝砂粒少	良	口縁小片	
405	058-05	須恵器 甕	3号窯 クニ造土・くすんだ黄褐色土層 F27		口縁部クロコナデ後面にタタキ	(外) 緑灰10GY5/1 (内) 緑灰10GY5/1	凝砂粒少	良	口縁小片	
406	058-06	須恵器 陶 器	3号窯 クニ造土 (谷底) G28		谷底タタキ、青黄灰タタキ	(黄) 灰N6/0 (黄) 明ナリーブ灰2.5GY7/1	凝砂粒少	良	一部のみ	
407	059-01	須恵器 甕	3号窯 クニ造土・くすんだ黄褐色土層 D37		体部外面焼子タタキ 体部内面青褐色タタキ	(外) 灰白N5/0 (内) 灰白N8/0	凝砂粒少	良	体部小片	
408	060-01	須恵器 甕	3号窯 灰赤・暗赤褐色土層 B32		内面ナデ 内面青褐色タタキ	明青灰10BG7/1	凝砂粒少	良		

第23-17表 遺物観察表

No.	発掘No.	器種	出土位置	法量 (cm)	調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存	備考
409	000-02	須恵器	3号窯 灰系・緑赤灰色土層 第2段テラスE29		外濠タタキ目 内面青磁状タタキ	灰白2.5Y7/1	細砂粒少	良		
410	000-03	須恵器	3号窯 赤土・緑土・くすんだ黄 褐色 D27		外濠タタキ目 内面青磁状タタキ	灰白5.7Y7/1	砂粒少	良		
411	000-04	須恵器	3号窯 黒地層跡土中		内面青磁状タタキ	黄灰2.5Y6/1	微砂粒少	良		
412	000-05	須恵器	3号窯 くすんだ黄褐色土層 D29		外濠タタキ目 内面青磁状タタキ	灰白N8/0	微砂粒少	不良		
413	000-06	須恵器	3号窯 灰系・緑赤灰色土層 E31		外濠タタキ目 内面青磁状タタキ	灰白0Y7/1	細砂粒少	良		
414	000-07	須恵器	3号窯 くすんだ黄褐色土層 E29		外濠タタキ目 内面青磁状タタキ	灰7.5Y6/1	微砂粒少	良		
415	061-01	須恵器 杯蓋	3号窯 黒地層	口径: 11.0 器高: 3.85	天井部外濠へ切り換不定方向のナデ 天井部内濠不定方向のナデ 体部・口縁部コクロナデ	(外) 灰N4/0 (内) 灰N5/0	砂粒少	良	口縁部: 1/5残 体部: 1/5残 底面: ほぼ完存	
416	061-02	須恵器 杯身	3号窯 黒地層	口径: 9.2 受座径: 11.2 器高: 4.0	底面外濠へ切り換不調整 底面内濠不定方向のナデ 体部・口縁部コクロナデ	(外) 灰N8/0 (内) 灰白N6/0	細砂粒少	良	1/2残	
417	061-03	須恵器 杯蓋	3号窯 黒地層	口径: 10.0 かえり径: 8.2	天井部外濠コクロヘミヨキ 天井部内濠不定方向のナデ 体部・口縁部コクロナデ	(外) 黄赤灰M10G7/1 (内) 黄赤灰M10G7/1	砂粒多	良	1/2残	
418	062-01	須恵器 杯身	4号窯 黄赤灰土層 E34	口径: 11.5 受座径: 13.5 器高: 3.5	底面外濠へ切り換不調整 底面内濠、体部・口縁部コクロナデ	(外) 灰白5Y8/1 (内) 灰白7.5Y7/1	微砂粒少	不良	口縁部: 受部: 1/4残 底面: 1/3残	
419	062-02	須恵器 杯身	4号窯 黄赤灰土層 E34	口径: 10.5 受座径: 12.8 器高: 3.0	底面外濠へ切り換不定方向のナデ 底面内濠不定方向のナデ 体部・口縁部コクロナデ	(外) 灰白7.5Y7/1 (内) 灰白7.5Y7/1	微砂粒少	不良	口縁部: 受部: 体部: 1/2残 底面: 3/8残	
420	062-03	須恵器 蓋	4号窯 黄赤灰土層 E34		体部外濠縁子タタキ 体部内濠青磁状タタキ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N6/0	細砂粒少	良	体部小片	
421	063-01	須恵器 蓋	4号窯 黄赤灰土層 E34		体部外濠平行タタキ 体部内濠青磁状タタキ	(外) 灰N5/0 (内) 灰N6/0	細砂粒少	良	体部小片	
422	063-02	須恵器 蓋	4号窯 黄赤灰土層 E34		体部外濠平行タタキ 体部内濠青磁状タタキ	(外) 灰N4/0 (内) 灰N6/0	砂粒少	良	体部小片	
423	064-01	須恵器 杯蓋	5号窯 黄赤灰土層・砂中(下層) G No1	口径: 10.0 器高: 3.5	天井部外濠不定方向のナデ 天井部内濠不定方向のナデ 体部・口縁部コクロナデ	(外) 緑系SG1.7/1 (内) 黄赤灰M10G4/1	細砂粒少	良	1/6残	
424	064-02	須恵器 杯蓋	5号窯 黄赤灰土層・砂中(下層) G No1	口径: 12.3	体部・口縁部コクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 緑灰10GY6/1	細砂粒少	良	口縁部: 1/4残 受部: 1/6残 体部: 1/8残	
425	064-03	須恵器 杯身	5号窯 黄赤灰土層・砂中(下層) G No1	口径: 8.2 受座径: 10.3	体部・口縁部コクロナデ	(外) 黄赤灰S10G6/1 (内) 黄赤灰S10G6/1	微砂粒少	良	口縁部: 1/6残 受部: 1/6残 体部: 1/6残	
426	064-04	須恵器 杯身	5号窯 黄赤灰土層・黄赤土層上 (砂下層跡) G No2	口径: 10.0 受座径: 12.0	体部・口縁部コクロナデ	(外) 灰N4/1 (内) 灰白0Y8/1	微砂粒少	不良	口縁部: 1/2残 受部: 1/2残 体部: 1/2残	
427	064-05	須恵器 小盃形	5号窯 黄赤灰土層・黒色(灰)色 土層 G No5	口径: 6.0 器高: 2.85	底面外濠不定方向のナデ 底面内濠、体部・口縁部コクロナデ	(外) 緑赤赤5YR3/2 (内) 赤灰2.5YR4/1	細砂粒少	良	ほぼ完存	
428	064-06	須恵器 碗	5号窯 黄赤灰土層 G34	口径: 9.6 器高: 5.7	底面外濠縁止ヘラケズリ 底面内濠不定方向のナデ 体部・口縁部コクロナデ	(外) 灰白5YR7 7/4 (内) 灰白5YR7 7/4	細砂粒少	不良	1/2残	
429	064-07	須恵器 碗	5号窯 黄赤灰土層 G34	口径: 17.0 器高: 6.5	底面外濠縁止ヘラケズリ 底面内濠不定方向のナデ 体部・口縁部コクロナデ	(外) 緑2.5YR7.6 7/4 (内) 灰白5YR7 7/4	細砂粒少	不良	口縁部: 3/8残 受部: 3/8残 体部: 1/3残	
430	064-08	須恵器 控鉢	5号窯 黄赤灰土層・砂中上層 G No4	底径: 12.5	底面外濠不定方向のナデ 底面縁部コクロナデ	(外) 黄緑5YR8/3 7/4 (内) 灰白5YR8 6/4	細砂粒少	不良	底面: 1/3残	
431	064-09	須恵器 控鉢	5号窯 黄赤灰土層・砂中上層 G No3	底径: 10.5	底面外濠不定方向のナデ 底面縁部コクロナデ	(外) 灰白5YR7 7/4 (内) 灰白5YR7 7/4	細砂粒少	不良	底面のみほぼ完存	
432	065-01	須恵器 杯蓋	5号窯 灰系・黄褐色土層 I 31	口径: 10.0 器高: 3.2	天井部外濠へ切り換一定方向のナデ 天井部内濠不定方向のナデ 体部・口縁部コクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N4/0	細砂粒少	良	口縁部: ごく一部の残 体部、天井部: 1/2残	

第23-18表 遺物観察表

No.	発掘 年次	部 位	出 土 位 置 備 考	法量 (cm)	調整技法の特徴	色 調	胎 土	焼 成	残 存	備 考
433	065-02	須磨器 杯 蓋	5号窯 灰赤・黒褐色土層	口径：9.9 高さ：3.65	天井部外面へ切り不調整 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部クロコナデ	(外) 黄灰SB06/1 SBG6/1	細砂粒少含	良	1/6残	
434	065-03	須磨器 杯 蓋	5号窯 灰赤・灰褐色土層 焼痕ブロッケ等 H31	口径：12.8	体部・口縁部クロコナデ	(外) 灰10Y6/1 (内) 灰7.5Y6/1	微砂粒少含	良	口縁部：1/6残 体部：1/6残	
435	065-04	須磨器 杯 蓋	5号窯 灰赤・黒褐色土層	口径：9.7 受部径：11.9 器高：3.5	底面外面不定方向のナデ 底面内面不定方向のナデ 体部・口縁部クロコナデ	(外) 黄灰2.SY5/2 (内) 灰白5Y6/1	細砂粒少含	やや不具	1/4残	
436	065-05	須磨器 杯 身	5号窯 灰赤・黒褐色土層	口径：9.8 受部径：11.5 器高：3.35	底面外面へ切り不調整 底面内面不定方向のナデ 体部・口縁部クロコナデ	(外) 灰N5/0 (内) 灰N5/0	微砂粒少含	良	口縁部：1/3残 受部・体部：1/2残 底面部分見存	
437	065-06	須磨器 杯 身	5号窯 灰赤・黒褐色土層	口径：11.0 受部径：13.0 器高：2.5	底面へ切り不調整	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	細砂粒多含	良	口縁部：1/3残 受部・体部：1/3残 底面：ごく一部のみ残	
438	065-07	須磨器 杯 身	5号窯 灰赤・灰褐色土層光澤	口径：10.4 受部径：12.2	体部・口縁部クロコナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰N6/0	微砂粒少含	良	口縁部：1/8残 受部：1/8残 体部：1/8残	
439	065-08	須磨器 杯 身	5号窯 SK1 H32	口径：9.0 受部径：10.6 器高：2.1	底面外面へ切り不調整 底面内面不定方向のナデ 体部・口縁部クロコナデ	(外) 灰白5Y8/1 (内) 灰白N8/0	細砂粒少含	良	1/3残	
440	065-09	須磨器 杯 蓋	5号窯 灰赤・黒褐色土層	口径：19.4 つまみ径：14.8 かえり径：8.4 器高：10 つまみ高：0.5	天井部外面ホケキ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部クロコナデ	(外) 灰オリーブ5Y 5/2 (内) 灰白N7/0	微砂粒少含	良	口縁部・かえり：1/2残 体部：1/4残 天井部：1/4残	外面に自然 軸行
441	065-10	須磨器 杯 蓋	5号窯 灰赤・黒褐色土層	口径：10.3 かえり径：8.3	天井部外面クロホケキ 天井部内面、体部・口縁部クロコナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	微砂粒少含	良	口縁部・かえり：1/2残 体部：1/2残 天井部：1/2残	外面に自然 軸行の取 つた形跡あり
442	066-01	須磨器 杯 蓋	5号窯 灰赤・町道きわ H34～H34	口径：10.0 かえり径：8.4 器高：1.8	天井部外面ホケキ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部クロコナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N6/0	細砂粒少含	良	1/4残	
443	066-02	須磨器 杯 蓋	5号窯 灰赤・灰褐色土層 5号窯跡跡土ブロッケ H32	口径：10.0 つまみ径：2.6 かえり径：4.6 つまみ高：3.4 器高：2.25	天井部外面不定方向のナデ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部クロコナデ	(外) 黄灰2.5Y6/1 (内) 灰N6/0	細砂粒多含	良	口縁部・かえり：1/4残 体部・天井部：1/4残 つまみ：1/3残	
444	066-03	須磨器 杯 蓋	5号窯 灰赤・黒褐色土層	口径：10.3 つまみ高：1.4 つまみ高：0.9	天井部外面クロホケキ 天井部内面不定方向のナデ	(外) 灰白5Y7/1 (内) 灰白N7/0	細砂粒多含	良	天井部：1/4残 つまみ完全	外面に自然 軸行
445	066-04	須磨器 杯 蓋	5号窯 灰赤・灰褐色土層 5号窯跡の層から H32	口径：11.0 かえり径：8.5	天井部外面ホケキ 天井部内面不定方向のナデ 体部・口縁部クロコナデ	(外) 黄赤灰5BG4/1 (内) 黄オリーブ灰 50Y4/1	細砂粒少含	良	口縁部・かえり：1/4残 体部：1/4残 天井部：1/2残	内面に自然 軸行
446	066-05	須磨器 杯 身	3号窯 灰赤・灰褐色土層 J31	口径：11.1 器高：2.6	底面外面へ切り不調整 底面内面不定方向のナデ 体部・口縁部クロコナデ	(外) 灰N5/0 (内) 灰N5/0	細砂粒少含	良	口縁部：1/6残 体部：1/8残 底面：ごく一部ののみ残	
447	066-06	須磨器 杯 身	5号窯 灰赤・灰褐色土層 焼痕ブロッケ等 H31	口径：10.8 器高：3.4	底面外面へ切り不調整 底面内面、体部・口縁部クロコナデ	(外) 灰白10Y7/1 (内) 灰白7.5Y7/1	細砂粒少含	良	口縁部：1/12残 体部：1/12残 底面：1/4残	
448	066-07	須磨器 高 杯	5号窯 灰赤・灰褐色土層 5号窯跡の層から H32	口径：9.2	杯底外面ヘラケズリ 杯底内面不定方向のナデ 杯底外面ヘラケズリ、体部内面、口縁部クロコナデ	(外) 灰白10Y7/1 (内) 灰白N7/0	微砂粒少含	良	杯底のみ：1/4残	
449	066-08	須磨器 高 杯	5号窯 灰赤・灰褐色土層 H34	口径：9.0	杯底外面クロコナデ 杯底内面一方向のナデ 杯底体部・口縁部クロコナデ	(外) 黄灰SB5/1 (内) 黄灰SB5/1	微砂粒少含	良	杯底口縁部：1/4残 杯底体部：1/4残 杯底底面：一方向のみ残	
450	066-09	須磨器 高 杯	5号窯 灰赤・黒褐色土層	口径：9.0	杯底外面ヘラケズリ 杯底内面、体部・口縁部クロコナデ	(外) 黄灰10BG5/1 (内) 黄赤灰HBG7/1	細砂粒少含	良	杯底口縁部：1/8残 杯底体部：1/8残 杯底底面：一部のみ残	
451	066-10	須磨器 高 杯	5号窯 灰赤・黒褐色土層	口径：9.0	杯底外面ヘラケズリ 杯底内面不定方向のナデ 杯底体部・口縁部クロコナデ	(外) 黄灰10BG5/1 (内) 黄赤灰HBG4/1	微砂粒少含	良	杯底口縁部：1/8残 杯底体部：1/8残 杯底底面：一部のみ残	
452	067-01	須磨器 高 杯	5号窯 灰赤・灰褐色土層 焼痕ブロッケ等 H31	口径：9.0	杯底外面クロコナデ 杯底内面不定方向のナデ 杯底外面クロコナデ	(外) 黄灰SB06/1 (内) 黄赤灰10BG7/1	細砂粒多含	良	杯底底面：1/3残 杯底体部：見存	杯底内面に 残り残あり
453	067-02	須磨器 高 杯	5号窯 灰赤・黒褐色土層	口径：8.0	杯底内面クロコナデ	(外) 黄灰10BG5/1 (内) 黄灰10BG6/1	細砂粒少含	良	杯底：5/8残	杯底内面に 残り残あり
454	067-03	須磨器 高 杯	5号窯 灰赤・灰褐色土層 5号窯跡した層から H32	口径：7.1	脚部内外面クロコナデ	(外) 灰N5/0 (内) 灰N5/0	細砂粒少含	良	杯底：1/2残	外面に自然 軸行 杯底内面に 軸行あり
455	067-04	須磨器 高 杯	5号窯 灰赤・灰褐色土層 H32	口径：7.1	脚部内外面クロコナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N6/0	細砂粒少含	良	杯底：1/2残	二方向に自然 軸行あり
456	067-05	須磨器 高 杯	5号窯 灰赤・灰褐色土層 5号窯跡土ぶらわく H32	口径：6.6	口縁部・体部内外面上下クロコナデ 体部外面下ヘラケズリ 体部内面下方不定方向のナデ	(外) 黄灰10GY5/1 (内) 灰白N7/0	細砂粒少含	良	口縁部：1/2残 体部：1/2残	

第23-19表 遺物観察表

No.	発掘 No.	器種	出土位置 遺構	法量 (cm)	調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存	備考
457	067-06	灰蓋 形調整	5号窯 灰赤・灰褐色土層 J31	口径: 5.2	口縁部、胴部、体部コロコナゲ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	細砂粒少含	良	口縁部: 1/4残 胴部: 1/4残 体部: ごく一部のみ残	
458	067-07	灰蓋 平底	5号窯 灰赤・灰褐色土層 J31	底径: 10.4	胴部外周不定方向のナゲ、所々にタナキがみられる。 底部内面不定方向のナゲ 体部下方向コロコナゲ	(外) 灰白N7/0 (内) 黄灰BBS/1	細砂粒多含	良	底部完全	
459	067-08	灰蓋 平底	5号窯 灰赤・黒褐色土層 J33	口径: 5.7	口縁部コロコナゲ	(外) 黄青灰10BG7/1 (内) 灰白BY7/1	細砂粒多含	良	口縁部完全	
460	068-01	灰蓋 平底	5号窯 黒体灰土層 G34	口径: 7.0 体径最大径: 17.9 体径最大径: 17.9 器高: 16.5	口縁部コロコナゲ、体部上面不定方向のナゲ、体部中央より下コロコナゲ、底部内面へつり腕不定方向のナゲ、底部内面不定方向のナゲ	(外) 灰白7.5YR/1 (内) 灰N6/0	細砂粒多含	良	ほぼ完全	横割時に傳染した土盛りあり
461	068-02	灰蓋 平底	5号窯 黒体灰土層 G34	口径: 6.65 体径最大径: 17.1 器高: 16.4	口縁部コロコナゲ、体部上面不定方向のナゲ、体部中央より下コロコナゲ、底部内面へつり腕不定方向のナゲ、内面不定方向のナゲ	(外) K-L5-5YR6/6 (内) K-L5-1赤黄2.5YR5/4	細砂粒少含	不良	ほぼ完全	
462	068-03	灰蓋 平底	5号窯 黒体灰土層 G34	口径: 5.9 体径最大径: 17.7 器高: 16.7	口縁部コロコナゲ、体部上面不定方向のナゲ、体部中央より下コロコナゲ、底部内面へつり腕不定方向のナゲ、内面不定方向のナゲ	(外) 灰N4/0 (内) 灰N4/0	細砂粒少含	不良	ほぼ完全	横割時に傳染した土盛りあり
463	069-01	灰蓋 平底	5号窯 黒体灰土層 G34	口径: 6.95 体径最大径: 17.7 器高: 19.0	口縁部コロコナゲ、体部上面不定方向のナゲ、体部中央より下コロコナゲ、底部内面へつり腕不定方向のナゲ、内面不定方向のナゲ	(外) 黄赤9.5YR/2 (内) 灰5Y6/1	細砂粒少含	不良	ほぼ完全	体部下位置に土盛りあり
464	069-02	灰蓋 平底	5号窯 灰赤・灰褐色土層 J34	口径: 5.95 体径最大径: 15.5 器高: 16.3	口縁部コロコナゲ、体部上面不定方向のナゲ、体部中央より下コロコナゲ、底部内面へつり腕不定方向のナゲ、内面不定方向のナゲ	(外) 灰N5/0 (内) 灰N5/0	微砂粒少含	良	ほぼ完全	
465	070-01	灰蓋 平底	5号窯 黒体灰土層 G34	口径: 51.6	口縁部コロコナゲ、胴部と体部の合部粘土はり付け後ナゲ、体部内面黄緑装タナキ	(外) 黒黄7.5YR2/2 (内) K-L5-1赤7.5R4/4	細砂粒少含	やや不具	口縁部: 1/4残	
466	071-01	灰蓋 平底	5号窯 灰赤・灰褐色土層 J33	口径: 47.0	口縁部コロコナゲ、胴部と体部の合部粘土はり付け後ナゲ	(外) 灰7.5Y5/1 (内) 黄灰10BG6/1	細砂粒少含	やや不具	口縁部: 1/12残	
467	072-01	灰蓋 平底	5号窯 灰赤・黒褐色土層 J32	口径: 48.6	口縁部外面上段、内面コロコナゲ 口縁部外面下段不定方向のナゲ	(外) 黄青灰10BG1/3 (内) 黄灰10BG1/5	細砂粒少含	良	口縁部: 1/3残	体部のナゲキ目と合部を断断したに残る
468	073-01	灰蓋 平底	5号窯 灰赤・灰褐色土層 J31	口径: 26.6	口縁部コロコナゲ、胴部と体部の合部粘土はり付け後ナゲ	(外) 灰N4/0 (内) 灰白N8/0	細砂粒多含	良	口縁部: 1/5残	全体に自然熱
469	073-02	灰蓋 平底	5号窯 灰赤・灰褐色土層 J32	口径: 23.4	口縁部コロコナゲ	(外) 灰N6/0 (内) 緑灰5G1/5	細砂粒少含	良	口縁部: 1/3残	
470	074-01	灰蓋 平底	5号窯 灰赤・黒褐色土層 J33	口径: 40.8	口縁部コロコナゲ	(外) 緑黄緑10G1/3 (内) 緑黄緑10G1/4	細砂粒多含	良	口縁部の一部のみ残	全体に自然熱
471	074-02	灰蓋 平底	5号窯 灰赤・灰褐色土層 J33	口径: 17.8	口縁部内面コロコナゲ、外面ハツ状工具による調整、体部外面平行タナキ後ヨコナゲ 内面黄緑装タナキ後ヨコナゲ	(外) K-L5-1黄2.5Y6/3 (内) 灰黄2.5Y7/2	微砂粒少含	やや不具	口縁部: 1/4残 胴部: 1/3残 体部: 1/6残	
472	075-01	灰蓋 平底	5号窯 灰赤・黒褐色土層 J32	口径: 17.8	口縁部内面コロコナゲ、外面ハツ状工具による調整	(外) 灰N5/0 (内) 灰N6/0	細砂粒多含	良	口縁部小片	
473	075-02	灰蓋 平底	5号窯 灰赤・灰褐色土層 J31	口径: 17.8	口縁部コロコナゲ	(外) 緑灰N3/0 (内) 灰N5/0	砂粒少含	良	口縁部小片	
474	075-03	灰蓋 平底	5号窯 灰赤・先陶 J30	口径: 17.8	口縁部コロコナゲ	(外) 緑灰N3/0 (内) 灰N4/0	細砂粒多含	良	口縁部小片	
475	075-04	灰蓋 平底	5号窯 灰赤・灰褐色土層 J31	口径: 17.8	体部外面平行タナキ、内面黄緑装タナキ後ヨコナゲ	(外) 黄灰10BG6/1 (内) 黄青灰10BG7/1	微砂粒少含	良	体部小片	
476	076-01	灰蓋 平底	5号窯 灰赤・灰褐色土層 H32	口径: 17.8	体部外面平行タナキ、内面黄緑装タナキ	(外) 黄青灰10BG4/1 (内) 黄灰10BG6/1	細砂粒少含	良	体部小片	
477	076-02	灰蓋 平底	5号窯 灰赤・灰褐色土層 J31	口径: 17.8	体部外面平行タナキ、内面黄緑装タナキ	(外) ナリーフ灰2.5GY6/1 (内) 灰N6/0	微砂粒少含	良	体部小片	
478	077-01	灰蓋 平底	5号窯 黒体灰土層 中熱調整付近	口径: 17.8	体部外面平行タナキ、内面黄緑装タナキ	(外) 灰黄5YR4/2 (内) K-L5-1赤黄2.5YR5/3	微砂粒少含	良	体部小片	
479	077-02	灰蓋 平底	5号窯 黒体灰土層 J33	口径: 17.8	体部外面平行タナキ、内面黄緑装タナキ	(外) 緑灰7.5GY6/1 (内) 緑灰7.5GY6/1	微砂粒少含	良	体部小片	
480	078-01	灰蓋 平底	5号窯 黒体灰土層 G34	口径: 17.8	体部外面平行タナキ、内面黄緑装タナキ	(外) 灰ナリーフ5Y6/2 (内) K-L5-1赤黄7.5R5/5	細砂粒少含	良	体部小片	

第23-20表 遺物観察表

No	発掘 No	器 種	出土位 置	量 重 (cm)	調整技法の特徴	色 調	胎土	構成	残 存	備 考
481	079 -01	須恵器 甕	5号窯 灰黒・灰褐色土層 J33		外面外周タタキ、内面青磁装タタキ	(外) 灰黒5YR3/2 (内) 灰白5YR 6/3	敷砂粒少含	不具	体部小片	
482	080 -02	須恵器 甕	5号窯 灰黒・灰褐色土層 J33		外面外周タタキ、内面青磁装タタキ	(外) 灰黒5YR3/2 (内) 灰白5YR 6/3	敷砂粒少含	不具	体部小片	
483	081 -01	須恵器 甕	5号窯 灰黒・灰褐色土層 J33		外面 タタキ目 内面 青磁装タタキ	黄沢10BG4/1	敷砂粒少含	具		
484	081 -02	須恵器 甕	5号窯 P41 J33		外面 タタキ目 内面 青磁装タタキ	黄沢10GY4/1	細砂粒少含	具		
485	081 -03	須恵器 甕	5号窯 灰黒・灰褐色土層 132		外面 タタキ目 内面 青磁装タタキ	灰N5/0	敷砂粒少含	具		
486	081 -04	須恵器 甕	5号窯 灰黒・灰褐色土層 H32		外面 タタキ目 内面 青磁装タタキ	黄沢5BG6/1	敷砂粒少含	具		
487	081 -05	須恵器 甕	5号窯 灰黒・灰褐色土層 H32		外面 タタキ目 内面 青磁装タタキ	黄沢5BG5/1	敷砂粒少含	具		
488	081 -06	須恵器 甕	5号窯 灰黒・灰褐色土層 H32		外面 タタキ目 内面 青磁装タタキ	灰N5/0	敷砂粒少含	具		
489	082 -01	須恵器 甕	5号窯 灰黒・灰褐色土層 J32		外面 タタキ目 内面 黄オエ	灰白N7/0	敷砂粒少含	具		
490	082 -02	須恵器 甕	5号窯 灰黒・灰褐色土層 H32		外面 ナデ 内面 ナデ	オリーブ沢2.5GY 5/1	敷砂粒少含	具		
491	082 -03	須恵器 甕	5号窯 灰黒・灰褐色土層 134		外面 タタキ目 内面 青磁装タタキ	黄沢10BG6/1	細砂粒少含	具		
492	082 -04	須恵器 甕	5号窯 灰黒・灰褐色土層 H32		外面 タタキ目 内面 青磁装タタキ	黄沢10BG6/1	敷砂粒少含	具		
493	082 -05	須恵器 甕	5号窯 灰黒・灰褐色土層 133		外面 タタキ目 内面 青磁装タタキ	灰N6/0	敷砂粒少含	具		
494	082 -06	須恵器 甕	5号窯 灰黒・町宮カワ H34-134		内面 青磁装タタキ	黄沢5BG6/1	敷砂粒少含	具		
495	082 -07	須恵器 甕	5号窯 灰黒・灰褐色土層 H32		内面 青磁装タタキ	黄沢5BG5/1	細砂粒少含	具		
496	083 -01	須恵器 杯 甕	落ち込み1 C18	口径：11.6 器高：3.0	天弁部外面不定方向のナデ 天弁部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	敷砂粒少含	具	ほぼ完存	天弁部外面 にへう起す 「一」
497	083 -02	須恵器 杯 甕	落ち込み1 C18	口径：12.2	体部、口縁部ロクロナデ	(外) 黄沢2.5Y6/1 (内) 灰白2.5Y7/1	敷砂粒少含	具	口縁部：1/5残	
498	083 -03	須恵器 杯 甕	落ち込み1 D18	口径：11.6 器高：3.2	天弁部外面不定方向のナデ 天弁部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 黄沢2.5Y7/2 (内) 灰白2.5Y8/1	細砂粒少含	やや不具	1/4残	
499	083 -04	須恵器 杯 甕	落ち込み1 C18	口径：11.6	天弁部外面へう切り後不定方向のナデ 天弁部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 黄沢7.5YR 7/1 (内) 切場沢7.5YR 7/1	細砂粒少含	具	1/4残	外面に割傷 の口縁部 付着
500	083 -05	須恵器 杯 甕	落ち込み1 C18	口径：12.0 器高：2.5	天弁部外面へう切り後不定方向のナデ 天弁部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N7/0	細砂粒少含	具	口縁部：1/4残 体部：1/8残 天弁部：完存	
501	083 -06	須恵器 杯 甕	落ち込み1 C18	口径：12.8 器高：3.3	天弁部外面へう切り後不定方向のナデ 天弁部内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N6/0	敷砂粒少含	やや不具	口縁部：1/12残 体部：1/8残 天弁部：完存	
502	083 -07	須恵器 杯 甕	落ち込み1 C18	口径：10.0 器高：11.8 器底：3.8	天弁部外面へう切り後不定方向のナデ 天弁部内面一定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白2.5Y7/1 (内) 灰白N8/0	細砂粒少含	具	口縁部、受部： 二ヶ一部のみ残 体部：1/3残 器底：1/4残	
503	083 -08	須恵器 杯 甕	落ち込み1 C18	口径：10.8 受部径：12.4 器高：2.9	底面外周へう切り後ハケ拭きによる 調整、内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白10YR8/2 (内) 黄沢2.5Y6/1	細砂粒少含	具	1/8残	
504	083 -09	須恵器 杯 甕	落ち込み1 D18	口径：9.3 受部径：11.1 器高：3.3	底面外周へう切り後不定方向のナデ 底面内面不定方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N7/0 (内) 灰N7/0	敷砂粒少含	具	口縁部、受部： 二ヶ一部のみ残 体部：1/12残 器底：完存	

第23-21表 遺物観察表

No	登録 No.	器種	出土位置 遺構	法量 (cm)	調整技法の特徴	色 調	胎 土	焼 成	残 存	備考
505	083 -10	灰被器 杯 身	落ち込み1 D18	口径：9.5 受口径：12.0 器高：3.9	底部外周へ切り戻し不定方向のナゲ 底部内面、体部・口縁部ロクロナゲ	(外) 灰N6/0 (内) 灰オリーブSY 6/2	敷砂粒少々	良	口縁部：受部 1/2残 体部：1/2残 底部：ほぼ完全	受部に若干 付着粘土あり
506	083 -11	灰被器 杯 身	落ち込み1 D18	口径：11.0 受口径：13.0	体部・口縁部ロクロナゲ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N7/0	敷砂粒少々	良	口縁部 1/4残 受部 1/4残 体部 1/4残	受部に別個 体の一部が 付着
507	083 -12	灰被器 杯 身	落ち込み1 C18	口径：11.0 受口径：13.0	体部・口縁部ロクロナゲ	(外) 灰白10YR8/2 (内) 灰白N7/0	敷砂粒少々	良	口縁部 1/8残 受部 1/8残 体部 1/8残	
508	084 -01	灰被器 壺	落ち込み1 D18	口径：10.0 器高：4.5	底部外周ナゲ、底部内面不定方向のナゲ 体部・口縁部ロクロナゲ	(外) 灰白7.4YR8/1 (内) 灰白7.5YR8/1	敷砂粒少々	不良	口縁部 1/4残 体部 1/2残 底部 1/2残	
509	084 -02	灰被器 壺	落ち込み1 C18	体部最大径： 8.0	底部外周不定方向のナゲ 底部内面不定方向のナゲ 体部ロクロナゲ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白N8/0	敷砂粒少々	良	体部：1/6残 底部：1/6残	底部外周に ヘラ 記号 1M あり
510	084 -03	灰被器 高 杯	落ち込み1 C18		胴部ロクロナゲ	(外) 黄青灰50G4/1 (内) 黄青灰50G7/1	細砂粒少々	良	胴部：1/2残	
511	084 -04	土器 前罐身	落ち込み1 斜面谷状落ち込み 体黄褐色土層 C18	直径：3.9 高さ：2.9 孔径：0.7 重量：37.50g	未調整	(外) 赤黄2.5YR/3 (内) 赤黄2.5YR/3	敷砂粒少々	良	完全	
512	084 -05	土器 炊飯器	落ち込み1 C18	口径：13.4	口縁部ヨコナゲ 体部外周ハナメ 体部内面不定方向のナゲ	(外) E.白-緑5YR 7/4 (内) 緑7.5YR6/6	敷砂粒少々	良	口縁部：2/3残	
513	084 -06	灰被器 皿	落ち込み1 C18	体部最大径： 9.0	胴部内周ロクロナゲ・内面ヨコナゲ 体部外周不定方向のナゲ 底部内面不定方向のナゲ、内面工具に よるロクロナゲ	(外) 灰N5/0 (内) 灰N5/0	細砂粒少々	良	胴部：1/4残 体部：完全	胴部内面中央 にヘラ 記号 あり付着
514	084 -07	灰被器 壺	落ち込み1 C18	体部最大径： 19.3	体部外周上段・中段ロクロナゲ、体部 外周下段ヘラナゲ、体部内面ロクロ ナゲ、底部外周ヘラナゲ、底部内面 不定方向のナゲ	(外) 黄青灰10G7/1 (内) 黄灰10G6/1	細砂粒少々 砂 粒 少 々	良	体部：1/4残 底部：1/3残	体部内面中 位にヘラ 記号あり
515	085 -01	灰被器 壺	落ち込み1 C18	口径：34.0	口縁部内周ロクロナゲ	(外) 灰N4/0 (内) 灰黄2.5Y6/2	細砂粒少々 砂 粒 少 々	良	口縁部：1/3残	体部外周に 塗料あり
516	085 -02	灰被器 壺	落ち込み1 C18	口径：37.0	口縁部外周上段ロクロナゲ、下段ナ メ 口縁部内周ロクロナゲ	(外) 灰N4/0 (内) 灰SY5/1	細砂粒少々	良	口縁部破片	口縁部内周 上段に塗料 あり
517	085 -03	鉄 斧	落ち込み1 C18	長さ：7.6 幅：3.65 厚さ：1.65						
518	086 -01	灰被器 杯 身	落ち込み2 D22	口径：12.8 器高：3.6	天井部外周不定方向のナゲ 天井部内周ロクロナゲ 体部・口縁部ロクロナゲ	(外) 灰N6/0 (内) 灰白N7/0	敷砂粒少々	良	口縁部： ごく一部の欠 れ 天井部：1/2残	天井部に粘 土付着
519	086 -02	灰被器 杯 身	落ち込み2 C22	口径：12.7 器高：5.2	天井部内周不定方向のナゲ 天井部内面不定方向のナゲ 体部・口縁部ロクロナゲ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白10Y7/1	敷砂粒少々	良	口縁部：2/3残 体部：2/3残 天井部：完全	
520	086 -03	灰被器 杯 身	落ち込み2 D22	口径：10.0 受口径：11.4 器高：3.4	底部外周不定方向のナゲ 底部内面不定方向のナゲ 体部・口縁部ロクロナゲ	(外) 黄青灰38G7/1 (内) 黄青灰10G6/1	敷砂粒少々	良	口縁部 1/6残 受部・体部 1/6残 底部はごく一部の 欠れ	
521	086 -04	灰被器 杯 身	落ち込み2 C22	口径：11.3 受口径：14.0 器高：3.9	底部外周不定方向のナゲ 底部内面不定方向のナゲ 体部・口縁部ロクロナゲ	(外) 黄灰2.5Y7/2 (内) 灰白N7/0	敷砂粒少々	良	口縁部：1/2残 受部・体部： 1/2残	受部に赤黄 土層付着 口縁部付着
522	086 -05	灰被器 高 杯	落ち込み2 D22	口径：11.4 器高：3.4	胴部外周外周ロクロナゲ、方部不定方 向のナゲ 胴部内周ロクロナゲ	(外) 灰白2.5YR/1 (内) 灰白2.5YR/1	敷砂粒少々	良	胴部胴部：1/2残 胴部：2/3残 底部はごく一部の 欠れ	胴部内周 面に黄 土層付着
523	086 -06	灰被器 台付壺	落ち込み2 D22	口径：10.0	胴部内周面ロクロナゲ	(外) 灰黄2.5Y7/2 (内) 黄灰10G6/1	敷砂粒少々	良	胴部：4/5残	外周に自然 釉をかぶる
524	087 -01	灰被器 壺	落ち込み2 D22	口径：22.2	口縁部ロクロナゲ 胴部外周平行ナゲのちカキメ 胴部内周黄褐色ナゲ	(外) 灰白7.5Y7/2 (内) 灰白N7/0	敷砂粒少々	不良	口縁部：1/6残 胴部： ごく一部の欠 れ	口縁部内周 面に黄褐色 土層付着
525	086 -08	灰被器 壺	落ち込み2 D22	口径：21.6	口縁部ロクロナゲ 胴部内周平行ナゲのちカキメ 胴部内周黄褐色ナゲ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	敷砂粒少々	良	口縁部：1/3残 胴部： ごく一部の欠 れ	
526	087 -02	灰被器 壺	落ち込み2 D22	口径：43.0	口縁部内周面ロクロナゲ 胴部外周平行ナゲのちカキメ 胴部内周黄褐色ナゲ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	敷砂粒少々	良	口縁部：ほぼ完全	口縁部外周 面に黄褐色 土層付着
527	088 -01	灰被器 壺	落ち込み2 D22	口径：36.3	口縁部内周面ロクロナゲ 胴部外周平行ナゲのちカキメ 胴部内周黄褐色ナゲ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	細砂粒少々 砂 粒 少 々	良	口縁部：完全	口縁部外周 面に黄褐色 土層付着
528	089 -01	灰被器 杯 身	落ち込み3 G22	口径：13.8	天井部内周へ切り戻し不調整 天井部内周不定方向ナゲ 体部・口縁部ロクロナゲ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N6/0	敷砂粒少々	良	1/3	体部内周に 打ち欠き あり

第23-22表 遺物観察表

No.	発掘 No.	器種	出土位置 遺構	法量 (cm)	調整技法の特徴	色 調	胎 土	焼 成	残 存	備 考
529	089-02	灰層 杯 蓋	落ち込み3 F22	口径：13.4 器高：3.0	天井部内面へ切りちりナデ 天井部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白SV8/2 (内) 黄緑R10GY7/1	微砂粒多量	良	1/3	
530	089-03	灰層 杯 蓋	落ち込み3 G22	口径：13.0 器高：3.75	天井部内面へ切りちりナデ 天井部内面一方方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N5/0 (内) 灰白N7/0	微砂粒多量	良	口縁部：1/8 天井部：1/4	
531	089-04	灰層 杯 蓋	落ち込み3 G22	口径：13.0 器高：3.0	天井部内面へ切りちり不調整 天井部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N6/0	微砂粒少量	良	口縁部：1/4 天井部：1/5	
532	089-05	灰層 杯 蓋	落ち込み3 F22	口径：11.8 器高：4.0	天井部内面へ切りちり不調整 天井部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	微砂粒多量	良	口縁部：1/4 天井部：1/2	
533	089-06	灰層 杯 蓋	落ち込み3 F22	口径：11.2 器高：3.6	天井部内面へ切りちりナデ 天井部内面一方方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 黄緑R2.5YR7/3	微砂粒少量	良	1/6	体部内面に 焼きがけられ あり
534	089-07	灰層 杯 蓋	落ち込み3 G22	口径：13.2 器高：3.9	天井部内面へ切りちりナデ。天井部 底面カキ目調整、天井部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N6/0	微砂粒多量	良	口縁部：1/8 天井部：3/4	天井部内面に へろ記号「 $\times$ 」あり
535	089-08	灰層 杯 蓋	落ち込み3 F22	口径：19.0 器高：3.0	天井部内面へ切りちりナデ 天井部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N5/0 (内) 灰白N7/0	微砂粒多量	良	口縁部：1/8 天井部：1/3	天井部外周に へろ記号「 $\times$ 」あり
536	090-01	灰層 杯 蓋	落ち込み3 G22	口径：12.6 受部径：15.4 器高：3.6	底面外周へ切りちり調整 底面内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰ナリーブSY 6/2 (内) 灰白N7/0	微砂粒少量	良	1/3	体部内面に へろ記号「 $\times$ 」あり
537	090-02	灰層 杯 蓋	落ち込み3 F22	受部径：14.0	底面外周へ切りちり調整 底面内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰2.5Y6/1 (内) 青灰S10/1	微砂粒少量	良	口縁部：1/6 底面：ほぼ完存	口縁部に 焼きがけあり
538	090-03	灰層 杯 蓋	落ち込み3 G22	口径：11.2 受部径：13.4 器高：3.5	底面外周へ切りちりナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白S17/1 (内) 灰白N7/0	微砂粒少量	良	1/2	天井部内面に へろ記号「 $\times$ 」あり
539	090-04	灰層 杯 蓋	落ち込み3 G22	口径：11.8 受部径：14.0	体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白S17/2 (内) 灰白N8/0	微砂粒多量	良	1/4	天井部外周に 自然釉付着
540	090-05	灰層 杯 蓋	落ち込み3 G22	口径：11.4 受部径：13.2 器高：3.2	底面外周へ切りちり調整 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰白N7/0	微砂粒少量	良	1/4	体部内面に 焼きがけられ あり
541	090-06	灰層 杯 蓋	落ち込み3 F22	口径：11.0 受部径：13.0 器高：3.7	底面外周へ切りちり調整 底面内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰N6/0	微砂粒少量	やや不良	1/4	
542	090-07	灰層 杯 蓋	落ち込み3 F22	口径：10.7 受部径：13.0 器高：3.7	底面外周へ切りちりナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白N8/0	微砂粒少量	良	1/4	天井部、体 部外周に自然 釉付着あり
543	090-08	灰層 杯 蓋	落ち込み3 G22	口径：10.0 受部径：12.0	体部内面の一環不定方向ナデ 体部外周、口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白N8/0	微砂粒少量	良	1/4	
544	090-09	灰層 杯 蓋	落ち込み3 F22	口径：11.4 受部径：13.2 器高：4.4	底面外周へ切りちり調整 底面内面一方方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰黄2.5Y7/2 (内) 灰白S17/1	微砂粒少量	やや不良	口縁部：ごく一部 底面：1/2	底面外周に 焼きがけられ 自然釉付着
545	090-10	灰層 杯 蓋	落ち込み3 F22	受部径：12.4	底面外周へ切りちりナデ 底面内面一方方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白S17/1 (内) 灰白S17/1	微砂粒多量	良	1/8	
546	091-01	灰層 杯 蓋	落ち込み3 F22	つおみ径：1.9 つおみ高：1.8	天井部ロクロナデ	(外) 灰白2.5Y8/2 (内) 灰白S17/1	微砂粒多量	良	天井部：2/3	断面は厚さを 増やすように 意図的に欠か れ
547	091-02	灰層 杯 蓋	落ち込み3 F22	つおみ径：2.4 つおみ高：0.7	天井部内面ロクロナデ、天井部外周調整 ロクロヘラナデ、天井部内面不定 方向ナデ 体部ロクロナデ	(外) 灰白7.5Y8/1 (内) 灰白7.5Y8/1	微砂粒少量	良	1/4	
548	091-03	灰層 高 杯	落ち込み3 調整土(灰褐色土) F22	口径：9.9	胴部ロクロナデ	(外) ちいぶ黄緑 10YR7/3 (内) 灰白N7/0	微砂粒多量	良	胴部：3/4 口縁部：完存	三方スキャン
549	091-04	灰層 高 杯	落ち込み3 F22	口径：12.2	杯部外周ロクロナデ、杯部内面自然釉付着のため調整不明瞭	(外) 灰N5/0 (内) 黄緑R2.5Y6/6	微砂粒多量	良	口縁部：1/3 底面：ほぼ完存	三方スキャン
550	091-05	灰層 高 杯	落ち込み3 F22	口径：9.6	胴部ロクロナデ	(外) 灰白10YR/1 (内) 赤黄R2.5Y8/3	微砂粒多量	良	1/3	三方スキャン
551	091-06	灰層 高 杯	落ち込み3 F22	口径：9.3	口縁部・体部ロクロナデ	(外) 灰白10YR8/1 (内) ちいぶ黄緑 10YR7/3	微砂粒少量	良	口縁部：ほぼ完 存 体部：1/3	体部外周に 自然釉付着あり
552	091-07	灰層 高 杯	落ち込み3 F22	口径：10.1	杯部外周ロクロナデ、杯部内面自然釉 付着	(外) 黄ナリーブSY 4/3 (内) 灰白N7/0	微砂粒多量	良	胴部：1/3 底面：4/5	三方スキャン 断面は厚さを 増やすための 杯部ナデ

第23-23表 遺物観察表

No	発掘 No	器種	出土位置	遺構	法量 (cm)	調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存	備考
553	091-08	土師器 壺	落ちこみ3	F22	口径: 19.3	口縁部 ココナデ	(外) 灰黄緑10YR8/4 (内) 灰黄緑10YR8/4	微砂粒少含	良	1/8	
554	092-01	須恵器 壺	落ちこみ3	D32	口径: 18.6	口縁部 ロクロナデ	(外) 灰白5Y7/1 (内) 灰白5Y7/1	微砂粒少含	良	1/8	口縁部内面に へう記号 3/Aあり
555	092-02	須恵器 壺	落ちこみ3	F22	口径: 13.2	口縁部 ロクロナデ 体部内面半円コナデ 体部外面青銅塗キタキ	(外) 灰黄2.5Y8/3 (内) 灰黄2.5Y8/3	細砂粒多含	良	1/4	口縁部内面に へう記号 3/Aあり
556	092-03	須恵器 壺	落ちこみ3	F22	口径: 33.4	口縁部 ロクロナデ 体部内面半円コナデのみ 口調整 体部内面ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N6/0	微砂粒少含	良	1/20	口縁部内面に へう記号 3/Aあり
557	092-04	須恵器 壺	落ちこみ3	F22		体部外面コナデ調整のみ 体部内面半円コナデ 体部外面コナデ調整のみ	(外) 青灰5B6/1 (内) 青灰5B6/1	細砂粒多含	良	1/6	
558	093-01	須恵器 杯 蓋	包, SD4 上層	H21	口径: 13.0 器高: 3.6	天部外面へう切りのみナデ, 天部部 外面部面ロクロへう削り, 天部部内面 一方ナデ 体部・口縁部 ロクロナデ	(外) 灰白5Y7/1 (内) 灰白5Y7/1	微砂粒少含	良	1/4	
559	093-02	須恵器 杯 身	SD4 G21	H21	口径: 10.2 受口径: 12.7 器高: 4.4	底面外面へう切りのみ調整 体部・口縁部 ロクロナデ	(外) 灰黄2.5Y7/2 (内) 灰白5Y7/1	細砂粒多含	良	口縁部: 1/4 底面: 完存	受部に須恵 杯の杯蓋付 着
560	093-03	須恵器 杯 身	SD4 H21	H21	口径: 12.0 受口径: 13.5	底面外面へう切りのみナデ 底面内面半円コナデ 体部・口縁部 ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N6/0	微砂粒多含	良	1/4	
561	093-04	須恵器 短瓶蓋	SD4 H20	H20	口径: 8.8	口縁部・体部 ロクロナデ	(外) 灰N5/0 (内) 灰白N7/0	細砂粒少含	良	1/4	
562	093-05	須恵器 壺	SD4 H20	H20	口径: 15.6	口縁部 ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N8/0	微砂粒少含	良	1/6	
563	093-06	須恵器 壺	SD4 G20~21	G20~21	口径: 12.8	口縁部 ロクロナデ	(外) 灰5Y5/1 (内) 灰5Y5/1	微砂粒少含	良	1/3	
564	093-07	須恵器 台付甕	SD4 H20	H20	直径: 14.5	胴部 ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N6/0	細砂粒多含	良	1/4	
565	093-08	須恵器 短瓶蓋	SD4 G20~21	G20~21	口径: 8.3	口縁部 ロクロナデ, 体部外面(上部)カ ナデ調整, (下部)へう削り 体部内面ロクロナデ	(外) 黄灰10YR6/1 (内) 青灰5P96/1	細砂粒少含	良	1/2	体部外面に 刺突文あり
566	093-09	須恵器 壺	SD4 F20	F20	口径: 11.0	口縁部 ロクロナデ	(外) 灰白10YR8/1 (内) 灰黄緑10YR8/3	細砂粒多含	良	1/4	
567	093-10	須恵器 壺	SH6 717	717	つまみ径: 2.6 つまみ高: 0.9	天部部外面 ロクロへう削り 天部部内面一方ナデ 体部 ロクロナデ	(外) 灰白2.5GY8/1 (内) 灰白N8/0	細砂粒多含	良	1/2	天部部内面に 自然刺突 文
568	094-01	須恵器 高杯 蓋	SK7 717	717	口径: 12.5	口縁部 ロクロナデ, 底面外面ロクロへ う削り, 胴部上の接合部付5ナデ	(外) 灰白5Y7/1 (内) 灰白5Y7/1	細砂粒少含	不良	口縁部: 1/4 底面: 完存	
569	094-02	須恵器 杯 蓋	SK10 A24	A24	口径: 12.5 器高: 3.4	天部部外面へう切りのみ調整 天部部内面半円コナデ 体部・口縁部 ロクロナデ	(外) 灰N5/0 (内) 灰白N7/0	微砂粒多含	良	ほぼ完存	
570	094-03	須恵器 壺	SK16 A32~33	A32~33	口径: 37.6	口縁部 ロクロナデ 蓋部底土による調整	(外) 灰黄2.5Y8/3 (内) 灰白2.5Y8/1	砂粒少含	やや不良	4.5	口縁部外面に 波状文
571	095-01	須恵器 壺	SK16(No14) A32~33	A32~33	口径: 34.4	口縁部 ロクロナデ, 口縁部内面の下位 部分ナデ	(外) 黄灰2.5Y6/1 (内) 灰白N8/0	細砂粒多含	良	1/2	口縁部内面に 波状文
572	095-02	須恵器 杯 蓋	2号瓦 排煙・排水溝 D20	D20	口径: 13.0 器高: 4.8	天部部外面へう切りのみ調整 天部部内面一方ナデ 体部・口縁部 ロクロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白5Y8/1	細砂粒多含	良	ほぼ完存	
573	095-03	須恵器 杯 身	2号瓦 排煙・排水溝 C20	C20	口径: 11.6 器高: 13.8	口縁部・体部 ロクロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰N6/0	微砂粒少含	良	2.3	
574	095-04	須恵器 壺	2号瓦 排煙・排水溝 D30	D30	口径: 10.9 器高: 4.2	天部部外面ロクロへう削り 体部・口縁部 ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N6/0	微砂粒多含	良	天部部: 3/4 天部部: 完存	
575	096-01	須恵器 壺	2号瓦 排煙・排水溝 D20	D20	口径: 26.0	口縁部 ロクロナデ	(外) 灰N5/0 (内) 灰黄緑7.5YR 8.4	砂粒多含	やや不良	1.6	口縁部内面に 刺突文 自然刺突 文
576	097-01	須恵器 杯 蓋	包含層(第1地区) A16	A16	口径: 13.0 器高: 4.2	天部部外面へう切りのみ調整 天部部内面半円コナデ 体部・口縁部 ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N8/0	微砂粒少含	良	1/2	

第23-24表 遺物観察表

No.	発掘 No.	器種	出土位置	量量 (cm)	調整技法の特徴	色調	胎土	焼成	残存	備考
577	097-02	飯器類 杯 身	包含層(第1地区) B15	口径: 10.6 受部径: 13.0 器高: 3.6	底部外面へ切りちりナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部コクロナデ	(外) 黄褐色7.5YR 8/4 (内) 灰白7.5YR8/2	細砂粒多量	良	1/4	底部内面に 磨きぶくれ あり
578	097-03	飯器類 杯 身	包含層(第1地区) B16	口径: 8.8 受部径: 10.8 器高: 2.9	底部内面へ切りちり調整 底部内面一方方向ナデ 体部・口縁部コクロナデ	(外) 黄褐色2.5Y7/2 (内) 灰白2.5Y7/2	砂粒少量	良	ほぼ完存	
579	097-04	飯器類 杯 蓋	包含層(第1地区) B19	口径: 9.8 つまみ径: 1.8 おしり径: 7.7 器高: 3.2 つまみ高: 1.6	天井部中央外側ナデ、天井部側面外面 コクロナデ磨り 体部・口縁部コクロナデ	(外) 灰白7.0/2 7.5Y4/2 (内) 灰白N7/0	細砂粒多量	良	口縁部: 1/4 天井部: 2/3	天井部外面 に自然剥け あり
580	097-05	飯器類 杯 蓋	包含層(第1地区) 716	口径: 9.6 おしり径: 8.6	天井部中央外側ナデ、天井部側面外面 コクロナデ磨り 体部・口縁部コクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 黄灰5P96/1	細砂粒少量	良	ほぼ完存	つまみ頂部 に自然剥け あり
581	097-06	飯器類 杯 蓋	包含層(第1地区) B25	口径: 7.6 器高: 3.5	底部外面ナデカ 体部・口縁部コクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 黄灰5P96/1	細砂粒多量	良	口縁部: 1/2 底部: 完存	底部外面に 砂の溜まり 付着
582	097-07	飯器類 蓋	包含層(第1地区) B17	口径: 9.6	口縁部・体部コクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	微砂粒少量	良	1/6	
583	097-08	飯器類 杯 蓋	包含層(第1地区) B25	口径: 9.8 器高: 5.35	底部外面磨止へ切りちり 底部内面一方方向ナデ 体部・口縁部コクロナデ	(外) 黄褐色5B87/1 (内) 黄褐色5B87/1	細砂粒少量	良	口縁部: 1/4 体部: 1/2 底部: 完存	底部外面に へり起す
584	098-01	飯器類 杯 身	包含層(第1地区) B20	口径: 17.6	口縁部・体部コクロナデ	(外) 灰5Y6/1 (内) 灰白・黄褐色 10YR7/4	細砂粒多量	やや不良	1/8	
585	098-02	飯器類 杯 身	包含層(第1地区) B16	口径: 11.5	口縁部・体部コクロナデ 底部外面コクロナデ磨り 底部内面不定方向ナデ	(外) 黄灰5B6/1 (内) 黄灰5B6/1	砂粒少量	良	1/2	
586	098-03	飯器類 蓋	包含層(第1地区) 716	つまみ径: 3.0 つまみ高: 0.8	天井部中央外側コクロナデ、天井部側 面外面コクロナデ磨り、天井部内面不 定方向ナデ、体部・口縁部コクロナデ	(外) 灰白5Y8/1 (内) 灰白N7/0	微砂粒多量	良	2/3	天井部内面 に磨きぶくれ あり
587	098-04	飯器類 蓋	包含層(第1地区) B17	つまみ径: 3.2 つまみ高: 0.9	天井部外面コクロナデ 天井部内面一方方向ナデ	(外) 灰白・黄褐色 10YR7/2 (内) 灰10YR7/2	細砂粒少量	やや不良	1/4	天井部外面 に自然剥け あり
588	098-05	飯器類 飯器類	包含層(第1地区) 焼土付記念 717	口径: 4.8 器高: 6.8	口縁部・体部コクロナデ 底部外面磨止へ切りちり	(外) 灰白5Y7/1 (内) 灰白5Y7/1	細砂粒少量	良	口縁部: 1/4 体部: 完存 底部: 完存	口縁部に垂 れ込み
589	098-06	飯器類 飯器類	包含層(第1地区) 716	最大径: 4.55	未調整	灰白5Y8/2	細砂粒多量	やや不良	ほぼ完存	
590	098-07	飯器類 飯器類	包含層(第1地区) 716	口径: 8.1	口縁部内面コキ目調整 口縁部内面コクロナデ	(外) 灰白6N6/0 (内) 黄褐色10YR7/6	細砂粒多量	良	ほぼ完存	体部片他に あり
591	098-08	飯器類 蓋	包含層(第1地区) 焼土付記念 717	口径: 16.0	口縁部コクロナデ 体部外側磨止ナデ 体部内面黄褐色タタキ	(外) 黄灰5B5/1 (内) 黄灰5B6/1	微砂粒多量	良	2/3	
592	099-01	土師器 716	包含層(第1地区) 716	口径: 21.0	口縁部コナデ 体部ナデカ	(外) 黄褐色10YR8/6 (内) 黄褐色10YR8/6	微砂粒少量	良	1/8	
593	099-02	土師器 A16	包含層(第1地区) A16	口径: 28.7	口縁部コナデ 体部外面タテ方面へ切り調整のちナデ か 体部内面ナデ	(外) 黄褐色10YR8/3 (内) 黄褐色10YR8/3	微砂粒少量	不良	1/7	
594	100-01	土師器 B25	包含層(第1地区) B25	口径: 39.0	口縁部内面コナデ、口縁部内面コ コナデ磨り調整のちナデ、体部内面コ コナデ磨り調整、体部内面ココ方向 へ切り調整	(外) 黄褐色10YR8/4 (内) 黄褐色5YR7/8	微砂粒少量	不良	1/10	
595	101-01	飯器類 B16	包含層(第1地区) B16		体部外側磨止のための調整不明瞭 体部内面平行タタキ・黄褐色タタキの ちスリツラシカ	(外) 灰白2.5Y8/2 (内) 灰白N7/0	微砂粒多量	不良		体部内面に タテ方工具 痕あり
596	102-03	飯器類 B16	包含層(第1地区) B16		口縁部磨止のための調整不明瞭 体部内面平行タタキ・黄褐色タタキのち スリツラシカ	(外) 灰白2.5Y8/2 (内) 灰白N7/0	微砂粒多量	不良		
597	103-01	飯器類 杯 蓋	包含層(第2地区) D30	口径: 13.0 器高: 4.2	天井部外面へ切りちり調整 天井部内面一方方向ナデ 体部・口縁部コクロナデ	(外) 灰白N6/0 (内) 灰白N6/0	微砂粒多量	良	口縁部: 1/3 天井部: 完存	
598	103-02	飯器類 杯 蓋	包含層(第2地区) D30	口径: 12.4 器高: 3.35	天井部外面へ切りちり調整 天井部内面不定方向ナデ 体部・口縁部コクロナデ	(外) 灰白N6/0 (内) 灰白N6/0	微砂粒多量	良	口縁部: 1/4 体部: 3/4 天井部: 完存	天井部外面 に砂の溜まり 付着
599	103-03	飯器類 杯 蓋	包含層(第2地区) D30	口径: 12.1 器高: 4.1	天井部外面へ切りちり調整 体部・口縁部コクロナデ	(外) 黄褐色10B97/1 (内) 黄褐色10B97/1	細砂粒多量	やや不良	ほぼ完存	
600	103-04	飯器類 杯 蓋	包含層(第2地区) D30	口径: 11.6 器高: 3.85	天井部外面へ切りちり調整 天井部内面不定方向ナデ 体部・口縁部コクロナデ	(外) 黄褐色10G9/1 (内) 黄褐色10G9/1	細砂粒多量	良	ほぼ完存	

第23-25表 遺物観察表

No.	発掘 No.	器種	出土位 置	位置 備考	法量 (cm)	調整技法の特徴	色 調	胎 土	焼 成	残 存	備 考
601	103-05	須恵器 杯 蓋	包含層(第2地区) D30		口径: 11.4 器高: 3.9	天井部外面へ切り取りのち寸法工具による調整のちナデ、天井部内面不定方向ナデ、口縁部口クロナデ	(外) 黄灰10B6G/1 黒灰10B6G/1	砂粒少々	良	ほぼ完全	天井部外面 へ切り取り
602	103-06	須恵器 杯 蓋	包含層(第2地区) D30		口径: 12.3 器高: 4.7	天井部外面へ切り取り調整 体部・口縁部口クロナデ	(外) 灰ナツブ 7.5Y6/2 (内) 灰ナツブ 7.5Y6/2	細砂粒多量	良	ほぼ完全	口縁部に 凹凸あり
603	103-07	須恵器 杯 蓋	包含層(第2地区) D30		口径: 9.7 受部径: 12.0 器高: 3.0	底部外面へ切り取り調整 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部口クロナデ	(外) 緑灰SC6/1 (内) 緑灰SC6/1	細砂粒多量	良	3/4	歪み大
604	103-08	須恵器 杯 蓋	包含層(第2地区) D30		口径: 10.8 受部径: 12.8 器高: 4.0	底部外面へ切り取りナデ 底部内面不定方向ナデ 体部・口縁部口クロナデ	(外) 灰ナツブ 2.50Y6/1 (内) 灰ナツブ 2.60Y6/1	細砂粒多量			口縁部: 1/2 体部: 完全 底部: 完全
605	103-09	須恵器 杯 蓋	包含層(第2地区) D30		口径: 11.1 受部径: 12.9 器高: 3.6	底部外面へ切り取りのちナデ 体部・口縁部口クロナデ	(外) 黄灰10B6G/1 (内) 黒灰15YR7/1	微砂粒多量	やや不良	ほぼ完全	
606	104-01	須恵器 杯 蓋	包含層(第2地区) 5.すくに集塊 G25		口径: 10.9 つまみ径: 1.5 あし径: 1.6 器高: 2.2 つまみ高: 1.4	天井部外面から目調整 体部・口縁部口クロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N6/0	微砂粒多量	やや不良	2/3	天井部外面 に自然釉付
607	104-02	須恵器 杯 蓋	包含層(第2地区) G19+H19		つまみ径: 2.4 つまみ高: 1.0	天井部中央部外面より付けナデ、天井部 底部外面から目調整、天井部内面不定 方向ナデ、体部・口縁部口クロナデ	(外) 灰白2.5Y8/1 (内) 灰白2.5Y8/1	微砂粒少々	不良	2/3	
608	104-03	須恵器 杯 蓋	包含層(第2地区) C25		口径: 12.0 つまみ径: 1.8 あし径: 1.8 器高: 1.6 つまみ高: 1.6 つまみ高: 1.3	天井部中央部外面より付けナデ、天井 部底部外面から目調整、天井部内面不 定方向ナデ、体部・口縁部口クロ ナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N4/0	微砂粒多量	良	1/2	
609	104-04	須恵器 杯 蓋	試掘トレンチ (第2地区) G22		つまみ径: 2.4 つまみ高: 1.0	天井部中央部外面より付けナデ、天井 部底部外面から目調整、天井部内 面不定方向ナデ、体部口クロ	(外) にびい焼7.5YR 6/4 (内) 灰白N7/0	微砂粒少々	良	1/4	外面全体に 自然釉付
610	104-05	須恵器 杯 蓋	包含層(第2地区) H24		つまみ径: 2.4 つまみ高: 0.8	天井部中央部外面ナデ、天井部底部外 面口クロナデ、天井部内面不定方 向ナデ、体部口クロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白N8/0	微砂粒少々	良	1/6	
611	104-06	須恵器 杯 蓋	試掘トレンチ(第2地 区) G18		口径: 11.4 つまみ径: 2.5 つまみ高: 1.0	天井部中央部外面ナデ、天井部底部外 面・体部底部外面口クロナデ、天井 部内面不定方向ナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白N8/0	微砂粒少々	良	つまみ径: 1/2 体部: 1/8	
612	104-07	須恵器 杯 蓋	包含層(第2地区) G23		口径: 10.6 器高: 10.6	体部口クロナデ 底部外面ヘラナリ	(外) 黄灰2.5Y7/3 (内) 灰白2.5Y8/1	細砂粒多量	良	1/3	
613	104-08	須恵器 杯 付筒	包含層(第2地区) F18		口径: 11.5 底径: 10.0 器高: 12.75	胴部口縁部・体部口クロナデ、底部内 面不定方向ナデ、台部口クロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白N8/0	微砂粒少々	やや不良	胴部: 1/2 台部: 2/3	台部に二方 向の内筋透 しあり
614	104-09	須恵器 高 杯	包含層(第2地区) A19		口径: 11.4 底径: 9.8 器高: 12.3	胴部口縁部・体部口クロナデ、底部内 面不定方向ナデ、台部口クロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白N8/0	微砂粒少々	良	胴部: 1/4 台部: 1/3	台部に二方 向の三角透 しあり
615	105-01	須恵器 高 杯	包含層(第2地区) F23		口径: 11.6	口縁部・底部外面口クロナデ 底部内面自然釉付するための調整不明瞭	(外) 灰白N7/0 (内) オリーブ黄5Y 6/3	微砂粒多量	やや不良	1/2	底部外面に 釉の跡ま り付
616	105-02	須恵器 高 杯	包含層(第2地区) E20		口径: 13.8	口縁部・体部口クロナデ 底部外面口クロナデ、底部内面ナ デ	(外) 灰白5Y7/1 (内) 灰白5Y7/1	微砂粒多量	良	1/6	
617	105-03	須恵器 高 杯	包含層(第2地区) G23		口径: 10.4	胴部口クロナデ	(外) 灰白5Y8/1 (内) 灰白5Y8/1	微砂粒少々	良	1/4	胴部に三方 向の内筋透 しあり
618	104-04	須恵器 台付筒	トレンチ(第2地区) I19		底径: 9.5	胴部口クロナデ	(外) 灰白N6/0 (内) 灰白N6/0	微砂粒多量	良	1/2	
619	105-05	須恵器 高 杯	包含層(第2地区) E20			杯部底部内面不定方向ナデ、体部外面 口クロナデ、胴部外面より付けナ デ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	微砂粒多量	良	杯部: 2/3 胴部(基部): 1/3	
620	105-06	須恵器 杯 蓋	試掘トレンチ (第2地区) G19		口径: 11.4 器高: 17.9	杯部底部外面口クロナデ、底部内 面不定方向ナデ、胴部口クロナデ	(外) 灰7.5Y6/1 (内) 灰7.5Y6/1	微砂粒多量	良	杯部: 1/3 胴部: 1/4	
621	105-07	須恵器 高 杯	包含層(第2地区) J24		口径: 12.3	杯部底部外面口クロナデ、胴部体部外 面から目調整、体部内面口クロナ デ	(外) 灰白2.5Y7/1 (内) 灰白2.5Y7/1	微砂粒多量	良	1/2	胴部に二方 向の二筋透 しあり
622	105-08	須恵器 高 杯	包含層(第2地区) F18		口径: 12.6	胴部口クロナデ	(外) 緑灰10YR4/1 (内) 緑灰10YR4/1	微砂粒多量	やや不良	1/4	上段の二方 向の二筋透 せず
623	106-01	須恵器 高 杯	包含層(第2地区) E19			杯部底部外面口クロナデ、底部外面 口クロナデ、胴部外面から目調整	(外) 灰白N6/0 (内) 灰白N6/0	微砂粒少々	良	1/3	上段の二方 向の二筋透 せず
624	106-02	須恵器 高 杯	包含層(第2地区) C19			杯部・胴部口クロナデ	(外) 灰白N6/0 (内) 灰白N6/0	微砂粒多量	良	杯部: 1/6	胴部に二方 向の内筋透 しあり

第23-26表 遺物観察表

No.	発掘 No.	遺構	出土位置 遺構	法量 (cm)	調整技法の特徴	色調	胎土	挽成	残存	備考
625	106-03	灰層跡	トレンチ(第2地区) G19	口径: 9.8	口縁部ロクロナデ	(外) 灰N6/0 (内) 灰N6/0	細砂粒多量	良	1/4	
626	106-04	灰層跡	トレンチ(第2地区) G19	口径: 9.2	口縁部ロクロナデ	(外) 灰白S7/1 (内) 灰白S7/1	細砂粒少量	良	口縁部: 1/12 底面: 完存	胴部内面に 絞リ痕あり
627	106-05	灰層跡	包含層(第2地区) H24	口径: 10.8	口縁部ロクロナデ	(外) 灰白S7/2 (内) 灰白S7/2	微砂粒少量	良	1/5	
628	106-06	灰層跡 包埋型	包含層(第2地区) E15	口径: 9.5 器高: 6.6	口縁部ロクロナデ、底部外面ロクロヘ リ削り、底部内面ロクロナデ	(外) ナリフ灰SCY 4/1 (内) 灰白N7/0	細砂粒少量	やや不良	口縁部: 1/10 胴部: 1/2 底面: 1/2	底部外面に 自然粘付着
629	106-07	灰層跡 包埋型	包含層(上層(赤褐色) 第2地区) D24	口径: 9.6	口縁部ロクロナデ、底部外面ロクロヘ リ削り、底部内面ロクロナデ	(外) 焼灰N3/0 (内) 灰白N7/0	微砂粒少量	良	口縁部: 4/5	口縁部は 黒い焼きの ためかたば み
630	107-01	灰層跡 溝底か	包含層(第2地区) H24	口径: 9.2	口縁部・底部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	微砂粒少量	良	口縁部: 1/2 底面: 完存	口縁部内面 にヘリ起 「N」あり
631	107-02	灰層跡 鉢か	包含層(第2地区) F18		口縁部ロクロナデ	(外) 灰白2.5GY8/1 (内) 灰白2.5GY8/1	微砂粒多量	不良		口縁部内面 にヘリ起 「N」あり
632	107-03	灰層跡 鉢	包含層(第2地区) H24	口径: 20.9	口縁部ロクロナデ、底部外面かき目調 彫・底部内面不定方向ナデ 削り、底部内面ロクロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白N7/0	微砂粒多量	良	1/6	
633	107-04	灰層跡 窪鉢	試掘トレンチ G19		体部 底部外面ロクロヘリ削り、内面不定方 向ナデ	(外) 灰7.5Y5/1 (内) 灰7.5Y5/1	細砂粒多量	良	胴部: 1/4 底面: 1/2	
634	107-05	灰層跡 共埋型	新橋運動公園跡部中 美土下30cm(第2地区) C13		頸部ロクロナデ 底部外面かき目ナデ、底部内面かき目 彫・体部ロクロナデ	(外) 灰白7.5Y7/1 (内) 灰白N7/0	微砂粒多量	やや不良	胴部: 完存 底面: 1/4	胴部外面に 自然粘付着
635	108-01	灰層跡 灰埋型	試掘トレンチ (第2地区) E21	口径: 14.4	口縁部・体部(上層)ロクロナデ 体部(下層)・底部外面ロクロヘリ削り 体部(下層)・底部内面ロクロナデ	(外) 焼灰S7/4 (内) 灰白N8/0	微砂粒多量	良	口縁部: 1/10 胴部: 1/4 底面: 1/4	口縁部内面 に黒い付着
636	108-02	灰層跡 鉢か	試掘トレンチ (第2地区) E21	口径: 32.0	口縁部ロクロナデ 体部外面ナデ、体部内面調整不明瞭	(外) 灰白2.5Y8/2 (内) 灰白2.5Y8/2	微砂粒少量	不良	1/5	全体的に薄 肉厚しい
637	109-01	灰層跡 杯蓋	第2段ナカス第一層 (第3地区) B29	口径: 9.3 器高: 3.85	天井部外面へリ切り不調整 天井部内面・体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	細砂粒少量	良	口縁部: 1/10 体部: 1/2 天井部: 1/2	
638	109-02	灰層跡 杯蓋	包含層(第3地区) C27	口径: 10.0 器高: 3.6	天井部外面へリ切り不調整 天井部内面不定方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白2.5Y7/1 (内) 灰白2.5Y7/1	微砂粒多量	良	口縁部: 2/3 体部: 完存 天井部: 完存	
639	109-03	灰層跡 杯蓋	包含層(第3地区) B28	口径: 8.5 受部径: 10.3 器高: 2.8	底部外面へリ切り不調整 底部内面一方方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白2.5Y7/1 (内) 灰白2.5Y7/1	微砂粒多量	良	口縁部: 1/6 受部: 1/6 底面: 3/4	底部外面に 自然粘付着 あり
640	109-04	灰層跡 杯蓋	テコ堀土(第3地区) E30	口径: 8.8 受部径: 11.1 器高: 3.0	底部外面へリ切り不調整 底部内面・体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白2.5Y7/1 (内) 灰N6/0	微砂粒少量	良	口縁部: 完存 受部: 3/4 底面: 完存	
641	109-05	灰層跡 杯蓋	包含層(第3地区) C28	口径: 10.6 かぶり径: 7.6 器高: 8.28 器高: 2.15	天井部外面へリ切り不調整 天井部内面一方方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白2.5Y8/1 (内) 灰白N7/0	細砂粒少量	良	1/2	
642	109-06	灰層跡 杯蓋	包含層(第3地区) C28	口径: 10.5 かぶり径: 8.2 器高: 2.15	天井部外面へリ切り不調整 天井部内面・体部・口縁部ロクロナデ	(外) 焼灰S8/7 (内) 焼灰S8/7	微砂粒少量	良	2/3	底部外面・体 部自然粘付着
643	109-07	灰層跡 杯蓋	第2段ナカス第一層 埋藏土(第3地区) B30	口径: 10.3 つとみ径: 7.5 かぶり径: 8.2 器高: 3.1 つとみ高: 0.35	天井部外面ロクロヘリ削り 天井部内面一方方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰2.5Y6/1 (内) 灰白N7/0	細砂粒多量	良	1/4	
644	109-08	灰層跡 杯蓋	V字台埋土 埋藏土(第3地区) F22	口径: 10.0 つとみ径: 1.6 かぶり径: 7.6 器高: 2.6 つとみ高: 0.8	天井部外面ロクロヘリ削り 天井部内面・体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白N8/0 (内) 灰白N8/0	細砂粒多量	良	口縁部: 1/2 胴部: 1/2 天井部: 完存	
645	109-09	灰層跡 杯蓋	V字台埋土 埋藏土(第3地区) F22	口径: 10.0 つとみ径: 1.8 かぶり径: 8.2 器高: 2.5 つとみ高: 0.9	天井部外面ロクロヘリ削り 天井部内面一方方向ナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白S8/2 (内) 灰白2.5Y7/1	微砂粒多量	やや不良	1/4	挽成不良の ため天井部 内面にロビ 割れ
646	109-10	灰層跡 杯蓋	第2段ナカス第一層 埋藏土(第3地区) C31	口径: 10.0 つとみ径: 1.8 かぶり径: 8.2 器高: 2.3 つとみ高: 0.9	天井部・底部外面ロクロヘリ削り 天井部内面不定方向ナデ 体部内面・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白7.5Y7/1 (内) 灰白7.5Y7/1	微砂粒多量	良	口縁部: 1/3 胴部: 1/3 天井部: 3/4	底部外面に 自然粘付着
647	109-11	灰層跡 杯蓋	第2段ナカス第一層 (第3地区) B29	口径: 8.6 つとみ径: 1.6 かぶり径: 14.5 器高: 2.3 つとみ高: 0.8	天井部外面ロクロヘリ削り 天井部内面・体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰白2.5Y7/2 (内) 焼灰7.5Y8/1	微砂粒多量	良	1/4	底部外面に 自然粘付着
648	109-12	灰層跡 杯蓋	包含層 (第3地区) B27	口径: 8.4 器高: 3.0	底部外面へリ切り不調整 底部内面・体部・口縁部ロクロナデ	(外) 灰S5/1 (内) 灰S5/1	微砂粒多量	良	口縁部: 1/3 体部: 1/3 底面: 1/2	底部内面に ヘリ起 「—」か

第23-27表 遺物観察表

No.	発掘 層	遺構 種別	出土位 置	位置 座標	法量 (cm)	調整技法の特徴	色 調	胎土	焼成	残 存	備考
649	110-01	須磨器 高 杯	ナミ壇上 (第3地区) E58		口径: 8.8 線径: 7.4 器高: 8.2	杯底・脚部ロクロナデ	(外) 灰白N6/0 (内) 灰白N7/0	敷砂粒多量	良	杯底: 1/2 脚部: 完全 残存: 1/3	全体的に自然焼付着
650	110-02	須磨器 高 杯	包含層 (第3地区) C28		口径: 9.1	杯底口縁部・体部ロクロナデ 杯底底面外面ナデ、底面内面ロクロナデ 脚部内外面ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	敷砂粒多量	良	杯底口縁部: 1/4 杯底: 1/2 残存: 完全	杯底の一部は自然焼付着
651	110-03	須磨器 高 杯	第2段ナラス第1層 須磨器土(第3地区) E30		胴径: 7.35	杯底口縁部外面ヘラケズリ、内面不定方向のナデ 脚部内外面ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	敷砂粒少量	良	杯底底面: 1/2残 脚部完全	杯底の一部は自然焼あり
652	110-04	須磨器 高 杯	トレンチ(第3地区) E27		胴径: 7.6	杯底口縁部外面ヘラケズリ、内面不定方向のナデ 脚部内外面ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	敷砂粒少量	良	杯底底面: 2/3残 脚部: 3/4残	
653	110-05	須磨器 高 杯	第2段ナラス第1層 (第3地区) C31		口径: 11.4	杯底口縁部外面ロクロナデ、内面一方向のナデ 体部・口縁部ロクロナデ	(外) オリーブ灰 2.5GY6/1 (内) 黒灰100Y6/1	敷砂粒少量	良	杯底: 1/4残	
654	110-06	須磨器 高 杯	包含層(第3地区)		胴径: 10.4	脚部内外面ロクロナデ	(外) 青灰E5M/1 (内) 青灰S5M/1	敷砂粒少量	良	脚部: 2/3残	ナイフ加工による凹跡(裏面側)
655	110-07	須磨器 高 杯	V字台跡土 須磨器土(第3地区) F32		胴径: 8.2	脚部内外面ロクロナデ	(外) 灰白N7/0 (内) 灰白N7/0	敷砂粒少量	良	脚部: 器底のみは残存	
656	110-08	須磨器 浅 碗	ナミ底部(第3地区) E27		口径: 7.6	口縁部内外面ロクロナデ	(外) 黒灰10YR5/1 (内) 赤灰2.5YR5/1	敷砂粒多量	良	口縁部: 1/4残 器底: はげ完全	
657	110-09	須磨器 平 碗	託置トレンチ (第3地区) E28		口径: 6.9	口縁部内外面ロクロナデ 体部上面外面不定方向のナデ 体部上面内面ロクロナデ	(外) 青灰S5M/1 (内) 青灰S5M/1	敷砂粒多量	良	口縁部: 器底の一部のみ残 こく一部の土残	口縁部内外面に自然焼付着
658	111-01	須磨器 平 碗	託置トレンチ (第3地区) E29		口径: 7.0	口縁部内外面ロクロナデ	(外) 灰7.5Y6/1 (内) 灰7.5Y6/1	敷砂粒多量 細砂粒少量	良	口縁部: はげ完全	口縁部内面に自然焼付着
659	111-02	須磨器 平 碗	第2段ナラス第1層 須磨器土(第3地区) D32		口径: 9.4	口縁部内外面ロクロナデ	(外) 灰白S7/1 (内) 灰白2.5YR/2	敷砂粒多量	良	口縁部: 器底の一部のみ残 器底: はげ完全	口縁部内面に自然焼付着
660	111-03	須磨器 高 杯	須磨器跡土 (第3地区) E33		胴径: 10.35	杯底口縁部内面不定方向のナデ 脚部内外面ロクロナデ	(外) 灰白S9/1 (内) 灰白N7/0	敷砂粒少量	良	脚部: 1/2残	3方スリシ 製器による凹跡に 自然焼付着
661	111-04	須磨器 短頸壺	V字台跡土 (第3地区) G31		口径: 6.4	口縁部・体部ロクロナデ	(外) 灰7.5Y6/1 (内) 灰7.5Y6/1	敷砂粒多量 細砂粒少量	良	口縁部: 1/6残 体部: 1/3残	
662	111-05	須磨器 短頸壺	第2段ナラス第1層 須磨器土(第3地区) C31		口径: 6.2	口縁部・体部ロクロナデ	(外) 灰白7.5YR/2 (内) 黄灰2.5Y6/1	敷砂粒少量	良	口縁部: こく一部の土残 体部上段: 1/4残	
663	111-06	須磨器 短頸壺	第2段ナラス第1層 須磨器土(第3地区) E30		口径: 9.6	口縁部・体部ロクロナデ	(外) 灰白2.5Y7/1 (内) 灰白2.5Y7/1	敷砂粒少量	良	口縁部: こく一部の土残	
664	111-07	須磨器 短頸壺	包含層(第3地区) F24		体部最大径: 17.5	体部外面上位ロクロナデ、下位ヘラケズリ 体部内面ロクロナデ	(外) 灰白7.5Y7/1 (内) 灰白7.5Y7/1	敷砂粒多量 細砂粒少量	良	体部: 1/4残	焼きがくれあり
665	111-08	須磨器 短頸壺	V字台跡土 灰原層跡(第3地区) E33			外面ナデ・目 内面青灰帯タタキ	明青灰S5B/1	敷砂粒少量 砂粒少量	良		
666	112-01	須磨器 平 碗	包含層(第3地区) 砂褐色土層 F23		口径: 5.3 器高: 12.4	口縁部ロクロナデ 体部上面外面ナデ目調整 体部下面ロクロヘラケズリ後ナデ	(外) N6M/1 (内) N6N/1	細砂粒多量	良	完全	口縁部内面に ヘラ 記号 「N」あり
667	112-02	軒平瓦	包含層(第3地区) B16			均質: 存在後 凸凹・編み痕	(外) 赤黄S9/3 (内) 灰白S9/6/1	敷砂粒少量	不良		

第23-28表 遺物観察表



調査後全景（垂直撮影）

P.L. 2



調査前近景 (南から1・2号窯付近)



調査前全景 (北東から)



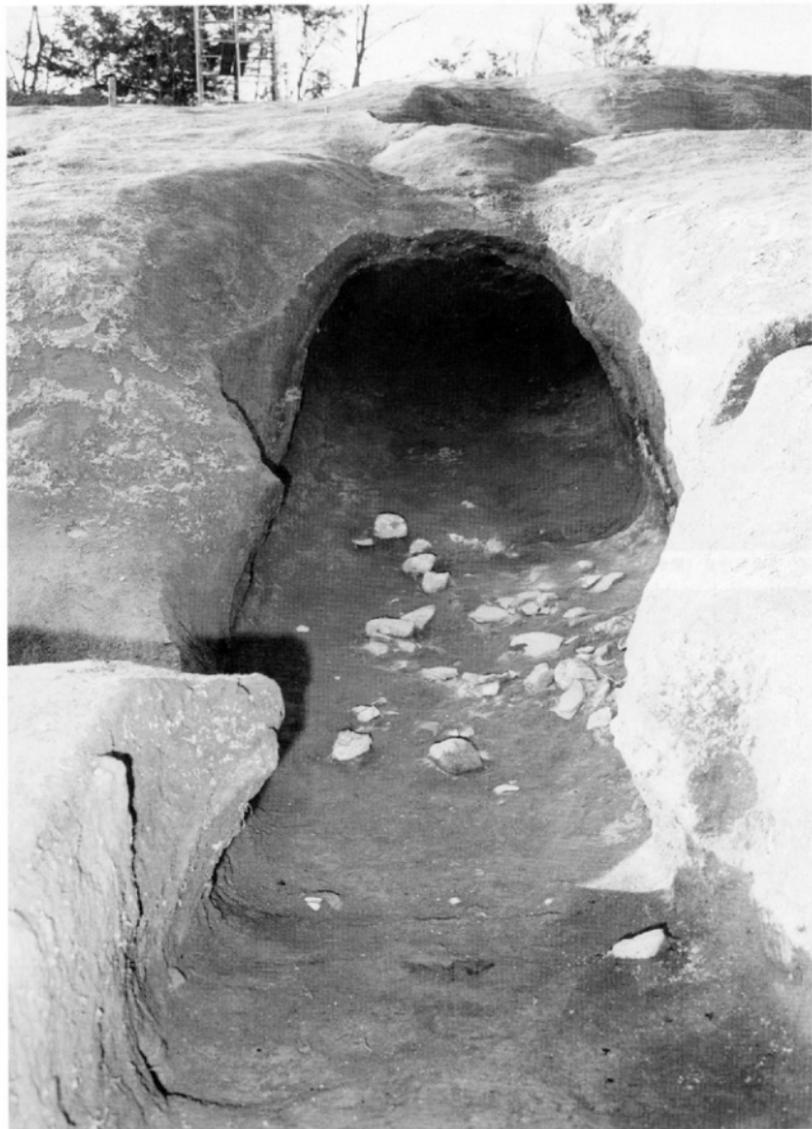
3～5号窟調査前全景（南東から）



調査後遠景（南上空から）



1・2号窟全景（東から）



1号窟（東から）



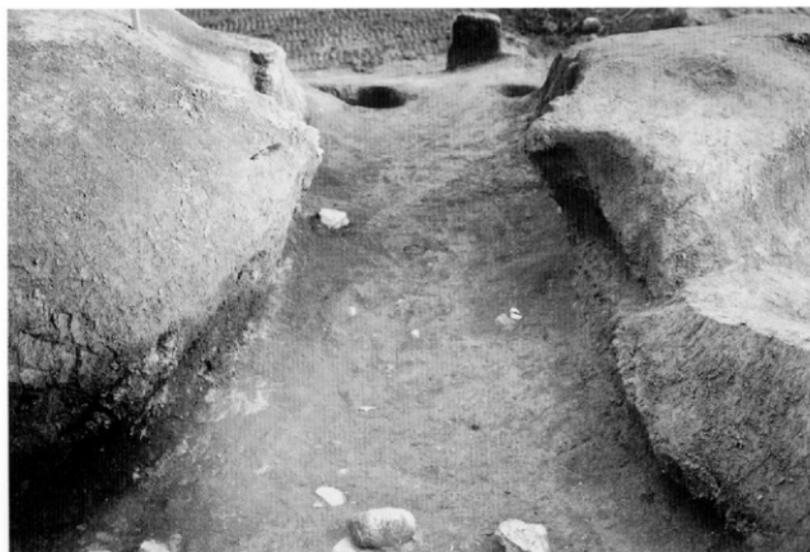
1・2号窟全景（東から）



1号窟焼成室遺物出土状況（東から）



1号窯焼成部堆積土層断面（東から）



1号窯焚口（西から）



1号窯煙道付近と溝（西から）



1号窯燃焼部北側壁のピット



1号窯焼成部断面（東から）



1号窯断ち割り状況（東から）



1号窯焼成部天井断面（南東から）



1号窯焼成部床面～北側壁断面（南東から）



2号窟全景（東から）



2号窟焚口部埋積土断面（東から）



2号窯焼成部遺物出土状況（東から）



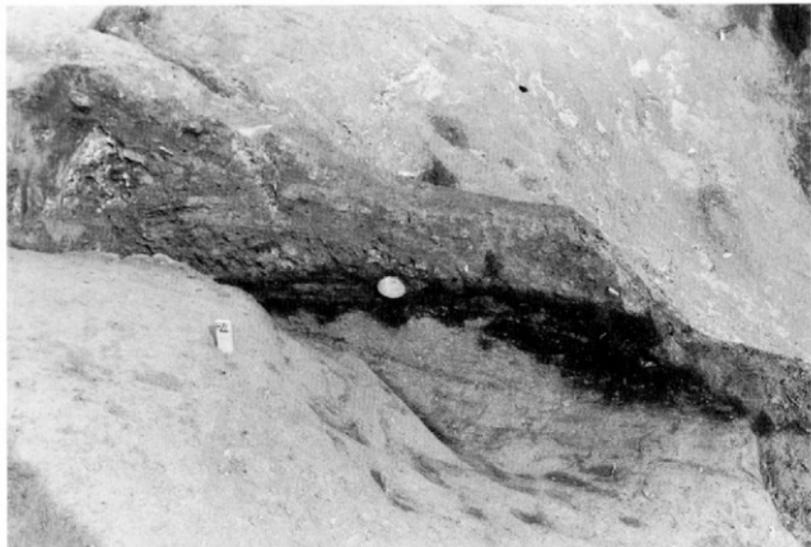
2号窟 (西から)



2号窯焼成部上部遺物 (253) 出土状況 (西から)



2号窯焼成部遺物出土状況 (西南から)



2号窯灰原断面（南から）



2号窯焚口部（東から）



2号窯焼成部側壁のスサ入り粘土貼り付け状況（指の跡も残る）



2号窟と溝（西から）



同上断面（北東から）



2号窯煙道付近の溝と断面（南から）



2号窯燃焼部断面（東から）



1・2号窯灰原調査風景（南西から）



2号窯焚口部北側壁断面（南から）



1号窯灰原調査風景



調査後全景（北東から）



3号窯灰原検出状況（南東から）



第2次調査区（3・4・5号窯）全景（北から）



3号窯前底部（北東から）



作業風景（北東から）



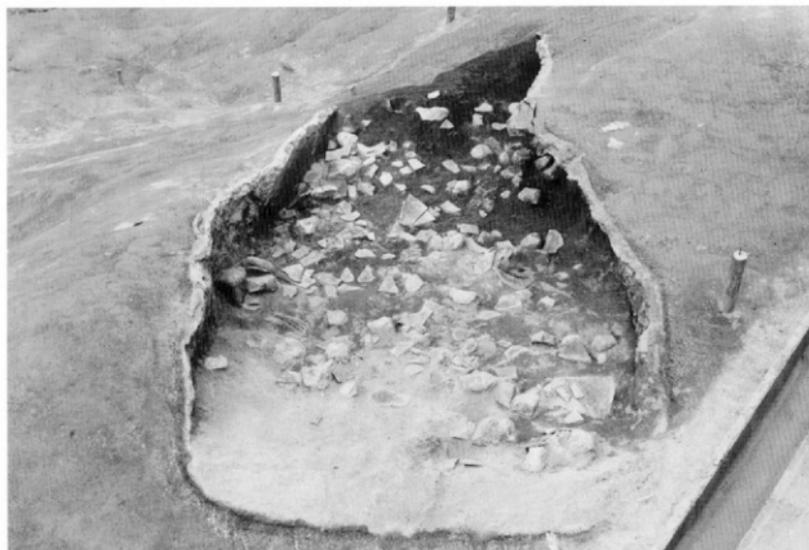
4号窟全景 (南東から)



作業風景



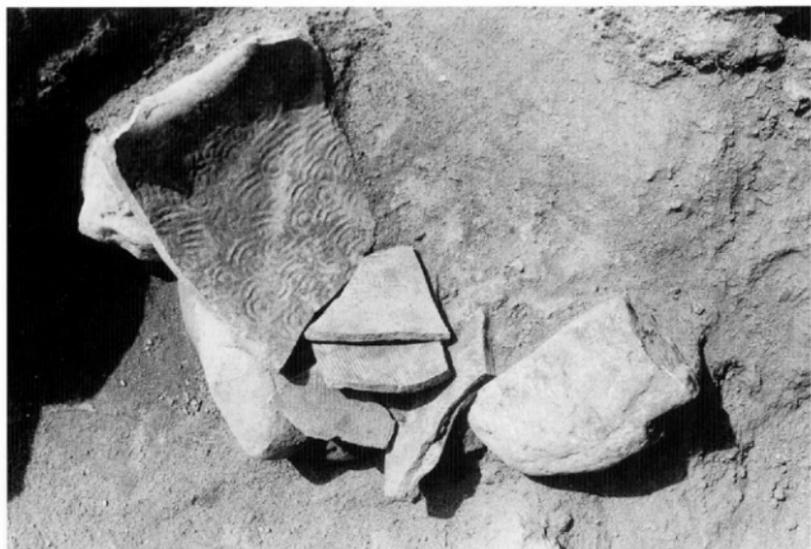
5号窟全景（東から）



5号窟全景（西から）



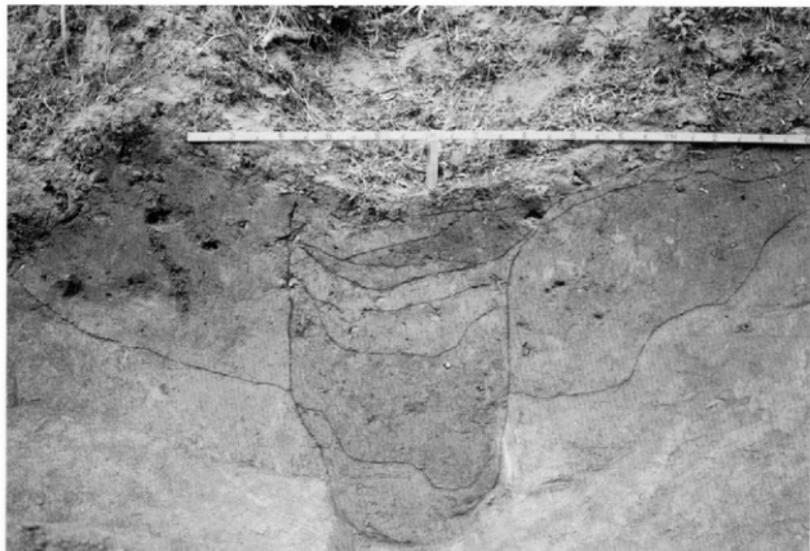
5号窯焼成室 焼台と断面（北東から）



焼台



S K16 (北から)



S D4 断面 (試掘時のトレンチ断面, 東から)



SH 6. SK 7 (南から)



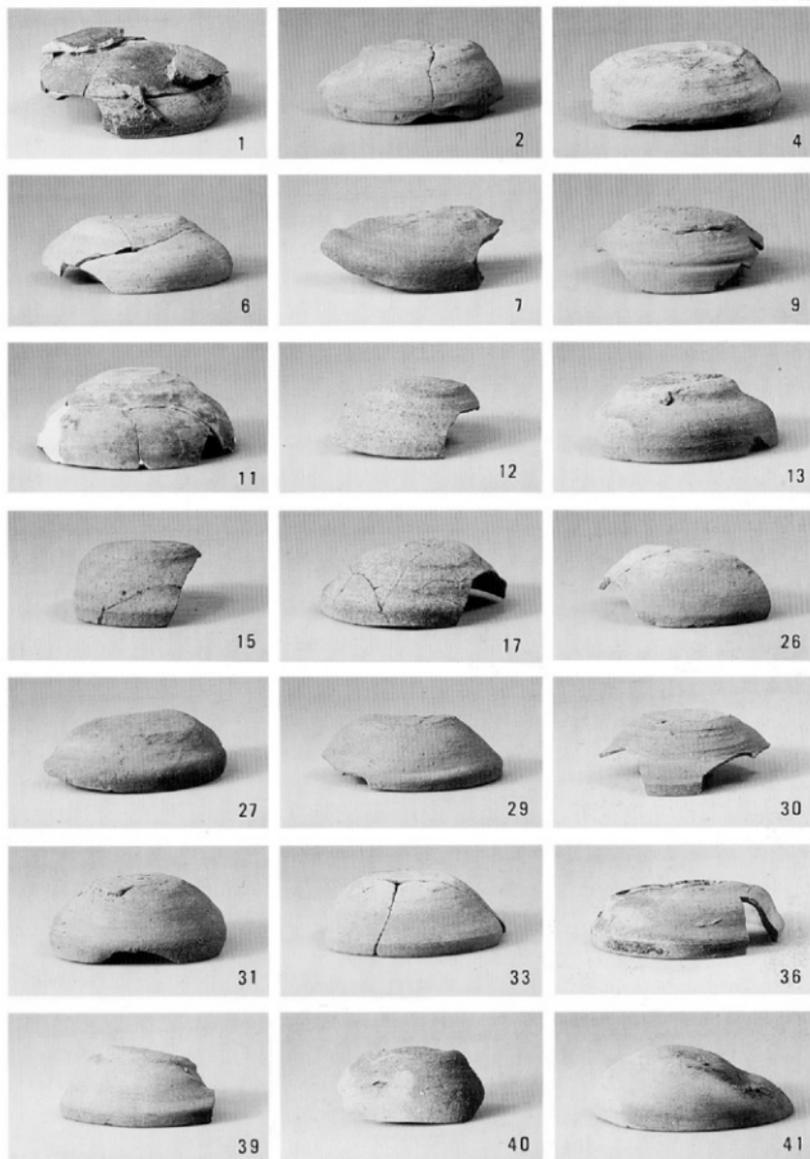
SK 7 (南から)



1・2号竈間地山直上の遺物出土状況

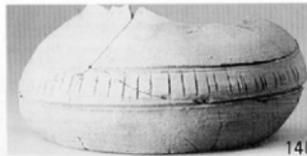
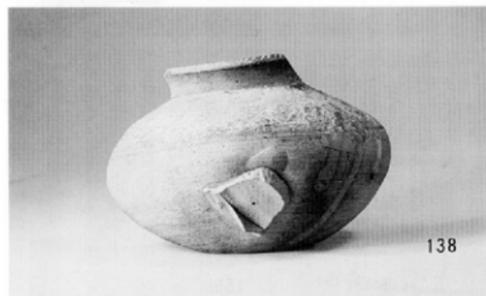
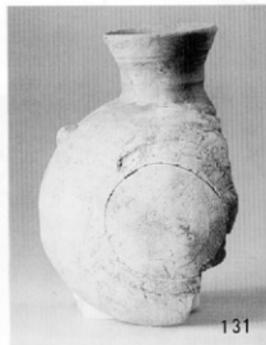


熱残留磁気測定サンプリング作業（5号竈）

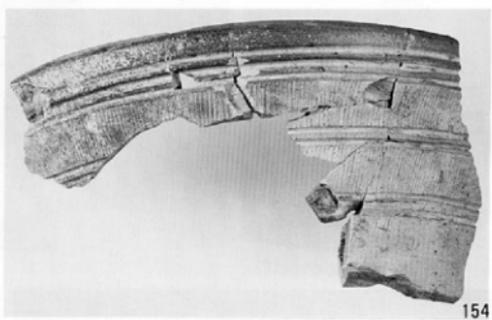
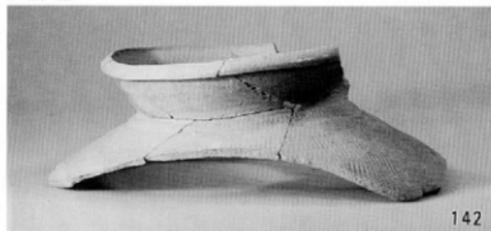


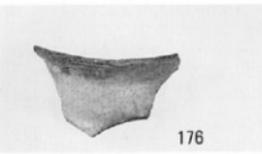
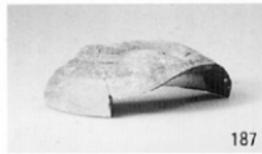
出土遺物



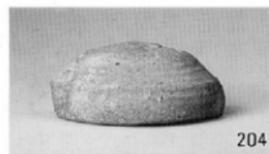
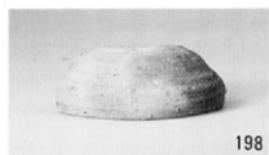
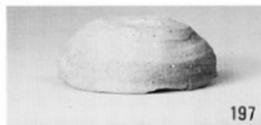


出土遺物

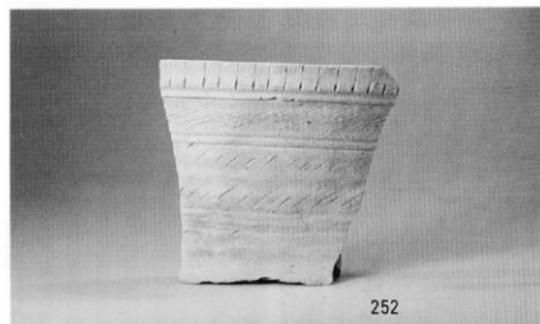
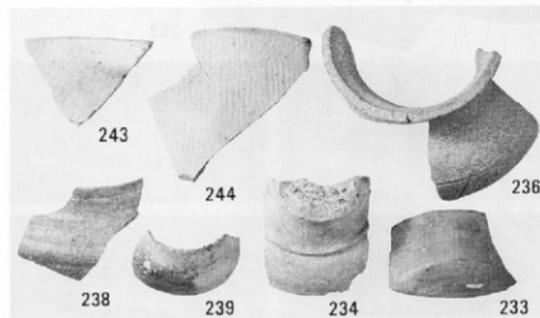
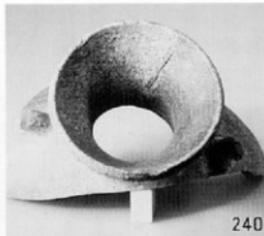
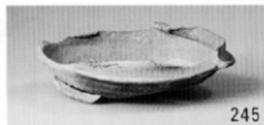
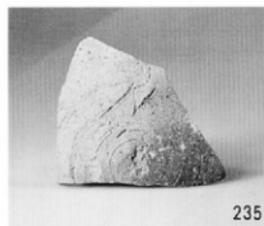




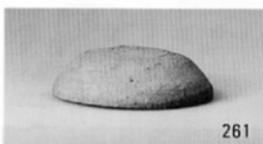
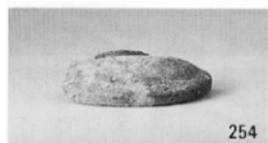
出土遺物



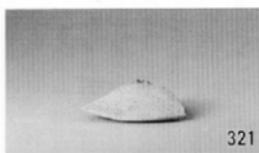
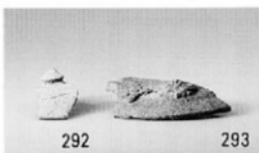
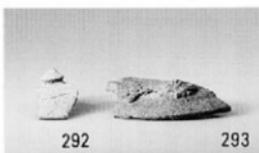
出土遺物



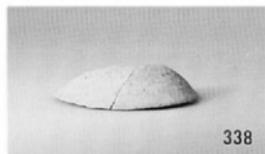
出土遺物



出土遺物



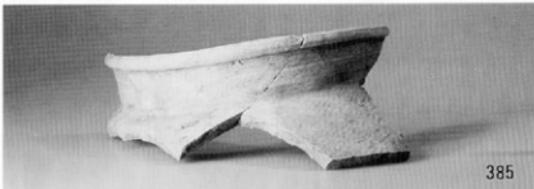
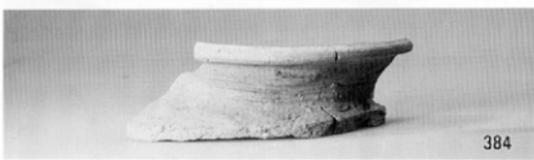
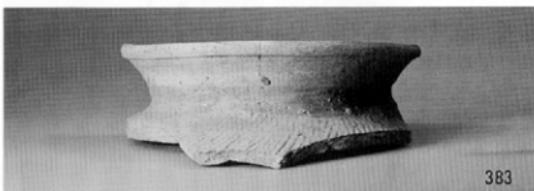
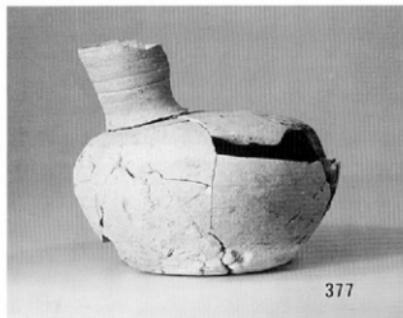
出土遺物



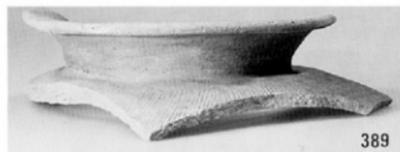
出土遺物



出土遺物



出土遺物



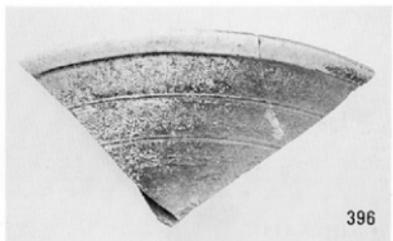
389



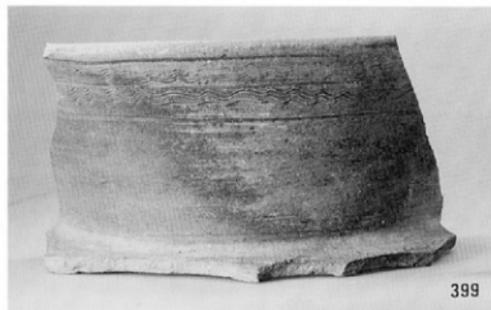
390



394



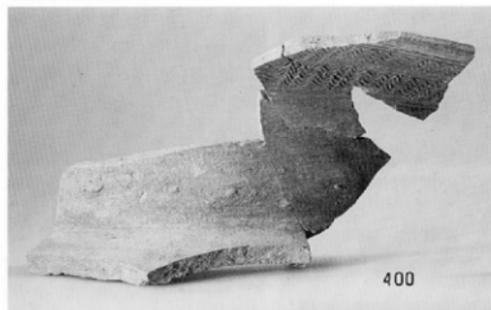
396



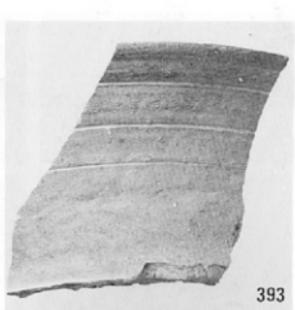
399



391

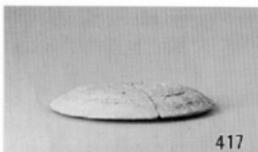
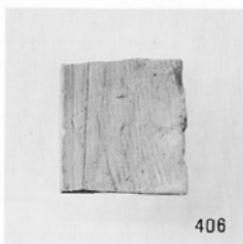
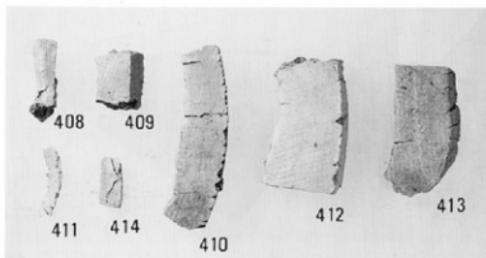
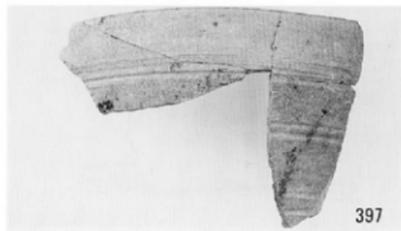


400

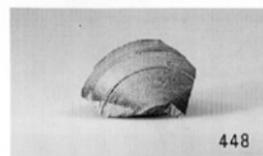


393

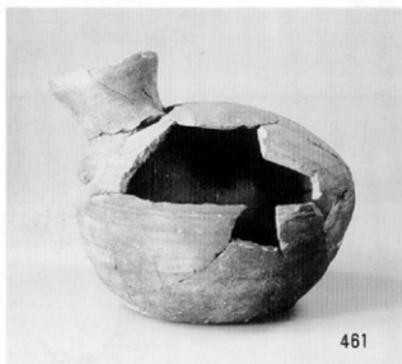
出土遺物



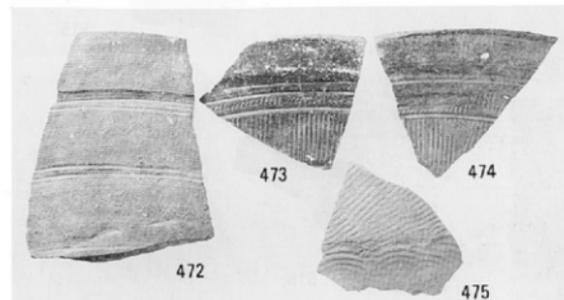
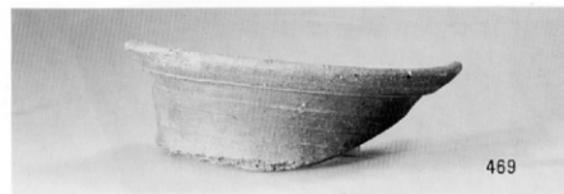
出土遺物



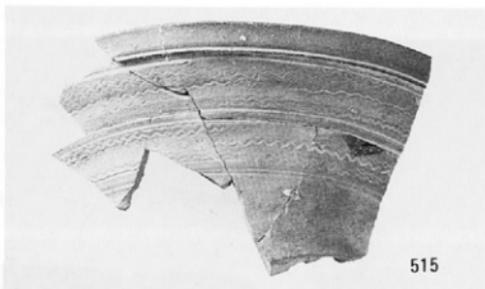
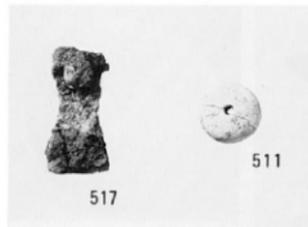
出土遺物



出土遺物



出土遺物



出土遺物



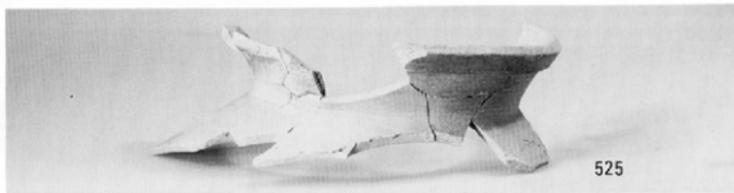
519



521



523



525

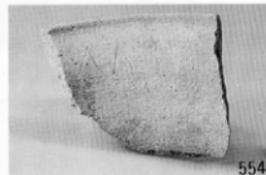
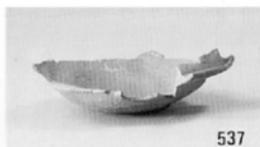


527



526

出土遺物



出土遺物



555



559



567



568



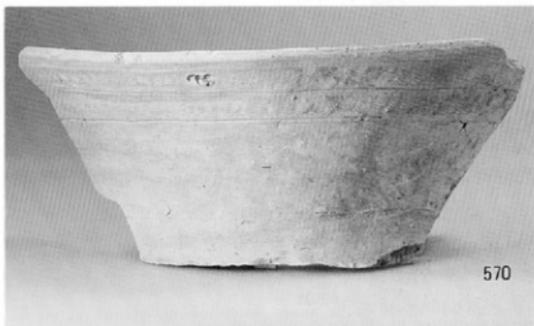
569



572



574



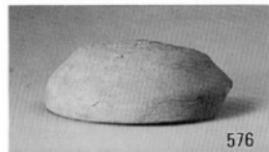
570



575



571



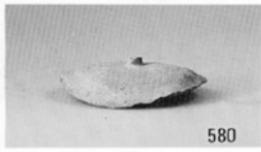
576



578

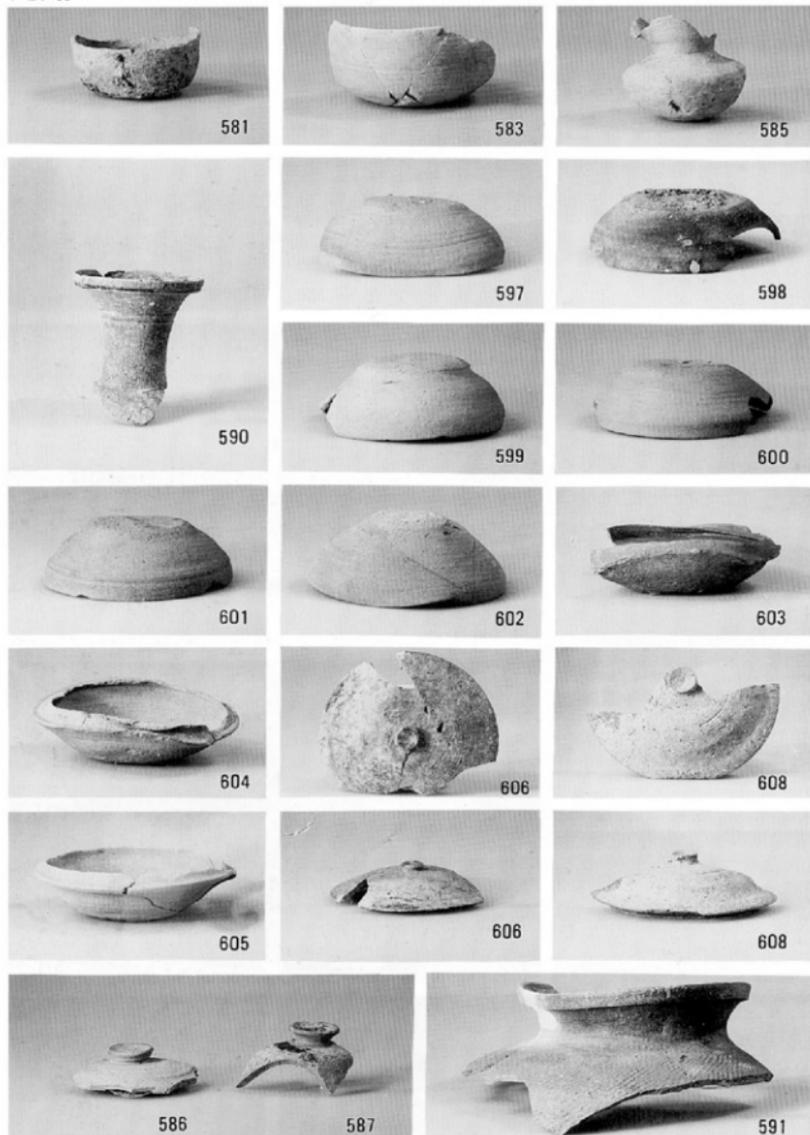


579

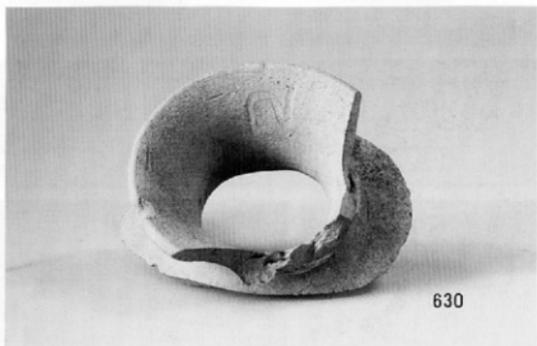
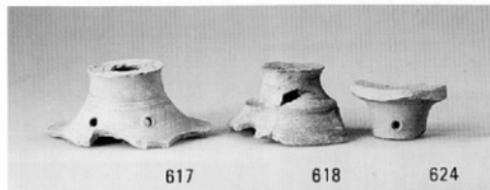
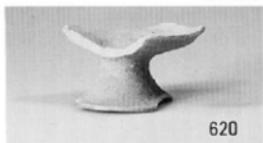


580

出土遺物



出土遺物



出土遺物



631



631



635



633



633



636



638



639



640



641



642



647



643



644



645



646



649



651

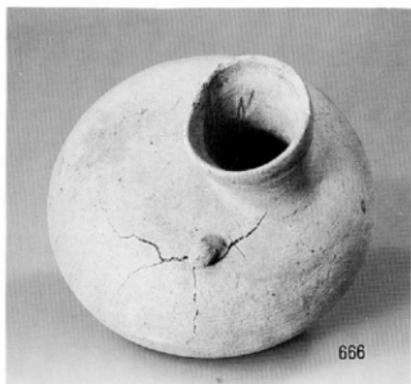


652



654

出土遺物



出土遺物



## Ⅳ. 大目山古墳群

### 1. 周辺の古墳

柳田川と佐奈川に挟まれ、国道42号線とJR線の通る谷部で南端を区切る丘陵地は、幅の狭い尾根と谷がアメーバ状に入り組んでいる。尾根頂部は標高50～60mほどで、周囲の水田との比高が約30mである。柳田川と佐奈川が形成する肥沃な低地からはよく目立つ丘陵地といえる。

この丘陵地、特に柳田川を見下ろす側には、古墳が点々と造営されている。まず、丘陵地最北端部に黒田山古墳群が所在する。8基の古墳があったともされるが、蜜柑園として開墾されたときいくつか消滅したようである。現在は、直径20m前後の円墳4基をはじめ、推定墳も含めて15基が確認できる。

黒田山の南、宮ノ谷池を挟んだ丘陵上には、宮ノ谷古墳群が知られる。遺跡台帳には6基の円墳の存在が記されているが、地図にははっきりと落とされていないため所在地については不明確である。実際の踏査では、直下に柳田川右岸の自然堤防を臨む丘陵西端部の頂に所在する円墳と、丘陵西裾部に所在する半壊した小円墳らしき高まりが見受けられた。なお、前者の周囲には、50cmほどの段をもったテラス状の地形が3カ所ほど見られ、それらが古墳である可能性も否定できない。

宮ノ谷の丘陵と細い尾根で南につながる字名「石山(いしやま)」の丘陵は現在かなりの範囲蜜柑園となっているが、そこに直径10～18mの円墳が6基かたまっている。開墾時にも多量の土器が出土したことからあるから、もともとは10基近くの古墳の存在が想定される。

石山の尾根の南は、工業団地と住宅団地の造成のため、現在はももとの丘陵地形は見られる影もないが、その工事に先立ち1991年から2年間、多気町教育委員会により発掘調査がなされている。その成果によると、6世紀前半から7世紀前半ごろまでの古墳が17基確認されている。

石塚谷古墳は標高63mの丘陵頂部にあり、柳田川方向(西側)に対しても佐奈川方向(東側)に対しても眺望のきく場所につくられた古墳である。直径30mのやや楕円に近い墳丘ということであるが、その規模は、後期の古墳としては多気町内でも最大級である。棺跡が3基検出されているが、そのうちの中心的な棺からは、多数の須恵器に加え、雲珠などの馬具、銀象眼を施した大刀などが出土している。この丘陵地で調査された古墳のなかでは、規模でも副葬品の質の点でもトップの古墳といえよう。

この石塚谷古墳の西側の尾根上に大目山古墳群が存在し、さらに幅50mほどの谷をへだてて南～西側の丘陵には、明気古墳群、立岡山古墳群の形成を見る。明気古墳群は大きくA群とB群に分けられるということである。A群は、丘陵頂部に6世紀後半代のやや規模の大きな古墳を築き、同じ尾根もしくはすぐ隣に6世紀末から7世紀初ぐらいの小円墳を配するという在り方をする。明気1号墳の裾にある6号墳や、8号墳の所在する尾根の下方にある7号墳などは、すくなくとも調査時点で墳丘といえるような盛土を持たないものであった。B群は、一辺10mほどの方墳が4基集中しているものであるが、そのうちの3基は表土除去までその存在が全くわからなかったという外観で、また、副葬品も検出されていない。なお、このB群のすぐ西側は多気中学校の運動場となっているが、その造成時に出土したとされる須恵器が多気町教育委員会に保管されている。おそらく古墳が何基か存在していたのであろう。さらに興味深いことには、保管されている須恵器の中に、明気窯跡群の出土遺物に多数見られる「N」字のヘラ記号をつけた器体部が存在するのである。同様の土器は、後述するように、今回の大目山古墳群の調査時にも発見されている。

立岡山古墳群は、明気古墳群(A群)の西側の独

立した丘陵に造営されている。6号墳とされている円墳は、6世紀前半に比定される須恵器有蓋高杯や鉄鉋などが出土している。この丘陵地では一番古い古墳となる。

佐奈川に面する丘陵地の東側では、2基よりなる倉懸古墳群が存在する。水田との比高が10mにも満たない低い場所に築かれた古墳であるが、2号墳は径20mの円墳で、頂部表土直下で木棺直葬の埋葬施設が検出されている。

さて、以上のような古墳群に囲まれるようにして所在する大日山古墳群であるが、榊田川方向に突き出る細い尾根がその造営地となる。尾根最頂部の東側は、工業団地の造成に関わって削平されたが、その際木棺直葬の古墳主体部がみつかり、須恵器や鉄刀などの副葬品が多気町教育委員会に保管された。主体部の位置は、頂部から南に少し下った所で、盛土などの高まりが全く見られなかった場所である。この主体部が大日山1号墳である。出土した須恵器は、陶器編年Ⅱ-4段階<sup>⑤</sup>くらいに相当する。

大日山1号墳から西へ160mほどの尾根先端部に、今回調査した2~4号墳が所在する。頂部の標高は53mで、北方の水田との比高は30mほどである。北側斜面は45%ほどの勾配だが、南側斜面は垂直に近い感がある。また、西から北方向にかけては榊田川両

岸の低位段丘や氾濫平野がよく眺められるが、南側は明気古墳群のある尾根が見えるに過ぎない。今回の調査古墳は、榊田川の方を意識して作られたものということができよう。

大日山の尾根端部は荒蕪地区の土取り場となっており、つい最近まで地元の人達が土を採取していた。「相可町史」には、その場所にかつて古墳があり、頭椎大刀鉋等が出土したという内容の記述がみられるが、残念ながら現在では、そのような遺物の所在等については不明である。

〔註〕

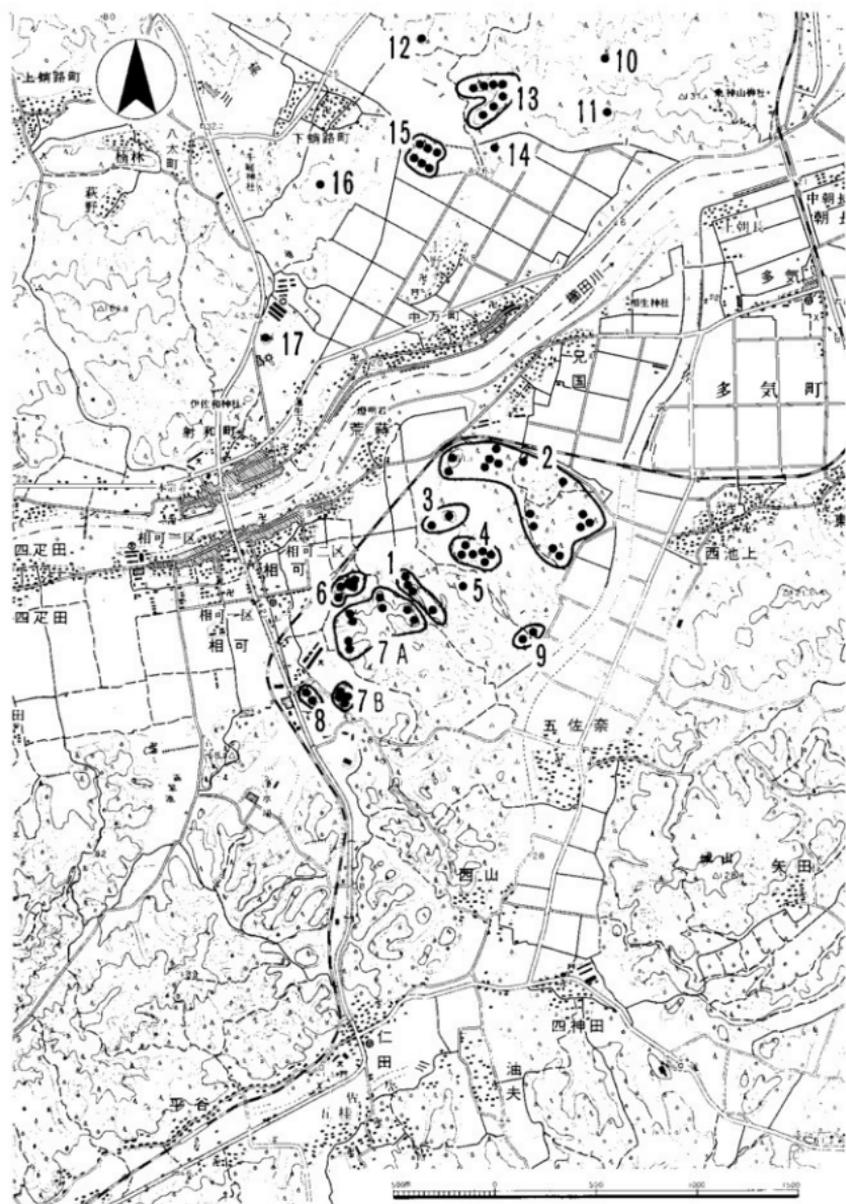
- ① 遺跡台帳（昭和37年記入）による。
- ② 6基のうちマウンドのはっきりしたものは4基である。『多気町史 通史』（多気町教育委員会 1992）には、この石山の尾根にある古墳4基についても、宮ノ谷古墳群としてくくっている。遺跡台帳にある宮ノ谷古墳群も、もしかするとこの尾根までその範囲に入れているのかもしれない。しかし、字名の違い、立地尾根の違いなどから、新たに「石山古墳群」を設定する方が望ましいと考えるので、脱落を分けて記述した。
- ③ 土地所有者（西村隆志氏）の届による。
- ④ 以下、工業団地・住宅団地造成にかかわり発掘調査された「石塚谷古墳」「明気古墳群」「立岡山古墳群」「倉懸古墳群」については、『三重県埋蔵文化財センター年報3』1992、『河 4』1993（三重県埋蔵文化財センター発行）と多気町教育委員会発行の現地説明会資料「多気町 遺跡ニュース」1992による。
- ⑤ 中村浩「和泉陶器類出土物の時期編年」『陶器Ⅲ』大阪府教育委員会 1978
- ⑥ 大西善一「相可町史」相可町教育委員会 1954

番号	名 称	様 相
1	大日山古墳群	1~4号。1号は木棺直葬の埋葬施設が発見され、鉄刀、須恵器が出土。
2	黒田山古墳群	1~15号。密植造成による削平あり。径20m前後のマウンドも残る。
3	宮ノ谷古墳群	1・2号。丘陵頂部に径20mの1号。2号は尾根部に近い場所でも中世墓かも？
4	石山古墳群	1~6号。密植用のため半壊墳2基。東の2基はマウンド低く自然地形かも？
5	* 石塚谷古墳	直径30m。木棺跡3基（墓室は2）。銀象嵌大刀など豊富な副葬品（6c後半）。
6	* 立岡山古墳群	1~4号・6号。6号発掘調査径16、木棺跡、鉄鉋・器台片・有蓋高杯（6c前半）。
7A	* 明気古墳群A	1~8号。円墳。木棺直葬（1・2・4~6・8号）。須恵器・馬具・耳環・玉環。
7B	* 明気古墳群B	12~15号。方墳。12号は2基の木棺跡、炭化棺材が残る。
8	中尾古墳群	1・2号。円墳。1号径14.5m。2号径19m。

番号	名 称	様 相
9	* 倉懸古墳群	1・2号。円墳。1号中央に大きな盗掘坑。2号木棺跡2基、須恵器・鉄刀。
10	長谷古墳	円墳、径15.5、横穴式石室・室長4m・幅1.2m・片袖・南に開口。
11	舟天宮古墳	横穴式石室が南に開口、現状で石室全長8.4m、室長4.8m・幅2.4m、片袖。
12	片田古墳	痕跡墳。須恵器片と埴輪片が付近から採取されている。
13	中万大谷古墳群	1~7号墳。円形。径12~25m。3号墳横穴式石室、盗掘坑。
14	射原塚内古墳	円墳、径18m、盗掘坑。
15	尾だけ古墳群	1~7号墳。密植造成のための削平をうけている。5号墳から須恵器杯身出土。
16	岡山古墳	円墳、径11.3m、頂部に盗掘坑。
17	* 朱中古墳	痕跡墳。埴形鏡片・円筒埴輪片。

第24表 大日山古墳群周辺の古墳

\*は発掘調査がなされたもの



第84図 大日山古墳群周辺の古墳 (1 : 25,000)

## 2. 2 号 墳

### (1) 調査前の様相

幅20mほどの尾根の背幅いっぱい、高さ2mほどの高まりが見られた。その周囲には平坦に近い部分があり、従って、高まりは相対的に強調されていた。立木の伐開後、尾根北方の水田部から尾根筋を見渡すと、瘤状の盛り上がりとしてよく目立つ存在であった。また、高まりの裾は円形にめぐっていた。見るからに人為的な地形の改変を感じさせる状況であり、また、周辺で発掘調査された古墳（明気8号墳等）の調査前の様相ともよく似ていることから、

古墳と判断した。

地形測量図からは、標高50mの等高線を基底線とする直径20mの円墳とすることができよう。ただし、墳丘の北半、すなわち櫛田川を見下ろす側は、尾根腹部の斜面にも整形のあとがみられ、基底部も49mの等高線付近まで下がる。反対に南側は、基底線ははっきりしないまま、切り立った尾根斜面となる。盗掘坑のような窪みは見当たらなかった。



第85図 遺跡地形図 (1 : 5,000)

## (2) 調査結果

### 1) 墳丘・関連施設

#### 盛土

墳丘中央付近では、表土から80cm下がったところで旧表土が確認された。その間、赤味を帯びた土が盛られている。明瞭に分層される訳ではないが、含まれる岩粒の流れから大きく3層に分けられる。いずれの層も赤味を帯びた橙色土が混じる。

墳丘北斜面では、斜面に沿って全体に、表土の下部20cm程の厚さで橙色土の混じった層がある。頂部付近からの流下土かと思われる。その下は、黄褐色土の中に5～10cm大の山石や岩が含まれる層が見られる。

墳丘南半部のあまり傾斜のない所では、盛土が見られない部分が多い。

なお、この盛土が古墳時代のものであるという決定的な要因はみつからなかった。

#### 旧表土と溝状遺構

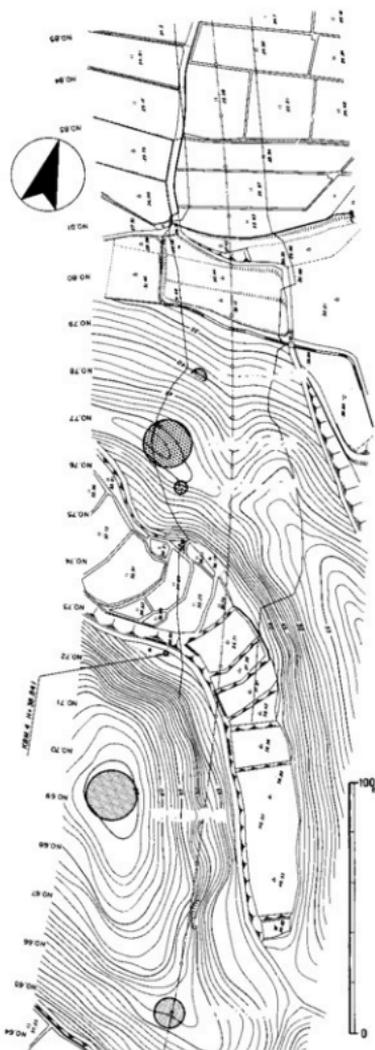
黒褐色の旧表土は、盛土の下で半径4mほどの広がりをもって残っていると推測される。その外側は、溝状、もしくは崖状に、人為的に削られていることが、断ち割り断面から読み取れる。墳丘南東区では、それが墳丘基底線と同心円状に巡る溝として検出された。この溝は、地山を弧状に挟む、幅1.2～1.7m、深さ10～30cmほどの浅いものである。旧表土と同じ褐色土が内側に溜まっており、地表面になっていた時期が一定期間あったようである。盛土と思われる赤褐色土で埋まっていた。

#### 旧表土下の土層

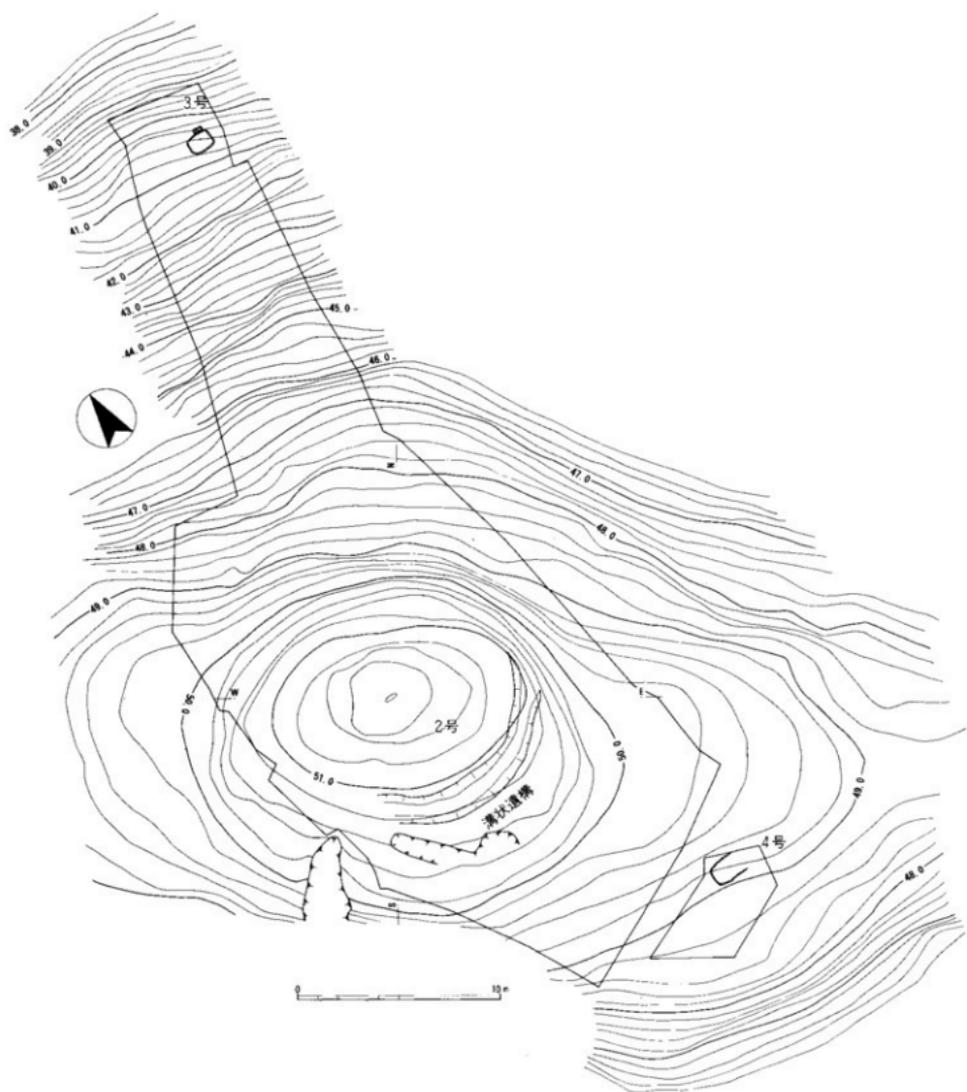
旧表土からはっきりした地山の土まです、水平に重なる3層が見られた。真中の層には、土師質の土器微細片（古式土師器か弥生土器なのか不明）が含まれていた。

### 2) 埋葬施設

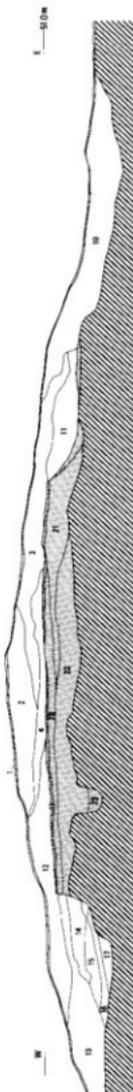
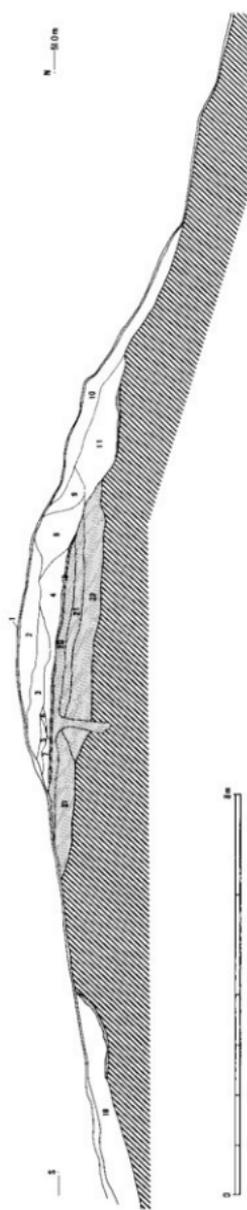
検出されなかった。はっきり地山とわかる層まで墳丘を掘り下げても、地山を掘り込むトレンチを入れても、墓坑の掘り形、棺塚、副葬品等は確認されなかった。



第86図 古墳分布図 (1 : 2,000)



第87图 調查区地形測量图 (1 : 250)



第88図 2号墳丘陵断面図 (1:100)

- 1 表土 (腐葉土)
- 2 7.5YR7/8黄褐色土 (70%) + 2.5YR6/9褐色土・やや粘質の10cm次のアウツクワの土 (30%)
- 3 7.5YR7/8黄褐色土 (90%) + 2.5YR6/9褐色土 (10%)
- 4 7.5YR7/8黄褐色土 (60%) + 2.5YR6/9褐色土 (40%)
- 5 2.5YR7/4褐色土・やや粘質土
- 6 7.5YR7/8黄褐色土 (50%) + 2.5YR7/6褐色土 (50%)
- 7 7.5YR7/8黄褐色土 (90%強) + 2.5YR6/9褐色土 (10%弱)
- 8 7.5YR7/6明黄褐色土・粘土が豊富に混入する。
- 9 5YR7/6褐色土、5~8cm次の石混じり。
- 10 10YR/7.8黄褐色土 (50%) + 10YR6/8明黄褐色土 (50%)
- 11 10YR6/8明黄褐色土、5~10cm次の石多く含む。
- 12 10YR7/6明黄褐色土 (80%) + 5YR7/6褐色土 (20%)
- 13 10YR6/8明黄褐色土・褐色土が豊富に混入する。
- 14 10YR6/8明黄褐色土 (60%) + 2.5YR6/9褐色土 (40%)・灰化層・5cm幅の石混じり。
- 15 10YR5/6黄褐色土・灰化層が少量混入する。
- 16 5YR5/8明黄褐色土
- 17 5YR5/8明黄褐色土 (80%) + 2.5YR6/9褐色土 (20%)
- 18 5YR6/8褐色土
- 19 10YR3/1黒褐色土、やや粘質土 (旧表土)
- 20 10YR6/6明黄褐色土
- 21 7.5YR6/6褐色土、3~10cm次の石・若干の混入する。
- 22 7.5YR6/8褐色土
- 23 10YR6/6明黄褐色土

### 3) 遺物

埋葬施設が検出されなかったため、まとまった出土はなかったが、墳丘器や墳丘斜面の表土直下から破片となった土器が出土した。土師器の甕（8）1個体分以外は須恵器である。ただ、壺土内からは、割れ口も表面もかなり磨耗し、器種も時期もはっきりしない土師質の土器細片が数点出土している。

墳丘東裾部、まさしく基底線の部分で、高杯・壺・椀片・甕（2～5・8）などが、壊れた状態ではあったがやや集中した状態で出土した。そして北西の墳丘斜面では、杯身片（1）や大甕片が散在状態で出土した。大甕片は20点ほど出土し、接合はできないものの、調整方法・文様・胎土・焼成の類似性から同一個体と思われる。

後に図示した土器のほかに、透かし部分が看取できる高杯脚部片や、キザミで飾った甕の肩部片などが出土した。

#### 須恵器

杯身（1） 口径11cm、受部径13.1cmの復元径である。1cmほどの立上がりはほぼ垂直に立ち、内面では体部との境に沈線状のくぼみをつくる。受部に、重ねて焼いた蓋の細片が付着する。

有蓋高杯（2） 受部付近は小片のみの出土で、下部と直接は接合できなかったが、出土地点、胎土、焼成等から同一個体であると判断し、図上で復元接合した。杯部は底部が広くやや扁平な感を受ける。受部は直線的に外上方に伸びる。底部外面はヘラケズリし、脚部との接合部もきれいにナデているが、内面には接合部に窪みを残す。脚部は徐々に外側の度合いを増しながら下り、端部手前で下方に少し折れ外面に稜をつくる。

壺（3） 口縁部は欠損しているが、広口壺と思われる。底部に直径7cmの円盤を置き、その周りに粘土をつぎたして体部をつくる。底部はやや丸みを帯びる。

罍（4・5） （4）は口頸部の上方、大きく開く部分であろう。稜線の上で6本1条の波状文、下方でも波長の短い波状文を施す。（5）は、体部片で、肩部に1本の沈線をまわし、その上下に櫛状の刺突で刻んだ模様を巡らす。（4）と（5）は、

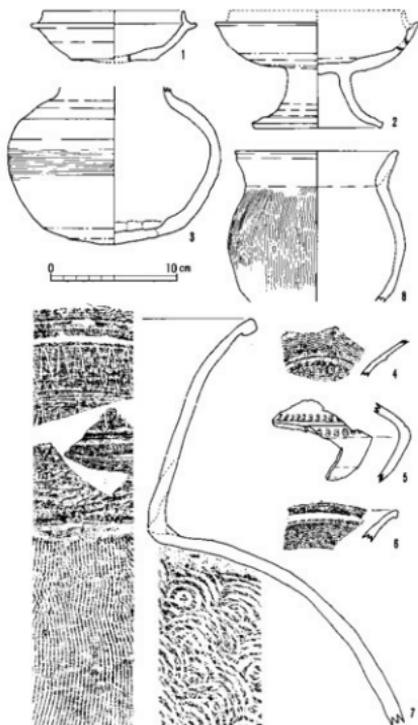
胎土や焼成の類似性から、同一個体の可能性もある。

広口壺（6） 口縁だけの出土である。端部はやや丸くヨコナデし外に曲面をつくる。波状文は9本を単位とする。

甕（7） 実際には接合しないが、口縁～肩部にあたる4片を区画上で繋ぎ合わせた。やや外反して開く口縁は、端部を折り返し肥厚部分をつくる。頸部外面は、やや粗いカキメ調整の上に、2段に波状文を施す。

#### 土師器

甕（8） ゆるくカーブする体部に鈍い角度で外に開く口縁がつく。口縁外面端部には沈線状の凹みを持つ。



第89図 2号墳出土遺物実測図・拓影（1：4）

### 3. 3 号 墳

#### (1) 調査前の様相

2号墳の北斜面を8mほど下った所で、周囲の傾斜面に比べてやや平坦で、微妙にテラス状を呈する地形が見られた。地形測量図では標高40~42mの等高線の間になる。しかし、植林のための地形整形とも、単なる自然地形ともとれるもので、外見ではその正体は判断できなかった。むしろ、周囲で古墳の

存在が知られていなかったなら、自然地形と判断してしまいうような地形であったといえよう。

テラス面にトレンチを入れてみたところ、表土から20cm弱の深さで須恵器広口壺の口縁が見えはじめたので、古墳として調査した。

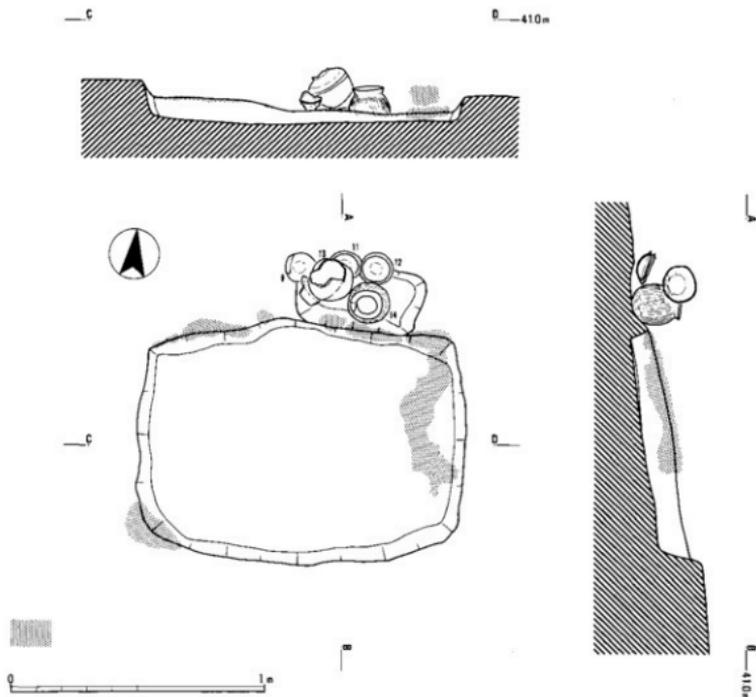
#### (2) 調査結果

##### 1) 墳丘・関連施設

墳丘といえるべき盛土は確認できなかった。周溝等も検出されなかった。

##### 2) 埋葬施設

表土から40cmほどの深さで、1.3×1.0mの東西にやや細長い方形の墓壇が検出された。埋土は周囲の



第90図 3号墳主体部実測図 (1:20)

地山の土とほとんど区別できなかったが、オリーブ灰色の粘土が見られ、それを手掛かりにした墓塚の検出方法であった。結果的に、粘土は墓塚の東辺と北辺によく残り、南西のコーナーにも薄くみられた。

墓塚内から遺物は出土しなかったが、北辺のすぐ外側に、副葬品の土器が固めて置かれていた。土器の下の土は周囲に比べやや柔らかく、その柔らかい部分を掘削すると浅い窪みとなる。

### 3) 遺物

墓塚際の土器群は、須恵器5個体(9~13)と土師器1個体(14)がかたまって検出されたものである。須恵器杯蓋(10)を仰向けにし、その上に杯身(12)を重ねて、もうひとつの杯身(11)と接して置かれる。5cmほど間をおき、杯蓋(10)が仰向けにおかれ、(14)の土師器甕が、杯身(12)と墓塚のあいだに据えられていた。広口壺(13)は蓋杯列の上に5cmほどの厚さの土層を隔て、傾いた状態で検出された。口縁から肩部にかけて1/3ほど割れ、その破片とともに、いわゆる浮いた状態であった。

3号墳関連の遺物なのか、上から落ちてきたものなのかは不明であるが、竊葉土直下で、須恵器杯蓋・身片と甕片が出土した。

#### <埋葬施設関連の出土>

##### 須恵器

杯蓋・身(9~12) 口径が12cm前後で、ヘラケズリ調整が見られず、天井部・底部外面が未調整のものである。

身は器高に対する立上りの割合が小さい。(12)には焼け歪みが見られ、底部外面に「×」のヘラ調整号がつけられている。

広口壺(13) 焼きが甘く、表面の劣化が激しい。表面調整もはっきりしないが、体部にはカキ目のあとがわずかに見取れる。口縁端部は、くの字の面を持ち、その直下には工具をあてて作り出した稜がまわる。体部と底部の境には、ヘラケズリが2周ほどなされている。

##### 土師器

甕(14) 最大径16.2cmの体部に、およそ45°の角度で外に開く口縁部がつく。口縁端部は、ヨコナゲされた際の指の当たり方により、上方にツツと

尖った感じになる。

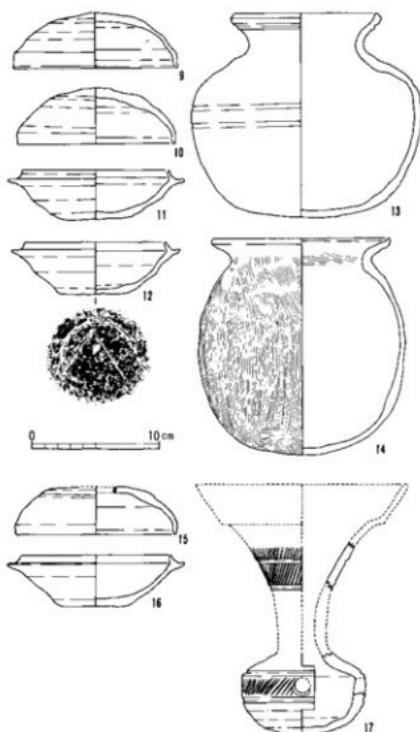
体部は、6本/cmのハケメで調整される。

#### <表土直下出土>

##### 須恵器

蓋杯(15・16) 基本的に埋葬施設出土のものと同様である。(15)は天井部外面が軽く撫でられ、(10)などに比べ天井部の突出感がおさえられているが、体部と天井部の境付近に沈線が施されたように窪みが生じている。

甕(17) 体部と頸部の破片である。胎土や焼成、文様などから同一個体と判断した。体部下半はヘラケズリされ、上半には注口を挟んで2本の沈線がひかれ、その間にはヘラで細かく刻まれる。



第91図 3号墳出土遺物実測図・拓影(1:4)

## 4. 4 号墳

### (1) 調査前の様相

2号墳の南東裾に、見た目にかなり平坦なスペースがみられた。調査前の地形測量図では48.6mから49.0mの等高線の間になる。当初、2号墳の盛土を得るために削平されたとも考えた場所である。念のため、幅1mのトレンチを十字にいたところ、須恵

器の蓋が検出され、トレンチの幅を広げるかたちで調査を続けた。ただ、最初のトレンチの深さが、遺物検出面より深かったため、結果として、墓墳の検出に支障を来してしまった。

### (2) 調査結果

#### 1) 墳丘・関連施設

墳丘、周溝とも確認できなかった。

#### 2) 埋葬施設

木棺を直葬したと思われる墓墳が検出された。幅1.2mの東西に長い隅丸長方形のプランである。中心軸は座標の東西軸に対して約6°振る。西端から1.7mほどしか検出できず全長は不明であるが、東端はすくなくとも須恵器杯蓋が4個体検出された場所よりも東にあったと思われ、それならば、2.7mほどの長さを推定できる。深さは、墓墳の中心軸付近で、検出面から10cmほどである。

須恵器杯蓋が4個体検出された周辺は、トレンチを設定した部分で、前述の如くその掘削が少し深すぎたため、遺物の乗る面が周囲より盛り上がった状態になってしまった。棺跡は検出できなかった。

#### 3) 遺物

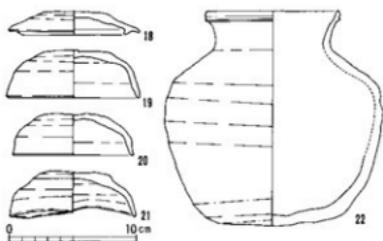
墓墳西端から40cm内側に須恵器壺(22)が正立し、そこから1.6m東に離れ須恵器杯蓋(18~21)が伏せた状態で4個体置かれていた。杯蓋群の位置に遺体の頭部があったと推測する事もでき、棺が墓墳の軸に沿って納められたとすると、壺(22)は、棺外もしくは棺上の副葬品ということができよう。

##### 須恵器

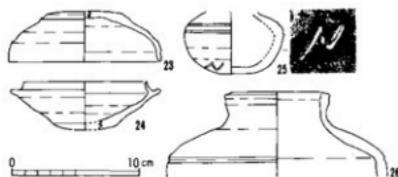
杯蓋(18~21) 口径10cmほどの小型のものである。(18)は、たちあがりとも言える部位があり、つまみもなく、器形としてはむしろ身とすべきかもしれないし、(19)も天井部内面の平らな様子から、

身と言えなくもない。体部は、回転ナデで調整されるが、天井部外面は、ロクロから切り離した後ほとんど調整はしていない。外面の天井部と体部の境に特徴的な段が生じ、外観では天井部が盛り上がったように見える。(21)は口縁部が大きく歪んでいる。

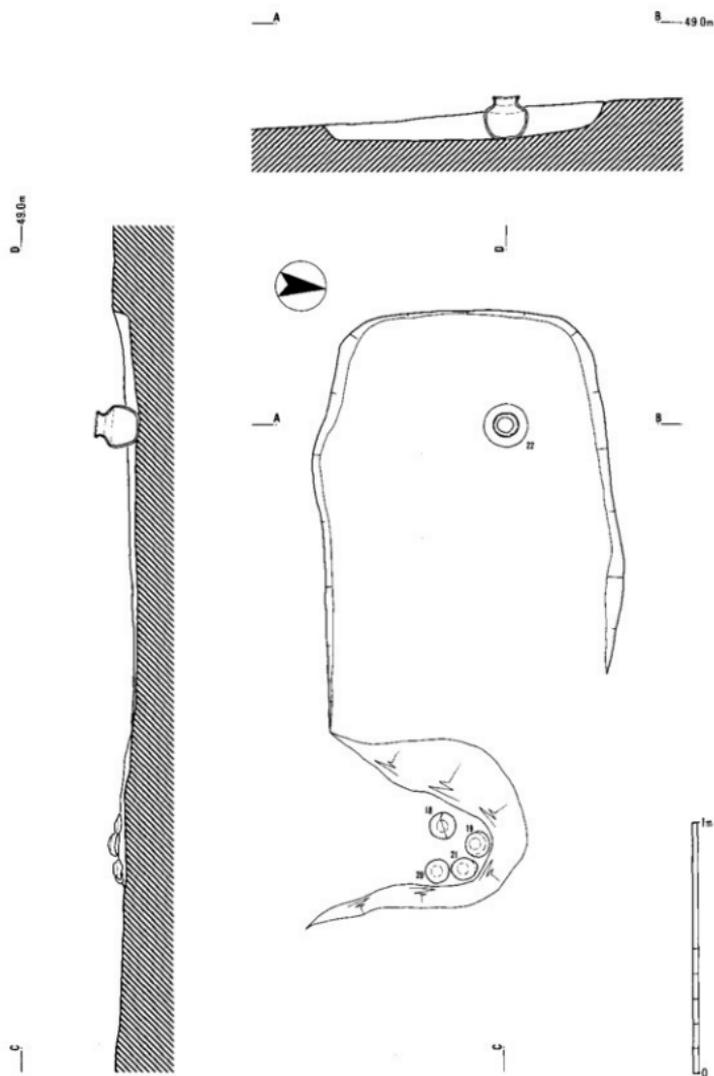
広口壺(22) 平底に近く、体部もどちらかという直線的に広がる。頸部、口縁部には焼き歪みがみられ、本来のプロポジションが少し崩れているにはせよ、上方に開くかたちをとる。底部と体部の境の部分に、狭い範囲でヘラケズリがみられる。



第92図 4号墳出土遺物実測図(1:4)



第93図 尾根北斜面採集遺物実測図・拓影(1:4)



第94图 4号墳主体部实测图(1:20)

## 尾根北斜面の 表採遺物について

調査区の東側は、水路を通すため、すでに重機による尾根の横断掘削がなされていた。その工事された場所に、須恵器片が散布していたので採集した。数はそれほど多くはなかったが、割れ口は新しいものばかりで、もしかすると完形の土器であったのかもしれない。3号墳と同様、尾根中腹につくられ、現在ではほとんど自然地形と変わりのないような外観の古墳が、工事された部分に存在していたのかもしれない。

### 須恵器

杯蓋・身 (23・24) (23)は口径12cm、そし

て(24)は受部径11.8cmの復元である。体部は回転ナデ、天井部・底部の外表面は未調整、内表面は不定方向ナデという調整方法で、天井部・底部が突出したように見える外観である。

壺 (25) 壺体部と思われるが、注口が開けられていない。肩部に2本の沈線をまわし、下方の沈線部で最大径7.9cmを有する。底部近くに「N」のヘラ記号が施される。

壺 (26) 肩部より上方の破片である。口縁は垂直に立ち上がり次第に肥厚する。端部は凹みを持つ面を成し、内面端部にも凹みがまわる。

## 5. 結 語

盛土を持ち、外見上古墳であると判断できた2号墳に埋葬施設が見当たらず、平坦部ともいえるような地形の場所で埋葬施設が検出されるという結果になった。

2号墳の盛土が「古墳」としての盛土かどうか、決定的な証拠は得られなかった。しかし、地形改変のありかたが、すぐ南の尾根頂部で調査された明気8号墳によく似ていること、遺物に古墳時代より新しいものが見当たらず、それらの出土が表土直下からであったことなどから、「古墳」としての盛土の可能性はかなり高いといえよう。

3号墳のようなテラス状の在り方は、近くでは河田古墳群などにその類例がある。しかし、河田古墳群では周溝による墓としての区画を設けているのに対し、本墳では周溝は掘られていない。

4号墳のようにほとんど平坦とも見える場所に埋葬主体があるというのやや奇異な感じを受ける。最低でも棺を覆うだけの盛土はあったと思われる。

### 2号墳について

さて、2号墳に埋葬施設が見当たらなかったことについて、少し考えてみたい。この事については、様々な理由が考えられる。まず、根本的に、2号墳

が古墳ではなかったのではないかということ(①)。次に、埋葬施設が浅い所に作られたため、すでに盛土の一部と共に流れ崩れてしまったのではないかということ(②)。第3に、墳丘は一応準備したものの、埋葬はしなかったのではないかということ(③)。等々である。

①については、前述のように、かなりの確率で古墳(のための盛土)であると考えて差し支えないものと思われる。

②についても、埋葬施設がほぼ斜面に近い所でない限り、遺物もろとも跡形もなくなるとは考えにくい。もっとも、盗掘によってかなりの深さまで掘られてしまったというのなら話はまた別であるが・・・。

諸々の状況から、③の考えがまだ一番妥当性を帯びると思われるが、あくまで主観の域であり、また、なんとも証明のしようがないところである。

仮に2号墳が、埋葬施設を作らず、遺体を埋葬をしなかった古墳であるとする、被葬者となるべき人物がまだ生きていたうちに墳丘だけは確保していたという、いわゆる「寿墓」という可能性が高い。そして、本来埋葬される予定であったのが、なんらかの事情で埋葬されず「空墓」となったということ

になる。「大半の古墳が生前に築造された<sup>①</sup>」という考えもあるが、完成までにかかり時間のかかる大型古墳だけではなく、このような、盛土部分が1m弱で径20mの円墳でも生前に築造しておくのであろうか。古墳の造営が極めて政治的な側面をもっているのならば、むしろ権力を行使しているときにこそ、墳丘をつくること、そしてそれを視覚的に示しておくこと、自己の墓の場所を確保しておくことなどに比較的重要な意味があったのかもしれない。

## 出土須恵器について

3号墳埋葬施設出土の須恵器蓋杯は、明気1・2号窯出土の蓋杯に、4号墳出土の蓋杯は、明気3号窯出土のもの、外見上次の点で類似する。

- ① 口径(10cm前後)。
- ② 底部(天井部)外面が突出したように盛り上がる。
- ③ つまみがないので「身」とすべきなのか、容積がほとんどないので「蓋」とすべきなの

【註】

- ① 吉水康夫『河田古墳群発掘調査報告Ⅰ』多気町教育委員会 1974  
下村登良男『河田古墳群発掘調査報告Ⅲ』多気町教育委員会 1986
- ② 茂木雅博「古墳時代寿陵の研究」雄山閣出版 1994

か決めかねるものがある。(18)のこと。

- ① ヘラ記号。「×」。

(表採の中には「N」のヘラ記号もあり。)

また、3号墳埋葬施設出土のヘラ記号を有する杯身(12)は、胎土分析の結果をみると、Rb-Sr分布もK-Ca分布も明気1・2号窯の領域に入っている。この1点だけの分析結果で結論を急ぐことは危険ではあるが、それでもやはり、これらの須恵器が、明気窯産のものである確率を高める要因の一つであるといえよう。

さてそれでは、これら須恵器の時期についてであるが、当然のことながら明気窯と同時期ということになる。すなわち、3号墳の須恵器は陶邑偏年<sup>②</sup>(中村浩)のⅡ-6に相当し、4号墳の須恵器は同じくⅢ-1に相当するものである。

また、2号墳墳丘の須恵器片もⅡ-6併行といえよう。

(西村修久)

③ 本書P101～三辻利一「明気窯群およびその周辺の遺跡出土須恵器の蛍光X線分析」参照

④ 中村浩「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」『陶邑Ⅲ』大阪府教育委員会 1978 等

大日山2号墳

No.	部 位	出 土 場 所	位置(m)	調査・技法の概況	土 質	構成	色 調	現在状況	備 考	脚 注
1	羨道・扉石	墳丘裾部表土直下	(口径 12.0) 埋没部 13.2) 高 4.1	・扉石から口縁部にかけて内側面とも反転ナデ ・扉石 内：へう切り 内：不定方向ナデ ・コロボシ瓦葺き不明	中々堅 ただし、1m以上の砂粒に含まれていない。	堅	N4灰	口縁部1m以内の表層がほぼ均一であり、表層中央は欠損	・内面に1mm程度の砂粒がまばらにあり、	000-1
2	羨道・有蓋高杯	墳丘裾部表土直下	(口径部 16.2) 第一高度高 8.4) 高 10.4	・扉石 外：上向反転ナデ 内：平へうナデ 内：不定方向ナデ ・扉石 反転ナデ ・コロボシ瓦葺	堅 1m前後の砂粒が多い。	軟 扉に扉石が欠損している。	N4灰 7.5%以上赤土の混入あり、	扉石 埋没部内 ただし、埋没付近は2×2mほどの一帯しりない。 扉石 埋没部が3%。		000-2
3	羨道・壘	墳丘裾部表土直下	(体積部 16.8)	・扉石の反転ナデ目 ・扉石の外側にへう切りナデ	中々堅 0.5~1mmの砂粒が多い。	中々軟	S10C1(黄赤) Y67灰	埋没部内のみあり	・底に円形の跡が、	000-3
4	羨道・壘	墳丘裾部表土直下	—	・外：反転ナデのち表段文(6本1条)	中々堅 1m前後の砂粒を含む。石瓦散在。	堅	N5灰	口縁上方部のみ	・扉一帯体とつながり残存部あり。	000-2
5	羨道・壘	墳丘裾部表土直下	(体積部 9.4)	—	—	—	—	—	・N4の層が同一層の埋没部あり。	000-1
6	羨道・壘	墳丘裾部表土直下	(口径16.0と17)	・外：反転ナデのち表段文(9本1条)	堅 2.5~1mmほどの砂粒を含む。	堅	10Y5/7灰	口縁部のみ 6×3.5m	—	000-2
7	羨道・壘	墳丘裾部及び扉石の表土直下。 ただし、埋没部中は、3号塚にあたり扉石の表土直下。	(表土部 15.6)	・扉石 外：ナデ 内：ナデ ・扉石 壘石のためのナデ ・壘一帯の埋没部 内：3号目 3号目のち表段文 内：若い3号目	堅 1m前後の白色砂粒少し含む。	堅	N4灰	埋没部内のみ 2% 埋没部は10m以内の範囲	・表層に表段文はないが、同一層体であることがわかる4号を調査上で調査した。	000-1
8	土間・壘	墳丘裾部表土直下	(口径 12.8)	・口縁部 ココナテ ・扉石 外：へう切り6本(1m内) ナデ?	中々堅 1mmほどの砂粒少し含む。	具	2.5YR5/8 埋没部	口縁一帯部のみ 表層欠損	・表層風化、表面荒れている。	000-4

大日山3号墳

No.	部 位	出 土 場 所	位置(m)	調査・技法の概況	土 質	構成	色 調	現在状況	備 考	脚 注
9	羨道・扉石	主部部	口径 12.7 高 4.5	・扉石 反転ナデ ・天字壘 外：へう切りナデ 内：不定方向ナデ ・コロボシ瓦葺	軟 1mm程度の砂粒や中目土。	軟	7.5Y7/1灰白	完形	—	000-1
10	羨道・扉石	*	口径 12.2 高 4.5	・天字壘内土調査 それ以外反転ナデ ・コロボシ瓦葺	軟 1~2mmの白色砂粒を含む。	堅	外：S P B3/3 埋没部 内：S N灰	欠形	—	000-4
11	羨道・扉石	*	口径 11.5 埋没部 14.0 高 4.0	・扉石 反転ナデ ・扉石 再：表段文 内：不定方向ナデ ・コロボシ瓦葺き不明	中々堅 1mm程度の砂粒少し含まれる。	堅	7.5Y6/1灰	埋没部15%のみ欠損。	・表層中央に計3本の溝あり、 ・扉石より右側の外面、自然崩壊がみられた痕跡。	000-2
12	羨道・扉石	*	口径 11.5~10.9 埋没部 14.0~13.2 高 4.4~3.9	・扉石 反転ナデ ・扉石 再：表段文 内：不定方向ナデ ・コロボシ瓦葺き不明	中々堅	堅	外：N6灰 内：10Y6/1灰	口縁部埋没部埋没部15%のみ欠損。	・埋没部が2mあり、 表層中央へ入り、 ・表層土直下及び埋没部、自然崩壊がみられた痕跡。 ・裏面外側にへう切り。	000-3
13	羨道・壘の壘	*	口径 11.2 埋没部 18.3 高 16.3	・表層中央のロゼット(はへう切りした)のみ。 埋没部は4号目 裏面外側にへう切りナデ	軟	軟	10Y8/1灰白	口縁部埋没部15%	・裏面が荒れている。	000-1
14	土間・壘	*	口径 13.8 埋没部 16.2 高 17.4	・扉石 外：へう切り6本(1m内) ナデ ・口縁部 ココナテ ・口縁部内面にへう切りナデ	軟	具	10YR7/6 埋没部	欠形	・表層の割罫は人為的なものか、自然のものか不明。	000-3

第25-1表 遺物観察表

No	部 機	出 土 場 所	法 量(m)	調査・技法の概略	胎 土	焼 成	色 調	残存状況	備 考	発 見 年
15	須恵・灰窯	表土直下	口径 12.6 高 3.7	体部 回転ナデ 天井部 外：未調整 内：不定方向ナデ	整 2mm以下の砂粒も少し見られるものの、全体として含まれる砂粒は少ない。	やや軟	N7灰白	口縁部は70% 天井部は0%		000-2
16	須恵・灰身	表土直下	(口径 11.8) (受器径 14.1) (高 4.1)	体部 回転ナデ 底部 未調整	整 1mm程度の石灰等の砂を含む。	整	1GY8/1灰白	体部部は0% 底部の4/100%	窯跡には適合できないが、同一窯体と想われる口縁部と底部の断面を断面上で接合させた。	000-1
17	須恵・灰	表土直下	体部径 9.8	体部 回転ナデ 断面底部はヘラケズリ 断面中央にナデと文書 口縁部上面 外側 回転ナデ 内側 フリ掛け文様の残存	整 1mm以下の砂粒少量含む。	やや軟	5Y6/1灰	体部部は0% 口縁部は0%		000-3

#### 大日山4号墳

No	部 機	出 土 場 所	法 量(m)	調査・技法の概略	胎 土	焼 成	色 調	残存状況	備 考	発 見 年
18	須恵・灰窯	主体部 東半	口径 8.0 高 1.9	・体部 回転ナデ ・天井部 外：未調整 ・口縁部 回転方向不明	やや軟 1mm次の砂粒多数含む。	整	5B/G4/1 黄灰色	完形	・天井部につきまなし、身とすべりか?	007-4
19	須恵・灰窯	*	口径 10.2 高 3.8	・体部 回転ナデ ・天井部 外：未調整 内：不定方向ナデ ・口縁部 回転方向不明	やや軟 1mm次の砂粒多数含む。	整	10G5/1 緑灰	完形		007-3
20	須恵・灰窯	*	口径 9.4	・体部 回転ナデ ・天井部 外：未調整 内：不定方向ナデ ・口縁部 回転方向不明	やや軟 1～2mmの砂粒多数含む。	整	10B/G5/1 黄灰	完形	・天井部外面に工具痕	007-2
21	須恵・灰窯	*	(口径 9.8) (高 3.5)	・体部 回転ナデ ・天井部 外：未調整 内：不定方向ナデ ・口縁部 回転方向不明	やや軟 1～2mmの砂粒多数含む。	整	5B/G4/1 黄灰	完形	・口縁部のみ ・天井部外面に工具痕	007-1
22	須恵・灰口壺	主体部 西半	口径 10.3 高 17.3	・口縁部から体部にかけて回転ナデ ・底部外側未調整 ・断面外側はヘラケズリ ・口縁部 回転方向不明	やや軟 1mm次の白色砂粒多数含む。	整	N 6 灰 自然物 10G2/1緑灰	完形	・口縁部のみ	007-5

#### 尾根北斜面 表採

No	部 機	出 土 場 所	法 量(m)	調査・技法の概略	胎 土	焼 成	色 調	残存状況	備 考	発 見 年
23	須恵・灰窯	尾根斜面	(口径 11.8) 高 4.0	・体部 回転ナデ ・天井部 外：傾いたナデ 内：不定方向ナデ ・口縁部 回転方向不明	やや軟	整	外：N 6 灰 内：N 7 灰白	口縁部は0% 天井部は0%	・天井部外面に工具痕	000-4
24	須恵・灰身	*	(口径 9.6) (受器径 11.8) 高 3.8	・体部 回転ナデ ・底部 外：未調整 内：不定方向ナデ	やや軟 1mm次の砂粒少し含む。	整	N 8 灰白	15%		000-1
25	須恵・灰	*	体部径 4.4 体部径 7.8	・回転ナデ ・底部付近はナデ	やや軟 0.5mm次の砂粒少し含む。	整	10Y 8/2/2 灰白	体部のA型	・意とはしたものの、意は厚たれていない。 ・底部径(くへり径)「N」。	000-2
26	須恵・灰窯	*	口径 7.0 断面径 17.0	・回転ナデ	やや軟 1mm程度の砂粒含む。	整	N 8 灰白	口縁部は0% 底部は0%		000-3

第25-2表 遺物観察表



調査前遠景（上ノ垣外遺跡から）



調査前遠景（北から）



調査前近景（北から）



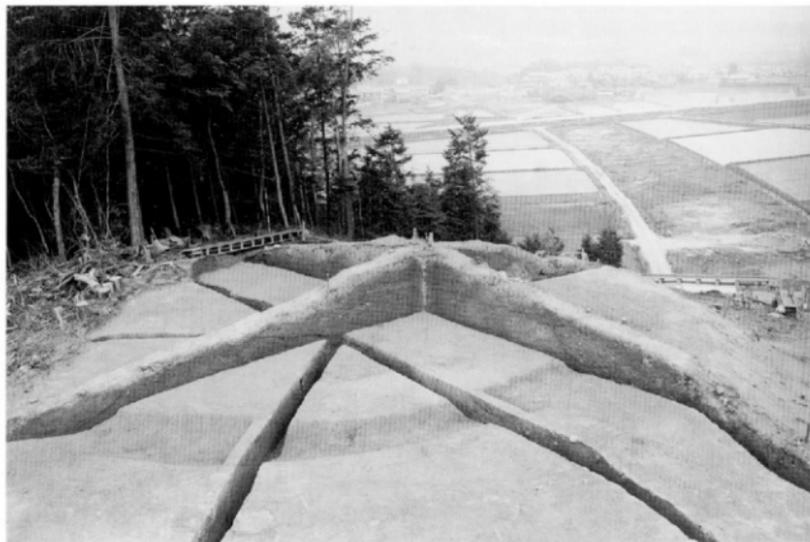
調査前近景（南東から）



調査後遠景（南上空から）



調査後全景（北東上空から）



2号墳（南東から）



2号墳丘盛土断面と溝状遺構（南から）



3号墳主体部（南から）



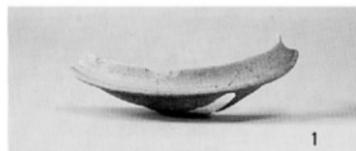
3号墳主体部（北から）



4号墳主体部（北から）



4号墳主体部（東から）



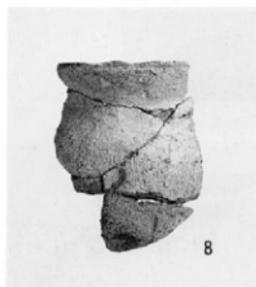
1



3



2



8



4

5



6



7



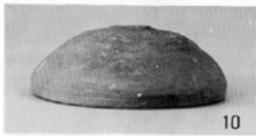
9



12



15



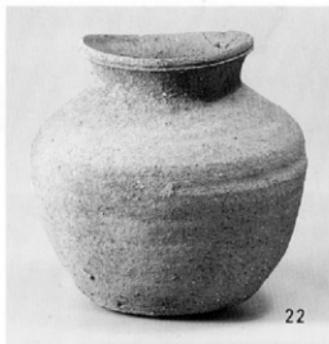
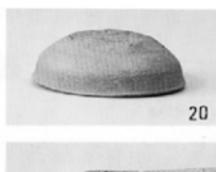
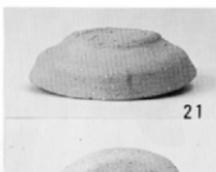
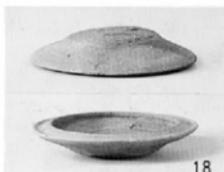
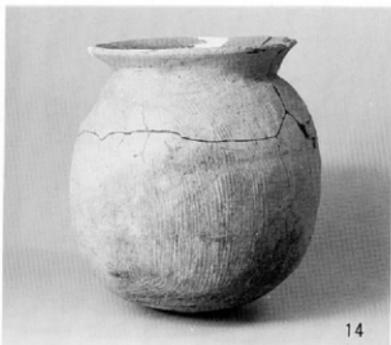
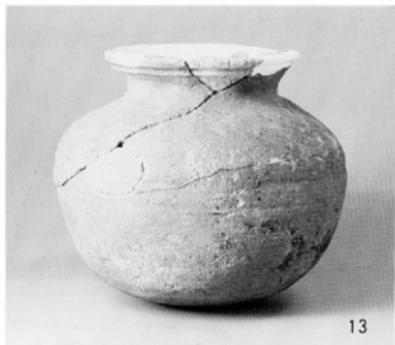
10



11



17



## V. 甘糟遺跡

### 1. はじめに

甘糟遺跡は倉井谷池の西側丘陵の北裾に広がる、標高30～34mの中位段丘面と、その下位の標高25～26mの低位面にあたる水田部分に立地し、行政区画上是多気郡多気町大字相可字甘糟に属する。

1991(平成3)8月26日～10月14日まで、北に隣接する果護遺跡(旧称多気郡条里遺構)とともに、試掘調査を実施した。その結果、少量の遺物が出土したものの、遺構は確認できなかった。特に中位段丘面上は、以前は水田に、現況では果樹園として利用されており、遺構は開墾時に攪乱・削平されたも

のと考えられ、本調査には至らなかった。

なお、本遺跡と同時に試掘調査を実施した多気郡条里遺構については、明確な条里遺構が確認できなかったことから、遺跡名としては遺構・遺物が確認できて本調査の実施対象地となった地区の小字名をとって、果護遺跡と改めた。地形的には甘糟遺跡の低位部分と果護遺跡とは明確に区分はできないが、本報告では本調査を実施した果護遺跡を除き、それ以南の字荒木に属する部分についても、便宜上甘糟遺跡の範囲に加えて扱うことにした。



第95図 遺跡地形図(1:5,000)



第96図 調査区位置図 (1 : 2,000)

## 2. 遺 構

試掘調査は4 m×4 mのグリッドおよび、幅2 mのトレンチを設定して行った。

### (1) 中位段丘面部 [G1～G5]

5カ所のグリッドを設定した。基本的な層序は上から第1層；淡褐色土（表土）、第2層；淡灰色土（床土）、第3層；褐色ないし暗黄灰色粘質土、第4層；淡黄灰礫混ないし橙灰色粘質土（地山）であった。

第1層上面から地山面までの層厚は30～35cmで、地山は北へ向かってゆるやかに傾斜し、高度を下げていく。

G1からG5では、調査前の現況ですでに平坦面と段が見られ、開墾時にかなり削平がなされたものと思われ、遺構は全く検出されなかった。

また、遺物については表土から若干の縄文土器や土師器、陶器などが出土した。

### (2) 低位段丘面部 [G6～G9、T1～T8]

G6～G9およびT1～T4は字甘糟、T5～T8は字荒木に属する。現況は水田で、最近まで条里制地割りが残存していた。

T1南端の26mからT6北端の23mまで、南から北へ向かってゆるやかに傾斜している。

基本的な層序は、上から第1層；淡褐色土（表土）、第2層；橙灰ないし黄灰色土（床土）、第3層；淡褐色土砂質土（遺物包含層）、第4層；褐色粘質土（遺物包含層）、第5層；暗青灰色粘土（地山）となり、第1層上面から地山面までの層厚は60～80cmであった。遺物は第3層と第4層に含まれており、その層厚は約30～40cmであった。

この地域は、旧河川あるいは沼状地形に土砂が永年にわたって全面的に堆積したと考えられる状況であった。条里遺構と考えられる溝や畦畔などの遺構は確認できなかった。しかし、遺物については、古墳時代から中・近世にかけての土器片や木製品などが出土した。これらの遺物は、流れ込みのような様相は呈しておらず、付近に遺跡の中心部があるものと思われる。

### 3. 遺物

今回の試掘調査で出土した遺物のうち、以下に主なものについて述べる。

#### 1. 土器

##### A. 縄文時代の遺物

深鉢（1・2） G2から出土。破片数にして10片ほどあるが、すべて磨耗が著しい。1は口縁部の破片で、やや内湾する口縁部が若干肥厚する。口縁部外面は無文帯で、その下に横走沈線による文様帯が見られる。沈線間には柳描条線が充填されるようであるが、磨耗のため詳細は不明である。2は体部片で、1と同一個体の可能性もある。縦位に垂下する二段のJ字文の二段目の付け根部と考えられる。1に比べ沈線間の間隔が狭い。沈線間に充填される文様については不明である。後期初頭の中津式に比定される。当遺跡の背後に広がる丘陵で行われた多気ニュータウン造成地内の発掘調査や、当遺跡北方約400mに位置する上ノ垣外遺跡でも、やはり中津式の土器が出土しており、関連が考えられる。

##### B. 古墳時代の遺物

土師器台付甕（3） 同一個体と思われる破片が10片ほどまとまって出土したものである。脚台部を欠くがほぼ器形が推定できるものである。頸部内面から外側へ折れた立ち上がり部に外接して口縁部が付けられる。端部は面をもち、水平よりやや外側へ下がる。肩部が張らない体部は、最大径付近よりやや上部で“く”字状のハケメが施される。

須恵器杯身（5） 口縁部の細片である。口縁端部を欠くが、立ち上がり部が内傾しきほど高くはないものである。

須恵器器種不明（6） G7からの出土。口縁部の約3分の1が残る。内傾する体部からほぼ垂直に口縁部が立ち上がり、高さ1cmほどでそのままおさまる。また、口縁部の立ち上がり部の内側から水平方向に向かって、蓋の受け部のような鈎がまわる。

胎土は非常に細かく緻密で、焼成は良好、全体に薄手である。内外面とも回転ナデ、体部はきちんとナデたというよりは、むしろ水ビキのままに近い。口縁部から肩部にかけての外面に自然釉がかかる。

類例をみないので、あるいはこの時代のものかどうかわからないが、ここではとりあえず古墳時代としておきたい。

このほか、前期に属すると考えられる土師器壺の底部（4）などがある。

##### C. 平安時代の遺物

黒色土器碗（7） 内面のみをいぶした黒色土器A類の碗。内面に横方向のややあらいミガキが見られる。

土師器甕（8・9・10） いずれも小片。（8）には焼成前に内側から開けられた穿孔が見られる。いずれも平安時代後期～末期のものであろう。

製塩土器（11） 細片のため口径の復元さえできないものである。他に1片ある。

灰釉陶器（12～16） 出土点数は少なくないがすべて小片。碗が多く底部の一部を図示した。高台は内湾気味に外側へ開き三日月高台になるものが多く見られる。黒笹90号～折戸53号窯時期に相当するものであろう。

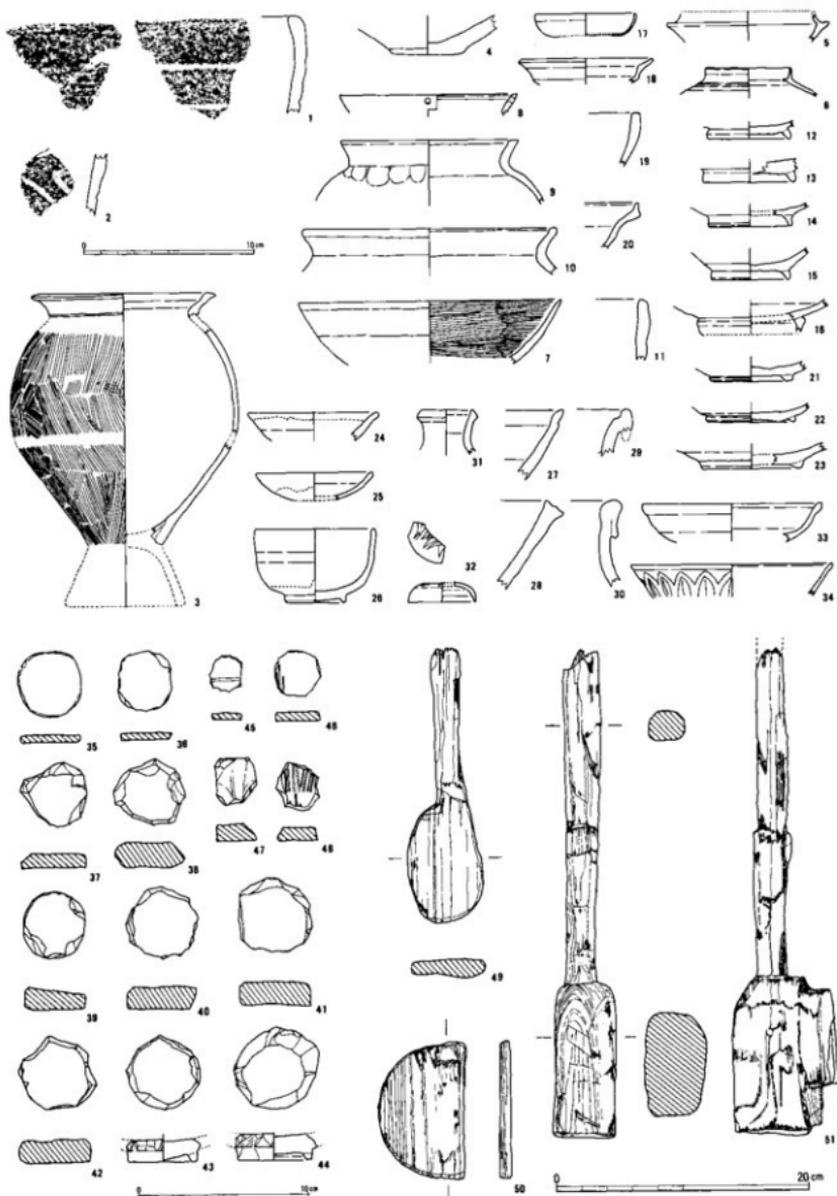
##### D. 鎌倉時代以降の遺物

鎌倉時代以降の遺物には、時代的にも器種などにも雑多なものであるため、ここではすべて一括して扱った。

山茶碗の出土数は少なく、（21～23）の内（22）は灰釉陶器の可能性が高い。緑釉小皿（24）、鉄釉小皿（25）も小片である。（26）は鉄釉碗、（27）はこね鉢、（28）は常滑産のすり鉢、（29・30）は常滑産の甕である。このほか、淡い緑黄色の施釉された瓶子（31）、合子の蓋（32）、青磁皿（33）や碗（34）などがある。

また、量的に多いのが加工円盤である。ここに図示した14点（35～44）のほか、未製品と思われるものも数点ある。（35・36）は土師器の鍋の体部片を転用したもので、（35）は全周をていねいに磨いている。また（36）には表面にハケメが見られる。

（37）は、平安時代の灰釉陶器の甕の体部片を転用加工したものであるが、未製品である。（38～42・47）は常滑産甕の体部片の加工品。特に（39）は円



第97図 出土遺物実測図 (1 : 4、ただし 1、2、35~44は 1 : 3)

形に加工した後、全周をていねいに研磨している。他のものは、荒割りもしくはよりていねいに調整を加えたもので、研磨は行っていない。(47)は未製品。(43・44)は天目茶碗の底部を転用したものの。

(45)は淡黄緑色の施釉陶器の体部片の転用。(46・48)はすり鉢の体部片の転用品である。

その他、木製品として杓子(49)、桶底(50)、杵(51)などが出土した。

なお、この木製品の樹種を<sup>⑤</sup>同定した結果、49の杓子と50の桶底はヒノキ属に、51の杵はコウヤマキに同定された。

杵は形態の違いに関係なく、堅い材質をもつカシの仲間やシイノキ属などの広葉樹を利用する例が多く、本遺跡でのコウヤマキは同定例が少ないようである。

## 4. 結 語

甘糟遺跡は大日山古墳群の築かれた相可南東方の低丘陵北裾部に立地する。地形的には中位段丘面に相当する。

櫛田川中流域には広く段丘地形が展開するが、下流域に移り変わろうとする相可付近では、その規模も小さくなり、当遺跡の立地する段丘面も非常に狭小なものである。

試掘調査の結果、柑橋類の畑地化などの開墾のため、すでに削平されたり、攪乱を受けたりして遺構

は確認できず、本調査には至らなかった。

しかし、遺物については段丘面上の試掘坑や、その下の低位面に設けた試掘坑からも種々の遺物が出土した。そして、北に続く果護遺跡へと切れ目なく続いていく様相を呈していた。

ただし前述のように、中位段丘面はごく狭い範囲であるため、集落の立地する余地はなく、別のところに遺跡の中心を考えた。

(田村陽一)

### 【註】

- ① 本書で使用したトレンチ番号のうちT4は試掘調査及び概観では5の、またT5は同じく21の番号を与えている。
- ② 未発表資料であるが、多気町教育委員会の御好意で実見させていただいた。
- ③ 三重県埋蔵文化財センター「一般国道42号松阪・多気バイパス

埋蔵文化財発掘調査概報Ⅴ」三重県埋蔵文化財センター 1994

- ④ 橋崎彰一「築後山西南麓古墳跡群分布調査報告(Ⅱ)」愛知県教育委員会 1980
- ⑤ パリノ・サーヴェイの分析による。

No.	登録 No.	器 種	出土位置 建 構	法 量(cm)				調査技法の特徴	胎 土	焼成	色	調	残 存	備 考
				口	径	高	その他							
1	001-01	縄文土器 深鉢	試掘 G 2 黄土	—	—	—	口縁部内外面にガキ? 沈積物は全縁?	良 砂粒多く含む	良	外 7.5Y R7/6 内 5Y R7/6	黒 緑	小片	調査書11-	
2	001-02	縄文土器 深鉢	試掘 G 2 黄土	—	—	—	内・外面ナデ	良 砂粒多く含む	良	外 10Y R4/6 内 5Y R5/5	黒 緑	細片	No.1と同一個体	
3	004-03	土器器・合付装	試掘T 6①内 黄土・灰砂層	(14.6)	—	—	口縁部中や外下方に閉 き、腹部に泥。ハケメ	良 砂粒を含む	良	外 10Y R8/3 内 10Y R8/4	黄褐色 黄褐色	口縁部、体 底30%		
4	007-02	土器器・壺	試掘 T 3 黄土・灰砂層 付近	( 5.6)	底径	—	ナデ	精良 砂粒を含む	良	外 7.5Y R7/4 内 7.5Y R4/2	紅、黒	底部40%		
5	002-02	須恵器・杯舟	表土	(10.4)	—	—	ロクロナデ	やや粗	良	外 2.6G Y6/1 内 N7/1	ナリ〜灰 白灰	底部20%	口縁部欠損	
6	002-01	須恵器・砂椀?	試掘 G 7 黄土	( 6.7)	—	—	ロクロナデ ロクロナデ	精良	良	外 N5 内 N4	灰 灰	口縁部30%		
7	004-02	黒色土器・碗	試掘T 5②	(20.8)	—	—	ナデ、内面へうミガキ 内面に黒色化	精良	良	外 10Y R8/2 内 10Y R8/3	黄褐色 黄褐色	口縁部30%		
8	007-03	土器器・壺	試掘T 2西側 表 掘	(14.0)	—	—	ヨコナデ、焼成前穿孔	良 砂粒を含む	良	外 10Y R8/3 内 2.5R 4	黄褐色 黄褐色	口縁部20%		
9	004-01	土器器・壺	試掘T 7④ 黄土・灰砂	(14.1)	—	—	ヨコナデ、ユビオサエ	良 砂粒を含む	良	外 10Y R8/3 内 10Y R8/3	黄褐色 黄褐色	口縁部30%		
10	005-01	土器器・壺	試掘T 6②内 黄土・灰砂	(19.8)	—	—	ヨコナデ	良 砂粒を含む	良	外 7.5Y R8/6 内 7.5Y R8/2	黄褐色 灰白	口縁部30%		
11	006-04	須恵土器	試掘 T 2 表 掘	6.4 底径	—	—	ロクロナデ	良	良	外 N8 内 N8	灰白 灰白	底部100%	クロロ回転方向は 不明	
12	006-07	須恵陶器	試掘T 21①内 黄土〜	6.4 底径	—	—	ロクロナデ	良	良	外 N8 内 N8	灰白 灰白	底部100%	クロロ回転方向は 不明	
13	006-08	須恵陶器	試掘T 21①内 黄土〜	( 7.3) 底径	—	—	ロクロナデ	良	良	外 N8 内 N8	灰白 灰白	底部30%	クロロ回転方向は 不明	
14	005-03	須恵陶器	試掘T 6①内 黄土・灰砂	( 6.4) 底径	—	—	ロクロナデ 体部内面 施釉	良	良	外 N8 内 N8	灰白 灰白	底部40%	クロロ回転方向は 不明	
15	005-04	須恵陶器	試掘T 6②内 黄土・灰砂	6.3 底径	—	—	ロクロナデ 底部外面 赤切り痕	良	良	外 7.5Y R8/2 内 7.5Y R8/2	灰白 灰白	底部100%	クロロ回転方向は 不明	
16	005-06	須恵陶器	試掘T 6②内 黄土・灰砂	( 7.6) 底径	—	—	ロクロナデ 底部〜体部外面施釉	良	良	外 N8 内 N8	灰白 灰白	底部25%	クロロ回転方向は 不明	
17	003-02	土器器・小皿	試掘 G 9 黄土及び黄土	( 8.0)	—	—	ユビオサエナデ	精良	良	外 7.5Y R8/3 内 7.5Y R8/4	黄褐色 黄褐色	口縁部30%		
18	003-01	土器器・薄とし 高脚	試掘 G 9 黄土及び黄土	(10.8)	—	—	ヨコナデ	精良	良	外 7.5Y R8/4 内 7.5Y R8/1	黄褐色 灰白	口縁部10%	器面の磨耗のため 詳細不明	
19	007-01	土器器・鉢?	試掘 T 3 黄土・灰砂層 付近	(28.2)	—	—	ヨコナデ	精良	良	外 7.5Y R8/8 内 7.5Y R8/1	黄褐色 黄褐色	口縁部30%		
20	002-06	土器器・鉢	試掘 G 9 黄土及び黄土	—	—	—	ヨコナデ	良	良	外 7.5Y R6/6 内 7.5Y R6/6	黒 緑	口縁部10%	外面に付家	
21	002-04	山茶碗	試掘G 6付近 フレンチ 1 表 掘	6.6 底径	—	—	ロクロナデ、底部外面に 赤切り痕	良	良	外 2.5Y7/1 内 2.5R7/1	灰白 灰白	底部100%	クロロ回転方向は 不明	
22	002-05	山茶碗	試掘 表 掘	( 7.0) 底径	—	—	ロクロナデ、底部外面に 赤切り痕	良	良	外 2.5Y R7/1 内 2.5Y R7/1	灰白 灰白	底部80%	クロロ回転方向は 不明	
23	003-04	山茶碗	試掘 表 掘	( 8.0) 底径	—	—	ロクロナデ、底部外面に 赤切り痕	良	良	外 2.5R8/2 内 2.5Y8/1	灰白 灰白	底部40%	クロロ回転方向は 不明	
24	002-08	磁胎小皿	試掘 表 掘	(10.2)	—	—	ロクロナデ、口縁部内外 面に施釉(鉄釉)	良	良	外 7.5Y R8/2 内 7.5Y R7/1	灰白 黄緑	口縁部30%	クロロ回転方向は 不明	
25	003-03	磁胎小皿	試掘 表 掘	( 9.2)	—	—	ロクロナデ、口縁部内外 面に施釉(鉄釉)	良	良	外 5Y R4/4 内 5Y R3/4	紅、黒 黒赤	口縁部15%	クロロ回転方向は 不明	
26	003-06	須恵陶	試掘 T 1内 表 掘	( 8.6)	—	—	ロクロナデ、削り出し黒 台、内外面施釉(鉄釉)	良	良	外 N4 内 7.5G Y	灰 黄緑	口縁部〜底 部50%	クロロ回転方向は 不明	

第26-1表 遺物観察表

No	登録 No	器 種	出土位置 速 詳	法 量(cm)			調整技法の特徴	胎 土	焼成	色 調	残 存	備 考	
				口 径	器 高	その他							
27	005-05	これ鉢	試掘 T 6 表 採	(38.8)	—	—	ロクロナデ	良	良	外 内 N8 N3	灰白 緑灰	口縁部30%	ロクロ回転右回り
28	006-01	すり鉢	試掘 T 6① 表土～砂層	—	—	—	ロクロナデ	良 砂粒を含む	良	外 10Y R6/4 内 10Y R6/5	灰白 赤褐色	口縁部小片	
29	006-02	甕	試掘 T21①内 表土～	—	—	—	ナデ	良 砂粒を含む	良	外 内 N8 N7	灰白 灰白	口縁部破片	常滑産
30	006-03	甕	試掘 T7②内 表土～砂層	—	—	—	ナデ	良 砂粒を含む	良	外 内 N7 N7	灰白 灰白	口縁部破片	常滑産
31	003-05	瓶子	表 採	—	—	—	口縁部内外面流胎	良	良	外 7.5G Y7/1 内 2.5G Y7/1	黒オリーブ灰 黒オリーブ灰	口縁部40%	
32	005-02	合子蓋	試掘 T 3 表土～灰粘底	( 5.4)	—	—	ロクロナデ 口縁部内外面流胎	良	良	外 7.5Y8/1 内 2.5G Y7/1	灰白 灰白	口縁部30%	
33	003-07	青銅皿	試掘 T 6①内 表土～砂層	(14.2)	—	—	ロクロナデ 口縁部内外面流胎	良	良	外 5G Y7/1 内 2.5G Y7/1	灰白 灰白	口縁部30%	
34	002-03	青銅碗	表 採	(15.9)	—	—	ロクロナデ 口縁部内外面流胎	良	良	外 10G7/1 内 10G7/1	黒緑灰 黒緑灰	口縁部25%	
35	002-07	加工円盤	試掘 G 6竹辻 表 採	3.9 縦	3.8 横	0.4 厚	全周研磨	良 砂粒を含む	良	外 5Y R6/8 内 5Y R7/6	黒 黒		土部砂輪の体部片 転用
36	006-01	加工円盤	試掘 T 5④	3.6 縦	3.1 横	0.4 厚		並	良	外 10Y R8/2 内 10Y R8/3	灰白 灰黄緑		土部砂輪の体部片 転用
37	006-05	加工円盤	試掘 T 7④内 表 採	3.8 縦	3.9 横	0.8 厚		並	良	外 7.5G Y7/1 内 N7	灰白 灰白		灰胎陶器の体部片 転用、未製品
38	006-09	加工円盤	試掘 T 3 表土～	4.0 縦	4.3 横	1.4 厚		並 砂粒を含む	良	外 10R6/6 内 10R6/6	赤褐色 赤褐色		常滑産大甕の大部 片転用
39	006-07	加工円盤	試掘 T 1 表土～	3.9 縦	3.8 横	1.3 厚	全周研磨	良 砂粒を含む	良	外 7.5Y R8/4 内 7.5Y R8/2	黄褐色 灰白		常滑産大甕の大部 片転用
40	006-06	加工円盤	試掘 T 7④ 表土～砂層	4.2 縦	4.2 横	1.4 厚		並	良	外 7.5R4/1 内 7.5R4/6	黒赤灰 赤		常滑産大甕の大部 片転用
41	006-04	加工円盤	試掘 T 7① 表土～砂層	4.4 縦	4.4 横	1.5 厚		並	良	外 2.5Y R6/1 内 2.5Y R6/6	赤灰 緑		常滑産大甕の大部 片転用
42	006-10	加工円盤	試掘 T 1 表土～	4.4 縦	4.6 横	1.4 厚		並	良	外 2.5Y R6/3 内 2.5Y R6/3	灰白 灰白		常滑産大甕の大部 片転用
43	006-08	加工円盤	試掘 T 2 表土～砂層	4.4 直径	—	1.4 高		良	良	外 内 N7 N7	灰白 灰白		天目茶碗の底部転 用
44	006-02	加工円盤	試掘 T 1 表土～	4.4 直径	—	1.6 高		並	良	外 内 N8 N7	灰白 灰白		天目茶碗の底部転 用
45	007-05	加工円盤	試掘 T 2 表採	2.1 縦	1.9 横	0.4 厚		並	良	外 7.5Y6/1 内 7.5Y6/1	灰 灰		熊野陶器片の転用
46	007-04	加工円盤	試掘 T 1 表土～	2.7 縦	2.7 横	0.5 厚		並	良	外 2.5Y7/2 内 2.5Y7/2	灰黄 灰黄		すり鉢の体部片の 転用
47	006-03	加工円盤	試掘 T 5④	2.8 縦	2.4 横	1.0 厚		並	良	外 2.5Y R7/4 内 2.5Y R6/4	赤赤緑 灰白		常滑産大甕の体部 片転用、未製品
48	007-06	加工円盤	試掘 T 2 表採	2.8 縦	2.6 横	0.8 厚		並	良	外 10Y R8/2 内 10Y R8/2	灰白 灰白		すり鉢の体部片の 転用
49	009-01	木製品 杓子	試掘 G 9	(21.9) 縦	6.0 横	1.5 厚							ヒノキ製の榿を 使用
50	009-02	木製品 筒底	試掘 T 5①	10.8 縦	(6.8) 横	0.9 厚							ヒノキ製の榿を 使用
51	009-03	木製品 杵	試掘 T 1	(39.0) 縦	8.0× 4.0 幹部	2.5× 2.9 幹部							コウヤマキ製

第26-2表 遺物観察表

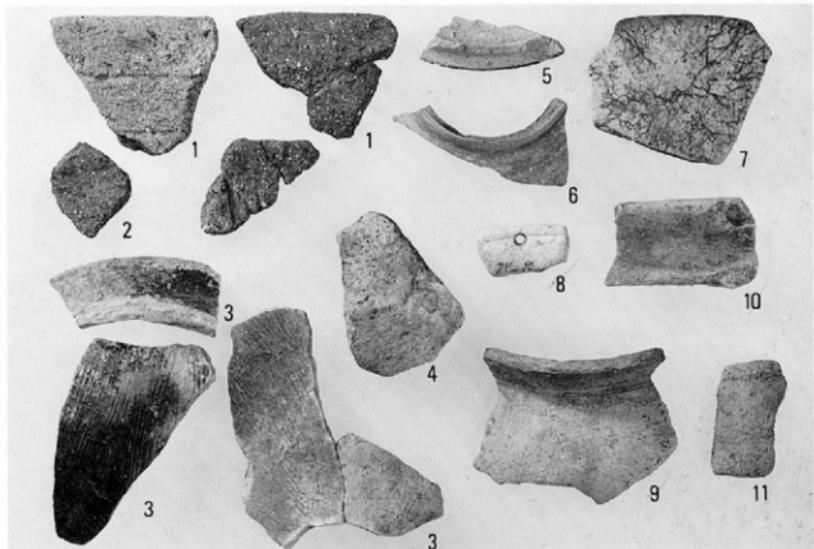
P.L. 1



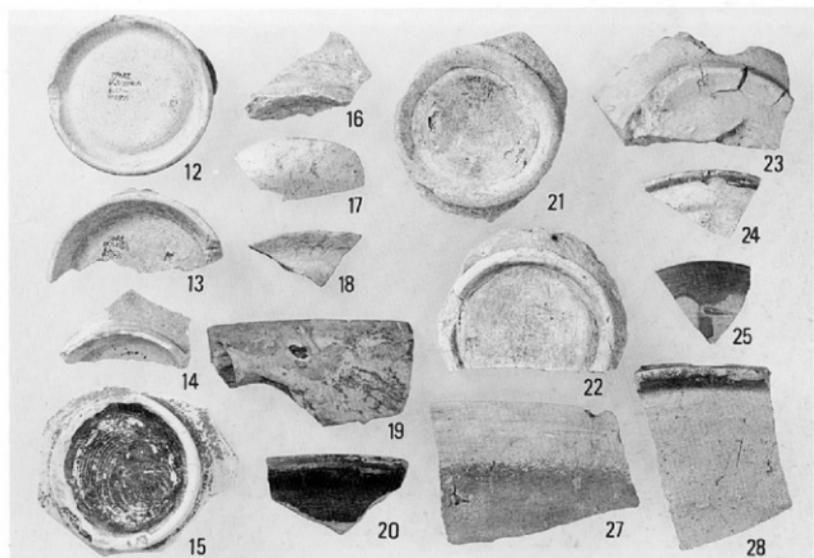
遺跡近景（東から）



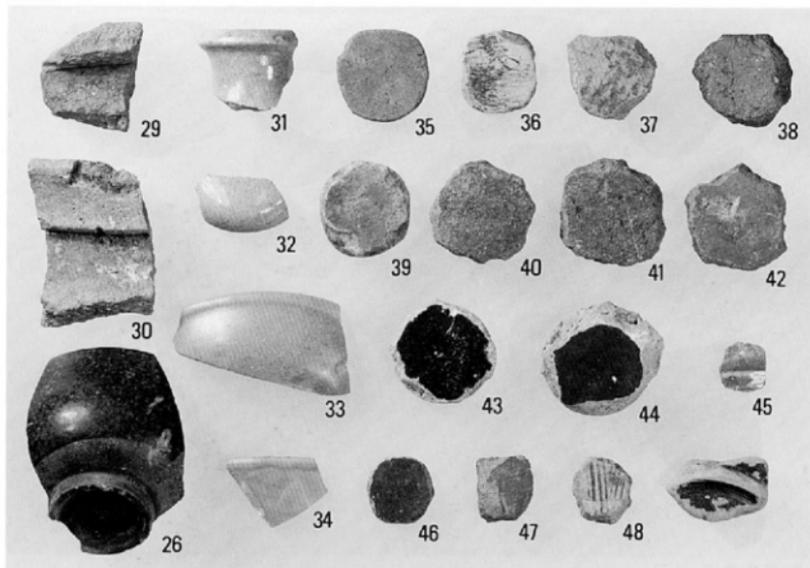
低位段丘部近景（南から）



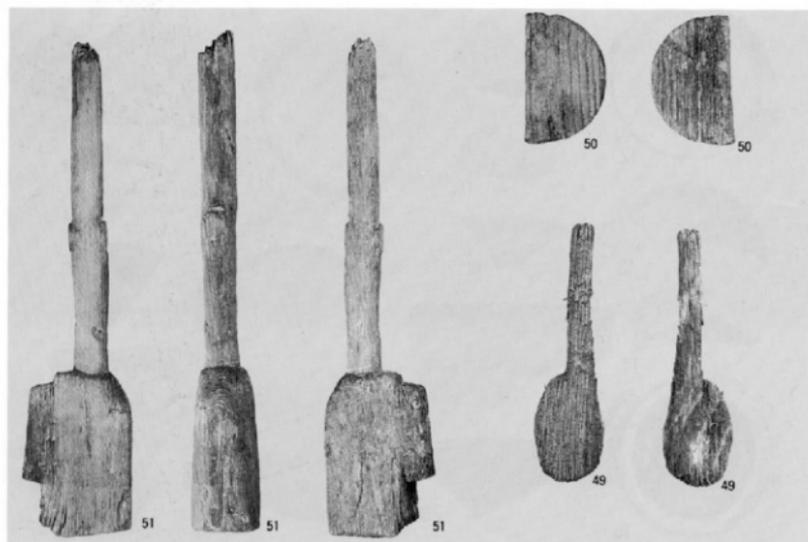
出土遺物



出土遺物



出土遺物



出土遺物

## VI. 巢護遺跡

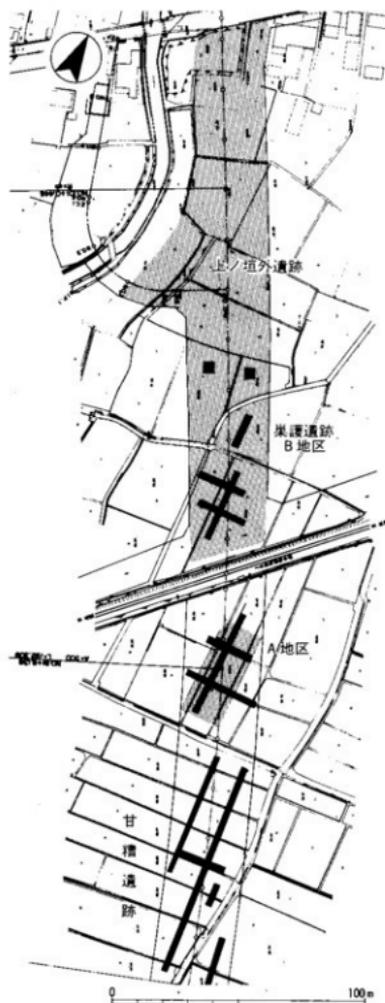
### 1. はじめに

巢護遺跡は甘糟遺跡の北に隣接する水田地帯に位置し、行政的には多気町荒崎字巢護に属している。分布調査時に多数の遺物が散布していることと、古代条里制の名残である土地割りが残っていたことから、既述の甘糟遺跡地も含めた範囲を、とりあえず多気郡条里遺構と名付け、調査対象遺跡として取り扱うこととした。

1991(平成3)年8月26日～10月14日まで、甘糟遺跡とともに試掘調査を実施した。この時には、バイパス用地外の水田耕作にからんで、坪境となる畦畔にはほとんどトレンチが設定できず、条里に關係する遺構の確認が十分なされなかった。結局、試掘調査では条里に關する遺構が検出されず、中世の遺物がまぎらって出土した2カ所について、本調査を実施することになった。本調査の対象となったのは、JR紀勢本線の線路をはさんで南北にわかれ、線路の南側をA地区、北側をB地区とよぶことにした。

なお、B地区は北で上ノ垣外遺跡に隣接しているため、遺跡範囲についてどう区分するかが問題となった。上ノ垣外遺跡は、周囲より若干高い自然堤防上に立地しており、地形的にはまともりが認められたため、この高い部分を上ノ垣外遺跡とし、字上ノ垣外に属しながら、地形的に異なる南端の水田部は巢護遺跡としていた。しかし、発掘調査の結果からは、この部分にも上ノ垣外遺跡の遺跡範囲が及んでいることが明らかとなった。そのため、当初は巢護遺跡として取り扱っていた水田部分も上ノ垣外遺跡に含めることにした。したがって、上ノ垣外と巢護の字境を走る農道を両遺跡の境とすることにした。

周囲の農業用排水の關係から、B地区の一部については1992(平成3)年度末に、本調査に先行して急遽調査(約150m<sup>2</sup>)を実施した。(田村陽一)



第98図 調査区位置図(1:2,000)

## 2. 調査の結果

### 1. A地区

#### (1) 遺構

A地区はJ R紀勢本線南側に位置する。調査前の現況は、後背湿地と呼ばれる低湿地に広がる水田であった。基本的な層序は上から第1層(表土) 灰褐色土に黄褐色土混入、第2層(床土) 黄灰色土に黄褐色土混入、第3層黄褐色土に黄灰色土混入、第4層(包含層) 黄灰色粘質土、第5層(検出面) 黒褐色土に自然木や葉・枝など混入、第6層淡黄色砂、第7層青灰色粘土となり、地表から約2.1~2.6mで礫層にいたる。

調査の結果、条里制に関連するような遺構、およびその他の遺構は確認できなかった。調査区北東の隅で自然木や葉・枝などが腐敗せずに堆積した窪地が確認された。その規模は7.1×2.0m、深さ約20cmほどであった。遺物は出土しなかったため、時期などは不明である。

#### (2) 遺物

試掘調査も含めて整理箱に7箱ほど出土した。遺構は検出できなかったため、すべて包含層からの出土である。以下順次報告する。

#### A. 縄文時代の遺物(2~4)

双口壺(2) 双口の異形土器である。底部は欠損するため不明であるが、壺状の胴部に立ち上がるふたつの筒状の口縁部を有する。胴部内面には粘土紐の接合痕が観察できる。器表面は刻みとへら描き沈線で文様が描かれている。

口縁部外面には表裏で方向を変えて、連続的なへら刻みによる短沈線を描く。その下に筒状の口縁部の対向する内側部分から始まって、ほぼ全周して終わる長楕円区画沈線文を施す。この区画文の中には3本の並行沈線を充填している。

頸部にも並行斜沈線を施して、複合鋸歯文状にしているようであるが、磨滅が激しく詳細は不明である。また、口縁部のつけ根部分にあたる胴部上半にも、はしこ状の沈線文が見られる。

体部上半にはやはり、並行沈線によって長楕円区画が描かれ、その中を複合鋸歯文で埋めている。胴部下半には施文されない。

器壁は薄く仕上げられて、ていねいなヘラミガキが施された精製土器である。胎土は精良で、1~2mmの石英や長石粒を含んでいる。焼成は良である。

深鉢(3・4) 3は波状口縁の深鉢片と考えられ、北白川上層式期に、4は磨滅のため器面が荒れて文様が全く見えないが、器形からして一乗寺K式~元住吉山式にあたると思われる。

#### B. 弥生時代の遺物(5~9)

壺型土器(5~8) 5は壺の口縁部で、円形浮文が施されている。6~8は底部のみの残存で、風化が激しい。

台付甕(9) 台付甕の脚部で底部に穿孔が施されている。内外面にはハケ目を施す。

#### C. 古墳時代の遺物(10)

土師器高杯(10) 杯上部はヨコナデされ、下部は絞りにぎみにユビオサエされる。古墳時代後期のものと思われる。

#### D. 飛鳥・奈良時代の遺物(11~14)

土師器杯(13) 平底の底部より屈曲して立ち上がる口縁部をもつもので、風化が激しい。

土師器皿(14) 平底の底部より強く屈曲して立ち上がる口縁部をもち、底部内面に暗文を施す。

須恵器杯(11) 口径11.3cm、推定高3.5cm。口縁部が外反する。

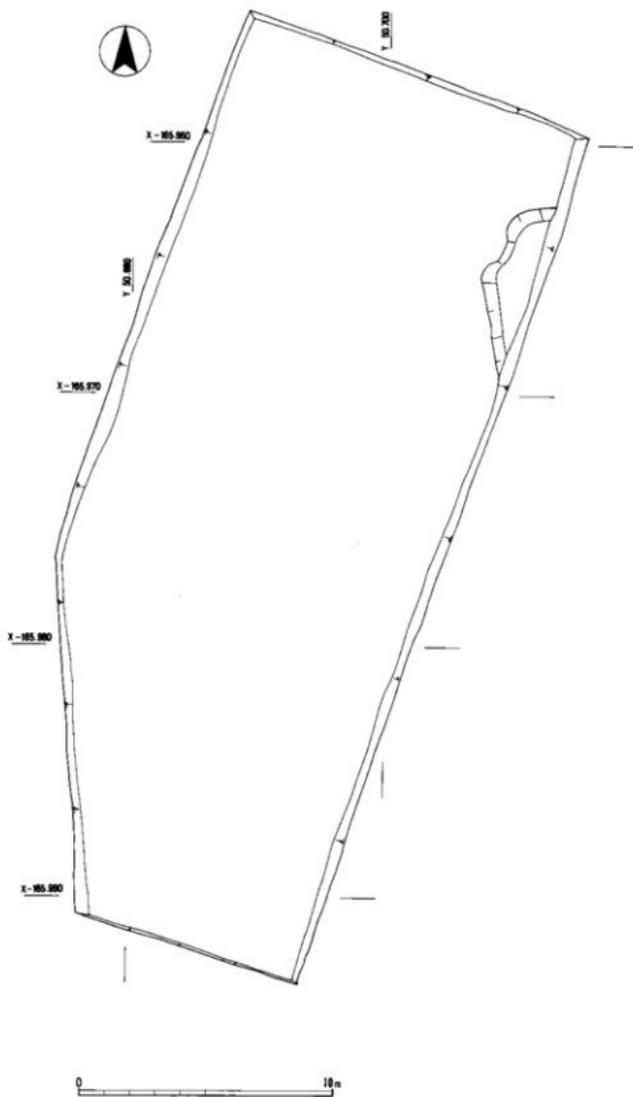
須恵器壺(12) 短頸壺の口縁部である。

#### E. 平安時代~鎌倉時代の遺物(15~25)

石帯(1) 長さ4.3cm、幅2.7cm、厚さ0.7cmをはかる流紋岩製の丸駒である。半円形を呈し、下部に長方形の穿孔をもち、裏面に装着用の孔が2孔1対で3ヶ所あけられている。重量は16.3g。

土師器皿(30) ロクろ製土師器の皿で、平安時代後期のものと思われる。

土師器甕(15~18) いずれもく字形に外反する口縁からなり、端部を内側に折り返すものである。



第99图 A地区平面图 (1 : 200)

平安時代後期のものと思われる。

灰釉陶器碗 (19~25) 20・22は三ヶ月高台で、その他は幅広の丸い高台で、平安時代中期のものと思われる。

F. 鎌倉時代以降の遺物 (27~31)

山茶碗 (29) 底部外面に墨書が見られる。

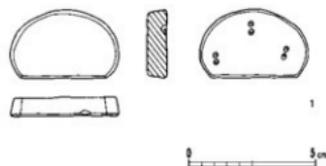
山皿 (27・28) 27は口縁部外面に面をもち、厚手である。28は低い高台がつき、口縁端部がやや外反する。

常滑産壺 (32) 口縁部が折り返され、赤褐色を呈し緻密で、焼成は堅緻である。

天目茶碗 (31) 青灰色の素地に茶褐色の釉が厚くかかった口縁部片である。

G. その他の遺物 (33~42)

その他、土鍾 (33)、砥石 (41)、刀子 (42)、



第100図 A地区出土遺物実測図 (1:2)

加工円盤 (34~39) などがある。

土鍾 (33) 胴部がふくらみをもつ紡錘状のもので、長さ3.3cm、幅1.3cm、孔径0.45cmをはかる。

砥石 (38) 上面と下面に使用痕が認められる。

刀子 (39) 錆による腐食がすすんでいるため詳細は不明。ほぼ中央部でくの字状に曲っており、右側には幅0.7cmの窪みが見られる。

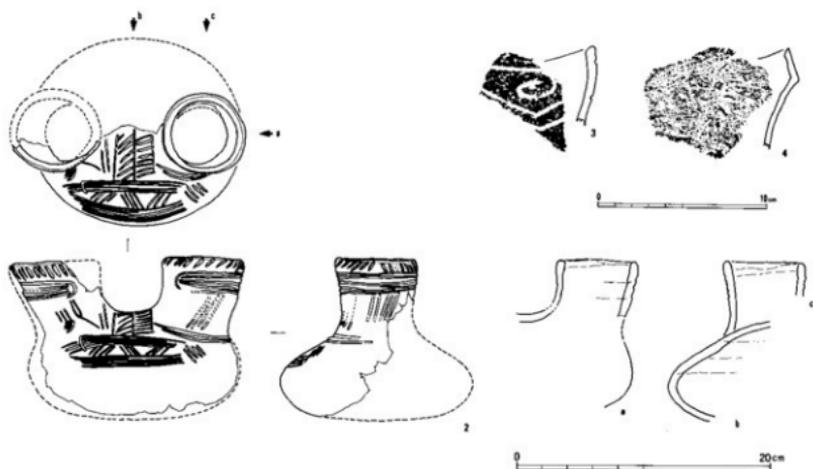
加工円盤 (31~36) 34は2本の沈線のある陶器碗の体部を利用しており、他は陶器壺の体部を利用して円形に加工している。

(3) 小結

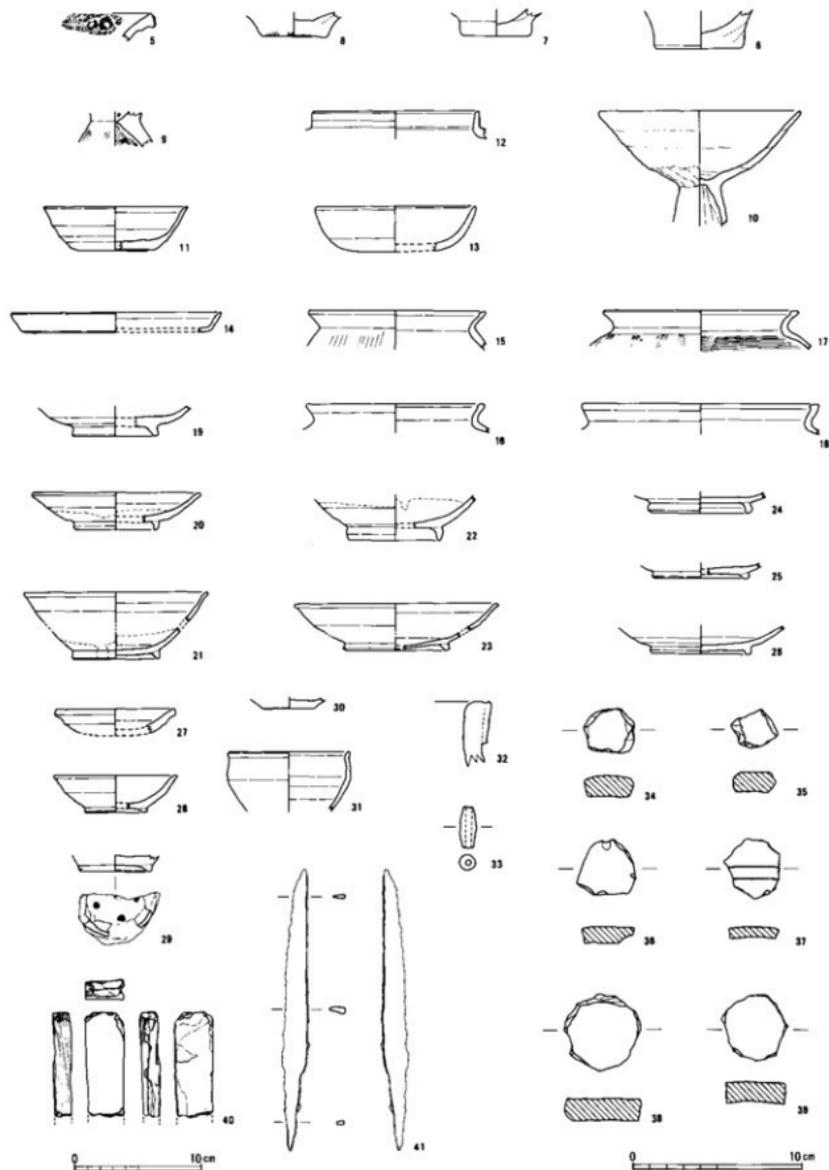
A地区では自然木や葉・枝などが腐敗せずに堆積していた窪地が検出されたが、遺構は発見できなかった。出土した遺物は包含層からではあるが、双口壺や石帯、緑釉陶器片などの特殊遺物が出土している。遺物の残存状況からは、簡単に流れ込みとは断定できない。調査区の近辺へと視点の拡大を図る必要がある。

出土遺物は縄文時代後期の土器をはじめとして、古墳時代・奈良時代・平安時代の土器、中・近世の遺物まで混じるが、平安時代中期から後期が遺物の中心時期であろう。

(東 良樹)



第101図 A地区出土縄文土器実測図・拓影 (2は1:4. 3・4は1:3)



第102図 A地区出土遺物実測図・拓影（1：4、ただし34～39は1：3）

No	登録 No.	器 種	出土位置 遺 構	法 量 (cm)				調整技法の特徴	胎 土	焼 成	色 調	残 存	備 考	
				口 径	器 高	その他	その他							
1	1-1	石製法 石管		—	—	長さ 4.3 幅 2.3 厚さ 0.7		—	—			完整		
2	2-1	縄文土器 深口甕	試掘トレンチ No19 包	右 左	6.2 5.7	横溝 12.0		底 0.5~1cm次の 砂粒多く含む。	不良					
3	3-5	縄文土器 深鉢	試掘トレンチ No19 包				内面ナデ ・内底は、風化重しく、調 整等不詳。	底 1~2mm次の砂 粒多く含む。	不良				口縁部のみ3 ×4cmの小	
4	4-5	縄文土器 深鉢	M69区 包					底 1mm以上の砂粒 混在たらず。	良	外 浅黄緑(10Y R5/2) 内 におい黄緑 (10Y R7/3)			6×3cm次の 小片。	北白河上層土器
5	3-7	弥生土器 甕	試掘トレンチ No19				・口縁部内・外面コナデ ・口縁部外面に彫刻文。	底	良	外 浅黄緑(10Y R4/4) 内 黄(5Y R7/6)			口縁部 3×4cmの 小片。	
6	3-2	弥生土器 甕	試掘トレンチ No19			底径 5.5	・内・外面ナデ ・底面外縁一箇オケエ	底 1mm次の砂粒を 多く含む。	良	浅黄緑(10Y R8/2)			底部のみ 100%	
7	3-1	弥生土器 甕	試掘トレンチ No19			底径 5.1	・内・外面ナデ	底 1~2mm次の砂 粒多く含む。	不良	外 黄緑(10Y R6/8) 内 黄緑(10Y R3/7)			底部のみ 100%	
8	3-6	弥生土器 甕	試掘トレンチ No19			底径 6.4	・内・外面ナデ	底 1mm次の砂粒多 く含む。	不良	内 黄(5Y R8/6) 内 黄緑(7.5Y R8/6)			底部のみ 25%	
9	5-9	弥生土器 台付甕	試掘トレンチ No19			台高部径	・内・外面ハケ目	底	良	外 灰白(2.5Y 8/2) 内 黄緑(2.5Y 6/2)			台部の底面の み50%	
10	1-5	弥生土器 高杯	Q69区 包	16		杯高	・杯部コナデ ただし、底面外縁は指 オケエ、内面はナデ。	底	良	外 におい黄緑 (10Y R7/4) 内 におい黄緑 (10Y R6/4)			・杯部65% ・脚部30%	
11	5-10	弥生器 杯	試掘トレンチ No19 表段	11.3	3.5		・杯部 内・外面クロコナ デ ・底面 内→一定方向ナデ 外→内より斜縁 いナデ	底 0.5~1mm次の 白色砂粒を含む。	良	灰白(N7)			20%	・口縁回転→磨けまわり
12	4-1	弥生陶器 短脚甕	試掘トレンチ No10	13.2			・クロコナデ	底	良	灰白(N8)			口縁部のみ 10%	・外縁に灰粒
13	6-5	土師器 杯	M68 包	12.7	3.6		・内：ナデ ・外：指オケエのみナデ ・口縁部 ココナデ	底	良	浅黄(2.5Y 8/3)			15%	
14	6-6	土師器 甕	Q68 包	16.5	1.6		・口縁部 ココナデ ・底面ナデ	底	良	浅黄緑(7.5Y R8/6)			口縁部のみ 10%	
15	3-4	土師器 甕	試掘トレンチ No19	13.9			・口縁部 ココナデ ・杯部 外 ハケ目	底	良	黄緑(10Y R7/8)			口縁部のみ 10%	・黄緑風化製
16	6-2	土師器 甕	N70 包	14.1			黄泥風化重しく、ほっき りし土質部はできないが、 ・杯部内面に、かすかにハ ケ目。	底	良	浅黄緑(10Y R8/3)			口縁部のみ 10%	
17	4-2	土師器 甕	M72 包	15.4			・口縁部 ココナデ ・杯部 内：横方向のハケ 目 外：縦方向のハケ 目(4.5cm)	底	良	口縁部及び杯部外縁 黄緑(2.5Y 7/6) 内 におい黄緑 (10Y R5/4)			口縁部のみ 10%	・杯部内面 黄緑(2.5Y 3/1)
18	6-8	土師器 甕	Q68区 包	18.7			・口縁部 ココナデ、内面に はハケ目	底	良	外 黄緑(10Y R4/1) 内 におい黄緑 (10Y R5/4)			口縁部のみ 40%	・外縁にス入付。
19	1-3	弥生陶器 甕	Q69区 包		高台径 6.8		・杯部 ココナデ ・底面 内：同心状のナ デ 外：糸切り痕あり	底	良	灰白(7.5Y 7/1)			底部のみ 40%	・底面内面黄緑 ・底面内面に黒色のシミ
20	6-3	弥生陶器 甕	P70K 包	13.2	3.0		・クロコナデ	底	良	灰白(2.5Y 7/1) 胎の色 オリーブ黄(5Y 6/4)			40%	・灰粒つけかけ
21	5-11	弥生陶器 甕	試掘トレンチ No19	14.4?	5.5?	高台径 7.0	・クロコナデ	底	良	浅黄(5Y 6/3)			底部のみ 50%	・灰粒つけかけ
22	4-4	弥生陶器 甕	P69区 包			高台径 7.1		底	良	灰白(N8) 胎の色 オリーブ(5Y 5/4)			底面付近 30%	
23	7-2	弥生陶器 甕	M72区 包	16.1?	3.8?	高台径 7.5	・クロコナデ	底	良	浅黄(5Y 8/4)			底部のみ 50% 口縁部10%	
24	5-12	弥生陶器 甕	試掘トレンチ No19			高台径 7.2	・クロコナデ	底	良	灰白(N8)			底部のみ 30%	
25	6-9	弥生陶器 甕 (脚上)				高台径 7.2	・クロコナデ	底	良	灰白(2.5Y 8/1)			底部のみ 65%	・底面内面黄緑
26	7-1	弥生陶器 甕?	M73区 包			高台径 7.6	・クロコナデ	底	良	灰白(N8)			底面50%	・底面外縁 黄緑 ・杯部内面黄緑製認めらる。

第27-1表 A地区出土遺物観察表

No.	登録No.	部種	出土位置	法 量 (cm)			調査技法の特徴	胎 土	焼成	色 調	残 存	備 考
				口 径	口 高	その他						
27	4-3	小皿	P9区 包	9.5			・ロコロナゾ	やや粗	良	灰白(2.5YR/1)	口縁のみ 15%	
28	6-7	小瓶	N7区 包	9.7	3.0		・ロコロナゾ ・底面糸切りか?	やや粗	良	灰白(10YR/7/1)	20%	・口縁内面に粉のついたあと有り。
29	3-3	山形碗	試掘トレンチ N19			高台径 5.3	・ロコロナゾ ・底面 回転糸切り	やや粗 0.5~1mmの白 色砂粒含む。	良	灰白(2.5G YR/1)	底面のみ	・底面外面に黒点状の遺着。 ・高台の取り付けは、 ・高台にかすかに筋痕あり。
30	1-2	土師形 皿	Q9区 包			底面径 3.9	・ロコロナゾ ・底面 回転糸切り	やや粗 0.5~1mm大の 砂粒多く含む。	良	淡黄緑(7.5YR/4)	底面のみ 100%	・ロコロナゾ製
31	6-4	陶器 大目形碗	M8区 包	9.6			・ロコロナゾ ・底面	至	良	濃地 灰白(N8) 黒濁(10YR/2/2)	15%	
34	6-6	陶器 大目形碗	試掘トレンチ N19				・口縁部ロコロナゾ	至	良	外: 赤赤灰(10R7/1) 内: 灰白(N8)	口縁のみ 6×5cmの 小片	
33	5-8	土師	試掘トレンチ N19			長径 3.3 最大径 1.3		至	良	橙(2.5YR/7)	完整	
34	5-3	加工円盤	試掘トレンチ N19	径 2.6	厚 3.0	厚 1.5		至	良	橙(5YR/7)		・中世陶器(優?)を材料とする。 ・磨削痕あり。
35	5-6	加工円盤	試掘トレンチ N19 表裏	径 2.2	厚 2.9	厚 1.2	どちらかというところ、内面に打ち欠き。	至	良	外 灰赤(7.5YR/2) 内 灰白(赤濁 (7.5R/2))		・中世陶器(優?)を材料とする。
36	5-2	加工円盤	試掘トレンチ N19	径 3.5	厚 3.5	厚 1.0		至	良	灰白(N8)		・灰赤(優?)を材料とする。
37	5-4	加工円盤	試掘トレンチ N19	径 3.6	厚 3.3	厚 0.6		至	良	濃地 灰白(2.5YR/2) 黄(5Y7/6)		・近世陶器(優?)を材料とする。
38	5-6	加工円盤	試掘トレンチ N19	径 4.6	厚 4.5	厚 1.3	かきり円盤に近い打ち欠き。	至	良	外 灰白(赤濁 (7.5R/3)) 内 黄濁灰(10R4/1)		・中世陶器(優?)を材料とする。
39	5-1	加工円盤	試掘トレンチ N19	径 4.0	厚 4.0	厚 1.2	かきり円盤に近い打ち欠き。	至	良	赤赤灰(5R/1)		・中世陶器(優?)を材料とする。
40	1-4	磁石	M8区 包	焼付長 8.4	幅 3.0	厚 1.4						・灰赤とも見混。
41	1-6	刀子	Q6区 包	全長 13.5	刃長 7.2	刀頭最大幅 1.9						・刀頭前面にばみあり。 ・磨のため目釘穴等不現。

第27-2表 A地区出土遺物観察表

番号	名称	法 量 (cm)			色 調	時 期	遺 跡 名	遺 構	所 出 地	文 献
		長	幅	厚						
1	丸駒	4.3	2.6	0.5~0.55	濃緑色	平安	新宮跡 第54次	包含層	多気郡明和町	三重県考古学研究所蔵(年報1984) 史跡発掘部 発掘調査報告
2	丸駒	3.6	2.3	0.5~0.6	黒灰色	平安	新宮跡	不 明	多気郡明和町	新宮跡発掘資料
3	丸駒	3.5	2.3	0.5	平 白	平安	新宮跡 第23次	S B1155	多気郡明和町	三重県考古学研究所蔵(年報1979) 史跡発掘部 発掘調査報告
4	丸駒	3.3	2.5	0.5~0.6	白色	奈良末~平安初	新宮跡 第51次	S K2130	多気郡明和町	三重県考古学研究所蔵(年報1983) 史跡発掘部 発掘調査報告
5	丸駒	4.7	2.8	0.75	黒色	平安	新宮跡 第38次	包含層	多気郡明和町	三重県考古学研究所蔵(年報1981) 史跡発掘部 発掘調査報告
6	丸駒	4.5	3.0	0.6	黒色	平安	茶山遺跡	表 様	鈴鹿市美用町字茶山	美用館大字資料編集(「史料」第27号)
7	丸駒	4.3	2.6	0.8	白色	平安	落川遺跡	J 6 安	四日市市西宮部	昭和47年度奈良県埋蔵文化財調査報告書 埋蔵文化財調査報告書
8	丸駒	4.3	2.6	0.5	黒色	平安	寺田山遺跡	表 様	鈴鹿市美用町字寺田山	美用館大字資料編集(「史料」第27号)
9	丸駒	4.1	2.6	0.68	黒色	平安	前山遺跡	表 様	四日市市尾平町	埋蔵文化財調査報告書
10	丸駒	3.9	2.65	0.7	白色	平安	新宮跡 第8~10次	P 1 1	多気郡明和町	新宮跡発掘資料
11	丸駒	3.4	2.3	0.55	灰色	平安	新宮跡 第23次	S B1155	多気郡明和町	三重県考古学研究所蔵(年報1979) 史跡発掘部 発掘調査報告
12	丸駒	3.6	2.25	0.6	水色	平安	新宮跡 第56次	包含層	多気郡明和町	三重県考古学研究所蔵(年報1984) 史跡発掘部 発掘調査報告
13	蓮方	4.25	4.2	0.73	黒色	平安	穴大日遺跡	包含層	津市大屋原町	一般国道23号中野道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ
14	蓮方	4.2	3.9	0.65	黄緑色	平安	新宮跡	表 様	多気郡明和町	新宮跡発掘資料
15	蓮方	3.9	3.9	0.8	青黒色	平安	前山遺跡	包含層	松阪市土古部町	前山遺跡発掘調査報告書Ⅰ
16	蓮方	3.7	3.5	0.6	平 白	平安	西の宮遺跡	包含層	四日市市巾原	西の宮遺跡-部分マシンの埋蔵文化財調査報告書Ⅰ
17	蓮方	3.4	3.4	0.6	黒色	平安	新宮跡 第8~8次	包含層	多気郡明和町	新宮跡発掘資料
18	蓮方	3.2	3.1	0.58	黒色	平安	高向C遺跡	包含層	津市御前町	高向C遺跡発掘調査報告書
19	蓮方 (2.8)	(2.8)	0.5	平 白	平安	新宮跡 第62次	包含層	多気郡明和町	三重県考古学研究所蔵(年報1990) 史跡発掘部 発掘調査報告	
20	蓮方	2.7	1.3	0.7	黒色	平安	大河山総合遺跡	表 様	一志郡杉形八知	高松式土師器の調査報告
21	蛇尾	7.0	4.4	0.75~0.8	黒色	平安	新宮跡 第52次	S E3200	多気郡明和町	三重県考古学研究所蔵(年報1983) 史跡発掘部 発掘調査報告
22	蛇尾	6.2以上	3.7	0.7	黒色	平安	新宮跡 第32次	包含層	多気郡明和町	三重県考古学研究所蔵(年報1980) 史跡発掘部 発掘調査報告
23	蛇尾	3.3	2.5	0.55	黄緑色	平安	新宮跡 第90次	P 1	多気郡明和町	三重県考古学研究所蔵(年報1992) 史跡発掘部 発掘調査報告
24	蛇尾	3.5以上	3.2	0.7	白色	平安	新宮跡 第98次	包含層	多気郡明和町	※奈良出土博物館調査研究課により調査された
25	丸駒	4.3	3.7	0.7	黄緑色	平安?	新宮跡	包含層	多気郡多気町	今田出土

第28表 三重県出土の石帯一覽

## 2. B地区

### 1. 遺構

B地区はJR紀勢本線北側に位置する。字境の農道付近を中心として平安時代以降の井戸や溝などを検出したが、概して遺構は希薄であった。

#### (1). 平安時代の遺構

SD11 調査区北部を北東から南西にはしる浅い溝である。西端部でSE17に合すると考えられるが、SD10に切られて不明。幅60~70cm、深さ7~10cmである。土師器杯・甕・把手付甕、須恵器甕・長頸瓶、ササカイト製割片が出土した。平安時代中期以後期と考えられる。

SD16 東でSD11に、西でSD10に切られ全長4mほどが確認できた。幅40~70cm、深さ10cmの浅い溝である。土師器杯・甕、須恵器甕が出土。

#### (2). 平安時代~鎌倉時代の遺構

SE17 調査区北半のほぼ中央部で検出。直径2.5mほどのほぼ円形の井戸である。東側に半月状の浅い平坦地がある。深さは80cm、底面で湧水に達する。石積みの痕跡はなく、底面でも井戸枠のような施設は認められなかった。また、底面での完形もしくはほぼ完形の遺物の出土はなく、埋土から土師器皿・甕、須恵器甕、山茶碗、山皿、白磁、瓦片が出土した。

#### (3). 鎌倉時代の遺構

SD5 調査区西端近くをほぼ南北に走る、幅25~30cm、深さ5~7cmの浅い溝である。同時期のSD6と重複するが、SD6よりも新しい。平安時代末期の土師器甕片が微量出土した。

SD6 調査区を東北から南にかけてゆるやかにS字状をなしてはしる農道がある。この農道にはほぼ重複している。農道が利用されている都合上完掘できなかった部分で、溝の東肩のみ検出された。深さは15cmまで確認できた。土師器皿・甕・鍋、ロクロ製土師器、須恵器大甕、灰釉陶器、山茶碗、渥美産甕や布目瓦などが出土した。

SD9 調査区中央部で検出。幅70cm、深さ10~15cm、全長14mほどで、ゆるくカーブしながらSE17へつながる。土師器小皿・杯・台付碗・甕・長胴甕・鍋、須恵器甕・長頸瓶、山茶碗、山皿、こね鉢、布

目瓦、製塩土器、鉄滓などが出土した。

SD10 SD11・16に平行したり重複したりしてのびる浅い溝である。やはりSE17に関連するが、この溝はSD11・16を切っている。土師器杯・甕・長胴甕、須恵器甕、墨書山茶碗、瓦片が出土した。

SE18 SE17の北約3.5mに位置する素掘りの井戸である。平面形は東西2.2m、南北3.0mの楕円形で、ほぼ垂直に深さ1.1mまで掘り込まれている。底面で井戸枠などの施設は認められず、また、遺物も出土しなかった。埋土のオリブ灰色粘土より土師器皿・杯、山茶碗、木片が微量出土した。

#### (4). 室町時代の遺構

SD12 調査区北半で、SD11などと直交するかたちで検出された溝の痕跡である。かなりの削平を受けているものと思われる。幅30~50cm、深さ4~8cmほどで、長さも2m程検出されたにすぎない。土師器甕・鍋、瓦質土器片などが出土した。

#### (5). 時期不明の遺構

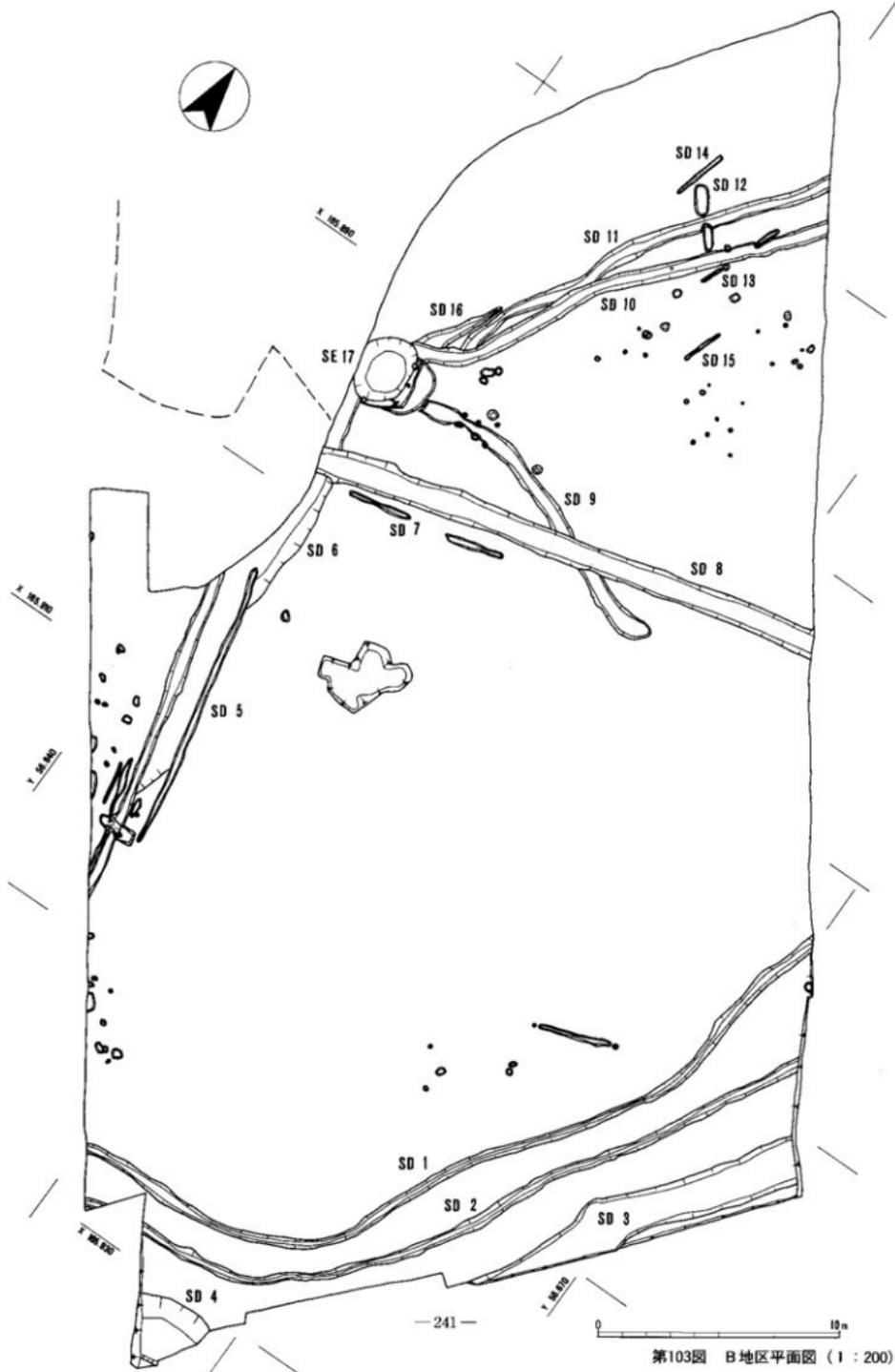
SD1・2 調査区の南端で検出した二本のほぼ平行する溝である。それぞれの溝は幅30~40cm、深さ約10cm、二本の溝の芯々距離は1.6~2.4mである。必ずしも両者は平行に走るわけではないが、芯々距離はほぼ1.8mの幅を有することから、道路の側溝と考えられよう。方位的にはゆるくカーブを描くため一定ではないが、調査区南端ではほぼ東西方向である。SD1からは土師器皿と思われる破片が微量出土しただけで、SD2から遺物は出土しなかったが、中世のものであろう。

SD3 SD1・2の東約2mで、SD1・2に平行するように検出された浅い溝である。幅1.6~2m、深さ30~40cmで底面は平坦。出土遺物なし。

SD4 調査区の南端でごく一部を検出。幅2.3m、深さ80cm。断面の形状が異なるがSD3と関連するものかもしれない。出土遺物はない。

SD7 調査区のほぼ中央を東西にはしる畦畔境の暗渠排水溝SD8と平行して検出された。ほとんどが削平されていると思われ、現状では幅30cm、深さ4cmほどと、痕跡的にしか残っていない。出土遺物はないが、埋土の色や状態などがSD5とよく似ており、条里の畦畔に伴う溝の可能性もある。

SD8 既述したが調査区中央をほぼ東西にはしる



第103图 B地区平面图 (1:200)

暗渠排水である。ごく最近まで溝は使用されていたものであるが、条里制地割りの畦畔にあたり、その起源は古いものであろうと考えられる。

SD13・14・15 調査区北半で検出。削平のため痕跡的に残る。3本ともほぼ方位を南北にそろえる。出土遺物はない。

## 2. 遺物

試掘調査も含めて整理箱に30箱ほど出土したが、遺構からの出土は少ない。以下順次報告する。

### (1) 遺構出土の遺物

#### SD11出土遺物

土師器壺(9) 頸部から「く」字状に外反する口縁部は、端部で丸みをもって内折する。体部外面は煤が付着するが、縦位の粗いハケメが施される。

#### SE17出土遺物

山茶碗(5) 底部のみの破片であるが、内面にはびっしりと炭化物が付着している。その厚さは1.5mmほどである。わずかに残る体部には釉だれが認め

られる。高台はしっかりしたもののだが、かなりつぶれも見られる。第2層から出土。

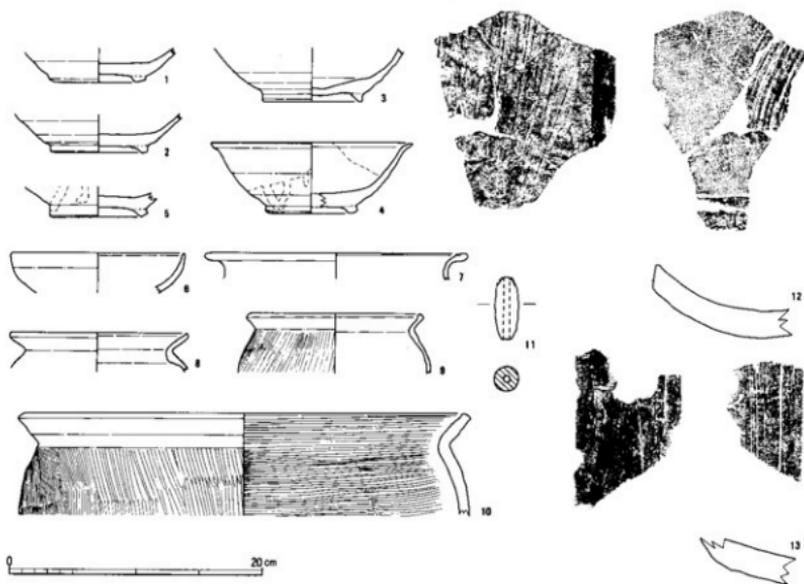
平瓦(13) 同じく第2層から出土の小片。凸面および端面はヘラケズリ、凹面もヘラケズリ調整で擦痕が残る。焼成は良である。他の12や70・71などより新しく中世ころのものと思われる。

#### SD6出土遺物

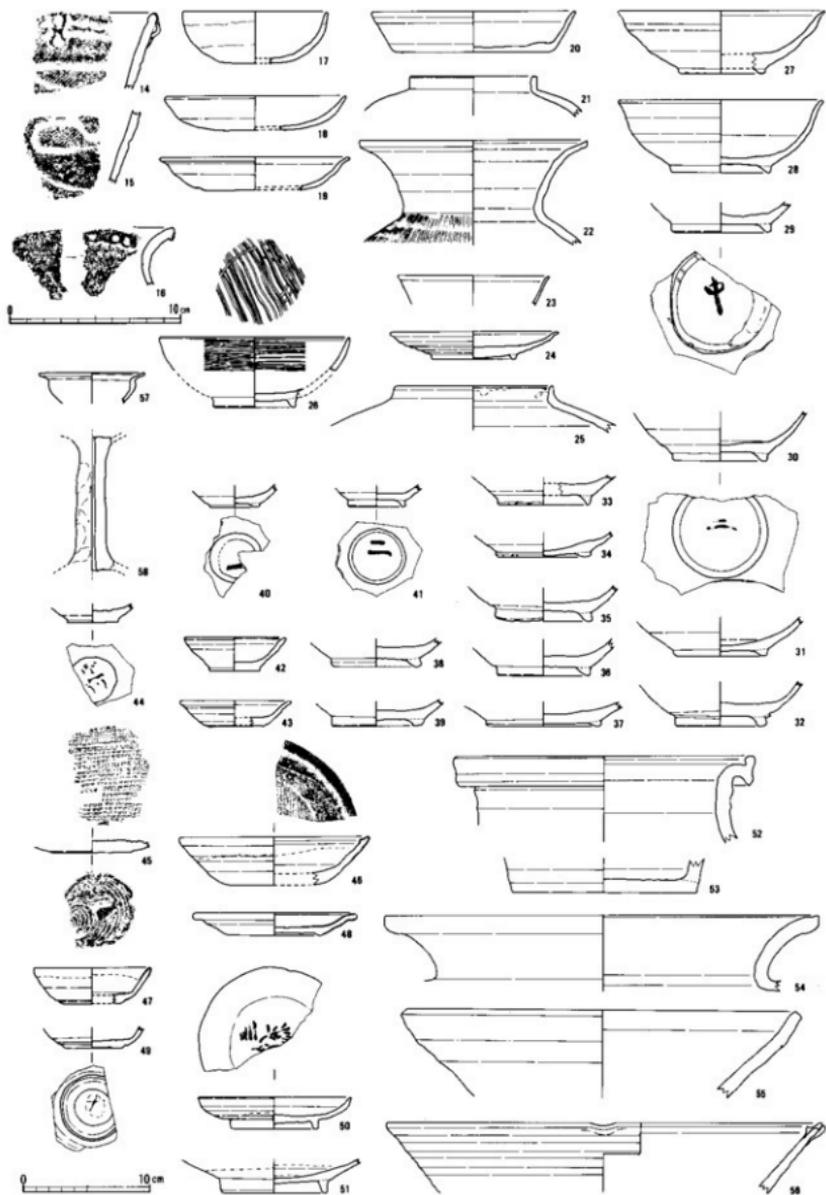
山茶碗(1~4) 図示したほかにも破片は多く出土している。4は3分の1ほどの残存であるが、図上で完形復元できた唯一のもの。内湾しながら立ち上がる体部は、口縁部で強く外反する。漬け掛けにより灰釉が施され、釉だれが高台付近にまで達している。高台は四角くつぶれ、柳殻痕が見られる。推定口径15.8cm、器高5.6cmである。

3も底部のみである。高台の断面形は三角形であるが、一部に柳殻痕が見られる。1、2も同様のものであるが、1は高台のつぶれがひどい。3は尾張産、他は渥美産と思われる。

この他、包含層出土として扱った32・35・36・38・



第104図 B地区出土遺物実測図・拓影(1:4)



第105図 B地区出土遺物実測図(1:4、ただし14~16は1:3)

39も、SD6の遺物として考えられる。

#### SD9出土遺物

土師器杯(6) 口縁部が内湾気味に取まる粗製の杯である。小片のため口径等も不確定であるが、時期的にはやや遅る平安時代のものであろう。

土師器鍋(7) 口縁部を内側へ折り返す鍋の口縁部小片である。折り返した後のヨコナデが強くないため、断面形は丸をもつ。口縁部の外反度が大きい。

平瓦(12) 包含層などのいくつかの破片とが接合した。最大で18mほど離れたものが接合している。凸面はヘラケズリ、凹面は布目痕が明瞭に残る。端部は未調整。胎土は緻密で焼成も良く、青灰色を呈する。

#### SD10出土遺物

土師器甕(8・10) 8・10ともに前代の遺物の混入品であろう。8は全体に磨耗がすすみ調整技法などは不詳。10は長胴甕である。

他に(11)の土鍾があるほか、多様な遺物が出土しているが、図示できるものはない。

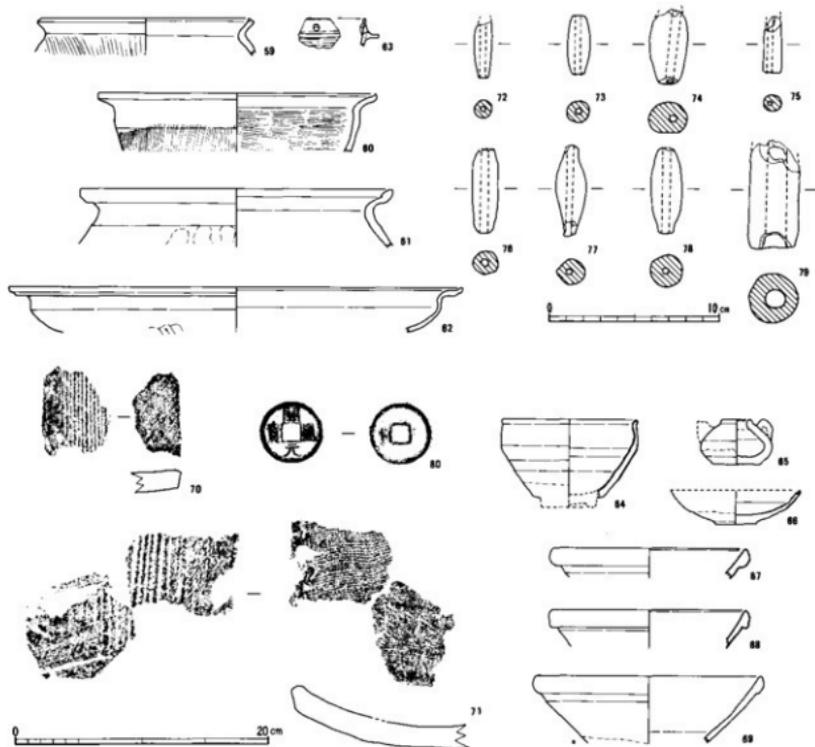
#### (2) 包含層出土の遺物

##### A. 縄文時代の遺物(14・15)

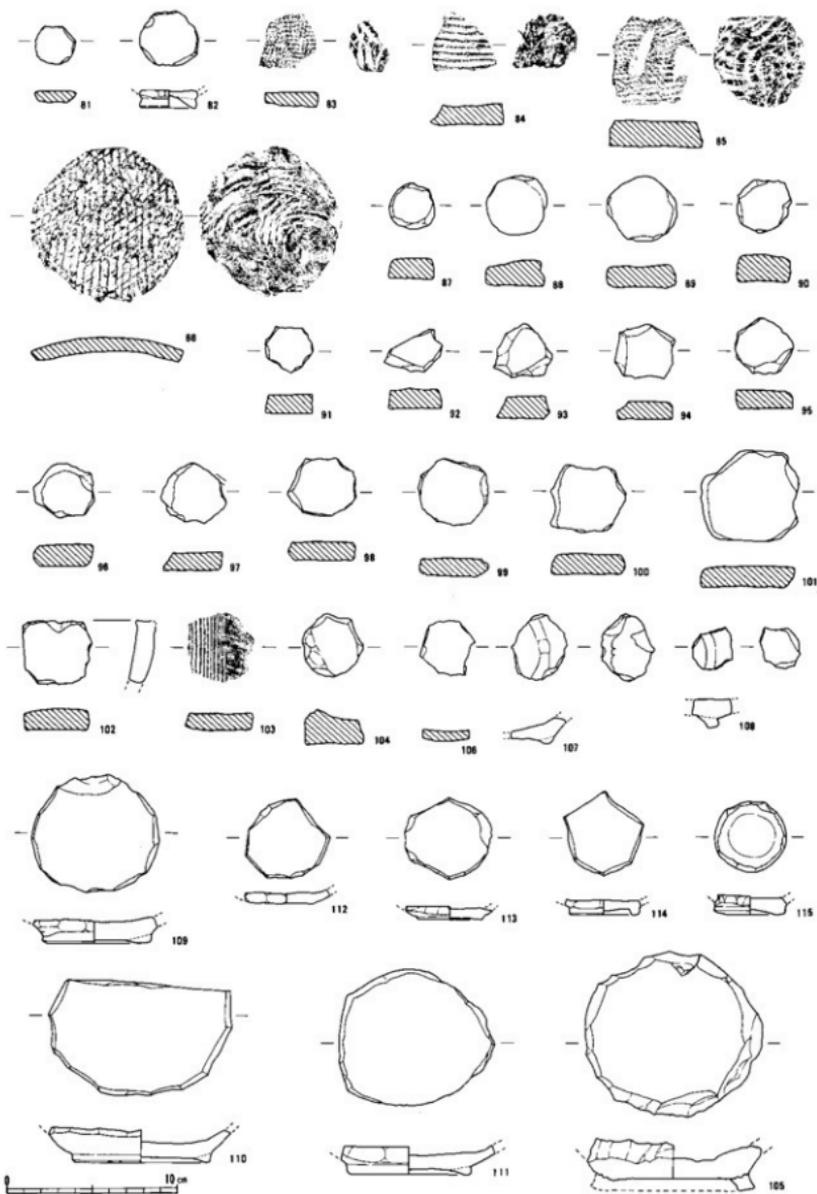
わずかに数片であるが、14・15(同一個体)のような後期前葉の堀之内2式の深鉢片が出土している。

##### B. 弥生時代の遺物(16)

1片のみ確認した。外反する甕口縁部の小片。内外面ともに細かにハケメ調整で、丸みを帯びた端部はハケキザミが施される。中期中葉ころのものである。



第106図 B地区出土遺物実測図・拓影(1:4、ただし72~79は1:3、80は1:2)



第107图 B地区出土遗物实测图·拓影(1:3)

らう。

C. 飛鳥～平安時代の遺物 (17～25・59・60)

図示できたものは少ないが、平安時代の遺物が量的には多い。土師器碗17は飛鳥ないしは奈良時代、須恵器杯20、短頸壺21、甕22は奈良時代に比定できよう。24・25は灰釉陶器、23は緑釉陶器である。

なお、緑釉陶器の破片は細片を含め10片ある。

D. 鎌倉時代以降の遺物 (26～58・61～69)

平安時代末期～鎌倉時代の遺物量が最も多く、山茶碗 (27～39) が主体をなすが完形品はない。

このうち、32・35・36・38・39は既述のとおり、SD6にからむものである。

27の内面には漆がほぼ全面に付着している。

また、29の底部外面に『中』、30には『二』の墨書がみられる。

40～43はいわゆる山皿である。40・41は高台を有する小碗で、41は底部外面に『二』の墨書がみられる。40は欠損のため不明瞭であるが、『一』であろうか。

42・43は高台が付かないもの。42は底部から若干の立ち上がりの後、体部へと続くもの。43はほとんど立ち上がりがなく、小皿というべきものである。

26の瓦器碗は伊勢地方では客体的に分布するものであるが、近年の発掘調査の増加で南勢地方においても、しばしば確認されるようになった。当遺跡でもすべて小片ながら3片出土している。26は推定口径15cm、同器高5.7cm。口縁部内面の端部直下に沈線が施されるもの。内外面ともていねいなミガキ、底部内面にはジグザグ文と螺旋状暗文が施される。

57は土師器鍋のミニチュア、58は土師器高杯の脚部と考えられる。いずれも中世後期に比定できるものであろう。63は小型の土師器羽釜。穿孔が焼成前になされている。

陶器類としては、瀬戸産のおろし皿 (45・46)、小鉢 (47・49)、折縁皿 (48)、常滑産のこね鉢 (55)、甕 (52・53) などがある。54は全体に器厚が厚めで、口縁部をやや肥厚させながらおさめるもので瀬美産と思われる。その他に天目茶碗 (64)、水滴 (65) などがある。66は産地不明。

50はすり絵の皿、51は輪ハグの皿か鉢、いずれも近世 (18世紀代) に下るものであろう。62の土師器

焙烙も近世のものと考えられる。

磁器類としては青磁のほか、白磁 (67～69) がある。

E. その他の遺物 (70～115)

そのほか、平瓦 (70・71)、土鍾 (72～79)、加工円蓋 (81～115) などがある。

81・82は土師器の転用品で、81は鍋の体部片を加工、82は小碗の底部を利用してしている。

83～86は須恵器甕の体部片を利用して加工を施す。84・85は未製品であろう。105は須恵器台付き長頸甕の底部を利用し、体部へ続く部分を打ち欠いて調整している。

87～101は陶器甕の体部片を加工するもので、量的に最も多い。87～89のように円形に形を整えた後に、全周をていねいに磨くものから、90や95のように部分的に磨くもの、磨かないものなどがあるが、未製品との区別はつかない。

102はすり鉢の口縁部、103は体部片を利用してしている。

また、山茶碗も多く利用されている。106～113のうち、106は体部片を、107・108は底部の一部を打ち欠いて加工しているほか、底部全体を利用してのもの (109～113) がある。なお、112・113は山皿の底部を利用するものである。

そのほか、施釉陶器 (114) や天目茶碗 (115) の底部を利用するものも見られる。

80は本調査区からの出土ではなく、東方に約百数十mほど離れた字相郡 (あいこおり) の水田で採集されたもので、開元通寶 (621年初鑄) である。

(3) 小結

B地区では平安時代から室町時代にかけての井戸や溝などの遺構が、発掘区の北半を中心に検出された。住居跡は検出されず、今回の発掘区は、北に隣接する上ノ垣外遺跡の周辺部にあたる部分と考えられる。

遺構の中で注目したいのは、SD5やそれに直交する方位をもつSD7・8である。これらは溝の埋没時期は把握できるものの、最初に掘削された時期はわからない。しかし、当地の桑里の方向が壺標北に対して約N9°Wであることから、多気郡桑里制との関連が想定できよう。

出土遺物は縄文時代後期の土器・石器をはじめ、古墳時代の土師器や、中世から近世の遺物も混じる

が、最盛期は平安時代後半から鎌倉時代にかけての時期であろう。(田村陽一)

### 3. 結 語

果渡遺跡はJR紀勢本線の線路を挟んで南北に広がる水田地帯に立地する遺跡である。その中心となる時代は平安時代から鎌倉時代にかけてで、遺構については十分な成果は得られなかったが、当該時期の多種多様な遺物が出土した。

#### (1) 遺構について

今回の調査で検出した遺構については、既に述べたごとく住居跡は検出されなかった。これは、当地区の地形条件が後背湿地と呼ばれる低湿地にあたるからで、居住に適さない土地であったからである。したがって、古代においては、水田として利用されていたことが考えられるのであるが、水田跡の考古学的手法による検出はできなかった。

当地の水田開発の歴史は古い。段丘背後の丘陵から流れ出る小支谷を山麓で堰止めた溜池による灌漑によって水田が営まれたもので、その開発の一部は一般的に8世紀以降に見られる「条里制の地割」に先立つ方格状地割として、古墳時代(5世紀末～6世紀頃)から開発が行われたと言われている。

条里制地割りの名残は近年まで残っていたが、平成2年に行われた場整備事業により姿を消してしまった。今回の調査区では、B地区で条里に関連すると考えられる溝を一部検出したにすぎないが、この結果からは、当地の条里制地割は平安時代後半頃にまで遡れることが推定できるようになった。

JRの線路を挟んだ南側のA地区では、条里制に関連するような畦畔・溝跡などの遺構は検出できなかった。大きな溝が沢沼地のような落ち込みの一部が検出され、底部には自然木や葉、枝などが腐食せずに堆積していた。

このように、A地区はより人間の居住には適い環境にあったことが判明した。ただ、遺物についてみると、A地区では既述のように石帯や緑釉陶器片のような特殊遺物が出土しているし、全面にわたってかなり多量の遺物類が出土していることから、遺跡

の周辺部だったとして簡単に片づけてしまえない問題を含んでいる。さりとてその理由を明快に論じられる結果は得られず、調査区の近辺に有力な組織・人物に関わる遺構の存在の可能性を指摘するにとどめざるを得ない。

#### (2) 遺物について

縄文時代については、試掘調査時にA地区に相当するトレンチから、他に類例を見ない双口壺が出土した。胎土に砂粒をあまり含まないことや、薄手であることなどから縄文土器ではなく弥生前期もしくは中期の土器ではないかの指摘もある。これについては類例もほとんどなく、確実なことは言えないが、当遺跡および上ノ垣外遺跡で縄文後期の土器が多数出土しており、逆に弥生前期もしくは中期に属する遺物が全くといってよいほど出土していないことから、縄文期に所属させるほうが妥当と考えられる。

時期の参考としては、岡山大学構内の津島岡大遺跡第5次調査で出土した加曾利B1式平行の双口の異形土器がある。また、弥生時代後期と考えられるものに、名古屋市見晴台遺跡第33次調査の濠から出土した双口壺がある。当遺跡例は形態的には見晴台例に近い。

また、類例のない異形土器として、当遺跡から約6km下流の金剛坂遺跡から完形で出土した環状壺がある。これも、類例のないことや伴出遺物がないことから時期が特定できないもので、弥生土器説もある。ただ、この環状壺の体部に施された3本～5本単位の短沈線による複合鋸歯文状の文様は、当地後期前葉の緑帯文土器などにみられるものに似ることや、他の出土縄文土器が3本沈線を基調とした磨り消し縄文の福田K2式類似の土器が主体であることから、その所属時期を後期前葉に求めたい。

果渡遺跡出土の双口壺も短沈線を基調とし、口縁部外面に短沈線による鋸歯状の文様、体部にも同様

の様子が認められる点など、類似性も見られることから、金剛坂例とも近いのではないと思われる。

ところで、当遺跡で出土している縄文土器型式は堀之内Ⅱ式であり、北に隣接する上ノ垣外遺跡では中津Ⅰ式～堀之内式・加曾利Ⅱ式などがある。この双口壺も概ね後期前葉～中葉頃のものと考えてよさそうである。

また、もう1点注目すべき遺物がある。それは県下25例目の出土になる石帯である。流紋岩製の丸柄であるが、第27表のように、県下25例のうち斎宮跡で6割にあたる15例が出土している。他では津市六大B遺跡のような地方官衙的な遺跡や、緑釉陶器が多数出土した度会郡御園村高向C遺跡など、一般集落とは考えにくい遺跡からの出土がほとんどを占める。

果護遺跡では、緑釉陶器片も11片出土しており、上ノ垣外遺跡を中心とする当遺跡周辺の特異性の一端が窺えよう。近接する東寺領大國荘・川合荘の荘城推定地との関わりの中でとらえられるものかもしれない。

### (3) 遺跡周辺の条里制地割りについて

当遺跡周辺の条里制研究は古くから行われ、主として歴史学からのアプローチがなされてきた。また1955（昭和29）年には藤岡謙二郎氏を中心として櫛田川流域の総合調査が行われ、歴史地理学的見地からの成果が公にされた。その中で谷岡武雄氏が流域全域に展開する条里制について詳しく調査され、レ

ポートしている。また、その中で中・下流域の条里地割の分布を25,000分の1地形図に復元された。その後、これらの成果をまとめた伊勢湾地域全域の条里制について集大成も行われている。しかし、全国的にみると、いくつかの地域では考古学的な調査成果による条里遺構の研究が行われ、新しい成果も報告されているが、当地方では最近では研究が全く停滞しているといっても過言ではない。

したがって当遺跡周辺についても、条里の復元など基本的な問題については一定の研究成果があるものの、なお問題点も多い。それら先学の研究成果をもとに、当遺跡の周辺についても再検討がなされている。それについて本稿で詳しく述べる余地はないので、別稿を参照された。

多気郡の古代条里制遺構として現地表に残存する（あるいは残存していた）一町四方を基調とした方格地割は、現在までにすでに国道42号以東は圃場整備のため姿を消してしまった。残るのは国道42号以西の三正田・四正田地区のみであるが、ここも近い将来変更の手が加わろう。

古代にあって耕地を大きく改変したであろう条里制の地割は、長く歴史的景観として現代まで残ってきたが、平成の現代に圃場整備と言う名の大規模な土地改変によって、その姿を消そうとしている。当地の条里制研究に残された課題は多い。

（田村陽一）

### 【註】

- ① 灰製の土師器、須恵器、陶磁器類を打ち欠けか磨ることにより、円形に仕上げたもの、あるいは高台を打ち欠いて加工したもの。小型円盤や加工円盤、円形加工陶磁製品など、いろいろな名称があるが、現在のところ統一された名称はない。とりあえずここでは加工円盤としておく。
- （参考）  
山崎恒哉「円形加工陶磁製品について」『近畿自動車道（勢～伊勢）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅴ』三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター1990
- ② 倉田康夫『条里制と荘園』東京堂出版 1976
- ③ 山本悦世、阿部芳郎、富樫孝志ほか『津島岡大遺跡Ⅱ』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター1994
- ④ 名古屋市見晴台考古資料館伊藤正人氏のご教示による
- ⑤ 谷本敏次『金剛坂遺跡発掘調査報告』明和町教育委員会 19

- ⑥ 三重県立図書館磯部克氏のご教示による。
- ⑦ 前掲②
- ⑧ 大西憲一『伊勢国飯野、多気河郡に於ける条里の復元』『歴史地理』85-2 1954
- ⑨ 藤岡謙二郎ほか『河谷の歴史地理』麗書房 1958
- ⑩ 谷岡武雄『櫛田川中・下流域の条里』『河谷の歴史地理』麗書房 1958
- ⑪ 野永貞三・谷岡武雄編『伊勢湾岸地域の古代条里制』東京堂出版 1979
- ⑫ 小林 秀『伊勢国飯野・多気郡の条里復元について』『研究紀要』第4号 三重県埋蔵文化財センター 1995

No.	登録 No	器 種	出土位置 遺 構	注 量(cm)				調整技法の特徴	胎 土	焼成	色 調		残 存	備 考
				口	径	器	高				その他	外		
1	001-02	山菜碗	M48 S D 6	—	—	—	—	コクロナデ、付高台 底部外面糸切り痕	並	良	外 内 N8 N8	灰白 灰白	底面100%	口口回転方向不明
2	001-03	山菜碗	M48 S D 6	—	—	—	—	コクロナデ、付高台 底部外面糸切り痕	並	良	外 内 N8 N8	灰白 灰白	底面100%	口口回転方向不明
3	001-01	山菜碗	M47 S D 6	—	—	—	—	コクロナデ、付高台 底部外面糸切り痕	並	良	外 内 N8 N8	灰白 灰白	底面100%	口口回転方向不明
4	002-05	山菜碗	N46 S D 6	(15.8)	5.7	—	—	コクロナデ、付高台、底 面外面糸切り痕、軸心部 底面外面糸切り痕	並	良	外 内 N8 N8	灰白 灰白	底面100%	口口回転方向不明
5	003-02	山菜碗	N45 S E 17	—	—	—	—	コクロナデ、付高台、底 面外面糸切り痕、軸心部	並	良	外 内 N8 N8	灰白 灰白	底面100%	底面内面に横付痕
6	002-03	土師器 杯	O46 S D 9	(13.6)	—	—	—	口縁部コクロナデ 底面外面糸切り痕	良	良	外 内 7.5Y R4/3 5Y R4/4	灰黄 灰黄	口縁部20%	割製
7	002-02	土師器 鉢	O46 S D 9	(20.9)	—	—	—	口縁部割り返し、コクロナ デ	並	不良	外 内 5Y 7/2 5Y 7/2	灰黄 灰黄	口縁部15%	—
8	001-05	土師器 壺	S44 S D 10	(14.1)	—	—	—	口縁部コクロナデ	並	良	外 内 10Y R7/3 10Y R6/3	灰白 灰白	口縁部20%	—
9	002-01	土師器 壺	R44 S D 13	(13.4)	—	—	—	口縁部コクロナデ 体部外面ハケメ	並	良	外 内 5Y R2/1 5Y R3/3	灰黄 灰黄	口縁部25%	体部外面付灰
10	004-03	土師器 壺	S44 S D 10	(35.0)	—	—	—	口縁部コクロナデ 体部外面ハケメ	並	良	外 内 10Y R4/3 10Y R7/2	灰白 灰白	口縁部10%	—
11	001-04	土師 壺	S44 S D 10	5.0 美	1.8 極	—	—	—	良	良	外 内 N8 N8	灰白 灰白	ほぼ100%	—
12	005-01	平瓦	P46 S D 9	—	—	—	—	凹部に青目黄 赤斑にヘラズリ	良	良	外 内 N4 N4	灰白 灰白	25%	—
13	003-01	平瓦	N45 S E 17	—	—	—	—	ヘラズリ	良	良	外 内 N8 N8	灰白 灰白	破片	—
14	006-03	織文土器 椀	O44 包含層	—	—	—	—	ナデ、8字状浮文、巻縁 溝、沈線、L状織文	中や中 粗粒を含む	並	外 内 10Y R2/1 10Y R2/2	灰白 灰白	口縁部破片	15と同一個体
15	006-04	織文土器 椀	O44 包含層	—	—	—	—	ナデ、沈線、L状織文	中や中 粗粒を含む	並	外 内 10Y R2/1 10Y R3/1	灰白 灰白	体部破片	14と同一個体
16	006-02	野生土器 壺	O51 包含層	—	—	—	—	口縁部外面ツケハケ、内 面ヨコハケ、両面ヤケシ	中や中 粗粒を含む	並	外 内 10Y R2/1 10Y R3/3	灰黄 灰黄	口縁部破片	—
17	007-02	土師器 杯	O45 包含層	(11.2)	4.2	—	—	口縁部コクロナデ、体部ナ デ、軸心部巻き上げ痕	良	良	外 内 7.5Y R4/3 7.5Y R4/3	灰黄 灰黄	口縁部一 体 40%	—
18	007-03	土師器 杯	O45 包含層1	(14.2)	2.8	—	—	口縁部内外面コクロナデ 体部外面ハケメツケ	良	不良	外 内 10Y R7/3 10Y R2/2	灰白 灰白	口縁部一 体 40%	—
19	007-01	土師器 杯	S49 包含層	(14.6)	2.6	—	—	ユビナマシケテ 口縁部コクロナデ	精造	良	外 内 7.5Y R4/4 7.5Y R7/4	灰黄 灰黄	口縁部一 体 25%	—
20	007-05	須恵器 杯	O43 包含層	(16.1)	3.3	—	—	コクロナデ 底部外面切刃磨し後ナデ	並	良	外 内 N5 N5	灰 灰	口縁部一 底 面 40%	口口回転方向は 左
21	007-04	須恵器 伝磁蓋	N47 包含層	(10.0)	—	—	—	コクロナデ	並	良	外 内 N8 N6	灰白 灰白	口縁部25%	口口回転方向は 不明
22	008-01	須恵器 壺	O46 包含層	(18.2)	—	—	—	コクロナデ、底部外面平 行タテヤケ、内面ナデ	並	良	外 内 N5 N4	灰白 灰白	口縁部一 体 25%	口口回転方向は 不明
23	008-03	緑釉陶器 鉢	P53 包含層	(11.9)	—	—	—	コクロナデ	良	良	外 内 2.5G Y7/1 2.5G Y7/1	黄緑 黄緑	口縁部30%	口口回転方向は 不明
24	008-04	灰釉陶器 皿	R52 包含層1	(13.6)	2.4	—	—	コクロナデ、トタン痕	並	良	外 内 2.5G Y4/1 N8	灰白 灰白	口縁部一 底 面 30%	口口回転方向は 不明
25	008-02	灰釉陶器 磁蓋	O46 包含層	(12.4)	—	—	—	コクロナデ、口縁部外面 に灰釉	並	良	外 内 N8 N8	灰白 灰白	口縁部25%	口口回転方向は 不明
26	009-06	瓦 筒	R51 包含層	(15.0)	( 5.7)	—	—	内外変じガキ、底部内面 ツブツブ、縁部凹縁文	良	良	外 内 N8 N8	灰白 灰白	口縁部25%	底面100%
27	010-01	山菜碗	O47 包含層	(16.3)	5.1	—	—	コクロナデ、付高台 靴取痕	良	良	外 内 N8 N8	灰白 灰白	口縁部一 底 面 30%	口口回転方向不明
28	011-01	山菜碗	O47 包含層	(16.1)	5.8	—	—	コクロナデ、付高台 靴取痕	良	良	外 内 N7/1 5B7/1	灰白 黄赤	口縁部20%	自然熱
29	012-03	山菜碗	試用T222内 土層上へ	—	—	—	—	コクロナデ、付高台	並	良	外 内 N8 N7	灰白 灰白	底面85%	底部外面に『中』 の墨書
30	013-08	山菜碗	O44 包含層	—	—	—	—	コクロナデ、付高台	良	良	外 内 N8 N8	灰白 灰白	底面90%	底部外面に『二』 の墨書
31	013-04	山菜碗	O46 包含層	—	—	—	—	コクロナデ、付高台	良	良	外 内 N8 N8	灰白 灰白	底面100%	自然熱
32	014-02	山菜碗	N47 S D 6	—	—	—	—	コクロナデ	良	良	外 内 10Y 7/2 10Y 7/1	灰白 灰白	底面100%	底部内面塗灰あり
33	010-02	山菜碗	L54 包含層	—	—	—	—	コクロナデ、付高台 靴取痕	良	良	外 内 N8 N8	灰白 灰白	底面40%	底部外面に朱書 判読不可
34	009-01	山菜碗	O46 包含層1	—	—	—	—	コクロナデ、付高台 糸切り痕、靴取痕	良	良	外 内 N8 N8	灰白 灰白	底面30%	—
35	014-04	山菜碗	N47 S D 6	—	—	—	—	コクロナデ、付高台 靴取痕	良	良	外 内 5N4/1 5N4/1	灰白 灰白	底面100%	底部内面に使用痕
36	014-05	山菜碗	N47 S D 6	—	—	—	—	コクロナデ、付高台 やや中 粗粒を含む	良	良	外 内 7.5Y6/1 7.5Y9/1	灰 灰	底面100%	底部内面に使用痕
37	009-02	山菜碗	O46 包含層1	—	—	—	—	コクロナデ、付高台 糸切り痕、靴取痕	良	良	外 内 N8 N8	灰白 灰白	底面30%	—
38	014-01	山菜碗	N47 S D 6	—	—	—	—	コクロナデ、付高台 糸切り痕	良	良	外 内 2.5Y8/1 2.5Y8/1	灰白 灰白	底面100%	底部内面に使用痕
39	014-03	山菜碗	N47 S D 6	—	—	—	—	コクロナデ、付高台	良	良	外 内 10Y8/1 10Y8/1	灰白 灰白	底面90%	底部内面に使用痕

第29-1表 B地区出土遺物観察表

No	登録 No	部 種	出土位置 遺 構	法 量(m)			調査技法の特徴	船 上	機 次	色 調		残 存	備 考
				口 径	高	その他				内	外		
43	013-06	山皿	P46 包含層 1	—	—	—	ロクロナデ、付高台 糸切り底、裾狭長	良	良	外 N8 N8	灰白 灰白	底面70%	底面外側に「一」 の彫刻、「二」の 凸線
44	009-03	山皿	N52 包含層	—	—	—	ロクロナデ、付高台 糸切り底	良	良	外 N8 N8	灰白 灰白	100%	底面～体部 底面外側に「二」 の凸線
45	013-03	山皿	N45 包含層 1	(8.2)	2.7	—	ロクロナデ、糸切り底	良	良	外 N8 N8	灰白 灰白	底面～体部 30%	
46	013-01	山皿	R52 包含層 (9.0)	(9.0)	2.1	—	ロクロナデ、糸切り底	良	良	外 N8 N8	灰白 灰白	底面～体部 40%	
47	009-04	山皿	O43 包含層	—	—	—	ロクロナデ	差	良	外 N8 N8	灰白 灰白	底面～体部 70%	底面外側に凸線
48	010-04	おろし皿	O51 包含層	—	—	—	ロクロナデ、おろし目 糸切り底	差	差	外 10Y R2/3 内 10Y R2/4	浅黄 灰白	底面80%	
49	015-02	おろし皿	O51 包含層 (14.8)	(14.8)	3.9	—	ロクロナデ、おろし目 口縁部内外面に彫刻	差	良	外 7.5Y R1 内 7.5Y R1	灰白 灰白	口縁～底面 25%	
49	016-01	縁輪小皿	目地区水跡 包含層 1	(9.4)	2.9	—	ロクロナデ、口縁部内外 面に彫刻	差	良	外 N8 N8	灰白 灰白	口縁～底面 30%	
50	013-04	縁輪小皿	O46 包含層	(12.8)	1.9	—	ロクロナデ、体内外面に 彫刻、削り出し高台	良	良	外 2.5Y R1 内 2.5Y R1	灰白 灰白	口縁～底面 30%	
51	011-03	酒杯水筒	—	—	—	—	ロクロナデ、糸切り底 体部外側に「フ」文	良	良	外 5Y 1 内 2Y 1	灰白 灰白	底面80%	底面外側に「大」 の凸線
52	009-09	P47 水筒	(12.0)	2.6	—	—	ロクロナデ、削り出し高 台、底面内面にすり粉	差	良	外 N8 N8	灰白 灰白	口縁～底面 30%	
53	011-05	皿、または鉢か	P48 水筒跡	—	—	—	ロクロナデ、削り出し高 台	差	差	外 N8 N8	灰白 灰白	底面～体部 100%	ロクロ面転写
54	012-04	壺	試掘T17①② 階段色地	(23.4)	—	—	「N」字状口縁、口縁部内 外にコナデ	差	良	外 7.5R 6/2 内 7.5R 7/1	灰白 灰白	口縁部小片 50%	青濁成
55	012-06	壺	試掘T17①② 階段色地	14.8	—	—	—	差	良	外 8R P41 N8	黄濁成 灰白	底面70%	青濁成
56	017-02	R44 包含層 1	(34.4)	—	—	—	口縁部やや中肥厚	差	良	外 N7/1 N8	黄オレンジ 灰白	口縁部30%	黄濁成？
57	018-01	鉢	O46 包含層 1	(31.0)	—	—	ロクロナデ	良	良	外 5R P5/1 N8/1	黄灰 灰白	口縁部30%	
58	018-02	片口鉢	O46 包含層 1	(34.5)	—	—	ロクロナデ	良	良	外 2.5Y 7/3 内 2.5Y 7/3	浅黄 灰白	口縁部30%	
59	017-03	土師器 縁 フニョフ	M49 包含層 1	(8.4)	—	—	エビオサエ、ナデ	良	不良	外 10Y R 8/3 内 10Y R 8/4	浅黄濁 灰白	口縁部～体 部50%	
60	009-07	土師器 高杯	Q50 包含層 1	10.8 脚長	2.4 脚径	0.6 孔径	エビオサエ、ナデ	差	良	外 10Y R 8/3 内 10Y R 8/3	浅黄濁 灰白	脚部100%	杯部、脚部跡は欠 損
61	019-01	土師器 壺	試掘T16② 階段色地	(16.7)	—	—	口縁部内側に上方へつま み上げ、体部外面ハナフ	差	良	外 3.5Y 8/3 内 2.5Y 8/4	浅黄 灰白	口縁部20%	
62	017-01	土師器 壺	S44 包含層 (22.2)	—	—	—	口縁部上方へつつまみ上 げ、体部内面に「フ」	差	不良	外 5Y R 7/8 内 5Y R 7/4	黄 灰白	口縁部30%	
63	019-02	土師器 壺	試掘T18 階段色地黄土	(24.6)	—	—	口縁部内面に「フ」、コナ デ、体部外側にエビオサエ	差	良	外 7.5Y R 7/8 内 7.5Y R 8/2	灰白 灰白	口縁部30%	
64	016-04	土師器 縁 フニョフ	目地区水跡① 包含層 1	(36.0)	—	—	口縁部内外面コナデ 体部すりヘラスツ	良	不良	外 5Y R4/4 内 5Y R7/8	灰白 灰白	口縁部30%	体部外面下部に付 属
65	012-05	土師器 鉢	試掘T167 高杯	—	—	—	口縁部内外面コナデ 機状穿孔	良	良	外 5Y R8/4 内 5Y R8/4	浅黄 灰白	口縁部～体 部30%	
66	013-05	天目茶碗	O47 包含層 (11.6)	(7.0)	—	—	ロクロナデ 底面にコナデドリ	良	良	外 7.5Y 7/1 内 7.5Y 7/1	灰白 灰白	口縁部～体 部50%	
67	011-02	水筒	Q50 包含層 1	2.4	3.6	—	ロクロナデ、体部上半施 粉、糸切り底	良	良	外 10Y R 8/1 内 2.5Y 8/1	灰白 灰白	口縁部～底 面50%	注口部欠損
68	013-02		P46 包含層 1	—	—	—	ロクロナデ、体部内面に 施、体部下半無粉	良	良	外 N8 N8	灰白 灰白	底面～体部 50%	
69	016-02	白磁 碗	O45 包含層 1	(15.2)	—	—	ロクロナデ、口縁部内外 面に彫刻	差	良	外 N8 N8	灰白 灰白	口縁部30%	
70	013-07	白磁 碗	目地区水跡 包含層 1	(15.5)	—	—	ロクロナデ、口縁部内外 面に彫刻	良	良	外 2.5Y R1 内 7.5Y 8/1	灰白 灰白	口縁部30%	
71	016-03	白磁 碗	R44 包含層 1	(18.0)	—	—	ロクロナデ、口縁部内外 面に彫刻	差	良	外 2.5G Y 8/1 内 2.5G Y 8/1	灰白 灰白	口縁部30%	
72	005-01	平瓦	L50 包含層 1	—	—	—	凸面端平、凹面有耳痕 側面ヘラ切	差	良	外 10Y R6/6 内 10Y R8/4	黄濁成 灰白	100%	削片
73	006-01	平瓦	R48 包含層 1	—	—	—	凸面端平、凹面有耳痕 側面ヘラ切	差	良	外 N4 N4	黄濁成 灰白	100%	削片
74	020-06	土師	R35 包含層 (3.4)	1.1	—	—	—	差	良	外 2.5Y 6/3	灰白	100%	口縁部欠損
75	020-05	土師	O46 包含層 (3.5)	1.3	—	—	—	差	良	外 10R 5/6	赤	100%	
76	020-04	土師	Q50 包含層 1 (4.5)	2.3	—	—	—	差	良	外 2.5Y 8/3	黄濁成	100%	口縁部欠損
77	020-07	土師	N47 包含層 (3.4)	1.1	—	—	—	差	良	外 N8	灰白	100%	口縁部欠損
78	020-03	土師	P46 包含層 1 (5.1)	1.5	—	—	—	差	良	外 2.5Y 8/1	灰白	100%	口縁部欠損
79	020-02	土師	S50 包含層 1 (5.6)	1.8	—	—	—	差	良	外 2.5G Y 7/1	黄オレンジ	100%	両面一部欠損
80	020-01	土師	S49 包含層 1 (5.2)	1.8	—	—	—	差	良	外 5Y 8/3	黄濁成	100%	口縁部一部欠損

第29-2表 B地区出土遺物観察表

No.	登録 No.	器 種	出土位置 遺 積	法 量(cm)			調整技法の特徴	胎 上	焼成	色 調		残 存	備 考
				口 径	径	高				その他			
79	020-08	土罐	O43 包含層	(6.5) 長	2.9	幅	—		並	良	外 N8 内 灰白		上端欠損
80	019-03	銅貨 肥前清見	西條 中野野 二ツツリ	—	—	—						100%	
81	021-02	加工内蓋	N50 包含層	2.4	縦	1.8	0.7 厚		並	不良	外 7.5 R8/3 内 10Y R8/2	浅黄 灰白	土器割の体部を 転用
82	021-03	加工内蓋	O52 包含層	3.3	縦	3.3	—		並	良	外 10Y R8/4 内 10Y R7/2	浅黄 浅黄	土器割の底面を 転用
83	016-06	加工内蓋	水跡②包含層	3.5	縦	3.4	0.9 厚	外蓋ナツヤ、内蓋青磁文	並	良	外 N8 内 N8	灰白 灰白	漆器割の体部を 転用、未製品
84	016-07	加工内蓋	水跡③包含層	3.7	縦	4.4	1.2 厚	外蓋ナツヤ、内蓋ナツ	並	良	外 N5 内 N5	灰 灰	漆器割の体部を 転用、未製品
85	006-06	加工内蓋	P48 包含層	5.3	縦	5.3	1.5 厚	外蓋ナツヤ、内蓋青磁文	並	良	外 N8 内 N8	灰白 灰白	漆器割の体部を 転用
86	015-01	加工内蓋	水跡③包含層	8.8	縦	9.4	0.9 厚	外蓋ナツヤ、内蓋青磁文	良	良	外 N8 内 N8	灰白 灰白	漆器割の体部を 転用
87	021-07	加工内蓋	Q43包含層1	2.7	縦	2.7	1.2 厚	全周研磨	並	良	外 7.5 R8/4 内 7.5 R8/4	浅黄 浅黄	陶器製の体部片を 転用
88	019-06	加工内蓋	試掘T22② 黄土一砂	3.5	縦	3.6	1.6 厚	全周研磨	並	良	外 2.5 R6 内 2.5 Y7/3	黄 黄	陶器製の口縁部片を 転用
89	021-10	加工内蓋	Q54 包含層1	3.9	縦	4.1	1.4 厚	全周研磨	並	良	外 1R5/8 内 1R5/8	赤 赤	陶器製の体部片を 転用
90	019-05	加工内蓋	試掘T22② 黄土一砂	3.1	縦	3.2	1.6 厚	全周の一部を研磨	並	良	外 2.5 R7/6 内 2.5 R7/6	橙 橙	陶器製の体部片を 転用
91	015-07	加工内蓋	水跡②包含層	2.7	縦	2.8	1.1 厚		並	良	外 7.5 R7/6 内 7.5 R7/6	橙 橙	陶器製の体部片を 転用
92	015-05	加工内蓋	水跡③包含層	2.6	縦	3.1	1.2 厚		並	良	外 2.5 R7/8 内 2.5 R7/8	橙 橙	陶器製の体部片を 転用
93	019-07	加工内蓋	試掘T17② 横灰色粘土	3.0	縦	3.3	1.3 厚		並	良	外 2.5 R6/8 内 2.5 R6/8	橙 橙	陶器製の体部片を 転用
94	015-04	加工内蓋	水跡③包含層	3.4	縦	3.4	1.1 厚		並	良	外 N8 内 N8	灰白 灰白	陶器製の体部片を 転用
95	021-04	加工内蓋	O51 包含層	3.4	縦	3.3	1.1 厚		並	良	外 7.5 R8/4 内 7.5 R8/6	浅黄 浅黄	陶器製の体部片を 転用
96	021-11	加工内蓋	N48 包含層	3.3	縦	3.5	1.3 厚		並	良	外 10Y R7/2 内 10Y R7/2	とんぼ とんぼ	陶器製の体部片を 転用
97	016-08	加工内蓋	水跡 黄土中	3.5	縦	3.9	1.1 厚		並	良	外 2.5 R6/8 内 2.5 R6/8	橙 橙	陶器製の体部片を 転用
98	021-08	加工内蓋	O47 包含層1	3.4	縦	4.0	1.1 厚		並	良	外 1R8/8 内 1R8/8	赤 赤	陶器製の体部片を 転用
99	012-02	加工内蓋	試掘T17② 横灰色粘土	3.9	縦	4.2	1.1 厚		並	良	外 1R8/1 内 1R8/4	赤赤 とんぼ	陶器製の体部片を 転用
100	021-06	加工内蓋	O54 包含層	3.9	縦	4.3	1.2 厚		並	良	外 5Y R6/6 内 5Y R6/6	橙 橙	陶器製の体部片を 転用
101	021-09	加工内蓋	P48 包含層	5.5	縦	5.7	1.3 厚		並	良	外 2.5 R7/6 内 2.5 R7/6	橙 橙	陶器製の体部片を 転用
102	021-12	加工内蓋	R44 包含層	3.6	縦	4.0	1.2 厚		並	良	外 7.5 R2/2 内 7.5 R3/2	緑赤 緑赤	すり鉢の口縁部を 転用
103	006-05	加工内蓋	N48 包含層	4.5	縦	4.3	1.0 厚		並	良	外 2.5 R/3 内 2.5 R/3	浅黄 浅黄	すり鉢の体部片を 転用
104	021-13	加工内蓋	O51 包含層	3.7	縦	3.7	2.1 厚		並	良	外 5Y R6/4 内 5Y R6/4	とんぼ とんぼ	陶器製の口縁部付 定を転用
105	019-04	加工内蓋	試掘T18黄土 下一段灰色土	9.9	縦	10.4	1.2 厚		良	良	外 N8 内 灰白	灰 灰白	漆器割付具割磨 の底面を転用
106	015-03	加工内蓋	水跡②包含層	3.3	縦	2.8	0.6 厚		並	良	外 N8 内 N8	灰白 灰白	山茶碗の体部片を 転用
107	015-06	加工内蓋	水跡③包含層	3.9	縦	3.3	0.9 厚		並	良	外 N8 内 N8	灰白 灰白	山茶碗の底面片を 転用
108	015-08	加工内蓋	水跡④包含層	2.5	縦	2.3	0.9 厚		並	良	外 N8 内 N8	灰白 灰白	山茶碗の底面片を 転用
109	021-01	加工内蓋	M51 T 包含層	7.1	縦	7.5	1.1 厚		良	良	外 N8 内 N8	灰白 灰白	山茶碗の底面を転 用
110	012-01	加工内蓋	試掘T18 黄土下～	(6.9) 縦	10.8 縦	—	0.9 厚		並	良	外 N8 内 N8	灰白 灰白	山茶碗の底面を転 用、欠損
111	011-06	加工内蓋	Q50 包含層	8.2	縦	9.1	0.9 厚		並	良	外 N8 内 N8	灰白 灰白	山茶碗の底面を転 用
112	015-09	加工内蓋	水跡②包含層	4.7	縦	5.1	0.6 厚		並	良	外 N8 内 N8	灰白 灰白	山煎の底面を転用
113	016-05	加工内蓋	水跡③包含層	4.9	縦	5.1	0.6 厚		良	良	外 N8 内 N8	灰白 灰白	山煎の底面を転用
114	021-05	加工内蓋	M51 包含層	5.0	縦	4.7	0.7 厚		並	良	外 2.5 R/2 内 2.5 R/2	灰白 灰白	動物陶器の体部を 転用
115	021-14	加工内蓋	O46 包含層	4.2	縦	4.3	0.8 厚		並	良	外 N8 内 N8	灰白 灰白	天目茶碗の底面を 転用

第29-3表 B地区出土遺物観察表

P.L.1



調査前全景（南から）



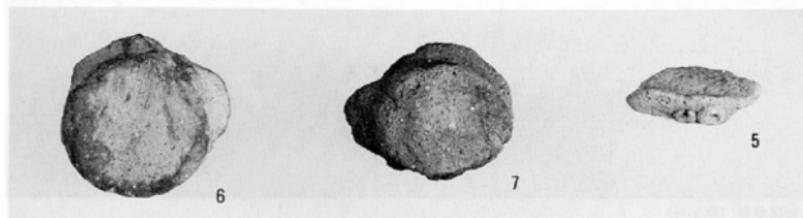
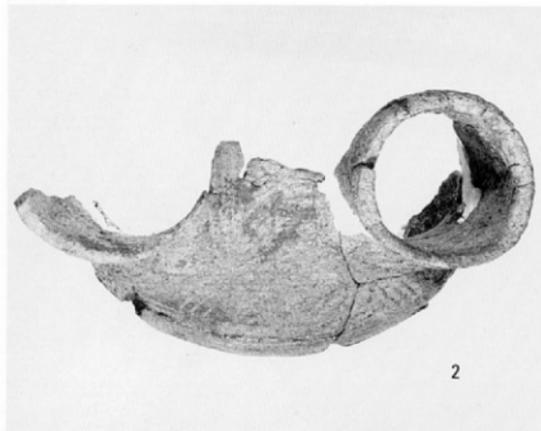
調査後全景（北から）



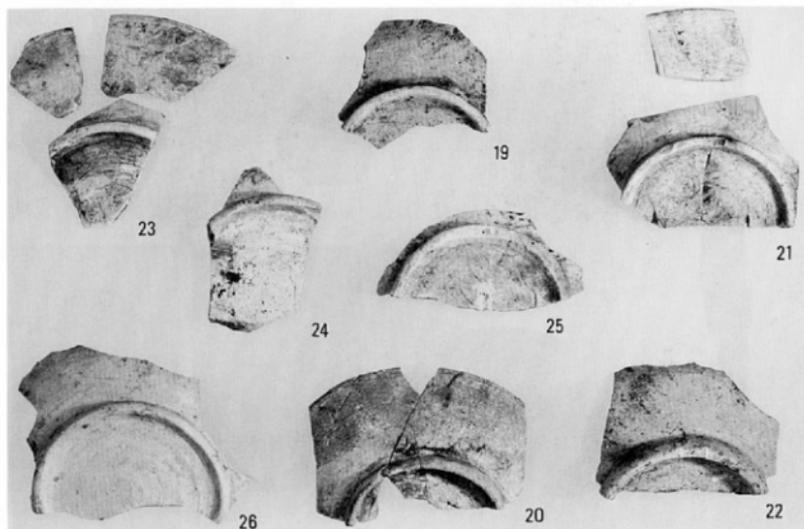
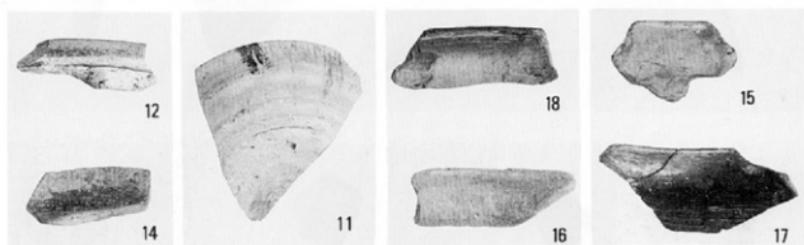
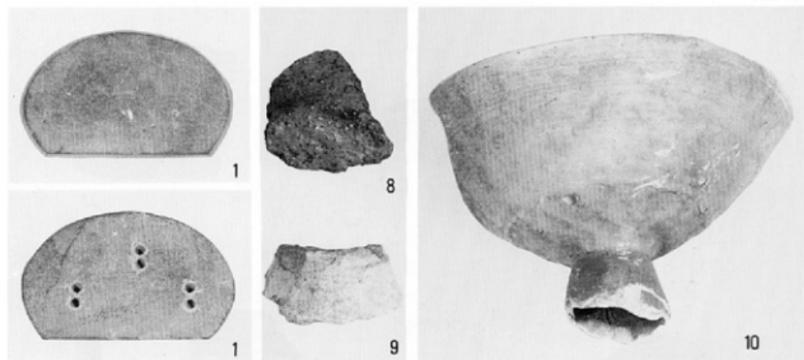
B地区全景（北から）



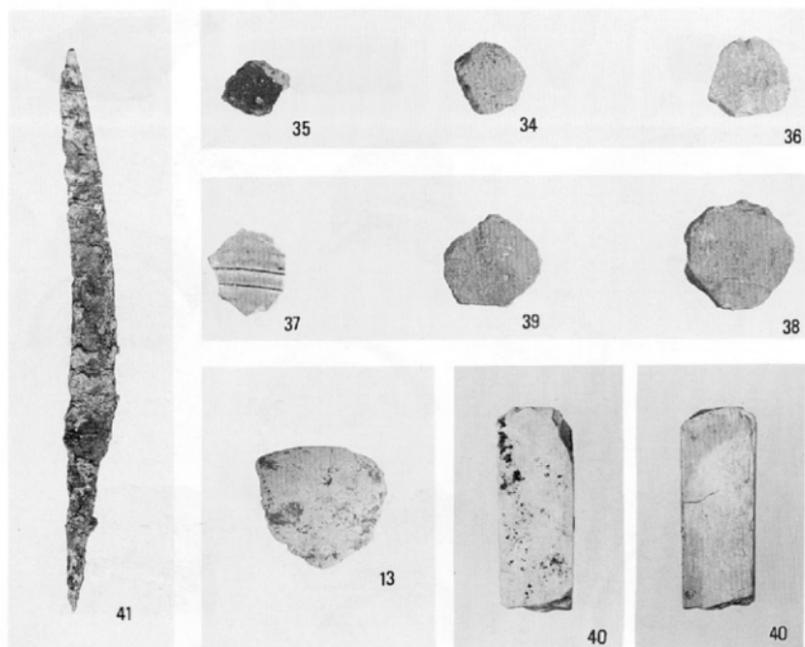
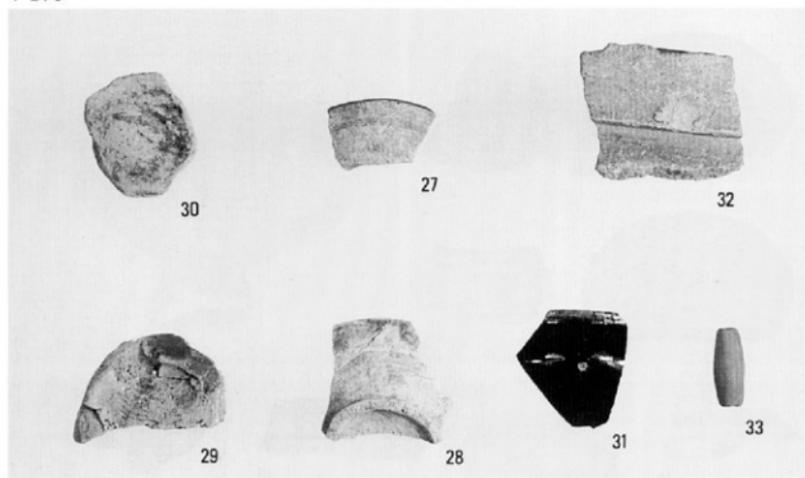
B地区全景（南から）



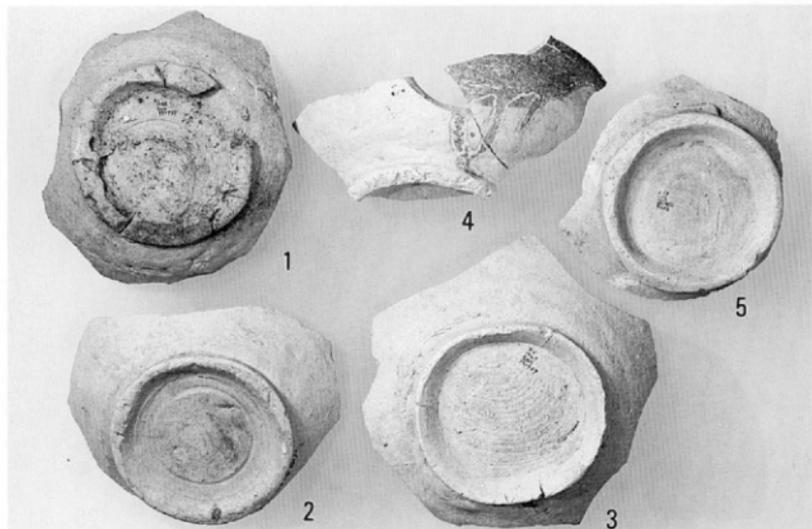
A地区出土遺物



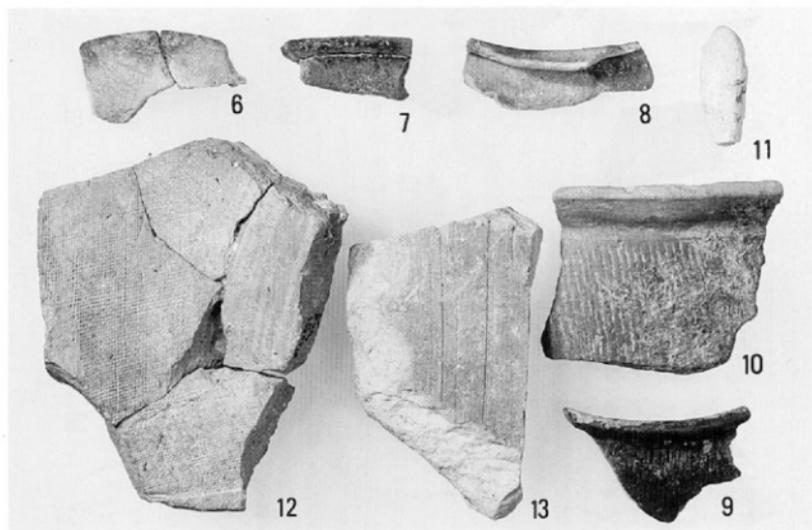
A地区出土遺物



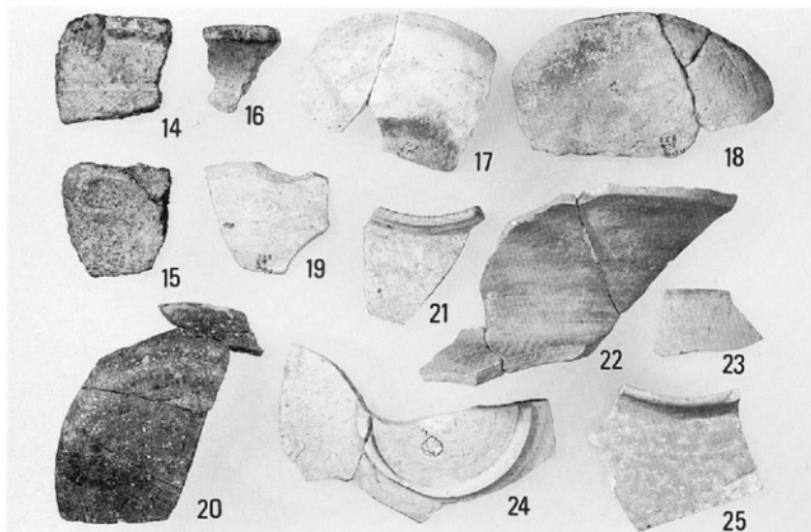
A地区出土遺物



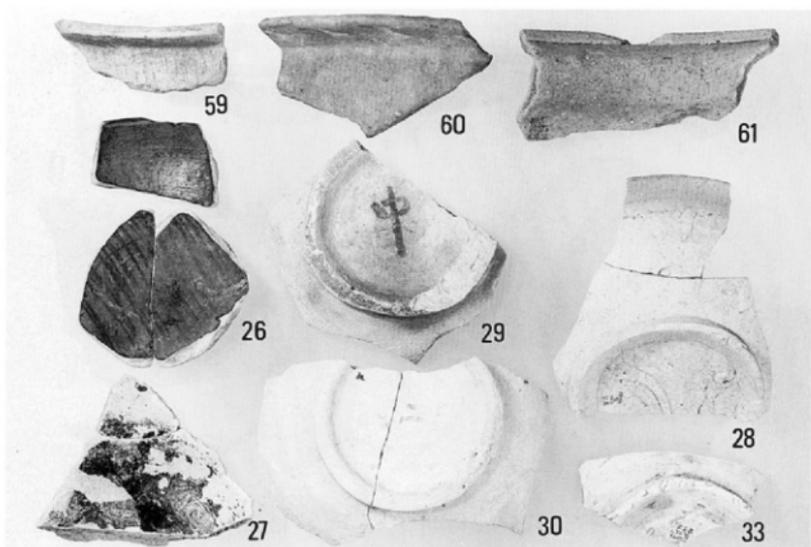
B地区出土遺物



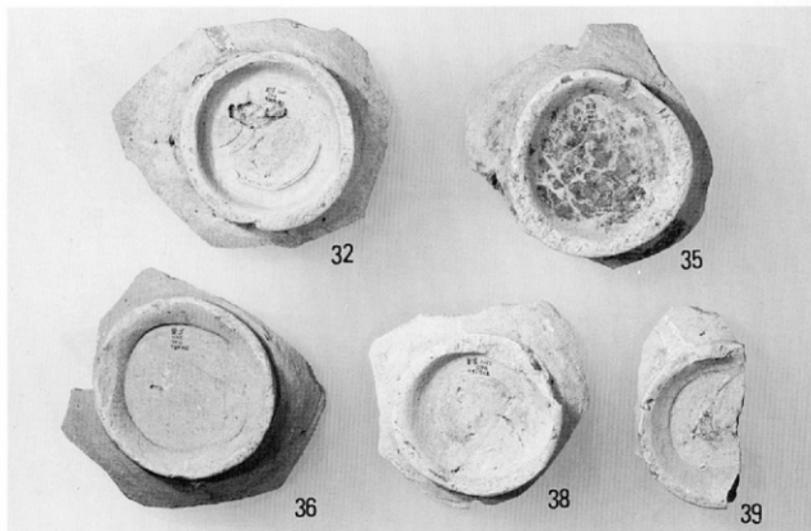
B地区出土遺物



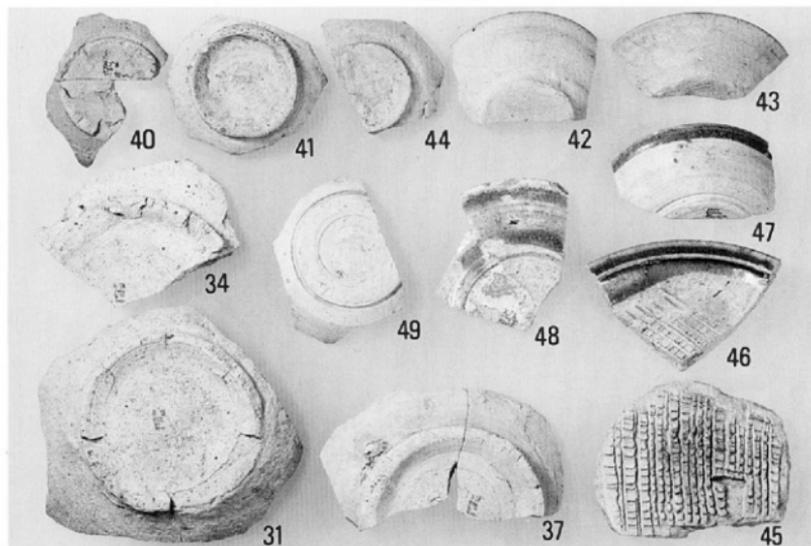
B地区出土遺物



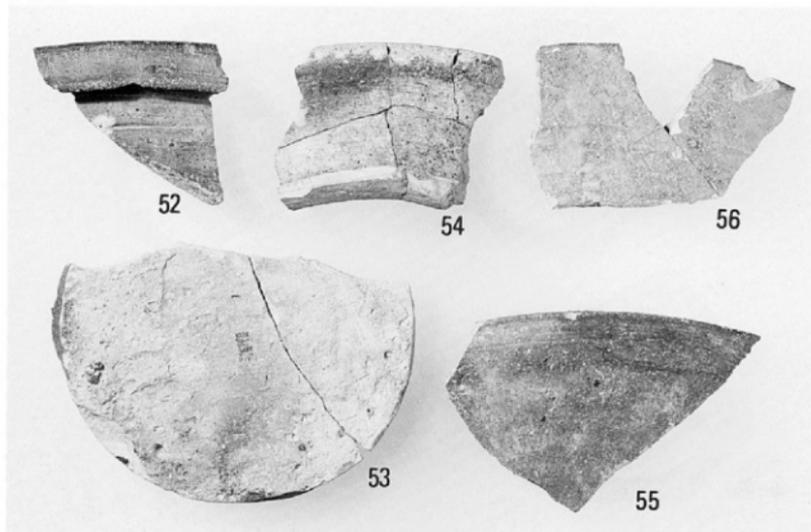
B地区出土遺物



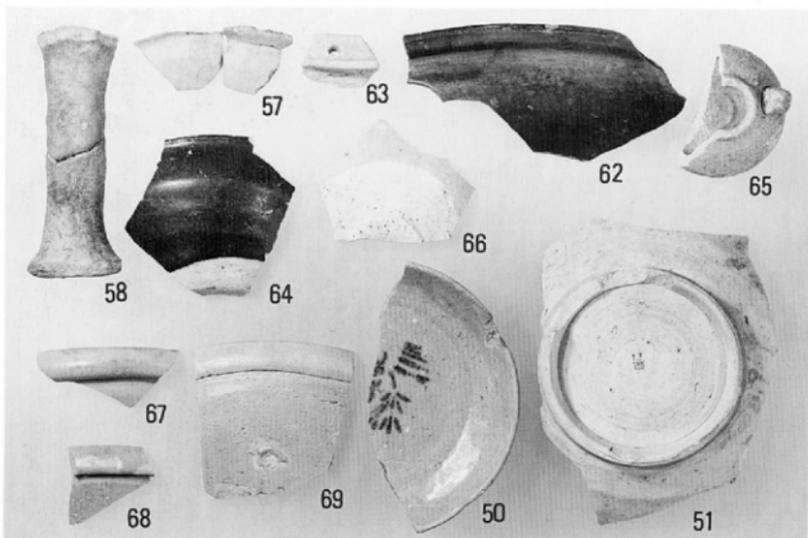
B地区出土遺物



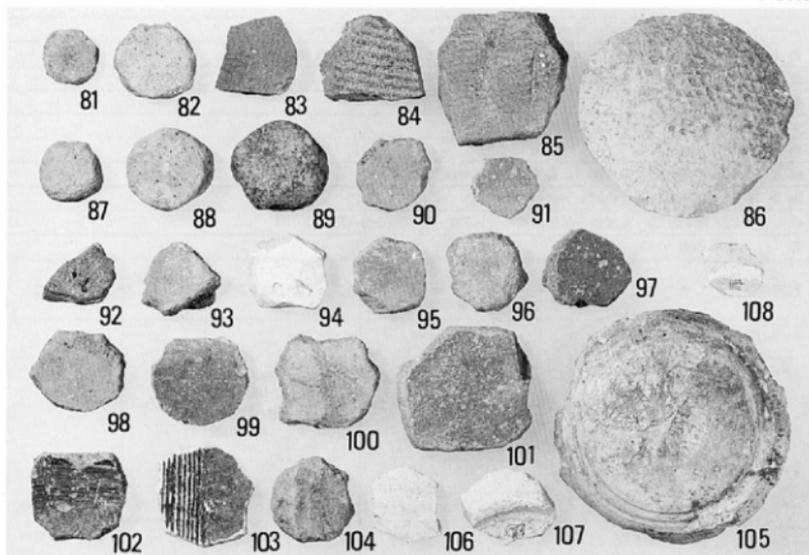
B地区出土遺物



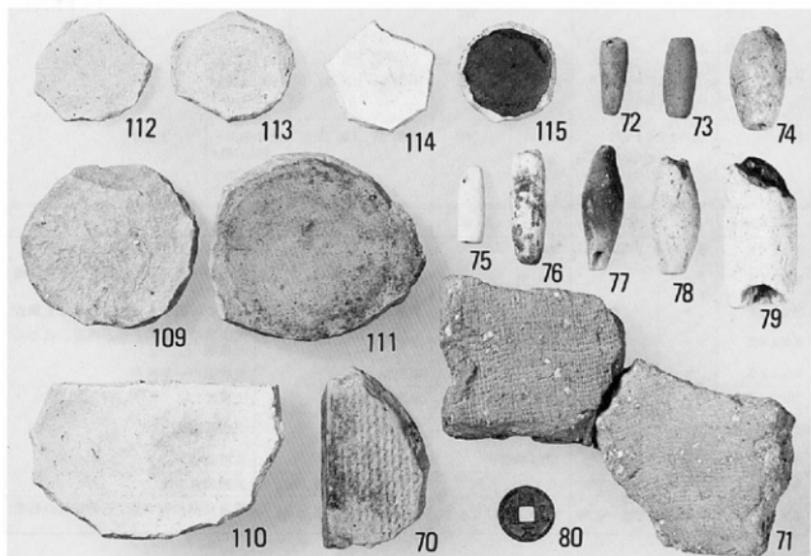
B地区出土遗物



B地区出土遗物



B地区出土遺物



B地区出土遺物

# 報告書抄録

ふりがな		みょうりつかまあとぐん だいにちやまごみんでん あまかすいせき すごいせき						
書名	明気窯跡群・大日山古墳群・甘糟遺跡・菓渡遺跡							
副書名	一般国道42号松阪・多気バイパス建設地内発掘調査報告							
巻次	I							
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	123-1							
編著者名	伊藤克幸、田村陽一、東 良樹、西村修久、宇河雅之							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-03 三重県多気郡明和町竹川503 ☎ 05965-2-1732							
発行年	西暦 1995年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° 〃 〃	東経 ° 〃 〃	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
明気窯跡群	三重県多気郡多気町							
明気1号窯	大字相可字湧気		370			19920511～ 19920831	2,900	一般国道42号 松阪・多気バ イパス建設に 伴う事前調査
# 2号窯	#	22441	371	34°29'15"	136°33'15"	19930419～ 19931029		
# 3号窯	#		372					
# 4号窯	#		373					
# 5号窯	#		374					
大日山古墳群	三重県多気郡多気町							
大日山2号墳	大字相可字大日山	22441	376	34°30'03"	136°33'10"	19940407～ 19940610	600	
# 3号墳	#		377					
# 4号墳	#		378					
甘糟	三重県多気郡多気町 大字相可字甘糟	22441	368	34°30'04"	136°33'10"	19910826～ 19911014	360	
菓渡	三重県多気郡多気町 大字相可字菓渡	22441	369	34°30'08"	136°33'05"	19910826～ 19911014 19930523～ 19940127	2,000	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
明気1号窯	窯跡	古墳末期	あな窯	須恵器		焼成室の天井部一部残存		
明気2号窯	#	#	あな窯	須恵器		焼成室の天井部一部残存、焚き口部 完存		
明気3号窯	#	#	不明	須恵器		灰原のみ調査を実施、窯体は未調査		
明気4号窯	#	#	不明(あな窯?)	須恵器		焼成室の床面の一部が残存、ほとん ど破壊		
明気5号窯	#	#	あな窯	須恵器		焼成室の一部残存		
大日山2号墳	古墳	古墳末期	径20mの円墳	須恵器		主体部なし		
大日山3号墳	#	#	丘陵斜面にテラス 状	須恵器、土師器		方形墓壇		
大日山4号墳	#	#	墳径不明	須恵器		木棺直葬		
甘糟	散布地	平安～室町	なし	縄文土器、土師器、陶器		試掘調査遺跡		
菓渡	散布地	古墳～室町	井戸、溝、ピット	縄文土器、土師器、陶器		縄文後期の双口壺、平安時代の石帯 が出土		

平成7(1995)年3月に刊行されたものをもとに  
平成19(2007)年5月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告 123-1

一般国道42号松阪・多気バイパス建設地内発掘調査報告Ⅰ

**明気窯跡群・大日山古墳群  
甘糟遺跡・巣護遺跡**

1995年3月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター

印刷 オリエンタル印刷株式会社